

第Ⅲ部 2022-2023年度における各教員の活動

01 言語学

教授 西村 義樹 NISHIMURA, Yoshiki

1. 略歴

1984 年 3 月	東京大学文学部英語英文学専修課程卒業
1984 年 4 月	東京大学大学院人文科学研究科英語英文学専攻修士課程入学
1987 年 3 月	東京大学大学院人文科学研究科英語英文学専攻修士課程修了
1987 年 4 月	東京大学大学院人文科学研究科英語英文学専攻博士課程進学
1989 年 3 月	東京大学大学院人文科学研究科英語英文学専攻博士課程退学
1989 年 4 月	実践女子大学文学部英文学科専任講師
1992 年 4 月	東京大学教養学部助教授
1993 年 4 月	東京大学大学院総合文化研究科専攻助教授
2004 年 4 月	東京大学人文社会系研究科助教授 併任
2004 年 9 月	東京大学人文社会系研究科助教授
2007 年 4 月	東京大学人文社会系研究科准教授
2012 年 4 月	東京大学人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

言語学、意味論、認知文法

b 研究課題

文法の意味的基盤

認知文法の観点からさまざまな文法現象の意味的な基盤を明らかにすることを目標として研究を進めてきた。これまで分析の対象にしてきた主な現象は、日英語の使役構文、項構造の交替、文法関係などである。近年は認知言語学の分野でその遍在性、重要性が新たに注目されている換喩 (metonymy) の本質を解明し、それに基づいて従来別々に扱われてきた多くの文法現象を統一的に把握し直すことを目指している。

c 概要と自己評価

日本語と英語の文法現象についての認知文法の立場からの研究を継続して行い、その成果の一部を発表した。

d 研究業績

(1) 講演・口頭発表等

「グロス再考：実践が支える言語観、言語観が導く実践」(司会およびコメンテーター) 日本言語学会第 165 回大会 (オンライン開催)、2022.11.13

[口頭発表 (一般)] 「使用基盤モデルから見た「英語らしさ」「日本語らしさ」、西村義樹、日本英文学会第 95 回全国大会 (関東学院大学) シンポジウム「実例が開く豊かな世界：認知文法と使用基盤モデルの実践」、2023.5.21
「Langacker を読む：認知文法の基礎から最前線まで (2)」東京言語研究所夏期集中講義、2023.8.11～13

e その他

(1) 非常勤講師

奈良女子大学、2023.2

(2) 学会・委員活動

[委員歴] 日本認知言語学会、運営委員、2000～

[委員歴] 日本言語学会、評議員、2009～

[委員歴] 日本エドワード・サピア協会、編集委員、2013.4～、編集委員長、2018.11～

[委員歴] 東京言語研究所、運営委員長、2023.4～

1. 略歴

1992 年 3 月	京都大学文学部文学科卒業（文学士）
1992 年 4 月	京都大学大学院文学研究科修士課程梵語学梵文学専攻入学
1994 年 3 月	京都大学大学院文学研究科修士課程梵語学梵文学専攻修了（文学修士）
1994 年 4 月	京都大学大学院文学研究科博士後期課程梵語学梵文学専攻進学
2000 年 3 月	京都大学大学院文学研究科梵語学梵文学専攻博士後期課程中途退学
1996 年 9 月	ペンシルバニア大学文理大学院言語学科 Ph.D.課程入学
2000 年 12 月	ペンシルバニア大学文理大学院言語学科 Ph.D.課程卒業（Ph.D）
2000 年 4 月	東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 COE 非常勤研究員（2001 年 3 月まで）
2001 年 4 月	白鷗大学経営学部専任講師（2005 年 3 月まで）
2005 年 4 月	白鷗大学経営学部助教授（2007 年 3 月まで）
2007 年 4 月	白鷗大学教育学部准教授（2010 年 3 月まで）
2010 年 4 月	東京大学大学院人文社会系研究科准教授
2020 年 4 月	東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

歴史言語学、音韻論、インド・アーリア語、ドラヴィダ語、オーストロアジア（ムンダ）語

b 研究課題

インド・アーリア語、とくにサンスクリット文献学、およびドラヴィダ語族、オーストロアジア語族少数民族言語の歴史言語学とフィールドワークに基づく言語記述

c 概要と自己評価

インド・アーリア語についてはサンスクリットを中心として他の印欧語族言語と比較し、音韻上の特性を記述した著書を出版し、現在は伝統文法の研究を行っている。ドラヴィダ語族では、北部の3つの少数民族言語について、現地調査を重ねて文法記述やテキスト集を完成させ、それらをもとに形態法を中心とした史的再建を進めた。オーストロアジア語族では、未記述である丘陵コルワ語の調査を進めている。

d 研究業績

(1) 書籍出版物

[共編] Masato Kobayashi and Tetru Oraon. 2020. *Kurux Folktale Reader (Purkhar gahi Xiri)*. Vizianagaram and Kyoto: Kotoba Books. x + 186pp

[共著] Liaquat Ali and Masato Kobayashi. 2024. *Brahui Texts: Glossed and Translated Short Stories and Folktales*. Tokyo: Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies. vi + 735 pp

(2) 論文

[学術雑誌] Masato Kobayashi. 2022. Origin of the -k past in Kurux and Malto, *International Journal of Dravidian Linguistics* 51(1) 1-25

[学術雑誌] Masato Kobayashi. 2022. Proto-Dravidian Origins of the Kurux-Malto Past Stems. *Bhasha: Journal of South Asian Linguistics* 1(2) 263-282

[論文集（書籍）内論文] Masato Kobayashi. 2024. Agreement in Malto Conjunctive Participles. *Oxford Handbook of Dravidian Languages* （採択済み）

[論文集（書籍）内論文][共著] Masato Kobayashi and Liaquat Ali. 2024. Asyndetic conditional clauses in Brahui. *Oxford Handbook of Dravidian Languages*. <https://doi.org/10.1093/oxfordhb/9780197610411.013.33>

(3) その他各種論著

[速報,短報,研究ノート等] Masato Kobayashi. May 2024. Brahui, Kurux and Malto. *DLA News* 49 (May), 6-8

(4) 講演・口頭発表等

[口頭発表（招待）] Masato Kobayashi, Dravidian and the Kurux-Malto -k Past: What outlier languages tell us about reconstruction. 43rd International Conference of Linguistic Society of India. 2022.11（招待講演）（国際学会）

[基調講演] Masato Kobayashi, Asyndetic conditionals in Brahui. 37th South Asia Languages Analysis Roundtable.

Venice 2023 (国際学会) 2023.10

[公開講演、セミナー、チュートリアル、講習、講義等] Masato Kobayashi, Brahui : What it shares with Kurux and/or Malto, and what it tells about languages. Dravidian Linguistic Association Lecture Series. 2024.1

(5) その他 (データベース・作品等)

[Web サービス] Materials of Dravidian Languages <https://bkm.aa-ken.jp>

e その他

(1) 学会・委員活動

[所属学協会] 日本言語学会、American Oriental Society、Linguistic Society of India、Dravidian Linguistic Association

[委員歴] 日本言語学会常任委員 (2024～)、評議員、学会賞委員 (2023 年度)、倫理委員長 (2022 年度)

准教授 **長屋 尚典** NAGAYA, Naonori

1. 略歴

2000 年 4 月	東京大学教養学部文科三類入学
2004 年 3 月	東京大学文学部言語文化学科言語学専修課程卒業
2004 年 4 月	東京大学大学院人文社会系研究科言語学専門分野修士課程入学
2006 年 3 月	東京大学大学院人文社会系研究科言語学専門分野修士課程修了
2006 年 4 月	東京大学大学院人文社会系研究科言語学専門分野博士課程入学
2006 年 4 月	日本学術振興会特別研究員 DC1 (東京大学大学院) (～2006 年 8 月)
2006 年 8 月	アメリカ合衆国ライス大学 (Rice University) 言語学科博士課程入学
2009 年 9 月	東京大学大学院人文社会系研究科言語学専門分野博士課程退学
2011 年 9 月	国立国語研究所言語対照研究系 PD フェロー (～2012 年 3 月)
2011 年 12 月	アメリカ合衆国ライス大学 (Rice University) 言語学科博士課程修了 (Ph.D)
2012 年 4 月	日本学術振興会特別研究員 SPD (国立国語研究所) (～2013 年 3 月)
2013 年 4 月	東京外国語大学総合国際学研究院 専任講師
2018 年 4 月	東京外国語大学総合国際学研究院 准教授
2019 年 4 月	東京大学大学院人文社会系研究科 准教授
2021 年 10 月	東京大学ヒューマニティーズセンター HMC フェロー (～2022 年 9 月)

2. 主な研究活動

a 専門分野

言語学、言語類型論、フィールド言語学、危機言語

b 研究課題

オーストロネシア諸語、特に、フィリピン・インドネシアで話される諸言語を中心に、言語類型論の観点から、その文法構造について研究している。具体的には、タガログ語とラマホロット語 (東インドネシア、フローレス島) について、その文法関係やヴォイス現象、情報構造、空間表現を研究し、言語類型論についての貢献を目指している。言語調査においては、フィールドワーク・実験を重視し、実際の談話や会話を撮影・録音することで、経験的事実に基づく記述・一般化を試みている。

近年ではコーパスを利用した言語類型論研究、大学院生との共同研究・チームサイエンスによる言語類型論研究にも取り組んでいる。

c 概要と自己評価

新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) の懸念から依然として海外調査を積極的に行うことはできなかったものの、その間に既に収集した実験データ、コーパスデータを分析することで研究を行った。とりわけ移動表現や文末助詞の分析に注力した。さらに、一般向けに危機言語や日本におけるタガログ語教育について報告する機会もあった。これらの成果の多くは書籍化・論文文化の途上にあるものの、今後の研究の基礎を築くことができた。

さらに、個人研究に加えて国内外の研究者や本学大学院生との共同研究にも力を入れた。具体的には、実験結果の分析に基づくノルウェー語の移動表現、統計的手法を利用した移動表現の言語類型論的研究、コーパスを利用した単数概念・複数概念の通言語的研究などのプロジェクトを遂行した。

この期間中には、オンライン学会やオンライン講演会を通して、海外や日本国内の方々に広く研究成果を発表することができた。また、これまでの研究成果について、第20回日本学士院学術奨励賞、第20回日本学術振興会賞を授与されるなど、これまでの研究を評価していただく機会にも恵まれた。

d 研究業績

(1) 論文

[論文集(書籍)内論文] ‘Linguistic representations of visual motion: A crosslinguistic experimental study’, Yo Matsumoto Kimi Akita Anna Bordilovskaya Kiyoko Eguchi Hiroaki Koga Miho Mano Ikuko Matsuse Takahiro Morita Naonori Nagaya Kiyoko Takahashi Ryosuke Takahashi Yuko Yoshinari, *Laure Sarda & Benjamin Fagard (eds.), Neglected Aspects of Motion-Event Description: Deixis, asymmetries, constructions*, pp.43-67, 2022.7.15

[学術雑誌] ‘Pardeshi, Prashant and Kaoru Horie: *Nihongo to Sekai no Gengo no Meisi-syuusyoku-hyooen*’, Naonori Nagaya, *Journal of Japanese Linguistics*, 38 巻 2 号, pp.279-281, 2022.11.25

[学術雑誌] ‘Apat na tanong tungkol sa pagtuturo ng wikang Filipino sa Japan’, Naonori Nagaya, *Katipunan*, 10 巻, pp.56-63, 2022.12.30

[論文集(書籍)内論文] ‘Discourse particles in Tagalog: The case of *e*’, Naonori Nagaya, *Elin McCready & Hiroki Nomoto (eds.) Discourse Particles in Asian Languages, Volume II: Southeast Asia*, pp.37-66, 2023.8

(2) 講演・口頭発表等

[口頭発表(一般)] ‘ノルウェー語で *komme* 「来る」はいつ使われるのか: ビデオ実験による分析」、谷川みずき 長屋尚典、日本言語学会第164回大会、2022.6.18

[公開講演、セミナー、チュートリアル、講習、講義等] ‘はじめての危機言語」、長屋尚典、第73回HMC オープンセミナー、東京大学ヒューマニティーズセンター、2022.7.22

[シンポジウム・ワークショップ パネル(指名)] ‘英語と世界の言語の与格交替」、長屋尚典、定例研究会、東京外国語大学語学研究所、2022.7.27

[口頭発表(一般)] ‘Towards an experiment-based semantic map of paths’, Naonori Nagaya Mai Hayashi Yuko Morokuma Yui Suzuki Shun Takahashi Mizuki Tanigawa, *Neglected Aspects of Motion-Event Description 2022*, Kyoto University, 2022.11.4

[シンポジウム・ワークショップ パネル(指名)] ‘英語と世界の言語の与格交替」、長屋尚典、日本英語学会第40回大会特別シンポジウム「英語の常識・世界の言語の非常識: 英語学の知見が個別言語の研究に与える正の影響と負の影響」、2022.11.5

[口頭発表(一般)] ‘Ditransitive alternations in the Tagalog symmetrical voice system’, Naonori Nagaya, *The 14th conference of the Association for Linguistic Typology*, 2022.12.15

[口頭発表(一般)] ‘Types of caused motion events and the patterns of their linguistic representations’, Matsumoto Yo Badema Anna Bordilovskaya Kiyoko Eguchi Miho Mano Naonori Nagaya Kyosuke Yamamoto, *The 14th conference of the Association for Linguistic Typology*, 2022.12.15

[シンポジウム・ワークショップ パネル(公募)] ‘ノルウェー語で *komme* 「来る」はいつ使われるのか: ビデオ実験による分析」、谷川みずき 長屋尚典、TUFU グローバル・スタディーズ学会 2022 年度 (第3回) 大会、2023.2.11

[口頭発表(基調)] ‘Usage-based approaches to Philippine languages’, Naonori Nagaya, *The second Salindunong: An international conference on language and literature*, Mindanao State University-Iligan Institute of Technology, 2023.2.22

[口頭発表(一般)] ‘Uniplex, multiplex pairs and frequency asymmetries in general number languages’, Shigeki Yoshida Mai Hayashi Sakura Ishikawa Yuko Morokuma Yuta Sakon Yui Suzuki Mizuki Tanigawa Naonori Nagaya, *10th International Contrastive Linguistics Conference (ICLC-10)*, Leibniz Institute for the German Language, 2023.7.20

[口頭発表(一般)] ‘Many faces of Tagalog mukha “face”’, Naonori Nagaya Mai Hayashi, *15th Philippine Linguistics Congress*, 2023.8.23

[シンポジウム・ワークショップ パネル(指名)] ‘言語類型論から見た「語」の多面性」、長屋尚典、日本言語学会第167回大会、公開シンポジウム「「語」とは何か?—その多面性を探る」、2023.11.12

[シンポジウム・ワークショップ パネル(指名)] ‘Metamorphosis of mukha across Maritime Southeast Asia’, Naonori Nagaya, *INDOWS International Symposium “Currents of Metamorphosis across the Indian Ocean”*, 2023.12.10

(3) 受賞

第20回日本学士院学術奨励賞、長屋尚典、日本学士院、2024.3

第20回日本学術振興会賞、長屋尚典、日本学術振興会、2024.3

(4) 共同研究・競争的資金等の研究課題

[科学研究費助成事業]「空間移動と状態変化の表現の並行性に関する統一的通言語的研究」、松本曜 吉成祐子 河内一博 守田貴弘 眞野美穂 小嶋美由紀 長屋尚典 古賀裕章 高橋清子 中川裕 山本恭裕 夏海燕 江口清子 石塚政行、基盤研究 (B) : 19H01264、日本学術振興会、大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所、2019.4～2023.3

[科学研究費助成事業]「時空間マッピングの認知的基盤に関する理論的・実験的研究」、田窪行則 長屋尚典 中田節子 細馬宏通、基盤研究 (B) : 21H00528、日本学術振興会、大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所、2021.4～2025.3

e 社会活動

(1) 社会貢献活動

[講師]「空間と言語：ことばの多様性入門」、第95回 五月祭、五月祭常任委員会、2022.5.14～15

[出演]「東京大学言語学研究室の紹介と進学相談」、言語学フェス2023、言語学フェス実行委員会、2023.1.28

f その他

(1) 非常勤講師

東京言語研究所理論言語学講座、「言語学入門」ほか、2016.4～

東京外国語大学オープンアカデミー、「フィリピン語（タガログ語）初級」、2023.4～

(2) 学会・委員活動

[所属学協会] 日本言語学会、2006～

[所属学協会] Association for Linguistic Typology、2019～

[所属学協会] Societas Linguistica Europaea、2020～

[所属学協会] Linguistic Society of the Philippines、2021～

[委員歴] 日本言語学会、評議員、2015.4～、編集委員、2021.4～2024.3

[委員歴] Southeast Asian Linguistics Society (SEALS)、executive committee、2019.5～

[委員歴] Linguistic Society of the Philippines、Editorial Consultant (Philippine Journal of Linguistics)、2020～

[委員歴] 東京言語研究所 理論言語学講座、運営委員、2020.4～

[委員歴] Brill、Endangered and Lesser-Studied Languages and Dialects シリーズ編集委員、2022～

[委員歴] フィリピン大学ディリマン校言語学科、外部評価委員、2022.1～7

[委員歴] The 36th Annual Meeting of Pacific Asia Conference on Language, Information and Computation (PACLIC36)、Program committee、2022.4～10

[委員歴] The 16th International Conference on Austronesian Linguistics (16-ICAL)、Organizing committee、2023～2024.6

02 考古学

准教授 福田 正宏 FUKUDA, Masahiro

1. 略歴

1997年3月 筑波大学第一学群人文学類考古学・民俗学主専攻卒業
1997年4月 筑波大学大学院博士課程歴史・人類学研究科文化人類学専攻入学
2001年4月 日本学術振興会 特別研究員（DC2・筑波大学大学院歴史・人類学研究科）（～2003年3月）
2003年3月 筑波大学大学院博士課程歴史・人類学研究科文化人類学専攻単位取得退学
2003年4月 日本学術振興会特別研究員（PD）（東京大学大学院人文社会系研究科）（～2006年3月）
2006年2月 東京大学大学院人文社会系研究科・博士（文学）授与
2006年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助手（～2007年3月）
2007年4月 北海道教育大学札幌校非常勤講師
2007年10月 東北芸術工科大学東北文化研究センター博士研究員
2008年4月 東北芸術工科大学芸術学部歴史遺産学科専任講師
2012年4月 東京大学大学院新領域創成科学研究科准教授
2015年4月 東京大学大学院新領域創成科学研究科特任准教授
2015年12月 九州大学大学院人文科学研究院助教
2017年4月 九州大学大学院人文科学研究院准教授
2018年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

東北アジア考古学、先史考古学、人類環境適応史

b 研究課題

- (1) 東北アジア新石器時代の環境適応形態に関する構造論的研究
- (2) 日露国境地帯の考古学
- (3) 環日本海北部地域における完新世先史文化変遷の通時的解明

c 概要と自己評価

上記の研究課題（1）・（2）に関連して、2022年度から科研費・基盤研究（B）「宗谷海峡域における新石器/縄文時代生活史の実態解明」（2022～2025年度）プロジェクトを開始し、科研費・国際共同研究加速基金（国際共同研究強化（B））「日露共同調査によるサハリン新石器時代社会形成過程の解明」（2021～2026年度）プロジェクトを継続した。2023年度からは日露間の国際的関係の悪化にともない、ロシア領内での遺跡の共同発掘調査を実施することはできていないが、研究者間での学術的連携は保たれている。共通した学術的課題のもと、両国側でそれぞれ新石器/縄文時代遺跡の発掘調査を実施し、成果を共有し、成果の国際発信に努めている。研究課題（2）では、2019年度から、稚内市教育委員会・人文社会系研究科附属北海文化研究常呂実習施設・サハリン国立大学考古学教育博物館と連携して、北海道稚内市における縄文時代遺跡群の実態解明を目的とした遺跡探査と発掘調査を行ってきた。2022～2023年度はそれを継続、発展するとともに、新たに古地形調査及び古環境調査を導入し、新石器/縄文時代全般における人類環境適応史の復元に取り組んでいる。また利尻富士町教育委員会等と連携して、研究対象を宗谷海峡周辺一帯に拡大中である。研究課題（3）では、土器出現期～中世の環日本海北部地域における通史を叙述すべく、完新世初頭（新石器時代前期）及び紀元前二千年紀～同一千年紀（新石器時代/古金属器時代移行期）の朝鮮半島～ロシア極東～北海道における広域編年構築と域外交流メカニズムの解明に取り組んだ。そのなかで、韓半島における新石器時代遺跡の調査成果を反映させることで、議論を環日本海全体に拡大できる見通しが得られた。ほかに、研究課題（1）・（3）に関連して、スカンジナビア半島を中心とした北欧新石器時代遺跡の調査を行い、ユーラシア規模での新石器文化動態の東西比較から、東北アジア先史環境適応史の盛衰を長期的に捉えた。

d 研究業績

(1) 書籍等出版物

- [共著]『Maritime prehistory of Northeast Asia』、Cassidy Jim, Ponkratova Irina, Fitzhugh Ben, Fitzhugh William, eds.、Springer、2022.6、422 p
- [共著]『縄文社会の探究：高橋龍三郎先生古稀記念論集』、高橋龍三郎先生古稀記念論集刊行会、六一書房、2024.1、541p
- [共著]『東アジア考古学の新たな地平：宮本一夫先生退職記念論文集』、宮本一夫先生退職記念事業会、中国書店、2024.3、1009p
- [共編者]『オホーツクの古代文化：東北アジア世界と北海道・史跡常呂遺跡』、東京大学文学部常呂実習施設/考古学研究室（熊木俊朗 福田正宏）編、新泉社、2024.3、215p

(2) 論文

- [論文集（書籍）内論文]「Synthetic Perspective on Prehistoric Hunter-Gatherer Adaptations and Landscape Change in Northern Japan」、Masahiro Fukuda Kazuki Morisaki Hiroyuki Sato、*Maritime Prehistory of Northeast Asia*、pp.73-95、2022.6
- [学術雑誌]「北海道先史とサハリン・千島／クリル（Ⅴ 考古学的アイヌ文化研究の進展）」、福田正宏、『北海道考古学の最前線：今世紀における進展』（季刊考古学・別冊42）、pp.139-142、2023.6
- [学術雑誌]「稚内市豊岩地区における縄文遺跡群について」、萩野はな 福田正宏 夏木大吾 國木田大 斉藤譲一 熊木俊朗 太田圭 張恩恵 米田穰、『東京大学考古学研究室研究紀要』37、pp.91-102、2024.3
- [論文集（書籍）内論文]「北海道先史と宗谷海峡以北：考古学研究の現状と展望」、福田正宏、『縄文社会の探究：高橋龍三郎先生古稀記念論集』、pp.13-22、2024.3
- [論文集（書籍）内論文]「東京大学と東北アジア考古学」、福田正宏、『オホーツクの古代文化』、pp.138-143、2024.3
- [論文集（書籍）内論文]「東北アジアからみたオホーツクの古代文化」、福田正宏 佐藤宏之、『オホーツクの古代文化』、pp.94-103、2024.3
- [論文集（書籍）内論文]「縄文・続縄文文化」、熊木俊朗 福田正宏、『オホーツクの古代文化』、pp.34-41、2024.3
- [論文集（書籍）内論文]「ルチェイキⅡ群土器と紀元前2千年紀の極東東部」、福田正宏、『東アジア考古学の新たな地平：宮本一夫先生退職記念論文集』、pp.943-962、2024.3

(3) その他各種論著

- [総説・解説（商業誌）]「北の旅日記：宗谷の縄文景観とサハリン」、福田正宏、『Arctic Circle』、125号、2022.12
- [総説・解説（商業誌）]「コラム 幣舞式土器とシマフクロウ」、福田正宏、『オホーツクの古代文化』、pp.44-45、2024.3
- [総説・解説（商業誌）]「むすびにかえて」、福田正宏、『オホーツクの古代文化』、pp.204-205、2024.3

(4) 講演・口頭発表等

- [口頭発表（招待・特別）]「日本列島北辺域における新石器文化動態の拡大と縮小」、福田正宏、中央大学人文科学研究会公開研究会：物質資料から見た地域文化の相互関係、2022.9.25
- [シンポジウム・ワークショップ パネル（公募）]「日露間における考古学研究の現在：特に境界域」、福田正宏、日本シベリア学会第8回研究大会、2023.2.4
- [口頭発表（一般）]「北海道稚内における新石器・縄文時代遺跡の実態調査（2021-2022年度）」、萩野はな 福田正宏 夏木大吾 出穂雅実 國木田大 斉藤譲一 太田圭 張恩恵 西村広経 崔桐赫 熊木俊朗、第22回北アジア調査研究報告会、2023.2.9
- [口頭発表（招待・特別）]「アムール-サハリン-北海道地域の新石器・縄文文化の性質と類型化」、福田正宏、2023年韓国新石器学会定期学術大会：東アジア内海新石器社会の広域性、2023.11.18
- [口頭発表（招待・特別）]「Overview of the Northeast Asian Holocene prehistory: East Amur River basin and surrounding areas.」、Fukuda Masahiro、First Nordic-Japan Bipolar Research Seminar in Prehistoric Archaeology、2024.2.15
- [口頭発表（一般）]「道北オホーツク海沿岸域における縄文時代居住生活史」、夏木大吾 萩野はな 福田正宏、第23回北アジア調査研究報告会、2024.3.2

(5) 共同研究・競争的資金等の研究課題

- [科学研究費助成事業]「日露共同調査によるサハリン新石器時代社会形成過程の解明」、福田正宏、国際共同研究加速基金（国際共同研究強化（B））：21KK0009、日本学術振興会、東京大学、2021.10～2026.3
- [科学研究費助成事業]「宗谷海峡域における新石器・縄文時代生活史の実態解明」、福田正宏、基盤研究（B）：22H00710、日本学術振興会、東京大学、2022.4～2026.3
- [科学研究費助成事業]「縄文時代前半期における火山災害・古環境変動への地域適応史の解明」、根岸洋 福田正宏 能城修一 夏木大吾、基盤研究（B）：23H00691、日本学術振興会、東京大学、2023.4～2027.3

e 社会活動

(1) 学術貢献活動

[企画立案・運営等] 第23回北アジア調査研究報告会、東京大学本郷キャンパス、2024.3.2～2024.3.3

f その他

(1) 学会・委員活動

[委員歴] ロシア科学アカデミー極東支部極東民族歴史学・考古学・民族学研究所学術雑誌編集外部委員、2018.11～

[委員歴] 日本シベリア学会幹事、2019.10～

[委員歴] 西東京市下野谷遺跡整備指導委員会委員、2020.3.11～

[委員歴] 北海道立北方民族博物館研究協力員、2022.8～

准教授 **根岸 洋** NEGISHI, Yo

1. 略歴

2002 年 3 月	東京大学文学部歴史文化学科考古学専修課程卒業
2002 年 4 月	財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 期限付調査員（～2003 年 3 月）
2003 年 4 月	東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻考古学専門分野修士課程入学
2005 年 4 月	明治大学校地内遺跡調査団 短期嘱託職員（～2006 年 3 月）
2006 年 3 月	東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻考古学専門分野修士課程修了
2006 年 4 月	東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻考古学専門分野博士課程進学
2006 年 4 月	日本学術振興会 特別研究員（DC1）（東京大学大学院人文社会系研究科）（～2009 年 3 月）
2010 年 3 月	東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻考古学専門分野博士課程単位取得満期退学
2010 年 4 月	青森県教育庁文化財保護課 文化財保護主事（～2014 年 8 月）
2010 年 12 月	東京大学大学院人文社会系研究科・博士（文学）授与
2014 年 9 月	国際教養大学地域環境研究センター 助教（～2015 年 3 月）
2015 年 4 月	国際教養大学アジア地域研究連携機構・国際教養学部 助教（～2019 年 3 月）
2019 年 4 月	国際教養大学アジア地域研究連携機構・国際教養学部 准教授
2021 年 4 月	東京大学大学院人文社会系研究科 准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

先史考古学（縄文・弥生時代）、複雑化狩猟採集民研究、民族考古学

b 研究課題

- (1) 縄文時代から弥生時代への移行に関する総合的研究
- (2) 縄文化・新石器化プロセスについての考古学的研究
- (3) 複雑化狩猟採集民に関する実践的研究
- (4) 生業形態と土器製作伝統に関する民族考古学的研究

c 概要と自己評価

研究課題 (1) について、東北地方における集落・墓制・物質文化に関する研究（『東北地方北部における縄文／弥生移行期論』2020 年）を発展させるべく、2023 年度から東京大学卓越研究員として「考古学によって解明する縄文／弥生移行期の遠隔地間交渉」に従事し、紀元前一千年紀に日本列島各地で出土する漆製品・赤色顔料・玉製品・布製品の産地推定と製作技術の研究を行なっている。また研究分担者として、科研費・学術変革領域研究（A）「土器を掘る：22 世紀型考古資料学の構築と社会実装をめざした技術開発型研究」（2020～2024 年度）と、科研費・基盤研究（A）「北限の水稻農耕文化は海峡を越えたかー水稻農耕文化の拡散過程の研究ー」（2023～2026 年度）に参加し、東日本における穀物栽培開始期の生業、年代測定、炭素窒素安定同位体比などに関する共同研究を行ない、その成果の一部は日本考古学協会総会研究発表におけるセッションや共編著の形で発表している。研究課題 (2) では、科研費・基盤研究（B）「縄文時代前半期における火山災害・古環境変動への地域適応史の解明」（2023～2026 年度）

の代表を務め、青森県長者久保遺跡の発掘調査、縄文時代草創期・早期の測定年代とテフラ年代の比較、および当該期の土器研究を併行して進めている。このほか縄文文化・縄文時代と新石器化プロセスの関係を取り扱った書籍を刊行した。研究課題(3)では、「围绕施設のデジタル三次元計測による縄文時代観の再考」(サントリー文化財団研究助成)などによって縄文時代後半期の特殊な集落と居住施設に関する研究を進め、集落を囲む溝状遺構と大型木柱を用いた掘立柱建物跡について、秋田県成沢2遺跡の発掘調査を含む実践的研究を行なった。その成果を2024年度に報告書として刊行予定である。研究課題(4)では、2022年に環日本海地域における丸木舟・準構造船に関する民俗調査を実施し、前近代における船の建造技術および操船・漁撈技術の解明に取り組んだ。また2023年にパプア・ニューギニアにおける民族考古学の共同研究成果を書籍(分担執筆)として刊行したほか、2024年から新たな共同研究を開始している。

d 研究業績

(1) 書籍出版物

- [単著]『縄文と世界遺産——人類史における普遍的価値を問う(ちくま新書)』、根岸洋、筑摩書房、p.256、2022.4
[共編者]『縄文時代の終焉(季刊考古学・別冊40)』、根岸洋 設楽博己、雄山閣、p.152、2023.3
[分担執筆]『東日本穀物栽培開始期の諸問題』、根岸洋、「縄文/弥生移行期における溝跡」pp.247-266、太田圭 佐藤祐輔 佐藤由紀男 設楽博己 轟直行 西村広経 根岸洋 守屋亮 山下優介、「調査遺跡と資料の概要」pp.268-307、雄山閣、2023.3
[分担執筆]『パプアニューギニア民族誌と縄文社会—土器型式の解明に向けた基礎的研究—』、根岸洋、「地域と環境」pp.21-32、「立石・配石」pp.155-164、「魔女と精神世界」pp.165-173、「マッサム南部における先史土器」pp.237-249、中門亮太 根岸洋、「ワリ島の調査」pp.191-213、同成社、2023.8

(2) 論文

- [研究会、シンポジウム資料等]「北東北の弥生時代中期の位置付け」、根岸洋、北東北三県合同シンポジウム「北東北の弥生時代中期を考える」、pp.1-21、2022.10
[学術雑誌]「遺跡様態からみた縄文海洋進出史(津軽・北海道)」、佐藤宏之 根岸洋、『季刊考古学』161号、pp.45-48、2022.11
[学術雑誌]「秋田県湯沢市鍬田遺跡・山田中学校グラウンド遺跡採集資料について」、根岸洋 小久保竜也 西村広経、『秋田考古学』66号、2022.12
[大学、研究機関紀要]「大洞式土器の炭素・窒素安定同位体比分析に関する小考」、根岸洋 早瀬亮介、『東京大学考古学研究室研究紀要』36号、pp.49-59、2023.3
[学術雑誌]「総論」、根岸洋 設楽博己、『縄文時代の終焉』(季刊考古学・別冊40)、pp.79-82、雄山閣、2023.3
[学術雑誌]「漆と赤彩の技術—漆文化の継承と断絶—」、根岸洋、『縄文時代の終焉』(季刊考古学・別冊40)、pp.79-82、2023.3
[学術雑誌]「縄文/弥生移行期における結髪形土偶の編年」、根岸洋、『縄文時代』34号、pp.61-82、2023.5
[論文集(書籍)内論文]「文様にみる象徴性と祖霊観念」、根岸洋、『縄文社会の探究 高橋龍三郎先生古稀記念論集』、pp.377-386、2024.1
[論文集(書籍)内論文]「世界遺産と地域連携」、根岸洋、『オホーツクの古代文化—東北アジア世界と北海道・史跡常呂遺跡—』、pp.188-191、2024.3

(3) その他各種論著

- [速報、短報、研究ノート等]「私と研究」縄文/弥生移行期を多角的に捉える」、根岸洋、「土器を掘る」ニュースレター3号、p.14、2022.4
[速報、短報、研究ノート等]「縄文時代 東北」、根岸洋、『月刊考古学ジャーナル』768号、pp.23-25、2022.5
[書評、文献紹介等]「根岸洋著『縄文と世界遺産』」、根岸洋、ICOMOS Japan information Vol.12.No.3、pp.23-24、2022.9
[書評、文献紹介等]「谷口康浩著『土偶と石棒—儀礼と社会ドメスティケーション—』」、根岸洋、『季刊考古学』161号、p.121、2022.11
[大学、研究機関紀要]「縄文時代早期の黒曜石製石器原産地推定分析に関する概要報告」、根岸洋 岡本洋、『青森県埋蔵文化財調査センター研究紀要』、pp.19-21、2023.3
[その他記事]「城の見え方」、根岸洋、『史学雑誌』132巻3号、pp.54-56、2023.3
[講演資料等(セミナー、チュートリアル、講習、講義他)]「北海道・北東北の縄文遺跡群」の普遍的な価値」、根岸洋、『ユネスコ世界文化遺産講演会の記録「北海道の世界文化遺産に学ぶ—縄文遺跡群とSDGs—」』、pp.13-21、2023.3
[論文集(書籍)内論文]「下北の弥生文化・続縄文文化」、根岸洋、『青森の考古学(『青森県考古学』第30号)』、p.94、2023.3

[その他記事]「考古学を選んだこと」、根岸洋、『東京大学文学部 PROSPECTUS—進学ガイダンス 2023—』、pp.198-201、2023.4

[講演資料等 (セミナー, チュートリアル, 講習, 講義他)]「縄文時代の始まりと終わり」、根岸洋、『北海道・北東北の縄文遺跡群世界遺産登録2周年記念東京フォーラム「縄文の始まりと終わり」』、pp.9-10、2024.1

[講演資料等 (セミナー, チュートリアル, 講習, 講義他)]「先史時代における大型石造構造物の役割」、根岸洋、『令和5年度北海道・北東北の縄文遺跡群秋田フォーラム「環状列石とストーンヘンジ—世界文化遺産としての縄文遺跡群の未来—」』、pp.3-4、2024.2

[研究発表要旨 (全国大会, その他学術会議)]「青森県長者久保遺跡の既往調査および2023年度試掘調査の成果概要」、根岸洋 夏木大吾 尾寄大真 大森貴之 米田譲 石村大輔 古屋敷則雄 小田川哲彦、『第23回北アジア調査研究報告会発表要旨』、pp.26-29、2024.3

[論文集 (書籍) 内論文]「弥生化と続縄文」、根岸洋、『オホーツクの古代文化—東北アジア世界と北海道・史跡常呂遺跡—』、pp.48-51、2024.3

(4) 講演・口頭発表等

[口頭発表 (一般)]「亀ヶ岡文化圏における「遠賀川系土器」の受容と展開」、根岸洋、日本考古学協会第88回総会研究大会セッション「列島東北部における弥生農耕文化の受容と展開」、2022.5.29

[口頭発表 (一般)]「Eastward Diffusion Process of Jar Burial in the Jomon-Yayoi Transition」、Negishi Yo, Okada Ken'ichi, 9th Worldwide Conference of the Society for East Asian Archaeology、2022.7.31

[口頭発表 (招待・特別)]「縄文／弥生移行期における地域間比較の視角」、根岸洋、学術変革領域(A)土器を掘る2022年度研究成果報告会、2023.3.5

[ポスター発表]「縄文時代後期の掘立柱建物跡に伴う木柱の基礎的研究」、根岸洋、日本考古学協会第89回総会研究大会、2023.5.28

[公開講演、セミナー、チュートリアル、講習、講義等]「縄文時代末期の東西交渉」、根岸洋、東アジアの古代文化を考える会2023年度10月講演会、2023.10.28

(5) 共同研究・競争的資金等の研究課題

[科学研究費助成事業]「土器型式と栽培植物の高精度年代体系構築」、小林謙一 柴田昌晃 根岸洋、学術変革領域研究(A):20H05814、日本学術振興会、中央大学、2020.11～2025.3

[科学研究費助成事業]「縄文時代前半期における火山災害・古環境変動への地域適応史の解明」、根岸洋 福田正宏 能城修一 夏木大吾、基盤研究(B):23H00691、日本学術振興会、東京大学、2023.4～2027.3

[科学研究費助成事業]「北限の水稻農耕文化は海峡を越えたか—水稻農耕文化の拡散過程の研究—」、上條信彦 高瀬克範 米田穰 宇田津徹朗 小野映介 根岸洋 田中克典、基盤研究(A):23H00008、日本学術振興会、弘前大学、2023.4～2027.3

e 社会活動

(1) 社会貢献活動

[公開講演、セミナー、チュートリアル、講習、講義等]「世界遺産にみる考古学的遺跡の特徴」、根岸洋、平泉世界遺産登録11周年記念講演会、2022.7.9

[講師]「世界遺産の縄文遺跡—ムラの姿—」、根岸洋、かわさき市民アカデミー2023年度前期エクセレントIIコース「縄文文化と弥生文化を比較する」、2023.5.12

[講師]「東日本の弥生文化—いくつもの弥生—」、根岸洋、かわさき市民アカデミー2023年度前期エクセレントIIコース「縄文文化と弥生文化を比較する」、2023.7.7

[講師]「北海道・北東北の縄文遺跡群」からみる土器のはじまりと定住化」、根岸洋、飛ノ台史跡公園博物館「縄文大学」、2023.11.22

1. 略歴

2002年3月	大阪大学文学部人文学科 卒業
2002年4月	東京大学大学院新領域創成科学研究科環境学専攻修士課程 入学
2004年3月	同上 修了
2004年4月	東京大学大学院新領域創成科学研究科社会文化環境学専攻博士課程 進学
2006年4月	日本学術振興会 特別研究員 (DC2・東京大学大学院新領域創成科学研究科) (～2008年3月)
2009年3月	東京大学大学院新領域創成科学研究科社会文化環境学専攻博士課程 修了 博士 (環境学) 取得
2009年4月	独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所都城発掘調査部考古第三研究室 研究員 (～2015年3月)
2015年4月	文化庁記念物課埋蔵文化財部門 文部科学技官 (～2018年9月)
2018年10月	文化庁文化財第二課埋蔵文化財部門 文部科学技官 (～2018年12月)
2019年1月	文化庁文化財第二課埋蔵文化財部門 文化財調査官 (～2020年3月)
2020年4月	独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所都城発掘調査部 主任研究員 独立行政法人国立文化財機構文化財防災センター 併任 (2020年10月～)
2022年4月	東京大学大学院人文社会系研究科 准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

先史考古学 (旧石器～縄文時代)、水中考古学、行動生態学的研究、狩猟採集民研究、石器三次元形態研究

b 研究課題

- (1) 人類生態学的考古学による日本列島旧石器時代史の再構築
- (2) 旧石器時代の人口動態と文化変化の相関にかんする体系的研究
- (3) 旧石器時代研究における水中考古学的アプローチの導入にかんする実践的研究
- (4) 蛍光 X 線分析による石器非破壊産地推定に基づく人類の居住と交流の研究

c 概要と自己評価

研究課題 (1) (2) については森先を代表として継続する「日本列島における現生人類移住初期の環境適応史研究」(科学研究費基盤研究 (B)) により、秋田県、東京都、静岡県、鹿児島県にて後期旧石器時代前葉の石器研究と遺跡年代決定研究を実施するとともに、岩手県内、北海道内にて発掘調査を実施して新規の調査データを蓄積し、高精度編年の構築に寄与する証拠を公表してきた。2024 年度中に総括的な報告書を公表する。関連して、2023 年度から「日本列島域にいたる先史人類形成過程の解明」(科学研究費学術変革領域研究 (A)) にて日本列島旧石器時代の人類行動生態・人口動態解析とモンゴルでの発掘調査を研究分担者として担当し、東アジア的な視野から日本列島の旧石器文化形成過程を再評価するための情報を整理・解析している。研究課題 (3) (4) は、2022 年度から森先が代表として開始したパイロット研究「海と陸からの統合的アプローチによる日本列島旧石器研究の革新」(科研費挑戦的研究 (開拓)) による。後期更新世に陸化していた瀬戸内地方の古景観・古生態の復元を目的として、まず西部瀬戸内をフィールドに海底地形データ解析、海底地形測量、潜水調査による地形復元と、海上がり動物化石の古生物学・年代学・化学的研究を実践している。また、陸域の人類活動を表す安山岩製石器を非破壊で産地推定する方法を開拓し、これを体系的に実践してきた。これら多面的な証拠に基づく後期旧石器時代瀬戸内の人類生態系復元研究を進めている。2023 年度からは、「古本州島中央部における先史狩猟採集民の総合的研究」(科学研究費基盤研究 (A)) の研究分担者としても、(4) で構築した蛍光 X 線石材産地推定法をもちいた東部瀬戸内や山陰地方の石器産地分析を実践し、瀬戸内全域で旧石器時代の人類行動研究を実践する証拠の蓄積を進める体制を構築した。こうした分析手法に関する知識をもとに古代都城・寺院の瓦胎土分析等にも協力している。

d 研究業績

(1) 書籍等出版物

[単著] 『旧石器社会の人類生態学』、森先一貴、同成社、2022.5

[分担執筆] 『Maritime prehistory of Northeast Asia』、Cassidy Jim, Ponkratova Irina, Fitzhugh Ben, Fitzhugh William, eds., Springer、2022.6、422 p

[分担執筆]『長崎県佐世保市福井洞窟資料図譜—岡山理科大学博物館学芸員課程所蔵コレクション—』、岡山理科大学博物館学芸員課程 長崎県佐世保市教育委員、「第1章 第3節 安山岩製石器・その他の石材の石器」、雄山閣、2023.3

[分担執筆]『オホーツクの古代文化：東北アジア世界と北海道・史跡常呂遺跡』、東京大学文学部常呂実習施設/考古学研究室（熊木俊朗 福田正宏）編、新泉社、2024.3、215p

(2) 論文

[学術雑誌]「前田耕地遺跡の尖頭器の形態と巨視的破損痕跡—第17号住居跡の利用をめぐる新たなエピソード—」、岩瀬彬 尾田識好 森先一貴 市田直一郎 國木田大 山崎健 佐藤宏之、『旧石器研究』18号、pp.87-99、2022.5

[学術雑誌]「石の本遺跡群にみる行動的現代性—波長分散型蛍光X線分析による黒曜石産地推定研究—」、森先一貴 芝康次郎 角縁准 隅田祥光、『旧石器研究』18号、pp.71-85、2022.5

[論文集（書籍）内論文]「Synthetic Perspective on Prehistoric Hunter-Gatherer Adaptations and Landscape Change in Northern Japan」、Masahiro Fukuda Kazuki Morisaki Hiroyuki Sato、*Maritime Prehistory of Northeast Asia*、pp.73-95、2022.6

[その他学術会議資料等]「海洋進出の始まり：西の海—朝鮮・対馬海峡—」、森先一貴 芝康次郎、『季刊考古学』161号、pp.17-20、2022.10

[学術雑誌]「Examining frequency and directionality of Palaeolithic sea-crossing over the Korea/Tsushima Strait: a synthesis」、Kazuki Morisaki Kojiro Shiba Donghyuk Choi、*World Archaeology*、2023.2

[論文集（書籍）内論文]「奈良時代の鐘楼遺構—興福寺鐘楼に関する補論—」、森先一貴、『文化財論叢 V：奈良文化財研究所創立70周年記念論文集』、pp.359-374、2023.3

[大学研究機関紀要]「日本列島における人類の初期移住—議論と課題—」、森先一貴、『文化交流研究』36号、pp.37-46、2023.3.9

[研究会、シンポジウム資料等]「石の本遺跡群8区石器群の年代・技術・行動」、森先一貴、『九州旧石器』27号、pp.23-31、2023.11

(3) その他各種論著

[速報、短報、研究ノート等]「平城宮東院地区の調査—第633次」pp.156-167、山崎有生 丹羽崇史 森先一貴、「平城京左京一条二坊十五坪の調査—第638・639次」pp.182-191、山本祥隆 丹羽崇史 森先一貴 村田泰輔、「平城京左京三条四坊十坪の調査—第641次」pp.206-209、浦蓉子 垣中健志 小田祐樹 森先一貴、「興福寺鐘楼出土白色薄片の材料分析」pp.220-221、森先一貴 村田泰輔 中田愛乃 脇谷草一郎、『奈良文化財研究所紀要2022』、2022.6

[講演資料等（セミナー、チュートリアル、講習、講義他）]「日本の旧石器時代からみた立切遺跡・横峯遺跡」、森先一貴、『立切遺跡・横峯遺跡国史跡指定記念シンポジウムパンフレット』、pp.10-14、2022.12.11

[講演資料等（セミナー、チュートリアル、講習、講義他）]「古本州島先史文化からみた下原洞穴遺跡」、森先一貴、『令和5年度下原洞穴遺跡シンポジウム発表資料集』、pp.19-22、2023.7

[研究発表要旨（全国大会、その他学術会議）]「古本州島の台形様石器と石刃尖頭器」、森先一貴、『中・四国旧石器文化談話会40周年記念大会資料集』、pp.17-21、2023.12.2

[講演資料等（セミナー、チュートリアル、講習、講義他）]「縄文時代のはじまりを考える」、森先一貴、令和5年度東京・神奈川・埼玉埋蔵文化財関係財団普及連携事業公開セミナー「旧石器から縄文へ—気候激変期における人々の生活と社会—」、pp.27-31、2024.1

(4) 講演・口頭発表等

[口頭発表（一般）]「Micro-regional Diversity in the Subsistence Strategy during the Early Upper Paleolithic in the Southern Paleo-Honshu Islands」、Masami Izuho Kazuki Morisaki Katsuhiro Sano Dai Kunikita Fumie Iizuka、87th SAA annual meeting、2022.4.1

[口頭発表（一般）]「Terminal Pleistocene Adoption of Pottery and Signatures of Neolithic in Southern Japan」、Fumie Iizuka Kazuki Morisaki、WAC-9、2022.7.4

[口頭発表（招待・特別）]「The middle and late Upper Palaeolithic in the Japanese archipelago: Local development and continental influence」、Kazuki Morisaki、International Symposium Insights into Human History in the Eurasian Stone Age: Recent Developments in Archaeology, Palaeoanthropology and Genetics、2022.9.28

[口頭発表（招待・特別）]「Spatio-temporal pattern of the early Upper Palaeolithic assemblages in the Japanese islands」、Katsuhiro Sano Shunsuke Totsuka Masami Izuho Kazuki Morisaki、International Symposium Insights into Human History in the Eurasian Stone Age: Recent Developments in Archaeology, Palaeoanthropology and Genetics、2022.9.28

[口頭発表（一般）]「東京都前田耕地遺跡の石器集中部と遺構範囲の空間分析」、尾田識好 間直一郎 森先一貴 岩瀬彬 山崎健 國木田大 佐藤宏之、日本旧石器学会 第21回総会・研究発表・シンポジウム、2023.6.24

[ポスター発表]「東京都前田耕地遺跡の石器集中部と遺構範囲の空間分析」、光石鳴巳 沖野実 白石純 森先一貴、日本旧石器学会 第21回総会・研究発表・シンポジウム、2023.6.25

[口頭発表(一般)]「Geochronology and techno-typology of the stemmed point on blade in the Japanese archipelago」、Kazuki Morisaki、INQUA2023Roma、2023.7.18

[口頭発表(一般)]「ナウマンゾウの絶滅と旧石器人との関係：瀬戸内西部における最近の研究」、西岡佑一郎 日下宗一郎 田中謙 木村淳 森先一貴、日本哺乳類学会 2023 年度大会自由集会「化石哺乳類学：環境変動により過去の動物相はどのように変わったのか」、2023.9.10

[口頭発表(一般)]「Multi-Disciplinary Studies on the Evidence of the Late Pleistocene Landscape Submerged in the Seto Inland Sea, Japan.」、Jun Kimura Hironobu Kan Soichiro Kusaka Kazuki Morisaki Yuichiro Nishioka Masami Sannoh Ken Tanaka、AIMA/ICUCH Joint Conference 2023、2023.9.14

[口頭発表(基調)]「古本州島の台形様石器と石刃尖頭器」、森先一貴、中・四国旧石器文化談話会、2023.12.2

[シンポジウム・ワークショップ パネル(指名)]「Hunter-gatherer economy and pottery adoption in the Japanese Archipelago and surrounding areas」、Kazuki Morisaki、Nordic-Japan Bipolar Research Seminar in Prehistoric Archaeology、2024.2.15

(5) その他(データベース・作品等)

「岩手県奥州市上萩森遺跡隣接地の試掘調査」、森先一貴、出穂雅実、崔桐赫、岩瀬彬、尾田識好、夏木大吾、國木田大、2022.9～2023.8

「冠山における地質学的サヌカイト調査」、森先一貴、出穂雅実、沖憲明他、2022.11

「鹿児島県中種子町平松 B 遺跡の発掘調査」、飯塚文枝、出穂雅実、森先一貴、Terry Karisa、寒川朋枝他、2022.12

「マルチビーム測深機による今治市伯方島沖ナウマンゾウ化石産出地の海底探査」、菅浩伸 三納正美 木村淳 森先一貴、2022.12

「五色台周辺における地質学的サヌカイト調査」、森先一貴、出穂雅実、2022.11

「二上山における地質学的サヌカイト調査」、光石鳴巳、森先一貴、出穂雅実他、2022.12

「鹿児島県中種子町長野崎遺跡の試掘調査」、飯塚文枝 出穂雅実 寒川朋枝 森先一貴、2023.6

(6) 共同研究・競争的資金等の研究課題

[科学研究費助成事業]「蛍光 X 線分析と鉱物組成分析による大和の古代寺院・宮都出土瓦の生産・供給体制の研究」、清野孝之 道上祥武 降幡順子 森先一貴、基盤研究(B)：20H01362、日本学術振興会、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所、2020.4～2025.3

[科学研究費助成事業]「日本列島における現生人類移住初期の環境適応史研究」、森先一貴 國木田大 出穂雅実 岩瀬彬、基盤研究(B)：21H00608、日本学術振興会、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所、2021.4～2025.3

[科学研究費助成事業]「日露共同調査によるサハリン新石器時代社会形成過程の解明」、福田正宏 森先一貴 太田圭、国際共同研究加速基金(国際共同研究強化(B))：21KK0009、日本学術振興会、東京大学、2021.10～2026.3

[科学研究費助成事業]「海と陸からの統合的アプローチによる日本列島旧石器研究の革新」、森先一貴 西岡佑一郎 出穂雅実 日下宗一郎 木村淳 菅浩伸、挑戦的研究(開拓)：22K18251、日本学術振興会、東京大学、2022.6～2026.3

[科学研究費助成事業]「古本州島中央部における先史狩猟採集民の総合的研究」、光石鳴巳 森先一貴 白石純 出穂雅実 高田将志 津村宏臣、基盤研究(A)：23H00025、日本学術振興会、奈良県立橿原考古学研究所、2023.4～2028.3

[科学研究費助成事業]「日本列島域にいたる先史人類形成過程の解明」、出穂雅実 森先一貴 岩瀬彬 大橋順 長谷川精 勝田長貴 志知幸治、学術変革領域研究(A)：23H04840、日本学術振興会、東京都立大学、2023.4～2028.3

e 社会活動

(1) 社会貢献活動

[講師]「日本の旧石器時代から見た立切遺跡・横峯遺跡」、中種子町・南種子町、立切遺跡・横峯遺跡国史跡指定記念シンポジウム、2022.12.11

[講師]「旧石器時代研究最前線」、仙台市地底の森ミュージアム、2023.2.11

[パネリスト]「古本州島先史文化からみた下原洞穴遺跡」、天城町教員委員会、令和5年度下原洞穴遺跡シンポジウム、2023.2.11

[講師] 埋蔵文化財講座「横峯遺跡を語ろう」、南種子町教育委員会、2024.1.18

[パネリスト]「縄文時代のはじまりを考える」、公益財団横陣東京都教育支援機構東京都埋蔵文化財センター、令和5年度東京・神奈川・埼玉埋蔵文化財関係財団普及連携事業公開セミナー、2023.2.11

(2) 学術貢献活動

[査読]「Peer review」、Archaeological Research in Asia、2022.11、2023.6

[査読]「Peer review」、Springer Press、2023.1

f その他

(1) 学会・委員活動

[委員歴] 石器文化研究会、企画幹事、2005.5～

[委員歴] 日本旧石器学会、総務委員会委員、2020.7～2022.6、総務委員長、2022.6～

[委員歴] 鹿児島県天城町下原洞穴遺跡調査指導委員会、指導委員、2020.7～2024.3

03 美術史学

教授 秋山 聡 AKIYAMA, Akira

1. 略歴

1986年 3月 東京大学文学部美術史学専修課程卒業（文学士）
1989年 3月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了（文学修士）
1997年 2月 フライブルク大学哲学部 Ph.D
1997年 4月 電気通信大学電気通信学部助教授（～1999年 3月）
1999年 4月 東京学芸大学教育学部助教授（～2006年 3月）
2006年 4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授
2007年 4月 同上准教授
2011年 3月 同上教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

西洋美術史

b 研究課題

デューラーを中心とした中近世ドイツ美術、聖遺物と美術との相関性、イメージ（像）の生動性、比較宗教美術史、造形物の記述に関する文化史的研究、人文学の成果・蓄積を応用しての地域連携活動

c 概要と自己評価

2021年度からの研究科長業務のため、研究に割ける時間は激減したが、細々とながら引き続き、比較宗教美術史的研究を展開した。人文学応用連携活動を推進する業務との関わりで、主として熊野地方をベースとして、人文学の成果・蓄積を応用・活用した地域連携活動を進めており、新宮市や山形県鶴岡市羽黒町、長崎県島原市等において、地域の歴史・伝統に関わる市民フォーラムないし研究集会を組織するとともに、異なる地域を人文学的トピックによって繋ぐことによる地域の文化的振興を試みている。また、熊野地方の研究対象としての魅力を国際的に発信すべく、郷土研究者や絵解きの実践者を帯同しての国際シンポジウム・セミナー等を、ニューヨークやフィレンツェ、ゲント等で展開し、一定の効果を挙げてきているように思う。2023年度からは地域連携・渉外活動促進担当の副学長として、一層、国内諸地域と大学との地域連携活動の活性化に努めている。

d 研究業績

(1) 講演・口頭発表等

[趣旨説明] 東大人文・熊野フォーラム in 新宮（第2回）『常呂と熊野―地域を繋ぐ試みとして』、2022.5.14

[趣旨説明] 東大人文・熊野フォーラム in 本郷『羽黒と熊野Ⅱ：聖地と絵図』、2022.11.23

“Introduction: Invitation to Kumano”, UTokyoNY オフィス・イベント: *Invitation to Kumano, with Etoki Performance: A Case of Regional Cooperative Activities of the University of Tokyo*, 2023.3.17

[趣旨説明] 東大人文・熊野フォーラム in 新宮『聖地と海』、2023.5.28

“On Our Kumano Project”, 国際シンポジウム *Dimensioni del Sacro tra Oriente e Occidente*（『聖性の諸相―東西比較の試み』）（於 フィレンツェ大学）、2023.9.26

[趣旨説明] 東大人文・熊野セミナー in 新宮『大石誠二郎とその周辺』、2023.10.29

「基調講演：比較美術史のすすめ」、東大人文・熊野フォーラム in 島原『山の信仰、きりしたん、温泉』、2023.12.9

[趣旨説明] 東大人文・院生/留学生熊野研修＋東大人文・若手国際フォーラム、2024.2.18

“Invitation to Kumano Studies”, ベルギー、ゲント大学日本学科熊野セミナー、2024.3.19

1. 略歴

- 1990年4月 東京藝術大学美術学部芸術学科入学
1994年3月 同上 卒業
1994年4月 東京藝術大学大学院美術研究科日本・東洋美術史専攻修士課程入学
1996年3月 同上 修了
1996年4月 東京藝術大学大学院美術研究科美術専攻博士後期課程入学
2000年3月 同上 修了、博士（美術）の学位取得
2000年4月 日本学術振興会特別研究員（PD）（～2003年3月）
2001年3月 プリンストン大学客員研究員（～2002年1月）
2004年4月 財団法人大和文華館学芸部部員（～2005年9月）
2005年10月 東京工業大学大学院社会理工学研究科価値システム専攻助教授（～2007年3月）
2007年4月 同上 准教授（～2012年3月）
2011年4月 ハイデルベルク大学客員教授（～2011年5月）
2012年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授（～2022年3月）
2017年2月 コロンビア大学客員教授（～2017年4月）
2022年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

日本美術史、主として中世絵画史

b 研究課題

中世やまと絵の研究、絵巻および絵師組織の研究、美術史学における人文情報学手法の導入、中世絵画の復元的考察、海外所在日本美術コレクションの調査研究

c 概要と自己評価

高松市歴史資料館「万物流転—語られるイメージと時間—」の展覧会監修を行い、図録執筆および講演を実施した。研究代表者を務める科研費「中世絵師組織の社会的活動基盤と様式系統の相関」の一環として行ったもので、香川県内の金刀比羅宮、琴弾八幡宮、法然寺、志度寺などに所蔵される14世紀前後の中世絵画を中心に、近世絵画も含めた現地調査を重ね、瀬戸内海沿岸地域における文化財の蓄積、絵師や作品の都鄙間の移動、現地景観の描写について考察した。また、14世紀を代表する絵師・高階隆兼について前後の時代の説話集や公家日記の分析を行い、そのパトロンであった西園寺家歴代による絵画注文の実態を明らかにした。ほか、親鸞と真宗に関わる展覧会関連のシンポジウム、室町時代やまと絵屏風の復元に関わる展覧会・シンポジウム、美術史・心理学・文学・人文情報学の協働による顔貌研究のプロジェクトなどで、成果の発信を続けている。この間、コロナ禍が続く中で国内での調査・研究が主体であったが、今後は海外の日本美術コレクション調査も再開する予定である。

d 研究業績

(1) 書籍出版物

[監修]『万物流転—語られるイメージと時間—』、高岸輝 左海きほ 竹崎宏基 山本聡美、49-55頁、「讃岐の霊地と瀬戸内の風景を描く—中近世やまと絵の七百年—」、高松市歴史資料館、2023.1.28

[共著]『共振するデジタル人文学とデジタルアーカイブ』、鈴木親彦 高岸輝 ほか、「カタログ・レゾネからデジタル・アーカイブズへ—ボストン美術館日本美術総合調査プロジェクトを起点に—」、勉誠社、単行本（学術書）、2023.7.20、248p〈pp.197-205 担当〉

[共著]『源氏物語 THE TALE OF GENJI—「源氏文化」の広がり 絵画、工芸から現代アートまで—』、稲本万里子 高岸輝 ほか、「「(コラム) 土佐光信の源氏絵—小画面に広がる空間と光」(51頁)、作品解説(「源氏物語藤裏葉冊子」(出光美術館)(50頁)、「源氏物語図屏風」(今治市河野美術館)(86-87頁))」、東京富士美術館、2024.2.24

(2) 論文

[大学紀要]「高階隆兼論（一）—『看聞日記』所載の「ういのせう絵」「強力女絵」「香助絵」と『古今著聞集』説話の絵巻群—」、高岸輝、美術史論叢 40 号、pp.1-23、2024.3.31

(3) その他各種論著

- [会議報告]「浄土真宗を中心とした祖師信仰とその造形」、高岸輝 津田徹英 山田雅教 井並林太郎 羽田聡、公益財団法人仏教美術研究上野記念財団 研究報告書、50号、pp.1-65、2023.12.25
- [解説]「よみがえる中世屏風—京洛の祝祭、白砂青松の海—」、阪野智啓 荒木恵信 井戸美里 岩永てるみ 河内将芳 小島道裕 高岸輝 中神敬子 本田光子 安井彩子 龍澤彩、pp.1-12、2024.1.6

(4) 講演・口頭発表等

- [公開講演]「讃岐の霊地と瀬戸内の風景を描く—中近世やまと絵の七百年—」、高岸輝、万物流転—語られるイメージと時間—展 講演会、高松市歴史資料館、2023.2.19
- [公開セミナー]「美術史学における「顔」—肖似性と様式分析」、高岸輝、東京大学ヒューマニティーズセンター第87回オープンセミナー「顔」は何を語るのか：顔貌コレクションの活用と展望」、東京大学、東京大学ヒューマニティーズセンター、2023.3.6
- [公開講演]「美術史・文化財研究とデジタルヒューマニティーズ—顔貌コレクションによる日本中世絵巻の分析を例に—」、高岸輝、龍谷大学古典籍・文化財デジタルアーカイブ研究センター、2023.3.13
- [口頭発表(招待)]「都鄙交流と縁起絵—「琴弾宮縁起絵」と讃岐・瀬戸内の中世絵画—」、高岸輝、寺社縁起研究の新潮流—領域横断的・国際的研究拠点の形成に向けて—公開シンポジウム「美術史から見た寺社縁起の展望—中央と地域の関係に注目して—」、実践女子大学、2023.5.14
- [シンポジウム パネル(指名)]「絵巻の画中画からひろがる中世屏風の世界」、高岸輝、中世やまと絵屏風を技法と主題から読み解く、京都工芸繊維大学、2024.1.6

(5) 共同研究・競争的資金等の研究課題

- [科学研究費助成事業]「仏教学デジタル知識基盤の継承と発展」、下田正弘 蓑輪顕量 永崎研宣 大向一輝 八尾史 宮崎崇 納富信留 Muller Albert 苫米地等流 蔵本龍介 船山徹 高橋晃一 師茂樹 齋藤希史 高岸輝、基盤研究(A)：19H00516、日本学術振興会、東京大学、2019.4～2023.3
- [科学研究費助成事業]「戦国軍記・合戦図の史料学的研究」、堀新 湯浅佳子 龍澤彩 山本聡美 薄田大輔 金子拓 川合康 佐島顕子 高橋修 山本洋 須田牧子 黒田智 高岸輝 井上泰至、基盤研究(A)：20H00031、日本学術振興会、共立女子大学、2020.4～2024.3
- [科学研究費助成事業]「形象の記述・記録についての比較美術史学的研究」、秋山聡 板倉聖哲 増記隆介 高岸輝 芳賀京子、基盤研究(B)：21H00487、日本学術振興会、東京大学、2021.4～2024.3
- [科学研究費助成事業]「中世絵師組織の社会的活動基盤と様式系統の相関—十四世紀の縁起・絵伝を結節点として—」、高岸輝 津田徹英 藤原重雄 加須屋誠 鈴木親彦 井並林太郎、基盤研究(B)：22H00617、日本学術振興会、東京大学、2022.4～2025.3
- [科学研究費助成事業]「中世大画面祭礼図の構図法の研究—月次祭礼図屏風模本の失われた左隻の推定を中心に—」、岩永てるみ 阪野智啓 河内将芳 高岸輝 小島道裕、基盤研究(C)：22K00212、日本学術振興会、愛知県立芸術大学、2022.4～2025.3
- [科学研究費助成事業]「日本・アジア美術史のオーラルヒストリー・アーカイブの構築と公開」、塚本磨充 板倉聖哲 高岸輝 増記隆介、基盤研究(C)：22K00159、日本学術振興会、東京大学、2022.4～2025.3
- [科学研究費助成事業]「伝来・評価・制作の検証に基づく近世大名絵画コレクションの基礎的研究」、龍澤彩 下原美保 五十嵐公一 三宅秀和 高岸輝 井戸美里、基盤研究(C)：22K00167、日本学術振興会、金城学院大学、2022.4～2025.3
- [科学研究費助成事業]「中世やまと絵屏風の技法復元を中心とする総合的研究」、阪野智啓 岩永てるみ 中神敬子 荒木恵信 高岸輝 龍澤彩 井戸美里 本田光子、基盤研究(B)：22H00628、日本学術振興会、愛知県立芸術大学、2022.4～2026.3
- [科学研究費助成事業]「宗教テキスト文化遺産アーカイブス創成学術共同体による相互理解知の共有」、阿部泰郎 楠淳澄 三谷真澄 道元徹心 石川知彦 野呂靖 近本謙介 瀬谷貴之 齋藤真麻理 小池淳一 高岸輝 菊地大樹 上島享 横内裕人 渡辺麻里子 佐藤愛弓 高橋悠介 大東敬明 大河内智之、基盤研究(A)：22H00005、日本学術振興会、龍谷大学、2022.4～2026.3
- [協働研究]「顔」は何を語るのか—過去から未来へ—、永井久美子 高岸輝 梶谷真司 鈴木敦命 出口智之 中村覚 笠原真理子 水野博太、東京大学ヒューマニティーズセンター、東京大学、2023.1～2024.12

e 社会活動

(1) 社会貢献活動

- [助言・指導]「日本郵便 特殊切手 美術の世界シリーズ」、第1集～第5集、日本郵便株式会社、2020.3.19～2023.8.2

(2) 学術貢献活動

[監修] 展覧会「万物流転—語られるイメージと時間—展」、高松市歴史資料館、2023.1.28～3.19

[パネル司会]「浄土真宗を中心とした祖師信仰とその造形（研究発表と座談会）」、公益財団法人 仏教美術研究上野記念財団、京都国立博物館、2023.4.23～

[企画立案・監修]「鹿島美術財団・ボストン美術館 日本美術共同調査 インタビュー」、公益財団法人 鹿島美術財団、2023.6.1～12.1

f その他

(1) 学会・委員活動

[委員歴] 国際美術史学会（CIHA）国内委員会、委員、2014～

[委員歴] 日本歴史学会、評議員、2018～

[委員歴] 美術史学会、常任委員、2019～2023

[委員歴] 公益財団法人 阪急文化財団、文化財修理事業専門委員、2020～

[委員歴] 国際美術史学会（CIHA）代理委員、2021～

准教授 **増記 隆介** MASUKI, Ryusuke

1. 略歴

1993年4月	東京大学教養学部文科三類入学
1995年4月	東京大学文学部歴史文化学科美術史学専修課程進学
1997年3月	同上 卒業
1997年4月	東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻美術史学専門分野修士課程入学
1999年3月	同上 修了
1999年4月	東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻美術史学専門分野博士課程進学
1999年4月	同上 退学
1999年4月	財団法人大和文華館学芸部員（～2004年9月）
2002年4月	神戸大学大学院文化学研究科客員助教授（～2004年9月）
2004年10月	文化庁文化財部美術学芸課文部科学技官（絵画部門）（～2009年6月）
2007年10月	文化庁文化財部古墳壁画室併任（～2013年9月）
2009年7月	文化庁文化財部美術学芸課文化財調査官（絵画部門）（～2013年9月）
2013年10月	神戸大学大学院人文学研究科准教授（～2021年3月）
2016年11月	博士（文学）学位取得（東京大学）
2019年9月	コロンビア大学客員教授（～2019年12月）
2021年4月	東京大学大学院人文社会系研究科准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

日本美術史 おもに日本古代・中世仏教絵画史

b 研究課題

仏教絵画史における日中交流の研究、仏教絵画と世俗画との相関関係に関する研究、美術史研究と修理

c 概要と自己評価

近年は、これまでに引き続き、平安時代の仏教絵画と唐宋絵画との比較研究を進めている。特に国宝「応徳涅槃図」に関する論考は、卒業論文以来の研究テーマについて、その後の研究史、自身の知見を加えて深めたものであり、「応徳涅槃図」研究の里程標とも言える成果を得ている。また、国宝指定に関わった南宋時代の国宝「阿弥陀三尊像」についても指定調査時の知見を披瀝するとともに、水墨画等、仏画以外の絵画との比較考察も行い、南宋絵画史の中に位置付け直した。

さらに、同時代の世俗画研究も進展し、特に「鳥獣戯画」に関する書籍執筆がきっかけとなり、後白河院によって形成された蓮華王院の絵画コレクションの去就について、国文学、歴史学研究の成果を取り入れつつ鎌倉時代初期の後堀河院に至る間の歴史を概観する論考を発表した。

研究成果は、上述のような書籍、論文等で公にするとともに、海外における研究発表、国際シンポジウムでの多言語での発表等を行い広く発信している。特に、前者については、文化庁在職時以来の重要な研究対象である我が国における絵画修理の歴史と理念を中心に米国において研究発表を行った。これは、カーネギー・メロン財団の助成による世界各地の文化財修理とその理念に関する研究プロジェクトの一環をなすものであり、発表時にはインドにおける文化財修理に関するシンポジウムも行われ、今後の研究に資する学術的な刺激を受けた。

d 研究業績

(1) 書籍出版物

[分担執筆]『杉本博司本歌取り：日本文化の伝承と飛翔』、増記隆介、論文「圓教寺常行堂仏後壁の来迎図」、くま書店、2022.9、pp.301

[共著]『国宝 普賢菩薩像 令和の大修理全記録』、増記隆介、東京美術、単行本（学術書）、2023.4、pp.136

(2) 論文

[学術雑誌]「後白河院時代の絵画と宝蔵」、増記隆介、仏教文学、47号、pp.131-144、2022.4

[論文集（書籍）内論文]「鳥獣戯画・蓮華王院宝蔵・正倉院」、増記隆介、鳥獣戯画研究の最前線、東京美術、pp.68-85、2022.4

[学術雑誌]「呉越国の絵画と日本 ―『応現観音図』を中心に―」、増記隆介、アジア遊学 呉越国 10世紀東アジアに華開いた文化国家、274号、pp.276-292、2022.10

[大学紀要]「後堀河院がしたこと―後白河院崩御後の『宝蔵絵』―」、増記隆介、美術史論叢、39号、pp.85-96、2023.3

[論文集（書籍）内論文]『『応徳涅槃図』再考―原本の存在とその絵画史的位置』、増記隆介、釈迦信仰と美術、思文閣出版、pp.523-564、2023.8

[論文集（書籍）内論文]「宋代仏画における清浄華院『阿弥陀三尊像』の史的位置」、増記隆介、「見えるもの」や「見えないもの」をあらわす 東アジアの思想・文物・芸術、勉誠社、pp.381-410、

(3) 講演・口頭発表等

[口頭発表（招待・特別）]「The Conservation of Buddhist Painting in Heian-Period(794-1192) Japan」、Ryusuke Masuki、Conservation Thinking in Japan、Bard Graduate Center, New York、2022.5.6

[公開講演、セミナー、チュートリアル、講習、講義等]「圓教寺常行堂仏後壁の『二十五菩薩来迎図』をめぐる」、増記隆介、杉本博司 本歌取り―日本文化の伝承と飛翔 展記念講演会、姫路市立美術館、2022.10.29

[公開講演、セミナー、チュートリアル、講習、講義等]「普賢菩薩の絵画 ―美しきほとけへの祈り―」、増記隆介、大倉集古館「信仰の美」展 講演会、大倉集古館、2022.12.17

[シンポジウム・ワークショップ パネル（指名）]「寺社縁起としての平家納経―見返絵の分析から―」、増記隆介、美術史から見た寺社縁起の展望―中央と地域の関係に注目して―、実践女子大学、2023.5.14

[シンポジウム・ワークショップ パネル（指名）]「孔雀明王と孔雀王菩薩 ―仁和寺『孔雀明王像』成立の前提として―」、増記隆介、北宋書画精華 国際学術シンポジウム、東京大学、2023.11.4

[口頭発表（一般）]「高松塚古墳壁画のある日本絵画史」、増記隆介、飛鳥・奈良時代の国際交流に関する調査研究事業研究会、奈良県立橿原考古学研究所、2023.12.13

[シンポジウム・ワークショップ パネル（指名）]「平安時代の仏伝図―法成寺を中心として―」、増記隆介、仏教芸術学会フォーラム「仏伝の文学と造形」、早稲田大学、2023.12.23

(4) 共同研究・競争的資金等の研究課題

[科学研究費助成事業]「唐絵の中の朝鮮絵画―半島由来絵画の越境移動と受容史にかんする包括的研究―」、井手誠之輔 板倉聖哲 塚本鷹充 北澤菜月 増記隆介 川西裕也 森平雅彦 森實久美子 畑靖紀 谷口耕生、基盤研究（A）：19H00521、日本学術振興会、九州大学、2019.4～2024.3

[科学研究費助成事業]「形象の記述・記録についての比較美術史学的研究」、秋山聰 板倉聖哲 増記隆介 高岸輝 芳賀京子、基盤研究（B）：21H00487、日本学術振興会、東京大学、2021.4～2024.3

[科学研究費助成事業]「五台山仏教文化圏における文物の生成・継承・波及」、稲本泰生 大西磨希子 田林啓 増記隆介 倉本尚徳 向井佑介 檜山智美 藤岡穰 谷口耕生 高井たかぬ 皿井舞 井並林太郎 塚本明日香 西谷功 大原嘉豊、基盤研究（A）：21H04341、日本学術振興会、京都大学、2021.4～2026.3

[科学研究費助成事業]「日本・アジア美術史のオーラルヒストリー・アーカイブの構築と公開」、塚本鷹充 板倉聖哲 高岸輝 増記隆介、基盤研究（C）：22K00159、日本学術振興会、東京大学、2022.4～2025.3

[科学研究費助成事業]「仏教絵画における聖と俗の往還に関する比較美術史的研究」、増記隆介、基盤研究（C）：22K00179、日本学術振興会、東京大学、2022.4～2026.3

e 社会活動

(1) 学術貢献活動

[保存・修復] 文化財保護「国宝「普賢菩薩像」修理委員会委員」、東京国立博物館、2019.4.1～2023.3.31

[学術調査立案・実施] 審査・学術的助言「高松塚古墳壁画保存管理公開活用施設（仮称）基本構想検討ワーキンググループ」、文化庁、2021.4.1～2024.3.31

f その他

(1) 学会・委員活動

[委員歴] 仏教芸術学会、運営委員・編集委員、2019.4～

[委員歴] 滋賀県文化財保護審議会、委員、2019.7～

[委員歴] 文化庁・宮内庁・読売新聞社「紡ぐ」プロジェクト、文化財修理補助事業審査委員、2019.9～

[委員歴] 法隆寺金堂壁画保存対策検討会ワーキンググループ、美術史班座長、2020.11～

[委員歴] 日本仏教総合研究学会、理事・評議員、2021.4～

[委員歴] 美術史学会、常任委員、2023.5～

04 哲学

教授 納富 信留 NOTOMI, Noburu

1. 略歴

1987年3月 東京大学文学部第1類哲学専修課程卒業
1990年3月 東京大学大学院人文科学研究科哲学専攻修士課程修了
1990年4月 同 博士課程進学 (1994年9月 退学)
1991年10月 ケンブリッジ大学大学院古典学部 Ph.D. コース入学
1995年10月 同大にて Ph.D. 取得
1996年10月 九州大学文学部講師 (哲学・哲学史)
1998年4月 九州大学文学部、大学院人文科学研究科助教授 (哲学・哲学史)
2002年4月 慶應義塾大学文学部助教授 (哲学)
2006年3月 オランダ・ユトレヒト大学訪問研究員 (慶應義塾大学塾派遣留学: 2007年9月まで)
2007年4月 慶應義塾大学文学部准教授 (哲学)
2008年4月 慶應義塾大学文学部教授 (哲学)
2016年4月 東京大学大学院人文社会系研究科 教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

西洋古代哲学、西洋古典学、世界哲学

b 研究課題

西洋における哲学の成立を、古代ギリシア哲学の初期から後期にかけて、哲学史と古典文献学の手法を用いながら多角的に検討することを課題とする。主なテーマとして、(1) 紀元前5〜4世紀の古典期アテナイの知的状況、具体的には、ソフィスト思潮、ソクラテス、ソクラテス文学、プラトン、イソクラテスら、(2) 初期のイオニアとイタリアの知的状況、および、(3) ヘレニズム期から古代後期にかけての継承と展開、を扱っている。それらの分析をつうじて、現代における「哲学」のあり方を根源から見直し、新たな視野を得ることを目的としている。

また、古代ギリシア哲学が、19世紀以降の日本や東アジアにどのように導入され、翻訳や研究をつうじて社会や思想に影響を与えてきたかという受容史、もテーマにしている。

西洋哲学の起源としての古代ギリシア哲学から、世界哲学を検討している。

c 概要と自己評価

これまで、(1) の古典期アテナイ哲学を研究の中心に据えて、複数の研究書など成果をまとめ、プラトン『ポリテイア』を中心とする「イデア論」の解明をより詳細に進めた。2021年3月に(1)と(2)の検討をまとめて、『ギリシア哲学史』(筑摩書房)として公刊したが、引き続き(3)の範囲の検討を続け、『続ギリシア哲学史』として出版する予定で研究を進めている。これらの作業をつうじて、ギリシアで哲学が誕生した前6世紀初めから終焉を迎えた後6世紀前半のローマ後期までの古代哲学の全体像を描くことになる。『ギリシア哲学史』は、姫路市主催の第34回和辻哲郎文化賞(学術部門)を受賞した(2022年3月6日、姫路文学館)。

また、哲学をより広く展開する「世界哲学・世界哲学史」のプロジェクトを国内外の研究者と共同で進めている。その成果は共編著『世界哲学史』(ちくま新書、全8巻+別巻、2020年)、および『世界哲学のすすめ』(ちくま新書、2024年)で発表した。

d 研究業績

(1) 書籍出版物

[分担執筆] “Japanese Philosophers on Plato's Ideas”, *Royal Institute of Philosophy Supplements, Volume 93: Expanding Horizons*, edited by Julian Baggini, Cambridge University Press, 18 May 2023, pp. 55-68. DOI: <https://doi.org/10.1017/S1358246123000085>

[共編著] 『扉をひらく哲学 ―人生の鍵は古典のなかにある』、中島隆博・梶原三恵子・納富信留・吉水千鶴子編、岩波ジュニア新書、2023.5.19、xvi+182+4頁：執筆28-33、40-46、162-169頁

- [単著]『新版 プラトン 理想国の現在』、熊野純彦解説、ちくま学芸文庫、2023.12.10、398 頁 [『プラトン 理想国の現在』(2012 年)の増補改訂版]
- [単著]『世界哲学のすすめ』、ちくま新書、2024.1.10、342+vi 頁
- [単著]『プラトンが語る正義と国家 —不朽の名著『ポリテイア (国家)』読解—』、テンミニッツTV 講義録②、ビジネス社、2024.2.11、174 頁

(2) 論文

- [大学,研究機関紀要]『The Greek Concept of ‘Mimesis’ Revisited』、東京大学哲学研究室『論集』41号(2022 年度)、1-20 頁
- [学術雑誌]「知らないということ —ソクラテスの哲学を究める」、『現代思想』51-7「特集：無知学／アグノトロジーとは何か」、2023 年 6 月号、217-226 頁
- [学術雑誌]「ある」とはどのようなことか?」、『現代思想』52-1「特集：ビッグ・クエスチョン—大いなる探究の現在地」、2024 年 1 月号、12-19 頁
- [学術雑誌]「ギリシア哲学とインド哲学の対決—『ミリンダ王の問い』の世界哲学的意義—」、『比較思想研究』50 (特集 2: 比較思想と世界哲学)、比較思想学会、2024.3.31、35-38 頁

(3) その他各種論著

- [書評,文献紹介等]「対話する人間を見つめ直す」、『Voice』、令和 5 年 10 月号、PHP 研究所、2023.9.6、208-215 頁
- [書評,文献紹介等]「哲学者との対話としての哲学史—本書を読むために」、岩崎武雄『カントからヘーゲルへ(新版)』序文、東京大学出版会、2023.9.25、i-vi 頁
- [書評,文献紹介等]「Point of view —第 238 回「生きること」と「働くこと」—哲学から考える人間性の回復」、WEB 労政時報、2023.10.13
- [書評,文献紹介等]「対話の可能性を求めて」、『福音宣教』第 78 巻第 2 号、オリエンズ宗教研究所、2024.2.1、19-25 頁
- [書評,文献紹介等]「古代ギリシア哲学と現代政治との対話」、『Voice』(特集 2 自民党政治の落とし穴)、令和 6 年 4 月号、PHP 研究所、2024.3.6、150-157 頁
- [速報,短報,研究ノート等]座談会:「先端科学技術と人文社会科学」、高橋伸一郎、納富信留、宇野重規、横山広美、田中有紀、中島隆博、東京大学東洋文化研究所、2023 年 7 月 3 日開催、Booklet for New Enlightenment 1、2024.3.22
- [書評,文献紹介等]「はじめに」『オホーツクの古代文化—東北アジア世界と北海道・史跡常呂遺跡』、東京大学文学部常呂実習施設／考古学研究室編、新神社、2024.3.25、2-3 頁
- [速報,短報,研究ノート等]合評会:「哲学と時間 バルクソン『時間観念の歴史——コレージュ・ド・フランス講義 1902-1903 年度』合評会——」、藤田尚志、鈴木泉、納富信留、平井靖史、『九州産業大学国際文化部紀要』第 83 号、2024.3.31、29-68 頁

(4) 講演・口頭発表等

- [口頭発表 (一般)] “World Philosophy and the possibility of dialogue”, FISP-PAJ Symposium: World Philosophy and World Crises, FISP, Philosophical Association of Japan, Faculty of Letters, University of Tokyo, 28 May 2023.
- [口頭発表 (招待・特別)] 「ケーベルと西洋古典」、ケーベル会再発足第 1 回研究大会、「座談会: ケーベル—その精神と思想」、東京大学文学部 1 番大教室、2023.6.11
- [口頭発表 (基調)] 「ギリシア哲学とインド哲学の対決—『ミリンダ王の問い』に見る世界哲学—」、比較思想学会 50 周年記念大会、シンポジウム「世界哲学と比較哲学」、大正大学巣鴨キャンパス、2023.7.1
- [口頭発表 (基調)] 「世界哲学における東アジアの哲学」、第 7 回日中哲学フォーラム、基調講演、東北大学川内キャンパス、2023.9.12
- [シンポジウム・ワークショップパネル (指名)] 「モンテーニュのソクラテス」、九州大学哲学会令和 5 年度大会、シンポジウム「モンテーニュと哲学」、九州大学伊都キャンパス、2023.9.30
- [シンポジウム・ワークショップパネル (指名)] 「魂があると語ること」、西日本哲学会第 74 回大会、シンポジウム「松永プラトンの再検討—問題の継承と残された課題—」、2023.12.2、福岡大学。
- [口頭発表 (一般)] “Organizing the History of East Asian Philosophy in World Philosophy”, Global Histories of Philosophy and the Idea of World Philosophy? A Joint Workshop, 14 December 2023, University of Hildesheim, Germany (online).
- [口頭発表 (一般)] “Reconsidering the History of Philosophy from World Philosophy: In response to the Koselleck Project at the University of Hildesheim”, International Workshop, Beyond the Canon: Histories of Philosophies from Global Perspectives, 25 March 2024, Hongo Campus, Faculty of Letters, The University of Tokyo.

e 社会活動

(1) メディア報道

[新聞・雑誌] インタビュー「心交わす民主主義の根幹 真の「対話」とは」、『毎日新聞』夕刊「特集ワイド」、2023年7月13日2面 [聞き手、福田智沙]

[インターネットメディア] Tokyo College: The Salon 「ザ・サロン ―東大教授との対話シリーズ」対談5、2024年1月12日公開 [対談者：LIE John（東京カレッジ招聘教員 カリフォルニア大学バークレー校教授）、島津直子（東京カレッジ 教授）]

<https://www.youtube.com/watch?v=i8rbpZm7hXA&list=PLeE49Q0gSq2lxdJfJWKQvsLRjZE75r9rH&index=2>

f その他

(1) 非常勤講師

早稲田大学文学学術院

(2) 学会・委員活動

[所属学協会][委員歴]

International Federation of Philosophical Societies (FISP), Steering Committee Member

International Plato Society (IPS 国際プラトン学会)、Advisory Board

International Society for Socratic Studies (ISSS 国際ソクラテス研究学会)、Representative of Asia, Africa, and the rest of the world (アジア・アフリカ・その他地区代表)

日本学術会議、第26期連携会員

日本西洋古典学会、委員、編集委員

日本哲学会、会長、評議員、理事

哲学会、理事長

フィロロギカ [古典文献学研究会]、編集委員

ギリシャ哲学セミナー、代表幹事

比較思想学会、評議員、理事

The Korean Society of Greco-Roman Studies. Editorial Board

Korean Philosophical Association. Editorial Board

Brill's Plato Studies Series. Editorial Board

Editorial Board, *Ancient Philosophy Today: Dialogoi*

Editorial Board, *Revue de philosophie ancienne*

教授 **鈴木 泉** SUZUKI, Izumi

1. 略歴

1986年3月	東京大学文学部哲学専修課程学士・文学士
1989年3月	東京大学大学院人文科学研究科哲学専攻修士・文学修士
1990年10月	東京大学教養学部助手（～1993年3月）
1993年4月	神戸大学文学部助教授（～2006年3月）
2006年4月	東京大学大学院人文社会系研究科准教授
2018年4月	東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

哲学、特に西欧近世哲学と現代フランス哲学

b 研究課題

＜内在性の哲学＞の体系化の作業として次の三つが現在の研究課題である。

- 1/西洋形而上学の形成史の探求とそれを背景とした＜存在の一義性＞の哲学の系譜学の作業。
- 2/現代フランスにおける差異哲学の検討。
- 3/非人間主義 (inhumanisme) の哲学の展開。

c 概要と自己評価

上記三つの研究課題をより具体的には次のように遂行している。

1/ドゥンス・スコトゥスからスピノザに至る中世後期から近世にかけての＜存在の一義性＞の系譜学の意義を、とりわけスピノザ哲学に焦点をあてて解明すること。

2/現代における＜内在性の哲学＞の範型＝差異哲学としてのドゥルーズ哲学を解凍し、その意義を現代分析的形而上学や日本語の哲学と突き合わせながら展開すること。

3/限定された存在としての人間とは異なる他のありようへと変容していくことの可能性を肯定する思考としての非人間主義の哲学を、具体的な主題において展開すること。

これらに関して、とりわけスピノザ哲学の特異な位置づけを、ライブニッツ哲学との関連、ならびにその受容史をもとに解明する作業を行い、単著『スピノザライブニッツ問題』として刊行する準備を集中的に進めてきた。さらに、『スピノザ全集』編集委員として、全集刊行の準備を進め、2022年12月に刊行を始めた。2023年6月には第Ⅰ巻全体の調整を行うとともに、それに収められた『形而上学的思想』の翻訳と解説を刊行した。翻訳・解説においては、最近の研究を踏まえ、近世スコラ哲学に関する新たな知見を取り込んだ。2に関しドゥルーズとドゥルーズ&ガタリの思索に関する単著二冊を刊行する準備を進めてきた。さらに、3に関しても単著『非人間主義の哲学』の刊行に向けての執筆を進めてきた。

しかしながら、2021年6月の事故による外傷性のくも膜下出血のリハビリもあり、主に『スピノザ全集』の刊行作業に時間をあてざるを得ず、その他の作業を完成させることが出来なかった。若干の後遺症を残しつつも復調したので、これまでの研究の集大成となる、上に挙げた三つの課題それぞれに関する大部の著作の刊行を期したい。

d 研究業績

(1) 書籍出版物

- [共編者] 『スピノザ全集Ⅲ』、岩波書店、2022.12
- [共編者] 『スピノザ全集Ⅰ』、岩波書店、2023.3
- [共編者] 『スピノザ全集Ⅳ』、岩波書店、2023.6
- [単訳] スピノザ、『形而上学的思想』、『スピノザ全集Ⅳ』、岩波書店、2023.6

(2) その他各種論著

- [対談] 鈴木泉（上野修との対談）「“彗星”の哲学者 『スピノザ全集』全6巻別巻1（岩波書店）初回配本を機に」、『週刊読書人』第3471号、2023.1.6
- [会議報告等] 鈴木泉、「ワークショップ報告 自由と主体の系譜学——古代哲学と近世哲学の間で」、『現象学の新たな展開』哲学雑誌第137巻第810号、哲学会編、141-143頁、2023.10

(3) 講演・口頭発表等

- [シンポジウム・ワークショップパネル（指名）] 国内、鈴木泉（司会）、ワークショップ「自由と主体の系譜学——古代哲学と近世哲学の間で」、哲学会、東京大学、2022.10.30
- [公開対談] 国内、鈴木泉（上野修との対談）、『スピノザ全集』（岩波書店）刊行記念 トークイベント 上野修×鈴木泉「彗星の哲学者 スピノザ」、代官山 蔦屋書店／Zoom ウェビナー機能を使用したオンラインライブ配信、2023.4.18
- [口頭発表（一般）] 国内、鈴木泉、「ミシェル・アンリ『マルクス』再考——「フォイエールパッサ・テーゼ」をめぐって——」、日本ミシェル・アンリ哲学会第15回研究発表大会、神戸女学院大学、2023.6.10

e 社会活動

(1) 社会貢献活動

- [編集] 雑誌『ひとおもしろ』編集委員、2022.4～2024.3

f その他

(1) 非常勤講師

- 東洋大学大学院、「近世哲学演習」、「哲学特殊研究」、2022.4～2023.3
- 東京藝術大学、「哲学」、2022.4～2023.3

(2) 学会・委員活動

- [委員歴]
- 国内、日本哲学会理事、2022.4～2023.5

国内、日本哲学会評議員、2023.5～
国内、哲学会理事、2022.4～2024.3
国内、スピノザ協会運営委員、2022.4～2024.3
国内、日本ライブニッツ協会理事、2022.4～2024.3

教 授 古 莊 真 敬 FURUSHO, Masataka

1. 略歴

1987年4月	東京大学教養学部文科三類入学
1989年4月	東京大学文学部第一類（哲学専修課程）進学
1991年3月	東京大学文学部第一類（哲学専修課程）卒業
1991年4月	東京大学大学院人文科学研究科哲学専攻修士課程入学
1993年3月	東京大学大学院人文科学研究科哲学専攻修士課程修了
1993年4月	東京大学大学院人文科学研究科哲学専攻博士課程進学
1995年10月	ドイツ学術交流会（DAAD）給費奨学生として、ドイツ連邦共和国フライブルク大学（Albert-Ludwigs-Universität Freiburg）に留学（～1997年9月）
1998年3月	東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻哲学専門分野博士課程単位取得退学
1998年11月	日本学術振興会特別研究員（～2001年10月）
2000年3月	東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻哲学専門分野博士課程修了 博士（文学）学位取得
2002年1月	山口大学工学部 助教授
2005年4月	山口大学人文学部 助教授
2007年4月	山口大学人文学部 准教授
2011年4月	東京大学大学院総合文化研究科 准教授
2018年4月	東京大学大学院総合文化研究科 教授
2021年4月	東京大学大学院人文社会系研究科 教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

哲学、特に近代から現代に至るドイツ哲学と現象学および実存哲学

b 研究課題

近代から現代に至るドイツ哲学、現象学、ならびに日本哲学のテキストの批判的読解を試みながら、人間の実存の本質構造に関する探究をおこなっている。われわれ人間の世界理解および自己理解の基本的構造を明らかにし、この構造が、その「超越的内在」との接触によっていかなる変様の経験を被るかについて考察することが現在の課題である。この課題を具体的に展開するため、1）いわゆる超越論哲学と生の哲学という二つの思考様式の必然的な絡み合いと、時として生じる自己矛盾にみちた展開を、ハイデガーを初めとする現象学や実存哲学のテキストに即して剔抉し、2）また、西田以降の近代日本哲学に特有な論理構造の哲学史的意義を明らかにして批判的に対峙することを試みている。

c 概要と自己評価

上記における二つの具体的課題を、ここ二年間の活動においては次のように展開してきた。1）については、『存在と時間』における「被投性」概念が、いかなる意味においてフッサール的な超越論的哲学の構えを本質的に刷新するものであったのかという非常に基本的な問題を、いわゆるメタ存在論および1930年代の「真理の本質について」講演の展開を視野に収めながら改めて考察することを試み、短い英語の論稿にまとめて発表した。また、生の哲学の詩論的展開の可能性を模索するため、いくつかの和歌のなかに表れる「いのちなりけり」という詠嘆表現の意味に関する哲学的な分析を試み、短い論稿を英語で発表した。英語による研究交流という点では多少なりとも意味があったと信じたいが、いずれも哲学的な内容としては掘り下げがまったく不十分なものに留まってしまったことが猛省される。2）に関しては、九鬼周造の偶然論の批判的解釈を今一度試みるべく、小林信之氏（早稲田大学）を研究代表者とする共同

研究「近代日本思想におけるポイエーシスとプラクシスの相克と協働をめぐる総合的研究」(科研費基盤研究B)に加わり、多くの有益な示唆を得ることができた。ただし、その成果は、次年度、新たな九鬼論を発表する際の土台として温めておくのみとした。

d 研究業績

(1) 論文

[学術雑誌] Masataka Furusho, “On the Limits of Transcendental Philosophy in Heidegger’s Thinking: Thrown Projection, Metontology, and Emergence of Dasein”, *Kritike*, 16 (3), 2023.4, pp. 33-44

[論文集(書籍)内論文] Masataka Furusho, “Modification of life awareness and its poetic expressions in Japanese literature”, *Environmental Philosophy and East Asia*, H. Abe, M. Fritch, M. Wenning (eds.), Routledge, 2022.7, pp.128-136

(2) 講演・口頭発表等

[口頭発表] Masataka Furusho, “The Bounds of Transcendental Constitution and the Question of the Other”, The 2nd International Conference of Heidegger Circle in Asia (HCIA), Online Zoom, December 4th, 2022

e その他

(1) 非常勤講師

聖心女子大学「哲学・倫理学特講IX・X」(2022年度)、「哲学・倫理学特講3・4」(2023年度)を担当
早稲田大学文化構想学部「文化の哲学」(2023年度春クォーター、オムニバス形式の3回)を担当
東京大学工学部「エネルギー総合学基礎論」(2023年度Sセメスター、オムニバス形式の1回)を担当

(2) 学会・委員活動

[委員歴]

哲学会、理事(継続中)

日本哲学会、評議員(2023年度～)

実存思想協会、理事(継続中)、編集委員(継続中)

ハイデガー・フォーラム、実行委員(継続中)、事務局代表(2023.9まで)

准教授 **乗立 雄輝** NORITATE, Yuki

1. 略歴

1987年4月	東京大学教養学部文科三類入学
1989年4月	東京大学文学部第一類(哲学専修課程)進学
1992年3月	東京大学文学部第一類(哲学専修課程)卒業
1992年4月	東京大学大学院人文科学研究科哲学専攻修士課程入学
1994年3月	東京大学大学院人文科学研究科哲学専攻修士課程修了
1994年4月	東京大学大学院人文科学研究科哲学専攻博士課程進学
1996年3月	東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻哲学専門分野博士課程退学
1996年4月	四国学院大学文学部人文学科 専任講師
1999年4月	四国学院大学文学部 助教授(～2007年3月)
2003年8月	トロント大学哲学部 [Department of Philosophy, University of Toronto] 訪問教授 [Visiting Professor] (～2004年7月)
2007年4月	四国学院大学文学部 准教授
2010年4月	四国学院大学文学部 教授
2014年4月	東京女子大学現代教養学部人文学科哲学専攻 教授(～2019年3月)
2017年4月	東京女子大学比較文化研究所副所長、兼丸山眞男記念比較思想研究センター副所長(～2019年3月)
2019年4月	東京大学大学院人文社会系研究科 准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

哲学、特に近世・近代から現代に至る英語圏の哲学と形而上学

b 研究課題

近世・近代から現代に至る英語圏の哲学に基盤を置きながら、哲学的な宇宙論 (cosmology)、宇宙生成論 (cosmogony) は可能なのか、また、それが可能であったとしても現代においてどのような意義を持ちうるのかという問題を探求している。具体的なテーマとしては、

- (1) 19 世紀後半から 20 世紀前半にかけての北米の哲学者、特にパース、W.ジェイムズ、ホワイトヘッドにおける形而上学についての考察
- (2) パトナムやブランダムら、現代の哲学者の形而上学についての考察
- (3) 哲学的な宇宙論一般についての研究

を課題としている。

c 概要と自己評価

先述の具体的なテーマの (1) については、論文「古典的プラグマティズムにおける〈主観性/客観性〉」(2023)において、可塑的な世界観を基盤にした存在論を元に、伝統的な主観性/客観性概念を批判し、両者の連続性を主張したパースについて考察し、そこから哲学的な宇宙論を展開する端緒を探る試みを行った。また、口頭発表「プラグマティズムと批判的常識主義」(2022)においては、パースが重要視する「常識」について、それが曖昧であるという彼の批判的常識主義についての考察を進めており、来年 1 月刊行予定の共著にそれを掲載する。(2) については、パトナムが評価する古典的プラグマティズムの「可謬主義と反懐疑主義の両立」という点に着目し、先述の共著で議論を展開した。またブランダムについては、専門のパース研究者からは評判がよくないパースの宇宙論についてブランダムが一定の評価を与えている点について、それがどのような現代的な意義をもつのかということを考察中である。それは (3) とも関連しており、自然科学、特に物理学と化学において世界の構造や秩序が次々に明らかになっていくで、はたして現代において形而上学や宇宙論をやることに意味はあるのかという問題を考察している。研究に対する自己評価としては、パース、ジェイムズといった古典的プラグマティズムが背景にしている世界観の解明については、ある程度の道筋がついてきたものの、それを現代の議論へどのようにつなげていくかという点ではまだ十分ではなく、今後の課題としたい。

d 研究業績

(1) 書籍出版物

[共著] 荻野弘之、山本芳久、大橋容一郎、本郷均、乗立雄輝著『新しく学ぶ西洋哲学史』、ミネルヴァ書房、2022.11.30、
(担当箇所：第 19 章「論理学革命前夜の英語圏の哲学」pp.270-284、第 20 章「分析哲学の誕生と展開」pp.285-302、第 21 章「多様化する英語圏の哲学」pp.303-330)

(2) 論文

[学術雑誌]「古典的プラグマティズムにおける〈主観性/客観性〉」、日本哲学会編『哲學』、74 号、pp.50-63、2023.4.1

(3) その他各種論著

[会議報告等]「現実性の問題をめぐって」、哲学会編『哲学雑誌』第 136 巻、第 809 号、2022.10、pp.125-127

(4) 講演・口頭発表等

[シンポジウム・ワークショップ パネル (指名)]「古典的プラグマティズムにおける〈主観性/客観性〉」、学協会シンポジウム「プラグマティズムの再検討 新たな〈主観性/客観性〉に向けて」における提題、日本哲学会第 81 回大会、九州大学伊都キャンパス、2022.5.22

[シンポジウム・ワークショップ パネル (指名)]「知性、理性、そして感性」、乗立雄輝、日本感性工学会大会、東京都江戸川区船堀、日本感性工学会、2023.11.22

[口頭発表]「プラグマティズムと批判的常識主義」、第 19 回「常識と啓蒙研究会」、オンライン開催、2022.11.13

[その他] ワークショップ「パンデミックと哲学——生と医療、そして死——」コーディネーター、哲学会第 62 回研究発表大会、2023.10.28

(5) 共同研究・競争的資金等の研究課題

「偶然性概念の哲学史的・概念史的研究：現代の諸課題の再文脈化の試みへ向けて」、乗立雄輝、学術研究助成基金助成金：23K25256、独立行政法人日本学術振興会

e その他

(1) 非常勤講師

聖心女子大学、2015～2022

東京女子大学、2019～

京都大学文学部 (集中講義)、2023.9

(2) 学会・委員活動

[所属学協会]

哲学会、1992.4～

日本哲学会、1994～

日本科学哲学会、1994～

日本記号学会、1994～

日本ホワイトヘッド・プロセス学会、2003～

ハイデガー・フォーラム、2006～

日本感性工学会、2010～

アメリカ哲学フォーラム、2014～

Charles Sanders Peirce Society, 1996～

[委員歴]

日本哲学会、編集委員 2023～

日本ホワイトヘッド・プロセス学会、理事 2019～

日本感性工学会、理事 2015～

アメリカ哲学フォーラム、企画・編集委員 2014～

05 倫理学

教授 **熊野 純彦** KUMANO, Sumihiko

1. 略歴

1981年3月	東京大学文学部第1類（文化学類・倫理学専修）卒業（文学士）
1983年3月	東京大学大学院人文科学研究科倫理学専攻修士課程終了（文学修士）
1983年4月	東京大学大学院人文科学研究科倫理学専攻博士課程進学
1986年3月	東京大学大学院人文科学研究科倫理学専攻博士課程単位取得退学
1986年4月	跡見学園女子大学文学部非常勤講師 ～1989年3月
1987年4月	日本学術振興会特別研究員 ～1989年3月
1989年4月	専修大学文学部非常勤講師 ～1990年3月
1990年4月	北海道大学文学部哲学科倫理学講座助教授
1995年4月	北海道大学文学部人文科学科倫理学講座助教授（学部改組による）
1996年10月	東北大学文学部哲学科倫理学講座助教授
1997年4月	東北大学文学部人文社会科学科哲学講座助教授（学部改組による）
2000年4月	東北大学大学院文学研究科哲学講座助教授（大学院重点化による）
2000年10月	東京大学大学院人文社会系研究科助教授
2007年10月	東京大学大学院人文社会系研究科教授
2023年3月	退職

2. 主な研究活動

a 専門分野

倫理学原理論・近現代西欧倫理思想

b 研究課題

倫理学的諸概念の哲学的考察

c 概要と自己評価

主たる研究は、一方ではドイツ観念論から現代の現象学的・解釈学的哲学をはじめとする思想史的研究をふまえながら、倫理学的諸問題を「人のあいだ」に根ざし、「人のあいだ」にかかわる問題群として思考することである。この数年は、現在の共同的な生を枠づけている資本制の問題にあらためて関心をいだき、かつて発表した『マルクス 資本論の思考』および『マルクス 資本論の哲学』に引きつづき、考察を継続しているほか、サルトルとカントの研究にかかわる成果を発表した。

d 研究業績

(1) 書籍出版物

[単著]『サルトル 全世界を獲得するために』、熊野純彦、講談社、単行本（学術書）、2022.12、251p

(2) その他各種論著

[翻訳] カント『人倫の形而上学 第一部 法論の形而上学的原理』、熊野純彦[訳]、岩波文庫、2024.1、482p

e その他

(1) 学会・委員活動

[所属学協会] 日本倫理学会

[所属学協会] 日本哲学会

1. 略歴

- 1984 年 3 月 お茶の水女子大学文教育学部哲学科卒業（倫理学専攻）
- 1984 年 4 月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程入学（倫理学専門課程）
- 1986 年 3 月 同 修了
- 1986 年 4 月 東京大学大学院人文科学研究科博士課程進学（倫理学専門課程）
- 1991 年 3 月 同 単位取得退学
- 1991 年 4 月 山口大学人文学部日本思想史学講座専任講師
- 1994 年 3 月 東京大学大学院人文科学研究科において博士号（文学）を取得
- 1995 年 7 月 山口大学人文学部日本思想史学助教授
- 1996 年 4 月 お茶の水女子大学文教育学部哲学科助教授（倫理学専攻）
- 2007 年 4 月 お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科准教授（比較社会文化学専攻思想文化学コース）
（改組に伴う配置換え）
- 2011 年 1 月 同 教授
- 2013 年 4 月 東京大学大学院人文社会系研究科教授
- 2018 年 4 月 放送大学客員教授
- 2024 年 3 月 退職

2. 主な研究活動

a 専門分野

倫理学原理論・日本倫理思想史・比較思想

b 研究課題

日本思想の倫理学的考察

c 概要と自己評価

倫理学の中心問題である「何をなすべきか」という行為に対する問いを、その基盤となる「人は何であるのか」「世界は何であるのか」という存在の問いにまで遡って考えることを目指す。研究方法としては、日本語で書かれたテキストの思想構造を解明することを通じて、その世界観、人間観を検討するとともに、背後にあるコンテキストも探る。具体的には、聖徳太子、最澄、空海、道元、法然、親鸞、日蓮などの日本仏教の思想を中心として、日本思想を幅広く扱っている。特に、和辻哲郎の倫理学、倫理思想史の方法について検討し、「間柄の倫理学」には収まらない超越との関係という側面から、新たな日本倫理思想史の構築を目指す。また、和辻倫理学の対抗軸として、現在、日本民俗学の諸思想家（柳田國男、折口信夫など）について研究を進めている。

なお、これまでの研究は、個別思想家を中心対象としてきたが、今後は、それらを踏まえて新たな日本倫理思想史の構築に関する研究を進めていく。

d 主要業績

(1) 書籍出版物

[共著] 『Zen e le altre tradizioni religiose a confronto』、Mitsuko Yorizumi, A cura di Anna Maria Shinnyo Marradi, Ikuko Sagiyama, Aldo Tollini, 「Il significato della pratica tra le montagne di Dōgen: il rapporto tra il mondo secolare e le montagn（道元における山林修行の意義―世俗世界と山との関係）」、Mimesis Editone、単行本（学術書）、2022、〈pp.201-205 担当〉

[共著] 村瀬雅俊編『自然の覚知 生命の調和と循環』、『仏教の自然の捉え方とその表現 道元を視座として』、ナカニシヤ出版、pp. 68-96、2024.3

[単著] 『原典で読む日本の思想』、放送大学教育振興会、ISBN9784595324499、全 336 頁、2024.3

(2) 論文

[学術雑誌] 「板橋勇仁『こわばる身体がほどけるととき 西田幾多郎『善の研究』を読み直す』を読んで」、頼住光子、『立正大学哲学会紀要』第 18 号、立正哲学会、pp. 17-27、2023.3

[学術雑誌] 「道元研究の新たな視点」、頼住光子、『比較思想研究』49 号、pp.26-28、2023.3

[学術雑誌] 「折口信夫における仏教」、頼住光子、『文化と哲学』第 39 号、静岡哲学会、pp.1-17、2023.7

(3) 講演・口頭発表等

- [口頭発表(招待・特別)]「道元における悟りの表現としての「詩」について —『正法眼蔵』「梅華」巻をてがかりとして考える」、頼住光子、シンポジウム”Zen come ideale di vita e dell’arte” III Convegno international, Firenze, Associazione Culturale Centro Zen Firenze, Tempio Sōtō Zen Shinnyoji, 2022.4.3
- [公開講演、セミナー、チュートリアル、講習、講義等]「仏教思想の基礎」、頼住光子、「青年のための仏教講座」、善光寺大本願、道心会、2022.6.11
- 「道元と分析アジア哲学：総括とコメント」、頼住光子、大会シンポジウム「道元と分析アジア哲学」、比較思想学会、2022.6.18
- [シンポジウム・ワークショップ パネル(指名)]「現代の身体と西田哲学——板橋勇仁著『こわばる身体がほどけるとき』を手掛かりにして——」、頼住光子、シンポジウム、立正大学哲学会、2022.10.9
- [口頭発表(招待・特別)]「折口信夫における仏教」、頼住光子、静岡大学哲学会、2022.11.3
- [公開講演、セミナー、チュートリアル、講習、講義等]「道元思想——「自他」観をめぐる一考察(京都大学未来創成学国際研究ユニット・異分野対話『仏教哲学と精神医学の対話』)、頼住光子、京都大学未来創成学国際研究ユニット・異分野対話『仏教哲学と精神医学の対話』、2022.12.21
- [公開講演、セミナー、チュートリアル、講習、講義等]『『選択本願念仏集』の基本思想」、頼住光子、道心会「青年のための仏教講座」、講演会、善光寺大本願、2023.4.22
- [公開講演、セミナー、チュートリアル、講習、講義等]「道元禅」、頼住光子、シンポジウム「中国禅から道元禅へ——石井修道先生傘寿記念研究討論会」、頼住光子、駒澤大学中央講堂、2023.10.28
- [口頭発表(招待・特別)]「世界哲学と仏教—中世日本仏教の視座から—」、頼住光子、哲学会第62回研究大会、シンポジウム「世界哲学」という視点」、東京大学本郷キャンパス、2023.10.29
- [口頭発表(招待・特別)]『『正法眼蔵』「梅華」巻をめぐる一考察—道元による天童如浄の詩偈の解釈をめぐる—」、頼住光子、愛知学院大学禅研究所研究会／比較思想学会東海地区研究例会、愛知学院大学、2023.12.1
- [口頭発表(招待・特別)]『『正法眼蔵』の思想構造」、頼住光子、山梨祖道会研修会講師、Zoomミーティング、2024.3.28

e 社会活動

(1) 社会貢献活動

[講師] 朝日カルチャーセンター(新宿) 講師

(2) 学術貢献活動

[企画立案・運営等] 比較思想学会50周年記念大会・記念事業の企画運営

[企画立案・運営等] 日本仏教総合研究学会例会の企画運営

[査読] 日本倫理道德教育学会

f その他

(1) 非常勤講師

慶応大学文学部、法政大学文学部、お茶の水女子大学文教育学部、上智大学文学部

(2) 学会・委員活動

[所属学協会] 日本倫理学会、日本思想史学会、比較思想学会、日本仏教総合研究学会、実存思想協会、印度学仏教学会、日本宗教学会、日本倫理道德教育学会、日本道德教育学会

[委員歴] 日本倫理学会会長、比較思想学会会長、日本思想史学会評議員、日本仏教総合研究学会理事、実存思想協会理事、印度学仏教学会評議員、日本宗教学会評議員、日本倫理道德教育学会理事、文化審議会委員

(3) その他

[研究員] 日本学術振興会学術システム研究センター専門研究員

1. 略歴

- 1998 年 4 月 東京大学教養学部 文科三類入学
2002 年 3 月 東京大学文学部思想文化学科 倫理学専修課程卒業
2002 年 4 月 東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻 倫理学専門分野修士課程入学
2005 年 3 月 同 修了
2005 年 4 月 東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻 倫理学専門分野博士課程進学
2008 年 3 月 同 単位取得退学
2008 年 4 月 日本学術振興会特別研究員 (PD) (～2011 年 3 月)
2011 年 2 月 博士号 (文学) 取得 (東京大学)
2013 年 4 月 新潟大学人文社会・教育科学系 准教授 (～2017 年 3 月)
2015 年 4 月 放送大学 客員准教授
2017 年 4 月 専修大学文学部 准教授 (～2019 年 3 月)
2019 年 4 月 東京大学大学院人文社会系研究科 准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

倫理学原理論・近現代西欧倫理思想

b 研究課題

言語、心、行為をめぐる諸概念の倫理学的考察

c 概要と自己評価

英語圏とドイツ語圏における近現代の哲学・倫理学全般を研究しているが、特に重点を置いて取り組んでいるのはルートヴィヒ・ウィットゲンシュタインである。彼の思考の全体像を把握する試みを中心軸に据えつつ、主に倫理学的関心の下で、関連する言語論や心の哲学、行為論といった分野に関する研究も展開している。その方向性は大きく分けて、ウィットゲンシュタインの「以後」と「以前」に分かれる。「以後」に関しては、主にドナルド・デイヴィッドソン、スタンリー・カヴェル、バーナード・ウィリアムズといった、ウィットゲンシュタインの影響を受けた英語圏の哲学者・倫理学者の思考を検討している。「以前」に関しては、ゲーテ、ショーペンハウアー、カール・クラウスといった人物がウィットゲンシュタインに与えた影響および相違と、そこから見えてくる視角を追っている。

また近年では、運と道德の相克、また、懐疑論と実在論の相克という大枠の問題圏をめぐって、古代から現代に至る倫理思想史全体を振り返る作業も進めている。

d 研究業績

(1) 書籍出版

- [共著]『くじ引きしませんか？：デモクラシーからサバイバルまで』、瀧川裕英 古田徹也 岡崎晴輝 坂井豊貴 飯田高、第1章「くじ引きは（どこまで）公正なのか——古代と現代における空想的事例をめぐって」、信山社、単行本（学術書）、2022.5、232p〈pp.3-59 担当〉
- [共著]『絶版本』、古田徹也 伊藤亜紗 藤原辰史 佐藤卓己 荒井裕樹 小川さやか 隠岐さや香 原武史 西田亮介 稲葉振一郎 荒木優太 辻田真佐憲 畑中章宏 工藤郁子 榎木英介 山本貴光 吉川浩満 読書猿 岸本佐知子 森田真生 ドミニク・チェン 赤坂憲雄 斎藤美奈子 鷲田清一、「なんのメッセージもない言葉」、柏書房、単行本（一般書）、2022.9、232p〈pp.17-24 担当〉
- [単著]『このゲームにはゴールがない：ひとの心の哲学』、古田徹也、筑摩書房、単行本（学術書）、2022.10、304p
- [共著]『英米哲学の挑戦：文学と懐疑』、勢力尚雅 古田徹也 吉川孝 佐藤岳詩、「第12章、第13章、第14章、第15章」、放送大学教育振興会、教科書、2023.3、259p〈pp.189-248 担当〉
- [単著]『謝罪論：謝るとは何をすることなのか』、古田徹也、柏書房、単行本（学術書）、2023.10、303p
- [共著]『人生の意味の哲学入門』、森岡正博 蔵田伸雄 村山達也 鈴木生郎 杉本俊介 吉沢文武 長門裕介 久木田水生 古田徹也 山口尚、「第九章」、春秋社、単行本（一般書）、2023.12、320p〈pp.209-237 担当〉
- [共著]『汚穢のリズム：きたなさ・おぞましさの生活考』、酒井朋子 奥田太郎 中村沙絵 福永真弓 オスカー・レン 古田徹也 原口剛 比嘉理麻 市原佐都子 斎藤喬 藤原辰史 井上菜都子 高田冬彦 石内都、「浄化する——ライブニッツのドイツ語改良論」、左右社、単行本（学術書）、2024.1、iv, 285p〈pp.88-95 担当〉

(2) 論文

[学術雑誌]「意志・幸福・神秘—前期ウィットゲンシュタインにおける「倫理的なもの」をめぐる—」、古田徹也、『哲学』2022 巻 73 号、pp.83-95、2022.4.1

(3) その他各種論著

[総説・解説(その他)]「ウィットゲンシュタイン哲学の「新しい」相貌」、古田徹也、ピエール・アド『ウィットゲンシュタインと言語の限界』(合田正人訳)、pp.147-178、2022.6

[総説・解説(商業誌)]「特集「この論文がすごい」序文、論評」、古田徹也、『フィリカル』7 巻 2 号、pp.66-77、2022.8

[総説・解説(商業誌)]「言葉の歴史を辿り直す意義」、古田徹也、『Voice』537 号、pp.155-161、2022.8

[総説・解説(商業誌)]「ト占の偶然性を持つ意味」、古田徹也、『マイカレンダー(My Calendar)』、15 号、pp.56-57、2022.9

[書評・文献紹介等]「社会心理学に誘う最良の授業」、古田徹也、『ちくま』2023 年 2 月号、623 号、pp.22-23、2023.1

[総説・解説(商業誌)]「「すみません」の奥行き」、古田徹也、『ニューサポート高校 国語』、40 巻、pp.8-9、2023.9

[総説・解説(その他)]「「内側」と「外側」に引き裂かれる観点：新装版への解説①「道徳における運の問題」」、古田徹也、『新装版 コウモリであるとはどのようなことか』、pp.279-286、2023.12

[書評・文献紹介等]「哲学が始まる場所へ——熊野純彦『西洋哲学史 古代から中世へ／近代から現代へ』」、古田徹也、『図書』、901 号、pp.12-13、2024.1

[総説・解説(商業誌)]「謝罪する、とは」、古田徹也、Bunkamura Production 2024『ハザカイキ』、2024.3

(4) 講演・口頭発表等

[口頭発表(招待・特別)]「懐疑論が意味するもの：ウィットゲンシュタイン、スタンリー・カヴェル」、古田徹也、筑波大学人文学類文化講演会、茨城県、筑波大学人文学類、2022.10.17

[口頭発表(招待・特別)]「「すみません」という言葉を哲学する」、古田徹也、日本医療コンフリクト・マネジメント学会第 12 回学術大会、日本医療コンフリクト・マネジメント学会、2023.2.5

[シンポジウム・ワークショップ パネル(指名)]「Paul Standish 教授の基調講演に対するコメント」、古田徹也、アメリカ哲学フォーラム第 9 回大会 学会企画"Good and evil: Political education and the future of the humanities"、アメリカ哲学フォーラム、2023.2.18

[公開講演、セミナー、チュートリアル、講習、講義等]「橋爪大輝著『アーレントの哲学』へのコメント」、古田徹也、公開合評会「アーレントの哲学：複数の人間的生」、立教大学池袋キャンパス(東京都)、科研費基盤研究(C)『批判版全集』の精査にもとづいたアーレントの思想形成過程の解明(21K00100)(研究代表者梶山学園大学・三浦隆宏)、2023.11.26

(5) 共同研究・競争的資金等の研究課題

[科学研究費助成事業]「「人生の意味」と死の形而上学：分析実存主義の可能性とその批判的検討」、藏田伸雄 森岡正博 村山達也 久木田水生 古田徹也 鈴木生郎 八重樫徹 吉沢文武 杉本俊介、基盤研究(B)：20H01175、日本学術振興会、北海道大学、2020.4～2024.3

[科学研究費助成事業]「スコットランド常識学派からプラグマティズムへ—英米思想における常識哲学の研究」、大谷弘 古田徹也 一ノ瀬正樹 片山文雄 石川敬史 乗立雄輝 青木裕子 佐藤空 野村智清、基盤研究(B)：20H01181、日本学術振興会、東京女子大学、2020.4～2025.3

[科学研究費助成事業]「「嘘」の実験心理学的分析を援用して倫理原則を「正義」から「善」へと組み替える試み」、栗原隆 古田徹也 白井述、挑戦的研究(萌芽)：20K20678、日本学術振興会、新潟大学、2020.7～2023.3

[科学研究費助成事業]「思想史研究による「内面—外面」図式の再考に基づく、「心」概念の探究枠組みの刷新」、古田徹也、挑戦的研究(萌芽)：22K18446、日本学術振興会、東京大学、2022.6～2025.3

[科学研究費助成事業]「近代以降の日本における「幸福」概念の特性の解明、およびその学際的・国際的応用」、古田徹也、基盤研究(B)：23H00558、日本学術振興会、東京大学、2023.4～2027.3

e 社会活動

(1) 社会貢献活動

[取材協力] インターネット「【インタビュー】「嫁」は絶対ダメ、「パートナー」ならオールOK?」、うにくえ、カオナビ、2022.4.21

[取材協力] インターネット「【インタビュー】「個性」や「多様性」、言い換えるならどんな言葉?」、うにくえ、カオナビ、2022.4.28

- [取材協力] 新聞・雑誌「【インタビュー】人生はギャンブル!?: 哲学は運をどう考えてきたか」、kotoba、集英社、2022年7月号、19-25 頁、2022.6.6
- [講師] セミナー・ワークショップ「人生にとって運とは何か」、かわさき市民アカデミー、神奈川県、2022.6.23
- [講師] セミナー・ワークショップ「暮らしの中の言葉を哲学する」、三鷹市民大学、三鷹市スポーツと文化財団、東京都、2022.6.24
- [取材協力] 新聞・雑誌「【インタビュー】共感を呼ぶ言葉は生活の「場」から生まれる」、公明、公明党機関紙委員会、第201号、29-35 頁、2022.9.1
- [講師] セミナー・ワークショップ「他者の心についての懐疑論」、スズケン市民講座、NHK 文化センター青山教室、東京都、2022.10.29
- [取材協力] 新聞・雑誌「【インタビュー】ままならない「運」との向き合い方を倫理学に学ぶ」、Works、リクルートワークス研究所、第176号、「人事のアカデミア」、48-51 頁、2023.2
- [寄稿] 新聞・雑誌「地域の多様性に目を向ける」、熊本日日新聞、熊本日日新聞社、4 面、2023.4.2
- [出演] テレビ・ラジオ番組「こねくとゼミナール」、こねくと、TBS ラジオ、2023.4.20
- [寄稿] 新聞・雑誌「教員の質を下げる「改革」」、熊本日日新聞、熊本日日新聞社、4 面、2023.5.7
- [取材協力] その他「【インタビュー】「自然」と「人為」の間で——「哲学する」とはどういうことか」、アレ★Club、Vol. 12、8-39 頁、2023.5.21
- [取材協力] 新聞・雑誌「【インタビュー】「同調圧力に頼るのか」他罰と共感」、高知新聞、高知新聞社、1 面、2023.6.4
- [寄稿] 新聞・雑誌「見直したい本末転倒な風習」、熊本日日新聞、熊本日日新聞社、9 面、2023.6.4
- [講師] セミナー・ワークショップ「ウィトゲンシュタイン入門」、三鷹市民大学、三鷹市スポーツと文化財団、東京都、2023.6.9～16
- [取材協力] 新聞・雑誌「【インタビュー】半透明を受け入れる」、週刊文春、文藝春秋、第65巻第24号（2023年6月29日号）、42 頁、2023.6.29
- [寄稿] 新聞・雑誌「マイナカードと説明責任」、熊本日日新聞、熊本日日新聞社、8 面、2023.7.2
- [講師] 出前授業「人間に自由意志はあるのか?: リベットの実験をめぐって」、奈良県立奈良高等学校、東京都、2023.8.3
- [寄稿] 新聞・雑誌「慎みたい安易なカタカナ語」、熊本日日新聞、熊本日日新聞社、8 面、2023.8.6
- [出演] インターネット「今を生きる上で必要な哲学」、2Sides、NewsPicks、2023.8.28、
<https://newspicks.com/movie-series/86?movieId=2770>
- [寄稿] 新聞・雑誌「AI 技術に身を委ねる前に」、熊本日日新聞、熊本日日新聞社、8 面、2023.9.3
- [取材協力] 新聞・雑誌「【インタビュー】哲学と文学が重なるとき——ひとの心はわかるか」、すばる、集英社、2023年10月号、92-99 頁、2023.9.6
- [寄稿] 新聞・雑誌「科学技術活用に潜むリスク」、熊本日日新聞、熊本日日新聞社、5 面、2023.10.1
- [出演] テレビ・ラジオ番組「相次ぐ企業や政治家などによる謝罪～謝るとは何をすることなのか?」、荻上チキ・Session、TBS ラジオ、東京都、2023.10.9
- [取材協力] 新聞・雑誌「【インタビュー】他者の心をめぐる哲学的探求」、tattva、株式会社ブートレグ、第9号、20-29 頁、2023.10.10
- [取材協力] 新聞・雑誌「【インタビュー】じっくりくる言葉を探して」、WORKSIGHT [ワークサイト]、コクヨ株式会社、21 号、113-128、2023.10.20
- [講師] セミナー・ワークショップ「後期ウィトゲンシュタイン入門」、朝日カルチャーセンター、オンライン開催、2023.10.23～12.25
- [パネリスト、取材協力] インターネット「中学入試では著者がうなるほどの難問も」、朝日新聞 EduA「今春、中高大59校の入試に使われた「いつ哲」を読む①」、朝日新聞社、2023.10.24
- [取材協力] 新聞・雑誌「【インタビュー】旧ジャニーズ会見の何がダメ? 古田徹也さんが語る「謝罪」論」、毎日新聞夕刊「特集ワイド」、毎日新聞社、2 面（特集ワイド）、2023.10.24
- [パネリスト、取材協力] インターネット「中学入試に頻出のテーマが満載」、朝日新聞 EduA「今春、中高大59校の入試に使われた「いつ哲」を読む②」、朝日新聞社、2023.10.25
- [パネリスト、取材協力] インターネット「小学生のうちに多様な読書体験を」、朝日新聞 EduA「今春、中高大59校の入試に使われた「いつ哲」を読む③」、朝日新聞社、2023.10.26
- [パネリスト、取材協力] インターネット「難しくなっていく中学入試への疑問と期待」、朝日新聞 EduA「今春、中高大59校の入試に使われた「いつ哲」を読む④」、朝日新聞社、2023.10.27

[取材協力] 会誌・広報誌「【インタビュー】対話型人工知能に頼ることの何が問題なのか」、公明、公明党機関紙委員会、2023年11月号（通巻215号）、50-55頁、2023.11.1

[寄稿] 新聞・雑誌「共存目指す人手不足対策を」、熊本日日新聞、熊本日日新聞社、9面、2023.11.5

[出演] インターネット「謝罪を深掘りする!」、深掘TV Ver.2、一般社団法人VOICE、2023.11.16

[取材協力] 新聞・雑誌「【インタビュー】「ちゃんと謝る」とはどういうことなのか? 曖昧な「謝罪」の実態に迫る異色の一冊」、週刊プレイボーイ、集英社、2023年12月4日号「“本”人襲撃」、145-146頁、2023.11.28

[講師] セミナー・ワークショップ「人事リーダーのための知の探索サロン特別企画——「運との遭遇」について古田先生と探求する」、人事リーダーのための知の探索サロン、リクルートワークス研究所、東京都、2023.11.30

[寄稿] 新聞・雑誌「熊本に見る「共生」の在り方」、熊本日日新聞、熊本日日新聞社、8面、2023.12.3

[取材協力] 新聞・雑誌「【インタビュー】撤回すれば済む風潮 危うい」、朝日新聞（石川県版、富山県版、福井県版）、朝日新聞デジタル、朝日新聞社、2023.12.12

[寄稿] 新聞・雑誌「「発言の撤回」などできない」、熊本日日新聞、熊本日日新聞社、10面、2024.1.7

[取材協力] インターネット「【対談】怒られた時のダメな謝り方とは? 「良い謝罪」と「悪い謝罪」の違いを研究者に聞いてみた」、マイナビ転職「ミーツキャリア (MEETS CAREER)」、株式会社はてな、2024.1.11

[出演] インターネット「ビジネス用語から社会を読み解く。私たちと言葉の関係」、SmartHR「WEDNESDAY HOLIDAY (ウェンズデイ・ホリデイ)」、株式会社ミックスゾーン、2024.1.17

[出演] インターネット「謝罪とは? 言葉や態度だけではわからない、謝ることの表と裏」、SmartHR「WEDNESDAY HOLIDAY (ウェンズデイ・ホリデイ)」、株式会社ミックスゾーン、2024.1.24

[取材協力] 新聞・雑誌「【インタビュー】大人の遊びと会社の余白の哲学」、RMS Message、株式会社リクルートマネジメントソリューションズ、第73号（2024年2月号）、特集「仕事における余白と遊び」、16-18頁、2024.2

[講師] 講演会「「謝罪」を哲学する」、自主講座、宮崎公立大学、宮崎県、2024.2.3

[寄稿] 新聞・雑誌「軽んじられる「言葉の責任」」、熊本日日新聞、熊本日日新聞社、9面、2024.2.4

[取材協力] 新聞・雑誌「【対談】精読と身体: AIには教えられない知」、中央公論、中央公論新社、第138巻第3号（通巻1684号、2024年3月号）、80-89頁、2024.2.9

[取材協力] 新聞・雑誌「【インタビュー】「待つ」努力をした対話は、表現と生活を豊かにする」、聖教新聞、聖教新聞社、3面、2024.2.26

[取材協力] 新聞・雑誌「【対談】生きる意味を問うとき、私たちは何を考えているのか」、現代思想、青土社、第52巻第4号（2024年3月号）8-22頁、2024.2.27

[寄稿] 新聞・雑誌「文化を守り続けていくには」、熊本日日新聞、熊本日日新聞社、8面、2024.3.3

(2) 学術貢献活動

[企画立案・運営等、パネル司会・セッションチェア等] 学会・研究会等「共通課題「ケア」」、日本倫理学会、神奈川大学みなとみらいキャンパス、神奈川県、2023.10.1

f その他

(1) 学会・委員活動

[所属学協会] 日本倫理学会、2005.4～

[所属学協会] 日本哲学会、2006.5～

[所属学協会] 実存思想協会、2017.10～

[所属学協会] 哲学会、2018.11～

[所属学協会] 比較思想学会、2021.6～

[委員歴] 日本倫理学会、評議員、2019.4～、常任評議員、2022.12～

[委員歴] 日本哲学会、評議員、2021.4～、理事、2023.4～

[委員歴] 比較思想学会、評議員、2021.6～、編集委員、2022.6～、理事、2023.7～

06 宗教学宗教学

教授 池澤 優 IKEZAWA, Masaru

1. 略歴

1982年3月	東京大学文学部I類宗教学宗教学専門課程卒業
1982年4月	東京大学大学院人文科学研究科宗教学宗教学専攻修士課程入学
1984年3月	東京大学大学院人文科学研究科宗教学宗教学専攻修士課程修了
1984年4月	東京大学大学院人文科学研究科宗教学宗教学専攻博士課程進学
1987年9月	ブリティッシュ・コロンビア大学アジア学科大学院博士課程（カナダ・ヴァンクーバー）入学
1990年8月	東京大学大学院人文科学研究科宗教学宗教学専攻博士課程退学
1990年8月	筑波大学地域研究研究科文部技官、哲学思想学系準研究員就任
1993年4月	筑波大学地域研究研究科（哲学思想学系）助手昇進
1994年5月	ブリティッシュ・コロンビア大学アジア学科大学院博士課程修了
1995年4月	東京大学大学院人文社会系大学院宗教学宗教学研究室助教授転任
2007年4月	同准教授（名称変更）
2009年4月	同教授
2011年4月	東京大学大学院人文社会系研究科死生学・応用倫理センター長（兼任）（～2023年3月）
2024年3月	定年退職

2. 主な研究活動

a 専門分野

中国古代宗教研究、祖先崇拜研究、死生学研究、生命倫理研究、環境倫理研究、応用倫理研究

死者にかかわる思想、表象、儀礼を比較文化的視点から考察することを中心的な目的とし、その目的の下に具体的な研究テーマを以下のように設定する。(A)「死者性」という概念（我々が死者をどのような存在として認識しているのか、また我々が死者とどのような関係を持っているのか、死者に対するイメージと記憶）をキーワードとして、宗教・世俗の枠を越えた死生学を構築することを目指した上で、具体的研究対象として、(B) 古代中国における死ならびに死者に対する観念と儀礼の背後にある宗教的宇宙観と救済論、歴史を明らかにすること、(C) 現代の死生学・生命倫理をめぐる言説の中に、死と死者に関わる考え方がどのように反映しているかを明らかにすること、という二つを設定し、その上で (D) 伝統的な宗教的な価値観や感覚が、宗教という形態をとらずに現代社会に浸透している様を考えることを目指している。

b 研究課題

具体的な研究課題は以下のように区分できる。

まず、「死者性」概念に基づく死生学研究（上記 (A)）にかかわる分野として

- (1) 死生学の研究史とその理論構築、および死生学の比較文化論的研究。
- (2) 祖先崇拜の理論研究ならびに比較文化的研究。

次に、中国古代における死ならびに死者に関する研究（上記 (B)）にかかわる分野として

- (3) 殷・周・春秋時代の出土文字資料（甲骨・金文）を用いた中国古代宗教研究。
- (4) 戦国・秦・漢時代の出土文字資料（簡牘・帛書）を用いた中国古代宗教研究。
- (5) 戦国・秦・漢時代の儒家の「孝」文献に関する研究。
- (6) 戦国・秦・漢時代の儒家文献を用いた葬送儀礼、祖先祭祀研究。
- (7) 漢代の墓葬文書（告地策・鎮墓文・画像石・墓碑）に関する研究。
- (8) 殷周～隋唐時代における「死者性」の変化をあとづける宗教史学的研究。

現代の死生学・生命倫理に関する研究（上記 (C)）として

- (9) 死生学言説の学説史的研究
- (10) 生命倫理言説の学説史的研究。
- (11) 特に東アジアにおける死生学と生命倫理の文化性に関する研究。

伝統的価値観の現代における浸透の研究（上記（D））として

（12）応用倫理という領域に宗教が与えている影響に関する研究。

c 概要と自己評価

上記の（2）（3）（4）（5）（6）（7）（8）の研究を体系的に論述する著書、（9）（10）（11）（12）の研究成果をまとめた著書を出版した。

d 研究業績

（1）書籍出版物

〔単著〕『古代中国における「死者性」の転倒——戦国秦漢期中国における死生観の変遷』、池澤優、汲古書院、単行本（学術書）、2024.3.25、867p

〔単著〕『東アジアの死生学・応用倫理へ』、池澤優、東方書店、単行本（学術書）、2024.6、520p

（2）その他各種論著

「現代台湾の礼儀師による葬送儀礼—生死学の葬儀改革論との関係において—」、池澤優、『東京大学宗教学年報』XXXIX（巻39）、2022.3.31

「台湾ホスピスケアの死生学研究—趙可式のあきらめるという積極的な生き方」、池澤優、『死生学・応用倫理研究』第28号、2023.3.25

教 授 藤 原 聖 子 FUJIWARA, Satoko

1. 略歴

1986年 3月	東京大学文学部宗教学宗教史学専門課程 卒業
1986年 4月	東京大学大学院人文科学研究科宗教学宗教史学専攻修士課程 入学
1988年 3月	東京大学大学院人文科学研究科宗教学宗教史学専攻修士課程 修了
1988年 4月	東京大学大学院人文科学研究科宗教学宗教史学専攻博士課程 進学
1991年 9月	シカゴ大学大学院ディヴィニティ・スクール宗教史専攻留学（至1994年6月）
1995年 12月	東京大学大学院人文科学研究科宗教学宗教史学専攻博士課程単位取得退学
1996年 1月	日本学術振興会特別研究員（至1998年12月）
2001年 4月	大正大学文学部国際文化学科助教授
2006年 4月	大正大学文学部表現文化学科教授
2010年 4月	大正大学文学部人文学科教授
2011年 4月	東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻宗教学宗教史学専門分野准教授
2017年 4月	同教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

宗教学（理論研究・比較研究）、宗教と教育の関係、北米の宗教

宗教学の基礎でありながら、20世紀後半以降、方法として成立し難くなった「比較」に注目し、その観点から理論研究を行うとともに、ケーススタディでは宗教と教育の関係、世界宗教史記述を対象としている。さらに、宗教学史についても国際宗教学宗教史学会（IAHR）と宗教現象学の関係史について議論を活性化させ、国際学会のあり方・日本のアカデミアの関わり方についての問題提起を試みている。

b 研究課題

宗教比較の方法、宗教史の記述について、学界ならびに一般社会に見られる問題とその背景・原因を洗い出し、具体的対案を提示することを課題とする。個々の課題設定は以下の通りである。

（1）比較理論の検討として、①欧米宗教学の変遷、②宗教分類概念の問題、③宗教に対する代替概念の問題をとりあげる。

- ①「比較宗教学 comparative religion」から出発した欧米の宗教学とその基礎前提が、その後通時的・実証的研究を重視することによってどのように変化したかを調べる。人文的宗教学と社会科学的宗教学の制度的位置関係についても、その歴史的変遷過程を明らかにする。特に 20 世紀の比較宗教研究の代名詞であった、宗教現象学の受容と変容について共同研究を行い、その成果を IAHR をめぐる現在の論争に反映させる。
- ②「世界宗教」「民族宗教」の対概念をはじめ、宗教学で伝統的に用いられてきた宗教分類概念の妥当性を、昨今の批判理論に照らして検討する。
- ③ 2000 年代以降の宗教現象を分析するために、ポスト・セキュラー論・概念がしばしば用いられるようになったが、それは日本の現状をとらえるのにどこまで有効かを検討する。
- (2) (1)の発展形として、マクロ理論や体系的研究が国内外の宗教研究分野においてどのように新たに試みられているかを調査し、その特徴を 20 世紀の宗教研究の諸理論に照らして明らかにし、可能性や問題点を吟味する。また、翻って今日的観点から従来の理論・理論史の理解・評価を再検討する。
- (3) 近現代社会の公教育において宗教がどう扱われてきたかに関する歴史的研究を行う。
ある国の公教育では宗教が排除される、他の国では宗教が取り込まれるという現象を、単に「宗教教育の有無」や「政教分離の有無」として見るのではなく、排除・吸収どちらの場合でもその前提として公権力により「宗教」が定義されていることに注目し、各国の教育制度と法令・教科書の中にその表れを探る。一般概念としての「宗教」のみならず、キリスト教、仏教といった各宗教に関する記述と、教育方法・思想や当該国の宗教・社会情勢の関係を調べる。
- (4) (3)の研究成果を踏まえ、国内の公教育における宗教の描き方・教え方に関する問題点を指摘し、改善のための具体的方策を示す。対象は中等教育から高等教育、社会人教育を含む。

c 概要と自己評価

上記の (1)については編著 1 冊を刊行、論文を 1 点発表した他、国際学会で基調講演、招待講演、国内学会でパネルを 2 回オーガナイズし発表を行った。さらに、2023 年 12 月に国際宗教学宗教史学会の理事会 (International Committee Meeting)・特別会議を東京に招致・オーガナイズし、プロシーディングスを作成し、それに基づく論文集 (国際共編著)の制作にとりかかった。2022~23 年度はロシアによるウクライナ侵攻、安倍元首相銃撃事件が起これ、これらは宗教学者や宗教学会に少なからぬ影響を与えた。そのアクチュアルで複雑な状況に応答することが(1)の取り組みに加わり、発表と学会の運営を並行して行った。(2)については論文を寄稿した他、国内外の学会で 4 回発表した。(3)(4)については、インタビューを行った他、国際共著用に論文を 2 点、提出済みだが全体の刊行が遅れている。

d 研究業績

(1) 書籍出版物

[編者]『日本人無宗教説—その歴史から見えるもの』、筑摩書房、単行本 (学術書)、2023.5.18、272p

(2) 論文

[大学研究機関紀要]「宗教「学」をめぐる論争の変遷と現在—国際学会のアイデンティティ・ポリティックス」、『東京大学宗教学年報』40 巻、pp.1-22、2023.4.5

[学術雑誌]「国際宗教学宗教史学会 (IAHR) 報告—二〇二三年国際委員会東京開催に向けて」、『宗教研究』97 巻 1 号、pp.174-181、2023.6.30

(3) その他各種論著

[総説・解説 (学術雑誌)]「宗教学に基づく宗教教育の必要性」、ティム・イェンセン (インタビュー)、藤原聖子 (解題・聞き手・翻訳)、『現代宗教 2024』、pp.295-313、2024.1.31

[総説・解説 (学術雑誌)]「宗教心理学と宗教学の連携のために」、『宗教／スピリチュアリティ心理学研究』2 巻、pp.1-6、2024.3.31

(4) 講演・口頭発表等

[口頭発表 (招待・特別)]「日本では「過激主義」はどこにあるのか? そして「危険」は?」、日仏におけるイスラームと政治的・社会的価値観、オンライン、2022.7.9

[シンポジウム・ワークショップ パネル (オーガナイザー・チェアー)]「宗教史の中の IAHR と宗教現象学」、日本宗教学会第 81 回学術大会、オンライン (愛知学院大学)、2022.9.10

[口頭発表 (招待・特別)]“Getting out of a proxy war: History and locality of the Japanese religious studies academy and Buddhist studies,” Interpreting Japan Interpreting Buddhism, University of Chicago, Chicago, 2022.10.17

[口頭発表 (レスポンス)]「アニミズムは地球を救うか?」、ハルオ・シラネ氏講演会 人間と非一人間の取引関係から考える人文環境学、東京大学文学部、2022.11.26

[口頭発表 (基調)]“Practicing Belonging, Vicarious Spirituality and Gendered Fetishism: The Transformation of the Non-

religious/Religious in Contemporary Japanese Youth Culture,” International Society for the Sociology of Religion (ISSR), Taipei, 2023.7.5

[シンポジウム・ワークショップパネル (チェア)] “Global/World Humanities,” CIPSH International Conference, “Humanities in the Global and Digital Age: The role of Humanities research traditions and interactions in contemporary society,” University of Tokyo, 2023.8.23

[口頭発表 (一般)] “Lessons learned or not learned: How scholars have reacted to recent anti-cultism in Japan,” 20th Conference of the European Association for the Study of Religions, Vilnius, 2023.9.5

[口頭発表 (一般)] 「還元主義 VS 反還元主義論争からこぼれ落ちていたもの」、日本宗教学会第 82 回学術大会、東京外国語大学、2023.9.10

[シンポジウム・ワークショップ パネル (オーガナイザー・チェア)] 「宗教現象学と認知進化科学の対話—理解の学と説明の学の架橋」、日本宗教学会第 82 回学術大会、東京外国語大学、2023.9.10

[口頭発表 (招待・特別)] 「宗教学者は宗教と政治の問題をどう論じてきたか」、日本政治学会研究大会、明治大学、2023.9.16

[シンポジウム・ワークショップ パネル (指名)] 「海外における人文社会系基礎データの収集・公開状況」、総合知における人文・社会科学の役割と評価、オンライン、日本学術会議第一部人文・社会科学の役割とその振興に関する分科会 第一部人文・社会科学基礎データ分科会、2023.9.23

[シンポジウム・ワークショップ パネル (指名)] 「AI 時代の宗教と宗教学」、AI 時代における哲学・美学・倫理学・宗教学、オンライン、日本学術会議哲学委員会、2023.11.25

(5) 共同研究・競争的資金等の研究課題

「宗教現象学の形成と論争に関するトランスナショナル・ヒストリー」、藤原聖子、基盤研究 (B) : 20H01188、東京大学、2020.4.1～2024.3.1

e 社会活動

(1) 学術貢献活動

[その他] Bloomsbury Series Advances in Religious Studies, International Editorial Board, 2023.5.1～

[企画立案・運営等、パネル司会・セッションチェア等] 大会・シンポジウム等「IAHR Special Conference “Can the IAHR be engaged and relevant without being political or confessional?: The position of ‘science (Wissenschaft)’ in 2023”」、日本宗教学会、東京大学、2023.12.16～17

[その他] *Religion*, Editorial Board Member, 2024.2.1～

f その他

(1) 非常勤講師

東北大学文学研究科、集中、2022.9

(2) 学会・委員活動

[委員歴] International Association for the History of Religions, Executive Committee, 2010.8～、Secretary General, 2020.8～、*Numen*, Editorial Board Member, 2010.8～

[委員歴] 日本宗教学会、理事、2011.4～、常務理事、2019.9～、会長、2023.9～

[委員歴] 日本学術会議、連携会員、2019.10～

[委員歴] 日本宗教研究諸学会連合、幹事、2014.12～

[委員歴] 一般財団法人公正研究推進協会、教材査読委員、2019.3～

[委員歴] International Council for Philosophy and Humanistic Studies (CIPSH)、Executive Committee、2020.12～、Global History of the Humankind プロジェクト委員、2020.12～

[委員歴] 文化庁宗務課、宗教法人審議会委員、2022.4～

1. 略歴

1997年3月	東京大学文学部思想文化学科宗教学宗教史学専修課程 卒業
1997年4月	東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻宗教学宗教史学専門分野修士課程 入学
1999年3月	東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻宗教学宗教史学専門分野修士課程 修了
1999年4月	東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻宗教学宗教史学専門分野博士課程 進学
2001年4月	日本学術振興会特別研究員 DC2（東京大学、至2003年3月）
2002年3月	東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻宗教学宗教史学専門分野博士課程 単位取得退学
2003年4月	日本学術振興会特別研究員 PD（九州大学、至2004年3月）
2004年4月	鹿児島大学法文学部人文学科助教授
2007年4月	鹿児島大学法文学部人文学科准教授
2012年9月	ハワイ大学マノア校歴史学科客員研究員・米国国務省東西センター太平洋諸島開発プログラム 客員研究員（フルブライト奨学金研究員プログラム、至2013年2月）
2013年4月	東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻宗教学宗教史学専門分野准教授
2019年4月	東京大学大学院人文社会系研究科文化資源学研究専攻兼任

2. 主な研究活動

a 専門分野

宗教史学・宗教人類学・宗教民俗学・慰霊・死者儀礼の継承、日本と太平洋域の宗教文化

主な研究活動は大きく以下の3つのテーマ群についてである。

（A）戦争や災害による犠牲者に対する態度、（B）現代の地域社会における宗教生活と日常生活の関係性、（C）島嶼と半島におけるダイナミックな人的交流と宗教接触、（D）世俗的空間における宗教性の表出

b 研究課題

具体的な研究課題は以下のとおりである。

(1) 「(A) 戦争や災害による犠牲者に対する態度」に関わる研究

遺骨収集・戦地慰霊において、遺族や戦友といった戦死者を取り巻く直接的関係者ばかりではなく、宗教者・旅行者・行政といった第三者がどのように関与するかをめぐる問題と、次世代へどのように継承されようとしているかをめぐる問題について調査・考察を行っている。その際、日本人による遺骨収集や戦地慰霊の状況と米豪や太平洋諸島の状況との国際比較、次世代継承に関する宗教体験の伝承や宗教組織の継承などとの比較、戦地慰霊に関する聖地巡礼との比較を行っている。

(2) 「(B) 近現代の地域社会における宗教生活と日常生活の関係性」に関わる研究

九州をおもなフィールドとして、近現代の地域社会のなかで人びとがどのような信仰実践や宗教的行為を行ったかについて、そうした実践を支える日常生活とともに調査・考察している。とりわけ、民俗社会を基盤とした地域が、戦争や公害、自然災害などの歴史的経験からのレジリエンス（回復力）をどのように発揮しているかということについて、博士論文で取り上げた長崎の原爆慰霊を視野に入れながら考察しようとしている。

(3) 「(C) 島嶼と半島におけるダイナミックな人的交流と宗教接触」に関わる研究

奄美群島とミクロネシア地域を主な対象としながら、大航海時代以降のヨーロッパ人のグローバルな移動に端を発する人的交流の活発化のなかで宗教的接触状況が地域の宗教性のあり方にどのような影響を及ぼしているのかについて比較宗教的な理解を目指している。

(4) 「(D) 世俗的空間における宗教性の表出」に関わる研究

博物館・美術館における宗教的文物の展示をめぐる社会関係と、世俗的な戦争博物館・平和資料館等における慰霊・追悼の側面の考察を通して、ミュージアムという世俗的空間において、現代人の宗教性がどのように表出しているのか（あるいはしていないのか）を考察しようとしている。

c 概要と自己評価

(1)は博士論文の研究課題の延長上にあるものだが、対象地域の拡大と継承という宗教学的テーマへの深化を図りつつある状況である。2010～12年度に代表を務めた科研費基盤研究と、2012年度に滞在したハワイ大学での研究によっ

て研究内容も研究ネットワークもさらなる展望が開けつつある。その成果を踏まえ、2023 年度には鹿児島県伊仙町（徳之島）にて、東京大学・鹿児島大学・済州大学・サラエボ大学からの参加学生たちと国際ユースキャンプを開催した。

(2)(3)はさまざまな研究プロジェクトへの関わりから徐々に輪郭が浮かびつつある、ポスト博士論文の研究テーマであるが、モノグラフや翻訳の作業を重ねて体系化を図っているところである。将来的には九州を窓口としてアジア・太平洋域を視野に入れた日本宗教史の構想につなげようとするものである。

(4)は、共著の論文集におけるモノグラフを数本刊行したが、2019 年度から兼任となった文化資源学と連携しつつ、ヴァナキュラー宗教研究の視点も組み込みながら、今後の積極的に進展めざしている。

d 研究業績

(1) 書籍出版物

[共編者]『シリーズ戦争と社会 5 変容する記憶と追悼』、蘭信三 石原俊一ノ瀬俊也 佐藤文香 西村明 野上元 福岡良明 田村 恵子 岡田泰平 中山郁 李榮眞 直野章子 木村豊 中村理香 坂井田夕起子 石井弓 北村毅 栗津賢太 大川史織、「総説「戦争を記憶し、戦争死者を追悼する社会とそのゆくえ」、コラム③「戦後天皇と慰霊―「靖国型追悼路線」からの展開」、岩波書店、単行本（学術書）、2022.4、xv、241p（pp.1-16, 164-168 担当）

[分担執筆]『占領改革と宗教―：連合国の対アジア政策と複数の戦後世界』、中野毅 平良直 栗津賢太 井上大介、「第3部第3章「ミクロネシアにおける米軍占領期・国際連合信託統治前期の宗教政策」、専修大学出版局、単行本（学術書）、2022.9.2、688p（pp.533-557 担当）

[分担執筆]『ヴァナキュラー・アートの民俗学』、菅豊編、「第9章「お地蔵さまにマフラーを―ヴァナキュラー・アートによる信仰実践」、東京大学出版会、単行本（学術書）、2024.3.25、324p（pp.207-222 担当）

(2) 論文

[学術雑誌]「Applying Religious Studies Discourse during Wartime: On Katō Totsudō's Discussion of Religious War」、Akira Nishimura、『Religions』、2022.6.10

(3) その他各種論著

「戦没者慰霊と紀元節：三笠宮崇仁にとっての軍隊と学問―戦争社会学の可能性」、西村明、『思想』1177号、pp.91-103、2022.5

(4) 講演・口頭発表等

[口頭発表（一般）]「Vernacular Attitudes toward Remains in Japan: Considering Historic Cultural Background of the Politicization」、Akira Nishimura、International Conference, "Actions for the Missing: Scientific and Vernacular Forms of War Dead Accounting", Amsterdam、NIOD Institute for War, Holocaust and Genocide Studies、2022.6.8、2022.6.8～9

[シンポジウム・ワークショップ パネル（公募）]「Reconsidering the Public Sphere of Memory in Japan: Focusing on the Muenbotoke Concept」、Akira Nishimura、The 13th Engaging With Vietnam Conference、Ho Chi Ming City、Engaging With Vietnam Organization、2022.10.27、2022.10.25～28

[公開講演、セミナー、チュートリアル、講習、講義等]「私たちの生をふちどる宗教史」、西村明、上智大学キリスト教文化研究所 第50回連続講演会「現代社会の分断と宗教／カルト―大学生における＜生存＞の危機と救い」、東京、上智大学キリスト教文化研究所、2023.6.10

[シンポジウム・ワークショップ パネル（公募）]「Japanese pilgrimages to Asia-Pacific battlefields through "war-phase environment complex"」、Akira Nishimura、EASJ2023: 17th International Conference of the European Association of Japanese Studies、Ghent、European Association of Japanese Studies、2023.8.19、2023.8.17～20

[公開講演、セミナー、チュートリアル、講習、講義等]「Religions and Wars in Tokunoshima, Amami Archipelago」、Akira Nishimura、The 1st Tokunoshima International Youth Camp、Isen Town、Research Center for Advanced Science and Technology Open Laboratory for Emergence Strategies (ROLES) of the University of Tokyo、2024.1.29、2024.1.28～2.2

[公開講演、セミナー、チュートリアル、講習、講義等]「Roles of Religion in Contemporary Japan」、Akira Nishimura、Public Lecture at Faculty of Political Sciences、Sarajevo、Research Center for Advanced Science and Technology Open Laboratory for Emergence Strategies (ROLES) of the University of Tokyo、2024.2.29

(5) 共同研究・競争的資金等の研究課題

[科学研究費助成事業]「日本軍兵士の世界観の分析―兵士の手記を通して、Analysis of Mental Structure of Japanese Soldiers: Through Soldiers' Notes」、青木秀男 西村明、基盤研究（C）：18K01989、日本学術振興会、特定非営利活動法人社会理論・動態研究所、2018.4～2023.3

[科学研究費助成事業]「ヴァナキュラー概念を用いた文化研究の視座の構築―民俗学的転回のために―」、菅豊 西村明 塚原伸治 川田牧人 宮内泰介 俵木悟 加藤幸治 島村恭則 河野正治 松岡薫、基盤研究（B）：22H00767、日本学術振興会、東京大学、2022.4～2025.3

e 社会活動

(1) 学術貢献活動

[その他] 「Bloomsbury Series in Religious Studies in East Asian Religions, Editorial Board」、2019.9～

[企画立案・運営等] 公開講演等「The 1st Tokunoshima International Youth Camp」、東京大学先端科学研究センター創発戦略研究オープンラボ (ROLES)、鹿児島県伊仙町、2024.1.28～2.2

[企画立案・運営等] 大会・シンポジウム等「Public Symposium “Religious Organisations and Their Transformation in the Time of Crisis”」、東京大学先端科学研究センター創発戦略研究オープンラボ (ROLES)、Faculty of Political Sciences, University of Sarajevo、2024.2.28

f その他

(1) 非常勤講師

東北学院大学 文学部 (集中、2020.9～現在)

東京藝術大学 音楽学部 (集中、2021.9～現在)

立正大学大学院 文学研究科 (2023.4～現在)

京都大学 文学部・大学院文学研究科 (集中、2023.9)

(2) 学会・委員活動

[委員歴] 西日本宗教学会、運営委員 (2010.7～現在)、『西日本宗教研究誌』編集委員 (2011.3～2014.3、2022.3～2024.3)

[委員歴] 戦争社会学研究会、『戦争社会学研究』編集委員 (2020.4～2022.4)

[委員歴] 宗教文化教育推進センター、運営委員 (2014.4～現在)

[委員歴] 日本宗教学会、理事 (2016.9～現在)、『宗教研究』編集委員長 (2020.9～2024.9)

[委員歴] 国際宗教研究所、理事 (2020.6～2024.6)

[委員歴] 一般財団法人自然環境研究センター、評議員 (2022.9～現在)

准教授 **渡辺 優** WATANABE, Yu

1. 略歴

2000年4月	東京大学教養学部文科Ⅲ類 入学
2002年4月	東京大学文学部思想文化学科宗教学宗教史学専修課程 進学
2004年3月	東京大学文学部思想文化学科宗教学宗教史学専修課程 卒業
2004年4月	東京大学大学院人文社会系研究科宗教学宗教史学専門分野修士課程 入学
2007年3月	東京大学大学院人文社会系研究科宗教学宗教史学専門分野修士課程 修了
2007年4月	東京大学大学院人文社会系研究科宗教学宗教史学専門分野博士課程 進学
2009年4月	日本学術振興会特別研究員 (DC2) (東京大学、～2011年3月)
2010年6月	サントル・セーヴルーパリ・イエズス会神学部 (日本学術振興会優秀若手研究者海外派遣事業 (第二回) による海外派遣、～2011年3月)
2011年9月	フランス国立社会科学高等研究院 (EHESS) 博士課程 入学
2011年9月	フランス政府給費留学生 (フランス国立社会科学高等研究院、～2013年7月)
2012年7月	東京大学大学院人文社会系研究科宗教学宗教史学専門分野博士課程 単位取得退学
2012年8月	東京大学大学院次世代人文学開発センター研究員 (～2013年3月)
2014年4月	天理大学人間学部宗教学科 専任講師
2014年11月	博士 (文学)、東京大学
2015年4月	フランス国立社会科学高等研究院 (EHESS) 博士課程 退学
2019年4月	東京大学大学院人文社会系研究科 准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

宗教史・靈性史、神秘主義、現代宗教思想・宗教哲学

17 世紀フランスを中心に、近世西欧カトリック圏に興隆した「神秘主義 (la mystique)」と呼ばれる思想潮流を研究している。①西洋の靈性史を広く見渡しつつ近世神秘主義文献を吟味することを軸として、②近代的な神秘主義論の問い直しと「神秘主義」の思想史的再定位、③近現代宗教思想と神秘主義の接点をテーマに研究を進めている。

b 研究課題

(1) 近世西欧神秘主義研究

17 世紀フランス神秘主義、ジャン＝ジョゼフ・スュラン研究を軸としながら、同時代に輩出した神秘家・靈性家たちのテキスト解釈を通じてその思想的ダイナミズムを掘りあげること。(2)や(3)のテーマとの関連を意識し、とくに言語、信仰、経験、身体、女性、靈といった鍵概念を焦点として近世神秘主義の思想史的射程を明らかにすること。

(2) 「神秘主義」の思想史的再定位

19 世紀以降宗教学の重要概念となった「神秘主義 (mysticism)」の歴史性を検討し、近代神秘主義論を相対化すること。また、「神秘」をめぐる思想や実践の変遷を西洋古代以降の靈性史に内在しつつ辿り、系譜学的観点から神秘主義という知のありかたを立体的に捉えるとともに、狭義のキリスト教神学や靈性に留まらない思想史のなかに神秘主義を再定位すること。

(3) 近現代宗教思想と神秘主義の接点 (脱近代主義的な宗教論の探究)

「宗教離れ」や「神の死」が叫ばれる近現代にあつて、宗教や信仰の条件をラディカルに問いなおす思想がしばしば神秘主義と接点をもつことを論点化し、神秘主義を「他なるもの」を語ろうとする知として捉えなおすこと。より具体的には、現代的神秘主義研究の出発点となったミシェル・ド・セルトールのテキストをポスト近代の宗教論として解釈すること。また、近代日本に発生した民衆宗教思想 (天理教) を脱近代主義的な観点から再解釈すること。

c 概要と自己評価

(1)(2)については、2021 年より 5 年間の科研費の研究課題として採択され、長期的見通しの下に研究を進めているところだが、成果の要となる査読付き論文 2 本を発表した。また、古代から現代に至る神秘主義の系譜を概観する単著を準備中である。加えて、中世から近世にかけての西欧神秘主義の展開を主題とする国際研究集会での発表に向けて準備を進めている。(3)については、とくに近年国際的に研究が進むセルトールについて、分担者として加わった科研究研究会、また国際シンポジウムで発表を重ね、共編著にも論文を発表した。セルトールの主著の翻訳も刊行に向けて進めている。また、新たにフーコーの靈性論・神秘主義論に取り組み始めた。

d 研究業績

(1) 書籍出版物

[共編者]『カトリック的伝統の再構成』、伊達聖伸 渡辺優 田中浩喜 江川純一 加藤久子 渡部奈々 西脇靖洋 小川浩之 渡邊千秋、勁草書房、2024.1、x、320、ii p

(2) 論文

[学術雑誌]「スュランにおけるパウロ——進る靈のことば」、渡辺優、『パトリスティカ』26 号、pp.42-65、2023.9.30

[学術雑誌]「神秘主義研究の新地平——身体、女性、靈のことば」、渡辺優、『宗教研究』97 (3) 巻 408 号、pp.1-25、2023.12

(3) その他各種論著

[書評]「坪光生雄 著『受肉と交わり—チャールズ・テイラーの宗教論』勁草書房、二〇二二年」、渡辺優、『週刊読書人』3476 号、p.4、2023.2.10

[書評]「古荘匡義 著『綱島梁川の宗教哲学と実践 (龍谷大学国際社会文化研究所叢書)』法蔵館、二〇二二年」、渡辺優、『宗教哲学研究』41 巻、pp.87-91、2024.3

(4) 講演・口頭発表等

[口頭発表 (一般)]「神秘的経験の系譜学に向けて——新たな神秘主義理解のために」、渡辺優、日本宗教学会第 81 回学術大会、2022.9.11

[口頭発表 (一般)]「第四の人、あるいは？——イエズス会士セルトールと危機の時代の教会論」、渡辺優、科学研究費補助金 (基盤 A)「西洋社会における世俗の変容と「宗教的なもの」の再構成——学際的比較研究」A 班第 7 回研究会、2022.12.28

[口頭発表 (一般)]「宗教概念批判以降の神秘主義研究あるいは靈性史研究の可能性——ミシェル・フーコーの主体性論と靈性 (スピリチュアリティ) 論からの展望」、渡辺優、龍谷大学国際社会文化研究所「宗教概念批判以降の宗教研究に基づく人間性の探究」プロジェクト研究会、2023.3.6

[口頭発表 (一般)] 『『西洋における宗教と世俗の変容』第一巻『カトリック的伝統の再構成』総論試論』、伊達聖伸 渡辺優、科学研究費補助金 (基盤 A) 「西洋社会における世俗の変容と「宗教的なもの」の再構成——学際的比較研究」A 班第 8 回研究会、2023.3.28

[口頭発表 (一般)] 「イエズス会士セルトーと危機の時代の教会論——「第三の人」(一九六六年)をめぐって」、渡辺優、科学研究費補助金 (基盤 A) 「西洋社会における世俗の変容と「宗教的なもの」の再構成——学際的比較研究」A 班第 9 回研究会、2023.7.28

[口頭発表 (招待・特別)] 「Certeau le lecteur-auditeur des mystiques. A la recherche d'un murmure de l'Absent」、Yu Watanabe、Theological Colloquium: Dancing with the Absence. Rethinking Theology with Michel de Certeau、2023.10.12

(5) 共同研究・競争的資金等の研究課題

[科学研究費助成事業] 「西洋社会における世俗の変容と「宗教的なもの」の再構成—学際的比較研究」、伊達聖伸 渡辺優 見原礼子 木村護郎 クリストフ 渡邊千秋 加藤久子 西脇靖洋 小川浩之 安達智史 立田由紀恵 江川純一 佐藤香寿実 増田一夫 土屋和代 鶴見太郎 小川公代 井上まどか 佐藤清子、基盤研究 (A) : 20H00003、日本学術振興会、東京大学、2020.4～2024.3

[科学研究費助成事業] 「西欧神秘主義および経験・体験概念をめぐる系譜学的研究」、渡辺優、若手研究 : 21K12847、日本学術振興会、東京大学、2021.4～2026.3

e 社会活動

(1) 社会貢献活動

[寄稿] 会誌・広報誌 「「俗」へのまなざし」、aījali (アンジャリ)、親鸞仏教センター、2021.12

f その他

(1) 学会・委員活動

[委員歴] 日本宗教学会、評議員、2019.9～

[委員歴] 宗教哲学会、理事、2023.3～

07 美学芸術学

教授 小田部 胤久 OTABE, Tanehisa

1. 略歴

1977年3月 東京教育大学附属高等学校卒業
1977年4月 東京大学教養学部文科3類入学
1981年3月 東京大学文学部第一類（美学芸術学専修課程）卒業
1981年4月 東京大学大学院人文科学研究科（美学芸術学専門課程）修士課程入学
1984年3月 東京大学大学院人文科学研究科（美学芸術学専門課程）修士課程修了
1984年4月 東京大学大学院人文科学研究科（美学芸術学専門課程）博士課程進学
1988年9月 東京大学大学院人文科学研究科（美学芸術学専門課程）博士課程単位取得退学
（その間 1987年10月～1988年9月 DAAD（ドイツ学術交流会）奨学生としてハンブルク大学に留学）
1992年10月 東京大学大学院人文科学研究科において博士（文学）取得
1988年10月 神戸大学助教授，文学部（哲学科芸術学専攻課程）
（その間 1990年10月～1991年8月 ハンブルク大学で研究）
1993年10月～ 神戸大学大学院文化学（博士課程）兼任
1996年4月 東京大学大学院人文社会系研究科（美学芸術学専門課程）助教授
2007年4月 東京大学大学院人文科学研究科（美学芸術学専門課程）教授
（その間 2008年10月～2009年9月 ドイツ連邦政府の招聘によりドイツにて研究）
2024年3月 定年退職

2. 主な研究活動

a 専門分野

美学・芸術学の基本概念の研究、「感性の学」としての美学の歴史的再構成、18世紀から19世紀にかけてのドイツ語圏を中心とする美学理論の研究、20世紀前半におけるドイツと日本の美学交渉史の研究、および間文化的視点からの美学理論の構築

b 研究課題

2022年度から23年度にかけての研究課題は、基本的に20年度から21年度にかけての研究課題の継続である。

第一に、2001年に公開した『芸術の逆説——近代美学の成立』以来の研究の一環として、美学・芸術学の基本概念の研究に従事している。その一端は2009年に公開した『西洋美学史』（東京大学出版会）において示した。この書物は、学説史研究の持ちうる現代的な意味を問う試みでもあり、この研究をその後も継続して行っている。『芸術の逆説——近代美学の成立』『芸術の条件——近代美学の境界』が2024年8月に新装版として公開されるに伴い、研究をいかに新たな方向に展開するかについて、考察を加え、「新装版あとがき」においてまとめた。

第二に、近代美学を基礎づけた書物と一般に見なされているカント『判断力批判』への新たな接近を試みている。その一端は2020年に公開した『美学』において公表したが、さらに『判断力批判』第1部の訳出・訳註作業を進め、2024年10月に公開されることとなった。

c 概要と自己評価

上記四つの課題に関して、この2年間はとりわけ第二の課題に多くの時間を割き、美学の新たな教科書として『美学』を公開することができた。ただし、この書はかなり専門性を伴うものであるため、より多くの読者に開かれた教科書の必要性を自覚し、新たな教科書の作成に向けて準備を始め、それを以下の業績（1）にまとめた。

d 主要業績

(1) 書物

『西洋の美学・美術史』（宮下規久朗氏との共著）、放送大学教材、2024.3（11頁から133頁までを担当）

(2) 論文

『学術雑誌』「Kakuzô Okakura and Another Enlightenment in Early Twentieth-Century Japan」、Tanehisa Otabe、Dialogue and Universalism, Journal of the International Society for Universal Dialogue、32巻1号、pp.221-232、2022

[論文集(書籍)内論文]「D6(Dao) in the Practice of Art: Everyday Aesthetic Life in Japan Through the Japanese Tea Ceremony」、Tanehisa Otabe、Comparative Everyday Aesthetics: East-West Studies in Cotemporary Living, ed. by Eva K. W. Man and J. Petts, pp.169-182、2023

[大学, 研究機関紀要]「制作学的循環と解釈学的循環について: ロマン主義の一つの遺産」、小田部胤久、『美学芸術学研究』41 巻、pp.69-88、2023.3

[論文集(書籍)内論文]「Dialectic of the Aesthetic Power of Judgment」、Tanehisa Otabe、The Kantian Mind、pp.235-246、2023.6.22

[大学, 研究機関紀要]「見ることを学ぶ——ゲーテのディレクタンティズム論に寄せて」、小田部胤久、『美学芸術学研究』42 号、pp.85-113、2023.3

[学術雑誌]「美しいとはどういうことか? 世界との適合を改めて内から生きる」、小田部胤久、『現代思想』52 巻 1 号、pp.58-64、2024.1

(3) その他各種論著

[総説・解説(商業誌)]「古典に即した人文知(交遊抄)」、小田部胤久、『日本経済新聞』、p.40、2023.4.8

[書評, 文献紹介等]「亡霊・孤独・共生: 後期シュューベルトの魅力に迫る(堀朋平『わが友、シュューベルト』書評)」、小田部胤久、『週刊読書人』、p.3、2023.4.21

[書評, 文献紹介等]「特別対談『啓蒙思想の百科事典』をめぐる」、長尾伸一 上野大樹 小田部胤久 逸見龍生 武田将明、『日本18世紀学会年報』38 巻、pp.77-84、2023.6

[総説・解説(その他)]「文庫版解説——西洋文化の精華を今ここで問い直す試み」、小田部胤久、佐藤康邦著『絵画空間の哲学——思想史の中の遠近法』への解説、pp.325-337、2024.1

(4) 共同研究・競争的資金等の研究課題

[科学研究費助成事業]「美学の古典賦活のためのモデル構築」、小田部胤久、基盤研究(C): 20K00143、日本学術振興会、東京大学、2020.4~2024.3

[SSHRC(カナダ政府)助成事業]「環境美学」(共同企画者)、小田部胤久、カナダ政府 SSHRC、カナダ・メモリアル大学、2023.6~

e その他

(1) 学会・委員活動

[委員歴] 国際シェリング協会、委員、2010~

[委員歴] Internationale Schelling-Gesellschaft、Beirat、2010.10~

[委員歴] 日本ヘルダー学会、委員、2019.5~

[委員歴] 美学芸術学研究(韓国)、編集委員、2018.2~

[委員歴] Athenäum、編集委員、2018.4~

[委員歴] Karibi 編集委員、2020.11月~

[委員歴] Schelling-Studien、編集委員、2021.7~

[委員歴] Hybride Nachlass-Edition Schellings、委員、2023年~

1. 略歴

1983 年 3 月	東京大学文学部美学芸術学専修課程卒業
1983 年 4 月	同大学院総合文化研究科比較文学比較文化専門課程修士課程入学
1985 年 3 月	同修士課程修了
1985 年 4 月	同博士課程進学
1989 年 3 月	同博士課程単位取得退学
1989 年 4 月	和洋女子大学文家政学部英文学科専任講師
1994 年 4 月	和洋女子大学文家政学部英文学科助教授
1998 年 4 月	和洋女子大学人文学部国際社会学科助教授
2003 年 4 月	和洋女子大学人文学部国際社会学科教授
2008 年 4 月	和洋女子大学人文学群日本文学・文化学類教授
2015 年 4 月	東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

分析哲学、美学

b 研究課題

フィクションの存在論の研究から出発し、虚構文の論理構造の解明から論理学の「可能世界」概念の応用へ、そして「可能世界」概念そのものの論理の研究へと進んだ。その過程で、自然科学の「多世界」「多宇宙」の概念と「可能世界」との関係の考察を迫られ、それらの概念に立脚した「人間原理」を方法的基盤とした諸議論の中で哲学問題を再構成する仕事を進めた。現在は、芸術の現状に対して人間原理的（進化論的）な説明を与え、見かけの法則性を観測選択効果へ還元する論理を追求しつつ、多分野を横断する「諸理論のネットワーク」の中に芸術定義論および認識論・心の哲学を主としたカテゴリ論全体を位置付けるプロジェクトを進めている。

c 概要と自己評価

哲学問題を人間原理の観点から考察し直す仕事については、心の哲学、ロボット科学、人文死生学といった分野の研究者と研究会を重ねる中で、着実に思索が進みつつある。人間原理の観測選択効果の論理構造を多くの領域に見出す作業とともに、長年の研究テーマであるフィクション論の人間原理的再構成を進めつつある。

中心課題である「芸術の定義」については、150 種類以上にわたる既成諸説を検討する中で、自分独自の定義を結晶化させつつある。方法としては、「美学芸術学」という学問分野名称から察せられるような美的定義のアプリオリな優位性を前提し、美的定義に対する有力な二つの反証を再反駁する形で進めている。反証の一つは、美的関心、美的経験といった「美的」カテゴリというものは実在しないのではないか、という問題。もう一つは、コンセプチュアルアート、ソーシャリーエンゲージドアートのような「美的でない（知覚的属性に依拠しない、あるいは無関心性に反する）芸術」の存在である。この二つを一度に解決できる提案として、「志向性による定義」を提唱する。既成の美的定義のうち最も洗練されたバージョン「美的関心を満たす性能を持たせる意図をもって作られた人工物」の「意図」の部分、任意の志向性で置き換えるという提案である。これによって、芸術と美的カテゴリとの関係は、美的カテゴリの現実的存在を前提せずに済むようになり（志向的世界の中に実在しさえすればよい）かつ、志向された属性の肯定的形跡が制作物の中および周辺に見出されなくてもよいことになる（否定的もしくは他の関与的形跡があればよい）。この芸術定義は、実証的でありながら反証を免れた美的定義となるのみならず、心の哲学における「現象的判断のパラドクス」の有望な解釈を提供するという副産物を生みつつある。

なお、クリティカルシンキングの啓蒙的発信にも継続的に力を注いできたが、近年、複数のトピックをめぐってキャンセルカルチャーの動向に関する所見を適宜発表し、討論会なども催している。それらの大部分は以下の業績申告から省いたが、現場では極力、学術的成果を反映させるよう留意している。

d 研究業績

(1) 論文

"What is Gender as a Personal Identity?", JTILA, vol.46, 2022.8, pp.33-51

「美的対象としての第二次世界大戦」、『美学芸術学研究』第 40 号、2022.9、pp.91-124

"Two Arguments for Gender Attribution", JTILA, vol.47, 2023.6, pp.33-46

(2) 共同研究・競争的資金等の研究課題

[科学研究費助成事業]「疑似的事例の分析による「芸術の定義」の論理的・経験的研究」三浦俊彦、基盤研究 (C) : 18K00120、日本学術振興会、東京大学、2018.4～2023.3

[科学研究費助成事業]「道徳的行為者のロボットの構築による＜道徳の起源と未来＞に関する学際的探究」長滝祥司、基盤研究 (A) : 19H00524、日本学術振興会、中京大学、2019.4～2024.3

e 社会活動

(1) 社会貢献活動

「アカデミズムを蝕むトランスジェンダリズムの利権」、森奈津子編『人権と利権——「多様性」と排他性（月刊紙の爆弾 2023 年 6 月号増刊）』、鹿砦社、2023.5.23、pp.10-17

「大学でのセルフディフェンス（暴漢対策）を考える：自分の身を護るために」、荒井弘和×三浦俊彦、2023.7.5、法政大学スカイホール

(2) メディア報道

『トーク@セクシュアリティ No.001～010』、小原真紀子×三浦俊彦、『文学金魚』、2023.6.1、7.9、8.9-10、9.9、10.9、11.9、12.9、2024.1.9、2.9、3.9、<https://urlzs.com/uBdeP>

「ハードコア健康食品マニア」、『5PM Journal』、2024.3.27、<https://urlzs.com/udXQp>

f その他

(1) 著書外国語版

『藝術真的無用嗎？』（簡体字版）、三浦俊彦、郷和貴、spRachel 雷切爾（訳）、湖南美術出版社、2023.9.1、216p（原著『東大の先生！ 超わかりやすくビジネスに効くアートを教えてください！』、かんき出版、2020.4）

(2) 学会・委員活動

美学会、東部会会長、2019.10～2022.10

准教授 吉田 寛 YOSHIDA, Hiroshi

1. 略歴

1992 年 4 月	東京大学教養学部文科Ⅲ類入学
1996 年 3 月	同教養学部教養学科第一（表象文化論）卒業
1996 年 4 月	同大学院人文社会系研究科（美学芸術学専門分野）修士課程入学
1998 年 3 月	同修士課程修了、修士（文学）取得
1998 年 4 月	同博士課程進学
2005 年 10 月	同博士課程修了、博士（文学）取得
2006 年 4 月	東京大学大学院人文社会系研究科 助手
2007 年 4 月	東京大学大学院人文社会系研究科 助教
2008 年 4 月	立命館大学大学院先端総合学術研究科 准教授
2015 年 4 月	立命館大学大学院先端総合学術研究科 教授
2015 年 4 月	ロンドン大学ゴールドスミス校客員研究員（～2016 年 3 月）
2019 年 4 月	東京大学大学院人文社会系研究科 准教授
2022 年 3 月	ライプツィヒ大学客員教授（～2023 年 3 月）

2. 主な研究活動

a 専門分野

感性学、ゲーム研究

b 研究課題

1. 「感性学」の(再)構築。これまで基本的に「美と芸術の学」として展開されてきたエステティックス (aesthetics) を「感性の学」として再起動する。その際には、現在「感性」の研究に取り組んでいる他の学問分野の成果と蓄積を参照しなければならないと考えている。例えば人間工学や認知科学、脳科学、人工知能研究などがそこに含まれる。それらを架橋しながら人間の感性を探究する総合的な学として「感性学」を構想している。
2. 遊びとゲームの研究。われわれの感性が、つねに技術やメディアとの相互作用のもとで触発され、変化していることは言うまでもない。そして現代的な感性のあり方を理解するうえで最良の手がかりとなるのがデジタルゲーム(コンピュータゲーム、ビデオゲーム)である。ゲームプレイヤーの経験——空間、時間、運動、物語、虚構、ルール、競争、楽しさなど——を解明することで、感性の現代的条件が理解できる。その際には、最先端技術の結晶であるゲームを、「遊び」という、人類のより原初的で普遍的な活動の一種として理解する視点も必要になる。
3. メディアとデザインの研究。感性学はデザインの実践に学び、また再度そこに知見を差し戻す。デザインは、人と技術と社会の交わるところに成立する。文房具や食器のような「道具」から、自動車やコンピュータなどの「機械」、さらにはプロセスやサービスといった「実体のない」ものまで、あらゆるデザインは、われわれの内部(思考、感覚)と外部(物質世界、社会)を媒介するメディアである。そしてまたあらゆるメディアは、デザインされる。メディアとデザインをつなぐ、さまざまな理論と実践の探究を通して、感性学としてのエステティックスの現代的課題を検討し、来たるべき時代の技術と社会のあり方を構想したい。

c 概要と自己評価

上記研究課題の2と3にまたがるデジタルゲームの研究に、この二年間は引き続き注力した。インタラクティビティ、メタゲーミング、玩具としてのデジタルゲームがもつ物質性と身体性など、さまざまな視点と主題からゲームと遊びにアプローチした。またその成果を、単著『デジタルゲーム研究』(東京大学出版会、2023年9月)にまとめて公刊することができた。なおそのうちの一部は、2022年度に研究代表者として遂行した「デジタルゲームにおける没入(イマージョン)概念の美学的考察」(科学研究費基盤研究(C)、課題番号20K00123)、2023年度に研究代表者として遂行した「遊びとゲームの創造的機能についての美学的考察——メタゲームの事例を手がかりに」(科学研究費基盤研究(C)、課題番号23K00114)、2022年度に研究代表者として外国人特別研究員と共同で遂行した「リアルとは何か? 拡張した心の理論を通した都市と身体景観の探索」(特別研究員奨励費、課題番号22KF0072)の成果でもある。上記研究課題の1については、演劇やオペラの舞台・劇場空間を対象とする感性学的研究を行った。そのうちの一部は、2023年度に研究分担者として参加した「上演文化に関する「芸術化」の国際比較研究: 商品及び労働者としての演者を巡る諸問題」(研究代表者: 安田静(日本大学)、科学研究費基盤研究(B)、課題番号23K25291)の成果でもある。

d 研究業績

(1) 書籍出版物

『デジタルゲーム研究』、東京大学出版会、436p、2023.9.27

(2) 論文

吉田寛、「インタラクティビティ——定義・理論・論点」、東京大学美学芸術学研究室編『美学芸術学研究』第41号、pp.51-68、2023.3.22

Tadahiro Taniguchi, Takafumi Kato, Tasuku Mukumoto and Hiroshi Yoshida. "Symbol Emergence in Robotics: Semiotics for the Creation of Embodied Artificial Cognitive Systems." in: Amir Biglari (ed.). *Open Semiotics*. Vol. 4, Paris: L'Harmattan, pp. 559-571, 2023.6.22

吉田寛、「ヴァーグナーとギリシャ劇——〈巻き戻された過去〉としての未来の芸術」、日本ショーペンハウアー協会編『ショーペンハウアー研究』第28号、pp.49-55、2023.11.15

吉田寛、「メタゲーム的リアリズム——批評的プラットフォームとしてのデジタルゲーム」、楊駿驍・鄧劍・松本健太郎編『日中韓のゲーム文化論——なぜ、いま〈東アジア・ゲーム批評〉なのか』、新曜社、pp.182-208、2024.3.5

(3) その他各種論著

吉田寛、「東大教師が新入生にすすめる本」(柄谷行人『探究I』、多木浩二『ベンヤミン「複製技術時代の芸術作品」精読』、佐々木健一『美学辞典』、美学会編『美学の事典』)、『UP』594号、pp.20-21、2022.4.5

吉田寛、「RTAはゲームを再創造する」、『BANDIT』Vol.1、pp.46-53、2022.5.29

吉田寛、「編集後記」、日本音楽学会西日本支部『西日本支部通信』第21号(通巻121号)、p.9、2022.10.10

吉田寛、「編集後記」、日本音楽学会西日本支部『西日本支部通信』第22号(通巻122号)、p.7、2023.3.29

吉田寛、「編集後記」、日本音楽学会西日本支部『西日本支部通信』第23号(通巻123号)、p.11、2023.9.30

吉田寛、「ゲーム研究を極める 30 冊 〈1〉」、東京大学出版会、2023.10.11

(URL=<https://note.com/utpress/n/n9593786ddd66>)

吉田寛、「ゲーム研究を極める 30 冊 〈2〉」、東京大学出版会、2023.10.12

(URL=<https://note.com/utpress/n/n7c60be54b6ddf>)

吉田寛、「ゲーム研究を極める 30 冊 〈3〉」、東京大学出版会、2023.10.13

(URL=<https://note.com/utpress/n/na01b1beaa291>)

吉田寛、「ゲーム研究を極める 30 冊 〈4〉」、東京大学出版会、2023.10.14

(URL=<https://note.com/utpress/n/n966ba905decb>)

吉田寛、「ゲーム研究を極める 30 冊 〈5〉」、東京大学出版会、2023.10.15

(URL=<https://note.com/utpress/n/n3c9b2931ee1f>)

吉田寛、「編集後記」、日本音楽学会西日本支部『西日本支部通信』第 24 号（通巻 124 号）、p. 7、2024.3.1

(4) 講演・口頭発表等

国際、Hiroshi Yoshida, “Relocating Digital Game in the Tradition of Toy: Materiality and Physicality for Playful Experience,” Paper presented at Workshop on Digital Humanities, Linked Open Data and Games Research, Stuttgart Media University, Stuttgart, Germany, 2022.8.15

国際、Hiroshi Yoshida, “Game Studies as a Node of Multiple Disciplines and Methodologies,” Paper presented at the Department of Asian and Middle Eastern Studies, Stockholm University, Stockholm, Sweden, 2022.10.19

国内、吉田寛、「ゲームとはどういうものか？ いまなぜゲームが重要なのか？」、Art Collaboration Kyoto トークプログラム「ゲーム／アート／メディア」での分担発表、国立京都国際会館、京都、2022.11.18

国内、吉田寛、「デジタルゲームの感性学——遊びとメディアの現在形」、日本大学経済学部グローバル社会文化研究センター学術講演会、日本大学、東京、2022.11.21

国内、吉田寛、「ヴァーグナーとギリシャ劇——〈巻戻された過去〉としての未来の芸術」、シンポジウム「悲劇をめぐって——『悲劇の誕生』刊行 150 周年を記念して」での分担発表、日本ショーペンハウアー協会第 35 回全国大会、創価大学、東京、2022.12.10

国内、吉田寛、「玩具（おもちゃ）の伝統からデジタルゲームを捉え直す」、文化資源学会第 12 回博士号取得者研究発表および特別講演会、オンライン、2022.12.10

国際、Hiroshi Yoshida, “Aesthetics of Game,” Paper presented at Workshop “Aesthetics of Game: Lecture and Presentation on Computer Games and Art,” FRISE Künstlerhaus Hamburg, Hamburg, Germany, 2023.1.27

国際、Hiroshi Yoshida, “Rethinking Digital Games between Virtual and Physical: Japanese Video Games in the Tradition of Toys,” Paper presented at SOAS Centre for Translation Studies and SOAS Japan Research Centre, School of Oriental & African Studies (SOAS), London, United Kingdom, 2023.2.15

国際、Hiroshi Yoshida, “Between Virtual and Physical: Japanese Video Games in the Tradition of Toys,” Paper presented at Workshop: “Occupied by Play: Rethinking Reading and Learning in Japan,” Faculty of Asian and Middle Eastern Studies, University of Cambridge, Cambridge, United Kingdom, 2023.2.17

国際、Hiroshi Yoshida, “Digital Game as Toy: Rethinking Materiality and Physicality of Playing Experience,” Paper presented at Liège Game Lab, Université de Liège, Liège, Belgium, 2023.3.13

国際、Hiroshi Yoshida, “Rethinking Digital Games in the Toy Culture: Materiality and Physicality of Playing Experience,” Paper presented at Erasmus School of Philosophy, Erasmus Universiteit Rotterdam, Rotterdam, the Netherlands, 2023.6.20

国内、吉田寛、「《ゲームを遊ぶ》から《ゲームで遊ぶ》へ——メタゲーミングの創造性」、国際シンポジウム「ゲームスタディーズとクリエイションの現在」での分担発表、大阪電気通信大学、グランフロント大阪、大阪、2023.7.17

国内、吉田寛、「《ゲームを遊ぶ》から《ゲームで遊ぶ》へ——メタゲーミングの創造性」、ワークショップ「ゲームの美学」での分担発表、東京大学ゲーム研究室第一回研究会、東京大学本郷キャンパス、東京、2023.7.22

国際、Hiroshi Yoshida, “Current State of Game Studies in Japan: Focusing on Organizations and Publications,” Paper presented at the First Global Game Forum in Korea, Jeonju University, Jeonju, Korea, 2023.7.29

国内、吉田寛、「すべては遊びから始まる——ゲーム研究の現在地」、Day 3「感性に訴える美」、第 137 回（2023 年秋季）東京大学公開講座「科学と美」、東京大学本郷キャンパス、東京、2023.11.25

国内、吉田寛、「ゲーム研究のエッセンス——遊びとゲームから人間を考える」、第 9 回シリアスゲームジャム、日本大学理工学部駿河台キャンパス、東京、2024.3.6

国際、Hiroshi Yoshida, “Metagaming: Appropriative Creativity of Gaming Memes,” Paper presented at Cultural Meme-ing: The 24th Annual International Conference of Cultural Studies Association, National Taipei University of Education, Taipei, Taiwan, 2024.3.17

e 社会活動

(1) 社会貢献活動

コメンテーター、パネル4「音楽批評をまたぐ——19世紀末から20世紀前半のドイツ・フランスにおける批評実践」、表象文化論学会大会第17回大会、東京大学駒場キャンパス、東京、2023.7.9

司会、「ゲームとアートの現在を考える」、東京大学ゲーム研究室第二回研究会、東京大学本郷キャンパス、東京、2023.10.7

司会、研究発表2、表象文化論学会オンライン研究フォーラム2023、オンライン、2023.11.11

講師、吉田寛、「東大教授の授業を受けてみよう——子どもが大好きなゲームを通じて勉強の楽しさを発見!!」、京都市ひとり親家庭支援センター“ゆめあす”、京都、2024.1.28

コメンテーター、Day1「グローバルゲームジャム（GGJ）アフターイベント」、404 Game Community Days、渋谷サクラステージ、渋谷、東京、2024.2.10

コメンテーター、Day2「渋谷桜丘超内会@SSS/BLOOM GATE」、404 Game Community Days、渋谷サクラステージ、渋谷、東京、2024.2.11

コメンテーター、「ロボット能序説——ボローニャ大学芸術学科ラボでの実験を交えて」、東京大学ヒューマンティーズセンター第104回オープンセミナー、オンライン、2024.3.7

司会、2023年度美学会東部会特別講演、早稲田大学、東京、2024.3.9

司会およびコメンテーター、「なぜ、いま〈東アジア・ゲーム批評〉なのか——『日中韓のゲーム文化論』（新曜社、2024年）の刊行を機に」、東京大学ゲーム研究室第三回研究会、東京大学本郷キャンパス、東京、2024.3.11

(2) 学術貢献活動

国内、博士学位論文審査委員、九州大学大学院人文科学府、2022.2.22

国際、博士学位論文審査委員、リエージュ大学哲学・文学部、リエージュ、ベルギー、2022.6.22

国内、博士学位論文審査委員、中央大学文学研究科、2024.1.23

国際、博士学位論文審査委員、ライプツィヒ大学東アジア研究所日本学科、2023.5.22

(3) メディア報道

国内、吉田寛、「虚構と現実を越境するゲームインターフェイス」、「情報と遊び心のデザイン——ユーザーインターフェイスが変えるゲームと現実」での分担発表、ゲンロンカフェ、東京、2022.4.22

国内、吉田寛、代麻理子（司会）「ゲーム研究者のヨーロッパ滞在記」、YouTube「未来に残したい授業」、東京、2022.7.1（URL=<https://www.youtube.com/watch?v=52NUMxBAUJQ>）

国内、吉田寛、代麻理子（司会）「ゲーム研究とは（第一回）」、YouTube「未来に残したい授業」、東京、2022.7.12（URL=https://www.youtube.com/watch?v=_MAF7W0vreo）

国内、吉田寛、代麻理子（司会）「ゲーム研究とは（第二回）」、YouTube「未来に残したい授業」、東京、2022.7.25（URL=<https://www.youtube.com/watch?v=glnYgyIK9S4>）

国内、吉田寛、代麻理子（司会）「ゲーム研究とは（第三回）」、YouTube「未来に残したい授業」、東京、2022.8.24（URL=<https://www.youtube.com/watch?v=y52ViRICopE>）

国内、吉田寛、代麻理子（司会）「ゲーム研究とは（第四回）」、YouTube「未来に残したい授業」、東京、2022.9.21（URL=<https://www.youtube.com/watch?v=zamTTBedyP4>）

国内、吉田寛、代麻理子（司会）「ゲーム研究とは（第五回）」、YouTube「未来に残したい授業」、東京、2022.10.27（URL=<https://www.youtube.com/watch?v=zamTTBedyP4>）

国内、吉田寛、大関真之、代麻理子（司会）「知能とは何か、人間とは何か」、YouTube「未来に残したい授業」、東京、2022.11.28（URL=<https://www.youtube.com/watch?v=g8IgU5lfnN0>）

国内、藤田直哉、吉田寛、五百蔵容、代麻理子（司会）「『ゲームが教える世界の論点』（第一回）」、YouTube「未来に残したい授業」、東京、2023.1.24（URL=<https://www.youtube.com/watch?v=7Eey830z7zg>）

国内、藤田直哉、吉田寛、五百蔵容、代麻理子（司会）「『ゲームが教える世界の論点』（第二回）」、YouTube「未来に残したい授業」、東京、2023.3.6（URL=<https://www.youtube.com/watch?v=p2vQZwdH7s0>）

国内、吉田寛、ブルボン小林、さやわか、中村伊知哉「物語よりゲームの世界観 映画「スーパーマリオ」、ヒットの理由は」、日本経済新聞、夕刊文化、10面、2023.5.2

国内、藤田直哉、吉田寛、五百蔵容、代麻理子（司会）「『ゲームが教える世界の論点』（第三回）」、YouTube「未来に残したい授業」、東京、2023.5.19（URL=<https://www.youtube.com/watch?v=UVJziQ2QGKI>）

国内、藤田直哉、吉田寛、五百蔵容、代麻理子（司会）「『ゲームが教える世界の論点』（第四回）」、YouTube「未来に残したい授業」、東京、2023.6.26（URL=<https://www.youtube.com/watch?v=bm-0JtyNGbs>）

国内、藤田直哉、吉田寛、五百蔵容、代麻理子（司会）「『ゲームが教える世界の論点』（第五回）」、YouTube「未来に残したい授業」、東京、2023.7.25（URL=<https://www.youtube.com/watch?v=sMhiKQkGwiI>）

国内、吉田寛、藤田直哉、代麻理子（司会）「デジタルゲーム研究」、YouTube「未来に残したい授業」、東京、2023.9.13（URL=<https://www.youtube.com/watch?v=jdyhq9lUb6U>）

国内、吉田寛、小林信重、代麻理子（司会）「『デジタルゲーム研究』を読む（第一回）」、YouTube「未来に残したい授業」、東京、2023.10.16（URL=<https://www.youtube.com/watch?v=qyzgGJFOryI>）

国内、吉田寛、角田陽一郎「トークテーマ A：ゲーム研究という学問を創り出す楽しさ（AtoBtoC 知のエンタメトーク 012）」、YouTube「AtoBtoC 知のエンタメトーク」、東京、2023.10.30（URL=<https://www.youtube.com/watch?v=Ac-xyJTUwHo>）

国内、吉田寛、角田陽一郎「トークテーマ B：デジタルゲームの感性学 なぜスーパーマリオは横スクロールなのか？（AtoBtoC 知のエンタメトーク 012）」、YouTube「AtoBtoC 知のエンタメトーク」、東京、2023.10.31（URL=<https://www.youtube.com/watch?v=0JeB87TcCYk>）

国内、吉田寛、角田陽一郎「トークテーマ C：『自由』と『想像力』について問い続ける（AtoBtoC 知のエンタメトーク 012）」、YouTube「AtoBtoC 知のエンタメトーク」、東京、2023.11.1（URL=<https://www.youtube.com/watch?v=zOQg4n6e-Os>）

国内、吉田寛、五百蔵容、代麻理子（司会）「『デジタルゲーム研究』を読む（第二回）」、YouTube「未来に残したい授業」、東京、2023.11.27（URL=<https://www.youtube.com/watch?v=5kyRmX3D77Q>）

国内、吉田寛、田中 “hally” 治久、代麻理子（司会）「『デジタルゲーム研究』を読む（第三回）」、YouTube「未来に残したい授業」、東京、2023.12.20（URL=<https://www.youtube.com/watch?v=cZyTV4UvWIY>）

国内、吉田寛、谷口忠大、代麻理子（司会）「『デジタルゲーム研究』を読む（第四回）」、YouTube「未来に残したい授業」、東京、2024.1.30（URL=<https://www.youtube.com/watch?v=gYvMuhojOSI>）

国内、吉田寛、井上明人、代麻理子（司会）「『デジタルゲーム研究』を読む（第五回）」、YouTube「未来に残したい授業」、東京、2024.2.26（URL=<https://www.youtube.com/watch?v=A4sHMR7rpnM>）

国内、吉田寛、「世界サブカルチャー史 欲望の系譜」シーズン 4「21 世紀の地政学」ゲーム編、NHK、2024.3.9

国内、吉田寛、藤田直哉、代麻理子（司会）「『デジタルゲーム研究』を読む（第六回）」、YouTube「未来に残したい授業」、東京、2024.3.12（URL=<https://www.youtube.com/watch?v=tTqfyfNL8Ow>）

f その他

(1) 非常勤講師

国内、非常勤講師、東京藝術大学音楽学部、「美学」、2022.4.1～2024.3.31

国内、非常勤講師、國學院大学文学部、「美学・芸術学演習」、2022.4.1～2023.3.31

国内、非常勤講師、放送大学、「西洋音楽史」、2022.4.1～2024.3.31

国内、非常勤講師、上智大学文学部、「映像芸術の世界」、2022.9.21～2023.3.10

国際、客員教授、ライプツィヒ大学東アジア研究所日本学科、ライプツィヒ、ドイツ、2022.3.1～2023.3.31

国際、招聘講師、ストックホルム大学、ストックホルム、スウェーデン、2022.10.17

国際、招聘講師、リエージュ大学、リエージュ、ベルギー、2023.3.10

国内、非常勤講師、九州大学大学院統合新領域学府、「感性哲学」、2023.4.1～2023.9.30

国内、非常勤講師、京都大学大学院文学研究科、「Research 1～3-Seminar (VMC)(Lecture)」、2023.10.1～2024.3.31

国内、非常勤講師、学習院大学文学部、「美学講義」、2023.4.1～2024.3.31

国内、兼任講師、立教大学文学部、「音楽と感性」、2023.4.1～2024.3.31

(2) 学会・委員活動

国内、日本音楽学会、西日本支部委員（支部通信担当）、2022.4.1～2024.3.31

国内、美学会、東部会委員、2022.4.1～2022.9.30；会長、2022.10.1～2024.3.31

国内、日本音楽学会、美学会、表象文化論学会、日本デジタルゲーム学会、会員、2022.4.1～2024.3.31

国際、Royal Musical Association Music and Philosophy Study Group (United Kingdom)、Advisory Board、2022.4.1～2024.3.31

国際、Journal of Sound and Music in Games (JSMG)、Editorial Board、2022.4.1～2024.3.31

国際、International Association for Aesthetics (IAA)、International Association for Semiotic Studies (IASS)、Replaying
Japan、Digital Games Research Association (DiGRA)、会員、2022.4.1～2024.3.31

(3) その他

国内、研究員、立命館大学、ゲーム研究センター、客員協力研究員、2022.4.1～2024.3.31

08 死生学応用倫理

教授 池澤 優 IKEZAWA, Masaru

06 宗教学宗教史学 参照

教授 鈴木 晃仁 SUZUKI, Akihito

1. 略歴

1982年4月 東京大学教養学部文科Ⅲ類入学
1984年4月 東京大学教養学部教養学科科学史・科学哲学科進学
1986年3月 同卒業
1986年4月 東京大学大学院地域文化研究科修士課程入学
1988年3月 同修了（修士（地域文化研究）取得）
1988年4月 東京大学大学院地域文化研究科博士課程進学
1989年10月 ロンドン大学ウェルカム医学史研究所博士課程入学
1992年9月 東京大学大学院地域文化研究科博士課程退学
1992年10月 ロンドン大学ウェルカム医学史研究所博士課程修了（Ph.D取得）
1992年10月 ロンドン大学ウェルカム医学史研究所 Post Doctoral Research Fellow（～1993年9月）
1993年10月 日本学術振興会海外特別研究員（ロンドン大学ウェルカム医学史研究所）（～1995年9月）
1995年10月 アバディーン大学トマス・リード研究所 Post Doctoral Research Fellow（～1996年9月）
1996年10月 日本学術振興会特別研究員（東京大学大学院総合文化研究科）（～1997年3月）
1997年4月 慶應義塾大学経済学部助教授
2006年4月 同教授
2021年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

医学史

b 研究課題

①精神医療・精神病院の歴史、②患者と家族の関係、③感染症の歴史、④医学と言語の関係

c 概要と自己評価

(1) 概要

1. 精神医療・精神病院の歴史

1920年代から1945年にかけての東京における精神病院の歴史を主要な研究テーマとした。特に、当時の日本における朝鮮人移民が精神病院にどのように収容され、治療されたかに焦点を当てた論文「Two Korean Immigrants in a Psychiatric Hospital in Tokyo c.1920-c.1945」では、戦前・戦中における移民の置かれた状況と精神病院の状況との複雑な関わりが明らかにされている。また、「Psychiatric Hospital, Domestic Strategies and Gender Issues in Tokyo c.1920-1945」では、精神病院における家庭内の戦略やジェンダー問題に着目し、特に長く続いた家族によるケアから精神病院でのケアへの転換におけるジェンダーの問題を検討している。

さらに、いくつかの国際フォーラムで、東京の精神病院における患者、家族、警察の相互作用に関する発表が行われた。これには、移民問題に関する研究成果を含む講演や、精神病院の社会的役割に関する議論が含まれており、精神医療と国家の制度的関係が議論された。例えば、2023年11月の北京フォーラムや、2023年6月の韓国・京畿大学での講演がこの分野に寄与している。

2. 患者と家族の関係

東京の精神病院における患者と家族の関係も、重要な研究テーマとしている。「Psychiatric Hospital, Domestic Strategies and Gender Issues in Tokyo c.1920-1945」では、特に家族が精神病院においてどのような役割を果たしていたかが分析され

ている。家庭内での患者の扱い、またそれに関連するジェンダー問題が、当時の精神医療にどのような影響を及ぼしたかが論じられている。これに加えて、2023年5月にマギル大学で発表された講演「Patients, Families and the Police in a Psychiatric Hospital in Tokyo, c.1920-1945」では、家族が患者の治療に果たす役割と、警察との関係を取り上げた。

3. 感染症の歴史

感染症の歴史に関する研究もこの期間における重要な成果の一つである。特に、肉産業と感染症の関係を歴史的視点から分析することで、1600年から2020年までの日本、中国、欧米の事例を比較した講演「The Meat Industry and Infectious Diseases: Japan, China, Europe and US 1600-2020」を、2022年4月に東京大学でおこなった。さらに、2022年11月の「The Global Re-distribution of Health and Cleanliness Risks: The Cases of Clinical Trials」では、パンデミックに関連した清潔さや衛生のリスクの再分散について、過去と現在の視点から論じた。

4. 医学と言語の関係

近代日本における医療と言語の関係についての研究も進展が見られた。特に、20世紀前半の日本において、医師が日本語とドイツ語の二言語を使用していたことが、医療実践や症例報告にどのような影響を与えたかについて、2022年10月にケンブリッジ大学で「Doctors, Patients and the Two Languages: Case Histories in Japanese with German in the Earlier Half of the Twentieth Century」を講演した。この研究は、医学が国際的にどのように影響を受け、また発展していったかを理解するための重要な視点を提供している。

(2) 自己評価

これらの研究成果を通じて、精神医療の歴史、患者と家族の関係、感染症の歴史、そして医学と言語の相互作用といったテーマにおいて、重要な知見を提供した。特に、脳病院における移民やジェンダー問題を大量の症例の読解を通じて分析できたことは評価に値すると考えている。また、国際的な学会やフォーラムでの発表を通じて、異なる文化的背景や視点をもった研究者と交流することができた。これからも、精神医療史のさらなる研究を進め、現代の医療問題と過去の歴史的背景との関連を深く考察する予定である。

d 研究業績

(1) 論文

"Two Korean Immigrants in a Psychiatric Hospital in Tokyo c.1920-c.1945", *História, Ciências, Saúde-Manguinhos*, 29(2022), 47-59

"Psychiatric Hospital, Domestic Strategies and Gender Issues in Tokyo c.1920-1945", *History of Psychiatry*, 33(2022), issue3, 308-318

(2) その他各種論著

Book Review of Wei Yu Wayne Tan, *Blind in Early Modern Japan: Disability, Medicine, and Identity* (Ann Arbor, MI: the University of Michigan Press, 2022), in *Isis*, 114, Number 1: 199-200

Book Review of Timothy M. Yang, *Medicated Empire: The Pharmaceutical Industry and Modern Japan* (New York: Columbia University Press, 2021), in *British Journal of Psychiatry*, vol.221, issue 5 (2022), 705-6

書評、藤本大士『医学とキリスト教』（2021）、『科学史研究』62巻（2023）、211-214

(3) 講演・口頭発表等

Social and Economic History of Mental Hospitals in Tokyo: Psychiatric Hospitals, the Families and the Police, c.1920-c.1945, Beijing Forum, Beijing, November 2023

Immigrant Koreans and Mental Hospital in Tokyo, a keynote lecture at the Integrated Medical Humanities, Kyung Hee University, Seoul, June 2023

Patients, Families and the Police in a Psychiatric Hospital in Tokyo, c.1920-1945, On Being Insane in Sane Places, McGill University, May 2023

The Global Re-distribution of Health and Cleanliness Risks: The Cases of Clinical Trials, a lecture in At the Age of Pandemics: Contextualizing Cleanliness and Hygiene in the Past and Present, November 2022

Doctors, Patients and the Two Languages: Case Histories in Japanese with German in the Earlier Half of the Twentieth Century, History of Modern Medicine and Biology, University of Cambridge, October 2022

The Meat Industry and Infectious Diseases: Japan, China, Europe and US 1600-2020, COVID-19 in Historical Perspectives: Politics, Industries and Relief, The University of Tokyo, April 2022

鈴木淳・鈴木晃仁、「関東大震災と東大医学部第二外科：東京大学ヒューマニティーズセンター オープンセミナー第57回より」(2022)

鈴木晃仁、「日本の精神医療と患者と家族—歴史と倫理について考える—」、『平和政策研究所』No.282、2024.1.10、<https://ippjapan.org/archives/8166>

1. 略歴

1992 年 3 月	東京大学文学部心理学専修課程卒業
1992 年 4 月	東京大学文学部研究生（～1993 年 3 月）
1993 年 4 月	東京大学大学院人文科学研究科宗教学宗教史学専攻修士課程入学
1995 年 3 月	同修了（修士（文学）取得）
1995 年 4 月	東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻宗教学宗教史学専門分野博士課程進学
2000 年 3 月	同単位取得退学
2001 年 4 月	聖心女子大学文学部専任講師
2003 年 4 月	聖心女子大学大学院文学研究科専任講師兼任
2007 年 4 月	聖心女子大学文学部准教授、聖心女子大学大学院文学研究科准教授兼任
2008 年 9 月	博士（文学）取得（東京大学大学院人文社会系研究科）
2013 年 4 月	東京大学大学院人文社会系研究科准教授
2020 年 4 月	東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

死生学、宗教学、スピリチュアリティ研究、サステナビリティ研究

b 研究課題

日本人の死生観、宗教理論、個人主義的スピリチュアリティ、サステナビリティと人文知

c 概要と自己評価

研究と教育の方向性は大きく二つに分けられる。一つは死生学・宗教学方面で、もう一つはサステナビリティ学方面である。この二つは、死生学応用倫理の「死生学」と「応用倫理」に対応する。

死生学方面では、死生観調査を続行している。2019 年の日韓でおこなわれた死生観調査、2021 年の日韓加 3 カ国同時のコロナ死生観調査に続き、2023 年 3 月にも死生観調査をおこなった。これにより、経時的な変化を追うことが将来的に可能となった。コロナ死生観調査には陰謀論に関する質問項目が含まれていたため、COVID-19 に関連する陰謀論をどのような人が支持しているのかを、量的に明らかにした。それは、陰謀論とスピリチュアリティが重なる「コンスピリチュアリティ」という現象への社会的注目を集める結果となった。

また、日本のコロナ対応に含まれる年齢差別、検査をせず、詳細な統計を省くことによる「パンデミックの自然化」、またリスク分配の不均衡によって誰をどのように死なせるかを暗黙のうちに方向づける「死政治 Necropolitics」の批判をおこなった。

こうした研究活動と連動して、死生学の理論的な研究も進めた。特に「良い死」の観念の押し付けへの批判を通じて、「死を受容させる死生学」から「死を抱えた生を受容する死生学」へという転換が起きていると論じた。医療関係者の前では、こうしたテーマについて講演をしたり、また現代社会とスピリチュアリティの関連についても講演をした。

一般社会においては、2021 年刊行の書籍『死者の力』への関心が根強く、このテーマについての取材を受け、それがきっかけで書籍も増刷となった。

2024 年末に刊行予定だが、この時期には Tony Walter『Death in the Modern World』の翻訳を進めていた。日本語にして 500 頁超の大部の本の翻訳となる。訳出作業はコロナ禍と重なっていたが、内容はコロナ禍より前のものである。世間的に COVID-19 が注目されなくなったために、かえってその内容が再び現代的なものになった。この本は死生学を各国の国内の学問に留めず、グローバルに展開することを狙ったものである。したがって、将来的には私自身もその続編とも言える著作を日本の視点から執筆したいと考えている。

死生学と関連して、スピリチュアリティ研究では、スピリチュアリティ現象の日本国内における歴史、またメディア史との関連、さらにはマクロな人類史における位置づけ、そして未来との関連、終末論的意識について、次々と論考を発表してきた。

それとは別に「宗教と社会」学会からの要請に応える形で、スピリチュアリティ研究の歴史についても発表をおこなった。また、心理学との関係について、博士論文『歴史のなかの宗教心理学』の問題意識を現代のスピリチュアリティ現象に適用する形で論じた。

サステナビリティ研究方面では、「Sustainability と人文知」プロジェクトの実施責任者として、研究交流を促進してきた。このプロジェクトは2期にわたる総長裁量経費プロジェクト、2021年度から2022年度までは人文社会系研究科の事業として継続、2023年度からは死生学・応用倫理センターの活動として新たに位置づけ直された。学内公開研究会を多分野交流演習としても院生に開き、学外からも多数の講師を招いて、研究活動の範囲を広げている。現在、東京大学はSDGs（持続可能な開発目標）達成に研究面から積極的に関与しており、GX（グリーン・トランスフォーメーション）を行動計画の柱の一つとしている。だが、サステナビリティやSDGsやGXへの学生・院生の関心は必ずしも高くない。とくに、本学部・本研究科の学生・院生の環境への関心が低いことが問題として見えている。学生の関心を高めるためにどのような方策が有効なのかを本学全体にも関わる教育課題として模索していきたい。

このことに関連して、自分の研究をサステナビリティ研究の方に少しずつシフトしてきている。今期（2022年度・2023年度）ではまだ業績にはなっていないが、田中正造に関する研究を地道に進めている。『田中正造を朗読する15分』というX上の「スペース」での音声配信、YouTubeでの動画配信をほぼ毎日おこなっている。

また2023年2月から、NPO法人足尾銅山鉱毒事件田中正造記念館で、月2回のペースでボランティアのガイドを務めるようになった。ゆくゆくは足尾銅山鉱毒事件と田中正造の歴史研究の専門家になることを目指している。また、大学の地域連携の事業を、渡良瀬川沿岸地域で進め、足尾銅山から渡良瀬遊水地までを世界遺産に登録するための活動を通して、社会還元的な研究活動を展開したい。

それに加えて授業では、学生が学ぶべき知識と学問的理論を偏りなく盛り込んだ「サステナビリティ研究」を講じている。これをもとに、教科書として読まれるような書籍を数年内に刊行したい。

なお、死生学、スピリチュアリティ研究、サステナビリティ研究と多岐にわたる自分の学問的実践を、音楽作品や映像作品を通して詩的に間接的に表現することも、長年おこなっている。今回の報告書では、「芸術作品」を記載することが可能な項目があることに気づいたため、そうした作品についても記載している。

d 研究業績

(1) 論文

- 「日本におけるスピリチュアリティの発生と展開」、島藺進編『宗教信仰復興と現代社会』（国書刊行会、2022.7）、102-127頁
- 「宗教としての心理学？——スピリチュアリティへの接近」、『臨床心理学』増刊第14号（特集 心の治療を再考する——臨床知と人文知の接続）（2022.8）、106-112頁
- 「COVID-19と宗教——「宗教クラスター」を超えて」、上智大学キリスト教文化研究所『キリスト教文化研究所紀要』40号（2023.3）、33-48頁
- 「コロナ禍とコンスピリチュアリティ——コロナ死生観調査」、横山茂雄他著（堀江宗正を含む）『コンスピリチュアリティ入門——スピリチュアルな人は陰謀論を信じやすいか』（2023.3）、123-161頁
- 「終末のアクチュアリティ——「やがて来る」から「もう来ている」へ」、『福音と世界』第78巻7号（2023.7）、24-29頁
- 「スピリットの形態学ならびにその展開と帰趨」、『現代思想——特集 スピリチュアリティの現在』第51巻12号（2023.10）、20-31頁
- 「良い死とは何か——段階理論からスクリプト理論へ」、『治療』第105巻12号（2023.12）、1500-1504頁
- 「死を受容させる死生学から、死を抱えた生を受容する死生学へ——理論的素描」、『死生学・応用倫理研究』29号（2024.3）、6-27頁

(2) その他各種論著

- 【新聞記事】「死者の力 被災者支える一心温まる霊的体験」、『読売新聞』（2023.2.9）、15頁
- 「「死ぬ権利」が制度化された未来の物語が示唆するもの」、『日経メディカル』（2023.12.29）、
https://medical.nikkeibp.co.jp/leaf/mem/pub/report/t340/202312/582570.html?n_cid=nbpnmo_twbn
- 【書籍紹介】『死者の力——津波被災地「霊的体験」の死生学』、UTokyo Biblio Plaza、2024.2、
https://www.u-tokyo.ac.jp/biblioplaza/ja/H_00090.html

(3) 講演・口頭発表等

- 【口頭発表（招待・特別）】「スピリチュアリティ研究のゆくえ」、「宗教と社会」学会（オンライン、2022.6.5）、30周年特別企画シンポジウムへの招待講演
- 【口頭発表（招待・特別）】「メディア史のなかのスピリチュアリティ」、日本メディア学会2022春季大会（日本女子大学オンライン併用、2022.6.5）、学会企画シンポジウムへの招待講演
- 【口頭発表（招待・特別）】「宗教と感染爆発——通過儀礼としてのパンデミック」、上智大学キリスト教文化研究所第49回連続講演会「病と宗教——COVID-19の経験からみる差別と救済の境界」（上智大学、2022.6.11）への招待講演

- [口頭発表 (一般)] 「死者と生者を分けない在り方―「亡くなった人はここにいる」への反応から」、日本スピリチュアルケア学会学術大会 (兵庫県看護協会会館オンライン併用、2022.10.30)
- [公開講演, セミナー等] 「足尾銅山鉱毒事件と環境倫理」、第 26 回東京大学文学部公開講座 常呂公開講座 (北見市常呂町公民館大講堂、2022.11.11)
- [口頭発表 (招待・特別)] 「現代日本の非宗教的スピリチュアリティ―データから読み解く」、日本宗教信仰復興会議シンポジウム (東京ジャーミイ、オンライン併用、2022.11.27)
- [公開講演, セミナー等] 「死者の力のアクチュアリティ―継続する連帯へ」、弥生神社【宗教・文化講座】 (弥生神社、2023.3.11)
- [口頭発表 (一般)] 「Necropolitics, Ageism and Naturalization of the Pandemic」、CDAS (Centre for Death and Society) Conference (University of Bath オンライン、2023.5.3)
- [公開講演, セミナー等] 「カルトとコンスピリチュアリティ」、コンスピリチュアリティ概念の可能性と課題 (創元社オンラインセミナー、2023.5.13)
- [口頭発表 (招待・特別)] 「現代社会とスピリチュアリティ―医療への含意」、信仰をもつ医療者の連帯のための会 (慶應義塾大学信濃町キャンパス、2023.6.4)
- [公開講演, セミナー等] 「サステイナビリティと人口減少―反出生主義へと向かわせるもの」、第 136 回 2023 年春季東京大学公開講座「少子化」〈育む〉、(東京大学、2023.6.17)
- [口頭発表 (一般)] 「コロナ禍とコンスピリチュアリティ」、日本宗教学会、(東京外国語大学府中キャンパス、2023.9.9)
- [口頭発表 (招待・特別)] 「死生学から見た腎不全医療―学際的議論を開く」、第 7 回城西 CKD 懇話会 (オンライン、2023.10.18)
- [口頭発表 (一般)] 「トニー・ウォルターの死の社会学におけるスピリチュアリティとケア―宗教と医療化と専門職者」、日本スピリチュアルケア学会学術大会 (愛知学院大学名城キャンパス、2023.11.4)
- [口頭発表 (一般)] 「Comments to Dr. David Robertson's lecture 'Religion, Conspiracy Theories, and Knowledge' ロバートソン博士の講演「宗教と陰謀論と知識と」へのコメント」(東京大学、2023.12.15)、<https://www.academia.edu/111499819/>
- (4) その他 (データベース・作品等)
- [ポッドキャスト] 2022 「若者があの世を信じるのはフィクションのせいかな?」(ノアエイジ NOrAGE、2022.5.20)
- [動画配信と音声配信] 『田中正造を朗読する 15 分』Twitter (現X) のスペースで 2022 年 11 月から音声配信、YouTube で 2023 年 11 月から動画配信。その記録は、note にまとめている。
<https://note.com/norichikahorie/n/n0d33f02f887b>
- [ポッドキャスト] 2023 「AI と人間知性」(ノアエイジ NOrAGE、2023.3.15)
- [ポッドキャスト] 2023 「宗教学をどのようにして学ぶようになったのか」(ノアエイジ NOrAGE、2023.5.19)
- [芸術作品] 『Electronik Bluez』(6 曲入り音楽作品) <https://music.apple.com/tr/album/electronik-bluez-ep/1655620816>
- [芸術作品] 「Give Me An Angel」(映像作品) <https://www.youtube.com/watch?v=O9NO3MOPnMk>
- [芸術作品] 「Solar Eclipse」(音楽作品) <https://music.apple.com/jp/album/solar-eclipse-single/1700404246>
- [芸術作品] 「Solar Eclipse」(映像作品) <https://www.youtube.com/watch?v=XCEc8VwfiJE>

e その他

(1) 学会・委員活動

[所属学協会] 日本宗教学会 (2010 年 9 月から評議員、2020 年 4 月から理事)

[所属学協会] 日本自殺予防学会 (2017 年 9 月より評議員)

[所属学協会] 日本社会学会、「宗教と社会」学会、日本生命倫理学会、宗教哲学会、日本スピリチュアルケア学会

(2) 研究会活動

「Sustainability と人文知」研究基盤の実施責任者

准教授 **井口 高志** IGUCHI, Takashi

26 社会学 参照

09 心理学

教授 今水 寛 IMAMIZU, Hiroshi

1. 略歴

1987年3月 東京大学文学部第四類心理学専修課程 卒業
1987年4月 東京大学大学院人文科学研究科心理学修士課程 進学
1989年3月 東京大学大学院人文科学研究科心理学修士課程 修了
1989年4月 東京大学大学院人文科学研究科心理学博士課程 進学
1992年3月 東京大学大学院人文社会系研究科心理学博士課程 単位取得退学
1992年4月 国際電気通信基礎技術研究所（ATR）奨励研究員
1995年2月 東京大学大学院人文社会系研究科心理学博士課程 博士（心理学）取得
1996年10月 科学技術振興事業団・川人学習動態脳プロジェクト 計算心理グループリーダー
2001年10月 ATR 人間情報科学研究所 主任研究員
2002年4月 大阪大学大学院生命機能研究科 客員准教授
2003年5月 ATR 脳情報研究所・認知神経科学研究室 室長
2008年8月 情報通信研究機構 バイオICT グループリーダー
2010年4月 ATR 認知機構研究所 所長
2011年4月 情報通信研究機構 脳情報通信融合研究室 副室長
2011年4月 大阪大学大学院生命機能研究科 客員教授
2015年9月 東京大学大学院人文社会系研究科 教授
2019年4月 東京大学大学院工学系研究科 教授（兼任）

2. 主な研究活動

a 専門分野

運動の学習と制御、認知機能を支える脳のネットワーク解析

b 研究課題

人間は新たな生活環境に置かれたとき、さまざまなことを学習し、行動パターンを変え、環境に適応する。自分の脳や身体もケガ・病気・加齢などで変化することがあり、そのような場合にも新たな学習・適応を迫られる。このような学習と適応のメカニズムを調べ、それに関わる脳の仕組みを解明するとともに、学習や適応を支援する技術の開発を行う。

c 概要と自己評価

「まさに自分が身体を動かしている」という感覚である運動主体感に関する研究に重点的に取り組んだ。これまで運動主体感の研究は、手や腕の運動に関して行われてきたが、新たに発話の運動主体感の形成過程の解明に取り組んだ。発話における運動主体感の低下は、幻聴につながると言われており、そのメカニズムの解明が期待されていた。複数の心理実験を行い、1)自分が口や喉を動かしたタイミングで、声が聞こえてくるという時間的な関係、2)聞こえてくる声の「自分らしさ」、という2つの要素が組み合わさって、発話の運動主体感が形成されることを明らかにした。その成果は、*Psychological Science* に掲載されるとともに、情報通信分野でテレコム学際研究賞を受賞した。運動の心理学に関連して、運動学習の効率における個人差に、自己受容感覚の短期記憶が関与することを明らかにした（*Scientific Reports* 誌に論文掲載）。

言語・思考・意思決定などの認知機能は、脳という巨大な情報ネットワークに支えられている。脳のネットワークを読み解き、その機能を適切に維持することは、認知機能を理解するために重要であるだけでなく、加齢や脳疾患による認知機能の低下を防ぐことに役立つ。今期は特に精神疾患に重点をおき、統合失調症をはじめとする多疾患の神経基盤をネットワークの観点から明らかにした（*Schizophrenia bulletin* 誌、*Psychiatry and clinical neurosciences* 誌に論文掲載）。

以上のように、運動の制御と学習、脳のネットワークという2つのテーマに関して、基礎（脳の仕組みの解明）と応用（学習機能の支援）を織り交ぜながら研究を展開した。学会・招待講演などで積極的に成果を発表・議論した。主な研究成果に関する報道発表、リハビリテーション関係者向けの講習会を中心に、研究成果を広く一般に伝えるアウトリーチ活動に努めた。

d 研究業績

(1) 論文

- [学術雑誌] 「I Hear My Voice; Therefore I Spoke: The Sense of Agency Over Speech Is Enhanced by Hearing One's Own Voice.」、Ryu Ohata Tomohisa Asai Shu Imaizumi Hiroshi Imamizu、Psychological science、33 巻 8 号、pp.1226-1239、2022.8
- [学術雑誌] 「Aberrant Large-Scale Network Interactions Across Psychiatric Disorders Revealed by Large-Sample Multi-Site Resting-State Functional Magnetic Resonance Imaging Datasets.」、Takuya Ishida Yuko Nakamura Saori C Tanaka Yuki Mitsuyama Satoshi Yokoyama Hotaka Shinzato Eri Itai Go Okada Yuko Kobayashi Takahiko Kawashima Jun Miyata Yujiro Yoshihara Hidehiko Takahashi Susumu Morita Shintaro Kawakami Osamu Abe Naohiro Okada Akira Kunimatsu Ayumu Yamashita Okito Yamashita Hiroshi Imamizu Jun Morimoto Yasumasa Okamoto Toshiya Murai Kiyoto Kasai Mitsuo Kawato Shinsuke Koike、Schizophrenia bulletin、49 巻 4 号、pp.933-943、2023.3.9
- [学術雑誌] 「Distinctive alterations in the mesocorticolimbic circuits in various psychiatric disorders.」、Yuko Nakamura Takuya Ishida Saori C Tanaka Yuki Mitsuyama Satoshi Yokoyama Hotaka Shinzato Eri Itai Go Okada Yuko Kobayashi Takahiko Kawashima Jun Miyata Yujiro Yoshihara Hidehiko Takahashi Ryuta Aoki Motoaki Nakamura Haruhisa Ota Takashi Itahashi Susumu Morita Shintaro Kawakami Osamu Abe Naohiro Okada Akira Kunimatsu Ayumu Yamashita Okito Yamashita Hiroshi Imamizu Jun Morimoto Yasumasa Okamoto Toshiya Murai Ryu-ichiro Hashimoto Kiyoto Kasai Mitsuo Kawato Shinsuke Koike、Psychiatry and clinical neurosciences、77 巻 6 号、pp.345-354、2023.3.11
- [学術雑誌] 「Proprioceptive short-term memory in passive motor learning」、Shinya Chiyohara Jun-ichiro Furukawa Tomoyuki Noda Jun Morimoto Hiroshi Imamizu、Scientific Reports、13 巻 1 号、2023.11.27
- [学術雑誌] 「Fear in action: Fear conditioning and alleviation through body movements.」、Maria Alemany-González Martijn E Wokke Toshinori Chiba Takuji Narumi Naotsugu Kaneko Hiraku Yokoyama Katsumi Watanabe Kimitaka Nakazawa Hiroshi Imamizu Ai Koizumi、iScience、27 巻 3 号、p.109099、2024.3.15

(2) その他各種論著

- [機関テクニカルレポート, プレプリント等] ‘Biased self-other attribution changes feedback control: link between the sense of agency and sensorimotor control’、Masaru Tanaka Ryu Ohata Tomohisa Asai Hiroshi Imamizu、PsyArXiv、2022.4.5
- [機関テクニカルレポート, プレプリント等] ‘Generalizable neuromarker for autism spectrum disorder across imaging sites and developmental stages: A multi-site study.’、Takashi Itahashi Ayumu Yamashita Yuji Takahara Noriaki Yahata Yuta Y Aoki Junya Fujino Yujiro Yoshihara Motoaki Nakamura Ryuta Aoki Haruhisa Ohta Yuki Sakai Masahiro Takamura Naho Ichikawa Go Okada Naohiro Okada Kiyoto Kasai Saori C Tanaka Hiroshi Imamizu Nobumasa Kato Yasumasa Okamoto Hidehiko Takahashi Mitsuo Kawato Okito Yamashita Ryu-ichiro Hashimoto、bioRxiv : the preprint server for biology、2023.3.28
- [機関テクニカルレポート, プレプリント等] ‘Spatio-temporal “global” neurodynamics of the human brain in continuous and discrete picture: Simple statistics meet on-manifold microstates as multi-level cortical attractors’、Tomohisa Asai Shiho Kashiara Shinya Chiyohara Kentaro Hiromitsu Hiroshi Imamizu、bioRxiv : the preprint server for biology、2023.7.17
- [機関テクニカルレポート, プレプリント等] ‘Topographical polarity reveals continuous EEG microstate transitions and electric field direction in healthy aging’、Shiho Kashiara Tomohisa Asai Hiroshi Imamizu、BioRxiv、2024.3.27

(3) 講演・口頭発表等

- [口頭発表 (招待・特別)] 「瞑想と脳科学」、今水寛、東京大学仏教青年会五月祭講演会「マインドフルネスを切る〜仏教学と脳科学からの研究最前線」、ハイブリッド開催 (東京大学本郷キャンパス法文 1 号館 21 番教室と Zoom)、東京大学仏教青年会、2022.5.14
- [ポスター発表] ‘Prospective and retrospective inferences of hearing one’s voice in the sense of agency over speech’、Ohata R Uehigashi Y Asai T Imaizumi S Imamizu H、The Federation of European Neuroscience Societies (FENS) Forum 2022、Paris Expo Porte de Versailles, Paris, France、The Federation of European Neuroscience Societies、2022.7.10、2022.7.9〜13
- [ポスター発表] ‘The influence of changes in direction and velocity of feedback over the sense of control’、Tanaka T Imamizu H、The 22nd meeting of the European Society for Cognitive Psychology (ESCoP 2022)、Lille Grand Palais, France、2022.8.31、2022.8.29〜9.1
- [ポスター発表] 「オドボール刺激に対する反応形式の違いが EEG マイクロステートに与える影響」、柏原志保 浅井智久 今水寛、日本心理学会第 86 回大会、日本大学文理学部 (東京都世田谷区桜上水)、2022.9.9、2022.9.8〜11
- [ポスター発表] 「運動と視覚フィードバックの空間的一致性が操作体験に与える影響」、田中拓海 今水寛、日本心理学会第 86 回大会、日本大学文理学部 (東京都世田谷区桜上水)、2022.9.11、2022.9.8〜11

- [口頭発表 (一般)] 「東洋の人間観と脳情報学で実現する安らぎと慈しみの境地」、今水寛、ムーンショット目標9 公開シンポジウム ～科学技術を通じたこころの安らぎと活力に満ちた社会の実現を目指して～、一橋大学一橋講堂 (東京都千代田区一ツ橋/学術総合センター内)、2022.9.12
- [口頭発表 (一般)] ‘Whole-brain mapping of the motion, audio, and affective computation during observing naturalistic dance movies’, Takagi Y Shimizu D Wakabayashi M Ohata R Imamizu H, 第6回ヒト脳イメージング研究会、玉川大学 Human Brain Science Hall (東京都町田市玉川学園)、2022.9.16、2022.9.16～17
- [ポスター発表] 「運動の内部モデル獲得に伴う主体感の形成過程」、田中拓海 今水寛、日本認知心理学会第20回大会、神戸大学六甲台第2キャンパス (神戸市灘区六甲台町・ハイブリッド開催)、2022.10.16、2022.10.15～16
- [口頭発表 (招待・特別)] 「運動学習と運動主体感」、今水寛、日本神経心理学療法学会 第20回学術大会シンポジウム「運動学習と機能回復」、大阪府立国際会議場・グランキューブ大阪 (大阪府大阪市北区中之島)、2022.10.16、2022.10.15～16
- [口頭発表 (招待・特別)] 「脳科学と文理融合：科学と人文の接点を考える」、今水寛、次世代脳プロジェクト 冬のシンポジウム 2022 「神経科学と情報工学の共創の場から考える 脳科学研究の未来予想図」、2022.12.14、2022.12.14～17
- [ポスター発表] 「HD-iES による右側頭頂接合部の活動への介入」、鎌田将 弘光健太郎 武内千雅 今水寛、「iES による運動主体感の因果的神経基盤探索」、弘光健太郎 浅井智久 武内千雅 鎌田将 今水寛、「美しさや感情を感じさせる動きの要素の検討」、若林実奈 田中拓海 宇津木安来 向井香瑛 今水寛、「運動軌道に基づく主体感のオンライン推定」、田中拓海 菊池優希 今水寛、第5回超適応全体会議、東京大学浅野キャンパス武田ホール (東京都文京区弥生)、2023.3.3、2023.3.3～4
- [口頭発表 (招待・特別)] 「個性に応じた瞑想とニューロフィードバック訓練」、今水寛、日本マインドフルネス学会 第9回大会 シンポジウム II 「脳の変化からマインドフルネスを理解する」、2023.3.5、2023.3.4～5
- [口頭発表 (招待・特別)] 「I Hear My Voice; Therefore I Spoke: The Sense of Agency Over Speech Is Enhanced by Hearing One's Own Voice」、今水寛、第38回電気通信普及財団賞贈呈式・テレコム学際研究賞受賞講演、2023.3.22
- [口頭発表 (招待・特別)] 「脳科学からみた主体感：その測定は可能か?」、今水寛、第17回日本統合失調症学会シンポジウム6「主体性の再考」、2023.3.26、2023.3.25～26
- [ポスター発表] 「踊りの印象評価を可能とする視覚特徴の検討」、若林実奈 田中拓海 宇津木安来 向井香瑛 渡邊克巳 今水寛、日本認知心理学会第21回大会、東京都立大学・南大沢キャンパス (東京都八王子市南大沢)、2023.7.1、2023.7.1～2
- [ポスター発表] 「運動軌道に基づくオンラインな主体感の定量化」、田中拓海 菊池優希 今水寛、日本認知心理学会第21回大会、東京都立大学・南大沢キャンパス (東京都八王子市南大沢)、2023.7.2、2023.7.1～2
- [シンポジウム・ワークショップ パネル (公募)] ‘Sense of agency facilitates motor learning’, Imamizu H, 45th Annual International Conference of the IEEE Engineering in Medicine and Biology Society (EMBC2023)、International Convention Centre, Sydney, Australia、2023.7.27、2023.7.24～27
- [ポスター発表] ‘Fear in action: Fear conditioning and alleviation through body movements’, Alemany M Wokke M.E Chiba T Narumi T Watanabe K Nakazawa K Hiroshi Imamizu H Koizumi A, 第46回日本神経科学大会、仙台国際センター (仙台市青葉区青葉山)、2023.8.2、2023.8.1～4
- [ポスター発表] 「自閉スペクトラム症の神経機序理解のための汎化可能なニューロマーカに基づく解析的枠組み」、板橋貴史 山下歩 高原雄史 八幡憲明 中村元昭 青木隆太 藤野純也 太田晴久 吉原雄二郎 岡田剛 岡田直大 笠井清登 田中沙織 今水寛 加藤進昌 岡本泰昌 高橋英彦 川人光男 山下宙人 橋本龍一郎、第46回日本神経科学大会、仙台国際センター (仙台市青葉区青葉山)、2023.8.2、2023.8.1～4
- [口頭発表 (招待・特別)] 「神経画像・心理実験・計算理論の融合によるヒト適応メカニズムの探求」、今水寛、第46回日本神経科学大会時実利彦記念賞受賞記念講演、仙台国際センター (仙台市青葉区青葉山)、2023.8.2、2023.8.1～4
- [口頭発表 (招待・特別)] 「運動の学習と心理：脳機能イメージングからのアプローチ」、今水寛、神経疾患講演会「Movement Disorders Conference」、国立病院機構相模原病院 (相模原市南区桜台)・Zoom オンライン ハイブリッド開催、2023.8.21
- [ポスター発表] 「行為の再認記憶における EEG マイクロステートダイナミクスの検討」、柏原志保 浅井智久 今水寛、日本心理学会第87回大会、神戸国際会議場・神戸国際展示場 (兵庫県神戸市中央区港島中町)、2023.9.15、2023.9.15～17
- [公開講演、セミナー、チュートリアル、講習、講義等] 「人間の適応・学習機構の解明と応用」、今水寛、ATR オープンハウス 2023 テーマ講演 (脳情報科学)、2023.10.5、2023.10.5～6

[口頭発表 (一般)] ‘Psychological factors facilitating hyper-adaptability’, Imamizu H Tsutsui K.I, 2nd International Symposium on Hyper-Adaptability (HypAd 2023), Kyoto University Clock Tower Centennial Hall, Yoshida-Honmachi, Sakyo-ku, Kyoto, Japan, 2023.10.28, 2023.10.28~29

[口頭発表 (基調)] 「小脳と認知-運動機能: 道具の操作を中心として」、今水寛、第7回日本脳神経外科認知症学会学術総会 基調講演I、沖縄市町村自治会館 (カフーナ旭橋、沖縄県那覇市旭町)、2023.11.4、2023.11.4~5

[口頭発表 (招待・特別)] 「運動適応の脳内プロセスと心理的な促進」、今水寛、第13回 CiNet シンポジウム「人の適応力を伸ばす脳情報通信研究」、東京国際フォーラムホールD5 (東京都千代田区丸の内)・オンラインハイブリッド開催、2023.11.8

[ポスター発表] ‘Unsupervised-based feature selection method robustly extracted resting state functional connectivity related to major depressive disorder’, Yamashita A Sakai Y Yamada T Yahata N Kunimatsu A Okada N Itahashi T Hashimoto R Mizuta H Ichikawa N Takamura M Okada G Yamagata H Harada K Matsudo K Tanaka S.C Kawato M Kasai K Kato N Takahashi H Okamoto Y Imamizu H Yamashita O, Society for Neuroscience 2023 Annual Meeting (Neuroscience 2023), Walter E. Washington Convention Center (WCC), Washington D.C., USA, 2023.11.12, 2023.11.11~15

[ポスター発表] ‘Generalizable neuromarker for autism spectrum disorder across imaging sites and developmental stages: A multi-site study’, Itahashi T Yamashita A Takahara Y Yahata N Nakamura M Aoki Y.Y Aoki R Fujino J Ohta H Yoshihara Y Sakai Y Takamura M Ichikawa N Okada G Okada N Kasai K Tanaka S.C Imamizu H Kato N Okamoto Y Takahashi H Kawato M Yamashita O Hashimoto R, Society for Neuroscience 2023 Annual Meeting (Neuroscience 2023), Walter E. Washington Convention Center (WCC), Washington D.C., USA, 2023.11.13, 2023.11.11~15

[ポスター発表] ‘Time-dependent neural arbitration between cue associative and episodic fear memories’, Koizumi A Cortese A Ohata R Alemany M Kitagawa N Imamizu H, Society for Neuroscience 2023 Annual Meeting (Neuroscience 2023), Walter E. Washington Convention Center (WCC), Washington D.C., USA, 2023.11.15, 2023.11.11~15

[ポスター発表] ‘Relationship Between Aging and EEG Microstate Dynamics: Transition Dynamics Considering Topographic Polarity’, Kashiwara S Asai T Imamizu H, Psychonomic Society 64th Annual Meeting, Hilton San Francisco Union Square, San Francisco, California, USA, Psychonomic Society, 2023.11.17, 2023.11.16~19

[口頭発表 (招待・特別)] 「認知機能と脳のネットワーク」、今水寛、神経疾患講演会「Movement Disorders Conference」、国立病院機構 相模原病院 (相模原市南区桜台)・Zoom オンライン ハイブリッド開催、国立病院機構相模原病院、2023.12.18

[ポスター発表] ‘Comparing methods for depicting fMRI neural dynamics’, Chiyohara S Asai T Imamizu H, 脳と心のメカニズム第23回冬のワークショップ、ルスツリゾート (北海道蛇田郡留寿都村)、2024.1.9、2024.1.9~11

[ポスター発表] ‘Discretized Continuous EEG State Transitions Demonstrate Different Features with Aging’, Kashiwara S Asai T Imamizu H, 脳と心のメカニズム第23回冬のワークショップ、ルスツリゾート (北海道蛇田郡留寿都村)、2024.1.9、2024.1.9~11

[ポスター発表] ‘The eye movements as the state-predictor of the self’, Hiromitsu K Asai T Imamizu H, 脳と心のメカニズム第23回冬のワークショップ、ルスツリゾート (北海道蛇田郡留寿都村)、2024.1.9、2024.1.9~11

[公開講演、セミナー、チュートリアル、講習、講義等] 「デフォルトモードネットワークと自発脳活動・瞑想」、今水寛、『マインドワンダリング』刊行記念イベント、オンライン開催、認定心理士の会、勁草書房、2024.1.27

[ポスター発表] 「角度分析による踊りの審美評価に影響を与える動きの要素の検討」、若林実奈 田中拓海 宇津木安来 向井香瑛 渡邊克巳 今水寛、第14回 Society for Tokyo Young Psychologists (東京若手心理学者の会)、早稲田大学戸山キャンパス・33号館3階第一会議室、東京若手心理学者の会、2024.3.16

[口頭発表 (招待・特別)] 「自己と主体性」、今水寛、第9回人工物工学コロキウム：心を豊かにする工学を考える、東京大学 本郷キャンパス工学部 3号館 31号講義室、東京大学大学院工学系研究科/人工物工学研究センター、2024.3.18

(4) その他 (データベース・作品等)

[特許権] 「処理方法およびプログラム」、浅井智久 柏原志保 今水寛、株式会社国際電気通信基礎技術研究所、特願 2022-145247 : 2022.9.13、特開 2024-040721 : 2024.3.26

(5) 受賞

第25回 時実利彦記念賞、『ニューロイメージング・心理実験・計算論の融合によるヒト適応メカニズムの解明』、今水寛、公益信託 時実利彦記念脳研究助成基金、2023.3

第 38 回 電気通信普及財団賞（テレコム学際研究賞）、『I Hear My Voice; Therefore I Spoke: The Sense of Agency Over Speech Is Enhanced by Hearing One's Own Voice（SAGE Publication Inc. Psychological Science, 2022 年 8 月）』、大畑龍
浅井智久 今泉修 今水寛、公益財団法人電気通信普及財団、2023.3

第 20 回日本認知心理学会優秀発表賞、「運動の内部モデル獲得に伴う主体感の形成過程」、田中拓海 今水寛、日本
認知心理学会、2023.6

日本心理学会第 87 回大会学術大会優秀発表賞、「行為の再認記憶における EEG マイクロステートダイナミクスの検
討」、柏原志保 浅井智久 今水寛、公益社団法人日本心理学会、2024.2

(6) 共同研究・競争的資金等の研究課題

[科学研究費助成事業]「超適応を促す身体認知・情動機構の解明」、今水寛 筒井健一郎、新学術領域研究（研究領域
提案型）：19H05725、日本学術振興会、東京大学、2019.6～2024.3

[科学研究費助成事業]「身体―脳の機能不全を克服する潜在的適応力のシステム論的理解の総括研究」、太田順 伊佐
正 近藤敏之 船戸徹郎 今水寛 小池康晴 筒井健一郎、新学術領域研究（研究領域提案型）：19H05722、日本学術
振興会、東京大学、2019.6～2024.3

[科学研究費助成事業]「主体感の探索と利用：その行動メカニズム、神経基盤、および数理モデル」、温文 今水寛 前
田貴記、基盤研究（B）：21H03780、日本学術振興会、東京大学、2021.4～2024.3

[科学研究費助成事業]「高精度な脳刺激法による運動主体感の解明」、今水寛 浅井智久、基盤研（B）：21H00959、日
本学術振興会、東京大学、2021.4～2024.3

[科学研究費助成事業]「メタ身体運動学習の計算論的神経基盤：階層性による運動学習スピードの能動的学習」、井
澤淳 大高洋平 今水寛 上原信太郎、基盤研究（A）：22H00498、日本学術振興会、筑波大学、2022.4～2025.3

[科学研究費助成事業]「仏教学・心理学・脳科学の協同による止観の総合的研究」、養輪顕量 林隆嗣 柳幹康 一色大
悟 今水寛 山部能宜 浅井智久 越川房子 佐久間秀範 熊野宏昭 藤野正寛、基盤研究（A）：22H00001、日本学術
振興会、東京大学、2022.4～2027.3

[戦略的な研究開発の推進 ムーンショット型研究開発事業]「東洋の人間観と脳情報学で実現する安らぎと慈しみの
境地」、今水寛、JPMJMS2291、科学技術振興機構、株式会社国際電気通信基礎技術研究所、2022.5～2026

e 社会活動

(1) 学術貢献活動

[企画立案・運営等、パネル司会・セッションチェア等] 大会・シンポジウム等「第 46 回日本神経科学大会 シンポ
ジウム『超適応の新たな地平線』」、第 46 回日本神経科学大会、仙台国際センター、2023.8.1

[パネル司会・セッションチェア等] 大会・シンポジウム等「日本マインドフルネス学会第 10 回大会シンポジウム【公
開討論】「こころと智慧、そして脳」」、日本マインドフルネス学会、東京大学本郷キャンパス法文 1 号館（東京都
文京区本郷）、2023.12.17

[企画立案・運営等、パネル司会・セッションチェア等] 学会・研究会等「脳と心のメカニズム 第 23 回冬のワーク
ショップ」、ルスツリゾート：北海道蛇田郡留寿都村、2024.1.9～11

f その他

(1) 学会・委員活動

[所属学協会] 公益財団法人 日本心理学会、1991.4～

[所属学協会] 北米神経科学会（Society for Neuroscience）、1995.4～

[委員歴] NTT コミュニケーション科学基礎研究所、研究倫理委員会委員、2016.10～

[委員歴] 東京工業大学科学技術創成研究院、MRI 安全委員会委員、2017.9～

[委員歴] 日本学術会議、連携会員、2017.10～

1. 略歴

1991年3月	東京大学文学部第四類心理学専修課程 卒業
1991年4月	東京大学大学院人文科学研究科心理学修士課程 進学
1993年3月	東京大学大学院人文科学研究科心理学修士課程 修了
1993年4月	東京大学大学院人文科学研究科心理学博士課程 進学
1996年3月	東京大学大学院人文社会系研究科心理学博士課程 修了 博士（心理学）取得
1996年4月	岡崎国立共同研究機構生理学研究所 研究員（COE ポスドク）
1997年4月	岡崎国立共同研究機構生理学研究所 研究員（日本学術振興会特別研究員 PD）
1997年9月	米国ハーバード大学心理学部視覚科学研究所 研究員（日本学術振興会特別研究員 PD）
1999年4月	NTT コミュニケーション科学基礎研究所 社員
2000年4月	NTT コミュニケーション科学基礎研究所 研究主任
2004年4月	NTT コミュニケーション科学基礎研究所 主任研究員
2005年4月	東京大学大学院総合文化研究科 助教授
2007年4月	東京大学大学院総合文化研究科 准教授
2013年4月	東京大学大学院人文社会系研究科 准教授
2018年4月	東京大学大学院人文社会系研究科 教授
2021年4月	東京大学文学部 行動文化学科長（～2022年3月）

2. 主な研究活動

a 専門分野

知覚心理学、認知神経科学

b 研究課題

知覚や行動に伴う心的時間の脳内機構とその操作。周辺視野での事物の定位に動的信号がおよぼす影響に関する視覚心理学的研究。AI の導入による総合的錯視研究の新展開。盲点刺激を用いたヒトにおけるメラノプシン細胞の応答特性解析および光操作。意識の記述形態としての時間生成と位置生成および行為主体感に関する実験心理学的研究。

c 概要と自己評価

心的時間の脳内機構については、標的刺激において傾き対比錯視という空間文脈効果を生じさせるために必要な最短の誘導図形の呈示時間および、傾き対比に影響を及ぼす最長の誘導図形の呈示時間を同定し、その結果、誘導図形自体が意識的気づきに至るには短すぎる呈示時間であったとしても標的刺激に傾き対比を生じる効果があることなどが明らかになった。また、フランカーと呼ばれる時間的手がかり刺激を直前に与えてから標的刺激を呈示するという手法によって、標的刺激に生じる傾き対比錯視の量が減弱することを見出し、刺激の意識的気づきをいつ生じさせるかを実験的に操作することによりありありとした見えのアビランクスを変化させることができることを論じた。周辺視野での事物の定位と動的信号の関係については、運動方向が切り替わらない多数の妨害刺激の中に交じって時々刻々運動方向が切り替わるたったひとつの標的刺激を視覚探索することは一定程度に非効率な探索となるが、運動方向が時々刻々切り替わる多数の妨害刺激の中に交じって存在する運動方向が切り替わらない標的刺激を視覚探索することは極端に非効率であるという探索非対称性を実証した。また、それら自体が局所運動信号を包含しながら、長距離の仮現運動の要素でもあるような、複数の視覚刺激を継時呈示すると、局所運動信号を包含していないときにみられるありありとした仮現運動が、極端に減弱することを明らかにした。総合的錯視研究の新展開については、明るさの両眼統合という古典的なパラダイムに対して、左右眼刺激の間で両眼視差を導入するというまったく新たな試みを行い、両眼視差ゼロの場合に「勝者総取」加算、すなわち両眼観察時には左右眼の間でより暗い刺激と同じ暗さに見えるという統合がとられるという従来知見を追試で確認しながら、非ゼロの両眼視差を導入した場合にはそのような統合様式が減弱し、「線形平均」的な統合に近づくことを見出した。これらはすべて学術雑誌に掲載済みである。盲点刺激を用いたヒトにおけるメラノプシンの作用については、網膜内部のメラノプシン細胞を活性化するとみなされる光刺激を同時呈示している場合に、そうでない場合に比べて、正常視野内に呈示された別の光の絶対閾が影響を受けることを見出して、中間報告として国際学会にて発表した。意識の記述形態としての時間生成と位置生成については、運動軌道残効と我々自身が名付けたまったく新しい錯視現象に関する心理物理学実験結果を中間報告として国際学会にて発表した。これらについてはその後に翌年度において学術雑誌に掲載済みであるので次回の年報にて報告する。

d 研究業績

(1) 論文

- [学術雑誌] 「Search asymmetry in periodical changes of motion directions.」、Hoko Nakada, Ikuya Murakami、Vision research、195 巻、p.108025、2022.6
- [学術雑誌] 「Temporal resolution and temporal extent of orientation repulsion.」、Tomoya Nakamura, Ikuya Murakami、Vision research、200 巻、p.108104、2022.11
- [学術雑誌] 「Local motion signals silence the perceptual solution of global apparent motion.」、Hoko Nakada, Ikuya Murakami、Journal of vision、23 巻 6 号、p.12、2023.6.1
- [学術雑誌] 「The moment of awareness influences the content of awareness in orientation repulsion.」、Tomoya Nakamura, Ikuya Murakami、Consciousness and cognition、116 巻、p.103604、2023.11.16
- [学術雑誌] 「Effects of binocular disparity on binocular luminance combination.」、Goro Maehara, Yiqian Wang, Ikuya Murakami、Journal of vision、24 巻 2 号、p.4、2024.2.20

(2) その他各種論著

- [総説・解説 (学術雑誌)] 「知覚的現在に関わる心的表現を探索する心理物理学のアプローチ」、村上郁也、CLINICAL NEUROSCIENCE、41 巻 8 号、pp.1024-1027、2023.8

(3) 講演・口頭発表等

- [ポスター発表] 「A trajectory aftereffect depending on the perceived trajectory of the double-drift illusion.」、Nakayama R., Tanaka M. & Murakami I., Vision Sciences Society Annual Meeting、2022.5.13、2022.5.13～18
- [ポスター発表] 「Distinct time course of orientation repulsion with and without conscious access to contexts.」、Nakamura T. & Murakami I., Vision Sciences Society Annual Meeting、2022.5.13、2022.5.13～18
- [ポスター発表] 「Melanopsin involvement in the light detectability decrease in the normal visual field induced by light stimulation inside the blind spot.」、Saito M., Miyamoto K. & Murakami I., Vision Sciences Society Annual Meeting、2022.5.13、2022.5.13～18
- [ポスター発表] 「瞳孔径の自発的動揺および環境光量の動揺に依る網膜照度動揺への意識的気づき」、齋藤真里菜・井上みゆ・村上郁也、日本視覚学会、2022.9.5、2022.9.5～7
- [口頭発表 (一般)] 「時間予報性によって傾き対比の見えが変わる」、中村友哉・村上郁也、日本視覚学会、2022.9.5、2022.9.5～7
- [ポスター発表] 「運動外挿の神経相関：脳波計測による検討」、中山遼平・天野薫・村上郁也、日本視覚学会、2022.9.6、2022.9.5～7
- [口頭発表 (一般)] 「Color dependency of the pupillary light reflex caused by light stimulation to the blind spot.」、Saito M. Miyamoto K. & Murakami I., Asia Color Association Conference、2022.10.20、2022.10.20～21
- [ポスター発表] 「意識的気づきのタイミングと傾き対比の見えの関係」、中村友哉・村上郁也、日本基礎心理学会、2022.12.4、2022.12.2～4
- [ポスター発表] 「Craik-O'Brien-Cornsweet effect の時間特性と視覚運動」、仲田穂子・横須賀咲紀・村上郁也、日本視覚学会、2023.1.20、2023.1.18～20
- [ポスター発表] 「シータ波の位相に依存した運動外挿の増減」、中山遼平・天野薫・村上郁也、日本視覚学会、2023.1.20、2023.1.18～20
- [ポスター発表] 「Artificially quickening the moment of awareness alters the appearance of orientation repulsion.」、Nakamura T. & Murakami I., Vision Sciences Society Annual Meeting、2023.5.21、2023.5.19～24
- [口頭発表 (一般)] 「Temporal evolution processes of a motion-induced position shift ride neural theta oscillations.」、Nakayama R., Amano K. & Murakami I., Vision Sciences Society Annual Meeting、2023.5.22、2023.5.19～24
- [ポスター発表] 「モーダル補完およびアモーダル補完領域における flash-grab effect」、仲田穂子・瀬下優也・島崎遥・鬼頭宗平・中村友哉・村上郁也、日本視覚学会、2023.9.18、2023.9.18～20
- [ポスター発表] 「明るさ情報の両眼統合における両眼視差の効果」、王儀倩・前原吾朗・村上郁也、日本視覚学会、2023.9.18、2023.9.18～20
- [ポスター発表] 「時間的オッドボール効果における特徴ベース注意の影響」、Lavrenteva S.・杉原以万・村上郁也、日本視覚学会、2023.9.18、2023.9.18～20
- [口頭発表 (一般)] 「傾き対比の時空間相関構造」、中村友哉・村上郁也、日本視覚学会、2023.9.18、2023.9.18～20
- [ポスター発表] 「The trajectory aftereffect: its relationships with attention and orientation processes.」、Nakayama R., Kishi Y. & Murakami I., Australasian Cognitive Neuroscience Society Annual Meeting、2023.11.29、2023.11.27～30

[ポスター発表]「アンサンブルコーディングの正確性は提示方法と無関連刺激の顕著性に影響を受ける」、齋藤真里 菜・仲田穂子・中田哲也・村上郁也、日本基礎心理学会、2023.12.2、2023.12.1～3

[ポスター発表]「色が情景認知に与える影響の時間的特性」、大久保ら・村上郁也・横澤一彦、日本視覚学会、2024.1.17、2024.1.17～19

[ポスター発表]「両眼視差を伴う刺激における明るさ両眼加重の増加」、王儀倩・前原吾朗・村上郁也、日本視覚学会、2024.1.18、2024.1.17～19

(4) 共同研究・競争的資金等の研究課題

[科学研究費助成事業]「周辺視野での事物の定位に動的信号がおよぼす影響に関する視覚心理学的研究」、村上郁也、基盤研究 (B) : 18H01099、日本学術振興会、東京大学、2018.4～2023.3

[科学研究費助成事業]「知覚や行動に伴う心的時間の脳内機構とその操作」、田中真樹 村上郁也 寺尾安生 天野薫、新学術領域研究 (研究領域提案型) : 18H05523、日本学術振興会、北海道大学、2018.6～2023.3

[科学研究費助成事業]「AI の導入による総合的錯視研究の新展開」、北岡明佳 新井仁之 辻村誠一 蘆田宏 渡辺英治 櫻井研三 村上郁也 栗木一郎 小池千恵子、基盤研究 (A) : 21H04426、日本学術振興会、立命館大学、2021.4～2026.3

[科学研究費助成事業]「盲点刺激を用いたヒトにおけるメラノブシン細胞の応答特性解析および光操作」、松山・オジョス武 村上郁也、基盤研究 (C) : 23K09035、日本学術振興会、立命館大学、2023.4～2027.3

[科学研究費助成事業]「意識の記述形態としての時間生成と位置生成および行為主体感に関する実験心理学的研究」、村上郁也 中山遼平、基盤研究 (B) : 23H01052、日本学術振興会、東京大学、2023.4～2028.3

e その他

(1) 学会・委員活動

[所属学協会] Association for Research in Vision and Ophthalmology、2022.4～

[所属学協会] Society for Neuroscience、2022.4～

[所属学協会] Vision Sciences Society、2022.4～

[所属学協会] 日本基礎心理学会、2022.4～

[所属学協会] 日本心理学会、2022.4～

[所属学協会] 日本神経科学学会、2022.4～

[所属学協会] 日本視覚学会、2022.4～

[委員歴] Scientific Reports、Editorial Board Member、2022.4～2023.12

[委員歴] Vision Research、Consultatory Board Member、2022.4～

[委員歴] 日本基礎心理学会、編集委員、2022.4～

[委員歴] 日本心理学会、代議員、2022.4～

[委員歴] 日本視覚学会、幹事、2022.4～

准教授 **鈴木 敦命** SUZUKI, Atsunobu

1. 略歴

2001年3月	東京大学教養学部生命・認知科学科 卒業
2001年4月	東京大学大学院総合文化研究科広域科学専攻修士課程 入学
2003年3月	東京大学大学院総合文化研究科広域科学専攻修士課程 修了
2003年4月	東京大学大学院総合文化研究科広域科学専攻博士課程 進学
2006年3月	東京大学大学院総合文化研究科広域科学専攻博士課程 修了 博士 (学術) 取得
2006年4月	東京大学大学院総合文化研究科 日本学術振興会特別研究員 (PD)
2007年4月	東京大学総括プロジェクト機構ジェロントロジー寄付研究部門 日本学術振興会特別研究員 (PD)
2006年9月	イリノイ大学アーバナ・シャンペーン校バックマン研究所 客員研究員
2009年4月	名古屋大学大学院環境学研究科 講師

2012 年 10 月 名古屋大学大学院環境学研究科 准教授
2017 年 4 月 名古屋大学大学院情報学研究科 准教授
2017 年 9 月 東京大学大学院人文社会系研究科 准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

実験心理学、認知心理学

b 研究課題

社会的認知とエイジングを主な研究課題としている。社会的認知とは人間の社会行動を支える心の働きの総称であり、他者の感情・思考や性格の推測、自己の行為のコストベネフィット評価や道徳性の判断、相手を信頼して協力するか否かの意思決定など、多様な心理過程が含まれる。一方、エイジングはaging のカタカナ表記で、「年をとること」である。「近頃、年のせいで…」というぼやきもあれば、「年の功」という言葉もあるように、心の働きには年齢とともに低下する側面も向上する側面もある。中でも社会的認知のエイジングについて検討することで、世代間の交流・理解を促進するヒントが得られないかと考えて研究を進めている。

c 概要と自己評価

人間は他者の顔つきを手がかりとしてその性格や能力などの特性を推論する傾向があるが、そうした顔特性判断への依存度には個人差が存在する。例えば、顔特性推論の妥当性を信じる程度や顔特性推論を実際に極端に行う程度には個人差があり、両者は正の相関を示す。顔特性推論への高い依存が他者への偏見・差別や自身の対人問題（詐欺被害など）につながる可能性を踏まえると、それがなぜ生じ、どのような作用を持つかの解明は重要な研究課題である。そこで、顔特性推論の個人差がどのような特徴をもち、その背後にどのようなメカニズムがあるかを明らかにすることを目指して研究を進めている。最近の研究では、顔特性推論の中でも顔に基づく他者の信頼性の判断に着目し、高齢者と若年者の間で比較を行った。その結果、若年者には他者を信頼しにくいいわば「不信バイアス」があり、高齢者ではそのバイアスが弱いことを示唆する結果を得た。この結果は、高齢者が他者を信頼しすぎるバイアスを持つという従来の研究の主張とは異なるものであり、さらなる検討の必要性が明らかになった。加えて、日本中世の肖像画に対して現代の人々が抱く印象に関する美術史・文学史の専門家との共同研究、ロボットの顔に対して感じる不気味さの原因を探る研究なども並行して進めている。以上に関連する研究成果は既に国内外の学会や論文誌で発表され、学会発表賞を受賞する評価も受けており、研究は順調に進んでいる。

d 主要業績

(1) 書籍出版物

[分担執筆]『心理学の測定と調査』、鈴木敦命、「第2章 実験によるデータ収集」(pp.25-51)、サイエンス社、2023.12

(2) 論文

[学術雑誌]「Generalized tendency to make extreme trait judgements from faces」、Suzuki, A., Tsukamoto, S., Takahashi, Y., Royal Society Open Science, 9 巻 11 号、Article no. 220172、2022.11.23

[研究会、シンポジウム資料等]「顔表情画像による感情喚起—顔表情（対人）認知研究からの視点—」、鈴木敦命、感情心理学研究、29 巻 2-3 号、pp.58-63、2022.12.15

[学術雑誌]「Perception and learning of other people's trustworthiness: Comparison between older and younger adults」、Suzuki, A., Psychologia, 65 巻 1 号、pp.17-34、2023.12.25

[学術雑誌]「Exploring the effects of Japanese font designs on impression formation and decision-making in text-based communication」、Chujo, R., Suzuki, A., Hautasaari, A., IEICE Transactions on Information and Systems, E107.D 巻 3 号、pp.354-362、2024.3.1

(3) 講演・口頭発表等

[シンポジウム・ワークショップ パネル（指名）]「顔表情画像による感情喚起—顔表情（対人）認知研究からの視点—」、第40回日本生理心理学会大会・日本感情心理学会第30回大会合同大会2022、シンポジウム1「感情の喚起：その過去・現在・未来」、2022.5.28

[ポスター発表]「高齢者の直感的信頼は若年者に比べて正確性が高くバイアスが弱い」、鈴木敦命・石川健太・大久保街亜、第40回日本生理心理学会大会・日本感情心理学会第30回大会合同大会2022、2022.5.29

[シンポジウム・ワークショップ パネル（指名）]「顔で人を判断する人の心理学」、鈴木敦命、ルッキズム（「顔身体学」領域主催公開シンポジウム）、2022.8.6

[ポスター発表]「顔信頼性印象の正確性とメタ正確性の年齢関連差」、鈴木敦命・石川健太・大久保街亜、日本心理学会第86回大会、2022.9.10

- [ポスター発表]「Age-related improvement in face-based trustworthiness judgment: A comparison of younger, middle-aged, and older adults」、Suzuki, A., Ishikawa, K., Okubo, M., 63rd Annual Meeting of the Psychonomic Society, 2022.11.17～20
- [ポスター発表]「画像の空間周波数を操作した実験による不気味の谷現象の知覚的不一致仮説の検討」、伊藤資浩・鈴木敦命、日本基礎心理学会第41回大会、2022.12.2～4
- [シンポジウム・ワークショップ パネル (指名)]「顔貌に基づく人物の認知：進化の副産物か文化の構築物か」、鈴木敦命、人物顔貌の芸術表現とその認知：人文学・認知科学・制作からのアプローチ、2022.12.9
- [ポスター発表]「Distrusting bias in face judgment is mitigated by smile across adulthood」、Suzuki, A., Ishikawa, K., Okubo, M., International Symposium on Lifelong Sciences, 2023.3.19
- [ポスター発表]「顔に基づく知性判断における表情・構造手がかりの使用と人相学的信念の関連」、鈴木敦命、日本感情心理学会第31回大会、2023.5.28
- [ポスター発表]「顔に基づく信頼性判断の年齢関連差を媒介する認知的変数」、鈴木敦命・石川健太・大久保街亜、日本心理学会第87回大会、2023.9.16
- [ポスター発表]「択一式問題における作成者と回答者の選択バイアス」、伊藤資浩・鈴木敦命、日本心理学会第87回大会、2023.9.17
- [ポスター発表]「日本中世に描かれた人物顔貌に対する特性判断」、上田竜平・鈴木敦命・高岸輝・鈴木親彦・永井久美子、日本心理学会第87回大会、2023.9.17
- [口頭発表 (一般)]「空間周波数帯域間での人間らしさの知覚の不一致は不気味さを喚起するか」、伊藤資浩・鈴木敦命、「注意と認知」研究会、2024.3.4

(4) 受賞

日本感情心理学会第30回大会優秀研究賞、「高齢者の直感的信頼は若年者に比べて正確性が高くバイアスが弱い」、鈴木敦命・石川健太・大久保街亜、日本感情心理学会、2022.7

(5) 共同研究・競争的資金等の研究課題

- [科学研究費助成事業]「顔印象とそのメタ認知の正確性／偏りの個人差に関する実験心理学的検討」、鈴木敦命、基盤研究 (C) : 21K03124、日本学術振興会、東京大学、2021.4～2024.3
- [科学研究費助成事業]「直感的信頼の成人期発達—課題有意義性と印象操作の影響を考慮した三世代間横断研究」、鈴木敦命、学術変革領域研究 (A) : 21H05323、日本学術振興会、東京大学、2021.9～2023.3
- [科学研究費助成事業]「直感的信頼の高齢者優位性—国や実験課題・分析法を越えた頑健性に関する検討」、鈴木敦命、学術変革領域研究 (A) : 23H03878、日本学術振興会、東京大学、2023.4～2025.3

准教授 **浅野 倫子** ASANO, Michiko

1. 略歴

- | | |
|---------|--|
| 2003年3月 | 東京大学文学部行動文化学科心理学専修課程 卒業 |
| 2003年4月 | 東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻心理学専門分野修士課程 入学 |
| 2005年3月 | 東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻心理学専門分野修士課程 修了 |
| 2005年4月 | 東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻心理学専門分野博士課程 進学 |
| 2007年4月 | 日本学術振興会特別研究員 DC2 (2008年度はPDに資格変更) (～2009年3月) |
| 2008年3月 | 東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻心理学専門分野博士課程 単位取得退学 |
| 2009年2月 | 東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻心理学専門分野博士課程 博士 (心理学) 取得 |
| 2009年4月 | 東京大学大学院人文社会系研究科 特任研究員 (CREST「生体・環境情報処理基盤の開発とメタボリック症候群対策への応用」) (～2010年3月) |
| 2010年4月 | 東京大学大学院人文社会系研究科 特任研究員 (科学研究費補助金基盤研究(B)「情報統合としての共感覚的認知に関する認知心理学的研究」) (～2011年3月) |

2010 年 5 月	玉川大学脳科学研究所 嘱託研究員（～2011 年 3 月）
2011 年 4 月	慶應義塾大学環境情報学部 研究員（日本学術振興会特別研究員 PD）（～2014 年 3 月）
2014 年 4 月	立教大学現代心理学部心理学科 助教（～2018 年 3 月）
2018 年 4 月	立教大学現代心理学部心理学科 准教授（～2022 年 3 月）
2020 年 8 月	文部科学省 学術調査官
2022 年 4 月	東京大学大学院人文社会系研究科 准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

実験心理学、認知心理学

b 研究課題

多種の情報間の対応づけや、言語の認知処理、言語情報と非言語情報の認知処理の関係の解明を主な研究課題としている。多種情報間の対応づけには、具体的には以下のものが含まれる：異なる感覚（例：視覚と聴覚）からの入力情報を統合し、ひとまとまりのものとして認識する処理過程である多感覚統合／「ブーバ」という音声の響き（聴覚）に丸みを帯びた形状の印象（視覚）を覚えるといったように、異なる情報間に自然と結びつきが見いだされる現象である感覚間協応／「東」という文字を見ると、文字の形や音、意味が認識されるのに加えて、自然とオレンジ色の印象を覚えるといったように、ある情報入力により、一般的に喚起される感覚や認知処理に加えて、別の種類の感覚や認知処理も不随意に喚起される現象である共感覚（一般人口中の少数の人のみにみられる）。

c 概要と自己評価

多感覚統合研究の分野では、これまでに、フラッシュ光、静止画、短い音声、短い振動といった比較的単純な刺激の処理間の統合については知見が豊富に蓄積されているのに対し、例えば映画における映像と音楽のような複雑な（高次の）情報間の統合処理やそれが生む効果についての知見は乏しいのが現状である。そのような中で、2022-2023 年度は、短い映像作品における映像と音楽の感情的調和性が没入感に与える影響を調べた。実験により、映像と音楽の感情が調和している場合（例：幸せなシーンの映像＋楽しい印象の音楽）は、不調和な場合（例：悲惨なシーンの映像＋楽しい印象の音楽）よりも没入感が強まる可能性が示された。また、映像と音楽の統合的認知処理や没入感に関する諸理論の整理も行った。これらはいずれも学会発表や学術論文の公刊に繋がった。また、VR 技術を活用して、身体運動の体性感覚情報と視覚情報を食い違わせることにより、空間内での距離知覚にどのような情報が使われているかを明らかにする多感覚処理研究も精力的に行った。共感覚や感覚間協応の研究においてもさまざまな進展が見られた。これらの現象は、素朴には、「脳内で、文字の形状処理と色の処理の間に混線が生じる」というような単純な仕組みで生じているように推測されがちだが、近年の研究の進展により、言語や概念などの高次の認知処理が深く関わりうる複雑な現象であることが明らかになってきた。そのメカニズムを一層明らかにするために、感覚間協応や共感覚と、カテゴリー知覚、意味処理、芸術的活動への関与度等との関係を調べる研究に取り組み、当該分野の理論的拡充に繋がる知見を得つつある。その一部は学会発表賞の受賞といった高い評価を受けた。さらに、これまでに行ってきた共感覚研究が高く評価され、日本認知心理学会より独創賞を受賞した。以上のように、研究は順調に進んでいる。

d 研究業績

(1) 書籍出版物

[分担執筆]『図説 視覚の事典』、日本視覚学会、「5.7 共感覚」、朝倉書店、事典・辞書、2022.11、vi, 357pp

(2) 論文

[学術雑誌]「物語映画への没入体験の認知プロセス」、張馨月 浅野倫子、心理学評論、66 巻 2 号、pp.215-238、2023.10

[学術雑誌]「ひらがな読み検査に基づく読字困難の過剰判定と検査基準値の検証」、奥村安寿子 北村柚葵 櫻井晴子 白川由佳 大山帆子 稲垣真澄 浅野倫子 北洋輔、脳と発達、2024

[学術雑誌]「共感覚とイメージ——共感覚研究の最前線——」、浅野倫子、イメージ心理学研究、2024

[学術雑誌]「映像と音楽の感情の調和性が没入感に及ぼす影響」、張馨月 浅野倫子、認知科学、2024

(3) その他各種論著

[研究発表要旨（全国大会、その他学術会議）]「AI 絵画作品の美的評価におけるバイアスおよび道徳性との関連」、小野塚暁世 浅野倫子、2023 年度人工知能学会全国大会（第 37 回）論文集、4Xin1-76 巻、pp.1-4、2023.6

[総説・解説（学術雑誌）]「共感覚の実験心理学的研究の進め方」、宇野究人 浅野倫子、基礎心理学研究、41 巻 2 号、pp.136-143、2023.6

[総説・解説（学術雑誌）]「共感覚とは？—物理的には目の前にない色が「見え」る—」、浅野倫子、VISION、36 巻 1 号、pp.1-4、2024.1

(4) 講演・口頭発表等

- [口頭発表 (一般)] 「特異的読字障害の過剰診断に関する検証と診断基準の再考」、奥村安寿子 北村柚葵 大山帆子 櫻井晴子 浅野倫子 北洋輔、第 64 回日本小児神経学会学術集会、2022.6.5
- [公開講演、セミナー、チュートリアル、講習、講義等] 「共感覚を通して覗く人間の認知処理」、浅野倫子、千葉大学 先進科学センターオムニバスセミナー、2022.7.22
- [ポスター発表] 「日本の小学生に見られる漢字の色字対応」、松田英子 岡崎善弘 浅野倫子 横澤一彦、日本心理学会 第 86 回大会、2022.9.10
- [ポスター発表] 「映像と音楽の印象的調和・不調和が没入感に及ぼす影響」、張馨月 浅野倫子、日本心理学会第 86 回大会、2022.9.10
- [ポスター発表] 「色聴共感覚において音の概念情報の更新が共感覚色に与える影響の検討」、原島小也 浅野倫子 横澤一彦、日本心理学会第 86 回大会、2022.9.10
- [ポスター発表] 「形態情報の不足した顔の観察時に起こる平均顔補完の可能性の検討」、大塚遥音 浅野倫子、日本認知心理学会第 20 回大会、2022.10.16
- [ポスター発表] 「Influence of mood congruency of images and music on narrative engagement」、Zhang X Asano M、OPAM (Object Perception, visual Attention, and visual Memory) 30、2022.11.17
- [ポスター発表] 「The effects of omnidirectional image presentation on psychological and economic evaluation of landscapes」、Asano M Yokosawa K Ichinose D Tajima K、63rd Annual Meeting of the Psychonomic Society、2022.11.19
- [口頭発表 (一般)] 「Developmental changes in the grapheme-color association of Kanji characters observed in Japanese elementary school children」、Matsuda E Okazaki Y Asano M Yokosawa K、63rd Annual Meeting of the Psychonomic Society、2022.11.19
- [口頭発表 (招待・特別)] 「共感覚とイメージ —共感覚研究の最前線」、浅野倫子、日本イメージ心理学会第 23 回大会、2022.11.26
- [ポスター発表] 「VR 空間での距離知覚に対する障壁の影響」、木本桜子 峯大典 浅野倫子 横澤一彦、日本基礎心理学会第 41 回大会、2022.12.4
- [口頭発表 (一般)] 「就学前年のひらがな読字数と小学 1 年生の読字能力の関連」、奥村安寿子 北村柚葵 櫻井晴子 白川由佳 大山帆子 浅野倫子 北洋輔、第 21 回注意と認知合宿研究会、2023.3.6
- [ポスター発表] 「特異的読字障害の診断基準—4 年間の縦断追跡経過に基づく検証と再考—」、奥村安寿子 北村柚葵 櫻井晴子 白川由佳 大山帆子 浅野倫子 北洋輔、第 65 回日本小児神経学会学術集会、2023.5
- [ポスター発表] 「AI 絵画作品の美的評価におけるバイアスおよび道徳性との関連」、小野塚暁世 浅野倫子、2023 年度人工知能学会全国大会 (第 37 回)、2023.6
- [その他] 「Grapheme-color synesthesia and qualia」、Michiko Asano、学術変革領域研究 (A) 「クオリア構造学」第 1 回領域会議、2023.6.30
- [シンポジウム・ワークショップ パネル (公募)] 公募シンポジウム SS-009 「私とあなたの経験は同じ? ~発達の視点から子どもの知覚・感情クオリアを探索から」(話題提供)、浅野倫子、日本心理学会第 87 回大会、2023.9.15
- [ポスター発表] 「共感覚比喩理解と共感覚の経験頻度・安定度の関連: 大規模 web 実験による共通基盤の検討」、楠見孝 横澤一彦 浅野倫子 原島小也、日本心理学会第 87 回大会、2023.9.15
- [シンポジウム・ワークショップ パネル (公募)] 公募シンポジウム SS-021 「共感覚比喩と共感覚」(企画者、話題提供)、浅野倫子、日本心理学会第 87 回大会、2023.9.16
- [ポスター発表] 「形態情報の不足した顔の認知処理: 平均顔補完の可能性および魅力認知との関係」、大塚遥音 浅野倫子、日本心理学会第 87 回大会、2023.9.16
- [ポスター発表] 「映像と音楽の印象の主観的調和性が没入感に及ぼす影響」、張馨月 浅野倫子、日本心理学会第 87 回大会、2023.9.16
- [ポスター発表] 「Effects of categorical tonality perception on cross-modal correspondences between musical chords and colors.」、Harashima S Asano M Yokosawa K、64th Annual Meeting of the Psychonomic Society、2023.11.16
- [ポスター発表] 「Investigation of possible developmental loss of synesthesia.」、Asano M Sakurai H、64th Annual Meeting of the Psychonomic Society、2023.11.16
- [ポスター発表] 「共感覚者における意味処理の特異性に関する検討—意味ブライミング課題を用いて—」、原島小也 浅野倫子、日本基礎心理学会第 42 回大会、2023.12.2
- [ポスター発表] 「美術系大学生における共感覚的傾向の強さ」、筒井亜湖 浅野倫子 横澤一彦、日本基礎心理学会第 42 回大会、2023.12.3

[口頭発表（一般）]「共感覚者におけるクロスモーダルな意味処理の特異性に関する検討」、原島小也可 浅野倫子、第22回注意と認知合宿研究会、2024.3.5

[シンポジウム・ワークショップ パネル（指名）]‘Synesthetic color transfer to novel graphemes and its relation to grapheme learning’、Asano M、Mini symposium on Synaesthesia, Perception, and Individual Differences、2024.3.6

(5) 受賞

2023 年度日本基礎心理学会優秀発表賞、「共感覚者における意味処理の特異性に関する検討—意味プライミング課題を用いて—」、原島小也可 浅野倫子、日本基礎心理学会第42回大会、2023.12.2

2023 年度日本認知心理学会独創賞、「日本語における色字共感覚研究」、浅野倫子 横澤一彦、日本認知心理学会、2024.3

(6) 共同研究・競争的資金等の研究課題

[科学研究費助成事業]「共感覚比喻と共感覚現象に共通する認知メカニズム：大規模web実験による検討」、楠見孝 横澤一彦 浅野倫子、基盤研究（B）：21H00960、日本学術振興会、京都大学、2021.4～2025.3

[科学研究費助成事業]「視聴覚コンテンツにおける映像と音楽の適合性の効果の実験心理学的検討」、浅野倫子、基盤研究（C）：22K03199、日本学術振興会、東京大学、2022.4～2025.3

[科学研究費助成事業]「クオリア構造の実験心理学と数理」、土谷尚嗣 西郷甲矢人 Steven Phillips 浅野倫子、学術変革領域研究（A）：23H04830、日本学術振興会、株式会社国際電気通信基礎技術研究所、2023.11～2028.3

10a 日本語日本文学（国語学）

教授 井島 正博 IJIMA, Masahiro

1. 略歴

1982 年 3 月	東京大学文学部国語学専修課程卒業
1984 年 3 月	東京大学大学院人文科学研究科国語国文学専門課程修士課程修了
1984 年 4 月	東京大学大学院人文科学研究科研究生
1985 年 10 月	防衛大学校人文科学研究室助手
1989 年 4 月	山梨大学教育学部専任講師
1991 年 4 月	山梨大学教育学部助教授
1992 年 4 月	成蹊大学文学部日本文学科助教授
1998 年 4 月	東京大学大学院人文社会系研究科助教授（日本語・日本文学）
2007 年 4 月	東京大学大学院人文社会系研究科准教授（日本語・日本文学）
2012 年 4 月	東京大学大学院人文社会系研究科教授（日本語・日本文学）
2024 年 3 月	定年退職

2. 主な研究活動

a 専門分野

日本語学 日本語文法・日本語文法学史および言語理論

b 研究課題

現代語・古典語の日本語文法あるいは日本語文法学史および言語理論の研究をテーマとしている。なかでも現代語日本語文法に関する研究を一貫して続けており、これまでに、格構造（受身文、使役文、可能文、授受動詞構文）、テンス・アスペクト構造、言語行為構造（推量文、疑問文）、談話構造、中でも情報構造・視点構造（テンス、授受動詞構文）・期待構造（否定文、数量詞、限定表現、条件文）など、日本語文法をできる限りグローバルにとらえられる枠組を求めて考察を進めてきた。

さらに現代語の成果を古典語に適用して、古典語文法に新たな方向からアプローチをするとともに、従来の文法研究を歴史的にとらえることによって、各時代の文法理論を相対化することも試みている。言語理論に関しては、コミュニケーション行為構造の分析に力点を置きつつ、近年の有力な言語理論の批判的検討を通して、理論の全体像を模索している。

c 概要と自己評価

最近 10 年あまり特に力を入れて進めてきたことは、古典語のテンス・アスペクトに関して、これまでの研究史を概観し、その上に立ってこれまでの研究成果を包括的に説明できる理論的枠組を構築することであり、それは博士論文としてまとめた上で、それに推敲を重ね、『中古語過去・完了表現の研究』として出版することができた。現在では、テンス・アスペクトに続き、古典語の推量表現について研究を進めている。

またそれと平行して、現代語に関しては、ノダ・ワケダ・モノダ・コトダなどの形式名詞述語文、あるいは最近はとりたて詞と呼ばれることの多い副助詞、また否定文に関して研究を進めており、近い将来それぞれ単著としてまとめるつもりである。

さらにこれまであまり解明が進んでいない近世・近代の文法研究についても、数百点に及ぶ文献を収集し、それをもとに文法的な認識のあり方の変遷という観点から、分析を始めた。それぞれの時代の研究者が、どのような認識的な枠組のなかで研究をしてきたのか、そしてその枠組がどのようなきっかけで大きく方向を変えたのかなどを、実証的にたどっていきたい。

言語理論に関しても、特にグライスの端を発する研究の流れと広がりについて、批判的な究明を進めており、これもある程度全体像が見えてきた段階で、単著としてまとめたい。

d 研究業績

(1) 論文

【学術雑誌】「順接確定条件文のテンス」、井島正博、『国語と国文学』99 巻 5 号、pp.85-97、2022.5

[大学,研究機関紀要]「同格連体節あるいは引用節を含む文のテンス」、井島正博、『成蹊大学文学部紀要』58号、pp.117-136、2023.3

[学術雑誌]「複文のアスペクトそのほか」、井島正博、『日本語学論集』19号、pp.18-32、2023.3

[学術雑誌]「複文のテンス・アスペクトに関する諸問題」、井島正博、『成蹊國文』57号、pp.55-69、2024.3

[大学,研究機関紀要]「上代・中古語の推量助動詞ベシ」、井島正博、『成蹊大学文学部紀要』59号、pp.115-136、2024.3

(2) その他各種論著

[総説・解説(学術雑誌)]「ホーン『否定の博物誌』第5.1・5.2章の読解：反対否定と矛盾否定の考察のために」、河本健汰 西川由佳 井島正博 奥山光 木越弘 小坂光 阪上健夫 竹林栄実 陳港、『日本語学論集』20号、pp.(59)176-(85)150、2024.3

e その他

(1) 学会・委員活動

[委員歴] 日本語学会、評議員、2022.4～2024.3

教授 **肥爪 周二** HIZUME, Shuji

1. 略歴

1989年3月	東京大学文学部国語学専修課程卒業
1991年3月	東京大学大学院人文科学研究科国語国文学専攻修士課程修了
1993年3月	東京大学大学院人文科学研究科国語国文学専攻博士課程中退
1993年4月	明海大学外国語学部日本語学科専任講師（～1996年3月）
1996年4月	茨城大学人文学部人文学科専任講師（～1997年9月）
1997年10月	茨城大学人文学部人文学科助教授（～2003年3月）
2003年4月	東京大学大学院人文社会系研究科・文学部助教授
2007年4月	東京大学大学院人文社会系研究科・文学部准教授
2018年4月	東京大学大学院人文社会系研究科・文学部教授（～現在に至る）

2. 主な研究活動

a 専門分野

国語学

b 研究課題

日本語音韻史・日本漢字音史・日本韻学史を、主な専門領域とする。古代日本における外国語研究の二本の柱、すなわち漢字音韻学（中国語学）・悉曇学（梵語学）の学史的な研究を、主要な研究領域とする。先人の残したさまざまな記録を元に、江戸時代以前の日本における、音声観察・音声分類の発達および変遷を解明することを目指す。これらの研究成果と連動させつつ、漢字音の日本化の問題、拗音分布の偏在性についての歴史的解釈、濁音の起源（連濁現象の起源）についての考察など、音韻史分野にも研究対象を拡張し、着実に成果を上げている。近年の課題としては、国語音・漢字音（呉音系字音、漢音系字音、唐音系字音）・梵語音を総合する、日本語音節バリエーションの歴史を明らかにすることを目指している。

c 概要と自己評価

論文「近世音韻学における促音挿入形—『かたこと』『倭語連声集』『漢字三音考』—」（『近代語研究』第二十三集）は、「みぎっかわ（右側）」「さっき（先）」「きっかい（奇怪）」「れっき（歴）」のような和語・漢語の促音挿入形について、近世音韻学において「連声」「音便」の一種として分析されることを指摘すると同時に、漢語の促音挿入形の性質を考察したもの。「みぎがわ／みぎっかわ」「かわべり／かわっぺり」のように連濁形と促音挿入形は平行する面を持っているが、研究対象としての学界の関心には大きな偏りがある。

論文「平安時代の仮名表記―書き分けない音韻を中心に―」（『言語研究』164）は、「促音／撥音」「連濁形／促音 挿入形」「直音／拗音」など、平安時代には書き分けなかった音韻の対立を整理し、これらの音形のそれぞれがプロソディ的に把握される性質を共有していることを示唆した。点字による日本語表記にも言及する。

論文「ア段長音―長母音定着の最終局面―」（『近代語研究』第二十四集）は、歴史的変化として自然発生することのなかったア段長音が、他の長母音が二重母音から変化したことにより出揃った江戸時代中頃を待って、「おかあさん／おばあさん」類の親族名称、コソアド副詞「ああ」のような、語彙的な体系圧力が存在した部分にもっぱら生じたことを指摘した。

文献資料の調査と理論的な考察の双方を、バランスよく進めてゆくことを目指す方針が、順調に推し進められたと考える。今後、コロナ禍により停滞してしまった社寺における文献資料の調査を継続的に進め、その成果を順次公開していくことを目指したい。

d 研究業績

(1) その他各種論著

「漢字音・外来語音と日本語の音韻体系」、肥爪周二、『日本語学』41 巻 2 号、pp.84-91、2022.6

「近世音韻学における促音挿入形―『かたこと』『倭語連声集』『漢字三音考』―」、肥爪周二、『近代語研究』第二十三集、pp.73-92、2022.9

「平安時代の仮名表記―書き分けない音韻を中心に―」、肥爪周二、『言語研究』164 号、pp.1-16、2023.7

「語彙的連声と規則的連声」、肥爪周二、『むらさき』60 号、pp.61-65、2023.11

「ア段長音―長母音定着の最終局面―」、肥爪周二、『近代語研究』第二十四集、pp.1-19、2024.3

(2) 講演・口頭発表等

「江戸の語学マニアネットワーク―悉曇学者行智を中心に―」、肥爪周二、信州大学日本語学研究室夏季セミナー、2023.9.13

(3) 共同研究・競争的資金等の研究課題

「平安中期訓点資料による日本語音節構造史の研究」、肥爪周二、基盤研究（C）：19K00624、東京大学、2019.4.1～2024.3.1

「資料横断的な漢字音・漢語音データベースの拡充と運用に向けた基礎的研究」、加藤大鶴、基盤研究（B）：22H00665、跡見学園女子大学、2022.4.1～2025.3.1

e その他

(1) 学会・委員活動

日本語学会評議員（2022.4～2024.3）

訓点語学会運営委員長（2022.4～2024.3）

准教授 小西 いずみ KONISHI, Izumi

1. 略歴

1992 年 4 月	東京都立大学人文学部 入学
1996 年 3 月	東京都立大学人文学部 卒業
1996 年 4 月	東京都立大学大学院人文科学研究科国文学専攻 修士課程 入学
1998 年 3 月	東京都立大学大学院人文科学研究科国文学専攻 修士課程 修了
1998 年 4 月	東京都立大学大学院人文科学研究科国文学専攻 博士課程 入学
1999 年 3 月	東京都立大学大学院人文科学研究科国文学専攻 博士課程 退学
2005 年 4 月	東北大学大学院文学研究科言語科学専攻国語学専攻分野 博士課程後期 入学（社会人枠）
2008 年 3 月	東北大学大学院文学研究科言語科学専攻国語学専攻分野 博士課程後期 修了 博士（文学）（東北大学）
1999 年 4 月	東京都立大学人文学部 助手（2005 年 4 月、公立大学法人首都大学東京に改組）

2007年4月 広島大学大学院教育学研究科国語文化教育学講座 講師
2009年4月 広島大学大学院教育学研究科国語文化教育学講座 准教授
2020年4月 東京大学大学院人文社会系研究科 准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

日本語学、方言学

b 研究課題

日本語方言の記述的研究、対照研究、言語地理学的研究を専門領域とする。記述的研究における主な対象方言は、富山県方言、山梨県奈良田方言であり、これらの方言に関しては音韻・語彙・文法・談話構造にわたる総合的な記述を行うとともに、日琉方言全般を対象とする対照研究、言語地理学的研究においては、文法、特に格、主題、終助詞、命令・禁止表現、談話標識をテーマとする調査・研究を行う。また、こうした研究を支える基礎領域・関連領域として、言語アーカイブや言語ドキュメンテーション、日本の地域言語・方言をめぐる社会言語学的研究に携わっている。

c 概要と自己評価

2022～2023年度は、(1)富山県富山市方言・同朝日町方言、山梨県奈良田方言を主な対象として臨地調査にもとづく韻律や文法に関する記述的研究、(2)データベースやオンライン面接による、格や情報構造、モダリティに関する対照研究・言語地理学的研究を行った。それらの主な成果として、下記主要業績の学術論文、研究報告書を刊行した。また、それらの基礎資料となる、言語アーカイブ、言語ドキュメンテーションの成果として下記主要業績のデータベースを公開した。複数の査読付論文、招待論文を公刊しており、堅調な研究活動を行ったと自己評価している。

d 研究業績

(1) 書籍出版物

[分担執筆]『方言地理学の視界』、小林隆 大西拓一郎 篠崎晃一、「形態論と方言地理学：首都圏における対格の変異を例として (pp.109-143)」、勉誠社、2023.5、7,400pp

(2) 論文

[学術雑誌]「山梨県奈良田方言の行為要求表現体系：命令と禁止の対称性に着目して」、小西いずみ、『国語と国文学』99巻5号、pp.126-139、2022.5
[学術雑誌]「ナラティブにおける富山方言のナ（一）ン・ナモ：談話における感動詞の運用の事例研究」、小西いずみ、『方言の研究』8巻、pp.117-138、2022.7
[学術雑誌]「首都圏方言の二重対格構文：オと無助詞による適格性の違い」、小西いずみ 大槻知世 白岩広行、『日本語の研究』18巻3号、pp.35-51、2022.12

(3) その他各種論著

[速報・短報・研究ノート等（学術雑誌）]「コロナ禍における方言研究」、下地理則 松浦年男 久保蘭愛 平子達也 小西いずみ、『社会言語科学』25巻1号、pp.134-141、2022.9
「日琉方言の疑問文・疑問表現調査票」、小西いずみ 小田幸生 小幡幸輝 阪上健夫 竹林栄実 山本久、『日本語学論集』19巻、pp.(34)127-(49)112、2023.3
[総説・解説（学術雑誌）]「奈良田方言：特集補遺データ「受動表現」「ヴォイスとその周辺」「アスペクト」「モダリティ」「所有・存在表現」、阪上健夫 小西いずみ 三樹陽介 吉田雅子、『語学研究所論集』28巻、2024.3
[総説・解説（学術雑誌）]「日琉方言の準体形式調査票」、小西いずみ 阪上健夫 岩崎凜太郎 河本健汰 陳港 西川由佳 朴校演 平井偉在 耶 福田建、『日本語学論集』20巻、pp.86(149)-104(131)、2024.3

(4) 講演・口頭発表等

[シンポジウム・ワークショップ パネル（指名）]「聞き手待遇と談話管理における日本語方言の多様性と均質性」、小西いずみ、東京大学国語国文学会令和4年度大会：シンポジウム「ことばの地域性」、2022.4.23
[口頭発表（招待・特別）]「山梨県奈良田方言の疑問：準体助詞のない方言におけるスコープ、事態既定性」、小西いずみ、日本語文法学会第23回大会、2022.12.17
[ポスター発表]「富山市方言における疑問文の文末イントネーション」、小西いずみ、言語学フェス2023、2023.1.28
[口頭発表（招待・特別）]「方言の島」の語られ方：山梨県奈良田集落とそのことばをめぐる言説」、小西いずみ、社会言語科学会第47回大会、2023.3.17

(5) 共同研究・競争的資金等の研究課題

[科学研究費助成事業]「日本語諸方言における終助詞体系の対照研究」、小西いずみ、基盤研究（C）：17K02777、日本学術振興会、2017.4～2023.3

- [科学研究費助成事業]「日琉諸語の有標主格性に関する基礎的研究」、下地理則 原田走一郎 白岩広行 平子達也 野間純平 大槻知世 小西いずみ 平塚雄亮 日高水穂 久保蘭愛、基盤研究 (B) : 19H01255、日本学術振興会、九州大学、2019.4～2023.3
- [科学研究費助成事業]『『全国方言文法辞典』データベースの拡充による日本語時空間変異対照研究の多角的展開』、日高水穂 青木博史 井上文子 大西拓一郎 小嶋賀代子 小西いずみ 小柳智一 酒井雅史 高木千恵 竹田晃子 仲原穰 中本謙 野間純平 橋本礼子 林良雄 平塚雄亮 前田直子 松丸真大 三井はるみ 森勇太 山田敏弘 矢島正浩、基盤研究 (A) : 20H00015、日本学術振興会、関西大学、2020.4～2025.3
- [科学研究費助成事業]「日琉諸語における格という文法カテゴリーの検討」、竹内史郎 松丸真大 中川奈津子 小西いずみ 下地理則 林由華、挑戦的研究 (萌芽) : 20K20704、日本学術振興会、成城大学、2020.7～2023.3
- [科学研究費助成事業]『『瀬戸内海言語図巻』の追跡調査による音声言語地図の作成と言語変容の研究』、友定賢治 松田美香 村上敬一 峪口有香子 塩川奈々美 酒井雅史 大西拓一郎 脇忠幸 灰谷謙二 小西いずみ 又吉里美 白田理人 小川俊輔 岩城裕之 有元光彦 岸江信介 中東靖恵 森勇太 山本空、基盤研究 (B) : 21H00530、日本学術振興会、県立広島大学、2021.4～2025.3
- [科学研究費助成事業]「日本語諸方言コーパスによる方言音調の比較類型論的研究」、木部暢子 五十嵐陽介 小西いずみ 中西太郎 白岩広行 大槻知世 中川奈津子 籠宮隆之、基盤研究 (A) : 21H04351、日本学術振興会、大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所、2021.4～2025.3
- [科学研究費助成事業]「フィールドデータのアーカイブに向けた問題点の整理と解決策」、中川奈津子 田窪行則 籠宮隆之 山田真寛 小西いずみ 大向一輝、挑戦的研究 (萌芽) : 21K18376、日本学術振興会、大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所、2021.7～2024.3
- [共同研究プロジェクト]「消滅危機言語の保存研究」、国立国語研究所、2022.4～
- [科学研究費助成事業]「日琉諸語における数カテゴリーとその表現方法に関する基礎的研究」、下地理則 山田真寛 平子達也 新永悠人 小西いずみ 上林葵 佐々木冠 クリストファー デイビス、基盤研究 (B) : 23H00634、日本学術振興会、九州大学、2023.4～2026.3
- [科学研究費助成事業]「日本語諸方言の形態素解析用辞書の構築と活用」、小木曾智信 五十嵐陽介 坂井美日 村上謙 近藤明日子 平子達也 大槻知世 宮川創 中川奈津子 小西いずみ 久保蘭愛 中澤光平、基盤研究 (B) : 23H00007、日本学術振興会、大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所、2023.4～2027.3

e その他

(1) 学会・委員活動

- [委員歴] 日本学術会議、連携会員、2020.10～
- [委員歴] 日本言語学会、編集委員会委員、2021.4～
- [委員歴] 社会言語科学会、理事、事務局長、2021.4～
- [委員歴] 日本方言研究会、世話人、2021.6～、編集委員会委員、2021.6～、編集委員長、2022.8～

10b 日本語日本文学（国文学）

教授 安藤 宏 ANDO, Hiroshi

1. 略歴

1982 年 3 月	東京大学文学部国文学専修課程卒業
1985 年 3 月	東京大学大学院人文科学研究科国語国文学専門課程修士課程修了
1987 年 3 月	東京大学大学院人文科学研究科国語国文学専門課程博士課程中退
1987 年 4 月	東京大学文学部助手
1990 年 4 月	上智大学文学部専任講師
1995 年 4 月	上智大学文学部助教授
1997 年 4 月	東京大学大学院人文社会系研究科助教授
2007 年 4 月	東京大学大学院人文社会系研究科准教授
2010 年 4 月	東京大学大学院人文社会系研究科教授
2024 年 3 月	定年退職

2. 主な研究活動

a 専門分野

日本近代文学

b 研究課題

太宰治の文学の自意識過剰の饒舌体と呼ばれる文体に注目するところから出発、そのような文体が育まれてゆく必然性を近代文学史の展開に即して考察する中で、「私小説」というわが国独自の表現形式の生み出されていく過程を表現史的に解明する方向へと進んだ。作家論の一環として太宰治の文学の特質を解明して行く方向と、小説を中心とする日本近代文学の表現機構の研究とを、並行しておしすすめて行くことを研究課題としている。

c 概要と自己評価

「表現機構」という観点から、小説が小説として認知される暗黙の要件を分析し、近代日本における変遷の様相を、『近代小説の表現機構』（岩波書店、2012 年）にまとめ、それをさらに一般書の形で『日本近代小説史』（中公選書、2015 年）と『「私」をつくる 近代小説の試み』（岩波新書、2015 年）にまとめた。これら近代小説研究に関する成果を踏まえ、これまでの太宰治研究の成果を集大成し、『太宰治論』（東京大学出版会、2021 年）を刊行した。

d 研究業績

(1) 書籍出版物

〔監修〕『ちくま文学講読 上級編』、安藤宏・紅野謙介、筑摩書房、全 255p、2022.9

〔分担執筆〕「太宰治 文学の魅力」、安藤宏、『高校生と語る 21 世紀の突破口』、左右社、pp146-159、2023.4

〔教科書〕文科省検定『論理国語』共編、全 447p、筑摩書房、2023.1

〔教科書〕文科省検定『文学国語』共編、全 480p、筑摩書房、2023.1

(2) その他各種論著

〔論著〕「文学研究の醍醐味—『太宰治論』を上梓して」、安藤宏、『東京新聞』夕刊 5 面、2022.6.21

〔論著〕「走れメロス」の世界」、安藤宏、『国語教育』887 号、pp.44-49、2023.11

〔論著〕「文末詞について思うこと」、安藤宏、『日本語学』42 巻 3 号、pp.74-80、2023.12

〔解説〕「解説」、安藤宏、岩波文庫『右大臣実朝 他一編』太宰治作、pp.259-281、2022.8

〔コラム〕「言葉の遠近法」、安藤宏、『公明新聞』5 面、2023.1.16、2.15、3.15、4.12、5.10、6.7、7.5、8.2、9.2、10.4、11.8、12.13、2024.1.24、2.21、3.20

〔エッセイ〕「『三〇代』の視点を楽しむ」、安藤宏、『DayArt』30 号、p.3、2023.5.31

〔エッセイ〕「文武両道」、安藤宏、『朝陽』72 号、p.78、2023.6

〔対談・インタビュー〕「鼎談（偉大なる落伍者）安吾に迫る網羅的大事典」、安藤宏、大原祐治、十重田裕一、『週刊読書人』3446 号、pp.1-2、2022.7.1

〔対談・インタビュー〕「文学は理解し得ないものを受け入れる力を育む」、安藤宏、『東京大学新聞』2994 号、pp.1-3、2023.10.10

[対談・インタビュー]「対談『太宰治が生きたまち・三鷹』で育む新たな文化」、安藤宏・河村孝、『みたか』1754号、pp.4-5、2024.1.1

(3) 講演・口頭発表等

公開講座「太宰治の文体—近代小説の「言」と「文」、安藤宏、東京大学文学部、2022.6.11

臼井吉見文学館講演会「太宰治と臼井吉見 筑摩書房との関係を中心に」、安藤宏、安曇野市堀金公民館、2022.7.12

文学館演習「資料を活用する研究法 自筆資料」、安藤宏、日本近代文学館、2022.8.23

図書資料委員会報告「大江健三郎文庫の概要」、安藤宏、日本近代文学館、2022.12.9

講演「太宰治文学の魅力」、安藤宏、桐光学園中学高等学校、2022.10.22

日文特別講演会「太宰治と近代作家たち—芥川龍之介・川端康成・志賀直哉」、安藤宏、昭和女子大学、2022.12.16

トークイベント「犠牲の森で 大江健三郎の死生観」、安藤宏、菊間晴子、紀伊國屋書店新宿本店、2023.6.7

講演会「太宰治の文学—川端康成と志賀直哉との関わりを中心に」、安藤宏、和洋女子大学、2023.10.17

古田晁文学サロン「古田晁と太宰治「人間失格」、安藤宏、塩尻市市民交流センター、2023.10.28

尾崎紅葉歿後120年、泉鏡花生誕150年記念イベント「泉鏡花『高野聖』の世界」、安藤宏、新宿区立四谷区民ホール、2023.12.3

文化交流研究懇談会「『小説家小説』の可能性—日本の近代小説を例に—」、安藤宏、東京大学文学部、2023.12.7

「東京大学最終講義 近代文学研究を振り返って」、安藤宏、東京大学文学部、2024.1.18

加藤周一記念講演会「草稿から見えてくるもの「大江健三郎文庫」開設を記念して」、安藤宏、日仏会館、2024.3.15

(4) 受賞

第114回日本学士院賞 研究題目「太宰治論」、安藤宏、2024.3.12

e 社会活動

(1) 社会貢献活動（地域連携）

[助言] 三鷹市及び公益財団法人三鷹市スポーツと文化財団に対し、文学関係寄贈資料に関する助言、2023.10

(2) メディア報道

[新聞]「太宰研究 40年の集大成」、「東奥日報」、17面、2022.2.11

[新聞]「近代化との相違 苦悩した太宰 安藤宏・東大教授が研究集大成」、「読売新聞」22面、2022.3.10

[新聞]「太宰研究のネットワークを」、「東奥日報」、11面、2022.6.16

f その他

(1) 学会・委員活動

[公的機関] 公益財団法人日本近代文学館専務理事、2022年度、2023年度

[公的機関] 国家公務員採用総合職試験専門委員 2023.5.31～

[公的機関] 大学共同利用機関法人人間文化研究機構国文学研究資料館運営会議委員、2022年度、2023年度

[学会] 東京大学国語国文学会、会長、2022.4～12

[学会] 日本近代文学会、理事、～2022.3

[教科書] 教育出版中学国語教科書編集委員、2022年度、2023年度

[教科書] 筑摩書房教科書編集委員、2022年度、2023年度

教授 鉄野 昌弘 TETSUNO, Masahiro

1. 略歴

1983年3月	東京大学文学部国文学専修課程卒業
1983年4月	東京大学大学院人文科学研究科国語国文学専門課程修士課程入学
1986年3月	同 修了
1986年4月	東京大学大学院人文科学研究科国語国文学専門課程博士課程進学
1990年3月	同 単位取得退学

1990年4月	帝塚山学院大学文学部専任講師
1994年4月	帝塚山学院大学文学部助教授
1995年4月	東京女子大学文理学部助教授
2003年4月	東京女子大学文理学部教授
2007年12月	東京大学大学院人文科学研究科 国語国文学専門課程 博士（文学）学位取得
2009年4月	東京女子大学現代教養学部教授（改組による学部名変更）
2013年4月	東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

日本上代文学・和歌文学

b 研究課題

上代（奈良時代以前）日本文学を、韻文中心に研究している。特に『万葉集』の歌人、柿本人麻呂や、大伴家持の作品について、その読み直しを課題としている。『万葉集』の和歌は、中国の先進文明に正面から向き合って成立した日本という国家における草創期の文芸であり、漢詩文の表現に対して、学びつつ対抗するという両義的な関係を結んでいる。それゆえ、当時伝来していた六朝・初唐の漢詩文との比較・対照を主たる研究方法として、和歌独自の表現を明らかにしつつ、その価値を見出すことを論文執筆の際の、目標としている。更に『万葉集』は、7世紀前半から、8世紀中ごろまでの和歌の歴史を語る書物であると考えられ、歌人たちの積み重ねた作品群がいかなる軌跡を描くか、すなわち『万葉集』の和歌史を明らかにすることを、研究全体の目標とする。

c 概要と自己評価

2022年度は、一年間、NHK ラジオ「古典講読 歌と歴史でたどる万葉集」の台本作りと収録に追われ、その他の仕事はあまり多くできなかった。2023年度は、旧師の遺稿を補いつつ、『播磨国風土記全訳注』の刊行に力を注ぎ、2024年5月によりやく刊行することができた。大伴家持に関する研究は、年に一篇ずつであるが、かなりボリュームのあるものを書いていて、煮詰まって来た感がある。そのまとめと、ラジオ講座の成書化は、2025年3月の定年後の課題としたい。

d 研究業績

(1) 書籍出版物

〔共編著〕『萬葉集研究』第42集、塙書房、2023.3（奥村和美氏との共編）

〔共編著〕『萬葉集研究』第43集、塙書房、2024.2（同上）

〔分担執筆〕『万葉集』にみる女と男——古代の歌における虚構と現実との相関、吉村武彦・吉川真司・川尻秋生編『シリーズ 古代史をひらくⅡ 古代人の一生 老若男女の暮らしと生業』岩波書店、2023.11

(2) 論文

「家持帰京後の宴歌」、『萬葉集研究』第42集、塙書房、2023.3

『万葉集』における「喚辞」、『萬葉集研究』第43集、塙書房、2024.2

(3) その他各種論著

〔書評〕古屋彰著『家持「歌日誌」の文字世界』、『萬葉』234号、2022.10

〔書評〕隋源遠著『古代立春詠論考 季節と差異』、『国語と国文学』99巻11号、2022.11

(4) 講演・口頭発表等

〔口頭発表（一般）〕『万葉集』における「喚辞」、令和五年度上代文学会大会研究発表会、2023.5.21

e 社会活動

(1) メディア報道

NHK ラジオ第2、「古典講読 歌と歴史でたどる万葉集」、週1回45分間、2022.4～2023.3

f その他

(1) 非常勤講師

東京女子大学、2022.9～2023.3

(2) 学会・委員活動

萬葉学会、代表、2022.4～現在に至る

東京大学国語国文学会、会長、2023.1～現在に至る

上代文学会常任理事、2022.4～2023.3

1. 略歴

1988 年 3 月	東京大学文学部国文学専修課程卒業
1988 年 4 月	東京大学大学院人文科学研究科国語国文学修士課程入学
1991 年 3 月	同 修了
1991 年 4 月	東京大学大学院人文科学研究科国語国文学博士課程進学
1996 年 3 月	東京大学大学院人文社会系研究科日本文化研究専攻日本語日本文学専門分野博士課程単位取得退学
1996 年 4 月	東京大学大学院人文社会系研究科日本文化研究専攻日本語日本文学専門分野研究生(～1997年3月)
1998 年 4 月	博士(文学) 学位取得(東京大学) 東京大学大学院人文社会系研究科日本文化研究専攻日本語日本文学専門分野博士課程修了
1998 年 4 月	関西学院大学文学部専任講師
2002 年 4 月	関西学院大学文学部助教授(2007 年 4 月より准教授)
2008 年 4 月	関西学院大学文学部教授
2013 年 4 月	東京大学大学院人文社会系研究科准教授
2017 年 4 月	東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

平安文学、源氏物語、物語史

b 研究課題

源氏物語は、平安前期に成立した長編物語・歌物語・和歌の発想を基盤とし、日記文学・漢詩文・史実等を食婪に吸収して成立したと思われる。そこに到りつくまでの文学史的な動態、及び、源氏物語それ自体の構造や表現の分析を主な研究課題としており、初期の成果は『源氏物語の思考』（風間書房、2002 年、第五回紫式部学術賞受賞）にまとめた。また平安時代の人々の思考や発想の形式にも関心を寄せており、和歌の贈答の分析を通じた意思伝達の呼吸などについて、『女から詠む歌 源氏物語の贈答歌』（青簡舎、2008 年）に提案、これまでの成果は『源氏物語再考 長編化の方法と物語の深化』（岩波書店、2017 年）にまとめた。『風葉和歌集』（和歌文学大系、明治書院、2019 年）や『古今和歌集』（和歌文学大系、明治書院、2021 年）の注釈にも分担で参加した。そのほか、研究成果を一般の人々に分かりやすく伝える仕事として、瀬戸内寂聴訳源氏物語の注釈等の執筆のほか『男読み 源氏物語』（朝日新書、2008 年）、『コレクション日本歌人選 和泉式部』（笠間書院、2011 年）、『平安文学でわかる恋の法則』（ちくまプリマー新書、2011 年）、『源氏物語を読む』（岩波新書、2021 年）等の一般書も手掛けている。

c 概要と自己評価

今期は、中古文学会やフランスイナルコ主催の国際会議など、シンポジウム等に参加する機会に恵まれた。海外の大学からの要請での論文執筆をするなど、これまでと異なる場での国際発信の機会も得られた。一定の学術論文も執筆したが、並行して一般書も 2 冊刊行した。2024 年の NHK 大河ドラマ『光る君へ』放映の関連で、平安時代や紫式部、『源氏物語』が注目される中で、一般に向けての書籍・記事等の監修や講演の依頼が多く、それに応じてこれまでの研究の要点を一般に向けて紹介しつつ、自己の研究を振り返ることとなった。

d 研究業績

(1) 書籍出版物

- [単著]『源氏物語入門（岩波ジュニア新書）』、岩波書店、単行本（一般書）、2023.9、226p
- [単著]『源氏物語の作者を知っていますか（だいわ文庫）』、大和書房、単行本（一般書）、2023.12、383p
- [監修]『眠れなくなるほど面白い 図解 源氏物語』、日本文芸社、単行本（一般書）、2023.4
- [監修]『寂聴源氏物語』、「本文選定、解説（高木和子） あらすじ 主要人物紹介 主要人物系図」、講談社、単行本（一般書）、2023.11
- [監修]『紫式部：平安時代に活躍した『源氏物語』の作者（集英社版・学習まんが 世界の伝記 NEXT）』、児童書、塩島れい まんが、はのまきみ シナリオ、高木和子 監修、集英社、単行本（一般書）、2023.11
- [監修]『光源氏：「光る君」とよばれた『源氏物語』の主人公（集英社版・学習まんが 世界の伝記 NEXT；名作主人公編）』、春野まこと まんが、はのまきみ シナリオ、高木和子 監修、集英社、単行本（一般書）、2024.3

(2) 論文

「源氏物語における〈無常〉について」、『中古文学 / 中古文学会 編』110号、pp.23-34、2022.11

「霽標巻、臨終の六条御息所」、『むらさき / 紫式部学会 編』59巻、pp.96-106、2022.12

「光源氏の出家願望から薫の道心と浮舟の出家へ」、『東京大学国文学論集』18巻、pp.21-38、2023.3.25

「平安朝仮名日記文学における類型的場面―雨の日の訪問、戸を開けない女―」、『武蔵野文学』71巻、pp.11-15、2023.12

「『源氏物語』における「宿世」による構造化の方法」、『LINGÜÍSTICA Y LITERATURA』85巻、UNIVERSIDAD DE ANTIOQUIA (アンティオキア大学、コロンビア)、pp.13-28、2024.2

(3) その他の各種論著

[書評] 廣田收著『表現としての源氏物語』、『国語と国文学』、100巻3号、pp.141-145、2023.3

(4) 講演・口頭発表等

[口頭発表(基調)]「シンポジウム「源氏物語を〈読む〉―研究の現在」基調報告③「源氏物語における〈無常〉について」、二〇二二年度 中古文学会春季大会、専修大学神田キャンパス、中古文学会、2022.5.21

[口頭発表(基調)]「歴史のエクリチュールとフィクション―中国から日本へ「平安文学における歴史と虚構」、オンライン国際研究集会、パリ源氏研究グループ主催、イナルコ、2022.11.12

[公開講演]「源氏物語における出家と道心」、第33回源氏物語アカデミー「源氏物語と信仰」、福井県越前市、源氏物語アカデミー委員会、2022.10.22

[公開講演]「紫式部と『源氏物語』」、第34回源氏物語アカデミー「源氏物語と殿舎」、福井県越前市、源氏物語アカデミー委員会、2023.10.21、2023.10.20～2023.10.22

[公開講演]「源氏物語の魅力」、四国大学共通講義棟、四国大学学術融合研究所、2023.12.16

[公開講演]「紫式部と源氏物語」、蔵市立図書館 文学講演会、埼玉県蔵市、2024.2.3

[公開講演]「古典講演会～源氏物語をよみとく～ 紫式部と源氏物語」、古典講演会、町田市民文学館、町田市民文学館、2024.3.16

[公開講演]「源氏物語の作者を知っていますか」、毎日文化センター梅田、大阪、2024.3.27

[セミナー、講習、連続講座等]「源氏物語を読む」、毎日文化センター梅田、大阪、1999.5～現在

[セミナー、講習、連続講座等]「源氏物語とは何か」、新青天白雲塾、不識庵、2022.10

[セミナー、講習、連続講座等]「紫式部と源氏物語」、和学入門、神保町、学士会館、和の心のフォーラム、2023.4.12

[セミナー、講習、連続講座等]「源氏物語講読」、紫式部学会「源氏物語講読」、2023.6～2023.11

e 社会活動

(1) メディア報道

[新聞・雑誌等]「源氏物語 平安時代 SEX&バイオレンス 大研究」、徳間書店「アサヒ芸能」、2022.7.7

[新聞・雑誌等]「特集源氏物語 (7つのキーワードで読み解く名場面／物語を彩る登場人物／希代の作家、紫式部の素顔)」、VJA グループ 三井住友カード株式会社「VISA 2022 9+10月号」、2022.9.1

[新聞・雑誌等]「世の中のしくみシリーズ 源氏物語」、クレジットカード会社 VISA「Niceday VISA」、2023.12

[新聞・雑誌等]「大河ドラマで紫式部に注目、「源氏物語」自身も織り込む」、「読売新聞」、2024.1.23

f その他

(1) 学会・委員活動

[委員歴] 中古文学会、常任委員・編集委員、2015.6～現在

[委員歴] 紫式部学会、理事、2015.7～現在

[委員歴] 和歌文学会、委員、2022.11～現在

[委員歴] 紫式部顕彰会、紫式部学術賞審査委員、2016.6～、審査委員長、2020.6～現在

1. 略歴

- 1994年3月 お茶の水女子大学文教育学部国文学科卒業
1994年4月 東京大学大学院人文科学研究科国語国文学専攻修士課程入学
(1995年4月に人文社会系研究科日本文化研究専攻日本語日本文学専門分野と改称)
1997年3月 同 修了
1997年4月 東京大学大学院人文社会系研究科日本文化研究専攻日本語日本文学専門分野博士課程進学
2000年3月 同 修了
2000年3月 博士(文学)学位取得(東京大学)
2000年4月 椋山女学園大学人間関係学部専任講師
2003年4月 椋山女学園大学人間関係学部助教授
2007年4月 日本大学文理学部准教授
2013年4月 日本大学文理学部教授
2018年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授
2023年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

日本近世文学

b 研究課題

近世後期から明治前期の戯作と芸能を主な研究対象としている。作品読解を通じて表現の基底にある価値観や知識を明らかにすること、近世の娯楽文化をめぐる諸事象と現代文化との連続性を考察することを目標としている。

c 概要と自己評価

戯作の文体と表現様式の分析から出発し、長編合巻の翻刻と書誌学的研究、戯作者山東京伝に関する研究などを積み重ねてきた。近年は幕末・明治に活躍した落語家三遊亭円朝の作品研究や、戯作に対する出版統制の実態解明にも力を注いでいる。これまで、近世後期の合巻に関する研究成果をまとめた『江戸の絵入小説―合巻の世界―』(ペリカン社、2001)、山東京伝の評伝をまとめた『山東京伝―滑稽洒落第一の作者―』(ミネルヴァ書房、2009)、古典を中心とする日本文学に描かれた妖術使いについて考察した『妖術使いの物語』(国書刊行会、2009)、戯作に対する出版統制について考察した『江戸の出版統制―弾圧に翻弄された戯作者たち―』(吉川弘文館、2017)などを発表している。

2022・2023年度は、戯作および落語に関する論文を発表し、幕末の合巻に関する研究成果をまとめた『幕末の合巻―江戸文学の終焉と転生』を刊行した。また、Laura Moretti氏との共編で草双紙に関する論文集『Graphic Narratives from Early Modern Japan: The World of Kusazōshi』を刊行した。

d 研究業績

(1) 書籍出版物

[単著]『幕末の合巻―江戸文学の終焉と転生』、岩波書店、単行本(学術書)、2024.2

[共編者]『Graphic Narratives from Early Modern Japan: The World of Kusazōshi』、Brill、単行本(学術書)、2024.2 (Laura Moretti氏との共編)

(2) 論文

[学術雑誌]「石川淳と山東京伝―洒落本へのまなざし」、『アナホリッシュ国文学』11号、白順社、pp.73-82、2022.11

[学術雑誌]「草双紙と「戯作」」、『日本文学』72巻7号、日本文学協会、pp.35-43、2023.7

[論文集(書籍)内論文]「「文七元結」と江戸・東京」、田中優子編『落語がつくる〈江戸東京〉』、岩波書店、pp.61-80、2023.9

(3) その他各種論著

[書評・文献紹介等]「概観 日本文学〈古典〉」、日本文藝家協会編『文藝年鑑2022』、新潮社、pp.43-45、2022.6

[書評・文献紹介等]「概観 日本文学〈古典〉」、日本文藝家協会編『文藝年鑑2023』、新潮社、pp.45-47、2023.6

(4) 講演・口頭発表等

[公開講演]「江戸文学のなかの鬼」、すみだ地域学スペシャル講義、すみだ生涯学習センター、2022.6.25

[セミナー]「合巻の出版と規制」、Summer School in Early Modern Japanese Palaeography、ケンブリッジ大学、2022.8.16
(オンライン)

[ワークショップ]「The Art of Overlaying, Mitate in Early Modern Books. 江戸の見立て絵本」、ケンブリッジ大学、2023.5.8
～10

e その他

(1) 学会・委員活動

[委員歴] 国文学研究資料館古典籍共同研究事業センター 拠点連携委員会委員、2019.6～2024.3、センター運営委員会委員、2021.4～2024.3

[委員歴] 日本近世文学会 常任委員、2022.6～現在に至る

准教授 **木下 華子** KINOSHITA, Hanako

1. 略歴

1994年4月	東京大学教養学部文科三類入学
1996年4月	東京大学文学部言語文化学科日本語日本文学（国文学）専修課程進学
1998年3月	同 卒業
1998年4月	東京大学大学院人文社会系研究科日本文化研究専攻日本語日本文学専門分野修士課程入学
2001年3月	同 修了
2001年4月	東京大学大学院人文社会系研究科日本文化研究専攻日本語日本文学専門分野博士課程入学
2006年3月	同 単位取得退学
2009年4月	東京大学大学院人文社会系研究科日本文化研究専攻日本語日本文学専門分野博士課程再入学
2010年3月	同 退学
2010年7月	博士（文学）学位取得（東京大学）
2011年4月	ノートルダム清心女子大学文学部 専任講師
2014年4月	ノートルダム清心女子大学文学部 准教授
2019年4月	東京大学大学院人文社会系研究科 准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

日本中世文学・和歌文学

b 研究課題

日本の中世文学・和歌文学の研究を専攻している。特に平安時代後期から中世にかけての言説を研究の中心とし、鴨長明の諸作品（『方丈記』『無名抄』『発心集』）を一つの軸とし、和歌・説話・随筆・紀行文を主たる分析対象とする。核となる問題意識は、言葉がどのような世界をつくりだすのか、何を実現するのかということにある。その現場を、表現が巧まれる必然性・言説の主体や文化圏の価値観や構想という視点から分析し、中世における人と言葉の有り様の解明を試みる。鴨長明の諸作品を中心とした業績については、『鴨長明研究——表現の基層へ』（勉誠出版、2015年、第9回日本古典文学学術賞）として発表した。和歌に関する共著として『俊頼述懐百首全釈』（風間書房、2003年）、『慈円難波百首全釈』（風間書房、2009年）、『和歌文学大系 49 正治二年院初度百首』（明治書院、2016年）、説話に関する共著として『近世寺社伝資料『和州寺社記』・『伽藍開基記』（和泉書院、2017年）、『世継物語注解』（和泉書院、2023年）がある。

上記を引き継ぎつつ、中世という時代を文学研究の立場から解明することが近年の課題である。中世文学における災害や廃墟といった表象に着目し、その機能を検討することで、数多くの動乱や災害、社会変化に見舞われつつも、それを受容し、乗り越えて、新たな時代を切り拓き、文化を創り出していった時代の推進力・必然性を明らかにしたいと考えている。

c 概要と自己評価

研究代表者として関わった共同研究「古代・中世日本における廃墟の文化史」における問題意識とも関連しつつ、『方丈記』や『海道記』といった中世前期を代表する作品内の廃墟の表象に着目・分析し、表現論・表現史研究の立場から作品生成のメカニズムを明らかにした。また、これらの研究成果を社会・一般に還元すべく、国際シンポジウム「古代・中世日本における廃墟の文化史」を開催、神奈川県立金沢文庫での展示『特別展 廃墟とイメージ——憧憬、復興、文化の生成の場としての廃墟——』の企画や講座運営などへの協力を行った。国際連携の面では、韓国・高麗大学で災害文学についての講演を行っている。これらの研究活動を通して、災害認識や災害・廃墟からの再生・復興という視点が国際性を持つと同時に、現代的な課題として高い普遍性を伴っていることが確認された。

d 研究業績

(1) 書籍出版物

[共著]『世継物語注解』、和泉書院、単行本（学術書）、2023.2

[教科書] 文科省検定『古典探究 古文編』共編、全320p、筑摩書房、2023.1

(2) 論文

[学術雑誌]『『海道記』の叙述方法——古典引用と和歌を中心に』、『国語と国文学』99巻8号、東京大学国語国文学会、pp.21-37、2022.8

[学術雑誌]『『方丈記』「都遷り」の生成と遷都をめぐる表現史』、『説話文学研究』58号、説話文学会、pp.143-154、2023.9

[論文集（書籍）内論文]「廃墟への眼差し——兼好法師と金沢」、神奈川県立金沢文庫『特別展 廃墟とイメージ——憧憬、復興、文化の生成の場としての廃墟——』、神奈川県立金沢文庫、pp.98-103、2023.9

(3) その他各種論著

[書評・文献紹介等]「書評 陸奥霞著『遁世文学論』」、『国語と国文学』100巻2号、東京大学国語国文学会、pp.67-71、2023.2

[書評・文献紹介等]「書評 芝波田好弘著『方丈記試論』」、『説話文学研究』58号、説話文学会、pp.212-214、2023.9

(4) 講演・口頭発表等

[口頭発表（招待・特別）]『『方丈記』「都遷り」の生成と遷都をめぐる表現史』、説話文学会例会「五大災厄のシンデミック——『方丈記』の時代」、早稲田大学戸山キャンパス、2022.9.17

[口頭発表（招待・特別）]「歌枕と廃墟——紀行文を中心に」、国際シンポジウム「古代・中世日本における廃墟の文化史」、早稲田大学戸山キャンパス、2023.3.18

[公開講演]「『不思議』なる災害認識——鴨長明『方丈記』を読む——」、高校生と大学生のための金曜特別講座（東京大学大学院総合文化研究科・教養学部）、オンライン、2023.5.12

[公開講演]「廃墟と時間——『方丈記』と『徒然草』から——」、神奈川県立金沢文庫連続講座「『廃墟』と古典文学」、神奈川県立金沢文庫、2023.11.4

[公開講演]「日本の災害文学を考える——『方丈記』から『すずめの戸締まり』まで——」、高麗大学グローバル日本研究院・高麗大学4段階BK21中日教育研究団主催招待講演会、高麗大学、2023.11.23

[公開講演]『『平家物語』と熊野』、東大人文・若手国際フォーラム in 熊野、新宮商工会議所、2024.2.18

(5) 共同研究・競争的資金等の研究課題

「古代・中世日本における廃墟の文化史」、日本学術振興会科学研究費助成事業・基盤研究(C)：課題番号20K00337、研究代表者、2020.4～2023.3

「黒川家旧蔵資料の調査研究—江戸から明治期の〈知〉の流通と古典学の学術体系の解明—」、日本学術振興会科学研究費助成事業・基盤研究(C)：課題番号23K00310、研究分担者、2023.4～現在

e 社会活動

(1) 社会貢献活動

[講師] 池袋コミュニティカレッジ『『徒然草』を読む』講師、2022.4～2023.9

[講師] 池袋コミュニティカレッジ『『平家物語』を読む』講師、2023.10～現在

[企画] 神奈川県立金沢文庫『特別展 廃墟とイメージ——憧憬、復興、文化の生成の場としての廃墟——』、神奈川県立金沢文庫、2023.9.29～11.26

(2) 学術貢献活動

[査読]『和歌文学研究』、和歌文学会、2022.11～現在

f その他

(1) 非常勤講師

群馬県立女子大学、2023.4～9

お茶の水女子大学、2023.4～2024.3

(2) 学会・委員活動

[委員歴] 中世文学会常任委員、2019.7～現在

[委員歴] 和歌文学会委員、2020.12～現在

[委員歴] 和歌文学会編集委員、2022.11～現在

[委員歴] 西行学会常任委員、2021.4～現在

[委員歴] 説話文学会委員、2023.7～現在

[委員歴] 韓国日本文学会海外理事、2023.3～現在

准教授 **河野 龍也** KOUNO, Tatsuya

1. 略歴

1999 年 3 月 東京大学文学部言語文化学科英語英米文学専修課程 卒業 学士（文学）
1999 年 4 月 東京大学大学院人文社会系研究科日本文化研究専攻日本語日本文学専門分野 修士課程 入学
2002 年 3 月 同 修了 修士（文学）
2002 年 4 月 東京大学大学院人文社会系研究科日本文化研究専攻日本語日本文学専門分野 博士課程 進学
2007 年 3 月 同 単位取得退学
2007 年 4 月 日本学術振興会特別研究員（PD）（～2008 年 3 月）
2008 年 4 月 東京大学大学院人文社会系研究科日本語日本文学講座 助教（～2010 年 3 月）
2009 年 10 月 東京大学大学院人文社会系研究科日本文化研究専攻日本語日本文学専門分野 博士課程 修了
博士（文学）
2010 年 4 月 実践女子大学文学部国文学科 講師（～2013 年 3 月）
2011 年 4 月 実践女子大学大学院文学研究科国文学専攻 講師（～2013 年 3 月）
2013 年 4 月 実践女子大学文学部国文学科・大学院文学研究科国文学専攻 准教授（～2018 年 3 月）
2018 年 4 月 実践女子大学文学部国文学科・大学院文学研究科国文学専攻 教授（～2022 年 4 月）
2022 年 4 月 東京大学大学院人文社会系研究科 准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

日本近現代文学

b 研究課題

明治末から戦後復興期まで活躍した作家・佐藤春夫を主な研究対象としている。詩と小説を軸に、評論・翻訳・戯曲等で常に先端的な作風を示した佐藤の多方面にわたる活動を追うことで、近代日本の文壇史とジャンル編成の歴史とを検討し直している。芸術史全般に関心があり、特に「写実」が客観描写から内面表出へと意味を拡散させた大正期に、美術と文学とが共に夢や無意識を扱う手法を育てていった過程に注目している。ほかにも、近代作家のアジア紀行について、文献実証と都市論、フィールドワークを組み合わせ、実態と表現の距離を明らかにする研究を続けている。

c 概要と自己評価

20 世紀初頭の日本の文学的想像力を、佐藤春夫を考察の軸として明らかにした著書に、『佐藤春夫と大正日本の感性―「物語」を超えて』（単著、鼎書房、2019、第 29 回やまなし文学賞）、『佐藤春夫読本』（編著、勉誠出版、2015）がある。研究成果の社会還元を重視し、2020 年には台湾文学館（台南）において特別展「佐藤春夫 1920 臺灣旅行文学展」（2020 年 4 月 3 日～2021 年 2 月 28 日）の企画統括を担当。また、太宰治の新発見書簡や梶井基次郎「檸檬」

草稿の紹介・分析など、近代文学の豊富な遺産を保全し、継承することに力を入れてきた。草稿研究分野の業績には、『梶井基次郎「檸檬」を含む草稿群—瀬山の話—』（編著、武蔵野書院、2019）がある。また、研究と文学教育との連携を図るため、実践的教材として『大学生のための文学トレーニング』（共編、三省堂、近代編 2012、現代編 2014）を編集した。

2022 年度は、佐藤春夫生誕 130 年にあたり、資料紹介と展示・講演活動に尽力した。新資料を多数収録したオールカラーの図録『生誕 130 年記念 知られざる佐藤春夫の軌跡—秘蔵資料をよむ—』（編著、武蔵野書院、2022）を刊行し、岩波文庫の新版『田園の憂鬱』（佐藤春夫作）にも解説を寄せた。また、2023 年度は 2 件の国際学会に参加し、谷崎潤一郎および佐藤春夫の中国紀行・中国古典受容に関する報告を行った。

d 研究業績

(1) 書籍出版物

[単著]『生誕 130 年記念 知られざる佐藤春夫の軌跡—秘蔵資料をよむ—』（武蔵野書院、単行本（一般書）、2022.10

[教科書] 文科省検定『論理国語』共編、全 447p、筑摩書房、2023.1

[教科書] 文科省検定『文学国語』共編、全 480p、筑摩書房、2023.1

(2) 論文

[学術雑誌]「翻刻 佐藤春夫家族書簡（一九一三～一九一七年）」、『東京大学国文学論集』18 号、東京大学文学部国文学研究室、pp.109-128、2023.3

[学術雑誌]「集美学校・閩南激励団・藍玫瑰——佐藤春夫《南方紀行》中的中国近代」（呉光輝・肖珊珊訳）17 輯、『鼓浪嶼研究』、pp.192-205、2023.9

[大学研究機関紀要]「文学研究とフィールドワーク——佐藤春夫の台湾紀行——」、『文化交流研究：東京大学文学部次世代人文文学開発センター研究紀要』36 号、東京大学文学部次世代人文文学開発センター、pp.27-36、2023.3

[国際会議プロシーディングス]「翻訳と翻案—佐藤春夫の文化越境—」（日中対訳、張名揚訳）、『「変異：文本翻訳と文化跨境」学術研討会預稿集』、中央研究院中国文哲研究所、pp.57-78、2023.12.8

(3) その他各種論著

[総説・解説・講演資料等]「小沼丹」「串田孫一」「森山啓」事典項目増補、『日本近代文学大事典 増補改訂デジタル版』、2022.5.10 公開

[総説・解説・講演資料等]「注解・解説、佐藤春夫『田園の憂鬱』（岩波文庫）、岩波書店、pp.191-212、2022.9

[総説・解説・講演資料等]「座談会 孫が見た春夫の思い出」（高橋百百子・竹田長男・竹田有多子・河野龍也）、『実践国文学』103 号、実践国文学会、pp. 1-16、2023.3

[速報・短報・研究ノート等]「研究展望 佐藤春夫展の台湾開催に関わって」、『昭和文学研究』85 集、昭和文学会編集委員会、pp.191-193、2023.9

[書評・文献紹介等]「学界時評 対象の拡大・「再考」の気運」、『日本文学』73 巻 2 号、日本文学協会、pp.128-129、2024.2

(4) 講演・口頭発表等

[口頭発表（招待・特別）]「書簡から見る文壇交流—佐藤春夫資料を読む—」、群馬県立女子大学国語国文学会大会、群馬県立女子大学、2023.6.24

[口頭発表（招待・特別）]「近代日本作家が見た蘇州—谷崎潤一郎「蘇州紀行」について—」、「強化国際伝播、講好蘇州故事」国際討論会、蘇州大学（オンライン）、2023.10.21

[口頭発表（招待・特別）]「翻訳と翻案—佐藤春夫の文化越境—」、「変異：文本翻訳と文化跨境」学術研討会、中央研究院中国文哲研究所、2023.12.8

[公開講演、セミナー、チュートリアル、講習、講義等]「日本の近代文学 女性作家 樋口一葉」、ゆとりぎ文学講座、羽村市生涯学習センターゆとりぎ、2022.5.29、2022.6.12

[公開講演、セミナー、チュートリアル、講習、講義等]「佐藤家資料の可能性」、実践女子大学国文学科公開講座「美の冒険者・佐藤春夫の挑戦」、実践女子大学渋谷キャンパス、2022.10.8

[公開講演、セミナー、チュートリアル、講習、講義等]「座談会 孫がみた祖父 佐藤春夫の思い出」（ゲスト：高橋百百子・竹田長男・竹田有多子／聞き手：河野龍也）、実践女子大学国文学科公開講座「美の冒険者・佐藤春夫の挑戦」、実践女子大学渋谷キャンパス、2022.10.8

[公開講演、セミナー、チュートリアル、講習、講義等]「春夫文学の今後」、新宮市立佐藤春夫記念館主催「佐藤春夫生誕 130 年記念「わんぱく時代」の地から」講演会、和歌山県新宮市丹鶴ホール、2022.11.2

[公開講演、セミナー、チュートリアル、講習、講義等]「春夫遺族に聞く」（ゲスト：高橋百百子／聞き手：河野龍也）、新宮市立佐藤春夫記念館主催「佐藤春夫生誕 130 年記念「わんぱく時代」の地から」講演会、和歌山県新宮市丹鶴ホール、2022.11.2

[公開講演、セミナー、チュートリアル、講習、講義等]「事実と小説のあいだー佐藤春夫『晶子曼陀羅』をめぐる」、八木書店近代文学特別講座「活字をはみだすもの」第20回、八木書店古書部、2022.12.17

[公開講演、セミナー、チュートリアル、講習、講義等]「秋刀魚の会」に寄せてー佐藤春夫と東郷市ー、秋刀魚の会、和歌山県串本町 M's cafe & dining ホール、2023.4.2

[公開講演、セミナー、チュートリアル、講習、講義等]「近・現代編 佐藤春夫の世界」、ゆとろぎ文学講座、羽村市生涯学習センターゆとろぎ、2023.5.28、2023.6.11

[公開講演、セミナー、チュートリアル、講習、講義等]「梶井基次郎の筆跡ー「闇の絵巻」と晩年の書簡」、八木書店近代文学特別講座「活字をはみだすもの」第21回、八木書店古書部、2023.6.3

[公開講演、セミナー、チュートリアル、講習、講義等]「樋口一葉を読む」、実践女子大学生涯学習センター1day 特別講座、実践女子大学渋谷キャンパス、2023.7.29

[公開講演、セミナー、チュートリアル、講習、講義等]「音楽で甦る佐藤春夫の詩の世界」、秋刀魚の会、和歌山県新宮市丹鶴ホール、2023.10.8

[公開講演、セミナー、チュートリアル、講習、講義等]「永遠の文学青年ー梶井基次郎の手紙を読む」、八木書店近代文学特別講座「活字をはみだすもの」第22回、八木書店古書部、2023.11.25

[メディア報道等]「佐藤春夫生誕130年記念「わんぱく時代」の地から 春夫研究の未来見据え」、『紀南新聞』、2022.11.6

[メディア報道等]「「わんぱく時代」の地から 春夫生誕130年記念講演など」、『熊野新聞』、2022.11.6

[メディア報道等]「紀南抄『わんぱく時代』と罪悪感」、『紀南新聞』、1面、2022.11.7

[メディア報道等]「小説「わんぱく時代」から紐解く春夫が見た新宮のまち」、『紀南新聞』、13面、2023.1.1

(5) 共同研究・競争的資金等の研究課題

「佐藤春夫資料に基づく文学者の国際交流とアジア表象の研究」、日本学術振興会科学研究費助成事業・基盤研究 (C)：課題番号 18K00289、研究代表者、2018.4～2023.3

「〈私小説性〉の計量的分析と国際比較による〈自己語り〉文学の発展的研究」、日本学術振興会科学研究費助成事業・基盤研究 (C)：課題番号 20K00347 (研究代表者：大正大学・梅澤亜由美)、研究分担者、2020.4～2024.3

「佐藤春夫旧蔵資料にもとづく文壇交流と近代アジア観の形成に関する研究」、日本学術振興会科学研究費助成事業・基盤研究 (C)：課題番号 23K00273、研究代表者、2023.4～2028.3 (予定)

e 社会活動

(1) 社会貢献活動

[情報提供]「令和4年度常設展示 作家の手紙の魅力 檀一雄より佐藤春夫へ」(展示品情報提供)、石神井公園ふるさと文化館分室、2022.4～10

[情報提供]「佐藤春夫生誕130年記念展「わんぱく時代」の地からー知られざる佐藤春夫の軌跡ー」(パネル提供)、新宮市立佐藤春夫記念館、2022.10.25～2023.2.12

[情報提供]「特別展 没後30年 井伏鱒二展 アチラコチラデブンガクカタル」(展示品情報提供)、神奈川近代文学館、2023.9.30～11.26

[寄稿]『『日本近代文学大事典』と私 もの言わぬ教師』、『日本近代文学館』315号、日本近代文学館、p.11、2023.9.15

(2) 学術貢献活動

[企画立案・運営等]「生誕130年記念展示 知られざる佐藤春夫の軌跡ー不滅の光芒ー」(企画運営・展示業務・パネル執筆)、実践女子大学香雪記念資料館、2022.9.26～10.15

(3) メディア報道

[テレビ・ラジオ番組]「芥川龍之介の手紙見つかる 友人で作家の佐藤春夫に送ったもの」、NHK ニュースウオッチ 9 (21:00-22:00)、2022.7.29

[テレビ・ラジオ番組]「近代文学代表する作家・詩人 佐藤春夫 “直筆の草稿” 見つかる」、NHK ニュース・気象情報 (5:00-5:10)、2022.7.31

[テレビ・ラジオ番組]「佐藤春夫記念館と実践女子大が協定」、WTV テレビ和歌山、2022.8.29

[テレビ・ラジオ番組]「「人間失格」のモチーフ 太宰治の入院生活伝える手紙 見つかる」、NHK ニュース・おはよう日本 (関東甲信越) (7:30-8:00)、2023.9.30

[新聞・雑誌]「生誕130年、協力して事業展開」、『熊野新聞』1面、2022.8.30

[新聞・雑誌]「佐藤春夫生誕130年、手書き草稿など新発見資料展示」、『日経電子版』、2022.10.3

[新聞・雑誌]「太宰 師に「わび状」 佐藤春夫宛て」、『読売新聞』朝刊31面、2022.10.4 (『産経新聞』大阪版10.5、『東京新聞』夕刊10.6、『産経新聞』東京版10.13ほか各紙に配信)

[新聞・雑誌]「佐藤春夫 未公開の草稿・手紙展示」、『日本経済新聞』夕刊8面、2022.10.8

[新聞・雑誌]「芥川の内面伝える手紙発見 佐藤春夫宛て、深い交友」、『共同通信 Web』、2022.7.30（『東京新聞』8.1、
『産経新聞』8.14、『毎日新聞』8.19ほか各紙に配信）

f その他

(1) 非常勤講師

早稲田大学、2018.9～2023.3

実践女子大学、2022.4～現在

(2) 学会・委員活動

[所属学協会] 東京大学国語国文学会

[所属学協会] 日本近代文学会

[所属学協会] 昭和文学会

[所属学協会] 日本文学協会

[委員歴] 日本近代文学会企画委員、2022.5～2023.12

(3) その他

日本近代文学大事典増補改訂デジタル版編集委員、2020.2～現在

筑摩書房国語教科書編集委員、2020.4～現在

実践女子大学文芸資料研究所客員研究員、2022.4～現在

日本近代文学館評議員、2023.9～現在

1 1 日本史学

教 授 **加藤 陽子** (戸籍名は野島陽子) KATO, Yoko

1. 略歴

- 1989 年 3 月 東京大学大学院人文科学研究科博士課程修了 (国史学)
- 1989 年 4 月 山梨大学教育学部専任講師 (日本史学)
- 1991 年 4 月 山梨大学教育学部助教授 (日本史学)
- 1992 年 12 月 10 ヶ月間、文部省在外研究員として、スタンフォード大学東アジアコレクション、ハーバード大学ライシャワーセンター研究員
- 1994 年 4 月 東京大学文学部助教授 (日本史学)
- 1995 年 4 月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授 (日本史学)
- 1997 年 2 月 博士 (文学) 取得
- 2009 年 4 月 東京大学大学院人文社会系研究科教授 (日本史学)

2. 主な研究活動

a 専門分野

日本近代史

b 研究課題

1930 年代の日本の政治と外交、即位式の勅語作成過程と近代日本の天皇制、1945 年 9 月以降の帝国議会 (第 88 回～第 92 回) 議事録を読む、1930 年代～40 年代の史学史

c 概要と自己評価

専門は日本近現代史で、1930 年代の外交と軍事を専門としている。近代において起こされた戦争が当該期の政治や社会に持った意味、あるいは、日清・日露・第一次世界大戦など、10 年ごとになされた観のある戦争の記憶が総体として国民や国家に対してもたらした影響等について研究してきた。近年は、2011 年の公文書管理法施行により利用しやすくなった宮内公文書館や国立公文書館の史料を用い、大正・昭和戦前期の詔書作成過程を研究している。また、昭和戦前期の政治史を専門とする歴史研究者として、日中関係史、日米関係史についても目配りしてきた。史料公開の先進性で知られるアメリカはもとより、近年では中国、台湾等でも史資料の公開が活発になってきたこともあり、内外の研究者との交流に努めている。

d 研究業績

(1) 書籍出版物

- [共著]『学問と政治 学術会議任命拒否問題とは何か』、芦名定道 宇野重規 岡田正則 小沢隆一 加藤陽子 松宮孝明、
「2 章 現代日本と軍事研究」、岩波書店、2022.4、vii, 173, 29p
- [共著]『この国の戦争：太平洋戦争をどう読むか』、奥泉光 加藤陽子、河出書房新社、2022.6、282p
- [単著]『歴史の本棚』、加藤陽子、毎日新聞出版、2022.8.17
- [共著]『「人文知の危機」と歴史学—歴史学研究会創立 90 周年記念』、加藤陽子 歴史学研究会編集、「はじめに、座談会「人文知の危機」を読み解くために、座談会「人文知の危機」、座談会「一九八〇・九〇年代の歴研と歴史学」、績文堂出版、2022.12.18
- [共著]『歴史の逆流：時代の分水嶺を読み解く』、長谷部恭男 杉田敦 加藤陽子、朝日新聞出版、2022.12.30、251p
- [編者]『「戦前歴史学」のアリーナ』、歴史学研究会、「まえがき、第 1 章「一九三〇年代の歴史学の「刷新」と黎明期の「歴史学研究」」、東京大学出版会、2023.5.29
- [共著]『NHK 100 分 de 名著 フェミニズム』、加藤陽子 鴻巣友季子 上間陽子 上野千鶴子、「第 1 章「不覚な違算」に囲まれて、13-50 頁」、NHK 出版、2023.6.23
- [単著]『病入股肱 日本近代史上の天皇と軍隊 (『天皇と軍隊の近代史』の中国語訳)』、加藤陽子著 賀申杰訳、浙江人民出版社、2023.11

(2) 論文

- [学術雑誌]『「科学・技術」研究を育む政治文化とは何か—日本学術会議「軍事的安全保障研究」に関する検討資料を読む—』、加藤陽子、『歴史科学』(大阪歴史科学協議会)、248 号、pp.2-17、2022.1

[学術雑誌]「日本におけるカー受容の特徴について」、加藤陽子、『思想』(岩波書店)、1191号、pp.11-24、2023.6.23
[研究会、シンポジウム資料等]「戦争責任」問題と戦後への構想—南原繁と昭和という時代—、加藤陽子、南原繁
研究会編『日本の近現代史における南原繁』(横濱大氣堂、2023年)、pp.23-46、2023.8
[大学研究機関紀要]「日中戦争—戦争拡大の構」、加藤陽子、飯田市歴史研究所年報21号、pp.8-19、2024.2

(3) その他各種論著

[書評] 山下征士『二本の棘』(KADOKAWA、2022年)、加藤陽子、『毎日新聞』朝刊 今週の本棚欄、2022.5.14
[書評] E・H・カー著、近藤和彦訳『歴史とは何か 新版』(岩波書店、2022年)、加藤陽子、『毎日新聞』朝刊 今週の本棚欄、2022.7.2
[解説]「民衆の意識を研究史に刻む」吉見義明『草の根のファシズム』(岩波現代文庫、2022年)、加藤陽子、2022.8.10
[書評] 安達宏昭『大東亜共栄圏 帝国日本のアジア支配構想』(中公新書、2022年)、加藤陽子、『毎日新聞』朝刊 今週の本棚欄、2022.8.20
[総説・解説(学術雑誌)]「座談会 「シリーズ 歴史家とアーキビストの対話」を振り返る」、共著 小川千代子 加藤陽子 佐々木真 下重直樹 鈴木茂 宮間純一 若尾政希 司会 篠崎佑太、『歴史学研究』1026号、pp.33-54、2022.9
[総説・解説(商業誌)]「近現代日本の150年と鉄道」、原朗 加藤陽子 高嶋修一、『汎交通』、pp.2-8、2022.9.30
[書評、文献紹介等]「「学の独立」を支える司法とは 原朗『学問と裁判』(同時代社)を読む」、加藤陽子、『週刊読書人』3460号、2022.10.14
[その他記事]「眼前の「戦前」を直視する」、奥泉光 加藤陽子、『文藝』2022 冬号、pp.332-343、2022.11.1
[その他記事]「会長対談」、菅沼友子 加藤陽子、NIBENFRONTIER『二弁フロンティア』219号、pp.18-29、2022.12
[講演資料等(セミナー、チュートリアル、講習、講義他)]「それでも、平和を希求するために」、加藤陽子、『世界』965号、pp.23-31、2022.12
[書評、文献紹介等]「2022 この3冊 取りあげた本は、高鳥都『必殺シリーズ秘史 50年目の告白録』(立東舎)、田島道治、古川隆久ほか編『昭和天皇拝謁記』(岩波書店)、蘭信三ほか編『シリーズ 戦争と社会』(岩波書店)」、加藤陽子、『毎日新聞』朝刊 今週の本棚欄、2022.12.17
[書評] 佐藤公彦訳『胡適 政治・学問論集』(汲古書院、2022年) 見出〜「敗者の選択」歴史から学んだ叡智」、加藤陽子、『毎日新聞』朝刊 今週の本棚 2023年2月25日付、12面、2023.2.25
[その他記事]「特集 今読む「昭和史発掘」特別対談 保阪正康・加藤陽子」、加藤陽子、『松本清張研究』24号、pp.6-28、2023.3.31
[総説・解説(商業誌)]「インタビュー 「戦前3文書から考える」、加藤陽子 聞き手：朝日新聞編集委員 塩倉裕、『朝日新聞』朝刊、13面、2023.4.7
[書評] 相澤淳『山本五十六』(中公選書、2023年)、加藤陽子、『毎日新聞』朝刊 今週の本棚欄、2023.4.7
[総説・解説(商業誌)]「現代の安保関連三文書を、戦前期の「帝国国防方針」から考える」、加藤陽子、『世界』969号、pp.70-78、2023.5.1
[書評] 平山周吉『小津安二郎』、加藤陽子、『週刊文春』2023年6月1日号、2023.5.25
[書評] 長尾宗典著『帝国図書館』、加藤陽子、『毎日新聞』朝刊 今週の本棚欄、2023.5.27
[書評、文献紹介等]「鼎談書評「日本の敗戦」 対象書籍『満蒙開拓団』、『昭和天皇実録』、『敗北を抱きしめて』」、加藤陽子 池澤夏樹 奥泉光、『毎日新聞』今週の本棚、p.13、2023.7.29
[書評] 澤地久枝著『記録 ミッドウェー海戦』(ちくま学芸文庫)、加藤陽子、ウェブちくま、2023.8.4、
<https://www.webchikuma.jp/articles/-/3175>
[書評] 大森淳郎『ラジオと戦争』(NHK出版、2023年)、加藤陽子、『毎日新聞』朝刊 今週の本棚欄、2023.8.26
[解説] 森まゆみ『暗い時代の人々』(朝日文庫、2023年)、加藤陽子、pp.344-350、2023.9.30
[書評] 羽賀祥二『軍国の文化』上・下(名古屋大学出版会、2023年)、加藤陽子、『毎日新聞』朝刊 今週の本棚欄、2024.1.13
「二〇二四年を迎えて 年頭のご挨拶」、加藤陽子、『歴史学研究』月報770号、pp.1-2、2024.2
「映画「風よ あらしよ」解説 「伊藤野枝のまなざしの先には」、加藤陽子、『風よ あらしよ』劇場版パンフレット、pp.56-60、2024.2.9
[解説]NHK メルトダウン取材班『福島第一原発事故の「真実」 ドキュメント編』(講談社文庫)、加藤陽子、pp.357-368、2024.2.15
[書評] 鈴木順子『シモーヌ・ヴェイユ「歓び」の思想』(藤原書店、2024年)、加藤陽子、『毎日新聞』朝刊 今週の本棚欄、2024.3.2

(4) 講演・口頭発表等

- [口頭発表(基調)]「焼け野になる前に 現在の状況を歴史家はどのように見ているのか」、加藤陽子、学術会議任命拒否問題とは何か、2022.7.16
- [公開講演、セミナー、チュートリアル、講習、講義等]「歴史に学ぶ～この国を見つめなおすヒント」、加藤陽子、神奈川県高等学校教育会館主催 2022 年度教職員のための夏季教育講座、2022.8.3
- [公開講演、セミナー、チュートリアル、講習、講義等]「それでも、平和を希求するために―歴史学の歩みから何を学ぶのか―」、加藤陽子、第 24 回 信州岩波講座 2022、2022.8.27
- [口頭発表(招待・特別)]「この国のかたち～近現代史の視点から見た日本の現在地～」、加藤陽子、大阪府保険医協会 第 61 回定期総会・記念講演、2022.9.24
- [シンポジウム・ワークショップ パネル(指名)]「E・H・カー『歴史とは何か』新版を読む」、加藤陽子、史学会例会 E・H・カー『歴史とは何か』を再読する、2022.9.25
- [口頭発表(基調)]「『戦争責任』問題と戦後国家の構想―南原繁と昭和という時代―」、加藤陽子、第 19 回 南原繁シンポジウム「日本の近現代史における南原繁」、2022.11.3
- [シンポジウム・ワークショップ パネル(指名)]「1930 年代の歴史学の『刷新』と黎明期の『歴史学研究』」、加藤陽子、歴史学研究会創立 90 周年シンポジウム「『戦前歴史学』のアリーナ―1932: 歴研が生まれた頃―」、2022.12.18
- [公開講演、セミナー、チュートリアル、講習、講義等]「戦前期『帝国国防方針』3 文書の内容から、今を照射する」、加藤陽子 石田淳 蟻川恒正、立憲デモクラシー講座V 「戦後」の現在―安保関連 3 文書を読む、2023.2.5
- [公開講演、セミナー、チュートリアル、講習、講義等]「戦争と歴史 「帝国国防方針」と「安保 3 文書」」、加藤陽子 三牧聖子 阿古智子 布施祐仁 島藺進 佐藤学 中野晃一、安全保障関連法に反対する学者の会 第 7 回オンラインシンポジウム、2023.2.26
- [シンポジウム・ワークショップ パネル(指名)]「コメント」、加藤陽子、伊藤野枝・大杉栄ら没後 100 年記念シンポジウム「自由な自己の道を歩いて行こう」、2023.9.24

(5) 共同研究・競争的資金等の研究課題

- [科学研究費助成事業]「大国主義の現代史」、宇山智彦 江藤名保子 小森宏美 澤江史子 野島陽子 赤尾光春 中溝和弥、基盤研究 (B) : 23H03613、日本学術振興会、北海道大学、2023.4～2027.3

e 社会活動

(1) 社会貢献活動

- [その他]「開高健ノンフィクション賞選考委員」、開高健ノンフィクション賞、株式会社集英社、公益財団法人一ツ橋綜合財団、2023.6

(2) メディア報道

- [テレビ・ラジオ番組]「100 分 de フェミニズム」、NHK E テレ「100 分 de 名著」、森まゆみ編『伊藤野枝集』(岩波文庫) の紹介、2023.1.2

f その他

(1) 学会・委員活動

- [所属学協会] 史学会、1982.4～
- [所属学協会] 日本歴史学会、1989.4～
- [所属学協会] 歴史学研究会、2015.4～
- [委員歴] 日本歴史学会、評議員、2002～
- [委員歴] 国立歴史民俗博物館、総合展示検討委員会委員、2022～
- [委員歴] 歴史学研究会、委員長、2022.6～
- [委員歴] 公益財団法人 国連大学協力会、評議員、2022.9～

1. 略歴

1983年3月	東京大学文学部国史学専修課程卒業
1985年3月	東京大学大学院人文科学研究科修士課程国史学専門課程修了
1987年3月	東京大学大学院人文科学研究科博士課程国史学専門課程中退
1987年4月	山梨大学教育学部講師（歴史学）
1990年9月	山梨大学教育学部助教授（歴史学）
1994年11月	博士（文学）
1997年4月	東京大学大学院人文社会系研究科助教授
2002年10月	スイス、ジュネーブ大学招聘教授（～2003年2月）
2010年7月	東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

日本古代史

b 研究課題

古代天皇制、日唐律令制比較研究、摂関期国家の研究

c 概要と自己評価

日本古代の律令制を東アジア世界の中で位置付けることを目的とし、それにともない古代天皇制の解明、敦煌吐魯番文書の研究、摂関政治期の国制の解明を行なっている。長年続けてきた『御堂関白記』注釈の成果にもとづく摂関期研究の成果として単著『藤原道長 摂関期の政治と文化』を出版した。また公益財団法人史学会理事長として、史学会の活動が順調に行われるように努力し、コロナのためオンライン開催が続いていた史学会大会を、2022年によりやく通常の対面開催とし、理事会として公開シンポジウム「君主号と歴史世界」を企画し、報告を行なった。

d 研究業績

(1) 書籍出版物

〔単著〕『藤原道長 摂関期の政治と文化』、大津透、山川出版社、2022.11、98p

〔共著〕『もう一度読みとおす 山川新日本史』上・下、大津透 久留島典子 藤田覚 伊藤之雄、山川出版社、2022.7、224p、216p

〔共著〕『アジア人物史4 文化の爛熟と武人の台頭』、姜尚中総監修、「第一章 日本における古典的国制と文化の形成」、集英社、2023.6、628p

〔共著〕『日本史探究 詳説日本史』、大津透、山川出版社、教科書、2023.3

〔共著〕『日本史探究 高校日本史』、大津透、山川出版社、教科書、2023.3

(2) 論文

〔学術雑誌〕「2021年の歴史学界―回顧と展望― 総説」、大津透、『史学雑誌』131編5号、2022.5、pp.1-5

〔論文集（書籍）内論文〕「天武朝の年中行事と人麻呂歌集」、大津透、鉄野昌弘・奥村和美編『萬葉集研究 第四十二集 一稻岡耕二先生追悼記念』、塙書房、2023.3、pp.113-132

〔学術雑誌〕「2022年の歴史学界―回顧と展望― 総説」、大津透、『史学雑誌』132編5号、2023.5、pp.1-5

〔論文集（書籍）内論文〕「天皇号の成立と唐風化」、大津透、佐川英治編『君主号と歴史世界』（史学会シンポジウム叢書）、山川出版社、2023.10、pp.69-89

(3) その他各種論著

〔総説・解説〕「解説」、大津透、山中裕著『藤原道長』、法蔵館文庫、2023.7、pp.273-283

〔書評〕吉川真司著『律令体制史研究』、大津透、『史林』106巻5号、2023.9、pp.48-54

〔新刊紹介〕倉本一宏・加藤友康・小倉慈司編『『小右記』と王朝時代』、大津透、『史学雑誌』132編12号、2023.12、pp.52-54

(4) 講演・口頭発表

〔シンポジウム・ワークショップパネル（指名）〕「総合討論、司会」大津透、唐代史研究会夏期シンポジウム「交通と交易」ハートピア熱海、2022.8.24

[口頭発表(招待・特別)]「天皇号の成立と唐風化」、大津透、第120回史学会大会公開シンポジウム「君主号と歴史世界」、東京大学、2022.11.12

[公開講演、セミナー、チュートリアル、講習、講義等]「天皇号と日本国号の成立」、大津透、第27回東京大学文学部常呂公開講座、常呂町公民館、2023.10.6

[口頭発表(招待・特別)]「唐儀鳳三年度支奏抄・四年金部旨符復原補考」、大津透、第三屆沈家本与中国法律文化国際学術研討会、湖州潞村悦柳酒店(中国)、2023.10.28

[シンポジウム・ワークショップパネル(指名)]「コメント」、大津透、東洋文庫創立100周年記念国際シンポジウム「敦煌・吐魯番研究の最前線 その伝統と革新」、東洋文庫、2024.3.3

e その他

(1) 学会・委員活動

[委員歴] 日本歴史学会、評議員、2002.7～

[委員歴] 一般財団法人東方学会、常務理事、2019.6～、国際東方学会会議運営委員、東方学会賞選考委員

[委員歴] 公益財団法人史学会、理事・理事長、2020.6～

教授 **鈴木 淳** SUZUKI, Jun

1. 略歴

1986年3月 東京大学文学部国史学科卒業

1992年3月 東京大学大学院人文科学研究科国史学専攻博士課程修了(1995年3月 博士(文学)学位取得)

1992年4月 東京大学社会科学研究所助手

1994年4月 東京大学教養学部助教授

1996年1月 ドイツ、ボーフム大学(Ruhr-Universität Bochum)客員教授(～1996年10月)

1996年4月 東京大学大学院総合文化研究科助教授(大学院重点化による)

1999年10月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授

2007年4月 同准教授

2012年8月 同教授

2012年8月 米国、イェール大学(Yale University)客員研究員(～2013年3月)

2. 主な研究活動

a 専門分野

日本近代史

b 研究課題

明治期の機械工業が元来の研究課題。新技術の導入が社会をどのように変えて行くのかという問題関心を中心に、史料に即した明治・大正期の再検討を心がけている。

c 概要と自己評価

関東大震災百年関係など多くのシンポジウム等に参加し、従来より幅広く対象をとらえることができるようになり、産業遺産の研究でも多くの知見を得られた。しかし、手を広げすぎて多忙なため、検討を深め、また体系的に成果を提示することが課題となっている。

d 研究業績

(1) 書籍出版物

[編著]『経済の維新と殖産興業：一八五九～一八九〇』、鈴木淳編著、ミネルヴァ書房、2022.5、xi, 360, 6p、pp.10-47-78 執筆

[編著]『いかにして発明国民となるべきか：高峰譲吉文集』、高峰譲吉 鈴木淳、岩波書店、2022.7、196p、pp.181-196 執筆

- [共著]『関東大震災と東大医学部第二外科：東京大学ヒューマンティーズセンターオープンセミナー第 57 回より』、鈴木淳 鈴木晃仁、東京大学連携研究機構ヒューマンティーズセンター、2022.9、39p、pp.3-13 執筆
- [共著]『思想史講義【明治篇 I】』山口輝臣・福家崇洋編、ちくま新書、2022.10、pp.195-209 執筆
- [共著]『東京 10 大学の 150 年史』小林和幸編著、筑摩書房、2023.1、pp.43-63 執筆
- [共著]『関東大震災絵図：揺れたあの日のそれぞれの情景 = The great Kanto earthquake of 1923』、北原糸子 武村雅之 鈴木淳 森田祐介 高野宏康、東京美術、2023.9、143p
- [編纂分担] 千葉市史編集委員会『千葉市史 史料編 11 近代 2』千葉市、2024.3、pp.73-88 を編纂、史料解説 pp.448-450 を執筆

(2) 論文

- [単著 [査読あり]] 'How Disasters Made the Modern City of Tokyo', Journal of Urban History, 2022.9, Vol. 48(5), pp. 1003-1016. Translated by Jordan Sand
- [単著]「横須賀海軍工廠の労働力をめぐって ―明治 39 年の基幹的職工を中心として」、明治大学経営学研究所『経営論集』第 71 巻第 4 号 (222 集)、2024.3、pp.277-288

(3) その他各種論著

- 「紙幣整理の動向」、『山川歴史 PRESS』10 号、2022.10、pp.12-14
- 「消防の歴史に学ぶ」、『東京消防』101 巻 11 号、2022.11、pp.4-9、12 号、pp.6-11、102 巻 1 号、2023.1、pp.8-13
- 「関東大震災と消防」、『東京消防』102 巻 2 号、2023.2、pp.18-25
- 「本学における年史編纂と百五十年史編纂準備」、『東京大学一五〇年史編纂室通信』第 1 号、2024.1、pp.4-7
- 「藩札から兌換紙幣へ」、『山川歴史 PRESS』16 日本史、2023.10、pp.1-5
- 「関東大震災から 100 年! 犠牲者 10 万人超から学ぶべきこと」、日本道路建設業協会『道路建設』800 号、2023.9、pp.11-15
- 「板橋火柴製造所における綿火柴製造開始の意義」、板橋区教育委員会『旧愛歯技工専門学校跡地緊急調査報告書』同、2024.3、pp.54-58

(4) 講演・口頭発表等

- [一般講演]「器械製糸導入期における「イタリア式」・「フランス式」再考」、日本産業技術史学会 第 38 回年会、2022.9.3、於石川県金沢市しいのき迎賓館
- [講演]「関東大震災における救護体制とその問題点」、特別企画 3「関東大震災」(座長大友康裕・近藤久禎)にて、第 28 回日本災害医学会学術集会、2023.3.10、岩手県盛岡市マリオス大ホール
- 「関東大震災における救護体制とその問題点」、日本学術会議・防災学術連携体学術フォーラム関東大震災 100 年と防災減災科学、日本学術会議講堂、2023.7.8
- 「関東大震災におけるコンクリート構造物」、レジリエントインフラのための次世代建設材料の創成 R023 委員会第 15 回会議、学士会館、2023.10.31
- 日本史研究会 11 月例会「戦間期～戦時期における学術研究の基盤形成」コメント、京都大学総合研究 2 号館、2023.11.25
- [基調報告]「日本史研究における産業遺産」、経営史学会第 59 回全国大会統一論題「産業遺産と経営史」、熊本学園大学、2023.12.3

e 社会活動

(1) 公開・社会教育講座等

- 「日本の近代と活版印刷技術」、横浜市歴史博物館「活字 近代日本を支えた小さな巨人たち」展開連講座第 2 回、同館講堂、2022.12.17
- 「明治の富岡製糸場」、世田谷市民大学昼間講座・経済コース、12 回、2022.9.9～12.9
- [基調講演]「人々の関東大震災」、関東大震災 100 周年記念地域安全学会一般公開シンポジウム、神奈川大学みなとみらいキャンパス、2023.5.27
- 「西洋を見た人、見なかった人―明治政府の担い手と海外経験」、長州ファイブ英国渡航 160 年記念シンポジウム、萩市・萩市教育委員会、萩博物館、2023.7.22
- 「東京帝国大学学生救護団の成り立ちと活動」、大正関東地震 100 年シンポジウム関東大震災と東京大学―教訓を首都直下地震対策に活かす、東京大学大学院情報学科・地震研究所・生産技術研究所・災害復興連携機構、本郷キャンパス大講堂、2023.7.30
- 「ブリュナと首長館から考える富岡製糸場の歴史」、第 16 回富岡製糸場セミナー・ワークショップ、2023.8.26
- 「近代の遺跡 ―歴史総合の文脈で」、駿台歴史講座、駿台学園 北区、2023.9.16

「塩浜百年の歴史 一政府米穀倉庫があった町」、故郷の家・東京 市民講座、故郷の家・東京 江東区、2023.9.30
「関東大震災時の被害と救護活動からの教訓」、令和5年度鎌ヶ谷市郷土資料館歴史講演会、鎌ヶ谷市生涯学習推進センター、2023.10.1
「関東大震災と住民たち」、江東区文化財講演会、江東区教育センター、2023.11.22
[基調講演]「日本における大学教育の創始とイギリス」日本国際関係学部国際関係研究所国際シンポジウム2023、日本大学国際関係学部15号館、2023.12.16

(2) 書籍監修

『小学館版学習まんが日本の歴史』13 明治維新と文明開化、14 日清・日露戦争と帝国日本、2022.12

(3) 展示監修

しょうけい館（戦傷病者等史料館）移転リニューアル、2023.10.25 開館

f その他

(1) 学会・委員活動

政治経済学・経済史学会 編集委員

日本産業技術史学会 副会長、編集委員

教授 高橋 典幸 TAKAHASHI, Noriyuki

1. 略歴

1989年4月 東京大学教養学部文科Ⅲ類入学
1991年4月 東京大学文学部国史学専修課程進学
1993年3月 東京大学文学部国史学専修課程卒業
1993年4月 東京大学大学院人文科学研究科国史学専攻修士課程進学
1995年3月 東京大学大学院人文科学研究科日本史学専攻修士課程修了
1995年4月 東京大学大学院人文社会系研究科日本文化研究専攻（日本史学）博士課程進学
1997年7月 同 博士課程（日本史学）中退
1997年8月 東京大学史料編纂所助手
2007年4月 東京大学史料編纂所助教
2009年1月 博士（文学）学位取得（東京大学）
2012年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授
2021年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

日本中世史

b 研究課題

中世武家政権の研究、14世紀政治社会史の研究

c 概要と自己評価

中世前期の政治史、とりわけ鎌倉時代の朝幕関係の解明に取り組んだ。これにより朝廷との関係が鎌倉幕府の存立やありかたに大きな影響を与えたことを確認することができた。また鎌倉時代後半から南北朝期に至る政治史・政治構造の変遷についても見通しを得ることができた。さらに二つの共同研究に加わり、河内国金剛寺・安芸国楽音寺という二つの寺院を分析することによって、中世地方寺院の構造について明らかにすることができた。すなわち院主と寺僧集団が基本的な構成要素であり、両者の関係が当該寺院の在り方を規定すること、武士が地域支配に臨むにあたってはこうした関係が手がかりになったことが明らかになった。今後は武士を中心とする中世の政治権力の構造と地域支配のあり方を架橋するような方向に研究を進めていきたいと考えている。

d 研究業績

(1) 書籍出版物

[監修]『学習まんが日本の歴史5 武士の台頭』、小学館、単行本（一般書）、2022.12

[監修]『学習まんが日本の歴史6 鎌倉幕府の成立』、小学館、単行本（一般書）、2022.12

[教科書]『詳説日本史』、高橋典幸、山川出版社、2023.4

(2) 論文

[学術雑誌]「金剛寺寺辺領の基礎的研究」、高橋典幸、『鎌倉遺文研究』50号、pp.72-93、2022.10

[学術雑誌]「西遷武士小早川氏と楽音寺」、高橋典幸、『国立歴史民俗博物館研究報告』245号、pp.163-179、2024.2

(3) その他各種論著

[解説（学術雑誌）]「回顧と展望 日本（中世一 総論・史料）」、高橋典幸、『史学雑誌』131巻5号、pp.73-75、2022.5

[解説（学術雑誌）]「奥羽における境界と奥州藤原氏」、高橋典幸、『山川歴史 PRESS』10号、pp.1-5、2022.10

[講演要旨（学術雑誌）]「鎌倉時代の朝幕関係」、高橋典幸、『白山史学』59号、pp.1-24、2023.3

[文献紹介等] 書籍紹介 伊藤俊一著『荘園 一壘田永年私財法から応仁の乱まで』、高橋典幸、『山川歴史 PRESS』13号、p.22、2023.4

[解説（その他）]「解説」、高橋典幸、網野善彦『日本中世の非農業民と天皇』（岩波書店）、pp.419-437、2024.3

[文献紹介等] 新刊紹介 中沢克明著『狩猟と権力 ―日本中世における野生の価値』、高橋典幸、『史学雑誌』133編3号、pp.87-88、2024.3

(4) 講演・口頭発表等

[口頭発表（一般）]「金剛寺領白炭免をめぐる人びと」、高橋典幸、第10回金剛寺文書研究会、2022.5.15

[公開講演]「鎌倉時代の朝幕関係」、高橋典幸、白山史学会第58回大会、2022.6.25

[公開講演]「鎌倉幕府の成立」、高橋典幸、能登文化講座、2022.7.2

[公開講演]「鎌倉幕府の成立」、高橋典幸、駿台歴史講座、2024.3.16

(5) 共同研究・競争的資金等の研究課題

[科学研究費助成事業]「西遷・北遷東国武士の社会的権力化」（研究代表田中大喜）、基盤研究（B）：19H01313、日本学術振興会、国立歴史民俗博物館、2019.4.1～2023.3.1

[科学研究費助成事業]「河内国金剛寺文書に基づく中世地域社会史の研究」（研究代表川合康）、基盤研究（C）：19K00952、日本学術振興会、大阪大学、2019.4.1～2023.3.1

[科学研究費助成事業]「河内国金剛寺文書の悉皆調査に基づく中世社会史研究」（研究代表川合康）、基盤研究（C）：23K00814、日本学術振興会、大阪大学、2023.4.1～2027.3.1

e その他

(1) 学会・委員活動

[所属学協会] 史学会、1993.4～

[所属学協会] 日本史研究会、1993.4～

[所属学協会] 日本古文書学会、1997.4～

[所属学協会] 日本歴史学会、1997.8～

[所属学協会] 歴史学研究会、1997.8～

[所属学協会] 鎌倉遺文研究会、1998.4～

[委員歴] 日本歴史学会、評議員、2012.7～、理事、2018.7～

[委員歴] 日本古文書学会、理事、2013.9～、評議員、2013.9～、編集委員長、2018.4～2024.3

[委員歴] 鎌倉遺文研究会、研究委員、2015.4～

[委員歴] 国立歴史民俗博物館、総合展示第2室リニューアル委員会委員、2022.4～

[委員歴] 東京大学史料編纂所、協議会委員、2022.4～

1. 略歴

1994 年 3 月	東京大学文学部国史学専修課程卒業
1996 年 3 月	東京大学大学院人文社会系研究科日本文化研究専攻修士課程修了
1999 年 12 月	東京大学大学院人文社会系研究科日本文化研究専攻博士課程単位修得の上退学
2000 年 1 月	日本學術振興会特別研究員 (PD)
2003 年 3 月	博士 (文学) (東京大学) (博人社 390 号)
2004 年 4 月	宇都宮大学教育学部助教授 (社会科教育講座)
2007 年 4 月	宇都宮大学教育学部准教授 (同)
2011 年 4 月	東京大学大学院人文社会系研究科准教授
2022 年 4 月	東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

日本近世史

b 研究課題

近世前期を中心に、土地制度、身分と身分制、商品流通などの観点から近世社会の特質を検討している。

c 概要と自己評価

2022 年には、これまで取り組んできた近世社会成立史に関する研究成果をまとめた単著論文集『日本近世の秩序形成：村落・都市・身分』を刊行することができた。

2023 年には、日本近世史の研究成果を集成して、総合的な時代像を示し、近世という時代を見通そうと企画されたシリーズ『日本近世史を見通す』（全7巻）のうち2冊の編集を分担で担当した。実際にはかなり前から取り組んでいた企画であり、一執筆者としても、この間数年の研究成果を反映することができた。具体的には、第1巻『列島の平和と統合』に載せた「世界のなかの近世日本」という論考は、この間取り組んできた科学研究費補助金による「戦乱から平和・安定への転換に関する地域比較史研究—九州を中心に」の成果によるものでもあり、また第5巻『身分社会の生き方』に載せた「武士・奉公人・浪人」も、代表者をつとめた科学研究費補助金による「幕府役所史料の整理・活用による近世法制史・身分論の新展開」の成果をふまえている。日仏両国のフランス史の研究者を交えて編まれた高澤紀恵／ギョーム・カレ編『「身分」を交差させる』にも、関連する自身の研究成果を盛り込むことができた。

その他、身分論や村落史に関して、今後の研究展開につながる個別研究をいくつか積み重ねることができた。

d 研究業績

(1) 書籍出版物

[共著]『論点・日本史学』、岩城卓二 上島享 河西秀哉 塩出浩之 谷川穰 告井幸男、「村と百姓」、ミネルヴァ書房、2022.8、x, 371p

[単著]『日本近世の秩序形成：村落・都市・身分』、牧原成征、東京大学出版会、2022.9、xvii, 375, 5p

[共著]『日本史探究 詳説日本史』、牧原成征、山川出版社、教科書、2023.3

[共著]『日本史探究 高校日本史』、牧原成征、山川出版社、教科書、2023.3

[共著]『「身分」を交差させる：日本とフランスの近世』、高澤紀恵 Carré Guillaume、「クローズアップ1 日本史における「身分」の語義」「IV第1章 江戸幕府御家人の身分と家」、東京大学出版会、2023.5、v, 382, 8p

[共編者]『列島の平和と統合：近世前期』、牧原成征 村和明、「プロローグ 現代からみる近世の幕開け」「第1章 世界のなかの近世日本」、吉川弘文館、2023.9、11, 204p

[共編者]『身分社会の生き方』、多和田雅保 牧原成征、「第1章 武士・奉公人・浪人」、吉川弘文館、2023.10、10, 201p

[共著]『日本近世史入門：ようこそ研究の世界へ!』、上野大輔 清水光明 三ツ松誠 吉村雅美、「身分制社会論」「商人・交通・産業」、勉誠社、2024.3、7, 411, 7p

(2) 論文

[大学研究機関紀要]「足利・館林・新田の長吏とその由緒」、牧原成征、『部落問題研究』246号、pp.2-30、2023.9

(3) その他各種論著

[総説・解説 (商業誌)]「近世前期の政治とは何か?」、牧原成征、『本郷』168号、pp.5-7、2023.11

(4) 講演・口頭発表等

[シンポジウム・ワークショップ パネル (指名)] 「検地がもたらした〈分離〉と〈交流〉—日本近世の土地所有」、
牧原成征、第121回史学会大会・公開シンポジウム、2023.11.11

(5) 共同研究・競争的資金等の研究課題

[科学研究費助成事業] 「幕府役所史料の整理・活用による近世法制史・身分論の新展開」、牧原成征 新田一郎、基盤
研究 (C) : 18K00956、日本学術振興会、東京大学、2018.4～2023.3

[科学研究費助成事業] 「戦乱から平和・安定への転換に関する比較地域史研究—九州を中心に」、木村直樹 牧原成征、
基盤研究 (C) : 19K00955、日本学術振興会、長崎大学、2019.4～2023.3

e その他

(1) 学会・委員活動

[委員歴] 日本歴史学会、評議員、2017.9～、理事、2019.9～

准教授 三枝 暁子 MIEDA, Akiko

1. 略歴

1995年3月	日本女子大学文学部史学科卒業
1995年4月	東京大学文学部歴史文化学科研究生入学
1996年3月	東京大学文学部歴史文化学科研究生修了
1996年4月	東京大学大学院人文社会系研究科日本文化研究専攻 (日本史学) 修士課程入学
1999年3月	東京大学大学院人文社会系研究科日本文化研究専攻 (日本史学) 修士課程修了
1999年4月	東京大学大学院人文社会系研究科日本文化研究専攻 (日本史学) 博士課程進学
2003年3月	東京大学大学院人文社会系研究科日本文化研究専攻 (日本史学) 博士課程単位取得退学
2003年4月	日本学術振興会特別研究員 (PD) (～2005年3月)
2005年4月	立命館大学文学部任期制講師 (～2008年3月)
2006年6月	博士 (文学) 学位取得
2008年4月	立命館大学文学部准教授
2016年4月	東京大学大学院人文社会系研究科 准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

日本中世史

b 研究課題

日本中世の身分制、中世都市論、地域社会論

c 概要と自己評価

文献史料調査とフィールドワーク調査とを重ねてきた京都・西京地域について、10世紀から現代にいたるまでの歴史をまとめ、新書として出版した。地域調査の意義を多少なりとも伝えることはできたと思うが、明快な歴史像の提示という点で課題が残った。また科学研究費による共同研究を通じ、中世村落にかかわるデータベースの作成を進める一方、京町家の歴史と現在について検討を進めた。さらに学会活動を共にした女性歴史学研究者7名で歴史学界におけるジェンダーについて分析を行い、その成果を書籍にまとめた。今後もフィールドワークの手法を用いながら地域史研究を進めつつ、中世史における身分制やジェンダーについて考察を深めていきたい。

d 研究業績

(1) 書籍出版物

[単著] 『日本中世の民衆世界 西京神人の千年』、岩波書店、2022.9、197p

[共著] 『アカデミズムとジェンダー』(有信真美菜・大江洋代・清水領・芹口真結子・高野友理香・寺本敬子と共著、
歴史学研究会編)、績文堂出版、2022.5、172p

[共編者]『日本中世の課税制度——段銭の成立と展開』(志賀節子と共編)、勉誠出版、2022.5、214p

[教科書]『詳説日本史』(佐藤信ほか24名と共著)、山川出版社、2023.3

(2) 論文

[学術雑誌]「一五〜一六世紀京都の非人集団の動向について」、『歴史科学』251号、2022.11、pp.1-12

(3) その他各種論著

[書評,文献紹介等]「書評 下坂守著『祇園祭千五十年記念 中近世祇園社の研究』」、『歴史評論』881号、2023.9、pp.77-81

(4) 共同研究・競争的資金等の研究課題

[科学研究費助成事業]「郷・村名初出データにみる日本中世の民衆社会」、三枝暁子、上川通夫、鎌倉佐保、川端泰幸、西田友広、花田卓司、服部光真、基盤研究(A):18H03582、日本学術振興会、東京大学、2018.4〜2023.3

[科学研究費助成事業]「家・町・町家の存立基盤をめぐる歴史学的研究—京都太子山町・秦家を事例として」、秋元せき、小林丈広、三枝暁子、基盤研究(C):19K00986、日本学術振興会、同志社大学、2019.4〜2024.3

e その他

(1) 非常勤講師

日本女子大学(文学部)、「日本史講義I—1・2」、2022.4〜2023.3、2023.4〜2024.3

(2) 学会・委員活動

[委員歴] 日本古文書学会、評議員、2008.10〜

[委員歴] 公益財団法人史学会、編集委員、2021.6〜

[委員歴] 賀茂別雷神社史料編纂会、編纂委員、2014.11〜

[委員歴] 国立歴史民俗博物館総合展示第2室、リニューアル委員、2022.8〜

准教授 村 和明 MURA, Kazuaki

1. 略歴

2002年3月	東京大学文学部歴史文化学科(日本史学専修課程)卒業
2005年3月	東京大学大学院人文社会系研究科日本文化研究専攻(日本史学)修士課程修了
2009年4月	財団法人三井文庫契約研究員
2010年3月	東京大学大学院人文社会系研究科日本文化研究専攻(日本史学)博士課程修了
2010年3月	博士(文学)学位取得
2010年4月	公益財団法人三井文庫研究員
2015年7月	公益財団法人三井文庫主任研究員
2018年4月	東京大学大学院人文社会系研究科 准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

日本近世史

b 研究課題

近世の天皇・朝廷の研究、近世都市豪商の研究

c 概要と自己評価

新型コロナウイルス感染症蔓延以前から企画していた、日本近世史の現状を、最新の研究成果と個々の問題関心に基きつつ、分かりやすく紹介するシリーズを、ようやく刊行することができた。またこの間、学界の動向を広く社会に紹介するという狙いが共通した企画が多数刊行され、そこでの執筆がかなり多くなった。実証研究面での成果としては、新型コロナウイルス感染症蔓延以前からの共同研究の成果にかかわるものが多くなった。特にジェンダー史をめぐる共同研究の結果、従来の研究領域である近世朝廷・豪商三井家についての分析に、ジェンダー史の視点を取り入れた論考を発表することができた。

d 研究業績

(1) 書籍出版物

- [分担執筆]『豪商の金融史：廣岡家文書から解き明かす金融イノベーション』、高槻泰郎編著、「廣岡浅と三井家一豪商たちの関関」、慶應義塾大学出版会、2022.7、317,3p
- [分担執筆]『論点・日本史学』、岩城卓二・上島享・河西秀哉・塩出浩之・谷川穰・告井幸男編著、「江戸幕府による朝廷の位置づけ」、ミネルヴァ書房、2022.8、x, 371p
- [教科書]『日本史探究 詳説日本史』、佐藤信・五味文彦・高埜利彦・鈴木淳ほか著、山川出版社、2023.3
- [教科書]『日本史探究 高校日本史』、佐藤信・五味文彦・高埜利彦・鈴木淳ほか著、山川出版社、2023.3
- [共編著]『列島の平和と統合：近世前期』、牧原成征・村和明編著、「近世朝廷と統一政権」・「エピローグ 泰平のなかでの転換へ」、吉川弘文館、2023.9、11, 204p
- [共編著]『伝統と改革の時代：近世中期』、村和明・吉村雅美編著、「プロローグ 泰平のなかの変化と対応」・「將軍専制と社会」、吉川弘文館、2024.1、10, 195p
- [分担執筆]『深化する歴史学：史資料からよみとく新たな歴史像』、歴史科学協議会編、『禁中並公家中諸法度』第一条にみる近世朝廷の特質」、大月書店、2024.1、11, 273p
- [分担執筆]『日本近世史入門：ようこそ研究の世界へ！』、上野大輔・清水光明・三ツ松誠・吉村雅美編著、「近世の天皇・朝廷—近世日本のなかでの位置づけ」・「商家」、勉誠社、2024.3、7, 411, 7p

(2) 論文

- [大学研究機関紀要]「豪商と遊廓—三井と茶屋の関係を中心に」、村和明、『国立歴史民俗博物館研究報告』235、251-280p、2022.9

(3) その他各種論著

- [その他記事]「史料紹介 貞享五年・伊豆蔵五兵衛『店法度・作法并異見之事』—伊勢商人の江戸店の店則」、近世経済史料研究会、『三井文庫論叢』56、313-148p、2022.12
- [その他記事]「史料紹介 『復古記』原史料中の近世朝廷文書について—議奏役所と天皇・非蔵人」、村和明、『日本学術振興会・科学研究費補助金：基盤研究（B）明治太政官文書を対象とした分散所在史料群の復元的考察に基づく幕末維新史料学の構築 研究成果報告書』、2023.3
- [書評・文献紹介等]『社会集団史』で近世朝廷像を考える」、村和明、『部落問題研究』245、64-83p、2023.6

(4) 講演・口頭発表等

- [口頭発表（招待・特別）]「一文献史家（日本近世史）が読む『気候適応の日本史』、『気候適応の日本史』を聞く・読む・語る座談会、名古屋大学環境学研究科 10 課題「46 億年の歴史」主催、2022.3.29、オンライン
- [口頭発表（招待・特別）]『社会集団史』で近世朝廷像を考える」、部落問題研究所全国集会・歴史 I 分科会、2022.10.23、花園大学
- [シンポジウム・ワークショップパネル（指名）]「日本史研究者からのコメント」、第 69 回 SGRA フォーラム・第 7 回日本・中国・韓国における国史たちの対話の可能性『歴史大衆化』と東アジアの歴史学」、2022.8.6、オンライン

(5) 共同研究・競争的資金等の研究課題

- [科学研究費助成事業]「分散型大規模大名家史料群の高度学術資源化と地域還元」、研究種目基盤研究（A）：19H00537、鶴田啓、日本学術振興会、東京大学、2019.3～2023.3
- [科学研究費助成事業]「明治太政官文書を対象とした分散所在史料群の復元的考察に基づく幕末維新史料学の構築」、研究種目基盤研究（B）：19H01303、箱石大、日本学術振興会、東京大学、2019.3～2023.3
- [科学研究費助成事業]「維新政府による朝廷・幕府・諸藩を源流とした文書行政の解明と関連史料群の学術資源化」、研究種目基盤研究（B）：23K25361、箱石大、日本学術振興会、東京大学、2023.3～2028.3
- [科学研究費助成事業]「近世日本の学知と家伝史料：荻生家旧蔵史料と水戸徳川家旧蔵史料を中心に」、研究種目基盤研究（B）：23K25268、高山大毅、日本学術振興会、東京大学、2023.4～2028.3
- [科学研究費助成事業]「近世御所財政・公家財政の統合的研究」、佐藤雄介、研究種目基盤研究（C）：23K00849、日本学術振興会、学習院大学、2023.4～2027.3

e 社会活動

(1) 社会貢献活動

- [講師]「勃興期の三井—新規展開と内紛の半世紀」、三井業際研・新ビジネス創出に向けたスタートアップ企業との連携研究委員会、2022.10.7、日本橋室町三井タワー
- [出演]「豪商 三井高利」、松阪市行政チャンネル、2023.5.2、Youtube

[講師]「三井越後屋の発展―危機と群像」、松阪市三井越後屋創業 350 年事業記念講演会、2023.12.2、三越劇場

(2) 学術貢献活動

[企画立案・運営等] 国内、「第 120 回史学会大会」、実行委員、日本近世史部会、東京大学、2022.11.13

[企画立案・運営等] 第 72 回 SGRA フォーラム 第 8 回日本・中国・韓国における国史たちの対話の可能性「20 世紀の戦争・植民地支配と和解はどのように語られてきたのか ―教育・メディア・研究」、2023.8.8、早稲田大学

f その他

(1) 非常勤講師

東京女子大学、2017.3～2023.3

(2) 学会・委員活動

[委員歴] 日本古文書学会、編集委員、2014.5～

[委員歴] 東京大学出版会、出版企画委員、2020.4～

12 中国語中国文学

教授 大西 克也 ONISHI, Katsuya

1. 略歴

- 1985 年 3 月 東京大学文学部中国語中国文学専修課程卒業
- 1985 年 4 月 東京大学大学院人文科学研究科中国語学専攻修士課程入学
- 1987 年 3 月 東京大学大学院人文科学研究科中国語学専攻修士課程修了
- 1987 年 4 月 東京大学大学院人文科学研究科中国語学専攻博士課程進学
- 1988 年 9 月 中華人民共和国北京大学中国語文学系留学（～1990 年 2 月）
- 1990 年 3 月 東京大学大学院人文科学研究科中国語学専攻博士課程退学
- 1990 年 4 月 神奈川大学外国語学部専任講師
- 1993 年 4 月 神奈川大学外国語学部助教授（～1995 年 3 月）
- 1995 年 4 月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授
- 1998 年 3 月 文部省在外研究員に採用され、中国広州市中山大学に於いて研修（～1998 年 12 月）
- 2013 年 1 月 東京大学大学院人文社会系研究科教授（現在に至る）
- 2017 年 4 月 東京大学大学院人文社会系副研究科長（～2019 年 3 月）
- 2019 年 4 月 東京大学大学院人文社会系研究科長・文学部長（～2021 年 3 月）

2. 主な研究活動

a 専門分野

中国語学、中国古文字学

b 研究課題

- (1) 上古中国語の文法研究
構文と文法範疇の相関的変容の諸相、及びそれに関与する様々なファクターの解明を目指している。
- (2) 戦国秦漢出土文字資料の研究
戦国秦漢時代の出土文字資料の解読の他、言語がどのように文字化されたかという視点に基づき、地域毎の用字法の相違、秦による文字統一の実態や文字政策に関する探究を行っている。

c 概要と自己評価

研究課題(1)に関しては、上古の中国人が認識した世界をどのように言語化したのか、コーパスと残された文献の背後にはどのような世界が広がっているのかという基本的な問題意識から研究を進めている。近年はアスペクト、モダリティ領域に関心を持って研究を進めている。研究課題(2)に関しては、統一前後の出土資料における漢字の使用実態の解明を進めているが、近年は秦系や楚系の文献に見られる他国の文字影響に着目し、一筋縄ではいかぬ文字の歴史の複雑性に焦点を当てている。また、中国や日本における漢字に纏わる信仰や宗教性にも関心を持っている。

d 研究業績

(1) 論文

[学術雑誌]「複数の解讀情報を並存させた中国出土資料のテキストデータ化とその展望」、片倉峻平 大向一輝 永崎研宣 大西克也、『中国出土資料研究』27 号、pp.51-64、2023.6

[学術雑誌]「上古中国語のモダリティ助詞「矣」について」、大西克也、『日本中国学会報』75 巻、pp.272-257、2023.10

(2) 講演・口頭発表等

[口頭発表（基調）]「熊野の牛玉宝印と呉越の鳥書——漢字の伝来と信仰——」、大西克也、第 2 回東大人文・熊野フォーラム、2022.5.14

[公開講演、セミナー、チュートリアル、講習、講義等]「去声構詞在上古漢語語法体系中的地位」、大西克也、北京大学中文系「海外名家講学計画・漢語史与出土文献研究」、2022.9.30

[公開講演、セミナー、チュートリアル、講習、講義等]「語、文之間——從語言表達的角度看古文字的歷史發展」、大西克也、北京大学中文系「海外名家講学計画・漢語史与出土文献研究」、2022.11.4

[公開講演、セミナー、チュートリアル、講習、講義等]「中国吳越の鳥書和日本熊野の「牛玉寶印」——漢字信仰從中國到日本的傳播」、大西克也、中央研究院歷史語言研究所講演会、2023.11.21

[公開講演、セミナー、チュートリアル、講習、講義等]「從語言研究的角度談古文字研究」、大西克也、政治大學中文系深波學術講座・出土文獻與經典導讀（二十三）、2023.11.22

[口頭発表（基調）]「説“今”——上古漢語的時間認識」、大西克也、郭錫良先生追思會暨漢語史國際學術研討會、2023.12.30

(3) 共同研究・競争的資金等の研究課題

[科学研究費助成事業]「中国語における文法的意味の史的変遷とその要因についての総合的研究」、大西克也 木村英樹 木津祐子 松江崇、基盤研究（B）：18H00662、日本学術振興会、東京大学、2018.4～2023.3

[科学研究費助成事業]「シナ＝チベット諸語の歴史的展開と言語類型地理論」、池田巧 大西克也 林範彦 星泉、基盤研究（S）：18H05219、日本学術振興会、京都大学、2018.6～2023.3

[科学研究費助成事業]「上古中国語アスペクト研究——有標形式と無標形式が表現する文法的意味」、大西克也、基盤研究（C）：23K00495、日本学術振興会、東京大学、2023.4～2027.3

e その他

(1) 学会・委員活動

[委員歴] 中国出土資料学会、理事、1998～

[委員歴] 東方学会、学術委員、2011～

[委員歴] 日本中国学会、評議員、2013～

教授 齋藤 希史 SAITO, Mareshi

1. 略歴

1986年3月	京都大学文学部文学科中国語学中国文学専攻卒業
1986年4月	京都大学文学部聴講生
1988年4月	京都大学大学院文学研究科修士課程中国語学中国文学専攻入学
1990年3月	京都大学大学院文学研究科修士課程中国語学中国文学専攻修了（文学修士）
1990年4月	京都大学大学院文学研究科博士課程中国語学中国文学専攻進学
1991年3月	京都大学大学院文学研究科博士課程中国語学中国文学専攻退学
1991年4月	京都大学人文科学研究所助手
1997年4月	奈良女子大学文学部講師
1999年4月	奈良女子大学文学部助教授
2000年4月	国文学研究資料館文献資料部助教授
2000年4月	奈良女子大学文学部併任助教授
2001年10月	東京大学大学院総合文化研究科併任助教授
2002年10月	東京大学大学院総合文化研究科助教授
2002年10月	国文学研究資料館文献資料部併任助教授
2007年4月	東京大学大学院総合文化研究科准教授
2012年4月	東京大学大学院総合文化研究科教授
2015年5月	東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

中国古典文学

b 研究課題

- (1) 中国古典詩文、とりわけ六朝から唐宋にかけての詩賦および文学論。
- (2) 古代から近代にいたる漢字圏の生成と展開、またその言語・文字・文学・出版。

c 概要と自己評価

(1)については、六朝文学を『文選』から展望する試みを共著の一章としてまとめるとともに、建安期から劉宋期にいたる五言詩の展開において、東晋期の詩文が果たした役割と山水詩の意義について新たな視点を国際学会における報告（日本語）および論文（英文）として公表した。また、近体詩の形成過程において、音韻の整形のみならず、形態と意味の結びつきによる叙述構成の類型化が動力となったことに着目し、口頭発表を行った。

(2)については、科学研究補助金基盤（A）「国際協働による東アジア古典学の次世代展開」（2019-2024）等の資金を得て、国内外との共同研究活動を積極的に行った。また、西田太一郎『漢文の語法』の復刊に校訂・解説として携わり、共著『漢文の読法』（共著）を執筆するなど（出版は2024年）、古典詩文読解の継承にも意を用いた。

d 研究業績

(1) 書籍出版物

[共著]『アジア人物史』第2巻 世界宗教圏の誕生と割拠する東アジア、集英社、2023

[分担執筆]『漢字文化事典』（項目：近代の漢文）、日本漢字学会編、丸善出版、2023

[教科書]『精選言語文化』、明治書院、2022

[教科書]『精選古典探求 漢文編』、明治書院、2023

[校訂・解説]『漢文の語法』（西田太一郎）、KADOKAWA、2023

(2) 論文

[学術雑誌] 訓読体：近世から近代へ、『日本語学』41-2、156-164、2022

[学術雑誌] Reverie and the Landscape: Up Until the First Part of the Eastern Chin, SAITO Mareshi, ACTA ASIATICA, 125, 21-43, 2023

(3) その他各種論著

[書評・文献紹介等] 座談会『万葉集』を成り立たせた帝國的想像、『短歌研究』、2023.9、2023、短歌研究社

(4) 講演・口頭発表等

[シンポジウム・ワークショップパネル（指名）] 遐想と山水——東晋期を中心に、第66回国際東方学会会議、オンライン、2022.5.21

[シンポジウム・ワークショップパネル（指名）] 五言詩の転機、東アジア古典学の方法第78回、東京大学、2022.1.29

[公開講演、セミナー、チュートリアル、講習、講義等] 古典学の回廊、「東アジア古典学の方法」国際シンポジウム、北京大学、2023.11.23

(5) 共同研究・競争的資金等の研究課題

[科学研究費助成事業]「国際協働による東アジア古典学の次世代展開——文字世界のフロンティアを視点として」、代表、基盤A、2019.4.1～2024.3.31

[科学研究費助成事業]「日唐交流における「六朝詩体」、代表、特別研究員奨励費、2023.3.8～2024.3.31

e 社会活動

(1) 社会貢献活動

[企画] 東京大学連携研究機構ヒューマニティーズセンターにおける公開セミナー、インタビュー等の諸活動の企画および実施を機構長として統括

f その他

(1) 非常勤講師

早稲田大学政治経済学部、ベトナム国立ハノイ国家大学

(2) 学会・委員活動

[委員歴] 日本学術会議連携委員、中国社会文化学会理事、東方学会評議員、六朝学会学会理事、日本中国学会評議員、日本近代文学館運営審議委員

1. 略歴

1991年3月	東京大学文学部中国語中国文学専修課程卒業
1991年4月	東京大学大学院人文科学研究科修士課程中国語中国文学専攻入学
1993年3月	東京大学大学院人文科学研究科修士課程中国語中国文学専攻修了
1993年4月	東京大学大学院人文科学研究科博士課程中国語中国文学専攻進学
1993年9月	北京大学中文系留学（高級進修生として）（1994年7月まで）
1997年1月	東京大学大学院人文社会系研究科博士課程中国語中国文学専攻修了
1997年1月	博士（文学）学位取得
1997年4月	明治大学政治経済学部 専任講師
2002年4月	明治大学政治経済学部 助教授
2007年4月	明治大学政治経済学部 准教授
2010年4月	明治大学政治経済学部 教授
2013年4月	一橋大学大学院言語社会研究科 教授
2018年4月	東京大学大学院人文社会系研究科 教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

中国近現代文学

b 研究課題

(1) 中国モダニズム文学の展開

モダニズムを広義にとらえ、中国近現代文学において、西洋の文学技法を学んで中国の現実を描く文学創作がどのように展開したかを解明しようとしている。

(2) 日本人研究者による中国文学研究

日本における中国文学研究が、どのような文脈の中で、いかなる問題意識のもと、どのような成果を生み出してきたかを明らかにしようとしている。

(3) 現在の中国の知的状況

現在の中国の知識界の状況を捉え、その意味を日本に伝えようとしている。

c 概要と自己評価

(1) については、西洋的マルクス主義文芸思想を十分に吸収し、中国の現実に即した理論を構築しようとした胡風およびその周辺の文学活動を総体としてまとめるべく、準備を進めている。また、胡風より一世代前の左翼文芸批評家の彭康の文芸理論について論文を発表した。

(2) については、戦前の中国で「支那通」と呼ばれた井上紅梅の鲁迅翻訳について、井上紅梅が目指していた翻訳の方向性を踏まえた上で、実際の鲁迅翻訳の細部を検討し、その特徴を論じた。

(3) については、中国を代表する研究者である孫歌氏が日本思想史にとりくんだ研究書『思想史の中の日本と中国』全2部を翻訳、出版した。また中国の建築家であり、建築にとどまらない文化的発言で注目されている王澐著『家をつくる』の共訳に参加した。

d 研究業績

(1) 論文

「瞿秋白接受馬克思主義信仰的思想脈絡—從《餓鄉紀程》到《赤都心史》」、『長江學術』2022年第3期、pp.68-78、2022

「日本占領下上海文化の「グレーゾーン」をどう考えるか（増補版）」、『グレーゾーンと帝国 歴史修正主義を乗り越える生の営み』、勉誠出版、pp.99-129、2023

「近二十年日本の中国現代文学研究」、『現代中文学刊』2023年第2期、pp.25-32、2023

「陶晶孫と田村俊子、そして『女声』、『日中戦時下の中国語雑誌『女声』—フェミニスト田村俊子を中心に』、春風社、pp.257-273、2023

(2) その他各種論著

「ロシア文学と中国文学」、『ロシア文学からの旅 交錯する人と言葉』、ミネルヴァ書房、pp.212-213、2022

「中国の農村を感じとるために—『小さき麦の花』と近年の中国ドキュメンタリー映画をめぐる」、『neoneo web』、2023.2.22

「中国現当代文学中的“情感”問題」、『中国現当代文学研究的方法及其射程』、東アジア藝文書院、pp.75-82、2023

「從「弱性格」和亞洲思想資源內在化出發」、『人間思想（繁体字版）』30号、pp.87-92、2023

『再解讀』から視角研究へ——唐小兵論文解題、『中国—社会と文化』38号、pp.150-153、2023.7

「日本學術脈絡中的魯迅論：評王欽的『魯迅を讀もう』」、『東京大学中国語中国文学研究室紀要』26号、pp.52-57、2023.11

(3) 講演・口頭発表等

[公開講演、セミナー、チュートリアル、講習、講義等]「竹内好与中国」、南京大学講座、オンライン開催、2022.4.7

[公開講演、セミナー、チュートリアル、講習、講義等]「日本脈絡中的“人民性”——以丸尾常喜為線索」、「東亜視角下的《革命-後革命》」、オンライン開催、2022.11.20

[公開講演、セミナー、チュートリアル、講習、講義等]「用日文讀王欽的魯迅論」、「重讀魯迅：問題与方法」工作坊、華東師範大学、オンライン開催、2022.11.26

[公開講演、セミナー、チュートリアル、講習、講義等]「近二十年日本の中国現代文学研究」、清華大学講座、オンライン開催、2022.12.10

[公開講演、セミナー、チュートリアル、講習、講義等]「何其芳在1949年」、南洋理工大学講座、オンライン開催、2023.2.18

[公開講演、セミナー、チュートリアル、講習、講義等]「何其芳如何理解現實主義」、中国人民大学文学院講座、中国人民大学、中国人民大学文学院、2023.10.31

[公開講演、セミナー、チュートリアル、講習、講義等]「茅盾的模索：文学創作与大眾化」、北京大学中文系講座、北京大学、北京大学中文系、2023.10.31

[公開講演、セミナー、チュートリアル、講習、講義等]「何其芳的經驗：抒情与改造」、北京大学中文系講座、北京大学、北京大学中文系、2023.11.1

[公開講演、セミナー、チュートリアル、講習、講義等]「日本の中国現代文学研究：從同時代的介紹到今天的學術研究」、北京師範大学文学院講座、北京師範大学、北京師範大学文学院、2023.11.2

[シンポジウム・ワークショップ パネル（指名）]「文学研究如何重返“歷史現場”」、北京大学中文系円卓座談会、北京大学、北京大学中文系、2023.11.3

(4) 共同研究・競争的資金等の研究課題

[科学研究費助成事業]「魯迅作品日本語翻訳の総合的研究」、鈴木将久、基盤研究(C):21K00322、日本學術振興会、東京大学、2021.4～2026.3

e その他

(1) 学会・委員活動

[委員歴] 中国社会文化学会、理事、2002～、理事長、2023～

[委員歴] 日本中国学会、評議員、2021～、理事、2021～2023

13 中国思想文化学

教授 横手 裕 YOKOTE, Yutaka

1. 略歴

1988年3月 東京大学文学部中国哲学専修課程卒業
1990年3月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程（中国哲学専攻）修了
1991年8月 東京大学大学院人文科学研究科第一種博士課程（中国哲学専攻）中退
1991年9月 京都大学人文科学研究所助手
1997年4月 千葉大学文学部助教授
2003年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授
2007年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授
2015年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

中国思想、道教、中国医学

b 研究課題

- (1) 道教思想、道教史の解明
- (2) 道教と中国医学の関係史
- (3) 儒・仏・道の三教交渉史を中心とする中国思想史

c 概要と自己評価

研究の中心は道教であるが、道教と中国仏教との関係、および儒・仏・道の三教の影響関係からみた中国思想史についても考察を進めている。三教についてはこれまで道・仏の関係を論じることが多く、とくに道教の内丹説と仏教とのかかわり方について多角的な考察を行ってきたが、三教みつどもえの関係についてはあまり論ずることができなかった。本期間では新たに儒教知識人の考える仏教・道教関係などについても考察を試みた。さらに道教と中国医学、およびアジア医学との関係の研究にも着手し、アジア医学研究者たちと科学研究費補助金によるプロジェクトを立ち上げて共同で研究に取り組んだ。

d 研究業績

(1) 書籍出版物

[編著] 横手裕、『アジアの伝統医学における医療・医学の倫理と行動規範、及びその思想史的研究』、科学研究費補助金研究報告書、2023.2、373p

[分担執筆] 横手裕、『モンゴル帝国のユーラシア統一（アジア人物史第5巻）』第5章「道教の変貌と社会への浸透——金元時代の全真教とその周縁」、集英社、2023.10、pp.303-357

(2) 論文

[論文] 横手裕、「明末清初の三教と医学と倫理—西昌居士喻昌を中心に—」、横手裕編『アジアの伝統医学における医療・医学の倫理と行動規範、及びその思想史的研究』、科学研究費補助金成果報告書、2023.2、pp.137-148

[論文] 大沼由香、立石和子、浦山きか、横手裕、「看護系大学基礎教育における伝統医療倫理教育の展望：日本と台湾での看護教育経験者の語りのSCAT分析」、『伝統医療看護連携研究』4巻2号、2023.3、pp.39-48

[論文] 横手裕、「医家と道家と体内観」、外村中・稲本泰生編『「見える」ものや「見えない」ものをあらわす：東アジアの思想・文物・藝術』、勉誠社、2024.3、pp.467-486

(3) その他各種論著

[目録] 横手裕、孔詩、脇山豪、「道教関係著書論文目録2021（令和三年）」、『東方宗教』140号、2022.11、pp.1-11

[目録] 横手裕、孔詩、脇山豪、「道教関係著書論文目録2022（令和四年）」、『東方宗教』142号、2023.11、pp.1-12

(4) 講演・口頭発表等

[口頭発表（基調）] 国内、横手裕「医倫プロジェクトについて」、シンポジウム「伝統医学における医の心得と医療倫理」、医療倫理プロジェクト・社会鍼灸学研究会共催（オンライン）、2022.10.23

(5) 共同研究・競争的資金等の研究課題

科学研究費補助金、基盤研究 (A)、横手裕、研究代表者、「アジアの伝統医学における医療・医学の倫理と行動規範、及びその思想史的研究」、2019～2022

e 社会活動

(1) 他機関での講義等

国際日本文化研究センター、研究員、2022.4～

京都大学人文科学研究所、研究員、2022.4～

(2) 学会

日本道教学会、理事、2022～

中国社会文化学会、理事、2022～

日本中国学会、論文審査委員、2022～

東方学会、学術委員、2022～

教授 陳 捷 CHEN, Jie

1. 略歴

1985 年 7 月	北京大学中国語言文学系古典文献専攻卒業
1988 年 7 月	北京大学中国語言文学系古典文献専攻修士課程修了
1988 年 7 月	北京大学中国語言文学系・古文献研究所助手
1990 年 8 月	北京大学中国語言文学系・古文献研究所専任講師（～1995 年 3 月）
1994 年 2 月	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫訪問研究員（～1995 年 1 月）
1994 年 8 月	東京大学東洋文化研究所外国人研究員（～1995 年 3 月）
1998 年 3 月	東京大学大学院人文社会系研究科アジア文化研究専攻（東アジア思想文化専門分野） 博士課程単位取得退学
1998 年 4 月	文部省学術振興会特別研究員 PD
1999 年 4 月	日本女子大学人間社会学部文化学科専任講師（～2003 年 3 月）
2001 年 4 月	東京大学大学院人文社会系研究科博士（文学）学位取得
2003 年 4 月	日本女子大学人間社会学部文化学科助教授
2004 年 4 月	国文学研究資料館研究部助教授
2007 年 4 月	国文学研究資料館研究部准教授
2013 年 4 月	国文学研究資料館研究部教授
2017 年 4 月	東京大学大学院人文社会系研究科 教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

中国書籍史 東アジアの書籍交流史 日中文化交流史

b 研究課題

1. 近世の東アジアにおける文化交流
2. 江戸時代の好古学と考証学
3. 明治時代の日中学術交流

c 概要と自己評価

東アジアの文化交流を視野に入れながら、日本と中国の書籍文化と学術交流史を研究している。本期間では引き続き江戸時代の中国文化の受容と多元文化を中心に研究を進め、引き続き詩経学と博物学との関係に注目し、また、江戸時代中後期における「好古家」の活動について研究を着手した。なお、近代における日中学術交流に関する新資料の整理研究を行い、当該分野における基本資料の整備に貢献した。

d 研究業績

(1) 書籍出版物

- [共編者] 章清・陳力衛等主編、張明傑・陳捷・陳繼東副主編『近代日本漢文文獻叢刊』第1輯、上海古籍出版社、2022.12
- [編纂] 李華雨・陳捷、「関義臣『日本名家經史論存』解題」、章清・陳力衛等主編、張明傑・陳捷・陳繼東副主編『近代日本漢文文獻叢刊』第1輯第6-8冊、上海古籍出版社、2022.12
- [編纂] 陳捷、「岡千仞『尊攘紀事』、『訂正尊攘紀事補遺』」、章清・陳力衛等主編、張明傑・陳捷・陳繼東副主編『近代日本漢文文獻叢刊』第1輯第10冊、上海古籍出版社、2022.12
- [編纂] 陳捷、「岡千仞『繙譯米利堅志』」、章清・陳力衛等主編、張明傑・陳捷・陳繼東副主編『近代日本漢文文獻叢刊』第1輯第13冊、上海古籍出版社、2022.12
- [編纂] 陳捷、「高橋二郎抄譯、岡千仞刪定、重野安綱、藤野正啓評閱『法蘭西志』」、章清・陳力衛等主編、張明傑・陳捷・陳繼東副主編『近代日本漢文文獻叢刊』第1輯第13冊、上海古籍出版社、2022.12
- [編纂] 陳捷、「増田貢『清史攬要』、『滿清史略』」、章清・陳力衛等主編、張明傑・陳捷・陳繼東副主編『近代日本漢文文獻叢刊』第1輯19冊、上海古籍出版社、2022.12

(2) 論文

- [學術雜誌] 陳捷（訳）、「慶應義塾図書館蔵《論語疏》卷六概述」（住吉朋彦撰、慶應義塾大学論語疏研究会編『慶應義塾大学附属研究所斯道文庫蔵 論語義疏 景印と解題研究』により）、『國際漢学研究通訊』第23、24期、pp.3-17、北京大学出版社、2021.12（前年度の補足）
- [大學研究機関紀要] 吳孟晋、陳捷「森琴石ゆかりの中國書畫および書簡資料について——來舶清人との交流を中心に——」、『學叢』第44号、pp.79-109、京都國立博物館、2022.6、査読あり
- [論文集（書籍）内論文] 陳捷、「江戸中後期好古家による古典籍装訂・装具研究について」、高田宗平編『日本漢籍受容史——日本文化の基層——』論文集、pp.415-445、八木書店出版部、2022.12
- [論文集（書籍）内論文] 陳捷、「日本江戸中后期好古家対古代書籍装订形式和装具的研究」、中国美术学院美術史論研究中心編『書籍之為芸術：中国古代書籍中的芸術元素學術研討會論文集』、pp.391-422、杭州：中国美术学院出版社、2023.1
- [論文] 陳捷、「服部字之吉『北馬録』解題・翻刻」、『東洋文化研究所紀要』第182冊（2022年度第1期）、pp.268(63)-230(101)、東京大学東洋文化研究所、2023.1、査読あり
- [論文] 陳捷、「安井小太郎『寓燕日記』解題・翻刻」、『東洋文化研究所紀要』第183冊（2022年度第2期）、pp.254(1)-197(58)、東京大学東洋文化研究所、2023.3、査読あり
- [論文] 陳捷、「『清国家家庭及学堂用』家政学』中的西洋飲食及西餐礼儀」、『南國學術』第13卷第3期、pp.397-409、澳門大学、2023.7、査読あり
- [論文] 陳捷、「邁宋書館銅版『西清古鑑』刊印始末考」、『印刷文化』2023年第4期（総第13期）、中国印刷博物館、pp.86-102、2023.12、査読あり
- [論文] 陳捷・程善善・田九七、『大河内文書』訳註(1)、東京大学中国哲学研究会[編]『中国哲学研究』(33)、pp.56-88、2023.12、査読有り
- [論文] 陳捷、「服部字之吉家書（附日記）解題・翻刻」、『東洋文化研究所紀要』第184冊（2023年度第1期）、pp.254(1)-197(58)、東京大学東洋文化研究所、2024.3、査読あり

(3) その他各種論著

- 陳捷、「坂元ひろ子先生を偲ぶ」、『九葉読詩会』第9号、九葉読詩会編集発行、pp.197-202、2023.3

(4) 講演・口頭発表等

- [口頭発表（一般）] 国際、陳捷、「關於十九世紀七、八十年代中国書畫家游歷日本的考察——以画家王寅為例」、中国近現代美術留学史料与研究工作坊、中国芸術研究院美術研究所（オンライン）、2022.6.4～5
- [シンポジウム・パネル（指名）] 陳捷、「より積極的な発信と、他分野との交流に対する期待」、日本近世文学会70周年記念シンポジウム「独自進化する？日本近世文学会の研究——回顧と展望——」、パネル発表（オンライン）、2022.6.11
- [公開講演（指名）] 国際、陳捷、「日本江戸時代的詩經名物学」（講演）、「東亞經典与世界漢学」第九講、香港教育大学文学及文化学系（オンライン）、2022.6.18
- [口頭発表（招待・特別）] 国際、陳捷、「日本医学古籍晚清流入中国的商業渠道——以王寅東壁山房為例」、「中国古代医学文献的現代闡釋」國際シンポジウム、首都医科大学（オンライン）、2022.10.30
- [口頭発表（一般）] 国際、陳捷、「關於越南使臣阮輝漢詩『餞日本使回程』的釈読」、使行録与東亞學術文化交流研討會、北京大学中文系（オンライン）、2022.11.5～6

[口頭発表 (一般)] 「A Study on Imazeki Tenpō and His *Kindai shina no gakugei* (*The Arts of Modern China*)」(「今関天彭と『近代支那の学芸』」)、「The Transformation of Sino-Japanese Culture under Modernity Reconstructing the Imazeki Tenpō (1882-1970) Sinology Collection at the Berkeley Library 東アジアの近代化と日本漢学の変容—今関天彭の蔵書構築を端緒として—」、国際研究集会、科学研究費補助金・国際共同研究加速基金(国際共同研究強化(B)、MKK058J)とカリフォルニア大学バークレー校東アジア言語文化学科と共催、カリフォルニア大学バークレー校東アジア図書館、2023.3.24

[コメンテーター] 陳捷、「中国文献の異伝・異文と日本古典文芸」、コメンテーター、第67回国際東方学会、東京教育会館、2023.5.20

[講演] 陳捷、「西太后に会った日本女性—服部繁子と彼女が中国人に紹介した西洋料理のおもてなし」、早稲田大学国際文学館(村上春樹ライブラリー)、2023.6.26

[口頭発表 (一般)] 陳捷、「『北馬録』から見た服部宇之吉の北京体験について」、北京史研究会、東京大学、2023.10.28

[口頭発表 (指名)] 陳捷、「關於日本江戸中後期考古圖録及其中與古文獻相關文物的考察」、北京フォーラム、北京大学、2023.11.3~4

[講演] 陳捷、「江戸の詩經名物學與東亞知識環流」、「書籍史與知識環流:東亞漢籍雲端講座[2023 孟冬系列]」、台湾中正大学東亞漢籍與儒学研究センター(オンライン)、2023.11.10

[口頭発表 (一般)] 陳捷、「晚清畫家王寅的日本遊歴」、「東亞文化交流視域下的思想、文化與宗教」国際學術研討会、台湾中央研究院文哲研究所と東京大学人文社会系研究科中国思想文化学研究室共催、東京大学、2023.11.17

[口頭発表 (指名)] 陳捷、「清末における安井小太郎の北京体験について」、「【柳井イニシアティブ】国際シンポジウム「越境する書物交流と博物書写—蔵書・経学・デジタル歴史学—」、早稲田大学文学部、2023.11.18

[口頭発表 (一般)] 陳捷、「關於日本江戸中後期好古家考古図録の考察—以古代書籍装訂形式和装具研究為例」、台湾中央研究院明清研究国際學術研討会(オンライン)、2023.12.13~15

[口頭発表 (一般)] 陳捷、「『(清国家及学堂用)家政学』所見西餐礼儀的知识背景—日本明治时期的女子西餐礼儀教育」、復旦大学歴史系、2023.12.26

[講演]「今関天彭と『近代支那の学芸』、2024.3.11~12、東アジアの近代化と日本漢学の変容—今関天彭の蔵書構築を端緒として—」、北京大学古文文献研究センター

[口頭発表 (一般)] 「十九世紀中葉中日書籍交流の渠道：以安井息軒著作伝入中国為例」、上海財経大学、2024.3.19

(5) 共同研究・競争的資金等の研究課題

日文研共同研究「比較のなかの「東アジア」の「近世」—新しい世界史の認識と構想のために—」(研究代表者：伊東貴之、2022~24年度)

日文研国際共同研究「近代東アジア文化史の再構築 I—19世紀の百年間を中心に—」(研究代表者：劉建輝、2022~24年度)

e 科研費

(1) 科研費の研究代表者 (1件)

文部科学省科学研究費補助金(研究種目：基盤研究(C)、研究代表者：陳捷)、「清末の中国外交官が見た明治日本—清国駐日公使館随員孫点の記録を中心として」、2022.4.1~2025.3.31

(2) 科研費の研究分担者 (3件)

2019~2022年度(研究種目：国際共同研究加速基金(国際共同研究強化(B)、研究代表者：住吉朋彦)、「在米日本漢籍の蔵書学—今関天彭蒐集書を事例として—」

2020~2024年度(研究種目：基盤研究(A)、研究代表者：住吉朋彦)、「江戸幕府紅葉山文庫の再構と発信—宮内庁書陵部収蔵漢籍のデジタル化に基づく古典学—」

2020~2022年度(研究種目：挑戦的研究(開拓)、研究代表者：伊東乾)、「機械学習を用いた東アジア数理調和思想の実証的研究と共生倫理の検討」

f その他

(1) 学会・委員活動

[所属学協会] 日本中国学会

[所属学協会] 中国社会文化学会

[委員歴] 日本中国学会、理事、大会委員会委員

[委員歴] 中国社会文化学会、理事

国際日本文化研究センター、研究員

1 4 インド哲学仏教学

教 授 下田 正弘 SHIMODA, Masahiro

1. 略歴

1981 年 3 月	東京大学文学部印度哲学印度文学専修課程卒業
1981 年 4 月	東京大学大学院人文科学研究科修士課程（印度哲学）入学
1984 年 3 月	東京大学大学院人文科学研究科修士課程（印度哲学）修了
1984 年 4 月	東京大学大学院人文科学研究科博士課程（印度哲学）進学（～1989 年 3 月）
1985 年 7 月	インド・デリー大学大学院留学（文部省国際交流計画）（～1986 年 5 月）
1988 年 4 月	日本学術振興会特別研究員（～1990 年 3 月）
1994 年 6 月	博士（文学）（東京大学）
1994 年 10 月	東京大学文学部（インド哲学仏教学）助教授
1995 年 4 月	東京大学大学院人文社会系研究科（インド哲学仏教学）助教授
2006 年 1 月	School of Oriental and African Studies (University College of London) 教授（～2006 年 3 月）
2006 年 4 月	東京大学大学院人文社会系研究科（インド哲学仏教学）教授
2007 年 4 月	東京大学大学院人文社会系研究科（次世代人文学開発センター兼任）教授
2011 年 3 月	Stanford University 客員教授（～2011 年 4 月）
2012 年 2 月	University of Virginia 客員研究員（～2012 年 5 月）
2013 年 6 月	東京大学大学院人文社会系研究科（次世代人文学開発センター配置換、インド哲学仏教学兼任） 教授
2017 年 3 月	University of Vienna (Faculty of Philology and Cultures) 教授（～2017 年 5 月）
2021 年 4 月	東京大学大学院人文社会系研究科（インド哲学仏教学配置換、次世代人文学開発センター兼任） 教授
2023 年 3 月	定年退職

2. 主な研究活動

a 専門分野 b 研究課題

専門はインド仏教聖典形成史、および人文情報学（Digital Humanities）。前者については、経 sūtra と 律 vinaya を中心とするテキストの形成過程の解明を通し、初期仏教から大乘仏教にいたる思想史の構築を図る。研究テーマの詳細は、(1)大乘経典の形成過程と思想的特徴の解明、(2)近代仏教学における仏教研究方法の問いなおし、(3)仏教思想の現代的意義の考究、という3点に集約される。西洋近代に生まれ、200年の歴史を有する仏教学の方法論について、人文学の方法論全体のなかで再検証し、同時に現代の倫理として機能する可能性を考慮に入れつつ解明を進めている。後者の課題、人文情報学については、大蔵経という歴大な漢語仏教文献コーパスを中心として仏教学の国際的デジタル知識基盤形成を進め、デジタル媒体における人文学研究の方法論構築をめざしている。

c 概要と自己評価

仏教史最大のなぞとされる大乘仏教成立問題について、テキストから想定される当時の社会背景に成立要因を還元するという、これまで主流をなしてきた研究のもつ問題点を洗いなおし、テキスト研究としての大乘仏教研究の方法を追究してきた。1960年代以降、歴史学における言語論的転回を経た人文学において課題化されたテキスト論は、古代インド仏教における諸文献、ことに初期大乘経典を解明するさいに重要な主題となる。最近では、ポスト構造主義以降のテキスト研究批判を踏まえ、大乘経典の特性の解明を進めるなかで、大乘仏教運動は、外部の制度的変化に反映することのない経典制作運動として既存の仏教制度内部で進められ、その成立には口伝から書写へという伝承の媒体の変化が大きく関与していた、という新たな仮説を提示した。同時に、近代仏教学方法論全般を問いなおし、イデオロギーに先導されがちな欧米起源のオリエンタリズム論の影響下に留まる仏教学批判を超え、資料の特性と仏教伝統の形成方法とに照合させつつ批判をする方法の樹立をめざし、一定の成果を挙げつつある。

人文情報学にかんしては、ことにこの12年に蓄積した成果を国際学界において積極的に検証したことによって、Digital Humanities という人文学新領域の構築と推進において仏教研究が果たすべき役割を顕在化させた。文字レベルにおける Unicode への登録と ISO 漢字委員会 (IRG) への参加、テキストレベルにおける TEI (Text Encoding Initiative)

コンソーシアムでの東アジア日本研究会の設置、画像レベルにおける IIIF (International Image Interoperability Framework) への参画は、日本の人文学全体に資する企図である。これらの成果を総合し科学研究費基盤 S「仏教学術新知識基盤の構築」の成果として出版した『デジタル学術空間の作り方』においては、デジタル媒体における人文学のありようについて、その原理的次元から具体的適用例までを提示した。こうした経験を踏まえ、2022 年 7 月、Digital Humanities 2022 Tokyo を主催し、世界 40 か国を超える国々から 700 人の参加者を迎える国際会議を開催した。欧米中心に進んできた会議をアジアで初めて主催したことは、Digital Humanities の歴史の転換点をなす成果として特筆しておきたい。

d 研究業績 (2022 年度)

(1) 論文

- [単著]「聖典としての仏教——『法華経』にみる三宝の歴史性」、『東洋学術研究』61-1、pp.221-247、2022
- [共著] (永崎研宣ほかと共著)「仏教学のためのデジタル学術編集システムの構築に向けたモデルの提案と実装」、『情報処理学会論文誌』63-2、pp.324-334、2022
- [共著] (渡邊要一郎ほかと共著)「デジタル法寶義林における研究データの共同構築」、『研究報告人文科学とコンピュータ (CH)』2021-CH-128-9、pp.1-4、2022
- [共著] (永崎研宣ほかと共著)「構造化テキストデータの活用における現状と課題——TEI に準拠した『浄土真宗聖典全書』全文検索システムの開発を通じて」、『じんもんこん 2022 論文集』、pp.73-78、2022
- [共著] (西岡千文ほかと共著)「人文学におけるオープン・サイテーションの可能性——インド学仏教学分野を事例として」、『じんもんこん 2022 論文集』、pp.257-262、2022
- [単著]「セッション No.6 の発表に対するコメント——三宝の出現形態と経典言説の歴史的展開」、『日本仏教学会年報』86、pp. 296-301、2023

(2) 講演・口頭発表等

- (招待)「Trend of Digital Humanities in Japan」“Perspectives on Digital Humanities in Japan and Germany”, Trier Center for Digital Humanities, Trier University, Germany、2022.1.27
- (招待)「大乘仏教をめぐって——仏教研究から照らす、仏教研究を照らす」(一般財団法人東京大学仏教青年会 涅槃会公開講座)、東京大学仏教青年会、2022.2.11
- (招待)「仏教とウェルビーイング」(武蔵野大学「しあわせ研究所」第 7 回シンポジウム「ウェルビーイング学構築序説」)、武蔵野大学有明キャンパス、2022.2.23
- (招待)「大乘仏教研究の現在——大乘経典の出現」(浄土真宗本願寺派高岡教区教学研究室公開講義)、高岡市、2022.8.23
- (特別)「大蔵経データベースから人文情報学へ」(科研基盤 A シンポジウム「デジタル仏教学の歩み デジタル人文学教育の歩み——下田正弘教授ご退任記念シンポジウム」)、東京大学、2023.2.4
- (招待)「聖典としての大乘経典」(龍谷大学大乘莊嚴経論研究会)、オンライン、2023.2.10
- (特別)「仏教思想研究の道程——経典形成研究の軌跡を追って」(東京大学最終講義)、東京大学文学部、2023.3.11
- (招待)「Dictionary and Lexicon in the SAT Project (Tools of the Trade at Harvard University)」The Tools of the Trade: The Way Forward: An International Conference on Digital Tools and Methods in East Asian Studies, Harvard University 14 -16 March 2023、ハーバード大学、2023.3.16

(3) その他 (データベース・作品等)

SAT 大蔵経テキストデータベース (<https://21dzk.l.u-tokyo.ac.jp/SAT/>)

(4) 共同研究・競争的資金等の研究課題

- 日本学術振興会科学研究費補助金、基盤研究 A、下田正弘、研究代表者、「仏教学デジタル知識基盤の継承と発展」、2019～現在
- 日本学術振興会科学研究費補助金、基盤研究 A、下田正弘、分担者 (代表者は東大外)、「パウリッダコーシャの総括的研究——仏教用語の日英基準訳語集の次世代モデル構築に向けて」、2019～
- 日本学術振興会科学研究費補助金、基盤研究 C、下田正弘、分担者 (代表者は東大外)、「仏教生死観を用いた生涯発達心理学の再考——ターミナルケアと死生観教育への応用」、2019～

e 社会活動

(1) 社会貢献活動

- [講師] 松江中村元記念館講義講師、2022.8.4
- [講師] 長野善光寺道心会、2022.10.22

(2) 学術貢献活動

[企画立案・運営等] Digital Humanities 2022 Tokyo 会議、2022.7.25～29

f その他

(1) 学会・委員活動

国際、The Eastern Buddhist Society, Board Member、編集顧問、2005～現在

国際、Japanese Association for Digital Humanities（日本デジタル・ヒューマニティーズ学会）、理事

国内、日本宗教学会、常務理事、評議員

国内、一般財団法人東方学会、理事

国内、仏教思想学会、理事

国内、パーリ学仏教文化学会、会長

国内、比較思想学会、理事

国内、日本学術会議連携会員、2011～現在

国内、日本西藏学会運営委員

(2) その他

大蔵経テキストデータベース研究会（SAT）、代表委員

一般財団法人人文情報学研究所、評議員、上席連携研究員

大蔵経研究推進会議、常任議員、議長

公益財団法人仏教伝道協会、英訳大蔵経編集委員会委員

一般財団法人石原奨学育英会、評議員

一般財団法人仏教学術振興会、理事、選考委員

公益財団法人国際宗教研究所、顧問

一般財団法人東京大学仏教青年会、理事

宗教教育研究センター、連携委員

公益財団法人三菱財団、選考委員

教 授 **蓑輪 顕量** MINOWA, Kenryo

1. 略歴

1983 年 3 月	東京大学文学部印度哲学印度文学専修課程卒業（学士）
1983 年 4 月	東京大学大学院人文科学研究科印度哲学印度文学専攻修士課程入学
1986 年 3 月	同大学院（印度哲学印度文学専攻）修士課程修了（修士）
1986 年 4 月	東京大学大学院人文科学研究科印度哲学印度文学専攻博士課程進学
1990 年 3 月	東京大学大学院人文科学研究科印度哲学印度文学専攻博士課程単位取得退学
1991 年 4 月	日本学術振興会特別研究員（～1993 年 3 月）
1998 年 4 月	愛知学院大学文学部日本文化学科 助教授（～2004 年 1 月）
1998 年 10 月	博士（文学）の学位取得
2004 年 1 月	愛知学院大学文学部日本文化学科 教授
2010 年 4 月	東京大学大学院人文社会系研究科 教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

仏教学、東アジアの仏教及び日本仏教に関する研究及び瞑想に関する研究。

b 研究課題

東アジアにおける仏教の研究。特に日本仏教における修行、学問に関する研究を行っている。学問に関わるどころでは、古代の論義に関する研究を南都に残された法会資料、具体的には『法勝寺御八講門同記』を用いながら考察を進めており、古代から中世に掛けて行われた仏教教理に関する論争に焦点を当てている。また修行道に関する研究は、東南アジアや東アジア世界に伝わる止観と呼ばれる修行の実際に注意を払いながら、東アジア世界に残された文献資料を用いて、東アジア世界の、特に日本の修行道の内容を明らかにすることを目指して研究を進めている。さらには心理学、脳科学の分野の先生方と共同することで、仏教の伝えた修行の現代的な意義を明らかにするとともに現代への応用を視野に入れた研究を進めている。

c 概要と自己評価

2022年4月から2024年3月までの間は、科学研究費（基盤研究A）で研究代表者を務め、「仏教学・心理学・脳科学の協同による止観の総合的研究」と題して、2年間（計画は5年間の予定）の研究を進めた。また同時に内閣府のムーンショット型研究No.9に課題推進者として参画している。前者は仏教の瞑想の進展の度合いを研究するもので、後者は、京都にあるATR・脳情報研究所の今水寛所長（当人社研心理学の教授）、をプロジェクトマネージャーにしたもので、「東洋の人間観と脳情報学で実現する安らぎと慈しみの境地」を目標に研究を続けているものである。小生の役割は「仏教文献調査と瞑想デザイン」と題し、仏教の伝えた瞑想の歴史的な展開を明らかにすると同時に、スマホで動く瞑想アプリケーションを設計することにある。

ムーンショット9の研究が始まってからますます時間に追われるようになってしまい、仏教の伝える瞑想（心身の観察）に関する研究は、ある程度、順調に進めることができたと思うが、それ以外の領域に対する研究が、若干、遅れ気味であると言わざるを得ない。また、2016年度からアジア研究図書館上廣倫理財団寄付研究部門の部門長としての任務が続いており、こちらにも一定程度の時間を割かざるを得ない事態が続いている。たとえば、『法勝寺御八講問答記』の翻刻研究はOCRを用いた入力研究も兼ねているが、若干の進展しかない。日本の戒律に関する研究は、唐招提寺を中心に思想的な展開を再考している。多少、仕事が過剰気味と思われ、また広げた仕事が多くなりすぎている感があるので、この点を調整することを今後の課題としたい。

d 研究業績

(1) 論文

「ブッダの身心の観察—菩提樹偈の瞑想は観であったのか—」、『サンガジャパンプラス』No.2、「慈悲と瞑想」、サンガ新社、246-259頁、2023.3

(2) その他各種論著

講演録「瞑想でたどる仏教—心と体を観察する—」（『日本文化研究』15、駒澤女子大学日本文化研究所、特集「日本文化における身体と心」、25-45頁、2023.3

「タイランド・仏教瞑想調査記」、『仏教文化』62、76-104頁、2024.1

(3) 講演・口頭発表等

五月祭講演「マインドフルネスを切る—仏教学の立場から—」、東京大学仏教青年会企画（東京大学法文1号館）、2022.5.17

「止観からたどる仏教—釈尊から日蓮聖人へ—」（日蓮宗全国布教師連合会・全国大会）、九州・宮崎市、2022.6.14

「仏教の瞑想とマインドフルネス」（オンライン、日本wholePersonCare学会）（事前収録 Zoom）、2023.3.5

「仏教の伝えた止観—念処・止・観—」（立正大学仏教学部仏教文化公開講座 立正大学石橋湛山記念講堂 総合テーマ「こころと仏教」・シンポのテーマ「仏教の伝えた止観と認知神経科学」）、2023.10.13

基調報告「仏教学・心理学・脳科学の接点—仏教瞑想を軸に—」（【企画名】京都大学 人と社会の未来研究院 上廣倫理財団寄付研究部門 研究報告会【パネルディスカッション・タイトル】伝統知×科学・技術でさぐる『未来型ウェルビーイング』：仏教の思想と瞑想の観点から）、京都大学稲森財団稲盛財団記念館3階大会議室、2024.1.21

「仏教の止観と禅宗の実践—その同質性・異質性を探る—」（曹洞宗福岡教区講習会 福岡）、2024.2.22

「法華信仰の人生観—歴史的に活躍した諸人を通じて—」（成田山仏教文化講座・成田山仏教文化研究所 成田山新勝寺）、2024.3.9

「大乘仏教（中国）—涅槃経・法華経を中心に—」（『シリーズ・戦争と宗教—不戦・義戦・聖戦—』横浜朝日カルチャーセンター、オンライン開催）、2024.3.30

(4) 国際セミナー

One aspect of the Cultural Heritage in Japan: Influence of the Buddhism on Japanese Mind, An International Seminar, Excavating Buddhist Cultural Heritage Through Pali Narratives, Institute of Language and Research(ILSR), Department of Pali, University of Calcutta, Department of Pali, The Sanskrit College and University, Kolkata, India, Online, 18, March, 2023

(5) 学会発表

「平安後期の三論・法相宗における修行道」、日本印度学仏教学会、2022.9.3、(東京外国語大学・オンライン)
基調報告「仏教瞑想の歴史とその展開—その階梯(念処・止観)と方法」(日本マインドフルネス学会・第10回大会
東京大学)、2023.12.17

e 社会活動

(1) 社会貢献活動

基調報告「仏教瞑想の歴史とその展開—その階梯(念処・止観)と方法」、日本マインドフルネス学会・第10回大会、2023.12.17、於東京大学文学部法文二号館

(2) 学術貢献活動

博士学位請求論文審査(副査)、大津健一「明曠『天台菩薩戒疏』における戒律観の研究」、創価大学(主査:菅野博史、副査:前川健一)、2022.7.12

博士学位請求論文審査(副査)、ワグ シュレヤ ヴィジヤイ: Mindfulness in Japan: From Acceptance to Expansion、大東文化大学大学院アジア地域研究科・国際関係学部国際関係学科(主査:井上貴子、副査:鈴木真弥、アンドリュー・リチャード・ウルック)、2023.2.12

f その他

(1) 非常勤講師

立正大学大学院文学研究科
亀田医療技術専門学校

(2) 学会・委員活動

日本印度学仏教学会、理事、2023(令和5)年9月より理事長
日本仏教総合研究学会、理事
日本宗教学会、理事
比較思想学会、理事
KIERA-LP学会、会長

准教授 **高橋 晃一** TAKAHASHI, Kouichi

1. 略歴

1991年4月	東京大学教養学部文科三類 入学
1993年4月	東京大学文学部印度哲学専修課程 進学
1995年3月	同 上 卒業
1995年4月	東京大学大学院人文社会系研究科アジア文化研究専攻修士課程 入学
1998年3月	同 上 修了
1998年4月	東京大学大学院人文社会系研究科アジア文化研究専攻博士課程 進学
2002年3月	同 上 単位取得退学
2002年4月	東京大学大学院人文社会系研究科 助手(～2005年3月)
2004年9月	博士(文学)(東京大学)
2005年4月	東京大学大学院人文社会系研究科 学術研究支援員(～2005年9月)
2005年10月	日本学術振興会海外特別研究員(ハンプルク大学アジア・アフリカ研究所)(～2007年9月)
2007年10月	東京大学大学院人文社会系研究科 学術研究支援員(～2008年3月)
2008年4月	東京大学大学院人文社会系研究科 特任研究員(～2012年3月)
2012年4月	筑波大学大学院人文社会科学系研究科 助教(～2013年3月)
2013年4月	東京大学大学院人文社会系研究科 特任研究員(～2017年3月)
2017年4月	東京大学大学院人文社会系研究科 准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

- (1) インド仏教の論書研究
- (2) チベット撰述の注釈文献に関する研究
- (3) サンスクリット語およびチベット語文献のXMLによるマークアップ方法の研究

b 研究課題

(1) インド仏教の文献は、大きく経・律・論の三つの分野に分けられる。そのうち、論は仏教思想家が著した哲学文献であり、論書と呼ばれる。この論書を主な研究対象としている。特にインド大乘仏教の一学派である瑜伽行派の論書进行分析し、その思想形成の過程を考察している。この学派の思想は唯識思想として知られているが、最初期の文献では唯識思想は説かれず、モノの实在を前提にして思想が構築されている。この最初期の思想形態の分析と、唯識思想へ展開した過程を解明し、仏教における唯識説の意義を考察することを課題としている。特にこのような哲学的思想と、菩薩としての倫理的実践に関する六波羅蜜の關係に着目して、瑜伽行派の思想を包括的に明らかにすることを目指している。

(2) (1) と関連して、チベット人によって著された瑜伽行派文献に対する注釈書の内容分析を行う。近年、発見・公刊された『カダム全書』という著作群には瑜伽行派文献に対する注釈が数多く含まれており、その内容の解明は喫緊の課題となっている。特に瑜伽行派の思想との関係では、唯識思想の大成者の一人であるアサンガ(5世紀頃)の著作『阿毘達磨集論』に対して、『カダム全書』には十数点の注釈が収録されている。現在、その全容を解明するために調査している。

(3) こうしたテキスト分析に関しては、電子化テキストによるデータベースの作成が効率の良い方法と考えられる。近年ではXMLを用いたテキスト分析が盛んに行われるようになってきたが、既存のガイドラインであるTEI:P5は、サンスクリット語およびチベット語の仏教文献の分析に関しては、改良の余地がある。実際に文献をエンコーディングしながら、具体的な問題提起をすることを目指す。特に(2)と関連して、『阿毘達磨集論』の複数の注釈を分析するためのテキスト・データベースの構築作業を行っている。

c 概要と自己評価

『カダム全書』は近年になって発見・公刊されたもので、カダム派をはじめとするチベットの学僧が残した著作が数多く収録されているが、その全体像は明らかになっていない。2020年度までは科学研究費基盤(B)の助成を受けて基礎的な調査を行い、それを引き継いで2021年度からは科学研究費基盤(A)の助成により、『カダム全書』所収の『阿毘達磨集論』の複数の注釈を整理し、より綿密な分析を行っている。この調査を通じて、『カダム全書』所収のチベット語文献資料が、インドの仏教思想の問題点を探るうえで重要な視点を提示するものであることが明らかになってきた。2023年度まで、継続してデータの収集作業を行っている。また、特任研究員の協力を得て、チベット語の注釈文献をXMLで構造化し、チベット仏教文献に特有の詳細な段落構成を忠実に分析するための手法を、TEIガイドラインに基づいて提案してきたが、それをより一般的に適用できる形を模索している。

また、2023年度は、一般向けの概説書として、『心と実存 唯識』を出版した。概説書ではあるが、先行研究で取り上げられることのなかった『菩薩地』、『撰決択分』、『解深密経』、『般若経弥勒請問章』の思想も原典に基づいて解説し、従来、唯識思想として統括されてきた瑜伽行派の思想を、最初期の「事物(vastu)」を中心とした思想から、五事説を経て、唯識思想へとつながっていく過程を明らかにした。これは瑜伽行派の思想史を根底から捉え直す試みである。

d 研究業績

(1) 書籍出版物

[単著]『心と実存 唯識』(シリーズ 思想としてのインド仏教)、春秋社、2024.2

(2) 論文

[学術雑誌] (単著)『『菩薩地』「住品」におけるハタヨーガと思釈』、『印度学仏教学研究』71-1、2022.12、pp.(109)-(115)、査読有

(3) 講演・口頭発表等

[シンポジウム(指名)] (発表題目)「バウッタコーシャ——多言語辞書とTEIの辞書モジュール」、(シンポジウム題名)「仏教思想は甦るか——バウッタコーシャ・プロジェクトを総括する」(代表、斎藤明:国際仏教学大学院大学教授、第66回国際東方学会会議(オンライン)、2022.5.21

[シンポジウム(指名)] (発表題目)「XMLによる仏教用語の語彙集の利活用—バウッタコーシャの事例—」、(シンポジウム題名)「近未来の東洋学・アジア研究—東洋学アジア研究の新潮流—」(東洋学・アジア研究連絡協議会シンポジウム)、オンライン、2022.12.3

1. 略歴

1993年4月	東京大学教養学部文科三類入学
1995年4月	東京大学文学部思想文化学科インド哲学仏教学専修課程進学
1997年3月	同 卒業
1997年4月	東京大学大学院人文社会系研究科アジア文化研究専攻インド文学・インド哲学・仏教学専門分野 修士課程入学
2000年3月	同 修士課程修了
2000年4月	東京大学大学院人文社会系研究科アジア文化研究専攻インド文学・インド哲学・仏教学専門分野 博士課程進学
2003年11月	ブネー大学（インド）サンスクリット高等研究科研究生（平成15年度文部科学省アジア諸国等 派遣留学生、～2005年9月）
2006年9月	東京大学大学院人文社会系研究科アジア文化研究専攻インド文学・インド哲学・仏教学専門分野 博士課程単位取得退学
2006年10月	マルティン・ルター大学ハレ・ヴィッテンベルク（ドイツ） インド学科博士候補
2006年10月	マルティン・ルター大学インド学研究所助手（～2007年8月）
2007年9月	（財）恵光日本文化センター客員研究員（～2008年8月）
2008年9月	ドイツ学術振興会（DFG）常勤研究員（マルティン・ルター大学、～2011年8月）
2011年6月	博士号最終試験合格（Dr. Phil, magna cum laude, マルティン・ルター大学ハレ・ヴィッテンベルク）
2011年9月	マルティン・ルター大学日本学科 講師（～2012年3月）
2012年4月	東京大学大学院人文社会系研究科 助教（～2016年3月）
2016年4月	中部大学人文学部 准教授（～2018年3月）
2018年4月	東京大学大学院人文社会系研究科 准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

六派哲学を中心としたインド哲学、サンスクリット文献学、写本学

b 研究課題

主たる研究領域はヴェーダーンタ派の思想で、同派において聖典とされるウパニシャッド文献、『ブラフマ・スートラ』、『バガヴァッド・ギーター』に対する註釈文献などの分析を通じて、現代にまで脈々と受け継がれるヴェーダーンタ思想の展開について研究を進めている。

近年は、古文書学的に文献を扱うというスタンスで、写本の収集、テキスト校訂、訳註研究という基礎的な研究を続けている。現在取り組んでいるプロジェクト「バースカラ」はヴェーダーンタ派の聖典『ブラフマ・スートラ』、『バガヴァッドギーター』に対するバースカラ註の校訂テキストを作成し、それにもとづいて訳註研究を行うというものである。

以上のような写本研究や校訂訳註研究など基礎的な研究を地道に続けながら、同時に、社会の動向に注意し、現実の様々な問題解決に向けてインド哲学からどのような貢献ができるのかを常に意識した思想研究を目指している。

c 概要と自己評価

引き続き、中心課題である「バースカラ」研究に従事している。『ブラフマ・スートラ註解』については、すでに公開済みの第1章と第2章に加え、後半部分の第3章・第4章についてもほぼ完成しており、新たに発見された写本の異読情報をアップデートし、近年中の刊行を目指している。『バガヴァッドギーター註解』のテキスト作成についても少しずつ進めており、写本との照合が終わり次第順次公開をしていきたい。

科研プロジェクトでは、「井筒俊彦の思想形成期における東洋思想とその学問的視座」、「インド哲学における無の思想」に分担研究者として参加し、思想研究に積極的に取り組んだ。

また、研究代表者を務める科研プロジェクト「デーヴァナーガリー文字 OCR の実用化と文献データベースの利活用に向けた応用研究」では、多くのインド諸語表記に用いられる文字であるデーヴァナーガリー文字手書写本を読み取るための光学文字認識（OCR）ソフトウェアを開発するために、くずし字 AI-OCR 開発などを手がける凸版印刷株式

会社との間で共同研究を行った。今後も文献学を研究の基本としながら、現代における様々な課題にも積極的に取り組んでいきたい。

d 研究業績

(1) 書籍出版物

[分担執筆]『扉をひらく哲学：人生の鍵は古典のなかにある（岩波ジュニア新書 968）』、中島隆博 梶原三恵子 納富信留 吉水千鶴子、岩波書店、2023.5.23、202p

[単訳]『インド哲学入門』、ロイ・W・ペレット、加藤隆宏、ミネルヴァ書房、2023.9.12、392p

(2) その他各種論著

「Development of a Devanāgarī Optical Character Recognition (OCR) System」、Takahiro Kato Yūki Tomonari Chikamitsu Taniguchi Tomejiro Osawa Satoshi Fujimaki Takashi Okada Emi Hashimoto、*Digital Humanities 2022 Conference Abstracts*、pp.648-649、2022.7

「Study Abroad: Japan has a well-rounded education system」、Takahiro Kato、*Education Times*、2023.3

「井筒俊彦とシャンカラマーヤー論と二真理説」、加藤隆宏、『宗教研究』96 巻別冊号、pp.68-69、2023.3

「IIF と TEI に準拠したサンスクリット写本データベースの構築」、永崎研宣 苦米地等流 加藤隆宏 下田正弘、『デジタルアーカイブ学会誌』7 巻 s2 号、pp.s103-s106、2023.12

「Would rather be a jackal: Criticism of Vaiśeṣika's concept of liberation.」、Takahiro Kato、*Studies in Indian Philosophy and Buddhism* 32、pp.1-12

「ヴェーダーンタ哲学と比較思想」、加藤隆宏、『比較思想研究』50、pp.81-84、2024.3

「井筒俊彦とシャンカラマーヤー論と二真理説—」、『井筒俊彦の思想形成期における東洋思想とその学問的視座』、科学研究費最終報告書（基盤研究（B）20H01199）、澤井真編、pp.83-94、2024.3

(3) 講演・口頭発表等

[ポスター発表]「Development of a Devanāgarī Optical Character Recognition (OCR) System」、Takahiro Kato、*Digital Humanities 2022*、2022.7.25、2022.7.25～29

[シンポジウム・ワークショップ パネル（指名）]「井筒俊彦とシャンカラ：マーヤー論と二真理説」、加藤隆宏、日本宗教学会第 81 回学術大会、パネル「井筒俊彦と東洋の思想家たち」、2022.9.11

[シンポジウム・ワークショップ パネル（指名）]「ヴェーダーンタ哲学と比較思想」、加藤隆宏、比較思想学会 50 周年記念シンポジウム④「普遍的思想史の夢の続きへ—中村元先生の比較思想研究の回顧と展望」、2023.7.2

[口頭発表（一般）]「インドの一元論と多元論：インドとギリシアの思想交流を再検討する」、加藤隆宏、「ヘレニズム辺境のギリシア思想の東漸とインド思想からの還流、相互応酬の統合的復元」研究会、学習院大学、2024.3.2

[シンポジウム・ワークショップ パネル（指名）]「Development of Devanāgarī OCR: From Typeset to Handwritten Letters」、Takahiro Kato Yūki Tomonari、International Workshop: Exploring the Potential of Utilizing Data from Sanskrit Literature. Kyoto University、2024.3.19

(4) 共同研究・競争的資金等の研究課題

[科学研究費助成事業]「井筒俊彦の思想形成期における東洋思想とその学問的視座」、澤井真 小野純一 加藤隆宏 古勝隆一 小村優太 齋藤智寛 長岡徹郎、基盤研究（B）：20H01199、日本学術振興会、天理大学、2020.4～2023.3

[科学研究費助成事業]「インド哲学における「無」の思想」、丸井浩 岩崎陽一 桂紹隆 藤井隆道 稲見正浩 加藤隆宏、基盤研究（B）：21H00472、日本学術振興会、武蔵野大学、2021.4～2025.3

[科学研究費助成事業]「デーヴァナーガリー文字 OCR の実用化と文献データベースの利活用に向けた応用研究」、加藤隆宏 天野恭子 岩崎陽一、基盤研究（B）23H00564、日本学術振興会、東京大学、2023.4～2027.3

e その他

(1) 非常勤講師

学習院大学文学部、2018.4～

(2) 学会・委員活動

[委員歴] 日本学術会議、連携会員、2017.10～

[委員歴] 日本学術振興会、令和 4 年度・5 年度大学の世界展開力強化事業プログラム委員会審査部会委員、2022.4～2024.3

[所属学会] 日本印度学仏教学会評議員 2020.7～

[所属学会] 比較思想学会評議員 2023.6～

1. 略歴

2004年3月	東京大学文学部インド哲学仏教学専修課程卒業
2004年4月	東京大学大学院人文社会系研究科アジア文化研究専攻修士課程入学
2006年3月	同上 修了
2006年4月	東京大学大学院人文社会系研究科アジア文化研究専攻博士課程進学
2007年4月	日本学術振興会特別研究員 DC2 (～2009年3月)
2009年7月	東京大学大学院人文社会系研究科 RA (～2009年12月)
2010年9月	東京大学大学院人文社会系研究科アジア文化研究専攻博士課程単位取得退学
2010年10月	東京大学大学院人文社会系研究科特任研究員 (～2012年3月)
2011年3月	博士(文学) (東京大学)
2012年4月	日本学術振興会特別研究員 PD (花園大学) (～2015年3月)
2013年9月	マクマスター大学 (カナダ) PD フェロー (～2014年8月)
2015年4月	日本学術振興会海外特別研究員 (マクマスター大学) (～2017年3月)
2017年4月	早稲田大学高等研究所 助教 (～2018年3月)
2018年4月	早稲田大学高等研究所 講師 (～2020年3月)
2020年4月	駒澤大学仏教学部仏教学科 専任講師 (～2023年3月)
2023年4月	東京大学大学院人文社会系研究科 准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

インド仏教における律蔵および阿含經典の研究、「根本説一切有部律」サンスクリット写本の研究

b 研究課題

古代インド仏教においてもっとも有力な部派(学派)のひとつであった説一切有部は、その後の歴史の中で亜大陸から姿を消し、かれらの伝持した經典集成(經藏)もまた、仏教史上におけるその重要性にもかかわらず、部分的にしか現存していない。この失われた經藏の内容を回復することを主な目標として、僧院規則集成である「根本説一切有部律」の研究をおこなっている。「根本説一切有部律」にはおびただしい数の經典との平行文、經典への言及がみられることが知られており、この文献を網羅的に精査し、現存する説一切有部系經典群や他部派の經典群と比較することを通して、説一切有部系の經藏がいかなるものであったかを解明しようとする。

また「根本説一切有部律」はそれ自体、僧院制度や説話文学といった複数の観点からみて重要な資料であり、かつその内容には未解明の部分が多い。經藏との関係にとらわれず、むしろ他部派の律蔵資料との比較を通してこの資料の内容を解明することも研究課題のひとつである。

さらに、近年同定された「根本説一切有部律」のサンスクリット写本の研究がある。ノルウェーのスコイエン・コレクション所蔵の「葉事・ウッタラグラント」写本(7～8世紀)と「ヴィナヤ・ウッダーナ・ガーター」写本(5～6世紀)は「根本説一切有部律」の伝承系統や他の律文献との関係などに光をあてる可能性のある重要な資料であり、前者についてはノルウェー文献学研究所、ウプサラ大学、佛教大学の、後者についてはミュンヘン大学の研究者と共同で研究を進めている。

c 概要と自己評価

「根本説一切有部律」の中の經典というテーマにおいて、2022年から2023年にかけてはこれまで十分に扱ってこなかった「律における經典への言及」についての情報収集に力を入れた。自身の従来の研究では律の中に經典の文章がまとまってあらわれる例を重点的に取り上げており、それによって得られた知見も多かったが、經典の題名だけが挙げられたり、ごく短い引用がなされたりするケースについては、失われた經典についてさほどの情報を与えるものではないとみなして重視してこなかった。しかし2019-2020年に出版した論文で、律のある説話の中にあらわれる一つの經典名への言及が、根本説一切有部律という文献の性格を理解する上で重要な示唆に富むことがあきらかになった。これを契機として、明示的でないものも含めて經典ないし「仏説」への言及が見られるケースを探したところ、かなりの数に上った。これらの事例については現在整理・分析中であるが、根本説一切有部律と他の聖典との関係を知るために有益な情報をもたらすと考えられ、今後も継続してこの方面の研究を進めてゆく予定である。

僧院制度資料としての律文献（特に根本説一切有部律）については、非専門家にむけてその内容や研究の意義を伝える機会が多かった。

研究代表者をつとめる科研プロジェクト「根本説一切有部律サンスクリット写本の研究」では、研究協力者とともに週一回のオンライン研究会でスコイエン・コレクション所蔵「菓事・ウッタラグラント」写本の解説を続けている。この写本の「菓事」部分に発見された3～4世紀の説話集 *Kalpanāmaṇḍitikā Drṣṭāntapañkti* との平行偈についての考察を2023年に国際シンポジウムにおいて発表し（2024年度中に出版予定）、また同発表の内容を非専門家向けに日本語でまとめなおした（2024年出版）。発表時点では考察の不十分な部分もあったが（続編を2024年に学会発表）、聖典である律と文芸作品という異なる二つの種類の文献の間にありうる成立史上の関係について、一定の問題提起をなしたと考える。

d 研究業績

(1) 論文

[学術雑誌] “The Formation of the Buddha’s Former Life Stories in the Bhaiṣajyavastu of the Mūlasarvāstivāda Vinaya.” *Journal of the International Association of Buddhist Studies* 45, 2022, pp. 343-385

[大学研究機関紀要] 「法律と物語 ——インド仏教聖典の一遇から——」『文化交流研究』37 69-77、2024.3

(2) その他各種論著

[その他記事] 「懐旧録 サンスクリット事始め（南条文雄著）」、眼横鼻直（教員おすすめ図書）（駒澤大学図書館ウェブサイト）、2022.12.1

(3) 講演・口頭発表等

[シンポジウム・ワークショップパネル（指名）] “The Kalpanāmaṇḍitikā Drṣṭāntapañkti and the Mūlasarvāstivāda Vinaya: with a focus on the story of King Prabhāsa” International Symposium: Variety of Jātaka and Avadāna Transmission, International College for Postgraduate Buddhist Studies、2023.11.28

[公開講演、セミナー、チュートリアル、講習、講義等] 「『経典』をめぐって—インド仏教とその周辺における教典・聖典・正典」、比較宗教教典研究第16回会合、2022.9.30

[公開講演、セミナー、チュートリアル、講習、講義等] 「根本説一切有部律と阿含経典」、国際仏教学大学院大学2022年度セミナー（仏教学特殊研究）、2023.1.25

[公開講演、セミナー、チュートリアル、講習、講義等] 「アメリカおよびノルウェー個人蔵の根本説一切有部律菓事・ウッタラグラント写本」、第四回戒律研究会講演会「Vinaya 研究の最前線」、2023.7.2

[公開講演、セミナー、チュートリアル、講習、講義等] “Sūtras Embedded in the Vinaya: An Approach to a Lost Canonical Corpus of the Mūlasarvāstivādins”、漢藏仏教語文学青年学者系列講座（第30講）、2023.12.8

e 社会活動

(1) 社会貢献活動

[講師] 「律とはなにか—三蔵と部派—」「根本説一切有部律と律の中の経典」、令和4年度駒澤大学公開講座6月「律の世界」第1回、第4回、2022.6.1、22

[講師] 「律蔵における女性」、令和4年度武蔵野大学仏教文化研究所主催連続公開講座「仏教における女性」、2022.12.3

[講師] 「『原始仏典』の世界を知る」、朝日カルチャーセンター横浜教室、2023.8.25、9.1

[講師] 「お経ではないお経の話——『律蔵』とインドの僧院生活」、東大人文・鶴岡セミナー、2023.11.18

(2) 学術貢献活動

[企画立案・運営等] 講演会「律蔵研究の現在」・ワークショップ「Vinayakārikāを読む」、2023.7.29、30

f その他

(1) 非常勤講師

駒澤大学、2023.4～2024.3

大正大学、2023.9～2024.3

(2) 学会・委員活動

[所属学協会] 日本印度学仏教学会、2006.3～

[所属学協会] The International Association of Buddhist Studies、2011.6～

[所属学協会] 日本宗教学会、2017.6～

[所属学協会] 仏教思想学会、2018.4～

[所属学協会] 東方学会、2018.6～

[所属学協会] 対法雑誌刊行会、2020.2～

[委員歴] 対法雑誌刊行会会長、2020.2～

[委員歴] 日本印度学仏教学会常務委員、2020.10～

[委員歴] 日本学術会議連携会員、2020.11～

15 インド語インド文学

教授 梶原 三恵子 KAJIHARA, Mieko

1. 略歴

1989年3月 大阪大学文学部哲学科インド哲学専攻卒業
1991年3月 大阪大学大学院文学研究科哲学哲学史専攻博士前期課程修了
1996年3月 大阪大学大学院文学研究科哲学哲学史専攻博士後期課程単位取得退学
1996年9月 米国ハーヴァード大学大学院サンスクリット・インド学科留学
2002年6月 博士 (Ph.D.) 学位取得 (ハーヴァード大学)
2009年10月 京都大学人文科学研究所助教
2012年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授
2021年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

ヴェーダ学、インド学

b 研究課題

古代インドの家庭儀礼と社会文化史

c 概要と自己評価

紀元前インドを専門とし、ヴェーダ宗教儀礼からみる古代インドの社会と文化を研究テーマとしている。

2022-2023 年度は主に、過去 20 年にわたって研究してきた、ヴェーダ聖典学習者の入門儀礼に関する総合的研究を、英文で出版する準備に費やした。インド最古のテキストから出発して紀元前の文献を通時的にたどりつつ、古代インドの入門儀礼の成立史、儀軌の変遷と詳細、「入門」という行為が内包する観念と機能を、総合的に論じるというものである。2020 年度に出版した和文著書の内容を整理増広し、英語で国際的に発信することをめざしている。そのかわり、現代南インドで行ってきたフィールド調査の結果の一端の報告や、過去百年以上学界に忘れられていた古いサンスクリット語文献の再紹介と冒頭部の翻刻を公開した。

d 研究業績

(1) 書籍出版物

[共編者]『扉をひらく哲学 人生の鍵は古典のなかにある (岩波ジュニア新書 968)』、中島隆博 梶原三恵子 納富信留 吉水千鶴子、岩波書店、2023.5.19、202p

[編著]『インド語インド文学拾遺 2024』、梶原三恵子、(編著) 東京大学文学部インド語インド文学研究室発行、pp.1-116、2024.3

(2) 論文

[論文集 (書籍) 内論文]「ヴェーダ聖典学習者と禁欲的修行生活—ブラフマチャーリンとブラフマチャリヤ」、梶原三恵子、『ブラフマニズムとヒンドゥイズム 2 古代・中世インドの宗教と実践』(藤井正人・手嶋英貴編)、pp.337-361、2022.12

[大学、研究機関紀要]「On the Vaikhanasa-Mantra-Prasna: The Mantra Collection for the Vaikhanasas' Grhya Rituals (With a Sample Text of 1.1.1-1.1.6)」、Mieko Kajihara、『インド語インド文学拾遺 2024』、Gleanings of Indian Languages and Literature、pp.1-14、2024.3.20

[大学、研究機関紀要]「21 世紀初頭ケーララ州ナンブーディリ・ブラーマンのショードダシヤ・クリヤー (十六儀礼) とその特徴」、梶原三恵子、『東洋文化研究所紀要』185 巻、pp.387-417、2024.3.31

(3) その他各種論著

「人間をつくる：古代インドの人生儀礼」、梶原三恵子、『扉をひらく哲学』(岩波ジュニア新書)、pp.65-70、2023.5
「教えを乞い、自分を更新する：古代インドの「知識」伝承の営み」、梶原三恵子、『扉をひらく哲学』(岩波ジュニア新書)、pp.151-156、2023.5

[その他記事] 自著紹介『古代インドの入門儀礼』(法蔵館、2021 年)、UTokyo BiblioPlaza、2022.5

(4) 講演・口頭発表等

「グリヒヤーストラとグリヒヤ補遺文献における Punyaha 儀礼概観」、梶原三恵子、「インドにおける『循環的存在論』の形成」研究会（京都大学人文科学研究所）、2023.6.5

[口頭発表（一般）]「頭や眼を覆うことと秘義学習」、梶原三恵子、「インドにおける『循環的存在論』の形成」研究会（京都大学人文科学研究所）、2023.11.27

e その他

(1) 学会・委員活動

[所属学協会] 日本印度学仏教学会、1991.4～

[所属学協会] インド思想史学会、1993.4～

[所属学協会] American Oriental Society、1996.9～

[所属学協会] 日本南アジア学会、2002.4～

[所属学協会] 東方学会、2012.4～

[委員歴] 東方学会、学術委員、2023.6～

16 イスラム学

教 授 柳橋 博之 YANAGIHASHI, Hiroyuki

1. 略歴

1980年3月	東京大学文学部東洋史学専修課程卒業
1983年3月	東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了（東洋史学）
1988年9月	東京大学大学院人文科学研究科博士課程単位取得満期退学（東洋史学）
1988年10月	茨城大学教養学部専任講師
1989年4月	同 助教授
1993年4月	東北大学大学院国際文化研究科助教授
1997年4月	東京大学大学院人文社会系研究科助教授（1997年度は東北大学大学院と併任）
2007年4月	東京大学大学院人文社会系研究科准教授
2010年4月	東京大学大学院人文社会系研究科教授
2023年3月	定年退職

2. 主な研究活動

a 専門分野

イスラーム法、法学ハディース

b 研究課題

法学に関わるハディース（預言者ムハンマドの言行の記録）の形成過程を研究している。

c 概要と自己評価

最近の5年間は、法学的な内容を含むハディース（預言者伝承）を研究しており、その成果として、2019年に英文による単著を公刊した。その後は、ハディースの計量分析に研究の重点を移し、2023年に英文による単著を上梓した。

d 主要業績

(1) 講演・口頭発表等

[学会] 柳橋博之、「ハディースの集積と伝播から見た伝承家という集団」、前近代イスラーム世界における「組織」、福岡女子大学、2022.11.19

(2) 書籍出版物

[単著] Yanagihashi, Hiroyuki, *Reconstructing the Variant Generation Process of Hadith*, Sheffield: Equinox Publishing, 2023. xiii+287pp.

(3) 共同研究・競争的資金等の研究課題

[科学研究費助成事業]「前近代イスラーム世界における「組織」の成立に関する比較研究」、柳橋博之 近藤洋平 菊地達也 井上貴恵、基盤研究 (B) : 20H01187、日本学術振興会、東京大学、2020.4～2023.3

[科学研究費助成事業]「イスラーム諸思想における「グノーシス主義」の比較研究」、菊地達也 鎌田繁 柳橋博之 井上貴恵、基盤研究 (C) : 21K00067、日本学術振興会、東京大学、2021.4～2024.3

1. 略歴

1992 年 3 月	東京大学文学部イスラム学専修課程卒業
1992 年 4 月	東京大学大学院人文科学研究科イスラム学修士課程入学
1994 年 3 月	同修了
1994 年 4 月	東京大学大学院人文科学研究科イスラム学博士課程進学
1998 年 3 月	博士（文学）の学位取得
1998 年 4 月	東京大学東洋文化研究所研究機関研究員（～2000 年 3 月）
2000 年 4 月	日本学術振興会特別研究員（PD）（～2003 年 3 月）
2004 年 4 月	神田外語大学外国語学部専任講師
2008 年 4 月	神田外語大学外国語学部准教授
2013 年 4 月	東京大学大学院人文社会系研究科准教授
2022 年 4 月	東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

シーア派思想史

b 研究課題

9 世紀以降のシーア派思想史における「極端派」思想と十二イマーム派、イスマリー派の形成過程との関係について研究している。

c 概要と自己評価

主流シーア派の自己形成、およびそれに呼応する形で成立したアラウィー派、ドゥルーズ派の初期思想について研究し、その成果を論文一本、共著二冊、シンポジウムでの発表（2 回）で公開することができた。研究はおおむね順調に進んでいる。

d 研究業績

(1) 書籍出版物

[共著]『イスラーム文化事典』、八木久美子、「宗派」を担当、丸善出版、2023.1.31、714p

[教科書]『高等学校新倫理』、菅野覚明 熊野純彦 山田忠彰、清水書院、2023.2、232p

[共著]『イスラームの内と外から：鎌田繁先生古稀記念論集』、森本一夫 井上貴恵 小野純一（イスラーム思想） 澤井真、「第 17 章「ヌサイル派源流思想研究のための予備的考察：ハスィービー著『ラーストバーシュ書簡』の分析を通じて」、346-366 頁を担当」、ナカニシヤ出版、2023.3.25、680p

[共著]『東大塾 現代イスラーム講義』、長沢栄治 後藤絵美、「第 2 講「対立と共存の思想史：イスラーム教の「正統」と「異端」、33-65 頁を担当」、東京大学出版会、2023.9.27、288p

(2) 論文

[学術雑誌]「イスラーム思想における極端派的伝統：ヌサイル派（アラウィー派）源流思想における輪廻思想を事例として」、菊地達也、『東洋学術研究』61 巻 1 号、pp.325-345、2022.5

(3) 講演・口頭発表等

[公開講演、セミナー、チュートリアル、講習、講義等]「イスラーム教の宗派」、菊地達也、アラブ調査室主催「中東の宗教」（オンライン）、2022.6.10

[シンポジウム・ワークショップ パネル（指名）]「イスラーム教における組織的宣教——初期ドゥルーズ派の場合」、菊地達也、科研費基盤（B）「前近代イスラーム世界における「組織」の成立に関する比較研究」、成果報告公開講演会（福岡女子大学）、2022.11.19

[シンポジウム・ワークショップ パネル（指名）]「イスラーム教における人間観：カラーマと義務賦課の観点から」、菊地達也、学術変革領域（A）「尊厳学の確立：尊厳概念に基づく社会統合の学際的パラダイムの構築に向けて」、尊厳学フォーラム第 3 回（東京大学）、2023.9.9

(4) 共同研究・競争的資金等の研究課題

[科学研究費助成事業]「前近代イスラーム世界における「組織」の成立に関する比較研究」、柳橋博之 近藤洋平 菊地達也 井上貴恵、基盤研究（B）：20H01187、日本学術振興会、東京大学、2020.4～2023.3

[科学研究費助成事業]「イスラーム諸思想における「グノーシス主義」の比較研究」、菊地達也 鎌田繁 柳橋博之 井上貴恵、基盤研究 (C) : 21K00067、日本学術振興会、東京大学、2021.4～2024.3

[科学研究費助成事業]「危機下における少数派・弱者の生存戦略：イスラーム圏の通史的・地域横断的研究」、高橋英海 大塚修 桑原尚子 阿部尚史 近藤洋平 辻上奈美江 菊地達也 山口昭彦 三村太郎 鈴木啓之 辻明日香 三代川寛子、基盤研究 (B) : 21H03682、日本学術振興会、東京大学、2021.4～2024.3

[科学研究費助成事業]「アジア・イスラームなどの非欧米圏の尊厳概念史の構築」、小島毅 菊地達也 中村元哉 竹下悦子 清水正之 松井佳子 小倉紀蔵 前川健一 犬塚悠、学術変革領域研究 (A) : 23H04851、日本学術振興会、東京大学、2023.4～2028.3

e その他

(1) 非常勤講師

早稲田大学、2023.4～

(2) 学会・委員活動

[委員歴] 日本イスラーム協会、編集委員、1999.4～、理事、2014.6～

[委員歴] 日本宗教学会、評議員、2016.9～

[委員歴] 日本中東学会、理事、2019.4～、編集委員、2022.2～、『日本中東学会年報』副編集委員長、2023.4～

[委員歴] 日本オリエント学会、理事、2020.6～2022.6、監事、2022.6～

准教授 **松山 洋平** MATSUYAMA, Yohei

1. 略歴

2008 年 3 月	東京外国語大学外国語学部南西アジア課程アラビア語専攻卒業
2008 年 4 月	東京外国語大学大学院地域文化研究科博士前期課程入学
2010 年 3 月	同 上 修了
2010 年 4 月	東京外国語大学大学院総合国際学研究科博士後期課程進学
2010 年 4 月	日本学術振興会特別研究員 (DC1) (～2013 年 3 月)
2013 年 3 月	東京外国語大学大学院総合国際学研究科博士後期課程修了
2013 年 3 月	博士 (学術) 学位取得 (東京外国語大学)
2013 年 4 月	日本学術振興会特別研究員 (PD) (～2016 年 3 月)
2016 年 4 月	名古屋外国語大学外国語学部 講師 (～2019 年 3 月)
2019 年 4 月	名古屋外国語大学世界教養学部 講師 (～2020 年 3 月)
2020 年 4 月	名古屋外国語大学世界教養学部 准教授 (～2023 年 3 月)
2023 年 4 月	東京大学大学院人文社会系研究科・文学部 准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

スンナ派思想研究

b 研究課題

イスラーム教ハナフィー派信仰論／日本のイスラーム教認識

c 概要と自己評価

日本のイスラーム認識を主題とし、ハナフィー派信仰論の研究成果を反映した章を含む単著を刊行できた。極めて順調とは言えないが、大きな問題のない程度に研究は進められている。

d 研究業績

(1) 書籍出版物

- [分担執筆]『ゲンロン 13、ゲンロン = Genron』、東浩紀、「イスラームななめ読み (#9) イスラーム教と現代日本の宗教観」、ゲンロン、単行本 (学術書)、2022.10.31、485, 12pp (pp.465-469 担当)
- [分担執筆]『イスラーム文化事典』、イスラーム文化事典編集委員会 (編)、「神学」「ラマダーンの実践 (日本)」「聖遷」「巡礼 (概論)」、丸善出版、事典・辞書、2023.1.31、714p (pp.14-15, 26-27, 154-155, 156-157 担当)
- [分担執筆]『愛、もしくは別れの夜に』、亀山郁夫 エリス俊子、「アラビア語圏」、名古屋外国語大学出版会、単行本 (学術書)、2023.3.10、268p (pp.12-35 担当)
- [分担執筆]『ゲンロン 14』、東浩紀、「イスラームななめ読み (#11) 「共生のイスラーム法学」とは何か」、ゲンロン、単行本 (学術書)、2023.3.28、(pp.238-243 担当)
- [単著]『ニッポンのムスリムが自爆する時：日本・イスラーム・宗教』、松山洋平、作品社、単行本 (一般書・啓蒙書)、2024.2.28、(pp.1-240 担当)

(2) その他各種論著

- [総説・解説 (学術雑誌)]「イスラームななめ読み (#7) 田舎者のサイバー・ジハード」、松山洋平、『ゲンロン β73』、2022.5.30
- [総説・解説 (学術雑誌)]「イスラームななめ読み (#8) ニッポンのムスリムが自爆するとき」、松山洋平、『ゲンロン β76+77』、2022.9.12
- [総説・解説 (学術雑誌)]「イスラームななめ読み (#10) これからのクルアーン翻訳、あるいはアダブテーション」、松山洋平、『ゲンロン β79』、2022.12.23
- [総説・解説 (大学・研究所紀要)]「宗教と翻訳：「アッラー」は神か御仏か」、松山洋平、『文化交流研究 (東京大学文学部次世代人文学開発センター研究紀要)』 (37)、2024.3.14、pp.59-67

(3) 講演・口頭発表等

- [公開講演、セミナー、チュートリアル、講習、講義等]「「アラジン」を3倍楽しく観る方法」、松山洋平、連続ブックトークイベント「未来の自分に会おう」、TSUTAYA BOOKSTORE 則武新町、TSUTAYA BOOKSTORE × 名古屋外国語大学出版会、2022.6.29
- [シンポジウム・ワークショップ パネル (指名)]「日本の公教育はイスラームをどう語るか」、松山洋平、令和5年第82回日本宗教学会 公開シンポジウム「教育とイスラーム」、東京外国語大学、日本宗教学会、2023.9.8
- [シンポジウム・ワークショップ パネル (指名)]『『日本に暮らすムスリム』への書評コメント』、松山洋平、『日本に暮らすムスリム (イスラーム・ジェンダー・スタディーズ7)』刊行記念シンポジウム、東京大学、科研費基盤研究 (A) イスラーム・ジェンダー学と現代的課題に関する応用的・実践的研究 (研究代表：長沢栄治)、2024.3.7

(4) 共同研究・競争的資金等の研究課題

- [科学研究費助成事業]「イスラーム諸思想における「グノーシス主義」の比較研究」、菊地達也 鎌田繁 柳橋博之 井上貴恵、松山洋平、基盤研究 (C) : 21K00067、日本学術振興会、東京大学、2021.4～2024.3 (2023.4 から参加)

17 東洋史学

教授 佐川 英治 SAGAWA, Eiji

1. 略歴

- 1990年3月 岡山大学文学部史学科卒業
- 1990年4月 大阪市立大学文学研究科修士課程東洋史学専攻入学
- 1992年3月 同上 修了。文学修士の学位を取得
- 1992年4月 大阪市立大学文学研究科博士課程東洋史学専攻入学
- 1994年9月 武漢大学（中国）にて歴史系高級進修生として在外研究（～1996年7月）
- 2001年3月 大阪市立大学文学研究科博士課程東洋史学専攻修了。大阪市立大学文学研究科より博士（文学）の学位を取得
- 2001年10月 岡山大学文学部助教授
- 2006年4月 岡山大学大学院社会文化科学研究科助教授
- 2007年4月 岡山大学大学院社会文化科学研究科准教授
- 2010年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授
- 2018年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

中国古代史

b 研究課題

皇帝権力の形成と展開、4～5世紀の遊牧民族の南下と社会変容、都城史、石刻資料を用いた社会史

c 概要と自己評価

科研費、基盤研究（B）「東アジア史における「古代末期」の研究」および基盤研究（C）「初期碑文慣行を通じてみる中国古代の社会結合の特徴に関する研究」を中心に、都城や軍事の分野でも研究を進めた。これらの研究活動の中で、著書、論文、学会発表、学会の主催をおこなうなどして積極的に研究活動を進めた。

d 研究業績

(1) 書籍出版物

- [編著] 佐川英治編『多元的中華世界の形成—東アジアの「古代末期」—』、臨川書店、2023.2、360頁
- [編著] 佐川英治編『君主号と歴史世界』、山川出版社、2023.10、248頁
- [共著] 姜尚中総監修『アジア人物史 第2巻 世界宗教圏の誕生と割拠する東アジア』、集英社、2022.2（分担執筆：佐川英治「英雄は聖人の夢を見る—五胡十六国時代 覇者たちの栄光と挫折—」、55-112頁）

(2) 論文

- [学術雑誌] 佐川英治「講演録：嘎仙洞石刻祝文にみる北魏王権の多元性—天子・皇帝・可汗・太平真君の称号をめぐって—」、『東洋史苑』第96号、2022.9、1-14頁
- [学術雑誌] 佐川英治「軍功と賜爵—秦漢二十等爵制の考察—」、『東洋史研究』82巻2号、2023.9、189-222頁
- [学術雑誌] 佐川英治、付晨晨訳「都城制分期的歴史学和考古学—以曹魏鄴城、洛陽城的復原為中心—」、『東亜文明』4輯、2023.12、北京：社会科学出版社
- [論文集（書籍）内論文] 佐川英治「都城の系譜—東アジアのなかの藤原京と平城京—」、ファム・レ・フイ（Phạm Lê Huy）編『日本の都城と東アジア』（Đô thành Nhật Bản và Đông Á）、ハノイ：世界出版社（Thế giới）、2022.8、1-15頁

(3) その他各種論著

- [総説・解説・講演資料等] 佐川英治「曹全碑（東京大学アジア研究図書館デジタルコレクションより）」、『東京大学アジア研究図書館ニューズレター』11号、2023.4、7-8頁
- [その他記事] 佐川英治「書評 村元健一著『日本古代宮都と中国都城』」、『史学雑誌』132編6号、2023.6、1030-1038頁

(4) 講演・口頭発表等

- [口頭発表（招待）] 佐川英治「中日古代都城制の中軸線功能」（中国語）、第3届中国文化研究国際論壇、西北大学歴史学院（オンライン）、2022.8.25

- [口頭発表 (一般)] 佐川英治「孫呉政治史と赤壁の戦い」、日本中国学会第74回大会、早稲田大学、2022.10.9
- [口頭発表 (招待)] 佐川英治「漢末碑文習慣と禁碑令」(中国語)、シンポジウム「碑之転身—中古中国石碑与石刻文化学術検討会—」、復旦大学 (オンライン)、2022.10.30 (招待)
- [口頭発表 (指名)] 佐川英治「皇帝が天子を称するとき—中国の多元化と東部ユーラシア世界—」、史学会シンポジウム「君主号と歴史世界」、東京大学、2022.11.12
- [コメンテーター] 第66回国際東方学者会議シンポジウム「漢晋変革の考古学的研究」、東方学会 (オンライン)、2022.5.21
- [公開講演] 佐川英治「嘎仙洞刻石祝文にみる北魏王権の多元性—天子・皇帝・可汗・太平真君の称号をめぐって—」、2022年度東洋史学会総会、龍谷大学 (オンライン)、2022.6.3
- [講義] 甲南大学国際理解D「東アジアのなかの藤原京と平城京」、2022.10.22
- [口頭発表 (基調)] 佐川英治「中国史の時空間—内藤湖南から東部ユーラシア史まで—」、学習院大学東洋文化研究所設立第70周年記念シンポジウム「世界に展開する東洋学—海外と日本の中国史研究—」、学習院大学、2022.12.17
- [公開講演] 佐川英治「東アジア都城の系譜—『周礼』考工記から藤原・平城京まで—」、連続講演会「都市の世界史」、東京大学 (オンライン)、2023.1.17
- [講義] 「嘎仙洞刻石祝文にみる北魏王権の多元性」、ソウル大学校人文大学東洋史学科、ソウル大学 (オンライン)、2023.4.1
- [公開講演] 佐川英治「都城制分期的歴史学と考古学—以曹魏鄴城、洛陽城的復原を中心—」、ソウル大学・東京大学・清華大学三校博士生論壇、清華大学、2023.10.19
- [公開講演] 佐川英治「嘎仙洞刻石祝文所見北魏王権の多元性—関于天子、皇帝、可汗与太平真君—」、「中古中国的多元伝統」系列講座 (2)、北京大学、2023.10.20

(5) **共同研究・競争的資金等の研究課題**

- 日本学術振興会科学研究費助成事業 (基盤研究 (B)) 「東アジア史における「古代末期」の研究」、課題番号 18H00720 (研究代表者: 佐川英治)、研究代表者、2018年度～2022年度
- 日本学術振興会科学研究費助成事業 (基盤研究 (A)) 「南縁・東縁地域における郡県都市の変容からみた「漢帝国の遺産」の東アジア史的意義」課題番号 21H04367 (研究代表者: 黄曉芬)、研究分担者、2021年度～2026年度
- 日本学術振興会科学研究費助成事業 (基盤研究 (B)) 「中国古代軍事史の多角的検討—「公認された暴力」のありか—」、課題番号 19H01318 (研究代表者: 宮宅潔)、研究分担者、2019年度～2024年度
- 日本学術振興会科学研究費助成事業 (基盤研究 (C)) 「初期碑文慣行を通じてみる中国古代の社会結合の特徴に関する研究」、課題番号 23K00878 (研究代表者: 佐川英治)、研究代表者、2023年度～2025年度

e 社会活動

(1) **学術貢献活動**

- [企画] 史学会シンポジウム「君主号と歴史世界」、東京大学、2022.11.12
- [コメンテーター] 国際シンポジウム「中国古代軍事史の多角的検討」、京都大学 (オンライン)、2022.12.11
- [コメンテーター] 国際学術シンポジウムⅢ「東アジア古代都市調査の最前線」、東亜大学 (オンライン)、2024.3.3

(2) **メディア報道**

- [その他記事] 佐川英治「出土木簡で読み解く漢代長城地帯の日常と暮らし」、『東京大学新聞』2994、2023.10.10、23面

f その他

(1) **非常勤講師**

- 放送大学「中国と東部ユーラシアの歴史」第1回～第5回

(2) **学会・委員活動**

- [所属学協会] 東方学会、史学会、中国社会文化学会、東洋史研究会、日本中国学会
- [委員歴] 東方学会理事、史学会理事、中国社会文化学会理事、東洋史研究会評議員、日本中国学会編集委員

1. 略歴

1991 年 3 月	東京大学文学部東洋史学専修課程卒業
1993 年 3 月	東京大学大学院人文科学研究科（東洋史学）修士課程修了
1995 年 3 月	東京大学大学院人文科学研究科（東洋史学）博士課程退学
1995 年 4 月	東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助手
1999 年 4 月	東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所情報資源利用研究センター助手 [2000 年 5 月に、東京大学より博士（文学）の学位を取得]
2001 年 4 月	東京大学大学院人文社会系研究科助教授
2007 年 4 月	東京大学大学院人文社会系研究科准教授
2018 年 9 月	東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

中国近代史

b 研究課題

主な研究課題は、近代中国における政治体制の模索、都市政治、経済建設、ナショナリズム、日中関係史。最近では、近代中国における歴史学の形成と日本の「東洋史学」の交流の考察にも関心がある。

c 概要と自己評価

中国近代における政治体制、中国近代思想における普遍性の位相、中国近代における歴史学の展開など、複数の研究課題を並行して進めている。それらの成果の一部は論文にまとめて発表することができたが、それぞれのテーマに即した著作としてまとめていく作業も進行中である。

d 研究業績

(1) 書籍出版物

- [単著] 吉澤誠一郎著（万魯建訳）『清末都市的政治文化与社会統合——天津的近代』、社会科学文献出版社、2022.8
- [共編] 岡本隆司・吉澤誠一郎共編（袁広泉・袁広偉訳）『近代中国研究入門』、当代世界出版社、2022.4
- [共編] 吉澤誠一郎・林佳世子責任編集『岩波講座 世界歴史 17』、岩波書店、2022.7

(2) 論文

[学術雑誌] 吉澤誠一郎「中国におけるカー『歴史とは何か』」、『思想』第 1191 号、2023.7、54-65 頁

(3) その他各種論著

- 吉澤誠一郎「東アジア史への示唆——17 世紀アイルランドからの声は届くか」、『歴史学研究』1021 号、2022.4、39-42 頁
- 吉澤誠一郎「特集：歴史認識と植民地責任 歴史学は何をなすべきか」、『学術の動向』321 号、2022.12、72-72 頁
- 小澤弘明・吉澤誠一郎「国際歴史学会議ポズナン大会について」、『歴史学研究』1034 号、2023.4、執筆担当 2-4 頁

(4) 講演・口頭発表等

[シンポジウム・ワークショップパネル（指名）] 吉澤誠一郎「戦前期日本の東洋史学の思想性と無思想性」、第 22 回日韓歴史家会議、2022.11.19、ホテルマイステイズ御茶ノ水

e 社会活動

(1) 学術貢献活動

- 日本学術会議、連携会員、2014.10～2023.9
- 日本学術会議、会員、2023.10～

f その他

(1) 学会・委員活動

- 東洋文庫、兼任研究員、2009.4～
- 歴史学研究会、委員、2021.6～2023.5（うち研究部長 2022.6～2023.5）
- 中国社会文化学会、理事、2001.7～
- 東洋史研究会、評議員、2008.11～
- 史学研究会、評議員、2013.6～

史学会、評議員、2020.6～2024.6

東方学会、学術委員、2013.6～、評議員、2023.7～

准教授 **島田 竜登** SHIMADA, Ryuto

1. 略歴

1996年3月	早稲田大学政治経済学部経済学科卒業
1998年3月	早稲田大学大学院経済学研究科理論経済学・経済史専攻修士課程修了
2001年11月	ライデン大学アジア・アフリカ・アメリンディア研究センター上級修士課程修了
2005年12月	ライデン大学より博士学位 (Doctor) 取得
2006年3月	早稲田大学大学院経済学研究科理論経済学・経済史専攻博士後期課程退学
2006年4月	西南学院大学経済学部講師
2007年4月	西南学院大学経済学部准教授
2012年4月	東京大学大学院人文社会系研究科准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

東南アジア史、海域アジア史、アジア経済史

b 研究課題

アジア域内貿易史、オランダ東インド会社史、グローバル・ヒストリーと歴史叙述

c 概要と自己評価

2022年度に入ると新型コロナウイルスの蔓延による研究活動への影響は小さくなり、2023年度末には研究活動はいわゆるコロナ禍以前に戻った状態にある。とはいえ、Zoomなどのオンライン会議システムを利用した共同研究が一般的となり、以前に増して容易かつ緻密に国内共同研究および国際共同研究を進めることが可能となった。なお、2023年1月には環インド洋世界史研究会を、2023年9月にはUTokyo Seminar in Maritime Asian Historyを立ち上げ、国内外での当該分野の研究の促進を図っている。

d 研究業績

(1) 書籍出版物

[共編者] 小川幸司 (責任編集)、島田竜登 (編集協力) 『構造化される世界 14～19世紀』、岩波講座世界歴史第11巻、岩波書店、2022.11

[共編者] Radhika Seshan and Ryuto Shimada (eds) *Connecting the Indian Ocean World: Across Sea and Land*, London and New York: Routledge, 2023.2

[教科書] 木村靖二、岸本美緒、小松久男、橋場弦、阿部幸信、池田嘉郎、勝田俊輔、島田竜登、林佳世子、村上衛、『詳説世界史』(文部科学省検定済教科書)、山川出版社、2023.3

[教科書] 木村靖二、岸本美緒、小松久男、橋場弦、阿部幸信、池田嘉郎、勝田俊輔、島田竜登、林佳世子、村上衛、小豆畑和之、仮屋園巖、宮本英征、『高校世界史』(文部科学省検定済教科書)、山川出版社、2023.3

[共編者] Radhika Seshan and Ryuto Shimada (eds) *Merchants and Ports in the Indian Ocean World: Across Sea and Land*, London and New York: Routledge, 2023.6

(2) 論文

[学術雑誌] Ryuto Shimada, "The Bay of Bengal Trade in the Late Seventeenth Century and Armenian Merchants," *Acta Asiatica: Bulletin of the Institute of Eastern Culture* 123, pp. 53-65, 2022.8

[学術雑誌] 島田竜登「アンドレ・グンダー・フランク『リオリエント』を読み返す：グローバル・ヒストリーのなかのアジア」、『比較文明』38、45-54頁、2022.11

[論文集(書籍)内論文] 島田竜登「構造化される世界」小川幸司(責任編集)、島田竜登(編集協力)『構造化される世界 14～19世紀』、岩波講座世界歴史第11巻、岩波書店、3-58頁、2022.11

- [論文集(書籍)内論文] 島田竜登「オランダ東インド会社とバタヴィア：18世紀バタヴィアにおけるアジア域内貿易と本国貿易」、籠谷直人・川村朋貴編『近代東南アジア社会経済の国際的契機』、臨川書店、300-321頁、2023.3
- [論文集(書籍)内論文] Ryuto Shimada, "Gold Trade between Japan and India by the Dutch East India Company," in Radhika Seshan and Ryuto Shimada (eds) *Merchants and Ports in the Indian Ocean World: Across Sea and Land*, London and New York: Routledge, pp. 44-55, 2023.6
- [論文集(書籍)内論文] 島田竜登「桑原隲藏考」、比較文明学会創立40周年記念出版編集委員会編『人類と文明のゆくえ：危機に挑戦する比較文明学』、東海教育研究所、119-131頁、2023.10

(3) その他各種論著

- [総説・解説/講演資料等] 島田竜登「世界の中の日本の緑茶とオランダ東インド会社」、姫野順一監修、前田拓編『抹茶革命と長崎』、長崎文献社、125-127頁、2023.4
- [総説・解説/講演資料等] 島田竜登「奴隷貿易」、岩下哲典・岡美穂子編『つなぐ世界史』2：近世、清水書院、128-133頁、2023.6
- [書評、文献紹介等] 島田竜登「書評：杉原薫『世界史のなかの東アジアの奇跡』」、『アジア経済』64(3)、75-78頁、2023.9

(4) 講演・口頭発表等

- [口頭発表(招待・特別)] 島田竜登「グローバル・ヒストリー研究における近世という時代」、国際商業史研究会、専修大学、2023.3.4
- [口頭発表(招待・特別)] Ryuto Shimada, "Japan's Direct Shipping to East Africa in the Interwar Period," Workshop: In Another's Empire. Japan in British East Africa, 1919-1939, Waseda University, Tokyo, Japan, 2023.6.3
- [口頭発表(招待・特別)] 島田竜登「オランダ東インド会社の船舶運航体系：海上貿易における自然のリズム」、京都大学東南アジア地域研究研究所共同利用・共同研究拠点「グローバル共生に向けた東南アジア地域研究の国際共同研究拠点」「近代東南アジアにおける社会経済の変容と季節性」2023年度第1回研究会、岡山商科大学、2023.10.7
- [シンポジウム・ワークショップパネル(公募)] Ryuto Shimada, "Tenasserim: The Siamese Gateway for the Maritime Trade in the Indian Ocean in the Early Modern Period," XIX World Economic History Congresses (WEHC), École des hautes études en sciences sociales (EHESS), Paris, France, 25 July 2022
- [シンポジウム・ワークショップパネル(公募)] Ryuto Shimada, "Asian Merchants in the Coromandel Trade in the Eighteenth Century," 8th David Nichol Smith Seminar in Eighteenth-Century (DNS XVIII 2022): Marine Worlds of the Long Eighteenth Century, Australian Catholic University, Melbourne, Australia, 2022.12.9
- [シンポジウム・ワークショップパネル(公募)] Ryuto Shimada, "Multiethnic Society on Board: Sailors under the Dutch East India Company," Seventh European Congress on World and Global History 2023, Leiden University, The Hague, The Netherlands, 2023.7.1
- [シンポジウム・ワークショップパネル(指名)] 島田竜登「近世長崎の東南アジア人」、第41回比較文明学会大会「鼎談：長崎に学ぶ共生の歴史」、長崎歴史文化博物館、2023.11.10
- [シンポジウム・ワークショップパネル(指名)] Ryuto Shimada, "Ayutthaya as World Trade Center based on European and Japanese Sources," JSPS Japan-Warwick Seminar: Ayutthaya in the Seventeenth Century from Asian and Global Perspectives, University of Warwick, UK, 2023.12.6

e その他

(1) 非常勤講師他

- 客員准教授、放送大学、「グローバル経済史」、2022年度、2023年度
- 非常勤講師、立教大学法学部、「世界史概説」、2022年度、2023年度
- 非常勤講師、立正大学経済学部、「アジア経済史」、2022年度、2023年度
- 非常勤講師、早稲田大学政治経済学部、「グローバル史」、2022年度、2023年度

(2) 学会・委員活動

- 史学会、大会実行委員、2012～
- 社会経済史学会、常任理事、2021～2022、理事、2023～
- 東方学会、学術委員、2019～
- 東洋学・アジア研究連絡協議会、幹事、2018～
- 比較文明学会、理事、2017～、編集委員、2014～2023、編集委員会委員長、2017～2023
- 東洋文庫、研究員(客員)、2013～

1. 略歴

- 1994年3月 京都大学文学部史学科（西南アジア史学専攻）卒業
- 1996年3月 京都大学大学院文学研究科東洋史学（西南アジア史学）専攻修士課程修了
- 1996年4月 京都大学大学院文学研究科歴史文化学専攻（西南アジア史学専修）博士後期課程進学
- 1997年11月 テヘラン大学文学部史学科博士課程留学
- 2002年3月 京都大学大学院文学研究科博士後期課程研究指導認定退学
- 2002年4月 京都大学研修員
- 2002年8月 バンベルク大学人文学部イラン学科留学
- 2003年4月 日本学術振興会特別研究員 PD
- 2005年11月 博士（文学）学位取得（京都大学）
- 2006年4月 北海道大学大学院文学研究科歴史地域文化学専修・東洋史学講座 助教授
- 2007年4月 北海道大学大学院文学研究科 准教授
- 2016年4月 東京大学大学院人文社会系研究科 准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

西アジア史、イラン史、宗教社会史

b 研究課題

シーア派の聖地巡礼や死者を聖地に埋葬する「移葬」など、西アジアの宗教社会史的研究を主たる研究課題としている。近年は、アルメニア人などの宗教マイノリティにみるイスラーム社会や、ムスリム側から見た仏教やキリスト教といった異文化接触に関心があり、また、多様な人びとからなる西アジアの都市社会の比較検討を行っている。

c 概要と自己評価

2018年度から始まった新学術領域研究「都市文明の本質」の計画研究班代表として、イスラーム時代の西アジア都市に関する研究を進めている。また、2022年度には、近世期のユーラシアの宗教アイデンティティを考察する共同研究を開始し、アルメニア人商人に関して、5本の所収論文からなる特集号を英文学術誌で企画・刊行した。個人研究では、都市イスファハーンに関して商業や職人工芸、および墓地といった様々な観点から考察するとともに、宗教的に不寛容化する近世期について、世界全体を俯瞰する専論を発表した。

d 研究業績

(1) 書籍出版物

[編者] *Acta Asiatica: Armenian Merchants and Their Communities in Early Modern Eurasia*, (Introduction), 2022.8

[分担執筆] 『構造化される世界 14～19世紀(岩波講座 世界歴史 11巻)』小川幸司・島田竜登編、岩波書店、2022.12.1、277p

[分担執筆] *Connecting the Indian Ocean World: Across Sea and Land*, Radhika Seshan Ryuto Shimada (eds.), Routledge, 2023.2

[共編者] 『NHK シリーズ 3か月でマスターする 世界史 4月号』岡本隆司・井上文則・守川知子、NHK 出版、2024.3、80p

(2) 論文

[学術雑誌] Tomoko Morikawa, 'An Armenian Merchant Who Became a Muslim: International Trade and Religious Identity in the Early Modern World,' *Acta Asiatica: Armenian Merchants and Their Communities in Early Modern Eurasia*, 123, pp. 33-51, 2022.8

[論文集（書籍）内論文] 守川知子「宗派化する世界：宗教・国家・民衆」、小川幸司・島田竜登編『岩波講座世界歴史 11 構造化される世界一四～一九世紀』、pp. 97-128、2022.11

[論文集（書籍）内論文] Tomoko Morikawa, 'The Safavid Mission to Siam and the Indian Ocean World in the Late Seventeenth Century,' Radhika Seshan and Ryuto Shimada (eds.), *Connecting the Indian Ocean World: Across Sea and Land*, Routledge, pp. 35-54, 2023.2

[大学、研究機関紀要] 守川知子「イスファハーンの聖者廟—1924年市街図の「イマームザーデ」の分析を中心に」、『新学術領域研究「都市文明の本質——古代西アジアにおける都市の発生と変容の学際研究5」研究成果報告2022年度』5巻、pp. 201-222、2023.3

(3) その他各種論著

守川知子「巡礼・参詣（イラン）」「異教徒との関係（イラン）」、イスラーム文化事典編集委員会編『イスラーム文化事典』、丸善出版、2023.1

(4) 講演・口頭発表等

[シンポジウム・ワークショップ パネル（指名）] Tomoko Morikawa, 'Isfahan as a Commercial Center of Safavid Persia and the Indian Ocean Trade,' The World Economic History Congresses (WEHC) 2022, Campus Condorcet, Paris, 2022.7.25

[口頭発表（招待・特別）] Tomoko Morikawa, 'From Yerevan to New Julfa of Isfahan Armenian Commercial Networks under the Safavid Empire,' International Scientific Conference: The Caucasus on the Crossroads of International Trade and Cultural Exchanges (from ancient times to the modern period), National Academy of Sciences of the Republic of Armenia (NASRA), Yerevan, 2022.9.5

[シンポジウム・ワークショップ パネル（指名）] Tomoko Morikawa, 'Commercial spaces and commodities in 17th century Isfahan: Bazaars and caravanserais in a Safavid cosmopolitan city,' Sousse Symposium: "Historic cities of Afro-Eurasia, comparing Tunisian and Mashriq cities; establishment, characteristics and urban society/inhabitants," Organized by C01-Research Group 05 "Historical research on the urban structure of West Asian "Islamic cities"" (MEXT Grant-in-Aid for Scientific Research on Innovative Areas: "The Essence of Urban Civilization"); Co-Organizer: Japan Society for the Promotion of Science, Research Station in Cairo, EPI Polytechnique, Sousse, 2022.12.26

[シンポジウム・ワークショップ パネル（指名）] Tomoko Morikawa, 'Artisans and Handicrafts of 19th century Isfahan: Legacy of Safavid Iran,' Qajar Round Table: Urban Landscapes in Qajar Iran,' Organized by C01-Research Group 05 "Historical research on the urban structure of West Asian "Islamic cities"" (MEXT Grant-in-Aid for Scientific Research on Innovative Areas: "The Essence of Urban Civilization"), Institute for Research in Humanities, Kyoto University, Kyoto, 2023.2.20

[シンポジウム・ワークショップ パネル（指名）] Tomoko Morikawa, 'Mapping Medieval Isfahan: Urban areas, minarets and cemeteries,' International Workshop: Echoes from the Medieval West Asian Cities,' Organized by C01-Research Group 05 "Historical research on the urban structure of West Asian "Islamic cities"" (MEXT Grant-in-Aid for Scientific Research on Innovative Areas: "The Essence of Urban Civilization"), The University of Tokyo, Hongo Campus, Tokyo, 2023.3.4

[シンポジウム・ワークショップ パネル（指名）] Tomoko Morikawa, 'Baghdad as a Center of Shi'i Pilgrims in the Nineteenth Century,' International Workshop: BAGHDAD 756-2023, L'Orientale University of Naples, Naples, 2023.3.16

[その他] 守川知子「宗教と近世世界：『岩波講座世界歴史 11』「宗派化する世界」を上梓して」、近世ユーラシアの宗教アイデンティティ：グローバル多元主義と地域大国主義の相克、東京大学本郷キャンパス、2023.4.23

[口頭発表（一般）] Tomoko Morikawa, 'Armenian Merchants and Trade Routes under the Safavid Empire,' The Ninth Biennial Convention of the Association for the Study of Persianate Societies, Russian Armenian University and the Institute of Archaeology and Ethnology of the National Academy of Sciences, Yerevan, 2023.5.31

[シンポジウム・ワークショップ パネル（指名）] Tomoko Morikawa, 'Pilgrimage to the Ottoman Iraqi 'Atabat and Identity Formation of Shi'ite Iranians,' International Workshop: Between "Reporting the World" and "Revealing the Self": Persian Pilgrimage Travelogues of the Qajar Period, Institute of Oriental Studies, University of Bamberg, Bamberg, 2023.6.16

[シンポジウム・ワークショップ パネル（指名）] Tomoko Morikawa, 'Jadīd al-Islāms (New Muslims), Heretics, and Religious Identity in "Confessionalized" Safavid Iran,' Panel: Religious and Social Identity in Transition: Conflict, Conciliation and Coexistence in Early Modern Asia, ENIUGH 2023 (The Seventh European Congress on World and Global History), Leiden University, The Hague, 2023.7.1

[シンポジウム・ワークショップ パネル（指名）] Tomoko Morikawa, 'New Julfa Armenian merchants and their properties in Safavid Iran,' Panel: Armenian Merchants and Iran in the 15th -18th Centuries, ECIS 10 (Tenth European Conference of Iranian Studies), Leiden University, Leiden, 2023.8.23

[口頭発表（一般）] Tomoko Morikawa, 'Shrines, Mausoleums and Cemeteries in Isfahan: A Landscape of a Historical "Islamic" City,' ECIS 10 (Tenth European Conference of Iranian Studies), Leiden University, Leiden, 2023.8.24

[公開講演、セミナー、チュートリアル、講習、講義等] 守川知子「『世界の半分』と呼ばれた都イスファハーン」、第16回「都市の世界史」オンライン講演会、2023.10.19

[公開講演、セミナー、チュートリアル、講習、講義等] Tomoko Morikawa, 'Persian Muslim Missions to the Theravada Buddhist Society of Siam in the Seventeenth Century,' JSPS Japan-Warwick seminar: Ayutthaya in the Seventeenth Century from Asian and Global Perspectives,' University of Warwick, Warwick, 2023.12.6

[シンポジウム・ワークショップ パネル (指名)] Tomoko Morikawa, 'Tolerance, Intolerance and Religious Identities in the Early Modern World,' International Workshop: Tolerance and Intolerance in the Early Modern World, Organized by JSPS Grant-in-Aid for Scientific Research(A) 22H00014 "Early Modern World and 'Religious Identities': Mobility, Local Communities and State Policies," University of Tokyo, Hongo Campus, Tokyo, 2024.1.27

[口頭発表 (一般)] 守川知子「ラシードゥッディーンと『タンスーク・ナーマ (珍貴の書)』: 中国からペルシアへ将来された医学書」、第42回イラン研究会、大阪大学箕面キャンパス、2024.3.30

(5) 共同研究・競争的資金等の研究課題

[科学研究費助成事業]「シーア派イスラームの聖廟・墓地の形成と発展: 法理論と地理空間情報による総合的研究」、挑戦的研究 (萌芽): 17K18456、日本学術振興会、東京大学、2017.6～2023.3

[科学研究費助成事業]「中世から近代の西アジア・イスラーム都市の構造に関する歴史学的研究」、新学術領域研究 (研究領域提案型): 18H05448、日本学術振興会、東京大学、2018.6～2023.3

[科学研究費助成事業]「近世ユーラシアの宗教アイデンティティ: グローバル多元主義と地域大国主義の相克」、基盤研究 (A): 22H00014、日本学術振興会、東京大学、2022.4～2026.3

e その他

(1) 学会・委員活動

[委員歴] 国内、東洋史研究会、評議員、2016.11～

[委員歴] 国内、東方学会、学術委員、2019.6～

[委員歴] 国内、史学会、編集委員、2019.7～2022.6

[委員歴] 国内、東洋文庫、兼任研究員

[委員歴] 国内、内陸アジア史学会、理事、2018.10～

18 西洋古典学

教授 日向 太郎 HYUGA, Taro

1. 略歴

- 1985 年 4 月 東京大学教養学部文科三類入学
- 1987 年 4 月 東京大学文学部西洋古典学専修課程進学
- 1989 年 3 月 同専修課程卒業
- 1989 年 4 月 東京大学大学院人文科学研究科西洋古典学専攻修士課程入学
- 1992 年 3 月 同修士課程修了, 修士 (文学) 取得
- 1992 年 4 月 同博士課程進学
- 1994 年 10 月 イタリア, フィレンツェ大学文学哲学部留学 (～1996 年 9 月. なお 1994～1995 年はイタリア政府奨学金給費留学生)
- 1999 年 3 月 東京大学大学院人文社会系研究科欧米系文化研究専攻博士課程 (専門分野: 西洋古典学) 単位取得満期退学
- 1999 年 9 月 博士 (文学) 取得
- 2009 年 10 月 東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻准教授
- 2019 年 4 月 同教授
- 2020 年 4 月 東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

西洋古典学

b 研究課題

1. ラテン詩文研究
2. ギリシア・ローマ文化におけるオーラリティとリテラシー、とりわけホメロス叙事詩の伝承について関心がある。
3. ヨーロッパ文化における西洋古典の受容

c 概要と自己評価

叙事詩技法のひとつであるエクフラシスに関心がある。そのような関心に基づき、d(2)はアプレイウス『黄金のろば』に含まれている造形芸術作品の描写について論じた。d(1)は、b.3 に相当する。知泉書館の知泉学術叢書 29 として刊行され、また栄えある「イタリア・ルネサンス古典シリーズ」の最初の 1 冊にもなった。d(3)a は、b.1 と b.2 にかかわる。d(3)b は、b.2 の成果である。一般向けに分かりやすく書くことを心掛け、限られた字数制限内で実によくまとまったと思う。d(4)a では、シェイクスピアと同時代のイタリアの詩人タッソがどれほどラテン詩人の影響を受けているかを考察した。要旨は学会ホームページに掲載されているが、いずれ、発表原稿をより一層充実させ、論文の形にして公表したい。d(4)b は、b.1 に分類し得る成果である。

d 研究業績

(1) 単著 (翻訳、註、ラテン語原文付き、解題)

ジョヴァンニ・ボッカッチョ著、日向太郎訳『名婦伝』、知泉書館、2024、xi+732

(2) 論文

日向太郎「アプレイウス『黄金のろば』における造形芸術作品描写」、『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』第 55 号、2024、pp.307-320

(3) その他各種論著

a [研究発表要旨] 地中海学会第 46 回大会シンポジウム「模倣し複製する地中海」の報告要旨、「ホメロス叙事詩とウェルギリウス」、『地中海学研究』第 46 号、2023、pp.64-65

b [総説・解説] 「古代ギリシアの吟遊詩人」、『山川歴史 PRESS』第 14 号、2023.6、pp.18-19

(4) 講演・口頭発表など

a[口頭発表(招待)] 日本シェイクスピア学会第61回、2023.10.15、於立正大学品川キャンパス、セミナー「シェイクスピアと古典古代」の報告、「英雄の恋 ―タッソ『エルサレム解放』のリナルドの場合―」

(要旨は <https://drive.google.com/file/d/1AnjNgdPj37-Dx4HJwcHfreq2cLbaipcm/view?pli=1>)

b[口頭発表(シンポジウム報告)] 「古代の記憶の回復をめぐる」、2024.3.24、於東京大学駒場キャンパス、(村松真理子、奈良澤由美、芳賀京子、Matteo Salvatore、松田陽、池上俊一、中川亜希、杉山浩平、日向太郎)、日向太郎「カンパーニアとウェルギリウス」

e その他

(1) 非常勤講師

実践女子大学、2022年度～

(2) 学会・委員活動

日本西洋古典学会常任委員、2022年度～

日本学術会議連携会、2023.10～

19 フランス語フランス文学

教授 塚本 昌則 TSUKAMOTO, Masanori

1. 略歴

- 1982年 3月 東京大学文学部第三類フランス語フランス文学専修課程卒業
- 1984年 4月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程入学（仏語仏文学）
- 1987年 4月 東京大学大学院人文科学研究科博士課程進学
- 1988年 10月 パリ第12大学博士課程（～1991年9月）（フランス文学、フランス政府給費留学生）
- 1992年 3月 東京大学大学院人文科学研究科博士課程退学
- 1992年 4月 東京大学文学部助手
- 1994年 4月 白百合女子大学文学部専任講師（フランス文学）
- 1997年 4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授（フランス語フランス文学）
- 2010年 4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授（フランス語フランス文学）

2. 主な研究活動

a 専門分野

フランス近代文学。

b 研究課題

- (1) ポール・ヴァレリー研究。「夢」というトポス、断章という形式からの検討。
- (2) クレオール文学研究。エキゾティシズムとは無縁の、活力にあふれたその作品美学の研究を、セゼール、グリッサン、シャモワゾー、コンフィアンなどの作品読解を通して進めている。
- (3) 20世紀フランス文学における散文の研究。小説全盛の19世紀とは異なり、20世紀には、詩的強度を備えたさまざまな散文作品が書かれるようになった。とりわけ、時間意識、夢と覚醒というテーマ、イメージの活用法、さらに人文科学との接点という視点から、その特質の一端を捉えようと試みている。

c 概要と自己評価

- (1)については、長年の課題として研究を続けている。2024年3月、コレージュ・ド・フランスと高等師範学校で、ヴァレリーの「非人間の詩学」に関する連続5回の講義を行った。また、『評伝ポール・ヴァレリー』の翻訳（共訳）を出版した。メルロー＝ポンティが、ヴァレリーについて行ったコレージュ・ド・フランス講義『言語の文学的使用法の研究』に関する研究を継続して行っている。
- (2)については、グリッサンの評論『カリブ海序説』の翻訳（共訳）を出版する予定。
- (3)については、20世紀文学と人文科学の境界を探る一連の研究会（人文知研究会）を終え、共催者である早稲田大学・鈴木雅雄教授とともに、現在書籍版の準備を進めている。また、文学作品に写真を取りこんだ〈写真小説〉に関する研究『写真文学論——見えるものと見えないもの』（2024.5、東京大学出版会）を刊行した。

d 研究業績

(1) 書籍出版物

[共訳] ミシェル・ジャルティ『評伝ポール・ヴァレリー』（恒川邦夫監訳）（1巻：607頁／2巻：653頁／3巻：734頁）、水声社、2023.6

(2) 論文

- Masanori Tsukamoto, 「Mishima et la poétique de l'inhumain」、*Revue des Sciences Humaines*, N° 345, Janvier-mars 2022, p.31-41
- Masanori Tsukamoto, 「Poétique de l'inhumain : De « La Désumanisation de l'art » d'Ortega y Gasset à « L'Institution » de Merleau-Ponty」、*Zinbun*, Annals of the Institute for Research in the Humanities, Kyoto University, n. 52, 2022.3, p.44-52
- Masanori Tsukamoto, 「L'usage de la photographie documentaire — Autour de *Yoshino kuzu* de Jun'ichirô Tanizaki et d'« Ambros Adelwarth » de Sebald」、*Revue internationale de la photolittérature*, n° 4, 2022 (http://phlit.org/press/?post_type=articlerevue&p=3408)

(3) その他各種論著

「失われた時」とは何か（小論）、『図書』、2022.3、p.30-34

「現実の島と象徴の島——恒川邦夫『サン＝ジョン・ペルスと中国——〈アジアからの手紙〉と『遠征』』（書評）、『ヴァレリー研究』、n° 10、2022.3、p.62-69

ル・クレジオ著『ル・クレジオ、文学と書物への愛を語る』（書評）、『週刊読書人』、2022.9.30

「2022 年回顧・外国文学（フランス）」、『週刊読書人』、2022.12.23

「追悼＝菅野昭正——認識と創造」、中地義和との対談、『週刊読書人』、2023.5.5

「バトリック・モディアノ『眠れる記憶』」（書評）、『週刊読書人』、2023.9.8

「2023 年回顧・外国文学（フランス）」（書評）、『週刊読書人』、2023.12.22

(4) 講演・口頭発表等

Masanori Tsukamoto、「L'inhumain, l'imagination selon Valéry」、国際研究集会« Valéry au collège de France »（ウィリアム・マルクス／マチルド・マナラが組織）での発表、Paris、Collège de France、2023.6.15
https://www.youtube.com/watch?v=oKva_Xgskal&t=2s

Masanori Tsukamoto、「Les recherches sur le rêve chez Valéry, Proust et Myōe」、Paris、Collège de France、2024.3.6
https://www.youtube.com/watch?v=LUZW_x2ozi0&t=1s

Masanori Tsukamoto、「Mishima et la poétique de l'inhumain」、Université Paris Sciences & Lettres、Programme gradué Translitteræ : Cycle « La poétique de l'inhumain », École normale supérieure、2024.3.7
<https://www.translitterae.psl.eu/masanori-tsukamoto/>

Masanori Tsukamoto、「Valéry et la poétique de l'inhumain — autour du langage intérieur et de la parole parlante」、Université Paris Sciences & Lettres、Programme gradué Translitteræ : Cycle « La poétique de l'inhumain », École normale supérieure、2024.3.15

Masanori Tsukamoto、「Bêtise, bestialité et poétique — Valéry et Flaubert, autour de *La Tentation de saint Antoine*」、en dialogue avec Anne Simon、sur « *La Légende de saint Julien l'Hospitalier* », Université Paris Sciences & Lettres、Programme gradué Translitteræ : Cycle « La poétique de l'inhumain », École normale supérieure、2024.3.21

Masanori Tsukamoto、「La notion d'implexe et la poétique de l'inhumain — Valéry et Merleau-Ponty」、Université Paris Sciences & Lettres、Programme gradué Translitteræ : Cycle « La poétique de l'inhumain », École normale supérieure、2024.3.28

e その他

(1) 学会

日本フランス語フランス文学会会員

(2) 学外組織(学協会、省庁を除く)委員・役員

日仏会館フランス語コンクール審査員

教授 塩塚 秀一郎 SHIOTSUKA, Shuichiro

1. 略歴

1989 年 4 月	東京大学教養学部理科一類入学
1993 年 3 月	東京大学教養学部教養学科第二（フランスの文化と社会）卒業
1993 年 4 月	東京大学大学院人文科学研究科修士課程（仏語仏文学専攻）入学
1995 年 3 月	同 修了
1995 年 4 月	東京大学大学院人文社会系研究科博士課程（欧米系文化研究専攻）進学
1995 年 10 月	パリ第三大学博士課程入学（フランス文学・文化）
2000 年 7 月	同 博士学位（文学）取得
2001 年 3 月	東京大学大学院博士課程単位取得退学
2001 年 4 月	北海道大学大学院文学研究科 助教授
2005 年 4 月	早稲田大学理工学術院理工学部 助教授
2007 年 4 月	早稲田大学理工学術院創造理工学部 准教授
2010 年 4 月	早稲田大学理工学術院創造理工学部 教授
2012 年 4 月	京都大学大学院地球環境学堂 准教授

2015 年 4 月	京都大学大学院人間・環境学研究科 准教授
2016 年 4 月	京都大学大学院人間・環境学研究科 教授
2018 年 4 月	東京大学大学院人文社会系研究科 准教授
2021 年 4 月	東京大学大学院人文社会系研究科 教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

フランス近現代文学

b 研究課題

- (1) ジョルジュ・ペレック研究。制約下の創作や日常の探求という観点から検討している。
- (2) レーモン・クノー研究。特異な〈知〉の概念の検討。
- (3) 都市や集合住宅をめぐるドキュメンタリー文学の研究。

c 概要と自己評価

- (1) ペレックやクノーの文学からフランス文学史を照らし読み替える試みを、『逸脱のフランス文学史：ウリポのプリズムから世界を見る』として出版した。
- (2) クノーの中期小説三作をコジェーヴの「賢者」概念から読み解き、『レーモン・クノー「与太郎」的叡智』という書籍として刊行した。
- (3) リュト・ジルベルマン『パリ十区サン＝モール通り二〇九番地』（2020）の翻訳を進めた。また、この作品を遊戯の観点から読み解く仏語論文を専門誌に発表した。

d 研究業績

(1) 書籍出版物

- [単著]『レーモン・クノー「与太郎」的叡智』、塩塚秀一郎、白水社、単行本（一般書）、2022.5、230p
- [単著]『逸脱のフランス文学史：ウリポのプリズムから世界を見る』、塩塚秀一郎、書肆侃侃房、単行本（一般書）、2024.2、269p
- [単訳]『増補新版 さまざまな空間』、ジョルジュ・ペレック、塩塚秀一郎、水声社、単行本（一般書）、2024.2.20、272p

(2) 論文

- [学術雑誌]『Le quotidien et la violence : le paysage urbain chez quelques écrivains français contemporains』、Shuichiro SHIOTSUKA、*Revue des Sciences Humaines*、345 号、pp.45-53、2022
- [学術雑誌]『"Vies imaginaires" de "fous littéraires" chez Nerval et Queneau』、Shuichiro SHIOTSUKA、*Revue Nerval*、7 号、pp.55-64、2023
- [学術雑誌]『La tutelle de *La Vie mode d'emploi* de Georges Perec dans 209 rue Saint-Maur de Ruth Zylberman est-elle ludique ou existentielle?』、Shuichiro SHIOTSUKA、*Quêtes littéraires*、13 号、pp.154-161、2023
- [学術雑誌]『Qui décrit l'île de W : voix et silence dans *W ou le souvenir d'enfance*』、Shuichiro SHIOTSUKA、*Cahiers Georges Perec*、15 号、pp.93-100、2024

(3) その他各種論著

- [総説・解説（商業誌）]『文学における笑いと遊び』、塩塚秀一郎 三ツ堀広一郎、『図書新聞』3559 号、pp.1-2、2022.9.17

(4) 講演・口頭発表等

- [公開講演、セミナー、チュートリアル、講習、講義等]『大学で「文学」を学ぶってどういうこと?』、塩塚秀一郎 池澤春菜 榎允翼、高校生のための秋季特別講座、2022.9.19
- [口頭発表（一般）]『Techniques oulipiennes et enjeu existentiel : le cas du Tramway de Claude Simon』、Shuichiro SHIOTSUKA、Colloque Cerisy « L'Oulipo : générations », 2023.7.26
- [口頭発表（一般）]『Le reflet de l'ambivalence de Lieux dans *La Vie mode d'emploi*』、Shuichiro SHIOTSUKA、Colloque « Les Lieux de Georges Perec », 2024.1.27

(5) 共同研究・競争的資金等の研究課題

- [科学研究費助成事業]『19 世紀後半以降のフランスにおける〈集合住宅文学〉に関する研究』、塩塚秀一郎、基盤研究 (C) : 21K00431、日本学術振興会、東京大学、2021.4～2024.3
- [科学研究費助成事業]『錯綜体としての人間——ポール・ヴァレリーの詩学を中心に』、塚本昌則 塩塚秀一郎 MARIANNE SIMON・O、基盤研究 (C) : 22K00461、日本学術振興会、東京大学、2022.4～2026.3

e その他

(1) 学会・委員活動

[所属学協会] 日本フランス語フランス文学会、2001.6～

[所属学協会] 文学・環境学会、2013.4～

[所属学協会] 日本ジュール・ヴェルヌ研究会、2018.4～

[委員歴] 小西国際交流財団、日仏翻訳文学賞選考委員、2019.4～

[委員歴] 文学・環境学会、評議員、2019.4～

[委員歴] 日本フランス語フランス文学会、幹事長、2021.6～2022.6

教 授 **王 寺 賢 太** OHJI, Kenta

1. 略歴

1988 年 4 月	東京大学教養学部文科 3 類入学
1992 年 3 月	東京大学文学部第 3 類（語学文学）仏語仏文学専修課程卒業
1992 年 4 月	東京大学大学院人文科学研究科修士課程（仏語仏文学専攻）入学
1993 年 10 月	ストラスブール第 2 大学修士課程（近代文学）入学
1994 年 10 月	パリ第 7 大学高等研究課程入学（～1995 年 9 月 修了）
1996 年 3 月	東京大学大学院人文社会系研究科修士課程（欧米系文化研究専攻）修了
1996 年 4 月	東京大学大学院人文社会系研究科博士課程（欧米系文化研究専攻）進学
1996 年 10 月	パリ第 7 大学博士課程（テキストと資料の科学）入学（～2004 年 12 月）
1996 年 10 月	高等師範学校外国人聴講生（～1997 年 7 月）
1997 年 4 月	日本学術振興会特別研究員（DC2）（～1999 年 3 月）
2000 年 3 月	東京大学大学院人文社会系研究科博士課程単位取得退学
2000 年 4 月	日本学術振興会特別研究員（PD）（～2003 年 3 月）
2005 年 1 月	京都大学人文科学研究所 助教授
2007 年 4 月	京都大学人文科学研究所 准教授
2008 年 8 月	ライデン大学図書館スカリゲル・フェロー
2009 年 10 月	パリ第 1 大学（哲学科）外国人研究員（～2010 年 9 月）
2012 年 7 月	パリ西大学博士号（仏語仏文学）取得
2019 年 9 月	東京大学大学院人文社会系研究科 准教授
2023 年 4 月	東京大学大学院人文社会系研究科 教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

フランス近現代思想

b 研究課題

- (1) フランスを中心とする 18 世紀西洋思想——フランス啓蒙期の歴史叙述・政治思想・経済思想の交錯に焦点を当てる。
- (2) フランス 20 世紀思想——1960 年代以降の構造主義・ポスト構造主義の諸潮流と、西欧近世思想史ならびに同時代の左翼政治との関係に焦点を当てる。
- (3) 日本の近現代思想・批評——とくに西洋の同時代の思想との関連に焦点を当てる。

c 概要と自己評価

- (1) ・モンテスキュー、ルソー、ディドロにおける立法者の形象を中心にフランス啓蒙期の政治思想と歴史把握についての研究書『消え去る立法者—フランス啓蒙における政治と歴史』（名古屋大学出版会、2023 年）を刊行した。

- ・『両インド史』批評校訂版共同編集長として、この批評校訂版の第四巻を刊行し、アメリカ合衆国独立に捧げられた第 18 篇の批評校訂および序文執筆を担当した。他に、啓蒙期の文学史・思想史関係の研究発表を行なった。
- (2) ミシェル・フーコーのカント『実用的見地からの人間学』解釈について研究発表と論文執筆を行なった。他、フーコーの 1950 年代の人間学講義の翻訳を準備中である。
- (3) 大江健三郎の逝去に際して、『セヴンティーン』連作についての作品分析を主題とする論文を執筆した。また、桂秀実の著作集刊行に際して、桂の 80 年代の批評と「昭和」文学史論の意義を明らかにする論文を執筆した。いずれも長年の研究に一区切りをつけ、自身の今後の新たな展開に繋げる仕事を成し得たと考えている。

d 研究業績

(1) 書籍出版物

- [単著] 王寺賢太『消え去る立法者——フランス啓蒙における政治と歴史』名古屋大学出版会、532 頁、2023.3
- [共編著] Guillaume-Thomas Raynal, *Histoire philosophique et politique des établissements et du commerce des Européens dans les deux Indes*, t. IV, dir. Anthony Strugnell, Gianluigi Goggi et Kenta Ohji, Fernay-Voltaire, Centre international d'étude du 18^e siècle, xx+781 p., 2023.1 (共同編集長、および第 18 篇批評校訂・序論)

(2) 論文

- [学術雑誌] 王寺賢太「詩とテロルのあいだ——大江健三郎「セヴンティーン」と「政治少年死す」についての覚え書き」、『ユリイカ』二〇二三年七月臨時増刊号『総特集 大江健三郎 1935-2023』、215-228 頁、2023.7
- [学術雑誌] 王寺賢太「人間学という分岐点——フーコーによるカント『実用的見地における人間学』解釈」、『日本カント研究』24、25-37 頁、2023.7
- [学術雑誌] 王寺賢太「市田良彦の「フィクション」——あるいはアルチュセール／フーコー／市田」、『情況』2024 年冬号「市田良彦『フーコーの〈哲学〉』を徹底読解」、112-123 頁、2024.2
- [学術雑誌] 王寺賢太「「いかがわしさ」のために——桂秀実と八〇年代批評の「転回」」、『情況』2024 年冬号、137-150 頁、2024.2

(3) その他各種論著

- [書評への応答] 王寺賢太「『消え去る立法者のために』——仲正昌樹氏の書評に応答する」、『週刊読書人』第 3497 号、2023.7.14
- [書評への応答] 王寺賢太「再び『消え去る立法者』のために——仲正昌樹への再応答」、『週刊読書人』第 3501 号、2023.8.11

(4) 講演・口頭発表等

- [口頭発表 (一般)] Kenta Ohji, « *Lettres persanes*, ou les malheurs de la vertu selon Montesquieu », communication au colloque « Les belles lettres dangereuses — Le destin de l'épistolarité littéraire du XVII^e-XIX^e siècle », Institut de recherches en sciences humaines, Université de Kyoto, 2022.8.28
- [口頭発表 (招待)] 王寺賢太「人間学という分岐点——フーコーのカント『実用的見地からの人間学』解釈」、日本カント協会第 47 回大会「カント『人間学の世界』——開講 250 周年を記念して」(オンライン開催)、2022.11.12
- [口頭発表 (招待)] Kenta Ohji, « La civilisation des sauvages et la naissance des États libéraux modernes — autour de la question de la propriété dans l'*Histoire des deux Indes* », au Colloque « Sauvages des Lumières », Université Paris-Cergy et Université de Paris I, 2023.5.13
- [口頭発表 (招待)] 王寺賢太、「遡行と反復——モンテスキューとルソーの立法者論をめぐる」、慶応大学法学研究科「プロジェクト研究・政治思想研究」での講演、2023.6.29
- [学会発表へのコメント (招待)] 王寺賢太 (コメンテーター)、Laurie Brebin, « Substituting Conjecture for Facts : Diderot's Justification of the authority of Men over Women in the *Histoire des deux Indes* », 経済学史学会国際ワークショップ、立教大学、2024.3.13

e 社会活動

(1) 学術貢献活動

- [合評会・司会] 原大地著『ステファヌ・マラルメの〈世紀〉』(水声社、2021 年) 公開合評会 (評者: 片岡大右、森本淳生、郷原佳以)、東京大学文学部フランス語フランス文学研究室主催、2023.3.25
- [合評会・応答] 王寺賢太『消え去る立法者』合評会 (評者: 井上櫻子・川村文重・飯田賢徳・上野大樹・前川真行)、慶応大学文学部、2023.9.9

[合評会・コメント] 王寺賢太「市田良彦の「フィクション」—あるいはアルチュセール／フーコー／市田」、フーコー研究フォーラム・シンポジウム主催、市田良彦『フーコーの〈哲学〉——真理の政治史へ』合評会でのコメント、京都大学時計台記念館、2023.10.14

[合評会・応答] 王寺賢太『消え去る立法者』合評会（評者：森川輝一・小泉義之・佐藤淳二）、京都大学人文科学研究所、2023.10.22

[トークイベント] 王寺賢太（コメントおよび対話）、石川義正『存在論的中絶』（月曜社、2023年）をめぐって、東京堂書店、2024.02.23

(2) メディア報道

[新聞] 混沌の先に2024「18世紀の啓蒙思想に学ぶこと 王寺賢太・東大教授に聞く」、(朝日新聞、2024.2.2)

f その他

(1) 非常勤講師

立教大学文学部、2023.10～2024.3

(2) 学会・委員活動

日本18世紀学会 幹事、2007.6～、代表幹事、2023.6～

日本フランス語フランス文学会 学会誌編集委員、2021.6～

Diderot Studies 日本通信員、2007～

Guillaume-Thomas Raynal, *Histoire philosophique et politique des établissements et du commerce des Européens dans les deux Indes* 批評校訂版 (Femay-Voltaire, Suisse, Centre international d'étude du 18e siècle) 編集委員 (2013～2023) および共同ディレクター (2016～2023)

ENCCRE (Édition Numérique Collaborative et CRitique de l'Encyclopédie de Diderot), Académie des Sciences (France) 編集チームメンバー (2016～現在)

准教授 シモン・オイカワ マリアンヌ SIMON-OIKAWA, Marianne

1. 略歴

1989年9月	国立高等師範学校（エコール・ノルマル・シュペリユール）およびパリ第7大学入学
1990年9月	同大学にて仏文（現代文学）学士号、英文学士号取得
1991年9月	同大学にて修士号取得（現代文学）
1992年7月	大学教育教授資格（アグレガシオン）取得
1993年9月	パリ第7大学にて DEA (PhD)取得（現代文学）
1993年9月	東京大学研究生（～1995年8月）
1995年9月	リール大学講師（現代文学）（～1998年9月）
1996年9月	パリ第7大学にて日本語学士号取得
1999年12月	パリ第7大学にて文学博士号取得（現代文学）
1999年4月	早稲田大学非常勤講師（フランス文学）（～2005年4月）
2000年9月	慶應義塾大学訪問講師（フランス文学）（～2005年9月）
2000年4月	日仏会館客員研究員（～2008年8月）
2006年10月	東京大学大学院人文社会系研究科 准教授
2016年6月	パリ第7大学にて教授昇進資格取得（Habilitation à diriger des recherches）
2016年11月	日仏会館客員研究員
2022年8月	退職

2. 主な研究活動

a 専門分野

比較文学

b 研究課題

イメージと詩

c 概要と自己評価

ランボーの詩における空間の表象を分析する論文を執筆した。

d 研究業績

(1) 論文

« Rimbaud spatialiste », *Revue de langue et de littérature françaises*, n°55 (Hommage à Yoshikazu Nakaji), Tokyo, U. de Tokyo, 2022, p.551-570, En ligne sur : <https://repository.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/records/2003860>

e その他

(1) 学会・委員活動

日本フランス語フランス文学会

20 南欧語南欧文学

教授 浦 一章 URA, Kazuaki

1. 略歴

1982年3月	東京大学教養学部教養学科イギリス科卒業
1984年3月	同 文学部イタリア語イタリア文学専修課程卒業
1987年3月	東京大学大学院人文科学研究科フランス語フランス文学専門課程(イタリア語イタリア文学専攻)修士課程修了
1987年4月	東京大学大学院人文科学研究科フランス語フランス文学専門課程(イタリア語イタリア文学専攻)博士課程進学
1988年3月	東京大学大学院人文科学研究科フランス語フランス文学専門課程(イタリア語イタリア文学専攻)博士課程中途退学
1988年4月	東京芸術大学音楽学部一般学科専任講師
1990年4月	同 助教授
1994年4月	東京大学文学部南欧語南欧文学科助教授
1995年4月	同 大学院人文社会系研究科助教授
2010年4月	同 教授
2024年3月	定年退職

2. 主な研究活動

a 専門分野 b 研究課題

(ダンテを中心とした) イタリア文学、中世オック語文学

c 概要と自己評価

概要

『ダンテ研究 I』(東京、東信堂、1994年)以降も、『神曲』以前のダンテ、恋愛詩人としてのダンテを研究の中心に据え、1230年頃からホーエンシュタウヘン家の宮廷で花開いたシチリア派の詩人たちや、それに続くシチリア・トスカーナ派の詩人たちについての知識を深め、さらには南仏トルバドールたちの詩に対する理解を深めること。ダンテは少なくとも8名のトルバドールに言及しており、そのうちアルナウト・ダニエルを「煉獄篇」第26歌に登場させるに際しては、わざわざオック語で語らせるという念の入りようである。そのため、ダンテとトルバドールとの関係に対する興味が現在では次第に大きくなりつつある。また、恋愛詩の伝統はペトラルカをへて、時と地域、個性の壁を超越した一種の文学的コイナーを形成してゆくため、ダンテ以降の恋愛詩をも視野に含めるよう努め、ダンテの受容史という観点から、その最初の崇拜者ともいべきボッカッチョおよび騎士道物語詩(とりわけタッソ)にも関心を寄せている。

自己評価

『神曲』とも対照させながら、『シタ・ノワ』に収録された韻文のスタイルの変化を跡づけることが現在の主要な課題であるが、文体を問題とする困難な研究は少しずつ前進を続けている。トスカーナ地方の文学(とりわけダンテ)がアペニン山脈以北の地方、たとえばボローニャを中心としたエミリア・ロマーニャ地方や、パドヴァ、ヴェネツィア、トレヴィーゾなどを含むヴェネト地方でどのように受容されたかについても知見を深めるべく努めている。教育面では、現在、効果的な文学史教育を模索中であるが、必要な講義資料の整備を進めつつ、19-20世紀の作家にもとり組むべく努力している。すでに中世オック語入門に関してはルーティーン化が完了したといってよい状況だが、入門を終えた後の教育体制の改善を検討している。また、イタリアの「詩的言語」の特徴を語学的な観点から体系的に教育すべく資料を整理しつつ、機会を見て講義で話している。まだ、研究面でも教育面でも、体制を整えるためにすべきことは多大にあるが、2018年2月14日21時半頃に交通事故に遭い、半年にわたる入院生活を余儀なくされ、前進が困難になりつつある。

1. 略歴

1996 年	東京大学文学部美学藝術学科卒業
1996 年	東京大学大学院人文社会系研究科（南欧語南欧文学専門分野）修士課程入学
1998 年	東京大学大学院人文社会系研究科（南欧語南欧文学専門分野）修士課程修了
1998 年	東京大学大学院人文社会系研究科（南欧語南欧文学専門分野）博士課程進学
1999 年	ボローニャ大学イタリア文学研究学科博士課程入学
2001 年	東京大学大学院人文社会系研究科（南欧語南欧文学専門分野）博士課程退学
2001 年 8 月	東京大学大学院人文社会系研究科（南欧語南欧文学専門分野）助手（～2006 年 7 月）
2005 年	ボローニャ大学イタリア文学研究学科博士課程修了、博士号（Ph.D.）取得
2009 年	静岡文化芸術大学文化政策学部国際文化学科専任講師（～2012 年 3 月）
2012 年 4 月	静岡文化芸術大学文化政策学部国際文化学科准教授（～2014 年 3 月）
2014 年 4 月	立命館大学文学部国際文化学域文化芸術専攻准教授（～2018 年 3 月）
2018 年 4 月	立命館大学文学部国際文化学域文化芸術専攻教授
2022 年 4 月	東京大学大学院人文社会系研究科准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

イタリア近現代文学

b 研究課題

収容所文学、宣言文文学

c 概要と自己評価

一次大戦時に、本来味方であるはずのイタリア人が日本で捕囚に遭っていたという、捻じれた状況かつ埋もれた歴史に、日本の学者ではじめて向き合い、彼らが残したメモや発言を、「収容所文学」とのジャンルにおいてとらえようとする研究プロジェクトを立ち上げ、2024 年 3 月まで、科研費基盤研究 C「イタリア戦争捕虜“収容所文学”研究—“捕虜の世界史”構築にむけて」としてプロジェクトは続いたが、コロナ禍の影響で思うような調査ができず、未成熟な課題として残っている。

一方、前衛研究は新たな展開をみせ、未来派において連発された宣言文を、文学作品として読み返すという研究会を、他分野の研究者と立ち上げ、論集が刊行予定と、現在進行中の基盤研究 C「未来派を読み返す—宣言文文学の新たな地平へ」の研究計画には記されている。

d 研究業績

(1) 書籍出版物

[共著] Dante nel mondo 世界におけるダンテ, Atti del Convegno Internazionale di Studi (Palazzo Ducale, Genova, 14-15 settembre 2021), a cura di Massimo Bacigalupo e Francesco De Nicola, Genova, Accademia Ligure di Scienze e Lettere, 2022 (担当範囲: Dante in Giappone fra traduzioni e rimaneggiamenti 日本におけるダンテ—翻訳と翻案, pp. 238-251.)

[共著] Mishima Yukio e l'atto performativo. Drammaturgie di un artista 三島由紀夫とパフォーマンス・アーツ, a cura di Giovanni Azzaroni, Matteo Casari e Katja Centonze, Bologna, CLUEB, 2023 (担当範囲: Le scene di Mishima tra teatro e cinema 演劇と映画におけるミシマの舞台, pp. 127-134)

(2) 論文

「未来派の女性論を読む」、『イタリア語イタリア文学』、東京大学大学院人文社会系研究科・文学部南欧語南欧文学研究室、第 9 号、2024.3、pp. 191-210

Il cinema giapponese in Pasolini バゾリーニにおける日本映画, in «RILL Nueva Época», Revista del Instituto de Investigaciones Lingüísticas y Literarias Hispanoamericanas, Universidad Nacional de Tucumán, Facultad de Filosofía y Letras INSIL, vol. 27 (2022-2023), pp. 43-47

(3) その他各種論著

[書評] 吉増剛造『詩とは何か』、『図書新聞』3547 号、2022.6.18

[解説] アルベルト・モラヴィア『同調者』関口英子訳、光文社古典新訳文庫、2023、pp. 562-589

[書評] クリスティーナ・カッターネオ『顔のない遭難者たち』、『図書新聞』、3585 号、2023.4.1

- 「パオロ・タヴィアーニを通してピランデッロを読む」、映画『遺灰は語る』パンフレット、2023.6.23、pp. 22-23
- 「教皇の旅から世界を知る」、映画『旅するローマ教皇』パンフレット、2023.10
- 「蟻の王ブライバンティとパゾリーニ」、映画『蟻の王』パンフレット、2023.11、pp. 20-22
- [書評] イゴルト『ウクライナ・ノート』、ヴェーラ・ポリトコフスカヤ『母、アンナ』、『図書新聞』、3618号、2023.12.15
- [書面インタビュー] 共編書『イタリアの文化と日本』について（伊語）、New Italian Books、2023.12.12（電子版）
- [書評] 『恐怖—ダリオ・アルジェント自伝』、『図書新聞』3626号、2024.2.2

(4) 講演・口頭発表等

(国外)

- ボローニャ大学 DAMS Lab AISTUGIA 伊日学会大会 基調講演「Letteratura a un solo polmone (katahai no bungaku) in Italia e Giappone: "malattia necessaria" a far della poesia? 日伊の片肺の文学：詩を書くのに必要な病」、2022.9.16
- エディンバラ大学、パゾリーニ連続講演会「Pasolini and Mizoguchi パゾリーニと溝口」、2022.9.20
- マル・デル・プラタ大学人文学部、アルゼンチン・イタリア文学イタリア語学会 ADILLI 第36回年次大会、「Pasolini e il linguaggio dei giovani パゾリーニと若者言葉」、2022.9.23
- トウクマン大学文学部 国際シンポジウム Per il centenario di Pasolini パゾリーニ生誕100年のために（オンライン）、
「Il cinema giapponese in Pasolini パゾリーニにおける日本映画」、2022.10.27
- ペルージャ外国人大学 国際シンポジウム Mito, tradizione, immagini di Pasolini nel mondo 神話、伝統、世界におけるパゾリーニ像、「La fortuna critica di Pasolini in Giappone: sessant'anni di storia 60年に渡る日本でのパゾリーニ評」、2022.12.15
- フィレンツェ大学 国際シンポジウム Dimensioni del sacro tra Oriente e Occidente 聖性の諸相—東西比較の試み、「La prima traduzione in giapponese di Pinocchio (1920) e lo scrittore Sato Haruo 『ピノッキオ』初訳（1920）と佐藤春夫」、2023.9.26
- シエナ外国人大学 国際シンポジウム La pratica del commento 5. Autocoscienza, frontiere, attraversamenti コメント技法5 自己意識、境界、越境、「Leggere La coscienza a Tokyo 東京で『ゼーノの意識』を読む」、2023.11.8
- ボローニャ大学芸術学部ゼミ「Italia e Giappone, due paesi paralleli イタリアと日本、並行国家」（全8回、計30時間）、2024.2.19～3.8
- ボローニャ大学附属 極東美術研究所、『イタリアの文化と日本—日本におけるイタリア学の歴史』（松籟社、2023年）について（ジョヴァンニ・デサンティスと共に）、2024.2.28

(国内)

- 新宮市文化複合施設 第2回東大人文・熊野フォーラム in 新宮、「熊をめぐる幻想—熊野、常呂、イタリア」、2022.5.14
- 梨の木舎 戦争捕虜 POW 研究会講演会「イタリアは敵か味方か—第一次世界大戦期の日本におけるイタリア人捕虜」、2022.7.13
- イタリア文化会館大阪 XXII Settimana della Lingua Italiana nel Mondo イタリア語週刊 オンライン発表、「パゾリーニと若者話し言葉」、2022.10.21
- 東京外国語大学 イタリア学会 第70回大会「イタリア文学における鉄道員という父性」、2022.11.5
- 東京大学本郷キャンパス イタリア研究会 第501回例会「Pasolini 100—いまなぜパゾリーニか」、2022.11.15
- イタリア文化会館東京 第6回ヨーロッパ文芸フェスティバル「Pasolini tra cinema e letteratura: nuove questioni linguistiche / Pasolini between cinema and literature: new linguistic issues パゾリーニの映画と文学：新たな言語の問題」（ジャコモ・マンゾリ氏と共に）、2022.11.23
- イタリア文化会館大阪主催 連続オンライン講演会「Pasolini e Dante パゾリーニとダンテ」（エマヌエーラ・パッティ氏と共に）、2023.2.16
- 東洋大学 ワークショップ「パオロ・タヴィアーニ監督作品『遺灰は語る』とイタリア」「タヴィアーニ兄弟におけるシチリアとトスカナナの記憶」、2023.6.13

e その他

(1) 非常勤講師

京都産業大学外国語学部非常勤講師、2020.4～

(2) 学会・委員活動

地中海学会、AdI イタリア文学者協会、ADILLI アルゼンチン・イタリア語イタリア文学協会

1. 略歴

- 1991 年 9 月 Diploma di maturità classica (Liceo Classico Michelangiolo) (～1996 年 7 月)
1996 年 9 月 4-year Degree (Masters equivalent) in Letters (Renaissance Italian Literature) (～2001 年 7 月卒業)
2001 年 10 月 PdD / Dottorato (Civiltà dell'Umanesimo e del Rinascimento, University of Florence) (～2005 年 4 月)
2008 年 10 月 ユヴェスキュレ大学大学院 (フィンランド) ロマンズ文献学科リセシアーティ課程修了
2006 年 9 月 フィレンツェ大学文学部近代諸語学科非常勤講師 (～2010 年 7 月)
2008 年 6 月 ユヴェスキュレ大学人文学部研究員 (～2009 年 8 月)
2011 年 4 月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

Italian Literature / Renaissance Italian Literature

b 研究課題

Late Renaissance Poetry in Florence: Giovan Battista Strozzi the Elder, Giovan Battista Strozzi the Younger, the Alterati Academy, Giovan Battista Vecchietti

c 概要と自己評価

I have discovered previously unpublished texts by these and other authors, which I have presented at numerous conferences. In the coming years, I plan to publish volumes containing their poetry, also thanks to the JSPS kaken-C that I have obtained for this reason.

d 研究業績

(1) 論文

- [学術雑誌] 「E vostro nome non vedrà mai sera. La poesia degli Accademici Alterati e il ms. Vat. Lat. 8858 ("Your Name shall Never See the Dawn. The Poetry of the Alterati Academy and the ms. Vat. Lat. 8858")」、Amato Lorenzo、*Esperienze Letterarie*、46 巻 4 号、pp.55-96、2022
- [学術雑誌] 「Le 'Pietre' di Michelangelo Serafini: edizione critica e commento ("Michelangelo Serafini's 'Pietre': Critical Edition and Commentary")」、Amato Lorenzo、*Medioevo e Rinascimento*、pp.185-230、2022
- [学術雑誌] 「"I più dolci di stile che ci sieno": le Lune o Endimioni di Giovan Battista Strozzi il Giovane. Edizione critica e commento ("I più dolci di stile che ci sieno: the 'Lune' or 'Endymions' by Giovan Battista Strozzi the Younger. Critical Edition and Commentary")」、Amato Lorenzo、*Nordic Journal of Renaissance Studies*、18 巻、pp.29-45、2022
- [国際会議プロシーディングス] 「Bartolomeo del Bene, l'Accademia degli Alterati, e il Libro dell'Anno (Città del Vaticano, BAV, Vat. Lat. 8857)」、Amato Lorenzo、*Bibliologia*、68 巻、pp.277-291、2023
- [学術雑誌] 「Landscapes of Identity: Nature, Art, and Modern Nations in Three Japanese Exhibitions」、Amato Lorenzo、*Journal of Asian Humanities at Kyushu University*、8 巻、pp.45-52、2023
- [学術雑誌] 「ルネサンス末期の文学実験工房—「アカデミア・デッリ・アルテラーティ」(1569-1634 年)における詩と批評 (BML Ashb. 561 写本から BAV Vat. Lat. 8858 写本まで)」、Amato Lorenzo、*『イタリア学会誌』* 73 巻 2 号、pp.1-26、2023
- [大学研究機関紀要] 「Le Pietre di Antonio Buonaguidi. Edizione critica e commento」、Amato Lorenzo、*『イタリア語イタリア文学』* 9 巻、pp.13-44、2024
- [大学研究機関紀要] 「Poetry in Florence at the End of the Renaissance」、Amato Lorenzo、*『文化交流研究』* 37 巻、pp.51-57、2024
- [学術雑誌] 「Alfonso Cambi Importuni. Quattro madrigali 'astrologici' a Giovan Battista Strozzi il Vecchio ("Alfonso Cambi Importuni. Four 'astrological' madrigals for Giovan Battista Strozzi the Elder")」、in *Medicina Mentis - Essays in Honour of Outi Merisalo*、*Nordic Journal of Renaissance Studies*、22 巻、pp.1-16、2024
- [学術雑誌] 「Un poeta riscoperto: le poesie 'persiane' di Giovan Battista Vecchietti nel manoscritto Vat. Lat. 8853 della Biblioteca Apostolica Vaticana ("A Rediscovered Poet: The 'Persian' Poems of Giovan Battista Vecchietti in Manuscript Vat. Lat. 8853 of the Vatican Apostolic Library")」、*Studi italiani*、74、pp.1-26、2024

(2) 講演・口頭発表等

- [口頭発表 (一般)] 「16 世紀フィレンツェの詩の工房：アカデミア・デッリ・アルテラーティと写本 Vat.Lat.8858」、Amato Lorenzo、イタリア学会第 70 回大会、2022.11.5
- [口頭発表 (一般)] 「La critica degli Alterati. Una prima analisi delle ‘censure e difese’ delle poesie accademiche dal ms. BML Ashb. 561」、Amato Lorenzo、MUSES MOVING NORTH SEMINAR - THIRTEENTH BOOK HISTORICAL WEEK、2023.3.18
- [口頭発表 (一般)] 「Poetry in Florence at the End of the Renaissance: the ‘Collective Workshop’ of the new Academies and the Birth of a new Literary Tradition」、Amato Lorenzo、文化交流茶話会トーク、2023.5.11
- [口頭発表 (招待・特別)] 「La canzone nel Cinquecento」、Amato Lorenzo、Canzone. Storia di una forma poetica italiana、2023.5.27
- [口頭発表 (一般)] 「Che cosa è la critica del testo? Introduzione alla filologia testuale」、Amato Lorenzo、Seminario Speciale Unificato con Workshop - Osaka University、2023.6.1
- [口頭発表 (招待・特別)] 「地獄篇における方針—ダンテ『神曲』を描く、当時の挿絵から現代の日本まで」、Amato Lorenzo、「ダンテ『神曲』を描く—14 世紀の細密画から現代の日本まで」、Le politiche dell'Inferno: la rappresentazione di Dante e della Commedia, dall'illustrazione libraria al Giappone contemporaneo、2023.6.10
- [口頭発表 (招待・特別)] 「Poetry in Florence at the End of the Renaissance: from Giovan Battista Strozzi the Elder (1515-1571) to the birth of the Opera tradition」、Amato Lorenzo、2o Simposio dell'Associazione dei Ricercatori Italiani in Giappone, Istituto Italiano di Cultura, Tokyo、2023.6.30
- [口頭発表 (招待・特別)] 「トスカーナを旅する—ルネサンス期における修道院と信仰の道」、Amato Lorenzo、聖性の諸相—東西比較の試み、International Conference "Dimensioni del Sacro fra Oriente e Occidente"、2023.9.26
- [口頭発表 (招待・特別)] 「大地の賛歌—日本の陶器をイタリア美術と比較して」、Amato Lorenzo、イタリア研究会 第 512 回 例会 (ハイブリッド開催)、ITAKEN Seminar、2023.10.17
- [口頭発表 (一般)] 「Il manoscritto Vat. Lat. 8853 della Biblioteca Apostolica Vaticana: i sonetti ‘persiani’ di un ‘mercante fiorentino’ di fine Cinquecento」、Amato Lorenzo、The 73rd Congress of the Italian Studies Association of Japan、2023.11.6
- [口頭発表 (招待・特別)] 「I giardini di Shiraz. Le poesie ‘persiane’ di un avventuriero fiorentino di fine Rinascimento (ms. Vat. Lat. 8853)」、Amato Lorenzo、Muses Moving North - Fourteenth Book Historical Week、2024.3.23

(3) 共同研究・競争的資金等の研究課題

- 「Late Medieval and Early Modern Libraries as Knowledge Repositories, Guardians of Tradition and Catalysts of Change (Lamemoli)」、Outi Merisalo Lorenzo Amato Miika Kuha Jakub Kujawinski Giovanna Murano Susanna Niiranen Marianne Pade Bernd Roling Benjamin Wallura、SA307635、Academy of Finland (Suomen Akatemia), University of Jyväskylä、2017.9～2022.5
- [Grants-in-Aid for Scientific Research] 「A Critical Edition of Giovan Battista Strozzi the Elder's Poetic Corpus: Reassessing Strozzi's Importance in Late Renaissance Italy」、Grant-in-Aid for Scientific Research (C) : 23K00418、Japan Society for the Promotion of Science、The University of Tokyo、2023.4～2026.3

e 社会活動

(1) 学術貢献活動

- [審査・評価] 大会・シンポジウム等「関西学生イタリア語朗読大会」、関西イタリア学研究会 ASIKA、2021.12.4

f その他

(1) 学会・委員活動

- [所属学協会] Renaissance Society of America、2014～
- [所属学協会] イタリア学会、2015～
- [所属学協会] ADI (Associazione degli Italianisti) 、2024～
- [所属学協会] Ricercatori italiani in Giappone (Italian Researchers in Japan) 、2023～
- [所属学協会] ASIKA、2023～

2 1 英語英米文学

教 授 後藤 和彦 GOTOU, Kazuhiko

1. 略歴

1979年4月 九州大学文学部 入学
1983年3月 同英語学英米文学専門課程 卒業
1983年4月 東京大学大学院人文科学研究科英語英米文学専攻修士課程 入学
1986年3月 同課程 修了
1986年4月 東京大学大学院人文科学研究科英語英米文学専攻博士課程 入学
1988年3月 同課程 中退
1988年4月 東京女子大学文理学部英米文学科 専任講師
1992年4月 同学科 助教授
1993年9月 ノースカロライナ大学チャペルヒル校 フルブライト交換研究員（～1994年9月）
1997年4月 立教大学文学部英米文学科 助教授
1999年4月 同学科 教授
2003年9月 ノースカロライナ大学チャペルヒル校 交換研究員（～2004年9月）
2007年4月 立教大学文学部文学科英米文学専修 教授
2017年4月 東京大学大学院人文社会系研究科 教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

アメリカ文学、特にアメリカ南部文学

b 研究課題

アメリカ南部文学の総体的特徴のひとつとして「戦後性」に着目し、ドイツの文化史家ウォルフガング・シヴェルプッシュが2002年に唱えた「敗北の文化」の概念を枠組みとして、日本の近代文学、あるいは所謂「戦後文学」との相対的比較を行う。

c 概要と自己評価

2005年に出版した著書『敗北と文学——アメリカ南部文学と日本近代文学』においてその概要を提示した、19世紀中葉の南北戦争以降の「敗北の文学」としてのアメリカ南部文学と、所謂「戦後文学」を含む日本近代文学の比較検討に関するおおまかな定式ないし視座にしたがって、対象となる両文学それぞれのより細かい時代区分における比較検証を継続的に行っている。

2022年度は科研基盤研究C「戦後的思考」の文学的ディレンマについて——アメリカ南部文学と日本近代文学の相違」の継続3年目にあたり、アメリカ南部文学における比較的新しい成果から John Kennedy Toole、Hamilton Basso ならびに Fred Chappell を取り上げるとともに、「南部文芸復興」期に活躍し、同時代最大の作家とやがて目されることになる William Faulkner よりも当時は高評価を得ながら、今ではほぼ忘れ去られた女性作家 Evelyn Scott の南北戦争年代記 *The Wave* に着目、その独特な構成から Faulkner の歴史観との、あるいは前記の現代作家たちのそれとの相違を検討し、南部文学における歴史観の変遷について再考した。

2023年度は上記科学研究の最終年度にあたり、*Love and Death in the American Novel* の Leslie Fiedler によると「最初の南部文学者」Edgar Allan Poe の詩、短編、中編小説をほぼ網羅的にとりあげ、同時に Poe 作品に寄せられてきた歴代の著名な批評論文にも目を配りながら、南北戦争以前に活躍したこの作家の南部性（ないしその限界）について検討し、引き続いて「南部文芸復興期」に短編小説の名手として名を馳せながら、Poe 同様、南部文学史上に位置づけることのやや困難な作家 Katherine Anne Porter の種々の短編ならびに唯一の長編 *Ship of Fools* を取り上げ、その歴史観の時代による制約について跡づける努力を行った。

22年度、23年度ともに、日本近代文学についても、近代文学草創期の作家に加え、いわゆる「戦後文学」についてもさらに知見を深めるよう意を用いたが、その結果、アメリカ南部文学および日本近代文学に通底する問題機制として「後発近代性」に行き当たり、近代文学全般に見られる近代への批判的眼差しが、主として敗戦という契機を経て深化屈折する事情に着目、同観点から研究の新しいフェーズの見取り図を描出し、令和6年度科学研究費助成事業

に新研究として申請したところ基盤研究Cとして採択されたので、24年度より5年間、これまでの研究成果を踏まえつつ研究を継続することになった。

d 研究業績

(1) 論文

[学術雑誌]「サムとリヴィ、「マーク・トウェイン」とエルマイラ」、後藤和彦、『フォークナー』第24号、pp.29-41、2022.4

(2) その他各種論著

[その他記事]「日本アメリカ文学会第61回全国大会に寄せて」、後藤和彦、『週刊読書人』3458号、p.6、2022.9

[書評]「Michael Gorra, The Saddest Words: William Faulkner's Civil War」、後藤和彦、『フォークナー』25号、pp.124-128、2023.4.30

(3) 共同研究・競争的資金等の研究課題

[科学研究費助成事業]「『小説知』概念をめぐる諸問題の調査、分析と統合」、諏訪部浩一 後藤和彦 阿部公彦 中嶋英樹 木村明日香、基盤研究(B):18H00652、日本学術振興会、東京大学、2018.4.1～2023.3.31

[科学研究費助成事業]「戦後の思考」の文学的ディレンマについて——アメリカ南部文学と近代日本文学の相違」、後藤和彦、基盤研究(C):20K00434、日本学術振興会、東京大学、2020.4.1～2024.3.31

e その他

(1) 学会・委員活動

[所属学協会] 日本アメリカ文学会、1988.4～

[所属学協会] 日本英文学会、1988.4～

[所属学協会] 日本ウィリアム・フォークナー協会、1998.4～

[所属学協会] 日本マーク・トウェイン協会、1999.4～

[所属学協会] Modern Language Associations、2007.4～

[委員歴] 日本アメリカ文学会、代議員、2005.4～、会長、2022.4～

[委員歴] 日本マーク・トウェイン協会、評議員、2018.4～

[委員歴] 日米教育交流振興財団（フルブライト記念財団）、審査委員長、2020.9～

教 授 新井 潤美 ARAI, Megumi

1. 略歴

1979年9月	国際基督教大学 教養学部 人文科学科 入学
1984年3月	国際基督教大学 教養学部 人文科学科 卒業
1984年4月	東京大学大学院 総合文化研究科 比較文学比較文化専攻 修士課程入学
1987年3月	東京大学大学院 総合文化研究科 比較文学比較文化専攻 修士課程修了
1987年4月	東京大学大学院 総合文化研究科 比較文学比較文化専攻 博士課程入学
1990年3月	東京大学大学院 総合文化研究科 比較文学比較文化専攻 博士課程単位取得満期退学
1990年4月	東邦大学薬学部 専任講師
1992年4月	中央大学法学部 専任講師
1993年4月	中央大学法学部 助教授
1998年4月	中央大学法学部 教授
2014年4月	上智大学文学部英文学科 教授
2016年3月	東京大学大学院 総合文化研究科 比較文学比較文化専攻博士号（学術）取得
2019年4月	東京大学大学院人文社会系研究科 教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

イギリス文学、比較文学

b 研究課題

イギリス文学、文化における「階級」の表象が研究の中心である。小説や演劇、詩、そして音楽や視覚芸術、映像作品、そしてアダプテーションも含む幅広いテキストにおける「階級」の概念とイメージ、ステレオタイプの考察と分析を行っている。

c 概要と自己評価

2022 年度から 2023 年度にかけては英国文学、文化における階級の表象、特に言葉と階級に関する表象を主に 18 世紀から 21 世紀までの文学テキスト、そして映画、ドラマといったポピュラーカルチャーの媒体をとりあげ、分析を行った。2023 年度にはイギリスの職業、階級と言葉の関係について研究を進め、その成果を NHK 出版の『ラジオビジネス英語』のコラムとして月一回のペースで発表した。2023 年度にはさらに、イギリス文学、文化における「ミドル・クラス」の表象を、「住居」、そして「ミドルブラウ文学」をキーワードとして進めていった。

d 研究業績

(1) 書籍出版物

[単著]『英語の階級——執事は「上流の英語」を話すのか?』(講談社、2022)

[単著]『執事とメイドの表裏 [増補版] ——イギリス文化における使用人のイメージ』(白水社、2023)

(2) その他各種論著

[書評・文献紹介等]「チャールズ・ディケンズ (原作)、アーマンド・イアヌッチ (監督)、映画『どん底作家の人生に幸あれ!』、『ディケンズ・フェロウシップ日本支部年報』第 44 号 (2021.1)、3-7 頁

[書評・文献紹介等]「英国王室と国民の関係」、「ダイアナ妃をめぐる人々」、ドキュメンタリー映画『プリンセス・ダイアナ』劇場用パンフレット、映画パンフレット (2022.9)

(3) 講演・口頭発表等

[シンポジウム・ワークショップパネル (指名)]「To Be the Hero of My Own Life”: Charles Dickens and the Portrait of the Author’, Roundtable Discussion 2, The Power of Words: Joint Symposium 2022 (U Tokyo-Cambridge Voices) (2022.9.24、東京大学)

[シンポジウム・ワークショップパネル (指名)]「摂政時代の女性/移動/旅——オースティン、バーニー、バーナード」、日本オースティン協会第 16 回大会シンポジウム (2023.6.24、お茶の水女子大学)

e 社会活動

(1) メディア報道

[新聞・雑誌]「‘Speaking Properly?’イギリスの職業と英語のイメージ イントロダクション」、『ラジオビジネス英語』2023 年 4 月号 (NHK 出版、2023.4)、112-15

[新聞・雑誌]「‘Speaking Properly?’イギリスの職業と英語のイメージ 執事」、『ラジオビジネス英語』2023 年 5 月号 (NHK 出版、2023.5)、108-11

[新聞・雑誌]「‘Speaking Properly?’イギリスの職業と英語のイメージ 乳母」、『ラジオビジネス英語』2023 年 6 月号 (NHK 出版、2023.6)、108-11

[新聞・雑誌]「‘Speaking Properly?’イギリスの職業と英語のイメージ 掃除婦」、『ラジオビジネス英語』2023 年 7 月号 (NHK 出版、2023.7)、108-11

[新聞・雑誌]「‘Speaking Properly?’イギリスの職業と英語のイメージ タクシー運転手」、『ラジオビジネス英語』2023 年 8 月号 (NHK 出版、2023.8)、108-11

[新聞・雑誌]「‘Speaking Properly?’イギリスの職業と英語のイメージ 警官」、『ラジオビジネス英語』2023 年 9 月号 (NHK 出版、2023.9)、108-11

[新聞・雑誌]「‘Speaking Properly?’イギリスの職業と英語のイメージ 法廷弁護士」、『ラジオビジネス英語』2023 年 10 月号 (NHK 出版、2023.10)、108-11

[新聞・雑誌]「‘Speaking Properly?’イギリスの職業と英語のイメージ 裁判官」、『ラジオビジネス英語』2023 年 11 月号 (NHK 出版、2023.11)、106-09

[新聞・雑誌]「‘Speaking Properly?’イギリスの職業と英語のイメージ ビンゴの進行役」、『ラジオビジネス英語』2023 年 12 月号 (NHK 出版、2023.12)、106-09

f その他

(1) 学会・委員活動

[所属学協会] 日本比較文学会、1987～

[所属学協会] 国際比較文学会、1987～

[所属学協会] 日本英文学会、1990～

[所属学協会] 日本オースティン協会、2006～
[所属学協会] 日本ヴィクトリア朝文化研究学会、2007～
[所属学協会] ディッケンズ・フェロウシップ日本支部、2008～
[委員歴] 日本比較文学会 全国選出理事、2023.6～
[委員歴] 日本英文学会関東支部、理事、2023.4～

教 授 **渡邊 明** WATANABE, Akira

1. 略歴

1987 年 3 月 東京大学文学部英語英米文学専修課程卒業
1989 年 3 月 東京大学大学院人文科学研究科英語英米文学専攻修士課程修了
1993 年 9 月 マサチューセッツ工科大学大学院言語・哲学科博士課程修了
 博士号 (Ph.D. in Linguistics) 取得
 博士論文 AGR-Based Case Theory and Its Interaction with the A-bar System
1994 年 4 月 神田外語大学外国語学部英米語学科専任講師
1997 年 4 月 同 大学院言語科学研究科助教授
1998 年 4 月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授
2016 年 4 月 東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

英語学／理論言語学

b 研究課題

程度表現の構造と意味

c 概要と自己評価

2022 年度は科研費基盤 (C) の課題「日英語の程度表現の微細構造および不定語のシステムとの関係」の 3 年目にあたる。前年度草稿をまとめた最小量表現に関する研究について、最小量述語が程度修飾語を伴わないで使われる時に主部名詞が指し示す個体が存在しないというニュアンスが生じうる原因の分析を改訂し、この形で出版された。ポイントは、最小量述語のスケールの上限がそもそも存在の否定を意味するという性質を活用するところにあり、前年度執筆の草稿では、この最小量述語の特性が生かされていなかった。

数詞関連でも、前年度草稿をまとめた数詞形態についての研究から派生して、類別詞や「の」なしで直接数詞と組み合わせることができる名詞のタイプについてより幅の広い調査を行った。あらたに考察の対象に加えた事例は、形態的にはとりたてて見るべきところのないものであるが、考察対象が増えることにより、どういった名詞がそもそも数詞との直接的結合を許すのか、という問題自体が重要な理論的課題として浮かび上がる結果となった。それを受けて、2023 年度は、まず、計量の単位としてはやや特殊な位置を占める集合名詞の統語特性を、擬似部分構造に焦点を絞って取り上げた。日本語においては、容器類をあらわす名詞が必ずしも数詞と直接結合しない形で擬似部分構造に生じうるのに対し、集合名詞は数詞との直接結合を擬似部分構造において要求することが判明し、日本英語学会の春季フォーラムの招待講演で発表した。そこでは、さらに、集合名詞が、日本語においても複数の個体を意味する名詞句とのみ結びつく点で英語と変わらないことを観察し、可算／非可算の区別の存在に関する議論にもつながるという問題の広がりを指摘した。これらの成果は、限られたスペースではあるが、議事録用の短い英語論文にまとめた。

前段の成果は名詞の下位分類の問題がその大枠となる研究領域に属するが、形容詞の下位分類の問題も当然のことながら存在する。2022 年度から、程度表現とどう関連するか探るべく、個人的味覚の述語と呼ばれる形容詞が英語でどのような特徴を示しているかを取り扱った研究をもとに、日本語についてもあらたな知見が得られないか模索してきた。2023 年度はその努力が実を結び、WH 疑問文への反応として主観的述語が客観的述語とは異なるディスコース

上の位置を占めることを発見した。Lasersohn 2005 の論文以来、個人的味覚の述語が無謬の見解不一致ともいうべきものを容易に許すことが広く知られるようになってきているが、近年では、この性質が主観的述語一般にも当てはまることが認識され始めている。こうした知見に基づき、Kuroda 2005 の論文において、日本語の助詞「は」が焦点解釈を受けることを示していると主張しているデータのうち、主観的述語を用いている例文は、無謬の見解不一致の観点から再考察を要するという結論を得た。この成果は、年度をこえて 2024 年 5 月の日本英語学会春季フォーラムで発表した。

d 研究業績

(1) 書籍出版物

[分担執筆] *Polarity-Sensitive Expressions: Comparisons between Japanese and Other Languages*, Akira Watanabe, “Degree Quantification, Minimum Quantity Predicates, and Polarity in Japanese”, De Gruyter Mouton、単行本（学術書）、2024、〈pp.117-144 担当〉

[分担執筆] *Handbook of Historical Japanese Linguistics*, Akira Watanabe, “Loss of Wh Movement”, De Gruyter Mouton、単行本（学術書）、2024、〈pp.341-364 担当〉

[分担執筆] 『分散形態論の新展開』、渡辺明、「数詞の形態」、開拓社、単行本（学術書）、2023.12.8、〈pp.160-186 担当〉

(2) 論文

[国際会議プロシーディングス] Akira Watanabe, “Japanese Noun Classes and Numerals,” *JELS* 41: 285-289, 2024

(3) 講演・口頭発表等

[口頭発表（招待・特別）] “Japanese Noun Classes and Numerals,” Akira Watanabe、The English Linguistic Society of Japan 16th International Spring Forum、青山学院大学（オンライン）、日本英語学会、2023.5.14

e その他

(1) 学術貢献活動

Journal of East Asian Linguistics（出版元 Springer）、編集委員、1996～

The Language Faculty and Beyond (John Benjamins)、advisory board member、2008～

Linguistic Inquiry（出版元 MIT Press）、編集委員、2012.8～

Acta Linguistica Academica、編集委員、2017.1～

教授 阿部 公彦 ABE, Masahiko

1. 略歴

1985 年 3 月	静岡県静岡聖光学院高等学校卒業
1985 年 4 月	東京大学教養学部文科三類入学
1989 年 3 月	同 文学部英語英米文学科専修課程卒業
1989 年 4 月	東京大学大学院人文科学研究科（英語英米文学専攻）入学
1992 年 3 月	同 修士課程修了・修士（文学）
1993 年 10 月	連合王国ケンブリッジ大学大学院博士課程入学（英米文学専攻）
1997 年 5 月	同博士課程修了 博士号取得（文学） タイトル：‘Wallace Stevens and the Aesthetic of Boredom’
1992 年 4 月	東京大学文学部英語英米文学科助手
1993 年 4 月	帝京大学文学部助手
1997 年 4 月	帝京大学文学部専任講師
2001 年 4 月	東京大学大学院人文社会系研究科助教授
2007 年 4 月	東京大学大学院人文社会系研究科准教授
2018 年 4 月	東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

英米文学

b 研究課題

英語圏の詩や小説の研究を中心とする。個々の作品の緻密な解釈と、作品を作品たらしめるメカニズムの解明をめざす。と同時に、原点に戻って、「なぜ詩でなければならないか?」「なぜ小説なのか?」といった素朴な疑問にも取り組みつづけている。詩や小説を自足的なジャンルとみなすのではなく、「問答形式」「ポライトネス」「言語運用能力」「事務能力」「冒険」といった周辺テーマとからめた研究を行う。

c 概要と自己評価

概要

2022 年度から 2023 年度にかけても、ひきつづき言語運用能力が文学作品のキャラクター造型や語りのスタンスの設定にどのような役割を果たしているかを探索しつつ、その成果を活かして、いわゆる文書主義や事務能力至上主義の文化の広がり、文学との関係について見解を公表し、『事務に踊る人々』や『文章は「形」から読む』といった書籍の刊行を行った。

自己評価

研究の中心は「言語運用能力」から「事務能力主義」に移行してきたが、ポライトネス研究も平行してすすめ、現在の研究の中心との接続を試みている。そのあたりの成果は、滝浦真人・椎名美智との共著「意地を張りあう人々『明暗』におけるイン／ポライトネス」や「ポライトネス理論と文学研究をつなぐ 志賀直哉『灰色の月』の「無愛想」の戦略」などで公表した（滝浦真人・椎名美智編『イン／ポライトネス からまる善意と悪意』所収）今後も協同研究のような形でネットワークを広げ、より広範にわかる対象をとりあげながら文学とポライトネスの理論の洗練をめざすことで、事務文書と文学との微妙な重なり合いを明らかにする予定である。

d 研究業績

(1) 書籍出版物

[単著] 阿部公彦、『事務に踊る人々』、講談社、392p、2023.9

[単著] 阿部公彦、『別冊 NHK100 分 de 名著 集中講義 夏目漱石』、NHK 出版、184p、2023.10

[単著] 阿部公彦、『文章は「形」から読む ことばの魔術と出合うために』、集英社、312p、2024.3

[監修] 阿部公彦・猪熊恵子、翻訳・藤村奈緒美『グレート・ノベルズ 世界を変えた小説』、エクスナレッジ、256p、2024.2

(2) 論文

[学術雑誌] 阿部公彦、「川端康成『雪国』と「寂しさ」の文法—「は」「が」の使い分けをめぐる—」、『日本認知言語学会論文集』24 号、465-474、https://2jcla.jp/japanese/data/JCLA24_Papers.pdf.

[国際会議プロシーディングス、講演録] Masahiko ABE, 'The Crisis of Allegory in J.M.Coetzee's Disgrace', The Power of Words: Joint Symposium 2022 (UTokyo-Cambridge Voices)、pp.19-21

[国際会議プロシーディングス、講演録] 阿部公彦、講演録「言葉と感染—語りから考える「伝染作用」」、『2022 年度武蔵野市寄附講座（成蹊教養カリキュラム（全学共通科目））「感染症と文学」（文学部）2022 年度』、pp.242-263

[論文集（書籍）内論文] 滝浦真人、椎名美智、阿部公彦「意地を張りあう人々『明暗』におけるイン／ポライトネス」、滝浦真人・椎名美智編『イン／ポライトネス からまる善意と悪意』、ひつじ書房、267p、2023.4、165-196

[論文集（書籍）内論文] 阿部公彦「ポライトネス理論と文学研究をつなぐ 志賀直哉『灰色の月』の「無愛想」の戦略」、同上、231-254

(3) その他各種論著

[書評、文献紹介等] 阿部公彦「西村さんのデコとボコ」、『本の雑誌』6 月号、53-54、2022.5

[エッセイ] 阿部公彦「英文学にデコピン 15 回 出淵先生の「まっスラ」」、『春風新聞』2022 年春夏号 29 号、p.8

[書評] 阿部公彦、古井由吉『連れ連れに文学を語る 古井由吉対談集成』（草思社）、『図書新聞』2022 年 6 月 11 日号、p.4、2022.6

[書評] 阿部公彦、西村賢太『雨滴は続く』（文藝春秋）、『東京新聞』2022 年 7 月 2 日朝刊、<https://www.tokyo-np.co.jp/article/187042>

[書評] 阿部公彦、年森瑛『N/A』（文藝春秋）、『共同通信』（各紙）2022 年 8 月 6 日（北日本新聞）など

[鼎談] 沼野恭子、松永美穂、阿部公彦「文学×ウクライナ侵略」、『読売新聞』2022 年 10 月 19 日朝刊、p.9、2022.10

[エッセイ] 阿部公彦「英文学にデコピン16回 上島建吉先生のヘンリー・ジェイムズ」、『春風新聞』2022 年秋冬号 30 号、p.8

- [書評] 阿部公彦、ジョナサン・スウィフト、柴田元幸訳『ガリバー旅行記』（朝日新聞出版）、『一冊の本』2022年11月2日配信、https://note.com/asahi_books/n/nfa6788c23ded
- [書評] 阿部公彦、アン・カーソン 小磯洋光訳『赤の自伝』（書肆侃侃房）、『共同通信』（各紙）2022年11月10日配信、<https://www.sanin-chuo.co.jp/articles/-/300227>
- [座談会] 田中和生、阿部公彦、富岡幸一郎、伊藤氏貴「令和の文学 その現在と未来 巻頭座談会」、『季刊文科』2022年冬季号、pp.6-30、2022.11
- [エッセイ] 阿部公彦「詩に落書きをする」、『Right Margin——詩の余白から生まれるもの』（英詩研究会10周年記念詩文集）、pp.9-18、2022.12
- [紹介文] 阿部公彦、絲山秋子『沖で待つ』、『Spin』3号（文藝2023年春季号増刊）、p.103
- [対談] 松永美穂、阿部公彦「村上春樹さん新作『街とその不確かな壁』を読む」、『共同通信』（各紙）、2022.5
<https://news.yahoo.co.jp/articles/39afeef767c051f542e4d0fff8ff8bf240dbbee1>
- [エッセイ] 阿部公彦「日本英文学会は今もうすぐ百周年らしいという恐ろしい事実をめぐって」、『週刊読書人』2023年5月12日号、p.6、2022.5、https://jinnet.dokushojin.com/blogs/news/elsj2023_veiw
- [エッセイ] 阿部公彦「英文学にデコピン 17回 大江さんのネクタイ」、『春風新聞』2023年春夏号31号、p.8、2023.5
- [エッセイ] 阿部公彦「世界の名作 噛んで味わう」、『読売新聞』2023年6月4日朝刊、p.9、2023.6
- [書評] 阿部公彦、町田康『口訳 古事記』（講談社）、『文学界』2023年7月号、pp.314-315、2023.6
- [鼎談] 滝浦真人、椎名美智、阿部公彦「言葉の新たな視点と地平『イン/ポライトネス からまる善意と悪意』（ひつじ書房）、『週刊読書人』2023年6月23日号、pp.1-2、2023.6
- [書評] 阿部公彦、田中慎弥『流れる島と海の怪物』（集英社）、『すばる』2023年8月号、pp.428-429、2023.7
- [書評] 阿部公彦、市川沙央『ハンチバック』（文藝春秋）、『共同通信』（各紙）、2023.7
- [エッセイ] 阿部公彦「事務こそ人生 現代社会で生き延びるための必須条件、「事務」と人間の関係をとことん考察する」、『群像ウェブ』2023年9月22日配信、2023.9、<https://gendai.media/articles/-/116433>
- [鼎談] 松永美穂、奈倉有里、阿部公彦、鼎談「ウクライナ侵略 今読むべき本」、『読売新聞』2023年10月8日朝刊、p.9、2023.10
- [エッセイ] 阿部公彦「生成AI時代の英語学習が目指すべきもの」、『文藝春秋オピニオン2024年の論点100』、pp.90-91、2023.11
- [エッセイ] 阿部公彦「英文学にデコピン 18回 英文学と事務能力」、『春風新聞』2023年秋冬号32号、p.8、2023.11
- [エッセイ] 阿部公彦、連載エッセイ「プロムナード」、『日本経済新聞』2024年1月4日～6月27日夕刊（24回）
- [解説] 阿部公彦『精選女性随筆集 武田百合子 川上弘美選』（文春文庫）、2024.1
- [講演要旨] 阿部公彦「Jane Eyre と美声の聞こえ方」、『Purple Heather: The Bronte Newsletter Kansai』23号、p.5、2024.1
- [書評] 阿部公彦、アブドゥルラザク・グルナ、栗飯原文子訳『楽園』（白水社）、『共同通信』（各紙）、2024.3
- [書評] 阿部公彦、荻部直『小林秀雄の謎を解く『考えるヒント』の精神史』（新潮選書）、『UP』3月号、pp.39-44、2024.3
- [その他記事] 阿部公彦「事務に踊る人々」、『群像』（月一回連載）、2022.5～2023.4（単著『事務に踊る人々』に収録）
- [その他記事] 阿部公彦「日本語「深」読みのススメ」、『kotoba』（季一回連載）、2021.3～2023.6（単著『文章は「形」から読む』に収録）

(4) 講演・口頭発表等

- [研究会報告] 「美声の聞こえ方」、第2回「魅惑の美声」研究会、成蹊大学「魅惑の美声」研究会、2022.5.29
- [パネリスト] 「「甘い言葉」は信用できませんか？ ～大学の教室で詩の甘美さと出会う方法（&その効用）」、日本英文学会関東支部2022年度夏季大会シンポジウム「詩とポピュラリティー：大学で身体に気づいてもらうための仲介」（司会）諏訪友亮、（講師）阿部公彦、（講師）原成吉、（講師）四元康祐、青山学院大学、2022.6.18
- [講演] 「学習者のための英語教育とは？」、新英語教育研究会「これからの英語教育を考える会2022」、国立オリンピック記念青少年総合センター棟、2022.6.19
- [インタビューアー（＝聞き手）] 「現代作家アーカイブ第25回「吉増剛造」、オンライン（東京大学 総合文化研究科）、飯田橋文学会・東京大学ヒューマニティーズセンター、東アジア藝文（げいもん）書院、共生のための国際哲学研究センター共催、2022.6.27、<https://hmc.u-tokyo.ac.jp/ja/news/2022/yoshimasu-gozo/>（期間限定動画公開）
- [講演] 「夏目漱石の英語事情」、公益財団法人 新宿未来創造財団 漱石山房記念館、2022.7.9
- [鼎談] 戸塚学×阿部公彦×勝田悠紀「ふらっと神保町：英語と読解力から見る読解力の神髄」、書店『PASSAGE by ALL REVIEWS（パサージュ バイ オールレビューズ）』＋オンライン（神保町 Passage）、2022.7.13

- [国際会議主催・パネリスト] ‘The Crisis of Allegory in J.M.Coetzee’s Disgrace’ ‘The Power of Words’ :Joint Symposium 2022 (UTokyo-Cambridge Voices) (東大ケンブリッジ共同シンポジウム)、東京大学文学部・法文二号館一番大教室、主催：東京大学英語英米文学研究室、共催：SGU (ケンブリッジチーム)、SGU (スーパーグローバル大学創成支援事業)、2022.9.24
- [公開講座]「言葉と感染——語りから考える「伝染作用」」、成蹊大学文学部、2023.1.19
- [国際会議発表] ‘Talking about Disgrace—How Sickness Works in Japanese Fiction’、明治大学・駿河台校舎、2023.1.21
- [発表]「なぜ詩は難しいのか」、新宮市・東京大学文学部、共催セミナー、和歌山県新宮市浮島体育館、2023.2.12
- [講座]「愛想のない文章とどう付き合うか——ボライトネスの視点からとらえる文学作品」、ラボ国際交流センター・東京言語研究所、2023.2.25
- [講演]『ジェイン・エア』と美声の聞こえ方」、ブロンテ協会関西支部、関西大学、2023.3.27
- [シンポジウムパネリスト]「事故に巻きこまれる女」、第95回日本英文学会全国大会シンポジウム、高桑晴子、井石哲也、松井優子、阿部公彦「逃亡・帰郷・事故・不動—女性移動(モビリティ)の真相」、関東学院大学・関内キャンパス、2023.5.20
- [シンポジウムパネリスト]「生成AIは本当に新しいのか?」、日本文藝家協会、Sola City Hall (お茶の水)、2023.8.21
- [シンポジウムパネリスト]『『雪国』と「寂しさ」の文法 ～「は」「が」の使い分けをめぐる」、第24回日本認知言語学会全国大会シンポジウム、野村益寛、大堀壽夫、澤田淳、阿部公彦『主観性を位置づける—まなざし、語り、コンポジション』、桜美林大学・町田キャンパス、2023.9.3
- [講演]「ことばの「味」とは何だろうか?」、東京大学×北見市、北海道北見市常呂町・常呂高等学校、2023.10.7
- [対談] 阿部公彦×飯間浩明『『事務に踊る人々』刊行記念スペシャルトーク～事務と人間を「言葉」からひもとく』、丸善・ジュンク堂書店池袋本店、2023.10.11
- [対談] 越前敏弥×阿部公彦「翻訳者と英文学者がとことん語る、名作英語の読み方」、青山ブックセンター本店、2023.10.24
- [シンポジウムパネリスト] Tokyo College Event: World Literature in Translation Book Launch: The Bankruptcy” (「世界文学と翻訳 「The Bankruptcy」 翻訳出版を記念して)、東京カレッジ、World Literature and Translation、オンライン&録画配信、
https://twitter.com/search?q=%E9%98%BF%E9%83%A8%E5%85%AC%E5%BD%A6&src=recent_search_click&f=live、2023.10.26
- [講演]「英語はなぜ難しいのか 日本語はなぜ難しいのか」、東京大学大学院人文社会系研究科・インド哲学仏教学研究科、鶴岡市丙申堂、2023.11.18
- [鼎談] 東京カレッジ「東大教授との対話シリーズ」、焙煎カフェ (東京大学本郷キャンパス内)、2023.12.8
- [国際会議発表] ‘Attention and Perception in Gulliver’s Travels,’ ‘Conference ‘CoSciLit in Asia Conference: Literature and Science in History: Japanese Reception and Reflection’、日本女子大学、2024.3.2、
https://www.jwu.ac.jp/univ/jwu_times/2023_1113_01.html

e 社会活動

(1) 社会貢献活動

- [出演] NHK BS プレミアム 「文豪温泉～名作の陰に名湯あり～」、2023年1月2日 (18:00-19:30) 放送、
<https://www.nhk-ondemand.jp/program/P202200319100000/>
- [出演] ABEMA Prime 「英検特集」、2023年10月7日 (21:05-21:35) 放送、
<https://www.youtube.com/watch?v=GkC6fLr-K1g>
- [出演] NHK BS プレミアム 「文豪温泉 II～名作の陰に名湯あり～」、2023年12月23日 (21:00-22:30) 放送、
<https://www.nhk-ondemand.jp/program/P202300375700000/>
- [取材協力・インタビュー] 阿部公彦「他者の注意を引きつけ結束を確認しあう無害の合い言葉」(特集「この現象は見逃せない! NEO かわいい」)、『Ginza』5月号、p.76、2022.5
- [取材協力・インタビュー] 阿部公彦「国際ブッカー賞26日発表 川上未映子さん『ヘブン』最終候補」、『産経新聞』2022年5月23日朝刊、2022.5、
<https://www.sankei.com/article/20220525-4ZFRCVXJWRP75ATDGTUR52XLY/>
- [取材協力・インタビュー] 阿部公彦、特集「英語4技能の今：外国語の試験をすることの難しさ」、『私塾界』8月号、pp.64-65、2022.7
- [取材協力・インタビュー] 阿部公彦「本に書き込んで理解度アップ! 名作にツッコむ勉強法」、『インタビュー Dream Navi』9月号、pp.78-79、2022.7

[取材協力・インタビュー] 阿部公彦「〈反対の署名運動も〉都立高入試に導入「英語スピーキングテスト」に“英語教育の専門家” 東大教授が指摘する問題点」、『文春オンライン』2022 年 10 月 1 日配信、2022.10、
https://news.yahoo.co.jp/articles/e47b977f89fc97c626cfc2b37e17780717948625?fbclid=IwAR2EO_2n6WZWAY8erOb_2KsC11OdIG4JTc7hPu7hC0NRkuiUop6EFU3TmpQ

[取材協力・インタビュー] 阿部公彦「女性」「非欧米圏」に注目 ノーベル文学賞 今夜発表」、『産経新聞』2022 年 10 月 6 日朝刊、2022.10、
<https://www.sankei.com/article/20221006-OBUTFIIMVJLONAXLQOG4RWASVM/>

[取材協力・インタビュー] 阿部公彦「「スピーキング」大学教授ら反対 都立高入試巡り／東京」(毎日新聞、朝日新聞、毎日新聞、テレビ朝日、赤旗その他)、2022.10.19～20 など
<https://mainichi.jp/articles/20221020/ddl/k13/100/007000c><https://digital.asahi.com/articles/ASQBM6VTCQBMOXIE01H.html>

[取材協力・インタビュー] 阿部公彦「スピーキングテストの闇」、『週刊文春』2022 年 10 月 20 日号、pp.128-130、2022.10

[取材協力・インタビュー] 阿部公彦「「私小説」再考の機運」、『読売新聞』、2023.4.18、p.31、
<https://www.yomiuri.co.jp/culture/20230417-OYT8T50161/>

[取材協力・インタビュー] 阿部公彦「事務 前向きに捉え直す」、『読売新聞』2023 年 11 月 11 日夕刊 (武田裕藝によるインタビュー)、2023.11

[取材協力・インタビュー] 阿部公彦「ホントーク 文豪・夏目漱石や森鴎外も事務作業に悩まされていた」(綿矢りさによるインタビュー)、『アサヒ芸能』2023 年 12 月 28 日号、pp.88-90、2023.12

[取材協力・インタビュー] 阿部公彦「くらせんの風景」現代照らす語りの強さ 語り継がれる「三島由紀夫」、『共同通信』(各紙) 2024 年 3 月 12 日配信

f その他

(1) 学会・委員活動

[委員歴] 一般財団法人日本英文学会 会長、2023.5～

[委員歴] 日本アメリカ文学会 東京支部評議員、2023.4～

[委員歴] 公益社団法人日本文藝家協会 理事、2022.6～

[委員歴] 芸術選奨文部科学大臣賞選考委員 (文学部門)、2022、2023

[委員歴] 日本学術会議連携会員、2021～

[委員歴] 東京大学出版会企画委員、2022、2023

[委員歴] 一般財団法人日本英文学会関東支部、理事、～2022、2023～

[委員歴] 三省堂高等学校国語教科書編集委員、2022、2023

[委員歴] 日本 T・S・エリオット協会委員、2022、2023

准教授 諏訪部 浩一 SUWABE, Koichi

1. 略歴

1994 年 3 月	上智大学文学部英文学科卒業
1997 年 3 月	東京大学大学院人文社会系研究科欧米系文化研究専攻修士課程修了
2002 年 3 月	東京大学大学院人文社会系研究科欧米系文化研究専攻博士課程単位取得退学
2004 年 4 月	東京学芸大学教育学部講師
2004 年 6 月	ニューヨーク州立大学バッファロー校大学院英文科博士課程修了
2006 年 4 月	東京学芸大学教育学部助教授
2007 年 4 月	東京学芸大学教育学部准教授
2007 年 10 月	東京大学大学院総合文化研究科准教授
2010 年 4 月	東京大学大学院人文社会系研究科准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

アメリカ文学

b 研究課題

モダニズム文学を中心とするアメリカ小説研究

c 概要と自己評価

主たる研究対象は、ウィリアム・フォークナーを中心としたアメリカにおけるモダニズム期の小説である。個々の作品を、大戦間という時代的文脈と小説の発展という美学的問題とあわせて、包括的に考察し、理解することを目標としている。そうした目的のために、近年においては「純文学」だけではなく、「大衆文学」と見なされている作品をも研究対象としてきた。2022～23年度は、フォークナーへの関心を発展させる一方、第2次世界大戦以降の現代小説を広く視野に収めた研究をまとめ、第2次世界大戦をまたいで活躍したノワール作家、レイモンド・チャンドラーについての研究をおこなった。

d 研究業績

(1) 書籍出版物

[単著]『薄れゆく境界線：現代アメリカ小説探訪』、諏訪部浩一、講談社、単行本（学術書）、2022.11、215p

[共著]『アメリカ文化入門 新版』、杉野健太郎 稲垣伸一 諏訪部浩一 西山隆行 山口和彦 下楠昌哉 荒川裕子 飯岡詩朗 大野美砂 倉科一希 舘健太郎 立入正之 中田崇 Lauer Joseph J.、三修社、教科書、2023.5、440p

[編者]『アメリカ文学入門 新版』、諏訪部浩一 稲垣伸一 杉野健太郎 山口和彦 新井景子、三修社、教科書、2023.10、462p

(2) 論文

[学術雑誌]「カーソン・マッカーズの小説について（第一回）」、諏訪部浩一、『フォークナー』25 巻、pp.70-76、2023.4

[学術雑誌]「チャンドラー講義 第一講 インTRODククション」、諏訪部浩一、『群像』78 巻 6 号、pp.182-193、2023.6

[学術雑誌]「チャンドラー講義 第二講 チャンドラー以前のチャンドラー——詩とエッセイ」、諏訪部浩一、『群像』78 巻 7 号、pp.458-469、2023.7

[学術雑誌]「チャンドラー講義 第三講 パルプ作家時代——短編小説」、諏訪部浩一、『群像』78 巻 8 号、pp.480-492、2023.8

[学術雑誌]「チャンドラー講義 第四講 マーロウ登場——『大いなる眠り』」、諏訪部浩一、『群像』78 巻 9 号、pp.494-507、2023.9

[学術雑誌]「チャンドラー講義 第五講 シリーズの始まり——『さよなら、愛しい人』」、諏訪部浩一、『群像』78 巻 10 号、pp.523-535、2023.10

[学術雑誌]「チャンドラー講義 第六講 弱者の味方——『高い窓』」、諏訪部浩一、『群像』78 巻 11 号、pp.398-410、2023.11

[学術雑誌]「チャンドラー講義 第七講 戦争の影——『水底の女』」、諏訪部浩一、『群像』78 巻 12 号、pp.442-453、2023.12

[学術雑誌]「チャンドラー講義 第八講 チャンドラー、ハリウッドへ行く——映画シナリオ」、諏訪部浩一、『群像』79 巻 1 号、pp.430-443、2024.1

[学術雑誌]「チャンドラー講義 第九講 依頼人のいない世界——『リトル・シスター』」、諏訪部浩一、『群像』79 巻 2 号、pp.450-463、2024.2

[学術雑誌]「チャンドラー講義 第十講 キャリアの集大成——『ロング・グッドバイ』①」、諏訪部浩一、『群像』79 巻 3 号、pp.466-479、2024.3

(3) その他各種論著

[総説・解説（商業誌）]「薄れゆく境界線——現代アメリカ小説探訪 ②チカーノ文学」、『群像』77 巻 4 号、pp.435-438、2022.4

[その他記事]「ユードーラ・ウェルティ「フォークナーの町で——〈南部文学フェスティバル〉基調講演」（翻訳）」、『文藝』61 巻 2 号、pp.240-249、2022.5

[総説・解説（商業誌）]「薄れゆく境界線——現代アメリカ小説探訪 ③カリブ系文学」、『群像』77 巻 5 号、pp.500-503、2022.5

[総説・解説（商業誌）]「薄れゆく境界線——現代アメリカ小説探訪 ④異境小説」、『群像』77 巻 6 号、pp.577-580、2022.6

[総説・解説(商業誌)]「薄れゆく境界線——現代アメリカ小説探訪 ㉕エコフィクション」、『群像』77 巻 7 号、pp.581-584、2022.7

[総説・解説(商業誌)]「薄れゆく境界線——現代アメリカ小説探訪 ㉖反近代小説」、『群像』77 巻 8 号、pp.252-255、2022.8

[総説・解説(その他)]「ウィリアム・ケント・クルーガー、宇佐川晶子訳『このやさしき大地』(解説)」、早川書房、pp.477-484、2022.10

[総説・解説(商業誌)]「自然と人間、小説は見つめる 米で活況の「エコフィクション」」、『朝日新聞』2023 年 2 月 22 日夕刊、pp.2-2、2023.2

[総説・解説(その他)]「難解さ生む奴隷制の歴史——ウィリアム・フォークナー『アブサロム、アブサロム!』」、沼野充義他編『文庫で読む 100 年の文学』、pp.106-107、2023.5

(4) 講演・口頭発表等

[口頭発表(招待・特別)]「薄れゆく境界線」をめぐって、九州アメリカ文学会第 67 回大会、2022.5.14

[公開講演、セミナー、チュートリアル、講習、講義等]「新しい女」という〈他者〉、公開講演会(宮城学院女子大学)、2022.7.22

[シンポジウム・ワークショップ パネル(指名)]「Kurt Vonnegut とベトナム戦争——Hocus Pocus を中心に(シンポジウム「Kurt Vonnegut 生誕 100 年——後期作品を再読する」)」、第 61 回日本アメリカ文学会全国大会、2022.10.9

[公開講演、セミナー、チュートリアル、講習、講義等]「ふたりのノーベル文学賞作家を読み解く——バルガス・ジョサ「ガルシア・マルケス論——神殺しの物語」」、インスティトゥト・セルバンテス東京、2023.4.28

(5) 共同研究・競争的資金等の研究課題

[科学研究費助成事業]「小説知 概念をめぐる諸問題の調査、分析と統合」、諏訪部浩一 後藤和彦 阿部公彦 中嶋英樹 木村明日香、基盤研究(B):18H00652、日本学術振興会、東京大学、2018.4~2023.3

e その他

(1) 非常勤講師

学習院大学、2012.4~

早稲田大学、2022.4~2022.9、2023.4~2023.9

広島大学、2023.8

(2) 学会・委員活動

[所属学協会] Modern Language Association、1998~

[所属学協会] 日本アメリカ文学会、1998~

[所属学協会] 日本ウィリアム・フォークナー協会、2003~

[所属学協会] 日本英文学会、2004~

[所属学協会] アメリカ学会、2008~

[委員歴] 日本アメリカ文学会東京支部、評議員、2005.4~、支部会報編集委員、2017.4~2023.3、支部長、2021.4~

[委員歴] 日本ウィリアム・フォークナー協会、編集委員、2014.4~、評議員、2015.10~

[委員歴] 日本アメリカ文学会、代議員、2017.4~

[委員歴] 日本英文学会関東支部、監事、2019.4~2023.3、理事、2023.4~

[委員歴] 日本アメリカ学会、評議員、2022.6~

[委員歴] 日本英文学会、評議員、2023.5~

1. 略歴

1997年4月	東京大学教養学部文科Ⅲ類入学
1999年4月	東京大学文学部言語文化学科英語英米文学専修課程進学
2001年3月	東京大学文学部言語文化学科英語英米文学専修課程卒業
2001年4月	東京大学大学院人文社会系研究科欧米系文化研究専攻英語英米文学専門分野修士課程入学
2003年3月	東京大学大学院人文社会系研究科欧米系文化研究専攻英語英米文学専門分野修士課程修了
2003年4月	東京大学大学院人文社会系研究科欧米系文化研究専攻英語英米文学専門分野博士課程入学
2004年8月	米国メリーランド大学大学院言語学科博士課程入学
2004年10月	東京大学大学院人文社会系研究科欧米系文化研究専攻英語英米文学専門分野博士課程休学
2007年9月	東京大学大学院人文社会系研究科欧米系文化研究専攻英語英米文学専門分野博士課程退学
2009年8月	米国メリーランド大学大学院言語学科博士課程修了 博士号 (Ph. D. in Linguistics) 取得
2010年4月	大東文化大学外国語学部英語学科 専任講師
2018年4月	大東文化大学外国語学部英語学科 准教授
2020年4月	東京大学大学院人文社会系研究科 准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

英語学／理論言語学

b 研究課題

焦点移動に関わる諸構文を主とした比較統語論研究

c 概要と自己評価

2022～2023年度は、研究分担者となっている科研費基盤研究(C)の研究課題「機能範疇を伴う依存関係の包括的研究：『構造』『意味』『語用』の観点から」の三年目及び最終年度にあたる。

2022年度には、2021年度までに行った、英語の「剥ぎ取り構文」(“John ate an apple. but not an orange.”のbut以下の部分のような省略形)や、日英語の「分裂文」(“It was an apple that John ate”や「ジョンが食べたのはりんごをだ」のように、文の一部を強調する構文)がそれぞれ焦点移動を含むという分析についてまとめ、大東文化大学の教員・院生・学部生を対象とするワークショップにて研究発表を行った。

2023年度には、科研費基盤研究(C)の研究代表者である小畑美貴氏と共同で、新規トピックについてポスター発表二件を行った。一件は、いわゆる「文」の範疇ラベルを、Chomsky (2013, 2015)の枠組みに基づく「素性のラベル」(<phi, phi>)ではなく、従来の時制辞句(Tense Phrase, TP)として扱うための理論的提案である。もう一件は、焦点移動とかき混ぜ移動(「りんごを、ジョンが食べた」のような、選択的な語順の変更)の削除された句からの抜き出しに関わる分析である。

2021年度に行った小畑氏との共同研究は、焦点移動及びそれに伴う「素性のラベル」(<foc, foc>)に関する分析であったため、2023年度の二件の学会発表はいずれもその先行研究と関連性がある。焦点構文に関する、より包括的な研究成果を得るための足掛かりとして、概ね順調な成果を得られたと自己評価する。

d 研究業績

(1) 論文

[国際会議プロシーディングス]「Labeling Algorithm Reconsidered: Eliminating the Label <phi, phi>」、小畑美貴、中尾千鶴、Miki Obata, Chizuru Nakao、The 25th Seoul International Conference on Generative Grammar 2023 The Syntax and Semantics of Polarity and Questions、pp.207-212、2023

(2) 講演・口頭発表等

[公開講演、セミナー、チュートリアル、講習、講義等]「日英語の削除構文と焦点移動について」、大東文化大学大学院外国語学研究科 英語学専攻ワークショップ、2022.10.11

[ポスター発表]「Labeling Algorithm Reconsidered: Eliminating the Label <phi, phi>」、Miki Obata, Chizuru Nakao、The 25th Seoul International Conference on Generative Grammar (SICOGG 25)、Dongguk University, Seoul、2023.8.14

[ポスター発表] 「Rule ordering is free: a case study of extraction out of ellipsis」、Chizuru Nakao, Miki Obata、Linguistic Society of America 2024 Annual Meeting、New York、2024.1.6

(3) 共同研究・競争的資金等の研究課題

「機能範疇を伴う依存関係の包括的研究: 「構造」「意味」「語用」の観点から」、小畑美貴、基盤研究 (C) : 20K00670、法政大学、2020.4.1～2024.3.1

e その他

(1) 非常勤講師

大東文化大学、2023.4.1～

(2) 学会・委員活動

[所属学協会] 日本言語学会、2003.4～

[所属学協会] 日本英語学会、2010.4～

[委員歴] 日本英語学会、編集委員、2021.7～2024.3

22 ドイツ語ドイツ文学

教授 **大宮 勘一郎** OMIYA, Kanichiro

1. 略歴

- 1984年3月 東京大学教養学部教養学科第2・ドイツの文化と社会卒業
- 1986年3月 東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻修士課程修了
- 1986年 ロータリー財団奨学生としてドイツ連邦共和国ミュンヘン大学留学（～1988年）
- 1991年4月 共立女子大学国際文化学部専任講師
- 1992年 ドイツ学術交流会（DAAD）奨学金によりドイツ連邦共和国マンハイム大学留学（～1993年）
- 1996年4月 共立女子大学国際文化学部助教授
- 2001年 アレクサンダー・フォン・フンボルト財団研究奨学金によりドイツ連邦共和国ベルリン自由大学研究滞在（～2002年）
- 2002年4月 慶應義塾大学文学部助教授
- 2005年4月 慶應義塾大学文学部教授
- 2007年4月 慶應義塾大学大学院文学研究科委員兼任
- 2011年4月 東京大学文学部・大学院人文社会系研究科教授（現職）
- 2013年9月 文化技術研究・メディア哲学国際研究コレク（IKKM）上級フェローとしてドイツ連邦共和国ヴァイマル市研究滞在（～2014年3月）
- 2023年2月 ベルリン自由大学エクセレンスクラス「テンポラル・コミュニティーズ」上級フェロー

2. 主な研究活動

a 専門分野

ドイツ近現代文学

b 研究課題

ヴェルター・ベンヤミン研究、ハインリッヒ・フォン・クライスト研究、ドイツ・メディア論研究

c 概要と自己評価

ベンヤミン研究は、同時代の作家フーゲー・フォン・ホーフマンスタールやエルンスト・ユンガーらの、いわゆる保守革命運動との関係を考察する作業を進めている。科研費による研究プロジェクトに関しては、「情動と技術の人間学的考察」（2013～2015年度）、「『抗争』言説の再検討（ドイツ文学の場合）」（2016～18年度）に引き続き、「ドイツ文芸における『古典』概念の再検討」（2019年度～）を進め、内外の研究者との議論を行っており、「国語」の規範性とその解体に関する論文「『国語』形成の一断面」を共編著『ノモスとしての言語』に発表した。クライスト研究としては、編著『ハインリッヒ・フォン・クライスト―「政治的なもの」をめぐる文学』（2020.3）を上梓し、導入、論文と重要論考の翻訳を掲載したが、「双務的秩序」の喪失と回復の試みとしてドイツ文学を読み直す試みは継続中である。また、ドイツ・メディア論の重要著作であるフリードリヒ・キットラー『書き取りシステム 1800・1900』を翻訳し上梓したのについで、メディア論関係の論考を複数発表した。さらに、近代文芸における「供犠」の変容をテーマとした国際学会（ハーゲン大学主催）に基調報告者として招待され、二度発表を行なっている。上記の研究文脈の中で、ゲーテの思想史的位置づけを再検討する作業も進めており、その一環として、いわゆる「ヴァイマル古典」時代の戯曲『タウリスのイフィゲーニエ』の翻訳を、『若きヴェルターの悩み』の改訳と併せ、解題とともに上梓した。

d 研究業績

(1) 書籍出版物

[単訳] ヨハン・ヴォルフガング・ゲーテ『若きヴェルターの悩み／タウリスのイフィゲーニエ』、401p、2022

[共著][共編者]『ドイツ語が拓く地平 ノモスとしての言語』3巻、2022

(2) 論文

[学術雑誌][国際会議プロシーディングス]「Die Aufgabe der Übersetzung im Zeitalter der Globalisierung.」、Tagungsband der Asiatischen Germanistentagung 2016 in Seoul “Germanistik in Zeiten des großen Wandels – Tradition, Identität, Orientierung“. Bd. 1, Jahrbuch für Internationale Germanistik Reihe A. Bd. 145, pp. 51-67, 2022

[学術雑誌][国際会議プロシーディングス]「Die Sprache der Toten. : die historische Dimension des “Habitus“-Begriffs und die “Pathosformel“ bei Aby Warburg」、大宮勘一郎、『藝文研究』、125 巻、pp.151 (34)-170 (15)、2023

[論文集（書籍）内論文]「『国語』形成の一断面」、『ドイツ語が拓く地平』3 巻「ノモスとしての言語」、pp.7-39、2022

[論文集（書籍）内論文]「メディア論」、『批評理論を学ぶ人のために』、pp.247-259、2023

[論文集（書籍）内論文]「フリードリヒ・キットラー ―メディアの系譜学と技術への問い」、『メディア論の冒険者たち』、pp.186-201、2023

[論文集（書籍）内論文]「遅刻への準備」、『現代思想』51 巻 17 号、pp.59-67、2024

(3) その他各種論著

[書評] ヘルタ・ミュラー『呼び出し』（小黒康正、高村俊典訳、2022 年）、『週刊読者人』、2022

[書評] ドン・デリーロ『ゼロ K』（日吉信貴訳、2023 年）、『週刊読者人』、2023

(4) 講演・口頭発表等

[口頭発表（招待・特別）]「Begnadete Helden oder ausgebliebene Opfer. Candide.Egmont.Prinz von Homburg und der Offizier in der Strafkolonie zwischen Rettung und Entehrung des Opfers」、国際ワークショップ“Opferdramaturgie und Viktimologie der Geschlechter in Prosa und Film (19. Jhd. bis zur Gegenwart)“、ハーゲン放送大学、2023

[口頭発表（招待・特別）]「Der Blick des Dings und die Para-Existenz des Menschen」、国際コロキウム “Kommende Dinge“. Kolloquium zum 60. Geburtstag von Prof. Dr. Uwe Steiner、ハーゲン放送大学主催、オンライン参加、2023

[口頭発表（招待・特別）]「ヴァルター・ベンヤミン ベルリンの青年時代」、東京大学駒場キャンパス、2023

(5) 共同研究・競争的資金等の研究課題

「ドイツ文芸における「古典」概念の再検討」、大宮勘一郎、基盤研究 (C) : 19K00492、東京大学、2019.4.1～2023.3.1

教授 宮田 眞治 MIYATA, Shinji

1. 略歴

1987 年 3 月	京都大学文学部卒業（文学士）
1989 年 3 月	京都大学大学院文学研究科修士課程（ドイツ語学・ドイツ文学専攻）修了（文学修士）
1990 年 3 月	京都大学大学院文学研究科博士後期課程（ドイツ語学・ドイツ文学専攻）退学
1990 年 4 月	神戸大学教養部助手
1991 年 10 月	神戸大学教養部講師
1992 年 10 月	神戸大学文学部講師
2000 年 10 月	神戸大学文学部助教授
2000 年 4 月	文部省在外研究員としてドイツベルリン自由大学に留学（2001 年 2 月まで）
2007 年 4 月	東京大学大学院人文社会系研究科准教授
2018 年 4 月	東京大学大学院人文社会系研究科教授（現職）

2. 主な研究活動

a 専門分野

近代ドイツ語圏文学

b 研究課題

18 世紀の文学と思想が研究の中心にある。もともと初期ロマン主義研究から出発し、ノヴァーリスを中心に仕事を進めてきた。とくに超越論哲学および自然科学との関係において初期ロマン主義が展開した独自の表現技法と、その背景にある言語観と芸術観が興味を中心にあった。また、その問題意識を継承する 20 世紀の文学者や思想家の系譜も研究の対象となった。現在は、啓蒙期の文学と思想を、ロマン主義の前史という観点に限定されことなく研究している。また、18 世紀以後、ドイツ語圏にあって、自然科学者であり、あるいは自然科学研究から出発しつつ、文学者であった人ターハラー、リヒテンベルク、ノヴァーリス、アルニムから現代にいたるまでの営みを〈実験者の文学〉という観点から跡付ける作業を進めている。同時に 18 世紀から 19 世紀初頭における古典古代の受容にも関心があり、現在はヴィーラントを中心に検討している。

c 概要と自己評価

ドイツ文学の研究に携わった当初に集中的に研究対象としていたノヴァーリスと、『リヒテンベルクの雑記帳』刊行後も研究を続けている G.Ch.リヒテンベルク (1742-1799) について、それぞれ研究発表と論文等の執筆を行った。また、ノヴァーリスにも大きな影響を与えたドイツ近世・近代の言語論について概括的な叙述を試みたが、ノヴァーリスやリヒテンベルクの言語観を検討する際にはこうした観点が不可欠であると改めて確認することとなった。

ドイツロマン主義・啓蒙主義をさまざまなコンテクストにおいて検討するという年来の研究方針、および 18 世紀ドイツにおける Antike 受容の再検討というプロジェクトは継続中であり、Ch. M. ヴィーラント (1733-1813) についての九州大学文学部での集中講義は非常に有意義なものとなった。

d 研究業績

(1) 論文

「〈自然〉の諸相——近世・近代ドイツ言語論における〈自然〉〈起源〉〈超越者〉の関係をめぐる」、『ドイツ語が拓く地平 ノモスとしての言語』3 巻、大宮勘一郎・田中慎 (編)、ひつじ書房、2022、pp.67-93

Shinji Miyata: „Durch das Planlose Umherstreifen durch die planlosen Streifzüge der Phantasie wird nicht selten das Wild aufgejagt.”

Einige Bemerkungen zum Phantastischen bei Lichtenberg. In: Japanische Gesellschaft für Germanistik (Hg.) *Phantastische Literatur* (Akten des JGG-Kulturseminars Band 2). München (Iudicium). 2023. S.33-47

(2) 翻訳

ノヴァーリス:「フィヒテ研究」抜粋 (翻訳・注釈・解説) (2)、『多様体』第 5 号、月曜社、2023、pp. iii~xxxiii.

(3) その他 (事典の項目執筆など)

「ロマン主義の文学と宗教 (ドイツ語圏)」、『キリスト教文化事典』、キリスト教文化事典編集委員会編、丸善出版、2022、pp.222-223

「リヒテンベルク」、『啓蒙思想の百科事典』、啓蒙思想の百科事典編集委員会編、丸善出版、2023、pp.260-261

「ノヴァーリス生誕 250 年」、『ひろの』、公益財団法人ドイツ語学文学振興会、第 62 号、2022、pp.24-25

(4) 口頭発表

二つの「自然に対する矛盾した態度」——ノヴァーリスとリヒテンベルク—— (シンポジウム「ノヴァーリスと」世界の意味) における発表、第 56 回ゲーテ自然科学の集い、2023.11.3、於神戸大学文学部)

e 社会活動

(1) 学術貢献活動

日本独文学会・DAAD 賞、選考委員長、2023

f その他

(1) 非常勤講師

九州大学文学部 (2022. 12、集中)、中央大学経済学部

(2) 学会・委員活動

日本独文学会監事 (～2023. 6)、日本シェリング協会理事 (2008～)

准教授 山本 潤 YAMAMOTO, Jun

1. 略歴

1995 年 4 月	東京大学文科Ⅲ類入学
1999 年 3 月	東京大学文学部言語文化学科ドイツ語ドイツ文学専修課程卒業
1999 年 4 月	東京大学大学院人文社会系研究科欧米系文化研究専攻ドイツ語ドイツ文学専門分野修士課程入学
2001 年 3 月	東京大学大学院人文社会系研究科欧米系文化研究専攻ドイツ語ドイツ文学専門分野修士課程修了
2001 年 4 月	東京大学大学院人文社会系研究科欧米系文化研究専攻ドイツ語ドイツ文学専門分野博士課程進学
2003 年 10 月	ドイツ学術交流会 (DAAD) 奨学生としてルーートヴィヒ・マクシミリアン大学 (ドイツ・ミュンヘン) に留学 (～2006 年 3 月)

2009 年 3 月	東京大学大学院人文社会系研究科欧米系文化研究専攻ドイツ語ドイツ文学専門分野博士課程単位 取得満期退学
2010 年 4 月	博士（文学）取得（東京大学大学院人文社会系研究科）
2011 年 4 月	首都大学東京都市教養学部 准教授
2018 年 4 月	東京大学大学院人文社会系研究科 准教授（現職）

2. 主な研究活動

a 専門分野

ドイツ中世文学

b 研究課題

口伝の英雄詩を素材とし、ドイツ語圏俗語文芸の初の興隆期とされる 12 世紀末から 13 世紀前半にかけて詩作された叙事文学を主たる研究対象としている。声の文化の領域における記憶伝承を担っていた英雄詩の英雄叙事詩化による記憶の変容の問題を出発点に、匿名性を基本とする英雄詩／英雄叙事詩の語り手の問題や（科研費若手研究「メディアの転換と記憶の変容—中世英雄叙事文学を対象に—」、2012～14 年度）、英雄叙事詩の歴史性の問題（同「作者性の諸相—中世ドイツ英雄叙事詩における歴史性と虚構性の問題」、2016～19 年度）に取り組んできた。また、中世文芸のアクチュアリティの問題も考察の射程に入れ、現在中世後期における英雄叙事詩の変容をはじめ、近代以降の中世文芸受容史を主たる研究対象（科研費基盤研究（C）「ドイツ英雄詩の受容史研究—英雄詩素材の歴史的アクチュアリティ」、2020～24 年度）としている。

c 概要と自己評価

2022 年度にはオンラインにて第 5 回戦後オーストリア文学コロキウムに登壇し、目下取り組んでいる近現代における中世文芸受容研究の一環として、20 世紀オーストリアの作家マックス・メルによる『ニーベルンゲンの歌』の受容的作品に浮かび上がる、第二次世界大戦の敗戦を敷居としたオーストリアのアイデンティティの変容を題材とした口頭発表を行った。加えて、明治学院大学で行われたシンポジウム、「トランスレーション・アダプテーション・インターテクスチュアリティ 2023「古典を考える」」では、特に 1920 年代に制作されたフリッツ・ラングによる映画『ニーベルンゲン』に焦点を当て、そこに戦間期のナショナリズムのありようを読み解いた。これらの口頭発表をもとに、2023 年度には複数の論考を書籍『モルブス・アウストリアクス：オーストリア文学をめぐる 16 章』内論文として公表した他、以前から取り組んでいた中世盛期から末期にかけての英雄詩における歴史性の問題や、2020 年度に口頭発表を行った中世俗語文芸における感情表現に関する論考を、それぞれ学術誌に掲載した。この 2 年間、口頭発表した成果を複数の論文にまとめ公開することが出来たのは大きな成果である。現在、さらなる研究成果の論文としての公開を準備中である。

d 研究業績

(1) 書籍出版物

[共著] 前田佳一（編著）、『モルブス・アウストリアクス：オーストリア文学をめぐる 16 章』、2023.5

(2) 論文

[学術雑誌] Historizität der mittelhochdeutschen Heldendichtung – Eine Analyse aus der Perspektive des historiographischen Geschichtsverständnisses. Neue Beiträge zur Germanistik Nr. 165. 2023.3

[学術雑誌] 「怒り zom」と「敵意 haz」—中世叙事文学に見る感情の表象するもの、『西洋中世研究』第 15 号、16-32 頁、2023.12

[論文集（書籍）内論文] 「ドイツ」国民叙事詩？—オーストリア文学史叙述における『ニーベルンゲンの歌』、『モルブス・アウストリアクス：オーストリア文学をめぐる 16 章』、前田佳一（編）、法政大学出版局、33-55 頁、2023.5

[論文集（書籍）内論文] 「敷居に立つニーベルンゲン—マックス・メルによる二部作『ニーベルンク族の災厄』、『モルブス・アウストリアクス：オーストリア文学をめぐる 16 章』、前田佳一（編）、法政大学出版局、163-186 頁、2023.5

(3) 講演・口頭発表等

[シンポジウム・ワークショップパネル（指名）] 「敷居に立つニーベルンゲン—マックス・メルによる二部作『ニーベルンク族の災厄』」、第 5 回戦後オーストリア文学コロキウム、オンライン、2022.11

[シンポジウム・ワークショップパネル（指名）] 「ドイツ・オーストリア史と『ニーベルンゲンの歌』—近代以降の受容と再作品化」、トランスレーション・アダプテーション・インターテクスチュアリティ 2023「古典を考える」、明治学院大学、2023.3

e その他

(1) 非常勤講師

東京都立大学「ドイツ語学特殊講義」

明治大学「ドイツ文学特殊研究 A/B」

お茶の水女子大学「ヨーロッパ言語文化論」

(2) 学会・委員活動

[所属学協会] 日本独文学会、[委員歴] 機関誌常任理事、～2023.6

[所属学協会] 西洋中世学会、[委員歴] 常任委員

准教授 **ケプラー田崎 シュテファン** KEPPLER-TASAKI, Stefan

1. 略歴

1993 年 10 月 ヴェルツブルク大学文学部入学
1999 年 9 月 同修士課程修了
1999 年 10 月 同博士課程入学
2001 年 10 月 同大学文学部 非常勤講師
2002 年 10 月 同大学文学部 助教
2004 年 12 月 同博士課程修了 学位 (Dr. phil.) 取得
2005 年 10 月 ベルリン自由大学文学部 助教
2008 年 10 月 同 准教授
2012 年 10 月 東京大学大学院人文社会系研究科・文学部 准教授 (現在にいたる)

2. 主な研究活動

a 専門分野

ドイツ近現代文学

b 研究課題

ゲーテ研究、トーマス・マン研究、インターメディア研究

c 概要と自己評価

ゲーテ研究に関しては、ゲーテの小説『若きウェルテルの悩み』のアメリカと日本における受容に焦点を当ててさらに研究を深化させた。このテーマについては、ベルリン・フンボルト大学で講演を行い、さらに、ドイツ・ヴェッツラー市のウェルテル 250 年記念展のカタログに論文を寄稿した。トーマス・マン研究に関しては、マンがアメリカに亡命していた時期の住環境と暮らしの文化に焦点を当ててさらに研究を進めた。このテーマでカリフォルニア大学デービス校にて講演を行い、今後発行予定の単著本の一部としても原稿執筆を継続している。インターメディア研究としては、『Handbuch Literatur & Film』（文学と映画のハンドブック）の共同編集を行い、そのうちの 4 章（約 120 ページ）を担当した。科研費プロジェクト「ドイツ国外アーティスト・イン・レジデンスから生まれるグローバル文学」として、2022 年と 2023 年に集中的して同テーマに関するアンソロジーの出版に取り組むことができ、この本（220 ページ）は 2024 年に De Gruyter 出版から刊行されるにいった。

d 研究業績

(1) 書籍出版物

[共著] 『Handbuch Literatur & Film』、Matthias Bauer, Stefan Keppler-Tasaki, De Gruyter, 2023.11

(2) その他各種論著

「Alfred Döblin - "bold.new.energizing"」、Stefan Keppler-Tasaki, Thomas Mann's L.A.: Stories from Exile 1941-1952, pp.114-115, 2022.7

[書評, 文献紹介等] 「[Review] Stanley Corngold <Weimar in Princeton: Thomas Mann and the Kahler Circle.>」、Stefan Keppler-Tasaki, Monatshefte für deutschsprachige Literatur und Kultur, 115 巻.1 号, pp.128-131, 2023.3

「Einleitung」、Stefan Keppler-Tasaki、Handbuch Literatur & Film、pp.1-17、2023.11

「Filmisches Schreiben und Schreiben für den Film」、Stefan Keppler-Tasaki、Handbuch Literatur & Film、pp.403-438、2023.11

「Literarische Filmreflexion I.」、Stefan Keppler-Tasaki、Handbuch Literatur & Film、pp.332-366、2023.11

「Literarische Filmreflexion II.」、Stefan Keppler-Tasaki、Handbuch Literatur & Film、pp.367-402、2023.11

(3) 講演・口頭発表等

[口頭発表(基調)]「Einführung: 8. Deutsch-Asiatischer Studientag Literatur- und Geisteswissenschaften」、Stefan Keppler-Tasaki、8. Deutsch-Asiatischer Studientag Literatur- und Geisteswissenschaften、Humboldt-Universität zu Berlin、2022.12.16

[公開講演、セミナー、チュートリアル、講習、講義等]「Wohnen als Kunstform. Das Thomas Mann House in Pacific Palisades」、Stefan Keppler-Tasaki、University of California.Davis、University of California.Davis、2023.3.10

[シンポジウム・ワークショップ パネル(指名)]「Einleitung」、Stefan Keppler-Tasaki、9. Deutsch-Asiatischer Studientag Literatur- und Geisteswissenschaften、Mori-Ōgai-Gedenkstätte (Humboldt-Universität zu Berlin)、Friedrich Schlegel Graduiertenschule für literaturwissenschaftliche Studien (Freie Universität Berlin) und der Mori-Ōgai-Gedenkstätte (Humboldt-Universität zu Berlin)、2023.12.15

「Koproduktion und Kontrast. Goethes "Werther" in den USA und Japan」、Keppler-Tasaki Stefan、Koproduktion und Kontrast. Goethes "Werther" in den USA und Japan、森鷗外記念館(ベルリン)、Mori-Ōgai-Gedenkstätte (Humboldt-Universität zu Berlin)、2024.2.15

(4) 共同研究・競争的資金等の研究課題

「Global Literature from German Artist Residencies Abroad」、ケプラー-タサキ シュテファン、基盤研究(C):22K00444、東京大学、2022.4.1～2025.3.1

e 社会活動

(1) 学術貢献活動

[企画立案・運営等]「8. Deutsch-Asiatischer Studientag Literatur- und Geisteswissenschaften」、森鷗外記念館 ベルリン、2022.12.16

[企画立案・運営等]「9. Deutsch-Asiatischer Studientag Literatur- und Geisteswissenschaften」、森鷗外記念館 ベルリン、2023.12.15

(2) メディア報道

[インターネットメディア]「Goethe in Kalifornien」「Alles Goethe」、2023.1.22

[インターネットメディア]「Der Mythologe Wertheims - Wolf Wiechert zum 85. Geburtstag」、Konigshausen & Neumann Verlag「Konigshausen & Neumann Blog」、2023.3.31

f その他

(1) 学会・委員活動

[所属学協会] ワイマール国際ゲーテ協会会員

[所属学協会] 国際アルフレート・デブリーネ協会会員

[委員歴] ドイツ学術奨学財団 (Studienstiftung des deutschen Volkes / German Academic Scholarship Foundation) オンブズパーソン

[委員歴] ベルリン自由大学クラスター・オブ・エクセレンス「Temporal Communities: Doing Literature in a Global Perspective」国際運営委員会メンバー

[委員歴] カリフォルニア大学デービス校人文科学センター・プロジェクト「Migration and Aesthetics」委員会メンバー

23 スラヴ語スラヴ文学

教授 楯岡 求美 TATEOKA, Kumi

1. 略歴

1987年4月 東京大学教養学部文科Ⅲ類入学
1990年10月 第二回ソ連給費留学生としてロシア国立レニングラード大学留学（～1992年9月）
1993年3月 東京大学教養学部教養学科第二地域文化学科（ロシアの文化と社会）卒業
1996年3月 東京大学大学院人文社会系研究科（スラヴ語スラヴ文学）修士課程修了
1996年4月 東京大学大学院人文社会系研究科（スラヴ語スラヴ文学）博士課程進学
1999年9月 東京大学大学院人文社会系研究科（スラヴ語スラヴ文学）博士課程単位取得退学
1999年10月 北海道大学スラブ研究センター・COE 講師
2000年4月 神戸大学国際文化学部・講師
2001年4月 神戸大学国際文化学部・助教授
2001年8月 ロシア国立人文大学人文歴史学部（モスクワ）にて研修（文部省派遣若手在外研修 ～2002年4月）
2003年1月 学位・博士（文学）取得
2007年4月 神戸大学大学院国際文化学研究科・准教授
2010年8月 イギリスス・ケンブリッジ大学ウルフソン・コレッジおよびロシア国立人文大学人文歴史学部にて研修（神戸大学若手教員長期海外派遣プログラム ～2011年4月）
2016年4月 東京大学大学院人文社会系研究科（スラヴ語スラヴ文学）准教授
2022年4月 東京大学大学院人文社会系研究科（スラヴ語スラヴ文学）教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

ロシア・ソ連の文学、ロシア・ソ連文化論、ロシア・ソ連演劇史。

b 研究課題

主としてロシア語による文学・演劇・映画を素材として、芸術表現の特質と可能性、時代や社会による価値体系の変容や人間関係の諸相を明らかにすることを目的とする。

c 概要と自己評価

ロシア・ソ連では、文学と共に演劇・映画がメディアとしても重要な社会的機能を担っている。これらのジャンルの創作が歴史的および現在の社会においてどのように受容されているのかを、笑い話や起源などの民衆文化も含め、現地調査と文献調査を平行して研究を行っている。近年の研究関心は翻案研究とロシア語をドミナントとするソ連文化形成との二つの領域にわたる。

ポストモダン以降の文化潮流においては、狭義の意味での作品のオリジナリティを論じることは難しくなっている。個別創作者の独創性や表現力がどのように評価されるのかを、文学と演劇・映画といった異なるメディアによる翻案作品を比較検証する。感情など視覚化言語化の難しいものが、メディアの変更にともない、どのようなメカニズムで情報が付与され／欠落するものに注目することで、演劇や文学それぞれのジャンル固有の表現特性の有無について考察を行っている。

さらに、ロシア連邦外の旧ソ連圏におけるロシア語文化の形成プロセスの再検討とポストソ連期における継承と離反の現況についての研究を進めている。特にコーカサス地域出身の創作者の活動に注目し、従来は画一的に中心から周縁へと一方的に伝達されたと考えられてきたソ連文化の多様性について再検討することを目指し、現地調査および文献調査をベースとした研究を行っている。

これらの成果は国内外の研究会、シンポジウムの企画し、参加することで国際的に専門の研究者間での交流を図り、論文及び共著書等において刊行している。現場で活動する創作者とも研究成果の共有をはかるために上映や講演の企画を実施し、学生にも授業等の場において成果を還元している。

d 研究業績

(1) 書籍出版物

[分担執筆]『ロシア文学からの旅:交錯する人と言葉(シリーズ・世界の文学をひらく 6)』、中村唯史 坂庭淳史 小椋彩編、「アレクサンドル・オストロフスキー『持参金の無い娘』」(pp.54-55)、「アントン・チェーホフ『三人姉妹』」(pp.64-65)、ミネルヴァ書房、2022.5

(2) 論文

[学術雑誌] Vladivostok as a Meeting Point between West and East at the Beginning of the 20th Century (Around Years of Siberian Investigation) .in Shin'ichi Murata.Stefano Aloe (edited by).The Reception of East Slavic Literatures in the West and the East.published by Firenze University Press.2023.12.pp.173-184. ISBN 9791221502381.DOI 10.36253/979-12-215-0238-1

[学術雑誌]「シベリア出兵前後のウラジオストクの文化多様性」、『植民地文化研究 資料と分析』21号、2023、pp.16-28

[大学研究機関紀要]「過去を創る 映画『Jero』(レト)(2018年、セレブレンニコフ監督)に描かれた青春群像」、東京大学大学院人文社会系研究科スラヴ語スラヴ文学教室論集『SLAVISTIKA』36(特集「ソ連という時代」)、2022.5、pp.71-84

(3) その他各種論著

[総説・解説/講演資料等]「特集に寄せて」、東京大学大学院人文社会系研究科スラヴ語スラヴ文学教室論集『SLAVISTIKA』36(特集「ソ連という時代」)、2022.5、pp.1-4

[総説・解説/講演資料等]An introduction to GOOD-BYE written by Kumi Tateoka.Professor of The University of Tokyo “Theatre as dialogue: On the performance of Osamu Dazai's "Good Bye" by theatre Chiten (ダイアログとしての演劇 太宰治『グッド・バイ』の公演に寄せて)” 劇団地点 Comet Theatre (London)公演パンフレット、2024.3.5~9、pp.20-25、(in English pp.20-22、in Japanese pp.23-25)

(4) 講演・口頭発表等

[口頭発表(招待・特別)]「シベリア出兵前後のウラジオストクの文化多様性について」、『植民地文化学会』、於：早稲田大学、2022.7.30

[口頭発表(一般)]“Vladivostok as a Meeting Point between West and East at the beginning of the 20th Century”.International «Conference The Reception of East Slavic Literatures in the West and the East».Aula Mario Baratto.University of Venice.2nd March 2023. (In English)

(5) 共同研究・競争的資金等の研究課題

[科学研究費助成事業]「デジタル映像アーカイブの未来研究」、ワダ・マルシアーノ ミツヨ、楢岡求美他、基盤研究(B)：23K20073、日本学術振興会、京都大学、2020.4~2025.3(分担は2024.4~2025.3)

[科学研究費助成事業]「多言語多文化芸術運動としてのトビリシ・アヴアンギャルドの歴史的資料調査と考察」、増本浩子、楢岡求美他、国際共同研究加速基金(国際共同研究強化(B))：18KK0008、日本学術振興会、神戸大学、2018.4~2024.3

[科学研究費助成事業]「モスクワ・ベルリンを結ぶ革新的芸術理念—セルゲイ・トレチャコフを中心に」、増本浩子、楢岡求美他、基盤研究(B)：23K21922、日本学術振興会、神戸大学、2022.4~2026.3

e 社会活動

(1) 学術貢献活動

[企画立案・運営等][パネル司会・セッションチェア等] クリスチアン・フェイゲルソン「映画と社会主義リアリズム：ソ連と中国におけるその機能」、社会主義リアリズム研究会・特別講演会、2022.5.7、於：慶応大学(日吉キャンパス)

[企画立案・運営等][パネル司会・セッションチェア等] ウクライナの多様な文化特別講義(1) イリーナ・シャートワ『ザポロージャの歴史』、ZOOM、2022.6.20

[企画立案・運営等][パネル司会・セッションチェア等] ガリーナ・シェフツォバ(キエウ国立建設建築大学教授)講演会「ウクライナの古建築：木造と石造の魅力的な世界」、於：東京大学文学部、2023.1.12

[企画立案・運営等][パネル司会・セッションチェア等] コルネリヤ・イチン(ベオグラード大学教授)研究交流会「ロシア東欧研究の現在」(ロシア語)、於：東京大学文学部、2023.1.26

[企画立案・運営等] コルネリヤ・イチン(ベオグラード大学教授)特別講演会「詩人ユーリー・デゲンとジョージア・アヴアンギャルド芸術」(ロシア語)、於：京都大学文学研究科、2023.1.28

[企画立案・運営等][パネル司会・セッションチェア等] コルネリヤ・イチン(ベオグラード大学教授)特別講演会「セルビア・アヴアンギャルドとヨーロッパ」、司会・通訳：楢岡求美、於：九州産業大学美術館・福岡、2023.2.4

- [企画立案・運営等][パネル司会・セッションチェア等] 特別セミナー「ウクライナの集合的記憶におけるバビ・ヤール」(Babyn Yar in Ukraine's Collective Memory // Amelia Glaser (University of California San Diego) "Mine from '33,yours from '41": Poetic Reinventions in Contemporary Ukraine / Yuliya Ilchuk (Stanford University) "Document" versus "Context": Anatoly Kuznetsov and Sergei Loznitsa on the Tragedy of Babyn Yar,the University of Tokyo.Faculty of Letters.19th Feb. 2023
- [企画立案・運営等][パネル司会・セッションチェア等] ジョージア映画 レクチャー&上映会 (ミヘイル・コバヒゼ 監督短編『結婚式』『音楽家たち』、ゲオルギ・シェンゲラーヤ監督『アラヴェルディの祭』、セルゲイ・パラジャーノフ監督『ピロスマニ・アラベスク』)、司会・コメント：楢岡求美、ゲスト：はらだたけひで (ジョージア映画祭 2022 プロデューサー)、2023.2.27、劇団地点「アンダースロー」(京都)、2023.2.27
- [企画立案・運営等][パネル司会・セッションチェア等] 「三谷恵子先生追悼シンポジウム「スラヴ人文学の今日と未来」、報告者：木村護郎・クリストフ、中島由美、堀口大樹、菅井健太、服部文昭、恩田義徳、奥彩子、亀田真澄、司会：楢岡求美、於：東京大学文学部、2023.6.18
- [企画立案・運営等] ラウンドテーブル「19-21 世紀のロシア文化における戦争の言語：継承か対立か?」、報告者：キリル・ズブコフ (SRC)、エウゲーニ・ドブレニコ (ヴェネツィア大学)、セルゲイ・ウシャーキン (プリンストン大学)、司会：アレクサンドル・プロホロフ&エレナ・プロホロワ (ウィリアム・アンド・メアリー大学)、於：東京大学文学部、2023.8.8
- [企画立案・運営等][パネル司会・セッションチェア等] 「ロシア・ユーラシア研究の可能性 (1)」、参加者：ガヤネ・シャゴヤン、リュドミラ・ジューコワ、ボリス・ラーニン、有宗昌子、モデレーター：楢岡求美、於：Kyoto de Meeting 4 階会議室 (京都市) 2023.10.1
- [企画立案・運営等][パネル司会・セッションチェア等] 「ロシア・ユーラシア研究の可能性 (2)」、参加者：ヘンリケ・シュタール、ガヤネ・シャゴヤン、リュドミラ・ジューコワ、アレクサンドル・カルトージア、ルスダン・ゴルギラーゼ、モデレーター：楢岡求美、於：東京大学文学部、2023.10.2
- [パネル司会・セッションチェア等] 講演会「危機の時代における文学のアクチュアリティ：詩を声にすること (Actuality of Literature in the Age of Crisis: Expressing Poetry as Voice)」(英、ウクライナ語)、報告者：ミコラ・リャプチュク、ナタルカ・ピロツェルキヴェツ、モデレーター：楢岡求美、於：東京大学文学部、2023.12.2
- [企画立案・運営等][パネル司会・セッションチェア等] 連続公演企画「セルゲイ・トレチャコフとジョージア映画 (1)」「文化人類学とソ連映画 カラトジシュヴィリ監督『スヴァネティの塩』」報告者：ケテヴァン・フツィンヴィリ、於：東京大学文学部、2024.3.15 (in English)
- [企画立案・運営等][パネル司会・セッションチェア等] 連続公演企画「セルゲイ・トレチャコフとジョージア映画 (2)」「文化人類学とソ連映画 カラトジシュヴィリ監督『スヴァネティの塩』およびチヘイゼ監督『ハバルダ』」(in English)、報告者：ケテヴァン・フツィンヴィリ、司会・通訳：楢岡求美、於：京都大学文学部、2024.3.16

(2) 学会・委員活動

- [所属学協会][委員歴] 日本ロシア文学会、国際交流委員、2018.10～現在
- [所属学協会] 日本演劇学会
- [所属学協会] 西洋比較演劇研究会

准教授 **平松 潤奈**

HIRAMATSU, Junna

1. 略歴

- | | |
|------------|---|
| 1998 年 3 月 | 東京外国語大学外国語学部ロシア・東欧語学科卒業 |
| 1998 年 4 月 | 東京大学大学院人文社会系研究科欧米系文化研究専攻スラヴ語スラヴ文学専門分野修士課程入学 |
| 2000 年 3 月 | 東京大学大学院人文社会系研究科欧米系文化研究専攻スラヴ語スラヴ文学専門分野修士課程修了 |
| 2000 年 4 月 | 東京大学大学院人文社会系研究科欧米系文化研究専攻スラヴ語スラヴ文学専門分野博士課程進学 |
| 2005 年 3 月 | 東京大学大学院人文社会系研究科欧米系文化研究専攻スラヴ語スラヴ文学専門分野博士課程単位取得満期退学 |
| 2005 年 4 月 | 日本学術振興会特別研究員 (PD) (～2008 年 3 月) |

2008年8月	オックスフォード大学セントアントニーズ・カレッジ、ロシア・ユーラシア研究センター客員研究員(日本学術振興会 ITP の研究員として北海道大学スラブ研究センターより派遣)(~2010年3月)
2008年9月	学位 博士(文学) 取得(東京大学)
2010年10月	東京大学大学院人文社会系研究科研究員(~2012年3月)
2012年4月	金沢大学外国語教育研究センター(国際学類準専任) 准教授(~2016年3月)
2016年4月	金沢大学国際基幹教育院(国際学類準専任) 准教授(~2023年9月)
2019年4月	北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター共同研究員
2022年8月	ハーバード大学デービス・センター客員研究員(~2023年6月)
2023年10月	東京大学大学院人文社会系研究科 准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

ロシア・ソ連文学

b 研究課題

- (1) 19世紀ロシア文学と20世紀ソ連文学における検閲の研究
- (2) 新経済批評から見る F. ドストエフスキー
- (3) 初期ソ連の交換・フェティッシュ論をととした A. プラトノフ研究
- (4) ロシア・ウクライナ戦争に関連する研究

c 概要と自己評価

- (1) 19世紀ロシア文学と20世紀ソ連文における検閲の研究

「禁止的検閲」よりも「構成的検閲」を重視する近年の検閲理論に依拠しつつ、厳しい禁止的検閲が実在した帝政ロシア・ソ連の状況を踏まえて、ロシア・ソ連文学に対する検閲の問題を検討した。具体的には、19世紀後半の大改革期、部分的検閲緩和の時代に発表されたドストエフスキー作品における自己懲罰的主体の形成を論じ(国際学会にて発表)、またソ連公式文学(社会主義リアリズム)の作品において、主人公の身体の自己破壊という自己懲罰的プロットの産出やソヴィエト的主体の形成に、内的・外的検閲がどのようにかかわったかを論じた(論文を発表予定)。

- (2) 新経済批評から見る F. ドストエフスキー

貨幣商品経済が大きな発展をとげた19世紀大改革時代のドストエフスキーの作品において、自己準拠的で非人格的なシステムとしての貨幣経済や、それへの抵抗として前景化する贈与交換といった経済的契機が、どのようにテクストを条件づけているか、新経済批評に依拠しながら論じた(海外の学会にて発表)。

- (3) 初期ソ連の交換・フェティッシュ論をととした A. プラトノフ研究

1920年代ソ連の学術・文化領域においては、「ブルジョア社会」克服のため、商品や法といった交換メディアがどのように機能しているか、また社会主義社会において「フェティッシュ」としてのそうしたメディアをどう廃棄し、かわりにどのような方法で労働の管理や規範の共有をすべきか、という議論が盛んに行われた。本研究は、作家 A. プラトノフの作品においてこうした当時の諸言説がアレゴリカルに語られていると考え、フェティッシュ廃棄に向けたラディカルな一元論的社会構築の試みと、その失敗、フェティッシュの回帰、といった観点から作品分析を行った(研究会にて発表)。

- (4) ロシア・ウクライナ戦争に関連する研究

2022年初頭のロシアによるウクライナ侵攻に関し、これまで、ソ連時代の国家暴力や、そのトラウマに関する現代ロシアの記憶の研究にたずさわった経緯から、この戦争との関係で論考を執筆した。

d 研究業績

- (1) 書籍出版物

[分担執筆]『ロシア文学からの旅:交錯する人と言葉(シリーズ・世界の文学をひらく 6)』、中村唯史 坂庭淳史 小椋彩編、「ミハイル・ショロホフ『静かなドン』」、ミネルヴァ書房、2022.5、256p

- (2) 論文

[学術雑誌]「埋葬されない帝国の記念碑——ウクライナ戦争と境界の消失」、『現代思想』6月号、pp.52-59、2022.5

[学術雑誌]「痛みへのノスタルジア——アレクシエーヴィチ『セカンドハンドの時代』におけるポストソヴィエトの徴候」、『ユリイカ』7月号、pp.165-175、2022.6

- (3) その他各種論著

「ウクライナとしてのロシア：辺境における小さな差異について」、『北陸史学会報』、2022.8

「共同討議 帝国と国民国家のはざまで」、乗松亨平 平松潤奈 松下隆志 東浩紀 上田洋子、『ゲンロン』(13)、pp.176-226、2022.10

「気候危機時代の戦争、あるいは資源国家ロシアの運をめぐって：Alexander Etkind. *Russia against Modernity*」、web ゲンロン、2023.6.29

(4) 講演・口頭発表等

[口頭発表 (一般)] 「フェティシズムの廃棄と回帰：アンドレイ・プラトノフと初期ソ連の法・経済・哲学言説」、「プラトンとロシア」研究会、2022.9.19

[その他] 「ウクライナ侵攻後、ロシアはどこへむかうのか——愛国と反体制のはざまで」、乗松亨平 平松潤奈 松下隆志 上田洋子、ゲンロンカフェ、2022.11.17

[口頭発表 (一般)] 「Fiduciary Imagination: Personal and Impersonal Exchange in Dostoevsky's Novels,」 AATSEEL-AZ、2023.3.21

[口頭発表 (一般)] 「New Personal Relationships in the Age of Monetization: Reading Dostoevsky Economically,」 Harvard University. Davis Center Visiting Scholar Seminar、2023.4.19

[シンポジウム・ワークショップ パネル (公募)] 「Productive Censorship and the Modern Self in Dostoevsky's *Demons*,」 XVIII Symposium of the International Dostoevsky Society、2023.8.26

(5) 共同研究・競争的資金等の研究課題

[科学研究費助成事業] 「検閲と自己懲罰：ロシア帝国とソ連における文学テキスト生産メカニズムの考察」、平松潤奈、基盤研究 (C) : 19K00497、日本学術振興会、金沢大学、2019.4～2023.3

[科学研究費助成事業] 「ロシア・旧ソ連文化におけるメロドラマ的想像力の総合的研究」、安達大輔 平松潤奈他、基盤研究 (B) : 19H01243、日本学術振興会、北海道大学、2019.4～2024.3

[科学研究費助成事業] 「近現代ロシア思想における《異他性》の思考：思想史的遠近法の再構築をめざして」、貝澤哉 平松潤奈他、基盤研究 (A) : 22H00004、日本学術振興会、早稲田大学、2022.4～2027.3

e 社会活動

(1) 社会貢献活動

[編集長] 会誌・広報誌「ロシア語ロシア文学研究」、日本ロシア文学会、2023.10.21～

[コメンテーター] 日本ロシア文学会主催若手ワークショップ「〈暴力〉から問う：19-20 世紀ロシア文化における暴力表象の横断的検討」、於北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター、2024.1.27

(2) 学術貢献活動

[企画立案・運営等] Boris Noordenbos. “Conspiratorial Memory: Cultures of Suspicion in Post-Socialist Europe”、於東京大学文学部、2024.3.24

f その他

(1) 学会・委員活動

[委員歴] 日本ロシア文学会編集委員、2021.10～

2 4 現代文芸論

教 授 柳原 孝敦 YANAGIHARA, Takaatsu

1. 略歴

1989年3月 東京外国語大学外国語学部スペイン語学科 卒業
1989年4月 東京外国語大学大学院外国語学研究科修士課程入学（ロマンス系言語専攻）
1991年3月 同 修了
1991年4月 Centro de Estudios Literarios.Instituto de Investigaciones Filológicas de la Universidad Nacional Autónoma de México [メキシコ国立自治大学文献学研究所文学研究センター] 訪問研究生（メキシコ政府交換留学生として、～1992年2月）
1992年4月 東京外国語大学大学院地域文化研究科博士後期課程進学（地域文化専攻）
1995年3月 同 単位取得退学
1996年4月 法政大学経済学部助教授
2002年4月 Centro de Estudios Latinoamericanos Rómulo Gallegos [ロムロ・ガリェーゴス・ラテンアメリカ研究センター、ベネズエラ] 客員研究員（～2003年3月）
2004年4月 東京外国語大学外国語学部助教授
2007年4月 同 准教授
2009年4月 東京外国語大学大学院総合国際学研究院准教授（大学院重点化による）
2012年4月 同 教授
2013年10月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授
2017年4月 同 教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

スペイン語圏の文学、文化研究。ラテンアメリカ思想文化論。

b 研究課題

知識人たちの環大西洋的ネットワークの形成。スペイン内戦、チリやアルゼンチンの軍事政権を発端とした知識人たちの離散と勢力地図変化、亡命者たちの亡命先における活動とその地にもたらした文化史上の功績などを叙述する。

c 概要と自己評価

研究課題である環大西洋地域を横断する知識人たちのネットワークの形成と個々の活動、その表現の形態についての研究は、2020年3月まで科学研究費の研究助成を受けていた。2019年11月に刊行した『テキストとしての都市 メキシコ DF』の一部はこの助成の成果でもある。助成期間は終わったものの、研究はなお進行中である。

また、アレホ・カルペンティエール『この世の王国』の新訳版、ガブリエル・ガルシア＝マルケスの評伝などを準備中であり、カルペンティエールやガルシア＝マルケス作品を上記主題の観点から読み直し、20世紀ラテンアメリカ文学の世界文学内での位置づけの読み直しを目指している。

d 研究業績

(1) 著書、書籍

[共著] 西崎憲編著『kaze no tanbun 移動書館の子どもたち』、柏書房、2021（「高倉の書庫／砂の図書館」）
[共著] 都甲幸治編著『ノーベル文学書のすべて』、立東舎、2021（マリオ・バルガス＝リョサのページ）
[共著] 沼野充義、松永美穂、阿部公彦、読売新聞文化部編『文庫で読む100年の文学』、中公文庫、2023（マリオ・バルガス＝リョサ『緑の家』担当）
[共著] 久野量一、松本健二編著『ラテンアメリカ文学を旅する58章』、明石書店、2024

(2) 論文

「靴を脱ぐ女」、『ユリイカ 特集 ペドロ・コスター『血』から『ヴァンダの部屋』『コロッサル・ユース』『ホース・マナー』そして『ヴィタリナ』へ』第52巻第13号（通巻765号）、2020.10、pp.151-156

(3) その他の論考

「映画で旅するスペイン語世界 1」、『NHK テレビテキスト 旅するためのスペイン語』2020 年 10 月号～2021 年 3 月号連載

(インタビュー)「映画『夢のアンデス』公開—パトリシオ・グスマンは次の 5 年／次の 3 部作を見据えている」

『Web 版 LATINA』2021 年 9 月号 (9 月 22 日アップロード) <https://e-magazine.latina.co.jp/n/nadbaed982690>

(研究ノート)「ジョルディ・ソレール『負け戦』三部作をめぐって」、『れにくさ』第 12 号、東京大学大学院人文社会系研究科・文学部 現代文芸論研究室、2022 年、pp.37-52

「アレホ・カルペンティエール『この世の王国』についての覚え書き」、柳原孝敦、『れにくさ = Реникса : 現代文芸論研究室論集』東京大学大学院人文社会系研究科・文学部現代文芸論研究室編 13 号、pp.222-234、2023

(研究ノート)「詩人の情熱を伝えるには—エドゥアルド・ギジョット『情熱の大河に消える』についてのノート」、『れにくさ』14 号、2024、pp.108-119

(4) 翻訳

マリオ・バルガス=リョサ「ボルヘスとの対話」、『すばる』2021 年 8 月号、pp.166-187

ガブリエル・ガルシア=マルケス、マリオ・バルガス=リョサ『二つの孤独』から、『すばる』2022 年 3 月号、pp.56-78

e 社会活動

(1) メディア報道

「エルノー文学 貰いたオートフィクション ノーベル文学賞対談」、『朝日新聞』2022 年 10 月 9 日 23 面

f その他

(1) 学会・委員活動

日本ラテンアメリカ学会理事、2020.6～2022.5

准教授 阿部 賢一 ABE, Kenichi

1. 略歴

1995 年 3 月	東京外国語大学外国語学部ロシア・東欧語学科チェコ語専攻卒業
1999 年 3 月	東京外国語大学大学院地域文化研究科博士前期課程修了
2002 年 6 月	パリ第 4 大学第 3 課程スラヴ研究科 DEA 取得
2003 年 3 月	東京外国語大学大学院地域文化研究科博士後期課程修了
2003 年 10 月	北海道大学スラブ研究センターCOE 研究員
2004 年 4 月	東京外国語大学大学院国際文化講座助手
2005 年 4 月	武蔵大学人文学部ヨーロッパ比較文化学科専任講師
2008 年 4 月	同准教授
2010 年 4 月	立教大学文学部文学科文芸・思想専修／文学研究科比較文明学専攻准教授
2016 年 4 月	東京大学大学院人文社会系研究科准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

中東欧文学、比較文学

b 研究課題

翻訳研究。比較文学。草稿研究。

c 概要と自己評価

中欧における文学史および翻訳研究に関する近年の研究成果は、単著『翻訳とパラテキスト』(2024)にまとめることができ、文化資本、パラテキストという視点を明確にすることで、他の言語文化にも援用可能な概念を提示できたように思われる。

現在は、以下のテーマを中心に研究を進めている。

- (1) 翻訳とパラテキスト：近代日本文学を中心に
- (2) 文学作品における複数言語使用
- (3) 大江健三郎の草稿研究

(1) は、これまでにチェコを中心とした事例を土台にしつつ、近代日本文学を視野に入れ、パラテキスト研究を展開する予定である。また(2)では、外来語に留まらない、多様な表現可能性としての小説内の複数言語使用の問題を様々な文学を題材に検討している。最後に、(3)として、大江健三郎文庫の資料を活用しながら、比較的視点も導入しつつ、大江健三郎の草稿研究の実践を行っている。今後、これらの問題系をより深めていく予定である。

d 研究業績

(1) 書籍出版物

- [単訳] カレル・チャペック、『マクロプロスの処方箋』岩波文庫、2022、全204頁
- [共訳] ヴァーツラフ・ハヴェル、『通達／謁見』、阿部賢一・豊島美波訳、松籟社、2022、全248頁
- [単著] 阿部賢一、『翻訳とパラテキスト ユングマン、アイスネル、クンデラ』、人文書院、2024、全346頁
- [共編者] 薩摩秀登・阿部賢一編、『チェコを知るための60章』、明石書店、2024
- [分担執筆] Lisette Gebhardt (ed.), *ÔE lesen*. Berlin: EB Verlag, 2024. 346pp. [担当箇所: "Der ausgestrichene Agui oder Oe Kenzaburo Bannen yoshiki-shu als Manuskript," pp. 326-333]

(2) 論文

- [学術雑誌] 阿部賢一、「文芸翻訳とパラテキスト」、『未来哲学』第5巻、2023、pp.122-135
- [学術雑誌] 阿部賢一、「大江健三郎の自筆原稿が問いかけるもの」、『ユリイカ 総特集大江健三郎』第55巻10号、2023、pp.561-567
- [学術雑誌] 阿部賢一、「〈人生のしめくり〉の書 ミラン・クンデラ『無意味の祝祭』を読む」、『すばる』2023年10月号、pp.123-127
- [学術雑誌] 阿部賢一、「テキストと前=テキスト 大江健三郎「怒りの大気に冷たい嬰兒が立ちあがって」の自筆原稿」、『れにくさ 現代文芸論研究室論集』14号、2024、pp.171-179

(3) 講演・口頭発表等

- [シンポジウム・ワークショップパネル(指名)] 「森昭夫氏の寄贈資料について オープンセミナー大江健三郎氏寄託資料の現在と未来」、HMC オープンセミナー、東京大学本郷キャンパス、2022.4.16
- [シンポジウム・ワークショップパネル(指名)] 「文芸翻訳の機能 パヴェル・アイスネルの事例から」、第5回世界哲学における翻訳の問題シンポジウム、東京大学駒場キャンパス、2022.9.1
- [公開講演、セミナー、チュートリアル、講習、講義等] 阿部賢一、「ミラン・クンデラとアダプテーション」、上智大学アメリカ・カナダ研究所／ヨーロッパ研究所、オンライン、2022.9.18
- [公開講演、セミナー、チュートリアル、講習、講義等] 阿部賢一、「チャペックの戯曲世界 『マクロプロスの処方箋』を中心に」、関西チェコ・スロヴァキア協会、大阪大学豊中キャンパス、2022.12.3
- [口頭発表(一般)] 阿部賢一、「プラハ幻想文学の系譜の素描」、第四回境界地域×幻想文学研究会、オンライン、2023.3.23
- [メディア報道等] 阿部賢一、「始まりの1冊 「イジー・コラーシュの詩学」」、読売新聞、2023.7.16
- [口頭発表(一般)] Kenichi Abe, Paratexty v překladech Josefa Jungmanna. Konference JOSEF JUNGMAN: Od jazyka k identitě, Národní muzeum (Praha)、2023.9.21
- [シンポジウム・ワークショップパネル(指名)] 「「シュマヴァ」と「ベーマーヴァルト」の同一性と差異 ポヘミアの森の表象」、科研費シンポジウム「スラヴ文化の森：環境批評の視点から」、北海道大学、2023.9.30
- [公開講演、セミナー、チュートリアル、講習、講義等] 阿部賢一、「ミラン・クンデラの中欧論」、日本チェコ友好協会、オンライン、2023.10.14
- [公開講演、セミナー、チュートリアル、講習、講義等] 阿部賢一、「作家が翻訳するとき」、第22回ホームカミング デイ文学部企画「大江健三郎を語る視座」、東京大学本郷キャンパス、2023.10.21
- [シンポジウム・ワークショップパネル(指名)] 「テキストと前=テキスト 大江健三郎「怒りの大気に冷たい嬰兒が立ちあがって」の自筆原稿」、第8回現代文芸論研究報告会・シンポジウム「草稿研究の現在」、東京大学本郷キャンパス、2023.11.18
- [シンポジウム・ワークショップパネル(指名)] 「生前の遺稿」大江健三郎の場合、成城大学国際編集文献学研究センター主催シンポジウム「生前の遺稿」、成城大学、2023.12.3

[公開講演、セミナー、チュートリアル、講習、講義等] Kenichi Abe, “How to Translate and Publish Small Literature?” – “Japanese Literature and Culture: Then and Now”, 国際交流基金（東京）、2024.2.27

(4) 共同研究・競争的資金等の研究課題

[科学研究費助成事業]「ボヘミア文学史の記述に関する研究」、阿部賢一、基盤研究（C）：19K00493、日本学術振興会、東京大学、2019.4～2023.3

[科学研究費助成事業]「トランスナショナル時代の人間と「祖国」の関係性をめぐる人文学的、領域横断的研究」、岡真理 宮下遼 新城郁夫 山本薫 藤井光 石川清子 岡崎弘樹 藤元優子 福田義昭 久野量一 鶴戸聡 田浪亜央江 細田和江 鶴飼哲 細見和之 阿部賢一 呉世宗 鈴木克己 中村菜穂、基盤研究（A）：20H00006、日本学術振興会、京都大学、2020.4～2024.3

[科学研究費助成事業]「ロシア・中東欧のエコクリティシズム：スラヴ文学と環境問題の諸相」小椋彩 中村唯史 菅原祥 阿部賢一 越野剛 松前もゆる、基盤研究(B)：21H00518、日本学術振興会、北海道大学、2021.4～2025.3

[科学研究費助成事業]「境界地域における幻想文学の比較研究」、三田順 井上暁子 阿部賢一 越野剛、基盤研究(B) 22H00652、日本学術振興会、北里大学、2022.4～2026.3

e 社会活動

(1) メディア報道

[テレビ・ラジオ番組]「個人的な大江健三郎」、NHK E テレ、2023.11.11

f その他

(1) 非常勤講師

立教大学、2022.4～2023.9

(2) 学会・委員活動

[委員歴] 表象文化論学会学会賞選考委員、2022.1～2023.12

[委員歴] 芸術選奨推薦委員、2022.6～2024.3

准教授 **藤井 光** FUJII, Hikaru

1. 略歴

1998 年 4 月	北海道大学文学部人文科学科 入学
2002 年 3 月	同 卒業
2002 年 4 月	北海道大学大学院文学研究科修士課程 入学
2004 年 3 月	同 修了
2004 年 4 月	北海道大学大学院文学研究科博士後期課程 進学
2007 年 3 月	同 修了 博士（文学）
2007 年 4 月	日本学術振興会特別研究員（PD）
2009 年 4 月	同志社大学文学部助教
2013 年 4 月	同志社大学文学部准教授
2018 年 4 月	同志社大学大学院文学研究科博士前期課程准教授
2019 年 4 月	同志社大学大学院文学研究科博士前期課程教授
2021 年 4 月	東京大学大学院人文社会系研究科准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

現代アメリカ文学、英語圏文学、翻訳論

b 研究課題

現代アメリカ小説における「偶然の土着性」

c 概要と自己評価

21 世紀の英語圏文学、特にアメリカの小説をめぐって、1)移民系作家における戦争や紛争の記憶の表象、2)新自由主義経済における文学の役割に対する各作家の距離感、の 2 点を中心に研究を進めている。2019～2022 年度は上記の研究課題名で科研費の助成を受け、論文発表および口頭発表を行っている。

d 研究業績

(1) 書籍出版物

[単訳] (翻訳) 『血を分けた子ども』、Okteyvia・E・Battler (藤井光)、河出書房新社、2022.6、251p

[単訳] (翻訳) 『その丘が黄金ならば』、C・Pam・Jahn (藤井光)、早川書房、2022.7.20、384p

[単訳] (翻訳) 『反乱者』、Apostol Gina 藤井光、白水社、2022.11、339p

[共訳] (共訳) 『絶縁』、村田沙耶香 藤井光 Alfian Sa'at 郝景芳 Lertwiwatwongsa Wiwat 韓麗珠 Lha-byams-rgyal Ngayén Ngoc Tur 連明偉 鄭世朗 大久保洋子 福富渉 及川茜 星泉 野平宗弘 吉川凧、「アルフィアン・サアット「妻」(71-106 頁)」、小学館、2022.12、413p

[単訳] (翻訳) 『アクティング・クラス』、Dmaso Nick 藤井光、早川書房、2022.12、267p

[単訳] (翻訳) 『ハーレム・シャッフル』、Colson ホワイトヘッド、藤井光、早川書房、2023.11.21、416p

(2) 講演・口頭発表等

[口頭発表 (招待・特別)] 「遠い死者たち、語る私たち：21 世紀英語圏文学における戦争と記憶のグローバル化」、藤井光、大阪大学言語社会学会 2022 年度学術記念講演会、2022.6.30

[口頭発表 (招待・特別)] 「Narrative Coordinates: “Contemporariness” of the Literary Translator in Japan」、Hikaru Fujii、The Program in Translation and Intercultural Communication Colloquium (Princeton University)、2022.10.3

[口頭発表 (招待・特別)] 「Everything in the World Is Doubled: English and/as Translation in 21st Century Asian Writers’ Anglophone Fiction.」、Hikaru Fujii、SAS Year of Language Event (Rutgers University)、2022.10.18

[シンポジウム・ワークショップ パネル (指名)] 「翻訳としての／翻訳をめぐっての物語：アジア発の現代英語小説における「反復」、藤井光、日本英文学会第 95 回全国大会特別シンポジウム第 7 部門「翻訳から生まれる文学研究」、2023.5.21

[シンポジウム・ワークショップ パネル (指名)] 「Colson Whitehead、ふたつの“King”演説のあいだで」、藤井光、日本アメリカ文学会第 62 回全国大会シンポジウム「公民権運動を拡大する——長い公民権運動とアメリカ文学」、2023.10.22

(3) 共同研究・競争的資金等の研究課題

[科学研究費助成事業] 「21 世紀アメリカ小説における「偶然の土着性」について」、藤井光、基盤研究 (C) : 18K00437、日本学術振興会、2018.4～2023.3

[科学研究費助成事業] 「トランスナショナル時代の人間と「祖国」の関係性をめぐる人文学的、領域横断的研究」、岡真理 宮下遼 新城郁夫 山本薫 藤井光 石川清子 岡崎弘樹 藤元優子 福田義昭 久野量一 鶴戸聡 田浪亜央江 細田和江 鶴飼哲 細見和之 阿部賢一 呉世宗 鈴木克己 中村菜穂、基盤研究 (A) : 20H00006、日本学術振興会、京都大学、2020.4～2024.3

e 社会活動

(1) 社会貢献活動

[寄稿] 新聞・雑誌「海外文学の森へ」欄執筆、「東京新聞」、中日新聞社、2021.1～

[司会] 対話型集会・市民会議「マレーシアと日本 ～文学の交差点」、文芸対話プロジェクト“YOMU”第 3 回トークセッション、国際交流基金、2022.12.10

[寄稿] 新聞・雑誌「文庫この新刊」(土曜読書面) 執筆、「朝日新聞」、朝日新聞社、2023.4～

(2) メディア報道

[新聞・雑誌] 「ひもとく・英ブッカー賞」欄執筆、朝日新聞社「朝日新聞」、土曜日朝刊・読書面、2022.6.18

[新聞・雑誌] 「好書好日」欄「空想書店」寄稿、読売新聞社「読売新聞」、書評面、2023.8.13

f その他

(1) 学会・委員活動

[所属学協会] 日本ジェンダー学会、2017.4～

[委員歴] 日本アメリカ文学会、編集委員、2020.4～

25 西洋史学

教授 橋場 弦 HASHIBA, Yuzuru

1. 略歴

1990年10月 東京大学大学院人文科学研究科博士課程修了
1990年11月 東京大学文学部助手
1993年4月 大阪外国語大学外国語学部助教授
2002年3月 ケンブリッジ大学古典学部客員研究員、同クレーアホール・コレッジ客員フェロー（～2003年2月）
2006年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授
2007年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授
2010年11月 東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

古代ギリシア史、西洋史、歴史学、西洋古典学

b 研究課題

古代ギリシア民主政、伝アリストテレス『アテナイ人の国制』、古代ギリシアの歴史記述

c 概要と自己評価

研究・教育及びこれに関わる学内外の諸活動に従事し、責務を果たした。

d 研究業績

(1) 書籍出版物

[単著]『古代ギリシアの民主政』、岩波新書、2022.9
[共編者]『岩波講座世界歴史第2巻 古代西アジアとギリシア～前一世紀』、岩波書店、2023.11（近藤二郎と責任編集）
[教科書][共編者]『詳説世界史探究』、山川出版社、2023.4（木村靖二・岸本美緒・小松久男と共編）

(2) 論文

[学術雑誌]「伝アリストテレス『アテナイ人の国制』—その成立と作者をめぐる—」、『西洋古典学研究』71号、2024.3、42-58頁
[論文集（書籍）内論文] s.v. Stesikleides (245). Andron (246). Theodoros (346). I. Worthington (ed.). Brill's New Jacoby. second edition. Brill. Leiden. 2023. (<http://brillonline.nl>)

(3) その他各種論著

「伊藤貞夫先生のご逝去を悼む」、『西洋古典学研究』69号、2022.3、221-224頁
「追悼文 伊藤貞夫先生を偲ぶ」、『史学雑誌』131編6号、2022.6、95-97頁
「道産子の心懐」、『公研』（公益産業研究調査会）707号、2022.7、14-15頁
「あとがき考」、『公研』（公益産業研究調査会）719号、2023.7、16-17頁

(4) 講演・口頭発表等

[公開講演]「古代オリンピック～ギリシア人の身体と心」、札幌西高校東京輔仁会総会・講演会、2022.6.4、於ホテルグランドヒル市ヶ谷
[口頭発表（一般）]「伝アリストテレス『アテナイ人の国制』の伝承と受容：レンボスのヘラクレイデスの場合」（ギリシャ哲学セミナー第25回共同研究セミナー）、2022.9.11、桜美林大学
[公開講演、セミナー、チュートリアル、講習、講義等]（セミナー・司会とコメント）「Blok.Josine. 'Drawing lots for police office: anchoring political innovation in ancient Greece'」についてのコメント」、古代史の会、2022.11.10、於東京大学文学部
[口頭発表（一般）]「伝アリストテレス『アテナイ人の国制』—その成立と作者をめぐる—」、第73回日本西洋古典学会大会（研究動向報告）、2023.6.3、獨協大学

e その他

(1) 非常勤講師

お茶の水女子大学（西洋社会史・西洋政治史）
早稲田大学オープンカレッジ

(2) 学会・委員活動

[所属学協会][委員歴] 西洋古典学会、委員、常任委員、書評委員

教 授 **勝田 俊輔** KATSUTA, Shunsuke

1. 略歴

1986年4月 東京大学教養学部文科Ⅲ類 入学
1991年3月 東京大学文学部西洋史学専修課程 卒業
1991年4月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程西洋史学専攻 入学
1994年3月 同 修了
1994年4月 東京大学大学院人文科学研究科博士課程西洋史学専攻 進学
1995年10月 アイルランド共和国ダブリン大学留学（～1997年9月）
（1996年9月まではアイルランド政府給費留学生）
1999年3月 東京大学大学院人文社会系研究科博士課程西洋史学専攻 単位取得退学
1999年4月 東京大学大学院人文社会系研究科西洋史学研究室 助手
2002年3月 博士（文学）学位取得
2002年4月 岐阜大学教育学部社会科教育講座（史学） 助教授
2007年4月 同 准教授
2012年4月 東京大学大学院人文社会系研究科 准教授
2018年9月 東京大学大学院人文社会系研究科 教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

アイルランド近代史、近代ブリテン世界史、近代コスモポリタニズム

b 研究課題

19世紀アイルランド農村史、近代ダブリン都市史、近代ブリテン世界史、近代コスモポリタニズム

c 概要と自己評価

教育・研究・学内業務において、基本的責任を果たした。

d 研究業績

(1) 書籍出版物

[教科書・教材]『歴史総合 近代から現代へ』、山川出版社、2022.4
[分担執筆] 中野智世ほか編『カトリシズムと生活世界』、「もう一つの母性愛——アイルランドにおけるカトリックの里親たち」、11-38頁、勁草書房、2023.2
[教科書・教材]『詳説世界史』、山川出版社、2023.4
[教科書・教材]『高校世界史』、山川出版社、2023.4
[分担執筆]『国民国家と帝国 19世紀（岩波講座 世界歴史 第16巻）』、「「イギリス」にとってのアイルランド」、225-246頁、岩波書店、2023.9.26、312p

(2) 論文

[論文]「1641年反乱とパブリック／オフィシャル／アカデミック・ヒストリー」、『歴史学研究』No. 1021（2022.4）、22-31、58頁

[論文]「『偶然』と『進歩』から見るカーの歴史理論」、『思想』(小特集 E・H・カーと『歴史とは何か』)、1191 号、pp.104-115、2023.6

(3) その他各種論著

[その他記事]「『歴史記述』および『コスモポリタニズム』」、日本 18 世紀学会 啓蒙思想の百科事典編集委員会編『啓蒙思想の百科事典』、pp.218-219、2023.1

[研究発表要旨(全国大会、その他学術会議)]「『(史学会例会シンポジウム) E・H・カー『歴史とは何か』を再読する』うち、「趣旨説明」および「討論まとめ」、『史学雑誌』132 巻 1 号、pp.106-107、2023.1

[その他記事](書評)「岩井淳・道重一郎編『複合国家イギリスの地域と紐帯』、『カレドニア』51 号、pp.21-26、2023.12

教 授 **長井 伸仁** NAGAI, Nobuhito

1. 略歴

1989 年 3 月	大阪大学文学部史学科西洋史学専攻 卒業
1991 年 3 月	大阪大学大学院文学研究科博士前期課程史学専攻 修了
1997 年 9 月	同 博士後期課程史学専攻 単位修得退学
1997 年 11 月	パリ第 1 大学 博士(歴史学) 学位取得
1999 年 10 月	大阪大学大学院文学研究科 助手
2000 年 4 月	徳島大学総合科学部 助教授
2012 年 4 月	上智大学文学部史学科 准教授
2014 年 4 月	同 教授
2016 年 4 月	東京大学大学院人文社会系研究科 准教授
2022 年 4 月	東京大学大学院人文社会系研究科 教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

フランス近現代史

b 研究課題

19 世紀パリの政治社会史、フランス共和主義の政治文化、近代フランスにおけるカトリシズム

c 概要と自己評価

今期は、まず 2022 年 5 月に近代パリ史を主題とする単著を刊行した。同書は一部に課題を残すかたちになり、とくに 19 世紀末パリにおける入移民の実態と表象については研究を継続している。政治文化に関しては、バスチーユ広場「七月の円柱」についての史料収集を進めている。カトリシズムに関しては、ラジオ・テレビの宗教番組と教会の課外活動について研究を開始した。いずれも数年以内に研究をまとめるよう努めたい。

d 研究業績

(1) 書籍出版物

[単著] 長井伸仁『近代パリの社会と政治：都市の日常を探る』、勁草書房、2022.5

[共著] 中野智世・前田更子・渡邊千秋・尾崎修治編『カトリシズムと生活世界——信仰の近代ヨーロッパ史』、勁草書房、2023.2 (第 5 章：長井伸仁「信仰と生殖——両大戦間期フランスのカトリシズムにおける避妊をめぐる議論」127-156 頁)

[共著] 宇野重規・伊達聖伸・高山裕二編『フランス知と戦後日本——対比思想史の試み』、白水社、2024.3 (第 2 章：長井伸仁「革命 200 周年とフランス史研究——柴田三千雄『フランス革命』(1989 年)をめぐって」53-85 頁)

(2) その他各種論著

[書評] 長井伸仁「坂野正則編『パリ・ノートル＝ダム大聖堂の伝統と再生——歴史・信仰・空間から考える』(勉誠出版、2021 年)」、『都市史研究』9 号、105-109 頁、2022.10

[総説・解説(その他)] 長井伸仁「[コラム] 二つの大戦とフランス共和政の表象」、『岩波講座 世界歴史』第 21 巻、198-199 頁、2023.2

[紹介] NAGAI Nobuhito. « Travail et corps dans les carnets d'atelier de Paul Feller ». *Transmettre*. no. 19. pp. 15-16. 2023.11

(3) 共同研究・競争的資金等の研究課題

[科学研究費助成事業]「19・20世紀転換期フランスにおける排外主義の変容—パリ地域での選挙の分析」、長井伸仁、
基盤研究 (C) : 20K01053、日本学術振興会、東京大学、2020.4～2023.3

[科学研究費助成事業]「近代フランスにおける革命犠牲者と政治文化：「七月の円柱」の事例」、長井伸仁、基盤研究
(C) : 23K00893、日本学術振興会、東京大学、2023.4～2026.3

e その他

(1) 学会・委員活動

[委員歴] 日仏歴史学会、理事、2005.4～

[委員歴] 『西洋史学』、編集委員、2017.4～

[委員歴] 『史学雑誌』、編集委員、2021.6～

教授 池田 嘉郎 IKEDA, Yoshiro

1. 略歴

1994年3月	東京大学文学部西洋史学専修課程 卒業
1994年4月	東京大学大学院人文科学研究科修士課程西洋史学専攻 入学
1996年3月	東京大学大学院人文社会系研究科修士課程西洋史学専攻 修了
1996年4月	東京大学大学院人文社会系研究科博士課程西洋史学専攻 進学
1998年10月	ロシア連邦ロシア科学アカデミー・ロシア史研究所留学（文部省アジア諸国等派遣留学生） （～2000年9月）
2003年3月	東京大学大学院人文社会系研究科博士課程西洋史学専攻 単位取得退学
2005年10月	博士（文学）学位取得
2006年9月	新潟国際情報大学情報文化学部情報文化学科 専任講師
2010年4月	東京理科大学理学部第一部教養学科 准教授
2013年4月	東京大学大学院人文社会系研究科 准教授
2023年4月	東京大学大学院人文社会系研究科 教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

近現代ロシア史

b 研究課題

ヨーロッパの周縁としてのロシアから、20世紀史を捉え直すこと。

c 概要と自己評価

コロナ禍によって研究計画が大幅に遅れたが、ロシア革命・内戦期の政治史について、国際的な視点に立って検討するいくつかの論稿を発表することができた。コロナ禍について、日本の西洋史学研究はこれをどう受け止めるのかという観点からの論稿も発表した。2022年2月末にロシア・ウクライナ戦争が勃発してからは、JCREES（日本ロシア・東欧研究連絡協議会）の代表理事およびICCEES（国際中欧・東欧研究協議会）日本代表として、国内の関係団体および各国のロシア・東欧研究者と頻りに連絡をとり、学界としての対応に努めた。この戦争について、いくつかのインタビューにも応じ、社会に向けて一研究者としての考えを伝えた。

d 研究業績

(1) 書籍出版物

[共著] 鈴木董編『帝国の崩壊（下）——歴史上の超大国はなぜ滅びたのか』、山川出版社、2022.5

[共著] Слова и конфликты: язык противостояния и эскалация гражданской войны в России. Издательство Европейского университета в Санкт-Петербурге, 2022

[共著] 黛秋津編『講義ウクライナの歴史』、山川出版社、2023.9

[単訳] アンドレイ・プラトノフ（池田嘉郎訳）『幸福なモスクワ』、白水社、2023.6

[監修] シェイラ・フィッツパトリック（真壁広道訳）『ソ連の歴史』、人文書院、2023.11

e 社会活動

(1) メディア報道

[テレビ・ラジオ番組]NHK『クローズアップ現代』、2023年4月5日出演（“消えた子どもたち”を追え！ ロシア・知られざる国家戦略）

[テレビ・ラジオ番組]NHK『クローズアップ現代』、2023年9月19日出演（ロシア“愛国教育”の内幕 戦場に導かれる子どもたち）

[新聞・雑誌]『朝日新聞』、2023.3.3、「ロシアの破局的な時間」（寄稿）

f その他

(1) 学会・委員活動

[委員歴] ロシア史研究会委員長

[委員歴] 日本ロシア・東欧研究協議会代表幹事

[委員歴] International Council for Central and East European Studies (ICCEES), Executive Committee

准教授 **菊地 重仁** KIKUCHI, Shigeto

1. 略歴

1999年3月 東京大学文学部歴史文化学科西洋史学専修課程 卒業
1999年4月 東京大学大学院人文社会系研究科欧米系文化研究専攻西洋史学専門分野修士課程入学
2002年3月 同 修了
2002年4月 東京大学大学院人文社会系研究科欧米系文化研究専攻西洋史学専門分野研究生（～2003年3月）
2003年4月 東京大学大学院人文社会系研究科欧米系文化研究専攻西洋史学専門分野博士課程進学
（～2009年3月 単位取得満期退学）
2005年10月 ルートヴィヒ・マクシミリアン大学ミュンヘン（以下、ミュンヘン大学）歴史学科 中世史学専攻
登録留学生（～2006年9月）
2006年10月 ミュンヘン大学歴史学科 博士候補生（専攻：中世史学、副専攻：歴史補助学）
2013年2月 ミュンヘン大学歴史学科 博士課程修了 博士号（Dr. phil.）取得
2015年4月 青山学院大学文学部史学科 准教授
2022年4月 東京大学大学院人文社会系研究科 准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

西洋中世史（ヨーロッパ初期中世史）

b 研究課題

初期中世西欧（とりわけカロリング期フランク王国）の政治文化、統治構造、教皇座、修道制、モビリティ、他者認識などの歴史研究；初期中世環地中海世界史；史料研究（文書形式学、古書冊学）

c 概要と自己評価

着任初年度であった2022年度および2023年度には、学会報告を基にした英語論文2本を公表したほか、短文を3本公にした。加えて主催者ないし共同研究者として新規・継続含め複数の研究プロジェクトに従事し、英語での報告を中心に7件の学会報告・コメントを行った。研究活動は総じて順調だったと言える。また教育・学内業務ならびに学外での学術貢献活動にも従事し、基本的責任を果たした。

d 研究業績

(1) 論文

[論文集(書籍) 内論文] ‘Authority at a distance: popes, their media, and their presence felt in the Frankish kingdom’, Shigeto Kikuchi, in: Minoru Ozawa, Thomas W. Smith & Georg Strack (eds.), *Communicating Papal Authority in the Middle Ages* (Studies in Medieval History and Culture), London: Routledge, 2023, pp.13-30, 2023.2.17

[論文集(書籍) 内論文] ‘Monks, monasteries, and pastoral care in the Carolingian age: some remarks on its conditions’, Shigeto Kikuchi, in: Mirko Breitenstein & Toshio Ohnuki (eds.), *Pastoral Care and Monasticism in Latin Christianity and Japanese Buddhism* (ca. 800-1650), 2024, pp.27-48, 2024.2

(2) その他各種論著

「コラム：フランク王国の法文化とテキスト」、菊地重仁、大黒俊二／林佳世子責任編集、大月康弘／清水和裕編集協力『西アジアとヨーロッパの形成：八～一〇世紀』（岩波講座世界歴史8）、岩波書店、pp.108-109、2022.6

「[文化交流茶話会トーク] ヨーロッパ初期中世の政治文化をめぐって：「威嚇」の様態を考える」、菊地重仁、『文化交流研究：東京大学文学部次世代人文学開発センター研究紀要』36巻、pp.19-26、2023.3

[その他記事] 「インタビュー 菊地重仁氏に聞く（聞き手：『クリオ』編集部）」、『クリオ』37巻、pp.41-59、2023.5

「史料試訳 リオン大司教アモロのラングル司教テウトバルドゥス宛書簡」、菊地重仁監訳・訳注、荻野美櫻子/上遠野翔/清水栞/長澤咲耶/弓岡弘樹/李彦博訳、『クリオ』37巻、pp.60-79、2023.5

(3) 講演・口頭発表等

[シンポジウム・ワークショップ パネル(指名)] 「報告(自身の経験から)」、菊地重仁、第72回日本西洋史学会大会ワークショップ「外国語論文の校閲と投稿プロセス」(主催：歴史家ワークショップ)、2022.5.21

[シンポジウム・ワークショップ パネル(公募)] ‘Motivations for travels in the Carolingian age’, Shigeto Kikuchi, *Frühmittelalterliche Mobilität: Interdisziplinäre Zugänge - Early medieval mobility: Interdisciplinary approaches*. Heidelberg Akademie der Wissenschaften, 28.-30. September 2022, 2022.9.28

[シンポジウム・ワークショップ パネル(指名)] ‘Verhandlungen und Kompromisse in der Karolingerzeit’, Shigeto Kikuchi, *Der 1. Workshop des Projekts: Kompromisse im Mittelalter. Erkundungen eines vernachlässigten Themas* (online), 2022.11.25

[シンポジウム・ワークショップ パネル(指名)] ‘On the use of capitulary texts in the time of Louis the Pious: some remarks on the documents of 818/819’, Shigeto Kikuchi, *International Medieval Congress 2023, Session 308: Law and empire: the capitularies of Louis the Pious, 814-840: III*, 2023.7.3

[シンポジウム・ワークショップ パネル(指名)] 「発信・議論・共同研究：日本における外国史研究者の「国際的」活動を考える」、菊地重仁、公開シンポジウム「歴史学の「国際化」とは何か」、オンライン、2023.7.23

[シンポジウム・ワークショップ パネル(指名)] ‘Mobility and (In)stability in the Early Medieval Adriatic Region’, Shigeto Kikuchi, *Water Networks, Islands, and Political Powers in the Global Middle Ages*, 2023.10.7, 2023.10.6～8

「趣旨説明、コメント(中世前期の教皇文書から)」、菊地重仁、中世後期の教皇と文書(2023年度史学会大会西洋史部会部会シンポジウム)、2023.11.12

[シンポジウム・ワークショップ パネル(指名)] ‘Expected and unexpected network-building: Translations of relics and their resonance in the Frankish world’, Shigeto Kikuchi, *Transcending the Tangibility and Intangibility: Religion and Media in Pre-Modern East and West Eurasia* (held at Tokyo Metropolitan University), 2023.11.25, 2023.11.25～26

[シンポジウム・ワークショップ パネル(指名)] ‘A nest of (nests of?) legal compilations as a book: historical analysis of Paris.BnF.MS lat. 9654’, Shigeto Kikuchi, *Legal manuscripts in the Frankish world: Interdisciplinary approaches to the formation and transformation of early medieval legal cultures (8th-11th centuries)*, 2024.3.28, 2024.3.28～29

(4) 共同研究・競争的資金等の研究課題

[科学研究費補助金基盤研究(B)] 「西洋中世における境界地域の統治システムに関する比較史的研究」、高山博、日本学術振興会、JSPS、2019.4～2023.3

[科学研究費助成事業] 「前近代海域ヨーロッパ史の構築：河川・島嶼・海域ネットワークと政治権力の生成と展開」、小澤実 鶴島博和 村田光司 四日市康博 松本涼 宮野裕 橋本雄 高橋謙公 藤井真生 佐藤公美 菊地重仁 長谷川敬 諫早庸一、基盤研究(A)：19H00546、日本学術振興会、2019.4～2024.3

[国際共同研究加速基金] 「西欧初期中世法文化の形成と変容に関する研究：フランク期法・規範史料の「文脈化」、菊地重仁 加藤磨珠枝 加納修 津田拓郎 安藤さやか、国際共同研究強化(B)：19KK0014、日本学術振興会、2019.10～2024.3

[科学研究費助成事業]「中近世ヨーロッパ社会における合意形成の起源と展開—合議制・代議制の理念と現実—」、河原温 加藤玄 三佐川亮宏 堀越宏一 鈴木道也 藤崎衛 黒田祐我 薩摩秀登 大月康弘 高田良太 菊地重仁 甚野尚志 皆川卓、基盤研究 (B) : 20H01336、日本学術振興会、放送大学、2020.4～2023.3

[科学研究費助成事業]「観想修道院による「典礼空間」の形成に関する総合的研究」、大貫俊夫 菊地重仁 金沢百枝 安藤さやか 山本潤、学術変革領域研究 (B) : 20H05719、日本学術振興会、東京都立大学、2020.10～2023.3

[科学研究費助成事業]「中世ヨーロッパにおける多数決原理の形成に関する多角的実証研究」、藤崎衛 河原温 堀越宏一 甚野尚志 薩摩秀登 三佐川亮宏 大月康弘 皆川卓 加藤玄 菊地重仁 高田良太 黒田祐我、基盤研究 (B) : 23H00681、日本学術振興会、東京大学、2023.4～2026.3

[公募研究 (A)]「カール大帝・ルートヴィヒ敬虔帝治下のフランク王国における法の多元性 (768-827 年) : 法・規範テキストのコンピレーションを手掛かりに」、東京大学ヒューマニティーズセンター、2023.10～2024.9

e 社会活動

(1) 学術貢献活動

[企画立案・運営等、セッションチェア]「Workshopsreihe des Projekts: Kompromisse im Mittelalter. Erkundungen eines vernachlässigten Themas (online)」、Jan-Hendryk de Boer (Universität Duisburg-Essen); Jessica Nowak (Universität Wuppertal); Shigeto Kikuchi (Universität Tokio)、2022.11.25～2023.7.14

[セッションチェア] 大会・シンポジウム等「Konsensverlust. Formen des Dissenses in mittelalterlichen Klöstern und Orden、Konsensverlust. Formen des Dissenses in mittelalterlichen Klöstern und Orden」、Das interakademische Projekt: „Klöster im Hochmittelalter: Innovationslabore europäischer Lebensentwürfe und Ordnungsmodelle“ der Heidelberger und der Sächsischen Akademie der Wissenschaften、Forschungsstelle für Vergleichende Ordensgeschichte (FOVOG), TU Dresden、2023.7.6～8

[企画立案・運営等、司会]「中世後期の教皇と文書 (2023 年度史学会大会西洋史部会部会シンポジウム)」、菊地重仁 (史学会大会西洋史部会実行委員)、2023.11.12

[企画立案・運営等、司会] 大会・シンポジウム等「Legal manuscripts in the Frankish world: Interdisciplinary approaches to the formation and transformation of early medieval legal cultures (8th-11th centuries)」、菊地重仁、東京大学 本郷キャンパス 国際学術総合研究棟 1 階 文学部 3 番大教室、2024.3.28～29

f その他

(1) 学会・委員活動

[委員歴] Spicilegium (web journal published by the Japan Society for Medieval European Studies)、Editorial Board、2015.10～

[委員歴] 西洋中世学会、常任委員、2019.6～

26 社会学

教授 白波瀬 佐和子 SHIRAHASE, Sawako

1. 略歴

1997年 オックスフォード大学 University of Oxford (社会学) ・社会学博士
1997年4月 国立社会保障・人口問題研究所室長
2003年4月 筑波大学大学院システム情報工学研究科助教授
2006年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授 (社会学)
2010年8月 東京大学大学院人文社会系研究科教授 (社会学)
2024年3月 定年退職

2. 主な研究活動

a 専門分野

社会階層論、人口社会学、計量分析

b 研究課題

主な研究課題として次の4つに取り組んでいる。

- (1) 少子高齢社会の不平等構造
- (2) 社会的、私的移転に関する実証研究
- (3) 資産の不平等に関する実証研究
- (4) 包摂に関する政策研究

c 概要と自己評価

人口高齢化と階層格差、世帯変動と経済格差の国際比較、資産と社会的移転の研究に加え、2023年度より、「包摂とウェルビーイングに関する政策研究」を本格的に開始した。そこでは、地域・コミュニティの実態を把握するために5つの都道府県(岩手県、福島県、三重県、熊本県、沖縄県)を対象にパイロット調査を実施し、住民のウェルビーイングに関する実態を検討した。加えて、2023年度、「中高年者の生活実態に関する継続調査」第8回目を実施した。また、業績として、2022年度は、「社会階層と社会移動に関する全国調査」(SSM調査)第7回データ分析を中心に英文書籍を刊行し、2023年にはG7広島会議と関連して「ジェンダー平等アドバイザリー評議会」(GEAC)に参画し、Gender Mainstreaming for an Inclusive, Peaceful, and Just Society を日本政府に上梓した。

d 研究業績

(1) 書籍出版物

[編著] Shirahae, Sawako (ed.), Social Stratification in an Aging Society with Low Fertility : The Case of Japan. Springer, 2022

(2) 論文

[学術雑誌] 「コロナ禍における社会の分断：ジェンダー格差に着目して」、『学術の動向』第27巻第5号：12-16、2022

[学術雑誌] 「性的マイノリティと家族研究：特集への招待」、『家族社会学研究』35(1)：44-48、2022

[大学紀要] 「日本の人口とジェンダー格差：コロナ禍の階層社会・日本—文化交流茶話会トーク」、『文化交流研究：東京大学文学部次世代人文学開発センター研究紀要』35：39-45、2023

(3) その他各種論著

[書評] 「コロナ禍の不平等：危機の共有と分断」、『UP』51(1)：1-6、2022

[書評] 「シリーズ『少子高齢社会の階層構造』書評論文リブライ」、『社会学評論』74(3)：554-558、2023

[会議報告書] « Introduction : Gender Mainstreaming for an Inclusive, Peaceful, and Just Society. », 2023

<https://www.mofa.go.jp/mofaj/files/GEAC-2023.pdf>

(4) 講演・口頭発表等

[口頭発表 (一般)] « How did men and women react to the COVID-19 pandemic? Gender differences among Japanese Elderly people » International Sociological Association RC28 (Research Committee on Social Stratification) Summer Conference (University of Notre Dame, U.S.A.), 2022.8

[口頭発表 (一般)] 「家族から社会的包摂を考える世帯構造のジェンダー格差に着目して」、第32回日本家族社会学会大会 (日本女子大学)、2022.9

- [口頭発表 (招待)] 「Japan now: Gender-based and Super-aged Society under the COVID-19」Japan Update 2022, Australian National University (Sydney)、2022.9
- [口頭発表 (招待)] 「コロナ・パンデミックが明らかにした労働のジェンダー格差」、日本学術会議・学術フォーラム、2022
- [口頭発表 (一般)] 「包摂からみる信頼に関する検討——世代・ジェンダー間格差に着目して」、第95回日本社会学会大会 (追手門学院大学)、2022.11.13
- [口頭発表 (招待)] 「『いのちを大切に作る知』について考える」、大阪大学人文学・社会科学を軸とした学術知共創プロジェクト・シンポジウム、2023.3
- [口頭発表 (一般)] 「Gender Issue in Peacebuilding: Gender nexus in building a better Future」Academic Council on the United Nations System Annual meeting (online)、2023.6
- [口頭発表 (招待)] 「What we can see and how we judge: An Inquiry from the gender perspective」The University of Tokyo Institute of Social Science Symposium: Normative Measurements and Social Science (Tokyo)、2023.7
- [口頭発表 (一般)] 「The Intergenerational Conflict Reconsidered: Focusing on the Intention of Wealth Transfer from Parents to Children」the World Congress of Sociology, the International Sociological Association, RC28 (Research Committee on Social Stratification) (Melbourne)、2023.7
- [口頭発表 (一般)] 「The Gender Gap in Unpaid Work in Later Life in Japan」the World Congress of Sociology, the International Sociological Association, RC28 (Research Committee on Social Stratification) (Melbourne)、2023.7
- [口頭発表 (一般)] 「Wealth inequality: Focusing on the intention to leave their wealth to Children」the Workshop of the Research on East Asian Demography and Inequality, Princeton (Tokyo)、2023.7
- [口頭発表 (一般)] 「Wealth inequality and accumulation in later life in Japan」International Sociological Association RC28 (Research Committee on Social Stratification) Summer Conference (Michigan, U.S.A.)、2023.8
- [口頭発表 (一般)] 「Gender differences in the impact of class origin on class destination throughout the life course」American Sociological Association annual meeting (Philadelphia, U.S.A.)、2023.8
- [口頭発表 (一般)] 「富の不平等——子への資産継承意欲に着目して——」、第96回日本社会学会、2023.10
- (5) 共同研究・競争的資金等の研究課題
- クボター東大協創事業：共同研究「グローバルな食料・水・環境の包摂的未来社会の構築」

e その他

(1) 学会・委員活動

- [所属学協会] 国際社会学会・社会階層部門
- [所属学協会] 日本社会学会
- [所属学協会] 日本家族社会学会
- [所属学協会] 数理社会学会
- [委員歴] International Sociological Association (国際社会学会)、副会長、2018～2023
- [委員歴] ISA, Research Committee 28、理事、2018～2023
- [委員歴] International Science Council (国際学術会議)、副会長、2021～

教授 赤川 学 AKAGAWA, Manabu

1. 略歴

- 1990年3月 東京大学大学院社会学研究科社会学修士課程修了
- 1995年4月 東京大学大学院社会学研究科社会学博士課程単位取得退学
- 1995年4月 信州大学人文学部人間情報学科文化情報論講座助手
- 1999年4月 岡山大学文学部行動科学科社会学・文化人類学講座講師
- 2001年4月 岡山大学文学部行動科学科社会学・文化人類学講座助教授
- 2002年4月 信州大学人文学部人間情報学科文化情報論講座助教授

2006年4月 東京大学大学院人文社会系研究科社会学専門分野助教授
2007年4月 東京大学大学院人文社会系研究科社会学専門分野准教授
2018年11月 東京大学大学院人文社会系研究科社会学専門分野教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

社会問題の社会学
歴史社会学

b 研究課題

セクシュアリティの歴史社会学
人口減少社会論
社会問題の構築主義アプローチ
猫社会学

c 概要と自己評価

概要：以下の領域を中心に研究を進めている。

- (1) 社会問題プロセスの理論化
- (2) 近代日本におけるセクシュアリティをめぐる言説の変容
- (3) 歴史社会学の方法論
- (4) 猫社会学の理論と方法の確立

自己評価

(1) に関しては、少子化問題に関する単著『少子化問題の社会学』を2018年に刊行したあと、少子化対策の形成プロセスや評価に関する社会的発信を試みている。また少子化の発生するメカニズムを高田保馬の理論に基づいて説明する単著論文「高田少子化論の進化論的基盤」を公開した。少子化問題の理論的検討については、これで一区切りできたと考えている。(2) に関しては、明治期初頭の性科学書『造化機論』に関する研究を継続しつつ、オナニーに関する言説の歴史に関する単著『なぜオナニーはうしろめたいのか』を公開した。この課題は今後も継続していく。(3) については、歴史社会学の方法論として、佐藤健二の『流言蜚語』を評価する論考を執筆するとともに、歴史社会学に関する論文集『社会の解読力(歴史編)』を編集した。(4) については、猫と人間の関係の進化を文明論・ポストヒューマン社会学の観点から分析する、猫社会学の理論と方法の確立を目指した取り組みに着手した。

d 研究業績

(1) 書籍出版物

[単著] 赤川学「社会学からのクリティカル・シンキング」、菊池聡編『より良い思考の技法』放送大学教材、放送大学教育振興会、2023、205-223頁

[単著] 赤川学「家族はコスバが悪すぎる？結婚しない若者たち、結婚教の信者たち」、現代ビジネス編『日本の死角』、講談社現代新書、2023、115-129頁

(2) その他各種論著

[書評] 安田理央『日本AV全史』(ケンエレブックス)、『週刊読書人』2023年5月5日号6面

[エッセイ] 「13歳からの性：なぜ「性」の話は楽しくないのか」、『月刊WILL』221、270-275、2023.5

[エッセイ] 「13歳からの性：なぜオナニーはうしろめたいのか」、『月刊WILL』222、308-313、2023.6

[エッセイ] 「13歳からの性：女性はいかに自慰を楽しんできたのか」、『月刊WILL』223、310-315、2023.7

[対談] 「13歳からの性：武士道と射精道」、赤川学、今井伸、『月刊WILL』224、299-307、2023.8

[エッセイ] 「13歳からの性：オナ禁という倫理：二つの男らしさ」、『月刊WILL』225、310-315、2023.9

[エッセイ] 「13歳からの性：セックス離れとオナニー依存」、『月刊WILL』226、292-297、2023.10

[巻頭インタビュー] 「「少子化」でもいいじゃないか」、『選択』Vol.49、No.10、p.3、2023.10.1

[対談] 「少子化問題から浮かび上がる人間の本質」、萱野稔人著『人間とは何か?』、株式会社サイゾー、2023年10月6日初版

[エッセイ] 「13歳からの性：『射精責任』を読む」、『月刊WILL』227、244-249、2023.11

[対談] 「13歳からの性⑧：春画一ル VS. オナニー先生 アレを語る」、春画一ル、赤川学、『月刊WILL』228、162-171、2023.11

[エッセイ] 「13歳からの性：精子の行方」、『月刊WILL』229、276-281、2023.12

[エッセイ] 「猫社会学とはなにか」、『kotoba』88-93、2023.12、集英社

[エッセイ]「13 歳からの性：精子の行方（後編）」、『月刊 WiLL』230、268-273、2024.1
[エッセイ]「13 歳からの性：朝勃ちの歴史」、『月刊 WiLL』231、268-273、2024.2
[エッセイ] マス青山（赤川学）「13 歳からの性：性的同意をめぐる困難」、『月刊 WiLL』232、274-279、2024.3
[エッセイ]「なぜ人は猫を飼うのか（1）」、『kotoba』55 号、180-185、2024.3、集英社

(3) **講演・口頭発表等**

[口頭発表（一般）] 赤川学、「猫をめぐる意味と社会問題の構築」、第 95 回日本社会学会大会テーマセッション：猫社会学の応用と展開（2）、桃山学院大学、2022.11.13
[口頭発表（一般）] 赤川学・山浦晴男・祐成保志・井口高志・税所真也、「猫を看取る経験の、質的統合法による体系化」、第 29 回ヒトと動物の関係学会学術大会、東洋大学、2023.3.11
[口頭発表（一般）] 赤川学、「猫社会学からみた犬社会学の展望」、第 96 回日本社会学会大会テーマセッション犬社会学の逆襲 w、立正大学、2023.10.9
[講演] 赤川学、「研究内容：オリジナリティの見つけ方」、国際交流基金次世代日本研究者協働研究ワークショップ、プラザエフ、2023.2.15

(4) **共同研究・競争的資金等の研究課題**

[科学研究費助成事業]「人口減少社会における多重的社会問題の総合的研究」、赤川学 榎原克哉 渡邊隼 出口剛司 井口高志 祐成保志 佐藤雅浩 石島健太郎、基盤研究（B）：22H00902、日本学術振興会、東京大学、2022.4～2027.3
[科学研究費助成事業]「猫と人間の関係を分析する猫社会学の理論と方法の開拓」、赤川学 出口剛司 宮本直美 新島典子 柄本三代子、挑戦的開拓：22K18550、東京大学、2022.6～2025.3
[科学研究費助成事業]「精子の行く先と男性の思惑意識：性行動と生殖の質的検証」、森木美恵 小西祥子 赤川学、基盤研究（C）：21K12508、国際基督教大学、2021.4～2024.3

教 授 **出口 剛司** DEGUCHI, Takeshi

1. 略歴

1993 年 3 月	一橋大学社会学部卒業
1994 年 4 月	東京大学大学院 社会学研究科社会学専攻 修士課程入学
1996 年 3 月	同 人文社会系研究科社会文化研究専攻 修士課程修了
1996 年 4 月	同 博士課程進学
2001 年 3 月	同 博士課程単位取得退学
2001 年 4 月	博士（社会学）学位取得（東京大学）
2001 年 4 月	立命館大学産業社会学部助教授（～2007 年 3 月）
2005 年 9 月	フランクフルト大学社会研究所客員研究員（～2006 年 9 月）
2007 年 4 月	立命館大学産業社会学部准教授（～2008 年 3 月）
2008 年 4 月	明治大学情報コミュニケーション学部准教授
2011 年 4 月	東京大学大学院人文社会系研究科准教授
2020 年 4 月	東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

社会学史 社会学理論

b 研究課題

- (1) フランクフルト学派の学説史研究
- (2) コミュニケーション理論、承認理論に基づく批判的社会理論の展開
- (3) 日本の社会学史の再評価と海外への紹介

c 概要と自己評価

- (1) エーリッヒ・フロムの理性概念とそれに基づく社会批判の再構成を行っている。その成果を国際エーリッヒ・フロム協会主催の国際会議で報告、論文として発表した。現在は後期フロムのナルシズム論の再評価を行う一方、後期ヒューマニズムを生成の哲学の観点から再構成する作業に取り組んでいる。
- (2) 現代資本主義の構造的特質を理論的に解明する。「資本主義的近代化のパラドックス」や現代社会がかかえる社会病理の諸相を承認論、コミュニケーション論の観点から分析している。
- (3) 欧米の社会学理論を背景に戦後日本で発展した社会学理論の独自性に注目し、その現代的意義を再評価すると同時に、国際会議の場で世界に発信している。

d 研究業績

(1) 書籍出版物

[監訳]『加速する社会—近代社会の時間構造』(福村書店、2022)

[共編著]『社会の読解力〈文化編〉』(新曜社、2022、6章「栗原彬における言語政治学の構想—啓蒙的理性からコミュニケーション論の民衆理性へ」)

(2) 論文

[学術雑誌]「民主主義の危機と勃興するイデオロギー—討議による合意と／あるいは承認をめぐる闘争?」、『現代社会学理論研究』第17号(日本社会学理論学会編、2023)

[学術論文]“Development of the critical theory based on the analysis of the literary works on tenderness: Based on Habermas’s thesis and Akira Kurihara’s work.” In Laurence Roulleau-Berger, Li Peilin, Yazawa Shujiro (Eds), Handbook of Post-Western Sociology: From East Asia to Europe. Boston: Brill, 2023

(3) その他各種論著

[その他]「はじめに—学史研究と本学会の未来」、『社会学史研究』第44号(日本社会学史学会編、2022)

[その他]「エーリッヒ・フロムにおける生命と希望の思想—希望なき時代を生きるために」、『福音と世界』2023年7月号(新教出版社、2023)

(4) 講演・口頭発表等

[シンポジウム報告(招待)]「公共圏の時間論的危機」、第17回日本社会学理論学会大会・大会シンポジウム「公共圏の可能性と限界」(名古屋学院大学・オンライン開催)、2022.9

[シンポジウム報告(招待)]「歴史の転換点とフランクフルト学派の挑戦—学際的唯物論から資本主義的近代化のパラドクスまで」、第62回日本社会学史学会大会・大会シンポジウム「学説史を通じて「社会学」とは何だったのかを問うⅡ—1920～60年代諸理論パラダイムの形成」(日本大学)、2023.6

[シンポジウム報告(招待)]「私たちはどのような時間を生きているのか? : 批判理論第四世代とハルトムート・ローザの社会学」、唯物論研究協会第46回研究大会第3分代会「フランクフルト学派の現在」(立命館大学BKCキャンパス)、2023.11

[国際会議報告(招待)]“The Unique Reconstruction of Historical Materialism in Japanese Sociology: The Theoretical Development of ‘Social consciousness’ and ‘Administered Society,’” Kritische Theorie und kulturelle Differenz: Ein deutsch-japanischer Dialog, Goethe-Universität Frankfurt, 4-5th May 2023

[国際会議報告(招待)]“Development of Critical Theory Based on the Analysis of Literary Works on Tenderness: Habermas’s Thesis and Akira Kurihara’s Work,” Conference Post-Western Sociology: From East Asia to Europe, Ecole Normale Supérieure of Lyon, December 12-13, 2023

e 社会活動

(1) 学術貢献活動

[コーディネーター及び司会]「ジークハルト・ネッケル氏特別講義・社会的コンフリクトとしての持続可能性」、明治大学情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター・特別講義(明治大学)、2022.11

[コーディネーター]「生(ライフ)の現場と社会学理論—ヒトではないものとのかわり」(コメンテーター)、日本社会学理論学会研究例会(オンライン開催)、2023.3

f その他

(1) 非常勤講師

明治大学情報コミュニケーション学部、同大学院情報コミュニケーション研究科、立教大学社会学部、上智大学総合人間科学研究科

(2) 学会・委員活動

[所属学協会] 日本社会学会、日本社会史学会、日本社会学理論学会、関東社会学会、日本社会心理学会、世界社会学会、国際エーリッヒ・フロム協会

[委員歴] ジンメル研究会企画委員

准教授 **祐成 保志** SUKENARI, Yasushi

1. 略歴

1997年3月 東京大学文学部行動文化学科社会学専修課程卒業
1997年4月 東京大学大学院人文社会系研究科社会文化研究専攻修士課程入学
1999年3月 同 人文社会系研究科社会文化研究専攻修士課程修了
2001年4月 日本学術振興会特別研究員（DC2、～2003年3月）
2002年3月 東京大学大学院人文社会系研究科社会文化研究専攻博士課程単位取得退学
2004年4月 札幌学院大学社会情報学部講師
2005年5月 博士（社会学）学位取得（東京大学）
2006年4月 札幌学院大学社会情報学部助教授
2007年4月 信州大学人文学部准教授
2012年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授
2019年4月 ブリストル大学政策研究院客員研究員（～2019年9月）

2. 主な研究活動

a 専門分野

ハウジングの社会学、コミュニティの社会学、社会調査史

b 研究課題

- (1) 居住保障と福祉国家の関係についての理論的研究
- (2) 協同主義的な居住実践に関する経験的研究
- (3) 社会調査についての歴史社会学的研究

c 概要と自己評価

(1) 居住ニーズの性質を中心に、居住政策と福祉国家の関係、居住ニーズを満たす資源、居住保障政策の手段、環境社会政策における居住の位置づけ等についての理論的な検討を行い、論文等で発表した。(2) コミュニティをテーマとする分野横断的な共同研究の一環として、協同主義的な居住実践に関する基礎的な考察を行い、共編著において発表した。(3) 比較社会調査史の観点からこれまで進めてきた作業を整理し、講演で発表した。

d 研究業績

(1) 書籍出版物

[編者]『すまいろん 特集＝コモンズと住まい』、112号、2023.2

[分担執筆]『福祉社会学文献ガイド』、福祉社会学会、「ウィリアム・ベヴァリッジ『ベヴァリッジ報告：社会保険および関連サービス』」(pp.250-258)、学文社、2023.11、x, 376p

[共編者]『コミュニティの社会学』、祐成保志 武田俊輔 編、「序章 コミュニティへのまなざし」(祐成保志 武田俊輔 渡邊隼、pp.1-20)「第5章 コミュニティを組織する技術」(pp.117-138)「第8章 居場所の条件」(pp.187-207)「コミュニティの動態をとらえるために」(武田俊輔 祐成保志、pp.233-240)、有斐閣、2023.12、xi, 264p

(2) 論文

[学術雑誌]「NHK 農事番組と地域社会」、舩戸修一 祐成保志 武田俊輔 加藤裕治、『村落社会研究ジャーナル』28巻2号、pp.14-21、2022.4

[論文集（書籍）内論文]「持家取得からみる日本在住外国人の居住格差」、金希相 祐成保志、『住総研 研究論文集・実践研究報告集』49、pp.85-96、2023.3

[学術雑誌]「居住保障と福祉国家」、祐成保志、『福祉社会学研究』20号、pp.31-51、2023.5

[論文集(書籍)内論文]「住居と住宅」、祐成保志、『支援』13巻、pp.73-80、2023.6

(3) その他各種論著

[総説・解説/講演資料等]「NHK 農事番組と地域社会」、舩戸修一 祐成保志 武田俊輔 加藤裕治、『村落社会研究ジャーナル』28巻2号、pp.14-21、2022.4

[総説・解説/講演資料等]「住まいをめぐる社会的想像力」、祐成保志、『家とまちなみ』41巻1号、pp.14-19、2022.5

[書評・文献紹介等]「松村淳著『建築家として生きる』」、祐成保志、『社会学評論』73巻1号、pp.81-83、2022.6

[総説・解説/講演資料等]「コモンズと住まいの接点」、祐成保志、『すまいろん』112号、pp.4-5、2023.2

[総説・解説/講演資料等]「居住をめぐる世論と住宅研究の役割」、祐成保志、『住宅会議』117号、pp.7-8、2023.2

[総説・解説/講演資料等]「特集「文化社会学の楽楽と困難」によせて」、藤田結子 祐成保志、『社会学評論』73巻4号、pp.316-326、2023.3

[総説・解説/講演資料等]「環境社会政策としての「空き家」改修」、祐成保志、『CEL』132号、pp.20-23、2023.3

[会議報告等]「新しい生活困難層」と地域社会学の課題」、祐成保志、『地域社会学会ジャーナル』11号、pp.31-36、2023.7

[総説・解説/講演資料等]「居住支援の課題としての「家族機能の社会化」を考える(前編)」、祐成保志、『エイジングインプレース』163号、pp.11-18、2023.10

[総説・解説/講演資料等]「居住支援の課題としての「家族機能の社会化」を考える(後編)」、祐成保志、『エイジングインプレース』163号、pp.31-36、2024.1

(4) 講演・口頭発表等

[シンポジウム・ワークショップパネル(指名)]「生きがいとウェルビーイングを考えるために」、祐成保志、東京大学高齢社会総合研究機構2022年度シンポジウム、2022.3.14

[シンポジウム・ワークショップパネル(公募)]「From a deprived neighbourhood to an advanced model of care support?」、祐成保志、Shrinking Domesticities Global Seminar Series: Tokyo、2023.7.17

[公開講演、セミナー、チュートリアル、講習、講義等]「社会調査のなかの住まい」、祐成保志、第25期「新風俗学教室」第2回、2023.12.2

[口頭発表(招待・特別)]「社会政策としての住宅政策・再考」、祐成保志、第121回SPSN研究会、2023.12.23

[シンポジウム・ワークショップパネル(公募)]「環境社会政策の焦点としての住まい」、祐成保志、名古屋大学環境学研究科・地球規模課題8「環境と人間のウェルビーイング」シンポジウム、2024.3.29

(5) 共同研究・競争的資金等の研究課題

[科学研究費助成事業]「ベーシック・サービスとしての居住支援に関する社会的基礎研究」、祐成保志、基盤研究(C): 21K01856、日本学術振興会、東京大学、2021.4~2024.3

[科学研究費助成事業]「住宅セーフティネットの再構築に関する実態・制度・比較分析」、平山洋介 祐成保志 佐藤岩夫 川田菜穂子、基盤研究(B): 21H01504、日本学術振興会、神戸大学 摂南大学、2021.4~2024.3

[科学研究費助成事業]「100年人生対応の包摂型地域創出のための統合型地域診断に基づく地域再生手法の研究」、大月敏雄 飯島勝矢 檜山敦 菅原育子 二瓶美里 孫輔卿 田中敏明 井口高志 祐成保志 松田雄二 三浦貴大 李鎔根、基盤研究(A): 21H04580、日本学術振興会、東京大学、2021.4~2026.3

[科学研究費助成事業]「人口減少社会における多重的社会問題の総合的研究」、赤川学 櫛原克哉 渡邊隼 出口剛司 井口高志 祐成保志 佐藤雅浩 石島健太郎、基盤研究(B): 22H00902、日本学術振興会、東京大学、2022.4~2027.3

e 社会活動

(1) 社会貢献活動

[編集]『2021年度社会調査実習成果報告書: 地域共生社会に向けた居住支援の展開と課題』、祐成保志 税所真也 編、東京大学大学院人文社会系研究科・文学部社会学研究室、2022.5

[その他]「マンションの根本的矛盾: 崩れた住宅政策の前提」、祐成保志、朝日新聞取材班『朽ちるマンション 老いる住民』、朝日新書、pp.175-180、2023.1

[報告書執筆]「ハウジングの未来: 居住保障政策の目的と手段を考える」、祐成保志、『『包括的居住支援の確立及び実現に向けた調査研究』2022年度報告書』、全国居住支援法人協議会、pp.49-62、2023.3

[編集]『2022年度社会調査実習成果報告書: 地域共生社会に向けた居住支援の展開と課題 II』、祐成保志 税所真也 編、東京大学大学院人文社会系研究科・文学部社会学研究室、2023.6

[寄稿]「住まいの不平等と政府の責任」、祐成保志、『公明』216号、pp.52-57、2023.12

f その他

(1) 非常勤講師

中央大学法学部、「社会学1・2」、2022.4～2024.3

早稲田大学教育学部、「公共市民学研究（社会調査）」、2022.4～2022.9、2023.4～2023.9

(2) 学会・委員活動

[委員歴] 日本生活学会、『生活学論叢』編集委員、2014.5～（編集委員長、2021.5～2022.5）

[委員歴] 日本生活学会、理事、2016.5～

[委員歴] 都市住宅学会、編集委員会・学術委員会委員、2018.5～

[委員歴] 都市住宅学会、理事、2020.5～

[委員歴] 日本社会学会、『社会学評論』編集委員、2021.11～2023.10

准教授 **井口 高志** IGUCHI, Takashi

1. 略歴

1998年3月	東京大学文学部行動文化学科社会学専修課程卒業
1998年4月	東京大学大学院人文社会系研究科社会文化研究専攻修士課程入学
2000年3月	同 人文社会系研究科社会文化研究専攻修士課程修了
2000年4月	同 博士課程進学
2003年3月	同 博士課程単位取得退学
2003年4月	日本学術振興会特別研究員（PD）
2006年3月	博士（社会学）学位取得
2006年4月	お茶の水女子大学文教育学部 講師
2007年4月	信州大学医学部保健学科 講師
2011年5月	奈良女子大学生生活環境学部生活文化学科 准教授（～2012年3月）
2012年4月	奈良女子大学大学院生活環境科学系生活文化学領域 准教授
2018年10月	東京大学大学院人文社会系研究科 准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

医療社会学、ケアの社会学、認知症研究

b 研究課題

- （1）認知症をめぐるケア・支援・運動の展開に関する経験的研究
- （2）医療社会学・障害学の知見を踏まえた批判的老年学・批判的認知症研究に関する理論的研究
- （3）遺伝性疾患保因者の経験・アイデンティティ・社会関係に関する経験的研究

c 概要と自己評価

（1）に関しては、認知症政策や当事者運動において、注目を集めたり争点になったりしている認知症予防と認知症との共生・備えなどの概念との関係を、当事者の言説や新聞記事のテキスト分析の経験的分析から検討し、国際シンポジウムや社会学系・医療系での学会報告、エッセイ等の形で報告した。更なる国際・学際的発信と論文化が課題である

（2）に関しては、（1）での経験的分析によって見られた現状をどのように評価するかという課題と関わっており、経験的研究を行いつつ、理論的な検討を行ってきた。そうした作業の前提として、社会学や医療社会学の基礎理論や概念を整理する作業を行なって副次的に教科書的な共著の形で発表をしている。（3）に関しては、2023年度までの患者調査を踏まえ、最終成果報告に向けて研究グループ内での研究会を行ないつつ、大量のテキストデータを分析する方法を模索し、分析を進めてきた。2024年度に報告書や共著のチャプターの形で一端を報告する予定である。

d 研究業績

(1) 書籍出版物

[共編者]『支援 vol.12』、『支援』編集委員会、2022.5

[共編者]『支援 vol.13』、『支援』編集委員会、2023.6

[分担執筆]『福祉社会学文献ガイド』、福祉社会学会、「アーヴィング・ゴフマン『スティグマの社会学：烙印を押されたアイデンティティ』」、学文社、2023.11、x、376p

[分担執筆]『家族社会学事典』、日本家族社会学会、「高齢者のケア」、丸善出版、2023.12、xxiii、725p

[共著]『系統看護学講座 社会学 第7版』、石川ひろの 井口高志 佐々木洋子 戸ヶ里泰典、「序章」「第1章 社会学の基礎概念」(9-30)「第2章 社会学的观点からのモノの見方」(31-45)「第3章 社会学の諸領域と保健医療」(47-66)「第15章 ケアの社会学」(245-257)、医学書院、教科書、2024.1、10、264p

(2) 論文

[学術雑誌]「障害者の自立生活における「個別的配慮」の実践」、井口高志、『社会保障研究 = Journal of Social Security Research』7巻2号、pp.122-135、2022.9

[学術雑誌]「Rethinking the conflict between prevention and preparedness: towards a sociological perspective on coexisting with dementia」、Iguchi Takashi、Gender and Culture in Asia、7巻、pp.11-24、2023.3

(3) その他各種論著

[書評・文献紹介等]「書評に込めて（『認知症社会の希望はいかにひらかれるのか：ケア実践と本人の声をめぐる社会学的探求』（評者：深田耕一郎））」、『ソシオロジ』67巻1号、pp.176、2022.6

「書籍紹介：『認知症社会の希望はいかにひらかれるのか：ケア実践と本人の声をめぐる社会学的探求』」、井口高志、UTokyo BiblioPlaza (https://www.u-tokyo.ac.jp/biblioplaza/ja/H_00084.html)、2022.12

「立ち止まって予防を考え、備えの思想を展開する：認知症との共生にむけた課題」、井口高志、『すまいろん』112号、pp.30-33、2023.2

[その他記事]「「スピリチュアリティ」と言わずに死や超越的なことを言葉にする：編集委員の経験したモヤモヤからの鼎談」、田代志門 浮ヶ谷幸代 井口高志、支援 / 『支援』編集委員会 編、13巻、pp.168-219、2023.6

(4) 講演・口頭発表等

「介助システムの不断の調整に伴う困難：ELSIから考える Covid-19 流行下での地域生活支援（1）」、山下幸子 土屋葉 井口高志 中根成寿、第20回福祉社会学会大会、2022.7.2

「陽性者確認後発地域における住民行動：ELSIから考える Covid-19 流行下での地域生活支援（2）」、中根成寿 井口高志 土屋葉 山下幸子、第20回福祉社会学会大会、2022.7.2

「病いや疾患との共生とは何か？：現代日本社会における認知症予防と備えの倫理の変遷から考える」、井口高志、国際シンポジウム「アジアの社会におけるヘルスケアの現在—子どもから高齢期まで」、2022.12.10（招待あり）

「1980年代以降の日本社会における認知症予防の論理：新聞記事テキストの分析から」、第96回日本社会学会大会、2023.10.9

「認知症はいかに理解・包摂されようとしてきたか？：社会学から見た認知症をめぐる実践」、井口高志、第38回日本老年精神医学会大会、2023.10.13（招待あり）

(5) 共同研究・競争的資金等の研究課題

[科学研究費助成事業]「地域共生社会における「意思」と「主張」をめぐる人びとの「支援実践」の領域横断研究」、井口高志 木下衆 海老田大五朗 前田拓也、基盤研究 (C)：20K02109、日本学術振興会、東京大学、2020.4～2025.3

[科学研究費助成事業]「100年人生対応の包摂型地域創出のための統合型地域診断に基づく地域再生手法の研究」、大月敏雄 飯島勝矢 檜山敦 菅原育子 二瓶美里 孫輔卿 田中敏明 井口高志 祐成保志 松田雄二 三浦貴大 李鎔根、基盤研究 (A)：21H04580、日本学術振興会、東京大学、2021.4～2026.3

[科学研究費助成事業]「人口減少社会における多重的社会問題の総合的研究」、赤川学 櫛原克哉 渡邊隼 出口剛司 井口高志 祐成保志 佐藤雅浩 石島健太郎、基盤研究 (B)：22H00902、日本学術振興会、東京大学、2022.4～2027.3

[科学研究費助成事業]「社会学を基盤とした批判的認知症研究の構築と「認知症社会」の記述・評価・構想」、井口高志、基盤研究 (C)：23K01767、日本学術振興会、東京大学、2023.4～2027.3

e 社会活動

(1) 社会貢献活動

「経済産業省サービス産業強化事業費補助金（認知症共生社会に向けた製品・サービスの効果検証事業）」における審査委員会および評価委員会委員（2020、21、22年度）、2020.6～2023.3.31

(2) 学術貢献活動

令和4年度武山基金による出版奨励事業費助成レフェリー、2022

令和5年度東京大学学術成果刊行助成審査員、2023.12～2024.3

第10回日本生活学会博士論文賞選考委員の委嘱、2023

f その他

(1) 学会・委員活動

[委員歴] 関西社会学会、『フォーラム現代社会学』専門委員、2019.10～

[委員歴] 日本保健医療社会学会、理事（学会誌編集委員長）、2021.5～2023.5、理事（広報担当）、2023.5～

[委員歴] 福祉社会学会、理事（副事務局長）、2021.7～2023.6

[委員歴] 日本学術会議、国際委員会国際対応戦略立案分科会外部有識者、2022.3～2023.3

[委員歴] 日本社会学会、『社会学評論』専門委員、2022.4～2023.10、代議員、2023.4～2027.8

[委員歴] 日本家族社会学会、『家族社会学研究』第11期専門委員、2022.9～2025.9

准教授 **瀧川 裕貴** TAKIKAWA, Hiroki

1. 略歴

1998年3月	東京大学文学部行動文化学科社会学専修課程卒業
1998年4月	東京大学大学院人文社会系研究科社会文化研究専攻社会学専門分野修士課程入学
2000年3月	同 課程修了
2000年4月	東京大学大学院人文社会系研究科社会文化研究専攻社会学専門分野博士課程進学
2003年3月	同 単位取得退学
2003年4月	日本学術振興会特別研究員（PD・東京大学）（～2006年3月）
2006年11月	博士（社会学）（東京大学）取得
2007年2月	総合研究大学院大学葉山高等研究センター上級研究員（～2007年3月）
2007年7月	東京大学産学連携本部リサーチフェロー（～2007年11月）
2007年12月	総合研究大学院大学葉山高等研究センター上級研究員（～2010年3月）
2010年4月	総合研究大学院大学学融合推進センター特別研究員（～2011年3月）
2011年5月	総合研究大学院大学先端科学研究科特別研究員（～2012年3月）
2012年4月	東北大学大学院文学研究科助教（～2012年10月）
2012年11月	東北大学国際高等研究教育機構先端融合シナジー研究所助教（～2013年3月）
2013年4月	東北大学国際高等研究教育機構学際科学フロンティア研究所助教（名称変更）（～2018年3月）
2014年2月	Visiting Researcher, Institute for Research in the Social Sciences, Stanford University（～2015年8月）
2018年4月	東北大学災害科学国際研究所助教（～2019年3月）
2019年4月	東北大学大学院文学研究科准教授（～2022年3月）
2022年4月	東京大学大学院人文社会系研究科准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

数理社会学 計算社会科学

b 研究課題

- (1) 計量的手法を用いた社会学の理論と方法論の再構築
- (2) 文化現象、意味現象の計算社会学
- (3) パンデミックにレジリエントな都市構造の研究

c 概要と自己評価

- (1) については、行為や対象物の意味についてのこれまでの社会学理論を計算モデルを用いてフォーマライズする道筋を示した。この成果は共同編集した英文書籍において出版した。
- (2) については、人々の幸福に関する態度や意味づけを大規模テキストデータや連想マッピングサーベイ調査などの手法により解明した。これらの成果は国際学会等で発表した。
- (3) については、大規模移動データを用いて、東京の移動パターンを探索的に明らかにした。成果は国内外の学会で発表した。

d 研究業績

(1) 書籍出版物

- [分担執筆] 瀧川裕貴ほか「ソーシャル・ディスタンス政策のメンタルヘルスへの影響」、加藤晋ほか編著『パンデミックと社会科学』、勁草書房、2023
- [分担執筆] 瀧川裕貴「社会学方法論としての計算社会科学」、北田暁大・筒井淳也編著『岩波講座 社会学 第1巻 理論・方法』、岩波書店、2023
- [共著] Sato, Yoshimichi, Takikawa, Hiroki(eds.), 2024, Sociological Foundations of Computational Social Science, Springer 総ページ124; 9789819994311

(2) 論文

- [学術雑誌] Oishi K, Ito H, Murase Y, Takikawa H, Sakamoto T. Evolution of global development cooperation: An analysis of aid flows with hierarchical stochastic block models. Plos one. 2022 Aug 3;17(8):e0272440
- [学術雑誌] Lyu Z. and Takikawa, H., 2022, The Disparity and Dynamics of Social Distancing Behaviors in Japan: Investigation of Mobile Phone Mobility Data, JMIR Medical Informatics 10(3) e31557-e31557
- [学術雑誌] Lyu, Z. and Takikawa, H., 2022. Media framing and expression of anti-China sentiment in COVID-19-related news discourse: An analysis using deep learning methods. Heliyon, 8(8), p.e10419
- [学術雑誌] 瀧川裕貴・永吉希久子・呂沢宇・下窪拓也・渡辺誓司・中村美子「ソーシャルメディア言論分析の方法①：2020年1月から辞任までの安倍首相に対するTwitter上の投稿分析を事例として」、『放送研究と調査』3月号、pp.70-85、2023
- [学術雑誌] 永吉希久子・瀧川裕貴・呂沢宇・下窪拓也・渡辺誓司・中村美子「ソーシャルメディア言論分析の方法②：安倍首相に対するTwitter上の投稿分析を事例としたトピックモデルの適用」、『放送研究と調査』4月号、pp.26-43、2023
- [学術雑誌] 瀧川裕貴・藤原翔「社会学方法論と機械学習」、『社会と調査』31、pp.5-12、2023

(3) 講演・口頭発表等

- [口頭発表（一般）] 瀧川裕貴、呂沢宇、謝拓文、齋藤崇治、石橋拳「国会図書館全文テキストデータによる文化の幾何学アプローチの検証」、第74回数理社会学会、2023.3.8、筑波大学
- [口頭発表（一般）] Takikawa, H., 2023, Macrosociological Experiments on Identity Signaling in an Online Discussion Site, 15th Annual Conference of the International Network of Analytical Sociologists (INAS), June 8-9, 2023, Princeton University
- [口頭発表（一般）] Takikawa, Hiroki, 2023, "Exploring multi-dimensional concept of well-being thorough geometry of culture approach", The International Conference on Computational Social Sciences 2023, Denmark, 2023.7.20

(4) 共同研究・競争的資金等の研究課題

- 「民族誌データと数理モデルの融合による社会構造変動理論の構築：格差に着目して」、瀧川裕貴 毛塚和宏 藤岡悠一郎 田村光平、日本学術振興会 科学研究費助成事業、挑戦的研究（萌芽）、2019.6～2022.3
- 「偏見の顕在化にもとづく排外意識高揚メカニズムの検証」、永吉希久子 田辺俊介 瀧川裕貴、日本学術振興会 科学研究費助成事業、基盤研究（C）、2020.4～2023.3
- 「ビッグデータ分析と実験の統合によるオンライン社会における場のダイナミクスの解析」、瀧川裕貴 中井豊 大林真也 稲垣佑典 阪本拓人 常松淳、日本学術振興会 科学研究費助成事業、基盤研究（B）、2020.4～2023.3
- 「パンデミックに備える社会的データ収集枠組みの構築と数理モデルによるネットワーク介入の有効性評価」、瀧川裕貴、科学技術振興機構 戦略的な研究開発の推進 戦略的創造研究推進事業 さきがけ、2021～2024
- 「文化実践の多元性と境界の変容・融合に関する研究—文化的オムニボアとは何か—」、片岡栄美 村井重樹 川崎賢一 南田勝也 瀧川裕貴、日本学術振興会 科学研究費助成事業、基盤研究（B）、2021.4～2024.3
- 「計算社会科学の社会学的基盤の構築」、佐藤嘉倫 瀧川裕貴 藤原翔、日本学術振興会 科学研究費助成事業、挑戦的研究（萌芽）、2021.7～2024.3

「グローバル時代におけるグローバルな不平等とローカルな不平等の関係分析」、佐藤嘉倫 永吉希久子 瀧川裕貴 眞田英毅、日本学術振興会 科学研究費助成事業、基盤研究（B）、2021.4～2025.3

「マクロ社会学実験によるデジタル社会秩序形成の理論構築」、大林真也 稲垣佑典 瀧川裕貴、日本学術振興会 科学研究費助成事業、基盤研究（C）、2023.4～2026.3

「ビッグデータを用いた社会秩序問題の解明—計算社会秩序論の創成—」、佐藤嘉倫 呂沢宇 小田中悠 瀧川裕貴、日本学術振興会 科学研究費助成事業、挑戦的研究（萌芽）、2024.6～2026.3

「格差・不平等と社会的分断の実態把握とその解決のため大規模調査による社会科学的研究」、藤原翔 永吉希久子 有田伸 香川めい 中澤渉 長松奈美江 瀧川裕貴 保田時男、日本学術振興会 科学研究費助成事業、特別推進研究、2023.4～2030.3

准教授 **高谷 幸** TAKAYA, Sachi

1. 略歴

2001 年 3 月 神戸大学法学部法律学科卒業

2001 年 4 月 京都大学大学院人間・環境学研究科環境関連専攻博士前期課程入学

2003 年 3 月 同修了

2003 年 4 月 京都大学大学院人間・環境学研究科共生文明学専攻博士後期課程進学

2007 年 3 月 同 研究指導認定退学

2007 年 7 月 移住労働者と連帯する全国ネットワーク専従事務局員（～2009 年 3 月）

2009 年 4 月 日本学術振興会特別研究員（PD）（～2011 年 9 月）

2010 年 3 月 博士（人間・環境学）学位取得

2011 年 10 月 岡山大学大学院社会文化科学研究科准教授（～2016 年 9 月）

2016 年 10 月 大阪大学大学院人間科学研究科准教授（～2021 年 3 月）

2021 年 4 月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

国際社会学・移民研究

b 研究課題

- （1）在日移民の帰属と排除に関する経験的・理論的研究
- （2）日本における移民政策・実践についての経験的・理論的研究

c 概要と自己評価

（1）に関しては、無登録移民の収容と抵抗に関する共著を出版したほか、無登録移民の抵抗に関する論文を学会誌に、フィリピン女性の帰属に関する論文を商業誌に寄稿した。（2）については、移民政策について基調講演や招待報告を行う機会を得たほか、日本における移民労働者の受け入れに関するシンポジウムを企画し、報告も行った。

d 研究業績

(1) 書籍出版物

- [分担執筆]『現代思想 2022 年 5 月号 特集=インターセクショナリティ —複雑な〈生〉の現実をとらえる思想—』、「交差的な帰属」、青土社、2022.4.27、270p
- [分担執筆]『住む・棲む』、檜垣立哉編、「第 6 章 帰属はいかに可能か」、大阪大学出版会、2022.12、ix, 202, 7p
- [共著]『入管を問う：現代日本における移民の収容と抵抗』、岸見太一 高谷幸 稲葉奈々子、人文書院、2023.7、268p

(2) 論文

[学術雑誌]「コロナ禍のアセンブリ：入管法改定案抗議運動からみる対面的公共空間の意味」、高谷幸、『日本都市社会学会年報』41 号、pp.20-38、2023.9

(3) その他各種論著

「講演記録 日本における移民の現状と移民政策：移民労働者受け入れ政策に着目して—第 31 回 小出記念日本語教育学会年次大会」、高谷幸、『小出記念日本語教育学会論文集 = The journal of Koide Japanese Language Teaching Association』31 巻、pp.214-222、2023.3.31

(4) 講演・口頭発表等

[口頭発表 (一般)] 「「ゾンビ・カテゴリー」としての単純労働者」、高谷幸、シンポジウム『検証・日本の移民政策』、2022.4.16

[シンポジウム・ワークショップ パネル (指名)] “How time is important: Persistence and transformation of migrant worker policy in Japan as a ‘latecomer’”, TAKAYA Sachi, Japanese-German Center Berlin and East Institute of East Asian Studies, University of Duisburg-Essen Symposium, Attractive for Immigrants? Migrants’ Life Satisfaction in Host Countries in Comparison、2022.6.24

[シンポジウム・ワークショップ パネル (指名)] 「コロナ禍における移民の生活と都市・公共空間の可能性と限界」、高谷幸、シンポジウム「コロナ禍における都市空間と排除」日本都市社会学会、2022.9.14

[シンポジウム・ワークショップ パネル (指名)] 「現代日本における無登録移民の「犯罪者化」・再考」、高谷幸、シンポジウム：レイシャル・プロファイリングを考える、2023.5.27

[シンポジウム・ワークショップ パネル (指名)] 「コロナ下における移民現象と国境規制にみる脱国民化と(再)国民化」、高谷幸、関東社会学会大会シンポジウム、2023.6.4

[口頭発表 (一般)] “Unexchanged glances, encountering bodies: Ways of coexisting in “super-diversity” in an urban area in Japan”, TAKAYA Sachi, EAJS 2023 conference、2023.8.18

[口頭発表 (一般)] “Reproductive politics of migrant women in the post-developmentalism in Japan”, TAKAYA Sachi, The 19th EASP conference、2023.9.14

(5) 共同研究・競争的資金等の研究課題

[科学研究費補助金基盤研究 (C)] 「スーパードIVERSITY状況におけるエスニック境界の再編」、高谷幸、日本学術振興会、2019.4～2023.3

[科学研究費助成事業] 「民主的实践とシティズンシップの転換：日韓比較による分析枠組みの構築」、遠藤知子 二羽泰子 高谷幸、国際共同研究加速基金 (国際共同研究強化 (B)) : 21KK0030、日本学術振興会、大阪大学、2021.10～2026.3

[科学研究費助成事業] 「共創知による分断社会の超克から共生へ—人文学／社会科学 2.0 へのアップデート」、川端亮 鄭幸子 宮前良平 稲場圭信 高谷幸 齊藤貴浩 渥美公秀 松村暢彦 吉川徹 石塚裕子、基盤研究 (B) : 23H00873、日本学術振興会、大阪大学、2023.4～2026.3

e 社会活動

(1) 社会貢献活動

[講師] 講演会「社会学から考えるマイノリティと差別」、TU-RIPS 第 4 回セミナー、津田塾大学総合政策研究所、2022.5.27

[講師] 講演会「日本における移民の現状と移民政策——移住労働者受け入れ政策に着目して」、第 31 回小出記念日本語教育学会年次大会、小出記念日本語教育学会、2022.6.25

[講師] 出前授業「社会学と移民たちが教えてくれたこと」、桐光学園高校、2022.7.9

[講師] その他「移民からみる境界の現代的変容」、東京大学公開講座第 135 回 2022 年秋季「境界」、東京大学、2022.11.26

[講師] 講演会「多様性と公正な社会づくり：移民、エスニック・マイノリティをめぐる差別から考える」、第 3 回 OTD アカデミア、OTD 研究会、2023.8.7

27 社会心理学

教授 亀田 達也 KAMEDA, Tatsuya

1. 略歴

1982 年	東京大学文学部卒業 (社会心理学専修課程)
1989 年	University of Illinois at Urbana-Champaign.Ph.D. (Department of Psychology)
1989 年	東京大学大学院社会学研究科博士課程退学
1989 年 4 月	東京大学文学部助手
1991 年 4 月	東洋大学社会学部講師
1994 年 4 月	北海道大学文学部助教授
1997 年 7 月	Fulbright fellowship (University of Colorado at Boulder.Northwestern University)
2000 年 4 月	北海道大学大学院文学研究科教授
2001 年 8 月	Deutscher Akademischer Austausch Dienst Research Fellow (Max Planck Institute in Berlin.Center for Adaptive Behavior and Cognition)
2008 年 8 月	Residential Fellow.Center for Advanced Study in the Behavioral Sciences at Stanford University
2012 年 4 月	北海道大学社会科学実験研究センター長 (兼務)
2014 年 10 月	東京大学大学院人文社会系研究科教授
2024 年 3 月	退職

2. 主な研究活動

a 専門分野

社会心理学、実験社会科学、行動生態学

b 研究課題

社会的意思決定

c 概要と自己評価

概要

人が社会場面で行うさまざまな意思決定について、以下の3つのテーマを中心に研究している。

(1)「集合知」の認知・生態学的基盤の理解

個人のもつさまざまな情報をよりよい社会的決定のためにどのように集約するのかという問いは、21世紀の社会科学の直面する重要課題の1つである。本プロジェクトでは、近年、生物学領域と情報科学領域で大きな注目を集めている社会性昆虫の「群知能」(swarm intelligence)に関する知見を参考にしながら、人間の集合行動における「集合知」の発生可能性について検討している。人間集団において集合知の生まれる認知的・生態学的な条件について、数理モデル、コンピュータ・シミュレーション、種間比較実験、インターネット実験などを用い理論的・実証的に明らかにする。

(2)「正義」の脳科学的・行動的基盤の理解

富や権力の配分を含む「社会のあり方」に関する価値対立は、“Occupy Wall Street”運動に示されるように、喫緊の政治的・社会的課題になっている。本プロジェクトは、「社会のあり方」に関する人間の価値判断がどのような行動・認知・神経科学的メカニズムを持つのかを検討する。人文・社会科学で蓄積されてきた規範的理論(「あるべき行為・社会とは何か」に関する論考)との対応関係を視野に入れながら、計算論的モデリング、MRIを用いた脳画像計測、eye-trackerを用いた視線計測、末梢自律神経反応の計測、内分泌反応計測などを含む、行動・認知・神経科学の研究手法を用いて、「社会価値」がどのように獲得され、私たちの心にどのように実装されるのかを実証的に探る。

(3)「共感性」の認知・神経基盤の理解

「ヒトの共感能力とは何か」という問いは、社会的存在としての人間を考える上で極めて重要である。痛みや恐れ・興奮が集団内で伝播するといった「原初的な共感」は、群れ生活を営む動物が同種他個体の反応をモニターし、その反応を自らも引き受けることで、捕食者の出現などの環境変化に直ちに反応できるように身体的に準備するといった適応的機能をもつだろう。一方、ヒトに特徴的とされる「高次共感」の機能的意義についてはほとんど分かっていない。本プロジェクトでは、「痛み反応の同期化現象」を軸に、ヒトの原初的な共感と高次共感の相互作用を探索。また、相手との関係に応じて共感性がどのように変化するのかについて、注意配分や情報探索行動、自律神経系反応の計測

を軸に解析し、得られた結果を他の動物種と比較する。さらに、課題遂行中の脳活動を fMRI により計測することで、共感の質・量の違いと相関する脳部位を特定し、これらの脳部位の賦活パターンが行動の個人差とどのように連動するのかについても併せて解明しようとする。

自己評価

上記の3つのプロジェクトは、

- (a) 基盤研究S「集合行動の認知・神経・生態学的基盤の解明」(2016-20(平成28-令和2)年度)
 - (b) JST 戦略的創造研究推進事業(CREST)「脳領域/個体/集団間のインタラクション創発原理の解明と適用」(2017-23(平成29年9月-令和5年3月)研究代表 津田一郎・中部大学教授)
 - (c) 科学研究費・新学術領域研究(研究領域提案型)「ヒト社会における共感性」(2013-17(平成25-29)年度)
- の支援を受けて行われた。いずれも、生物学・脳科学・情報科学・複雑系科学・経済学・倫理学・法哲学の研究者とのコラボレーションを軸に、PD・大学院生などの若手をチームメンバーとするプロジェクト型研究である。数年間に亘る密接な協同の結果、文理あるいは専門の壁を超えた共通理解が大きく進み、共通概念のもとに研究を展開できる段階に達している。下記に見るように、その成果の一端は、国際誌の論文や、ハンドブック・辞典のチャプターとして公刊されている。今後は新しい計測・モデル技法を取り入れつつ、コラボレーションをさらに拡充する。

d 研究業績

(1) 書籍出版物

[単著][教科書・教材]『大学4年間の社会心理学が10時間でざっと学べる』、亀田達也、KADOKAWA、2023.9.4、240p

(2) 論文

[学術雑誌]「Information aggregation and collective intelligence beyond the wisdom of crowds」、Tatsuya Kameda Wataru Toyokawa R. Scott Tindale、Nature Reviews Psychology、1巻6号、pp.345-357、2022.4.25

[学術雑誌]「Insights about the common generative rule underlying an information foraging task can be facilitated via collective search.」、Aoi Naito Kentaro Katahira Tatsuya Kameda、Scientific reports、12巻1号、p.8047、2022.5.16

[学術雑誌]「Behavioral and neuro-cognitive bases for emergence of norms and socially shared realities via dynamic interaction」、Kiri Kuroda Yukiko Ogura Akitoshi Ogawa Tomoya Tamei Kazushi Ikeda Tatsuya Kameda、Communications Biology、5巻1号、p.1379、2022.12.15

[学術雑誌]「Neural Basis of Social Influence of Observing Other's Perception in Dot-Number Estimation」、Akitoshi Ogawa Tatsuya Kameda Hironori Nakatani、Neuroscience、515巻、pp.1-11、2023.2.9

[学術雑誌]「Majority rule can help solve difficult tasks even when confident members opt out to serve individual interests」、黒田起吏、高橋茉優、亀田達也、Kuroda.K..Takahashi.M..& Kameda.T.、Scientific Reports、2023.9.10

[学術雑誌]「Collective intelligence under a volatile task environment: A behavioral experiment using social networks and computer simulations」、内藤碧、増田直樹、亀田達也、Naito.A..Masuda.N..& Kameda.T.、Interdisciplinary Information Sciences、2024.1.3

(3) その他各種論著

「Majority rule can help groups solve difficult tasks even when confident members opt out to serve individual interests」、Kiri Kuroda Mayu Takahashi Tatsuya Kameda、2023.3.28

「Accordance and conflict between religious and scientific precautions against COVID-19 in 27 societies」、Theodore Samore Daniel M.T. Fessler Adam Maxwell Sparks Colin Holbrook Lene Aaroe Carmen Gloria Baeza María Teresa Barbato Pat Barclay Renatas Berniūnas Jorge Contreras-Garduño Bernardo Costa Neves Angélica Nascimento de Oliveira Maria del Pilar Grazioso Pinar Elmas Peter Fedor Ana Maria Fernandez Regina Fernández-Morales Leonel Garcia-Marques Paulina Giraldo-Perez Pelin Gul Fanny Habacht Youssef Hasan Earl John Cedo Hernandez Tomasz Jarmakowski Shanmukh Vasant Kamble Tatsuya Kameda Bia Kim Tom Kupfer Maho Kurita Norman, et al.、2023.7.3

「Halo effect of faces and bodies: Cross-cultural similarities and differences between German and Japanese observers」、Kordsmeyer.T.L.Freund.D..上島敦史、黒田起吏、亀田達也& Penke.L.、Kordsmeyer.T.L.. Freund.D.. Ueshima.A.. Kuroda.K..Kameda.T.& Penke.L.、Personality Science、2024

(4) 講演・口頭発表等

「Information aggregation and collective intelligence beyond the wisdom of crowds」、亀田達也、ACM Collective Intelligence 2022 (Online: Max Planck Institute for Human Development.Germany)、2022.10.20

「Reducing variance or helping the worst-off? Behavioral and neurocognitive bases for distributive norms」、Tatsuya Kameda、DMfO (Decision Making for Others)ワークショップ (University of Portsmouth.UK)、UK、University of Portsmouth、2022.10.27

「カラヴァッジョ 絵画の鑑賞者の心の深層を探る——美術史と神経科学の実験美術史——」、亀田達也、イタリア文化会館講演会、2023.4.6

「社会科学の中のグループ・ダイナミクス 共感・分配・規範をめぐる一考察」、亀田達也、日本グループ・ダイナミクス学会第 69 回大会（高知工科大学）、2023.10.10

(5) 共同研究・競争的資金等の研究課題

[科学研究費助成事業]「集合的意思決定のメカニズム：計算モデルによる集合知発生条件の解明」、亀田達也 伊澤栄一 小川昭利 片平健太郎、基盤研究（A）：23H00074、日本学術振興会、東京大学、2023.4～2028.3

e その他

(1) 学会・委員活動

[所属学協会] 日本心理学会、1982～

教授 唐沢 かおり KARASAWA, Kaori

1. 略歴

1992 年	University of California.Los Angeles Ph.D
1992 年	京都大学大学院文学研究科博士後期課程
1992 年 4 月	名古屋明德短期大学講師
1995 年 4 月	日本福祉大学情報社会科学部助教授
1999 年 6 月	名古屋大学情報文化学部助教授
2001 年 4 月	名古屋大学大学院環境学研究科助教授
2006 年 10 月	東京大学大学院人文社会系研究科准教授
2010 年 8 月	東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

社会心理学

b 研究課題

- 1) 心の知覚と道徳的判断
- 2) スマートシティにおける諸技術への態度
- 3) 学際研究における社会心理学の役割—科学技術の ELSI を事例として

c 概要と自己評価

概要

1) 心の知覚と道徳的判断：近年の社会心理学は、私たちが道徳的事柄、公正さに関心を抱く「モラル・エージェント」であるという人間観を提出している。この研究課題は、他者の心的状態（意図・動機・態度・感情など）の推論に基づき他者を「裁き」の視線で評価し、そこでの評価に基づき、「援助、非難、許し」などの道徳的な態度・行動を他者に向ける点に着目し、モラル・エージェントを支える社会的認知過程を解明することを目指す。またその過程で、ステレオタイプの対人判断にも着目する。ステレオタイプは偏見の認知的基盤であり、しばしば他者を善悪の観点から評価することにつながる。その過程に関連する諸要因を解明し、心的状態の認知の変容が偏見の態度の低減につながる可能性、またそれを媒介する社会的認知過程を探索する。この課題については、科学研究費（基盤研究（B））により推進しており、対象を対人判断のみならず AI に対する心の知覚にも拡張している。また、ステレオタイプについては障害者、高齢者、性別に焦点を当てた検討を行っている。

2) スマートシティにおける諸技術への態度：本研究課題は、Society 5.0 のもと、スマートシティ政策の中で導入される諸技術に焦点を当て、それに対する受容的（または非受容的）態度形成に影響する諸要因を明らかにすることを主な目的としている。またその検討を通して、人々のウェルビーイングに資する技術のあり方についても、議論を開始している。日立東大ラボ・京大ラボの活動とも連携し、国内外のスマートシティ政策に関する情報収集、ま

た、監視カメラ、健康サポートなど、プライバシー情報の収集につながる AI 活用技術や、自動運転車を対象とした調査研究を進めている。

3) 学際研究における社会心理学の役割—科学技術の ELSI を事例として：本研究課題では、「科学知・実践知・人文知」の融合領域として社会心理学を位置づけた上で、その立ち位置からの方法論の批判的検討を行うとともに、展開の可能性として「科学技術の ELSI」をとりあげ、主には工学や哲学領域と連携し、知見の健全な活用、成果を人々に伝達する際の諸問題についての検討を行う。本研究課題は、RISTEX でプログラム総括を務めている「科学技術の倫理的・法制度的・社会的課題 (ELSI) への包括的実践研究開発プログラム (RIInCA)」での活動とも連携しており、それを通じた総合知に関わる議論形成にも携わっている。

自己評価

以上の研究課題は、科学研究費、外部資金、外部法人組織での活動と連携しており、有機的に研究活動を進めている。1)については「ロボット」「人工知能」など、人以外の対象に対する心的状態の推論に議論を拡張し、応用可能性を検討するための研究プロジェクトを工学関係の研究者と遂行している。また、ステレオタイプに関する研究は、「よわさ・できなさ」を支援する AI 技術の展開に関する議論との関連を視座に入れている。これらの知見は2)での社会受容研究や、3)での科学技術の ELSI 研究とも融合させることで、社会心理学に閉じない研究活動を心掛けている。得た研究成果は学会発表、論文という形で発信しているが、その多くは大学院生との共同研究であり、後継者育成についても努力している。特に、日立東大ラボ・京大ラボなどの産学連携研究には、学部生や大学院生も参画しており、企業に所属する主には理系の研究者と共に活動することを通して、視座を広めながら、社会心理学の知見がどのように社会貢献することが可能なのかについても洞察する機会を提供している。研究活動は、科学哲学、工学などの研究者と進めているが、今後は、さらに研究のネットワークを広げるとともに、他分野に対しても積極的な研究の成果発信に努め、融合的領域としての社会心理学の基盤形成に尽力したい。

d 研究業績

(1) 書籍出版物

[分担執筆]『Society 5.0 のアーキテクチャ：人中心で持続可能なスマートシティのキーファクター』、日立東大ラボ、
「社会的な受容」、日経 BP 日本経済新聞出版、日経 BP マーケティング（発売）、2023.12、307p

(2) 論文

[学術雑誌]「Trust in business operators of smart city projects」、Yuho Shimizu Shin Osaki Takaaki Hashimoto Kaori Karasawa、
Journal of Human Environmental Studies、20 巻 2 号、pp.111-116、2022

[学術雑誌]「素朴な自由意志信念尺度の開発」、渡辺匠 唐沢かおり、『実験社会心理学研究』62 巻 1 号、pp.1-11、2022

[学術雑誌]「象徴的障害者偏見尺度日本語版 (SAS-J) の作成」、清水佑輔 ターン有加里ジェシカ 橋本剛明 唐沢か
おり、『心理学研究』92 巻 6 号、pp.532-542、2022

[学術雑誌]「Anti-old and anti-youth attitudes among older adults: focusing on middle-aged and old age identity」、Yuho Shimizu
Masumi Takeuchi Kaori Karasawa、The Journal of Social Psychology、pp.1-8、2022.4.17

[学術雑誌]「Social Acceptance of Smart City Projects: Focus on the Sidewalk Toronto Case」、Yuho Shimizu Shin Osaki Takaaki
Hashimoto Kaori Karasawa、Frontiers in Environmental Science、10 巻、2022.5.25

[学術雑誌]「Ageist Attitudes: Youth Identity, Subjective Time to Become Older, and Impressions of the General Older Population's
Physical and Mental Health」、Yuho Shimizu Takaaki Hashimoto Kaori Karasawa、Advances in Gerontology、12 巻 2 号、
pp.157-161、2022.7.12

[学術雑誌]「Relationship between Disease Avoidance and Attitudes toward Older People」、Yuho Shimizu Takaaki Hashimoto
Kaori Karasawa、Advances in Gerontology、12 巻 3 号、pp.242-246、2022.9.11

[学術雑誌]「Reducing negative attitudes toward older adults and increasing advocacy for policies to support older adults: Bayesian
analysis approach」、Yuho Shimizu Takaaki Hashimoto Kaori Karasawa、Acta Psychologica、239 巻、p.103995、2023.9

[学術雑誌]「Young and old persons' subjective feelings when facing with a non-human computer-graphics-based agent's emotional
responses in consideration of differences in emotion perception」、Takashi Numata Yasuhiro Asa Takaaki Hashimoto Kaori
Karasawa、Frontiers in Computer Science、6 巻、2024.1.31

(3) その他各種論著

[学術雑誌]「科学技術の倫理的・法制度的・社会的課題 (ELSI) への包括的実践研究開発プログラムの紹介」、唐沢
かおり、『学術の動向』27 巻 7 号、pp.18-7、2022

(4) 講演・口頭発表等

[口頭発表 (招待・特別)]「社会認知研究は何を明らかにしようとするのか」、唐沢かおり、第 7 回 CEPD 研究会・
年会、2022.5.21

- [ポスター発表]「エイジズムと感染回避傾向の関連」、清水佑輔・橋本剛明・唐沢かおり、日本心理学会第 86 回大会、2022.9.8
- [口頭発表 (一般)]「高齢者一般の健康状態に対する印象と高齢者への態度」、清水佑輔・橋本剛明・唐沢かおり、日本社会心理学会第 63 回大会、2022.9.14
- [ポスター発表]「原因帰属理論による心的機能の認知の検討」、苔米地飛・唐沢かおり、日本グループ・ダイナミクス学会第 68 回大会、2022.9.17
- [ポスター発表]「Getting rid of anonymity increases efficient provision of a public good in a volunteer's dilemma」、Tham.Y. J., Ohtsubo.Y. & Karasawa.K., Society for Personality and Social Psychology: 2023 Annual Convention、2023.2.23
- [ポスター発表]「Reducing younger people's ageism: Focus on the fact that every one will become older」、Shimizu.Y., Hashimoto.T. & Karasawa.K., Society for Personality and Social Psychology: 2023 Annual Convention、2023.2.23
- [ポスター発表]「The impact of the perception that "old age is still a long way off" on ageism.」、Shimizu.Y., Hashimoto.T. & Karasawa.K., Society for Personality and Social Psychology: 2023 Annual Convention、2023.2.23
- [Featured Symposium]「Contribution of Social Psychology to ELSI/RRI. Featured symposium. "The Role of Social Psychology in R&D of Solutions to Social Issues: Funding Programs in RISTEX.JST」. Karasawa.K. The 15th Biennial Conference of the Asian Association of Social Psychology、2023.7.14
- [ポスター発表]「誰もが高齢者になる事実と高齢者支援政策に対する重視度」、清水佑輔・橋本剛明・唐沢かおり、日本社会心理学会第 64 回大会、2023.9.7
- [ポスター発表]「複合現実感による消防体験時の行動とパーソナリティの関係」、沼田崇志・中道拓也・藤原貴之・鈴木真太郎・三谷佳一・中村俊輝・唐沢かおり、日本心理学会第 87 回大会、2023.9.15
- [ポスター発表]「誰かが担わなければならない仕事を誰がいつ担うのか：ボランティアのジレンマでの意思決定に関する計算論モデリング」、ターン有加里ジェシカ・大坪庸介・唐沢かおり、日本心理学会第 87 回大会、2023.9.15
- [ポスター発表]「エイジズムの軽減と人生設計の促進：ステレオタイプ・エンボディメント理論に着目して」、清水佑輔・橋本剛明・唐沢かおり、日本心理学会第 87 回大会、2023.9.15
- [講演]「自動運転における ELSI 検討の意義と期待すること」、唐沢かおり、学術フォーラム「自動運転の社会実装と次世代モビリティによる社会デザイン」、日本学術会議講堂、2023.9.16
- [口頭発表 (ロングスピーチ)]「能力差のある集団内でのタスク分担：ボランティアのジレンマを用いた検討」、ターン有加里ジェシカ・大坪庸介・橋本剛明・唐沢かおり、日本グループ・ダイナミクス学会第 69 回大会、2023.9.23
- [口頭発表]「誤情報を信じないために：熟慮による真実性の錯誤効果の低減」、福山秀平・唐沢かおり、日本グループ・ダイナミクス学会第 69 回大会、2023.9.23
- [口頭発表]「性別が管理職としての評価に与える影響 リーダーシップ行動の 2 次元からの検討」、馬目蓉子・唐沢かおり、日本グループ・ダイナミクス学会第 69 回大会、2023.9.23
- [ポスター発表]「Do people perceive paternalistic rules as more effective for others than for themselves?」、ターン有加里ジェシカ・橋本剛明・唐沢かおり、Society for Personality and Social Psychology 2024 Annual Convention、2024.2.8~10
- [講演]「主観的 Well-being について」、唐沢かおり、未来ビジョンセンターオンラインシンポジウム「Well-being とスマートシティ：AI&データガバナンスの観点から」、2024.3.13

(5) 受賞

- 日本心理学会第 87 回大会優秀発表賞、ターン有加里ジェシカ・大坪庸介・唐沢かおり、「誰かが担わなければならない仕事を誰がいつ担うのか：ボランティアのジレンマでの意思決定に関する計算論モデリング」、2023
- 日本グループダイナミクス学会第 69 回大会優秀発表賞、「能力差のある集団内でのタスク分担：ボランティアのジレンマを用いた検討」、ターン有加里ジェシカ・大坪庸介・橋本剛明・唐沢かおり、2023

(6) 共同研究・競争的資金等の研究課題

- [科学研究費助成事業]「遺体に対する「心」の知覚：死者に愛着と敬意を抱く心的メカニズムの解明」、白岩祐子 唐沢かおり、基盤研究 (C) : 17K04310、日本学術振興会、2017.4~2023.3
- [科学研究費助成事業]「「感じる心」の知覚と道徳的判断：哲学との連携による統合的理解の構築」、唐沢かおり 鈴木貴之 太田紘史 浦光博、基盤研究 (B) : 20H01752、日本学術振興会、東京大学、2020.4~2024.3
- [共同研究費]「個人の行動計測に基づくパーソナリティ推定技術の開発」、唐沢かおり、日立製作所、2022.6~
- [共同研究費]「ハビタット・イノベーション：社会的な受容」、唐沢かおり、日立東大ラボ、2022.4~2023.3
- [共同研究費]「Society 5.0 Urban Transformation プロジェクト：ウエルビーイング」、唐沢かおり、2023.4~

e その他

(1) 学会・委員活動

[委員歴] 『人間環境学研究』、編集幹事、2003～2023.3、編集代表、2023.4～

[委員歴] 日本心理学会、代議員、2017.4～、常務理事、2023.6～

[委員歴] 科学基礎論学会、理事、2017.4～

[委員歴] 日本学術振興会、学術システム研究センター研究員、2020.4～2024.3

[委員歴] 科学技術振興機構、科学技術の倫理的・法制度的・社会的課題への包括的実践研究開発プログラム総括、2020.4～、創発的研究支援事業アドバイザー、2021.6～

[委員歴] 日本学術会議、連携会員、2020.10～

[委員歴] 自動車技術会、モビリティ社会部門委員会委員、2021.4～

[委員歴] 消防庁、第25期火災予防審議会委員、2021.7～2023.3

[委員歴] 文部科学省、大学設置・学校法人審議会専門委員、2021.11～2022.10

[委員歴] 公益財団法人国際科学振興財団、学術審査検討委員会委員、2022.1.1.～

[委員歴] 環境再生保全機構、次期SIP課題候補に関わるコアメンバー会議委員、2022.7～2023.3

[委員歴] 内閣府、次期SIP課題候補「サーキュラーエコノミーシステムの構築」、イノベーション戦略コーディネーター候補、2022.9～2023.3、SIP第3期「サーキュラーエコノミーシステムの構築」、サブプログラムディレクター、2023.4～

教授 **村本 由紀子** MURAMOTO, Yukiko

1. 略歴

1984年4月	東京大学文科Ⅲ類入学
1988年3月	東京大学文学部社会心理学専修課程卒業
1988年4月	株式会社 日本長期信用銀行 入行
1992年4月	東京大学大学院社会学研究科社会心理学専攻修士課程入学
1994年3月	同 修了（修士（社会心理学））
1994年4月	東京大学大学院社会学研究科社会心理学専攻博士課程進学
1997年3月	東京大学大学院人文社会系研究科社会文化研究専攻博士課程単位取得退学
1998年4月	京都大学総合人間学部基礎科学科 助手（2000年3月迄）
1999年3月	東京大学大学院人文社会系研究科 博士（社会心理学）取得
2000年4月	岡山大学文学部行動科学科 助教授
2001年4月	岡山大学大学院文化科学研究科産業社会文化学専攻 助教授（兼任）
2004年4月	横浜国立大学経営学部 助教授
2005年4月	横浜国立大学大学院国際社会科学研究所 助教授
2007年4月	横浜国立大学大学院国際社会科学研究所 准教授
2011年4月	横浜国立大学大学院国際社会科学研究所 教授
2011年10月	東京大学大学院人文社会系研究科 准教授
2018年4月	東京大学大学院人文社会系研究科 教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

社会心理学

b 研究課題

心と社会環境の相互構成過程の探究

- 1) 多元的無知による集団規範の維持過程
- 2) 文化的慣習の社会生態学的基盤、「心の文化差」の規定因の探究
- 3) 組織文化・風土をめぐる諸問題

c 概要と自己評価

概要

1) 集団規範の生成と再生産過程…人は周囲の他者の行動を観察し、特定の行動が共有されていると感じることによって、「規範」の存在を知覚する。人はその知覚に基づき、たとえそれが自らの選好とは異なっているとしても、規範にしたがった行動をとる傾向がある。この行動がさらに他者によって観察されることで、やがて、実際には誰も望んでいないはずの規範が予言の自己成就的に維持・再生産される。こうした「多元的無知」現象の共同主観的な相互規定メカニズムを検討することは、心の社会・文化的起源を探るうえで重要な意味をもつと考えられる。本研究では、実験室内にミニマルな規範伝達の連鎖を作り出すことで、このメカニズムに迫る試みを行っている。また、多元的無知の生起や伝播に影響を及ぼす社会環境の特質の探究も進めている。

2) 文化的慣習の社会生態学的基盤、「心の文化差」の規定因の探究…ある社会や集団において、特定の慣習や思考様式が共有され、維持されている理由について体系的な検討を行うには、その慣習や思考様式を取り巻く生態環境の特質と歴史、環境に適応する過程で作られた特有の社会構造や人間関係のありよう、それらの維持・再生産に寄与する個人や心理や行動の特質、といった諸変数間の関係を丹念に探り、描き出すことが必要となる。本研究では、社会の現場における慣習や思考様式の「事例」に焦点を当て、マイクロ・エスノグラフィーの研究手法を用いてその生成・維持過程を継続的に追跡している。また、共有信念や心理・行動傾向の異文化間での差異（心の文化差）に着目し、その規定因たる社会環境の特質を明らかにするための比較文化（比較社会）実験・調査研究も推進している。

3) 組織文化・風土をめぐる諸問題…国や民族といった大きなレベルの文化に比して、小規模で人の入れ替わりが頻繁に行われる企業組織の文化は、変化プロセスの把握が比較的容易であるため、心と文化に関わる理論構築に向けた検証が行いやすいという利点がある。本研究では、強い組織文化は組織変革にとって正負両面の効果をもつ（生産性向上のための学習を促進する一方で、環境変化に対応した柔軟な変革を抑制しうる）ことを明らかにしてきた。現在はさらに視野を広げ、各種の人事制度（ハード）と文化・風土（ソフト）の相互作用の様相や、それらが従業員の心理・行動に与える多面的な影響過程についての検討を行っている。

自己評価

以上の研究の多くは、文部科学省科学研究費（『集団規範の形成・維持に関わる自他の相互作用過程の探究』）、企業との共同研究契約に基づく研究助成などの外部資金を得て実施されている。研究室所属の大学院生、研究室出身の若手研究者はもとより、国内外の研究者（経営学・社会学・人類学等の関連他領域を含む）とも広く連携して、国際的・学際的な視野に立つ共同研究プロジェクトとしての展開に努めている。研究成果を学会発表および学術論文として発信する際には、個々の研究を主導した若手研究者（大学院生を含む）のサポートに尽力している。また、企業や地域共同体など、社会の現場に根差した研究を手がけていることから、実社会への研究成果の還元と、産学連携にも努めている。

d 研究業績

(1) 書籍出版物

[共著]『多元的無知：不人気な規範の維持メカニズム』、岩谷舟真 正木郁太郎 村本由紀子、東京大学出版会、2023.11、iii.213p

(2) 論文

[学術雑誌] 「“You will never know unless you try hard”: Entity theorists who perceive effort as information」、Keita Suzuki Yukiko Muramoto、The Japanese Journal of Experimental Social Psychology、62 巻 2 号、pp.64-79、2022

[学術雑誌] 「組織における制度と文化：社会心理学の視点から」、村本由紀子、『産業保健法学会誌』1 巻 1 号、pp.25-29、2022.7

[国際会議プロシーディングス] 「Even those who perceive COVID-19 as low risk engage in infection prevention behavior in Japan: COVID-19 infection prevention behavior as a social norm」、Shuma Iwatani Yukiko Muramoto、Proceedings of the Annual Meeting of the Cognitive Science Society、45 巻、2023.7

[国際会議プロシーディングス] 「The effect of implicit theories on help-seeking behavior: Focusing on anticipated evaluation and perceived implicit theories of the peer member」、Keita Suzuki Tomoki Fujiwara Yukiko Muramoto、Proceedings of the Annual Meeting of the Cognitive Science Society、45 巻、2023.7

(3) 講演・口頭発表等

- 「授業の自由度が暗黙理論の獲得に与える影響：学校間比較による事例的検討」、鈴木啓太 正木郁太郎 村本由紀子、日本心理学会第 86 回大会、2022.9.10
- [ポスター発表]「男性の育児休業取得に関する多元的無知：原因帰属が規範逸脱行動に及ぼす効果」、加藤由衣 村本由紀子、日本社会心理学会第 63 回大会、2022.9.14
- [ポスター発表]「評判低下予測と感染予防行動の関連：関係流動性の調整効果に着目した検討」、岩谷舟真 村本由紀子、日本社会心理学会第 63 回大会、2022.9.14
- [口頭発表（一般）]「暗黙理論による課題選択方略の差異の実験的検討」、鈴木啓太 村本由紀子、日本社会心理学会第 63 回大会、2022.9.14
- [口頭発表（一般）]「How fear of negative evaluation and causal attribution affect paternity leave in Japan」、Yui Kato Yukiko Muramoto、日本グループ・ダイナミクス学会第 68 回大会、2022.9.18
- [シンポジウム・ワークショップ パネル（指定討論）]「Comments on "Loanwords and Japanese Identity: Inundating or Absorbed?"」、Yukiko Muramoto、Tokyo College Book Launch Event、2023.4.20
- [ポスター発表]「Even those who perceive COVID-19 as low risk engage in infection prevention behavior in Japan: COVID-19 infection prevention behavior as a social norm.」、Shuma Iwatani Yukiko Muramoto、The 45th Annual Meeting of the Cognitive Science Society、2023.7.27
- [ポスター発表]「The effect of implicit theories on help-seeking behavior: Focusing on anticipated evaluation and perceived implicit theories of the peer member.」、Keita Suzuki Tomoki Fujiwara Yukiko Muramoto、The 45th Annual Meeting of the Cognitive Science Society、2023.7.27
- [公開講演、セミナー、チュートリアル、講習、講義等]「選択の自由、選択の不自由」、村本由紀子、東京大学オープンキャンパス文学部企画・模擬講義、2023.8.3
- [口頭発表（一般）]「能力格差がチームのコーディネーションに及ぼす影響：メンバーの流動性の調整効果に着目して」、仲間大輔 村本由紀子、日本産業・組織心理学会第 38 回大会、2023.9.2
- [ポスター発表]「個人の情報処理スタイルに応じた社会規範ナッジの効果：感染症禍の外出行動に着目した検討」、岩谷舟真 村本由紀子、日本社会心理学会第 64 回大会、2023.9.7
- [ポスター発表]「能力格差と流動性は誰の協力意欲を高めるか？：集団内の個人の立ち位置に注目した企業組織データ分析」、仲間大輔 村本由紀子、日本社会心理学会第 64 回大会、2023.9.7
- [ポスター発表]「暗黙理論が努力のサンクコスト効果に与える影響」、鈴木啓太 村本由紀子、日本グループ・ダイナミクス学会第 69 回大会、2023.9.23
- [公開講演、セミナー、チュートリアル、講習、講義等]「組織のダイバーシティとアイデンティティをめぐる諸問題」、村本由紀子、OTD (Org. Transformation by Diversity) 研究会：第 7 回 OTD アカデミア、2023.10.23
- [口頭発表（一般）]「豪雨災害時における避難行動の地域差：「外部性」の認知が避難意図に及ぼす影響」、寺澤華織 岩谷舟真 村本由紀子、日本災害情報学会第 27 回学会大会、2023.10.28

(4) 受賞

日本社会心理学会賞（優秀論文賞）、正木郁太郎 村本由紀子、日本社会心理学会、2022

(5) 共同研究・競争的資金等の研究課題

- [科学研究費助成事業]「集団規範の形成・維持に関わる自他の相互作用過程の探究」、村本由紀子、基盤研究（C）：19K03189、日本学術振興会、東京大学、2019.4～2023.3
- 「多元的無知の維持メカニズムの調整要因の検討」、村本由紀子 岩谷舟真 今城志保、共同研究（国立大学法人東京大学）、（株）リクルートマネジメントソリューションズ、東京大学、2019.9～2023.3
- [科学研究費助成事業]「社会環境に応じた「不人気な規範」の生成・維持・変容過程の探究」、村本由紀子、基盤研究（C）：23K02832、日本学術振興会、東京大学、2023.4～2027.3
- 「多元的無知の維持メカニズムの調整要因の検討：心理的安全性に着目して」、村本由紀子 今城志保、共同研究（国立大学法人東京大学）、（株）リクルートマネジメントソリューションズ、東京大学、2024.2～2025.3

e その他

(1) 学会・委員活動

- [委員歴] 日本グループ・ダイナミクス学会、理事・編集委員、2023～
- [委員歴] 日本心理学会、代議員、2023～

1. 略歴

- 1990 年 4 月 北海道大学文Ⅱ系入学
- 1994 年 3 月 北海道大学文学部行動科学科卒業
- 1994 年 4 月 北海道大学大学院文学研究科行動科学専攻修士課程入学
- 1996 年 3 月 同 修了（修士（行動科学））
- 1996 年 4 月 北海道大学大学院文学研究科行動科学専攻博士課程進学
- 1997 年 8 月 北イリノイ大学大学院心理学研究科博士課程入学
- 2000 年 3 月 北海道大学大学院文学研究科行動科学専攻博士課程退学
- 2000 年 6 月 北海道大学大学院文学研究科 助手（～2002 年 3 月）
- 2000 年 8 月 北イリノイ大学大学院心理学研究科博士課程修了（Ph. D. in Psychology）
- 2002 年 4 月 奈良大学社会学部 講師（～2006 年 3 月）
- 2006 年 4 月 奈良大学社会学部（大学院兼任） 助教授（～2007 年 3 月）
- 2007 年 4 月 神戸大学大学院人文学研究科 准教授（～2019 年 3 月）
- 2019 年 4 月 神戸大学大学院人文学研究科 教授（～2021 年 3 月）
- 2021 年 4 月 東京大学大学院人文社会系研究科 准教授
- 2023 年 4 月 東京大学大学院人文社会系研究科 教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

社会心理学, 進化心理学

b 研究課題

- 1) 和解の進化社会心理学的研究
- 2) コミットメント・シグナルに関する研究
- 3) 評判・罰に基づく協力的行動の進化に関する研究

c 概要と自己評価

1) **和解の進化社会心理学的研究**：和解プロセスを加害者による謝罪と被害者による赦しという 2 つの側面をもつプロセスとして研究している。謝罪に関しては、シグナルの進化という観点から、どのような謝罪が誠意のある謝罪とみなされるのか、そして加害者はどのような状況で誠意のある謝罪を行おうとするのかを検討している。赦しに関しては、霊長類学の知見などを踏まえて、人々がどのような場合に加害者を赦してもよいと考えるのかを検討している。対人的な和解についてよりよく理解することは、組織の謝罪（リスク・コミュニケーション）、国家間の和解等の理解も促進すると考えて研究を進めている。

2) **コミットメント・シグナルに関する研究**：二者関係において関係にコミットしているというのは、親友同士が決して裏切ることはない、恋人が浮気をしないといったことを意味する。しかし、ここにはコミットメント問題が存在する。なぜなら、今の相手よりも魅力的なパートナーが現れたときに、今の相手との関係に留まる必然性がないからである。その一方、特定の相手との関係にコミットできなければ、より利益の大きい協力関係を構築することもできない。そのため、自分は相手との関係にコミットしていて、簡単に裏切ることはないということを伝えるコミットメント・シグナルがコミットメント関係の形成・維持のために必要となる。対人関係で、どのようなシグナルがあり得るのか、そしてそれによってどの程度コミットメント問題が解決されているのかを研究している。

3) **評判・罰に基づく協力的行動の進化に関する研究**：二者関係に閉じない大規模な協力関係を維持することはヒトという種の特徴と言われている。このような大規模な協力を維持するメカニズムとして、評判と罰が注目されている。評判に基づく大規模な協力の維持は間接互惠性と言われる。従来の間接互惠性の研究では、他者に評判を割り振る側の評判割り振り戦略に焦点が当てられていたが、評判を割り振られる側の評判維持戦略に着目した研究を行っている。また、非協力者を罰する傾向と規範違反者への義憤の関係など、大規模な協力関係の維持を可能にする至近メカニズムの研究を行っている。

d 研究業績

(1) 書籍出版物

『進化心理学』、大坪庸介、放送大学教育振興会、2023.3、242p

[共編者]『広がる！ 進化心理学』、小田亮 大坪庸介、朝倉書店、2023.6.3、196p

(2) 論文

[学術雑誌]「Can impulsivity evolve in response to childhood environmental harshness?」、Atsushi Kometani Yohsuke Ohtsubo、
Evolutionary Human Sciences、4 巻、p.e21、2022.5.24

[学術雑誌]「Apology Cost Is More Strongly Associated With Perceived Sincerity Than Forgiveness」、Yohsuke Ohtsubo Miyu
Higuchi、Letters on Evolutionary Behavioral Science、13 巻 1 号、pp.28-32、2022.5.31

[学術雑誌]「Crafting international apologies that work: A conjoint analysis approach」、Shoko Kohama Toshiyuki Himichi Kazunori
Inamasu Nobuhiro Mifune Yohsuke Ohtsubo Atsushi Tago、Conflict Management and Peace Science、p.073889422210947、
2022.6.6

[学術雑誌]「Mu opioid receptor gene (OPRM1) moderates the influence of perceived parental attention on social support seeking」、
Shaofeng Zheng Keiko Ishii Takahiko Masuda Masahiro Matsunaga Yasuki Noguchi Hidenori Yamasue Yohsuke Ohtsubo、
Adaptive Human Behavior and Physiology、8 巻 3 号、pp.281-295、2022.6.8

[学術雑誌]「Prestige Orientation and Reconciliation in the Workplace」、Yohsuke Ohtsubo Kazuho Yamaura、Evolutionary
Psychology、20 巻 4 号、2022.10

[学術雑誌]「Can Ingroup Opposition to Political Apologies Be Mitigated? Negative Evidence for Dissociation from the Past and
Praise for the Present System」、Ohtsubo Yohsuke Himichi Toshiyuki Inamasu Kazunori Kohama Shoko Mifune Nobuhiro
Tago Atsushi、社会心理学研究、38 巻 2 号、pp.25-32、2022.12.25

[学術雑誌]「Mating Performance and Singlehood Across 14 Nations」、Menelaos Apostolou Mark Sullman Béla Birkás Agata
Blachnio Ekaterina Bushina Fran Calvo William Costello Tanja Dujlovic Tetiana Hill Timo Juhani Lajunen Yanina Lisun
Denisse Manrique-Millones Oscar Manrique-Pino Norbert Meskó Martin Nechtelberger Yohsuke Ohtsubo Christian Kenji
Ollhoff Aneta Przepiórka Adam Putz Mariaelena Tagliabue Burcu Tekeş Andrew Thomas Jaroslava Varella Valentova Marco
Antonio Correa Varella Yan Wang Paula Wright Silvia Font-Mayolas、Evolutionary Psychology、21 巻 1 号、
p.147470492211501、2023.1.3

[学術雑誌]「Perceptions of relationship value and exploitation risk mediate the effects of transgressors' post-harm communications
upon forgiveness」、Joseph Billingsley Daniel E. Forster V. Michelle Russell Adam Smith Jeni L. Burnette Yohsuke Ohtsubo
Debra Lieberman Michael E. McCullough、Evolution and Human Behavior、44 巻 2 号、pp.68-79、2023.3

[学術雑誌]「Social and moral psychology of COVID-19 across 69 countries」、Flavio Azevedo Tomislav Pavlović Gabriel G. Rêgo
F. Ceren Ay Biljana Gjoneska Tom W. Etienne Robert M. Ross Philipp Schönegger Julián C. Riaño-Moreno Aleksandra
Cichocka Valerio Capraro Luca Cian Chiara Longoni Ho Fai Chan Jay J. Van Bavel Hallgeir Sjøstad John B. Nezlek Mark
Alfano Michele J. Gelfand Michèle D. Birtel Aleksandra Cislak Patricia L. Lockwood Koen Abts Elena Agadullina John Jamir
Benzon Aruta Sahba Nomvula Besharati Alexander Bor Becky L. Choma Charles David Crabtree William A. Cunningham
Koustav De Waqas Ejaz Christian T. Elbaek Andrej, et al.、10 巻 1 号、2023.5.11

[学術雑誌]「Is reading fiction associated with a higher mind-reading ability? Two conceptual replication studies in Japan」、Yuka
Takahashi Toshiyuki Himichi Ayumi Masuchi Daisuke Nakanishi Yohsuke Ohtsubo、PLOS ONE、18 巻 6 号、p.e0287542、
2023.6.22

[学術雑誌]「The Association between ideology and resistance to governmental apology depends on political knowledge」、Kazunori
Inamasu Shoko Kohama Nobuhiro Mifune Yohsuke Ohtsubo Atsushi Tago、Japanese Journal of Political Science、24 巻 3
号、pp.348-367、2023.7.3

[学術雑誌]「Association between internet addiction, brain structure, and social capital in adolescents」、Masahiro Matsunaga Yohsuke
Ohtsubo Keiko Ishii Hirohito Tsuboi Kohta Suzuki Haruto Takagishi、Social Neuroscience、(in press)巻、2023.11.2

[学術雑誌]「Exploratory research on genetic polymorphisms associated with positive empathy and trait forgiveness among the
Japanese.」、Masahiro Matsunaga Yohsuke Ohtsubo Takahiko Masuda Yasuki Noguchi Hidenori Yamasue Keiko Ishii、
Neuroendocrinology Letters、44 巻 8 号、pp.506-516、2023.12.12

[学術雑誌]「Do reconciliation events serve as a conciliatory signal?」、Yohsuke Ohtsubo Toshiyuki Himichi Kazunori Inamasu
Shoko Kohama Nobuhiro Mifune Atsushi Tago、European Journal of Social Psychology、2023.12.29

(3) 共同研究・競争的資金等の研究課題

[科学研究費助成事業]「関係価値と和解のミクロ・マクロ・ダイナミクスに関する研究」、大坪庸介 松永昌宏 多
湖淳 大平英樹、基盤研究 (B) : 21H00931、日本学術振興会、東京大学、2021.4～2024.3

[科学研究費助成事業]「協力シグナルの進化に関する理論・実証的研究」、大坪庸介、挑戦的研究 (萌芽) : 21K18558、
日本学術振興会、東京大学、2021.7～2024.3

[科学研究費助成事業]「効果的な妬み緩和マネジメントに関する検討：多面的計測による介入対処策の提案」、山浦一保 塩澤成弘 岡田志麻 西原陽子 大坪庸介 向英里、基盤研究 (C) : 22K03041、日本学術振興会、立命館大学、2022.4～2025.3

[科学研究費助成事業]「日本人における主観的幸福感に関連した未知の遺伝子多型の特定とその評価」、石井敬子 大坪庸介 松永昌宏 野口泰基 山末英典、基盤研究 (B) : 22H01074、日本学術振興会、名古屋大学、2022.4～2025.3

[科学研究費助成事業]「国際関係をめぐる不満の国際比較実証研究」、多湖淳 三船恒裕 稲増一憲 大坪庸介 日道俊之 小浜祥子、基盤研究 (A) : 22H00050、日本学術振興会、早稲田大学、2022.4～2027.3

[科学研究費助成事業]「能動的推論による自然の防御シグナルとしての孤独感の検討」、松永昌宏 石井敬子 大坪庸介 山末英典 野口泰基、基盤研究 (B) : 23H01033、日本学術振興会、愛知医科大学、2023.4～2026.3

28 文化資源学

《文化資源学専門分野》

教授 中村 雄祐 NAKAMURA, Yusuke

1. 略歴

1980年4月 東京大学教養学部理科I類、入学
1982年4月 同学部教養学科第一文化人類学学科、進学
1984年3月 同学科、卒業
1984年4月 東京大学大学院社会学研究科修士課程文化人類学専攻、入学
1986年3月 同修士課程、修了
1986年4月 同研究科文化人類学専攻博士課程、進学
1988年4月 社会学研究科より総合文化研究科へ移管
1990年8月 東京大学大学院総合文化研究科博士課程文化人類学専攻、中途退学
1995年11月 東京大学大学院総合文化研究科、博士号（学術）取得
1994年4月 東京大学教養学部専任講師（～1997年3月）
1996年4月 大学院総合文化研究科超域文化科学専攻専任講師に配置換
1997年4月 東京大学大学院総合文化研究科超域文化科学専攻助教授（～2004年9月）
2004年10月 東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻助教授
2005年4月 国立民族学博物館文化動態研究部門客員研究員（～2009年3月）
2009年4月 東京大学大学院人文社会系研究科文化資源学研究専攻准教授
2014年9月 東京大学大学院人文社会系研究科文化資源学研究専攻教授

2. 主な研究活動

多様な状況における文書・読み書き、その人間・社会との関係の研究

a 専門分野 b 研究課題

文化資源学（汎用技術論、文書文化論）

広く文書・読み書きと人間・社会の関係、特に認知的人工物(cognitive artifacts)の汎用技術(general purpose technology)化について研究している。また、調査研究方法の検討、改善にも強い関心を持っている。様々なフィールド調査で得られるデータや知見を、言語能力、数的能力、道具使用等に関する認知科学や、文書をはじめとする認知的人工物の変化に関する歴史学的研究と有機的に接合することを目指して、隣接諸分野の研究者との共同研究にも積極的に取り組んでいる。

c 概要と自己評価

以下の3つの課題を意識しつつ、相互に関連しあう複数の研究を並行して進めた。

- ・認知的人工物の汎用技術化の考察
- ・デジタル技術と文書文化の関係の考察
- ・文書・読み書きに関する多様な領域の専門家との共同作業の推進

（1）歴史学者と共同で16世紀スペイン会計文書を対象として人文情報学のアプローチを用いた研究成果を国際誌に論文を投稿した（査読結果を踏まえて修正の上、2024年7月に掲載された）。

（2）東京大学連携研究機構ヒューマニティーズセンター協同プロジェクト「開かれた人文学のための文化資源デジタルプラットフォーム」（2022年10月～2025年9月）の代表を務め、人文学を軸に学内外の情報工学、建築学、アーカイブズ学、都市計画、まちおこし、芸術学等の専門家の協同、そしてまちおこしや協同組合との連携を進め、途中経過をオンラインで発信した。

以上のように、歴史学、情報学、地域開発・まちづくりなど多様な分野の専門家との共同作業を積極的に行い、成果を発信するという基本方針に沿った活動を継続している。引き続き、学際性、社会連携、情報技術の活用を重視した分析を進めていく。

d 研究業績

(1) 講演・口頭発表等

「【人文学を語る！】中村雄祐先生 東京大学大学院人文社会系研究科教授（文化資源学）」、中村雄祐、齋藤希史、東京大学ヒューマニティーズセンター（HMC）、2023.9.1

「建築教育・まちづくりとアナログ&デジタル文化資源」、藤本貴子、真鍋陸太郎、中村雄祐、東京大学ヒューマニティーズセンター オープンセミナー第98回、2023.11.6

(2) その他各種論著

『科学とはなにか』文化資源学研究者の書評、総合文化研究科・教養学部附属 教養教育高度化機構科学技術コミュニケーション部門 書評のひろば（招待有り）、2023.8

e 社会活動

(1) 社会貢献活動

[運営参加・支援] 東京大学消費生活協同組合副理事長、東京大学消費生活協同組合、2019.5～2024.5

准教授 **野村 悠里** NOMURA, Yuri

1. 略歴

2000年3月	慶應義塾大学法学部法律学科卒業
2000年4月	慶應義塾大学大学院法学研究科公法学専修修士課程入学
2002年3月	慶應義塾大学大学院法学研究科公法学専修修士課程修了、修士（法学）
2006年4月	東京大学大学院人文社会系研究科文化資源学研究専攻文書学専門分野修士課程入学
2008年3月	東京大学大学院人文社会系研究科文化資源学研究専攻文書学専門分野修士課程修了、修士（文学）
2008年4月	東京大学大学院人文社会系研究科文化資源学研究専攻文書学専門分野博士課程入学
2012年3月	ポーラ美術振興財団若手芸術家在外研修員
2013年9月	文化庁新進芸術家在外研修員
2014年3月	東京大学大学院人文社会系研究科文化資源学研究専攻文書学専門分野博士課程単位取得満期退学
2014年4月	東京大学大学院人文社会系研究科博士課程学位取得、博士（文学）
2015年4月	東京大学大学院人文社会系研究科文化資源学研究専攻助教
2019年4月	日本学術振興会海外特別研究員、ロンドン大学客員研究員
2020年4月	東京大学大学院人文社会系研究科文化資源学研究専攻准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

文化資源学

b 研究課題

ヨーロッパ製本史、装幀史、書物史

ヨーロッパでは伝統工芸として、山羊革や仔牛革で装幀することが行われている。フランスでは二十世紀に至るまで、書物は仮綴本で販売され、読者は購入した本を製本工房に依頼して革装本に綴じ直し、箔押しで装飾するという読書文化が根づいてきた。フランスの製本工芸は高度な装飾技術が発達したことで知られ、製本史では王侯貴族の金箔紋章本を時系列的に分析する研究が行われてきた。ドゥヴオシェル『フランスの製本』（1959-61）、ドゥヴオー『製本の十世紀』（1977）によって製本の通史的分析が行われ、表紙のデザインに関してはエスメリアン『十七世

紀における製本工場の装幀』（1972）、ミシヨン『十八世紀のモザイク製本』（1956）により装幀様式の分類が試みられてきた。しかしながら、表紙デザインや金箔紋章による所蔵者の特定が重視され、製本の技術については十分に分析されてこなかった。装飾的に優れた装幀が研究対象とされ、意匠の分析は表紙の全体的印象や主観的見解に依拠してきたという問題点がある。これらの先行研究を踏まえ、より広範な読者層の装幀を研究対象とし、製本工場における技術の継承や製本職人の製作工程を解明する研究課題に取り組んでいる。また、書物を次世代に継承していくための保存修復の問題についても考察を行っている。

c 概要と自己評価

これまでの研究として、製本職人の記録や技術書等の文化資源学的資料を考察し、主として十七世紀から十九世紀におけるフランスの工芸製本史に取り組んできた。以下四点が研究経過である。第一に、製本工場の継承に関する分析である。王室製本師の一族や製本職人組合監督官の家系図を作成し、世代間における工場の継承について考察した。同業者組合が解体された後、製本職人の多くはイギリスに亡命したが、十九世紀以降に活躍した製本職人についても分析を行っている。第二に、製本技術書の考察である。十八世紀以前に出版された技芸書や百科全書を検証し、十九世紀以降の製本職人による手引き書との相違を明らかにした。また、イギリス、ドイツ、オランダ等のヨーロッパ諸国で出版された製本技術書との比較を進めている。第三は、製本の技術的解明である。王令によって認められた「ヴレ・ネール」、非合法の「フォー・ネール」、目引きをした「ア・ラ・グレック」という技法について分析を行った。また、どのように量産に適した製本技法が開発されていったのか、産業革命に至る各国の技術的変容の解明に取り組んでいる。第四は、装幀のデザインの変遷である。手工業製本においてどのように箔押し技術が発展してきたか、型の組み合わせによる模様のパターンを検証している。

d 研究業績

(1) 書籍出版物

共訳、『オックスフォード出版の事典』、植村八潮、柴野京子、山崎隆広監訳、野村悠里訳「第 19 章 ブックデザイン」、丸善出版、2023.1

単著、野村悠里『或る英国俳優の書棚』、水声社、2024.1

(2) 論文・論稿

「書物の余白から：ウィリアム・モリス・ギャラリー」、『技術史教育学会誌』23 巻 2 号、2022.4

「装幀家・柄折久美子と『火の魚』」、『日本近代文学館年誌』18 巻、2023.3

「奇術としての製本—四回の講座（M.F. 作）」、『ユリイカ』55 巻 9 号、2023.6

(3) 報告発表

「タイムトラベル 90 年前の復興図書館展」、東京大学「文化資源としての書物」履修生、担当教員：野村悠里、図書館総合展ポスターセッション、2022.11

「100 年を生きのびた図書 —震災復興と図書疎開」、東京大学「文化資源としての書物」履修生、担当教員：野村悠里、図書館総合展ポスターセッション、2023.11

(4) 受賞

図書館総合展来場者投票賞、東京大学「文化資源としての書物」履修生、担当教員：野村悠里、図書館総合展運営委員会、2022.12

(5) 研究テーマ

科学研究費助成、研究代表者、「製本術の工程分析に関する基礎的研究：東京大学所蔵「英国書史関係集書」を対象として」、2020.9～2023.3

科学研究費助成、研究代表者、「19、20 世紀におけるルリユールの国際的展開：工芸製本家の書物観と製本技術の継承」、2022.4～

東京大学卓越研究員助成、研究代表者、「書物の文化的記憶——製本構造の歴史的研究」、2022.11～

e その他

(1) 学会・委員活動

文化資源学会、理事、2020.7～

- 教 授 **小林 真理** KOBAYASHI, Mari
2 8 文化資源学 《 文化経営学専門分野 》 参照
- 准教授 **松田 陽** MATSUDA, Akira
2 8 文化資源学 《 文化経営学専門分野 》 参照
- 教 授 **高岸 輝** TAKAGISHI, Akira
0 3 美術史学 参照
- 准教授 **西村 明** NISHIMURA, Akira
0 6 宗教学宗教史学 参照
- 准教授 **吉田 寛** YOSHIDA, Hiroshi
0 7 美学芸術学 参照
- 准教授 **大向 一輝** OHMUKAI, Ikki
3 0 次世代人文学開発センター 参照

《文化経営学専門分野》

教 授 **小林 真理** KOBAYASHI, Mari

1. 略歴

1987年3月	早稲田大学教育学部社会科社会科学専修卒業
1987年4月	早稲田大学大学院政治学研究科修士課程政治学専攻入学
1990年3月	早稲田大学大学院政治学研究科修士課程政治学専攻修了（政治学）
1990年4月	早稲田大学大学院政治学研究科博士後期課程政治学専攻入学
1993年5月	早稲田大学人間科学部助手（～1996年3月）
1996年3月	早稲田大学大学院政治学研究科博士後期課程政治学専攻単位取得満期退学
1998年4月	昭和音楽大学音楽学部助手
2000年4月	静岡文化芸術大学文化政策学部講師
2001年1月	博士（人間科学）
2004年4月	東京大学大学院人文社会系研究科助教授
2007年4月	東京大学大学院人文社会系研究科准教授（職名変更）
2016年4月	東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

文化経営学、文化政策学

b 研究課題

文化を支える諸制度、及び文化の発展を阻害する制度について関心をもって研究を進めてきた。研究の中心を法制度及び法制度の運用においてきたが、最近では国や自治体の文化政策の動向に対応して、文化にとってよりよい政策の企画、立案、執行のあり方について考えている。とくに行政改革が現実に行われ、市町村合併の推進及び2003年に地方自治法改定で施行された指定管理者制度が導入される状況の中で、公立文化施設（美術館、文化ホール等）の望ましい運営方法とそれを管理する文化政策のあり方を研究の対象としてきた。

近年では、文化政策の制度化によって計画化が進み、それらの評価のあり方が課題となってきた。さらに、いわゆる1980年代の「文化の時代」の成果と問題点が何かという視点で、平成の文化政策を見渡して検証する作業を行っている。1980年代から急増した文化施設の老朽化が進み、それらに対する国および地方自治体の対策のあり方を見ながら、これまでの施策を振り返る作業を行っている。

c 概要と自己評価

これまでに自治体文化政策の現場において、条例制定、計画策定、そして事業展開の基盤づくりに携わってきたが、それらを検証し、記述する作業に入っている。また政策形成過程の観察を通じて、文化政策の企画立案や方法に関心を持っている人たちに、普及していく必要性を強く感じるようになった。近年は、『新時代のミュージアム』、『法から学ぶ文化政策』を刊行したが、2022年には地方自治体の職員向けに『自治体文化行政のレッスン55』を出版した。日本の文化政策が拡大を続けていく中で、それをどのように行っていくか、またどのような制度を整えていくかを改めて考える上で重要な示唆を与えると考える。これらの問題を研究対象として考察していく上での基礎的な知識を提供するという意味で、とりわけ平成に行われた文化政策の実態について考察を深めている。また、このような潮流を捉えつつ、もう一度個別の具体的な文化事業、文化施設の持続可能性について考察を深めていきたいと考えている。

d 研究業績

(1) 書籍出版物

[共著]（共編著・分担執筆）小林真理（監修・共編著）、鬼木和浩、土屋正臣、中村美帆『自治体文化行政レッスン55』、美学出版、2022、ISBN:9784902078701

(2) 論文

小林真理「地方自治法第244条2の第3項が文化行政に与えた影響」、『日本法学』第88巻第3号、551-580頁、2023（査読付き）

(3) 講演・口頭発表等

(国際学会) (招待講演) Mari Kobayashi.Rediscovering the Cultural Value of the Region and Connecting it to Cultural Tourism.
in symposium on Art in the countryside: Art and Regional Revitalization through Case Studies from Japan.DIJ German Institute
for Japanese Studies、2022.8.12

小林真理、(招待講演)「スポーツ政策とスポーツ文化～文化政策と比較して考える」、日本体育スポーツ政策学会、
2022.11.26、東京成徳大学

岡本彩、立石訓人、ベルクマン・アンネ、小林真理(研究発表)「無形文化財保護のための国立劇場の果たす役割」、
日本文化政策学会第16回年次大会、2023.3.19、芸術文化観光専門職大学

(4) 共同研究・競争的資金等の研究課題

日本学術振興会科学研究費基盤研究B「平成の日本の文化政策と文化政策関連研究の検証」(2023-2027)(13900千
円)

e 社会活動

(1) 社会貢献活動

滋賀県職員向け文化行政研修「いま、文化政策と文化芸術を活かした地域づくり」、2022.1.26、オンラインでの開催
熊本県「これまでの文化行政、これからの文化行政―関連職員に共有してほしいミッション」、2022.6.8、熊本県立劇場
(一財)地域創造セミナー、鹿児島県職員向け研修「地域の文化施設のこれまで、これから」、2022.6.29、鹿児島県立
宝山ホール

足利市市役所「いま、文化のまちづくりとは～自治体文化行政は成功したか」、2022.10.18

全国公立文化施設協会アートマネジメント研修「文化芸術基本計画(第二期)の審議過程と今後に向けて」講師、
2023.1.24、ライブ配信

(一財)地域創造セミナー、高知県職員向け研修、2023.8.18、高知県にて

北海道文教大学地域創造研究センター「これからの文化政策を考える」講演、北海道文教大学、2023.11.2

犬山歴史文化ぷらっとフォーラム「文化財保護と文化財保護行政」(名古屋経済大学)、2023.11.11

(2) 学術貢献活動

小林真理、日本文化政策学会第15回年次大会、2022.3.20～21、成蹊大学、オンライン開催

小林真理、日本文化政策学会第16回年次大会、企画フォーラム、パネリスト「文化政策の専門性とは何か～学芸員
制度を考える」、2023.3.19、芸術文化観光専門職大学

企画提案者「劇場法10年、劇場支援事業と日本の劇場のこれまで、これから」、共同企画提案者「文化のエコシステ
ム―文化政策における法の在り方を考える―」、「文化庁における文化支援事業の有効性」、コメンテーター

f その他

(1) 非常勤講師

成蹊大学文学部「文化政策と法」(2022、2023)

早稲田大学政治経済学部「法学」「文化政策」(2022、2023)

お茶の水女子大学「博物館経営論」(2022)

(2) 学会・委員活動

文化経済学会(日本)理事

日本文化政策学会理事、副会長

(3) その他

文部科学省文化審議会文化政策部会臨時委員(2022、2023)

文部科学省文化審議会博物館部会(2022)

文化庁文化観光拠点施設企画調査委員(2023)

公益財団法人図書館振興財団図書館振興事業選考委員(2022、2023)

一般財団法人地域創造、地域創造大賞(総務大臣賞)審査委員(2022、2023)

文化庁芸術選奨選考委員(2022)

高知県文化芸術振興ビジョン評価委員会(2022、2023)

滋賀県文化審議会(2022、2023)

三重県文化審議会(2022、2023)

東京都神宮前5丁目まちづくり検討会議(2022、2023)

東京都築地まちづくり審査委員会(2022、2023)

東京都杉並区文化・芸術振興審議会(2022、2023)

武蔵野市武蔵野公会堂改修有識者会議委員（2022）
栃木県（仮称）新足利市民会館整備基本構想策定市民検討委員会委員長（2022）
東京都武蔵野市公会堂改修設計者選定委員会委員（2023）
茨城県古河市新公会堂基本構想・基本計画市民委員会委員長（2023）
滋賀県東近江市文化芸術基本計画策定委員会委員長（2023）

准教授 **松田 陽** MATSUDA, Akira

1. 略歴

1997年3月	東京大学文学部歴史文化学科西洋史学専修課程卒業
2002年11月	ロンドン大学 UCL 考古学研究所修士課程修了 学位取得 修士（文化遺産研究）
2003年3月	東京大学大学院人文社会系研究科文化資源学研究専攻修士課程修了 学位取得 修士（文化経営学）
2004年5月	国連教育科学文化機関(ユネスコ) パリ本部文化セクター文化遺産部コンサルタント（～同年7月）
2005年6月	国連教育科学文化機関(ユネスコ) パリ本部文化セクター文化遺産部コンサルタント（～同年8月）
2009年10月	ロンドン大学 UCL 考古学研究所博士課程修了 学位取得 博士（パブリックアーケオロジー）
2010年9月	ロンドン大学 UCL 考古学研究所名誉講師（Honorary Lecturer）
2011年9月	セインズベリー日本藝術研究所学術アソシエイト（Academic Associate）
2011年9月	イーストアングリア大学（University of East Anglia）世界美術・博物館学科（School of World Art Studies and Museology）准教授（Lecturer）
2014年8月	イーストアングリア大学（University of East Anglia）芸術・メディア・アメリカ研究学科（School of Art, Media and American Studies）准教授（Lecturer）（組織再編）
2015年1月	イーストアングリア大学高等教育実践修士課程修了 学位取得 准修士（高等教育実践）
2015年10月	東京大学大学院人文社会系研究科 准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

文化資源学、文化遺産研究、パブリックアーケオロジー、博物館研究

b 研究課題

私の研究の根底にあるのは、人々にとって過去が何を意味するのかという問いにある。いかにも大仰な問いだが、この関心に導かれるかたちで、これまで人々が社会においてどのように過去をイメージし、理解し、使う（そして場合によっては「消費する」）のかをさまざまな角度から考察してきた。直接関連する分野としては、文化資源学、文化遺産研究、博物館研究、物質文化研究、人文地理学などがあげられるが、おそらくあらゆる学問分野に何らかのかたちで関わりがあり、分野横断的に展開できるテーマではないかと思っている。これまでは考古学に関連する文化遺産を事例研究にすることが多く、その中でパブリックアーケオロジーという領域に強い関心をもってきた。現在は、近現代における古墳と地域住民との関係史、自然災害に対する社会の記憶、文化遺産とノスタルジアとの関係、文化遺産に真実性はどれほど必要か、といったテーマにとりわけ注力している。東京大学本郷キャンパスという文化資源を魅力的にプレゼンテーションする方策にも興味をもっている。

c 概要と自己評価

2022～2023年度は、主に（1）文化遺産研究の理論構築、（2）パブリックアーケオロジーの理論構築、（3）博物館研究の理論構築、（4）文化財保護の思想と制度、（5）東京大学本郷キャンパスという文化資源、という5つのテーマに絞って研究を遂行した。そこから結実した主要出版業績は、次項を参照。

d 研究業績

(1) 書籍出版物

共著、松田陽、「イギリスのコレクション管理制度」、『博物館とコレクション管理：ポスト・コロナ時代の資料の保管と活用』、雄山閣、2022.6.25

(2) 論文

Tully.Gemma. Delgado Anés.Lara. Thomas.Suzie. Olivier.Adrian. Benetti.Francesca. Castillo Mena.Alicia. Chavarri Amau.Alexandra. Rizner.Mia. Möller.Katharina. Karl.Raimund. Matsuda.Akira. Martín Civantos.José María. Brogiolo.Gian Pietro. Cívicos.Nekbet Corpas. Ripanti.Francesco. Sarabia Bautista Julia. and Schivo.Sonia. 2022 「Evaluating Participatory Practice in archaeology: Proposal for a standardized approach」、『Journal of Community Archaeology and Heritage』9、2022.4.6

(3) その他論文

松田陽「橘樹官衙遺跡群をどう活用しますか?」、『川崎市遺跡リーフレット③ 令和3年度橘樹官衙遺跡群保存活用事業 橘樹学連続講座「古代橘樹を知り、活用する」II』、2022.3

松田陽「文化遺産研究からみた宗教遺産学」、『宗教遺産テキスト学の創成』、勉誠出版、2022.3

(4) 講演・口頭発表等

口頭発表、日本考古学協会第88回総会、セッション7埋蔵文化財保護対策委員会「近現代遺跡の調査と保存・活用」、「近現代遺跡の保存・活用の課題」、2022.5

口頭発表、国際日本文化研究センター所長主宰研究会「文化遺産学の再構築」、「文化遺産の拡大と液状化：文化遺産学はどこへ行く」、2022.8

講演、天津大学建築学院、「A Reconsideration of Heritage Reconstruction」、2022.10

講演、立命館大学 第120回国際ARCセミナー、「歴史とお話のはざま：須磨寺のヒストリア」、2023.6

口頭発表、拠点研究「大規模災害に対応する災害遺産を活用した地域防災力向上の研究」（研究代表者：井口正人）、災害遺産に関する国際的研究拠点形成のための国際シンポジウム、「災害遺産の分類」、2023.11

口頭発表、岡山大学文明動態学研究所・特別推進研究域（R1-R5）「地域歴史資料学を基軸とした災害列島における地域存続のための地域歴史資料資料文化の創生」（代表 神戸大学教授奥村弘）、「C班「災害文化を内包した地域社会形成史領域」、「文化遺産研究の現在：2023『ヨーロッパ文化遺産研究の最前線』を踏まえて」、2023.11

講演、世界遺産平泉保存活用推進実行委員会 平泉世界遺産登録12周年記念講演会、「世界遺産の最新動向：日本の文化財保護への影響」、2023.11

口頭発表、文化遺産国際協力コンソーシアム 第21回欧州分科会、「イタリア南部ヴェスヴィオ山北麓におけるローマ時代遺跡の発掘調査研究」、2023.12

口頭発表、早稲田大学 国際ワークショップ「近現代日本を生きるテキスト遺産 モノ、営為、世界」、「お話としての『桜井の別れ』と、現実の場所としての『桜井駅』」、2023.12

(5) 共同研究・競争的資金等の研究課題

MEC-UTokyoLab 三菱地所東大ラボ 共同研究「神田エリアの歴史資産とその評価」（研究リーダー：松田陽）、2023.10～

e 社会活動

(1) 社会貢献活動

日本学術会議（分属：博物館・美術館等の組織運営に関する分科会、文化財の保護と活用に関する分科会）、連携会員
文化庁、文化審議会委員（分属：文化政策部会、世界文化遺産部会、無形文化遺産部会）

文部科学省、日本ユネスコ国内委員会文化活動小委員会調査委員

文化遺産国際協力コンソーシアム、文化遺産国際協力コンソーシアム欧州分科会委員

川崎市、橘樹官衙遺跡群調査整備委員会、委員

市川市、市川市博物館協議会、委員

富岡市、富岡製糸場インタープリテーション検討委員会 委員、2022年度

富岡市、富岡製糸場保存活用委員会、委員、2023年度

高崎市、史跡保渡田古墳保存再整備委員会（2022.10～）

鹿角市、特別史跡大湯環状列石保存活用計画策定検討委員会

鹿児島市、鹿児島市火山防災アドバイザー委員

兵庫県立人と自然の博物館 ひととはく将来ビジョン検討委員会、委員（2022.6～2023.3）

f その他

(1) 学会

文化資源学会、事務局長

日本考古学協会、国際交流委員会、委員
学術雑誌『文化資源学会』編集委員
学術雑誌『Antiquity』編集諮問委員
学術雑誌『Public Archaeology』編集諮問委員
学術雑誌『World Art』諮問委員

教 授 **中村 雄祐** NAKAMURA, Yusuke
2 8 文化資源学 《 文化資源学専門分野 》 参照

准教授 **野村 悠里** NOMURA, Yuri
2 8 文化資源学 《 文化資源学専門分野 》 参照

教 授 **高岸 輝** TAKAGISHI, Akira
0 3 美術史学 参照

准教授 **西村 明** NISHIMURA, Akira
0 6 宗教学宗教史学 参照

准教授 **吉田 寛** YOSHIDA, Hiroshi
0 7 美学芸術学 参照

准教授 **大向 一輝** OHMUKAI, Ikki
3 0 次世代人文学開発センター 参照

29 韓国朝鮮文化

教授 福井 玲

FUKUI, Rei

<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/~fkr/>

1. 略歴

1980年3月	東京大学文学部言語学科卒業（文学士）
1982年3月	東京大学大学院人文科学研究科言語学専攻修士課程修了（文学修士）
1984年9月	韓国ソウル大学校人文大学国語国文学科に留学（～1986年10月）
1987年3月	東京大学大学院人文科学研究科言語学専攻博士課程単位取得退学
1987年4月	東京大学文学部助手（言語学研究室）（～1989年3月）
1989年4月	明海大学外国語学部講師（日本語学科）（～1992年9月）
1992年10月	東京大学教養学部助教授（～1997年3月）
1994年10月	東京大学文学部附属文化交流研究施設助教授（併任）
1997年4月	東京大学文学部附属文化交流研究施設に配置換
1998年4月	東京大学大学院人文社会系研究科附属文化交流研究施設に配置換
2002年4月	東京大学大学院人文社会系研究科に配置換
2007年4月	東京大学大学院人文社会系研究科准教授
2013年3月	東京大学大学院人文社会系研究科教授
2023年3月	定年退職

2. 主な研究活動

a 専門分野 b 研究課題 c 概要と自己評価

主な専門分野は韓国語学であり、その中でも中世語の音韻体系に関する研究や古代語、近代語についての研究を行ってきた。また、それらを歴史的につなぐ通時的な研究も行なっている。現代語についても主として音声や方言に関する研究を行ってきた。さらに、中世語から近代語にかけての韓国語学の資料研究も行っている。2013年1月にはこれまでにやってきた韓国語の音韻史にかかわる研究をまとめて単行本として出版している。その他に、音声学・音韻論を中心とする言語学一般、方言研究を中心とする日本語学にも関心をもっている。2019年度には日本語と韓国語の間の古代の借用語について論じ、その成果は2020年に三省堂から出版された『日本語「起源」論の歴史と展望 日本語の起源はどのように論じられてきたか』の中にまとめられている。2021年には、新たに再発見された小倉進平の卒業論文の内容を要約し、彼の初期の学問の特徴をまとめる論文を『朝鮮学報』に執筆した。

これ以外に、2013年から現在に至るまで継続して行っている研究課題として、韓国語の語彙史の研究があげられる。過去に行なわれた方言調査（小倉進平、崔鶴根、韓国精神文化研究院）の資料に基づいて、項目を選定して言語地図を作製し、そこに見られる語彙の歴史を再構成することを目指している。2015年度からはこのテーマで科研費を受け、福嶋映子・福嶋祐介氏原作の言語地図作製プログラム（Seal）の改良を行ない、朝鮮半島の言語地図を描くことができるシステムを構築した。そして、それを用いて、2016年度と2017年度に、『小倉進平『朝鮮語方言の研究』所載資料による言語地図とその解釈』の第1集と第2集を作成した。それぞれ30余りの項目を選び、それについての考察を筆者及び大学院生諸君で分担して執筆したものである。2019年には中国の中央民族大学と韓国の慶北大学でその成果の発表を行った。第3集は2022年3月に完成した。これらはすべて冊子版およびweb版として公表している。さらに、東京外国語大学AA研の共同プロジェクト「アジア・アフリカ地理言語学」にも参加し、毎回研究発表を行なっている。

d 研究業績

(1) 論文

[大学研究機関紀要] 福井玲、「小倉文庫拾遺」、『韓国朝鮮文化研究』22(1)、(75)-(98)頁、韓国朝鮮文化研究室、2023.5

[大学研究機関紀要] 福井玲・南潤珍（共著）、「李基文先生へのインタビュー」、『韓国朝鮮文化研究』22(2)、(75)-(98)頁、韓国朝鮮文化研究室、2023.5

(2) 講演・口頭発表等

[口頭発表(招待)] 「小倉進平の遺産」、九州大学韓国研究センター、2022.7.1

[口頭発表(一般)] 「訓民正音」の意味をめぐって」、朝鮮語研究会第273回研究会、2022.12

e その他

(1) 非常勤講師

広島大学、2022.4～2022.9.30

(2) 学会・委員活動

[委員歴] 朝鮮語研究会会長、2022.10～

[委員歴] 日本歴史言語学会編集委員長、2022.4～2024.3

教授 六反田 豊 ROKUTANDA, Yutaka

1. 略歴

1985年3月	九州大学文学部史学科朝鮮史学専攻卒業
1987年3月	九州大学大学院文学研究科(史学専攻)修士課程修了
1989年3月	九州大学大学院文学研究科(史学専攻)博士後期課程中途退学
1989年4月	九州大学文学部助手(～1992年3月)
1992年4月	久留米大学文学部専任講師(～1995年3月)
1995年4月	久留米大学文学部助教授(～1996年3月)
1996年4月	九州大学文学部助教授(～2000年3月)
2000年4月	九州大学大学院人文科学研究院助教授(～2002年3月)
2002年4月	東京大学大学院人文社会系研究科助教授(～2007年3月)
2007年4月	東京大学大学院人文社会系研究科准教授(～2015年3月)
2015年4月	東京大学大学院人文社会系研究科教授(現在に至る)

2. 主な研究活動

a 専門分野

朝鮮中世・近世史

b 研究課題

朝鮮王朝(1392-1910)時代の水運史や財政史・経済史などを中心に研究している。現在の主たる研究課題は、(1) 朝鮮前期漕運制研究、(2) 朝鮮中世・近世海事史研究、(3) 朝鮮中世・近世「水環境」研究、(4) 朝鮮時代財政史研究、(5) 朝鮮時代の古文書および各種文献資料研究などである。(1)の漕運制とは朝鮮時代における官営の税穀船運機構であり、朝鮮初期におけるその整備・変遷過程や運営実態等を明らかにする作業に取り組んでいる。(2)は(1)から派生したもので、朝鮮の前近代史を「海」とのかかわりで再構成するという問題意識から、済州島民の海難関係記録の分析を通じて彼らの海上活動の実態や異国への漂流・漂着をめぐる諸問題、朝鮮時代の海防体制や「水賊」などについて研究している。(3)は(2)をさらに発展させ、広く人と「水」とのかかわりを明らかにしようとするもので、当面は漢江をはじめとする河川の管理・利用という側面を主たる対象として、水運だけでなく、渡船や漁撈、さらには治水・水利といった点も含めて「水環境」史の構築をめざしている。(4)は、朝鮮後期に施行された新税制である大同法を、その運用実態を地方財政との関連に注目しながら研究しているほか、朝鮮初期の財政制度の性格や、朝鮮時代全般にわたる地方財政の運用方式なども研究の対象としている。(5)は日本各地の諸機関に所蔵される朝鮮古文書や朝鮮時代の各種文献資料の調査である。2022年度から2023年度(特に2022年度)にかけても、依然として新型コロナウイルス感染症流行の影響により韓国での現地調査や文献収集が不可能であったため研究の進行に多大な支障を生じたが、そのようななかでも特に(3)(5)の課題を中心に研究を進めた。

c 概要と自己評価

まず上記研究課題の(3)については、すでに2010年度から2013年度にかけて「朝鮮半島の「水環境」をめぐる社会・経済・文化の歴史的諸相—漢江を中心として」というテーマで日本学術振興会から科学研究費補助金の支給を受け、次いで2016年度から4年間は、それを発展させた研究課題「朝鮮環境史の創成にむけた河川の管理・利用に関する総合的研究」(基板研究(B):課題番号16H03486)が科学研究費補助金の交付対象に採択されるなど、科学研究費補助金を得て精力的に研究を進めてきた(いずれも研究代表者を務めた)。後者のプロジェクト終了後の2021年3月、朝鮮史研究会との共催の形で、他の研究分担者も含めた5人の報告者からなる「朝鮮環境史の創成にむけた河川の管理・利用に関する総合的研究」ミニ・シンポジウムをオンラインにより開催することができ、この間進めてきた朝鮮時代の農業水利施設と周辺環境との関係について「環境史からみた朝鮮時代の水利施設—堤堰と川防を中心として—」と題する報告をおこなった。ただし、この報告は実証面でさらに深化させる必要があったため、2022年度以降も『慶尚道続撰地理志』をはじめとする各種史料の分析を進めた。ただし2023年度末までに論文として発表するには至らなかったため、2024年度以降の課題としたい。

次に(5)については、2022年春に韓国朝鮮文化研究室に寄贈された豊基秦氏族譜関係資料(以下、本資料と記載)の整理作業と個々の資料の調査・分析を進めた。豊基秦氏とは、現在の韓国慶尚北道栄州市豊基邑を本貫(始祖の発祥地・根拠地)とする父系氏族で、現在の人口は約20,000人という。韓国の父系氏族のなかでは小規模な存在である。本資料は、『豊基秦氏族譜』2冊のほか、18世紀初めから20世紀初めにかけての戸口単子・准戸口・告身等23点、それに同氏族の系譜に関する20世紀以降の各種書付類12点からなる。2023年度末までに整理はほぼ完了し仮目録も作成したが、若干取扱いに注意を要する資料もあり、現時点では公開していない。一方、『豊基秦氏族譜』(以下、刊行年により癸巳譜と記載)については、分析の結果、その編纂経緯を明らかにすることができた。すなわち癸巳譜は、現存が確認できる同氏族の族譜類よりも古い1773年に編纂・刊行されたものである。また、癸巳譜の記載様式に注目すれば、基本的には朝鮮族譜に多くみられる内譜(父系子孫のみを記載)の記載様式をとりつつも、子孫の収録範囲からみれば父系・母系両子孫を区別なく記載する内外譜から内譜への過渡的性格を有するものである。また同氏族の他の族譜と比較すると記載された子孫の範囲や数に顕著な異同が見られることも判明した。癸巳譜にみられるその他の特徴も含め、以上の内容については九州史学会2023年度大会で報告し、目下、論文として執筆準備を進めている。

d 研究業績

(1) 著書

(共著) 日韓文化交流基金編『歴史における戦争と文明 第23回日韓・韓日歴史家会議』、日韓文化交流基金、2024.3、総149頁

(2) 講演・口頭発表等

(国際) 六反田豊「『丘凡真「明・永楽帝のベトナム侵攻(1406～1407)と『明太宗実録』における記録の捏造』に対する討論文」、第22回日韓歴史家会議「歴史における戦争と文明」、ソウル大学校(韓国ソウル市冠岳区)、2023.11.17～19

(国内) 六反田豊「英祖49年(1773)刊『豊基秦氏族譜』について」、九州史学会2023年度大会、九州大学(福岡市)、2023.12.10

e 社会活動

(1) 学術貢献活動

(国内) 公益財団法人東洋文庫、研究員、2022.4～

(国内) 朝日カルチャーセンター横浜教室、講師、2022.7～2023.3、2023.7～2024.3

(2) メディア報道

(国内) NHK 教育テレビ「高校講座世界史」、講師、2022.4～2024.3

f その他

(1) 非常勤講師

(国内) 学習院大学、「東洋史特殊講義」、2022.4～2024.3

(国内) 国際基督教大学、「韓国史」、2022.4～2022.6、2023.4～2023.6

(2) 学会・委員活動

(国際) 韓国中世史学会(韓国)、地域理事、2022.3～2024.2

(国際) 朝鮮時代史学会(韓国)、国際理事、2022.3～2024.2

(国際) 釜山大学校民族文化研究所(韓国)、『韓国民族文化』編集委員、2022.3～2024.2

(国内) 朝鮮学会、常任幹事・編輯委員、2021.10～

(国内) 朝鮮史研究会、編集委員長、2021.10～

(国内) 韓国・朝鮮文化研究会、運営委員・編集委員、2021.10～

教授 **本田 洋**

HONDA, Hiroshi

<http://www.lu-tokyo.ac.jp/~hhonda/>

1. 略歴

1986年3月 東京大学教養学部教養学科第一文化人類学分科卒業
1986年4月 東京大学大学院社会学研究科文化人類学専修課程修士課程入学
1988年3月 同上 大学院社会学研究科修士課程修了
1988年4月 同上 大学院総合文化研究科文化人類学専攻博士課程進学
1988年8月 文部省アジア諸国等派遣留学生として韓国ソウル大学校に留学（～1991年5月）
1993年3月 東京大学大学院総合文化研究科文化人類学専攻博士課程単位取得満期退学
1993年4月 日本学術振興会特別研究員（PD）（～1994年3月）
1994年4月 東京大学教養学部助手（～1996年3月）
1996年4月 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助手（～2000年3月）
1999年8月 韓国ソウル大学校社会科学研究院比較文化研究所常勤研究員（～2000年8月）
2000年4月 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助教授（～2002年3月）
2000年9月 英国オックスフォード大学訪問研究者（～2001年3月）
2002年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授
2016年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授（現在に至る）
2019年3月 韓国全北大学校人文大学訪問研究者（～2019年10月）

2. 主な研究活動

a 専門分野

社会・文化人類学、韓国朝鮮文化研究

b 研究課題

韓国朝鮮社会を主たる対象として、社会・文化人類学的な観点から調査研究を進めている。博士課程在籍時より約35年にわたり民族誌研究（フィールドワークに基づく記述・分析）を進めてきた韓国全北南原地域を中心に、随時他の地域でも短期の調査を重ねている。2023年後半からはソウルを拠点として活動する複数の生活共同体の調査も行っている。近年の研究課題は、(1) 産業化後の韓国社会における人の移動とローカリティの構築に関する民族誌研究、(2) 近年の韓国社会における「共同体」をめぐる言説と実践に関する民族誌研究と理論研究、(3) 近代朝鮮韓国における「家族」の構築に関する歴史人類学的研究、(4) 産業化後の韓国社会における家族・親密圏の再編成と代案的親密性の探求に関する民族誌研究、等である。

c 概要と自己評価

研究課題 (1)・(2) については、2007年に開始した南原地域山内地区・近隣地区における帰農・帰村者（都市から農村への移住者）の移住と代案的生き方・共同性の構築に関する調査に加え、2018年以降は、必ずしも代案的な生き方・共同体を目的としないような移住者や市街地に暮らす流動性の高い中産層的な住民を含めたローカルな諸活動の構想と実践についての調査も行ってきた。当該期間は主に「現代韓国社会におけるローカル・コミュニティの再構築：「共同体作り」の事例から」（2020～23年度 JSPS 科研費基盤研究（C）20K01211・研究代表者）の一環としてこの課題を実施した。その成果報告書にも記したが、「マウル（村）・共同体作り」と総称されるようなローカルな諸活動について市街地と農村地域の双方で事例研究を実施するとともに、現代韓国における「共同体」の言説と実践を総体的かつ分析的に捉える理論的視角を示すことができた。また (1) の成果として、地域社会でのコミュニティ的な諸活動を通じたローカルな主体の構成について、論文「市民活動家としての主体化に関する試論——韓国南原地域にお

ける共同体支援の現場から」(下記参照)を執筆した。以上の知見を発展させ、複合性と流動性の高まる地域社会において、ローカルな主体とローカルな世界がどのように構成されているのかを主題とした後続プロジェクト「〈私たち/私〉の作り方：現代韓国社会におけるローカリティの生産の民族誌」(2024～26年度 JSPS 科研費基盤研究 (C) 24K04467・研究代表者)の採用も内定した。

研究課題 (3)・(4) は、科研費共同研究「少子化に揺れる東アジアの父系理念—祖先祭祀実践と世界観の再創造に関する比較研究」(2018～23年度 JSPS 科研費基盤研究 (A) 18H03607・研究分担者)、「脱家族の人類学—東アジアの縮減する家族に向き合う生と死の比較研究」(2023～27年度 JSPS 科研費基盤研究 (A) 23H00026・研究分担者)との関連で進めてきた研究である。1990年代以降の韓国社会における祭祀・追慕実践の諸様相を現地調査に基づき考察する作業から始まったもので、火葬・納骨の普及と祭祀・追慕の形式の多様化、ならびにそのような実践が展開される社会経済的諸脈絡を、インタビュー調査と自他の先行研究、ならびに統計資料を相互対照しつつ跡付けたうえで、儒礼の orthopraxy (形式としての正統性)の解体や家族の役割をめぐる交渉、ならびに自己の実存性の再帰的な捉え直しなど、祭祀・追慕と家族に関して従来看過されてきた諸論点を提示した。そこから韓国の家族を近代的な構築物として捉え直し、家族の自明性と当為性を批判的に再検討する研究構想が生まれた。当該期間の成果として、まず (3) について、近現代朝鮮韓国社会における概念装置としての「家族」の構築と再生産を、歴史学、社会・文化人類学、福祉社会学の観点から学複合的に検討したシンポジウム「韓国家族再考：制度／イデオロギーと実践の脱家族的相対化へ向けて」(下記参照)の企画と開催を挙げることができる。多くの関連研究者の参加を得て、その成果も関連学術誌に掲載される予定である。(4) については、ケア・配慮の関係性としての親密圏の縮小・流動化と国家の社会保障政策の停滞を背景として少数の血縁的家族に過重な負担がかかるなか、家族と国家とは異なる次元でケア・配慮のシステム化と実践をはかる2つの生活共同体の現地調査を開始した。このような代案的親密性の実践が親密圏や家族をどのように再編成しているのかに留まらず、家族が親密性の特権的な担い手であるというイデオロギーの相対化を試みるという点で、(3) にもつながってゆく先鋭的な研究構想となっている。

以上、コロナ禍も明けて現地での本格的な調査研究が可能となり、その間準備してきた研究構想を順次実行することが可能となった。

d 研究業績

(1) 論文

[単著]「市民活動家としての主体化に関する試論——韓国南原地域における共同体支援の現場から」、『韓国朝鮮文化研究』22(2)、pp.51-73、2023.5、<https://repository.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/records/2008097>

(2) その他各種論著

[Commentary] Bier-bearing “Inferiors” and the “Skin” of the Community in Modern and Contemporary Village Society: Cases from Southern Gyeonggi Province by Ahn Seung Taik. *Korean Anthropology Review*.6. pp.113-116. 2022

http://www.kanthroreview.com/past/view.asp?a_key=3935382&flg=1#

(3) 講演・口頭発表等

[国際学会発表]「일본의 한국연구와 공동체의 민족지 (日本の韓国研究と共同体の民族誌)」(韓国語)、2022年度韓国文化人類学会秋季学術大会、2022.11.11、於：全北大学校

[招聘講演]「담론과 실천으로서의 마을-공동체: 전북 남원의 민족지에서 (言説と実践としてのマウル—共同体：全北南原の民族誌から)」、海外碩学招聘特講、全北大学校米・生・文明研究院／考古人類学科 BK21 教育研究団、2022.11.15、於：全北大学校

[口頭発表(基調)]「趣旨説明」、韓国・朝鮮文化研究会第24回大会シンポジウム「韓国家族再考：制度／イデオロギーと実践の脱家族的相対化に向けて」、2023.10.14、於：横浜国立大学

[口頭発表(一般)]「韓国の家族と祭祀：変化の分析と比較の視点」、少子化・脱家族科学研究会、2023.11.12、於：慶應義塾大学三田キャンパス

[口頭発表(一般)]「現代韓国の祭祀と家族—孤立・流動化する親密圏と個の再帰性」、シンポジウム「東アジアの祖先祭祀を問い直す—少子化、父系理念、家族を超える試みから」、2024.1.27、主催：「少子化に揺れる東アジアの父系理念—祖先祭祀実践と世界観の再創造に関する比較研究」(JSPS 科研費 JP23H00026)、於：東京大学本郷キャンパス

(4) 共同研究・競争的資金等の研究課題

[研究分担者]「少子化に揺れる東アジアの父系理念—祖先祭祀実践と世界観の再創造に関する比較研究」、2018～23年度、JSPS 科研費基盤研究 (A) : 18H03607

[研究分担者]「アジアの都市におけるノスタルジアの表出と文化遺産の創出」、東京大学ヒューマンティーズセンター協働研究、2022～25年度

[研究分担者]「脱家族の人類学—東アジアの縮減する家族に向き合う生と死の比較研究」、2023～27 年度、JSPS 科研費基盤研究 (A) : 23H00026

e 社会活動

(1) 社会貢献活動

[編集代表]『韓国朝鮮文化事典』(丸善出版)、企画・編集委員会代表、2022.4～

[編集長]『韓国朝鮮の文化と社会』(韓国・朝鮮文化研究会、風響社)、編集責任者、2023.10～

[コメンテーター]ワークショップ「韓国の都市におけるノスタルジアの表出と文化遺産の創出」、東京大学ヒューマニティーズセンター協働研究「アジアの都市におけるノスタルジアの表出と文化遺産の創出」、於：東京大学本郷キャンパス、2024.2.20

(2) 学術貢献活動

[査読] 2022・2023 年度東京大学学術成果刊行助成審査

[シンポジウム企画・趣旨説明(単独)] 韓国・朝鮮文化研究会第 24 回大会シンポジウム「韓国家族再考：制度／イデオロギ―と実践の脱家族的相対化に向けて」、2023.10.14、於：横浜国立大学、<https://askcs.jp/pg158.html>

[シンポジウム企画(共同)] シンポジウム「東アジアの祖先祭祀を問い直す—少子化、父系理念、家族を超える試みから」、2024.1.27、主催：「少子化に揺れる東アジアの父系理念—祖先祭祀実践と世界観の再創造に関する比較研究」(JSPS 科研費 JP23H00026)、於：東京大学本郷キャンパス

[ワークショップ企画(共同)]「韓国の都市におけるノスタルジアの表出と文化遺産の創出」、東京大学ヒューマニティーズセンター協働研究「アジアの都市におけるノスタルジアの表出と文化遺産の創出」、2024.2.20、於：東京大学本郷キャンパス

f その他

(1) 学会・委員活動

[所属学会] 日本文化人類学会、韓国文化人類学会、朝鮮史研究会、韓国・朝鮮文化研究会、朝鮮学会

[所属学会・委員歴] 朝鮮学会常任幹事・『朝鮮学報』編輯委員、2022.4～

[所属学会・委員歴] 韓国・朝鮮文化研究会運営委員、2022.4～、うち 2022.10～2023.9 は会長(うち 2022.4～9 は庶務責任者を、2022.10～2023.9 は企画責任者を兼任)、2023.10～編集責任者

[委員歴] Korean Anthropology Review 編集委員、2022.4～

[委員歴] 『比較文化研究』(韓国ソウル大学校比較文化研究所) 編集委員、2022.4～

[委員歴] 『全北学研究』(韓国全北学研究センター) 編集委員、2022.4～

准教授 **金 成垣** KIM, Sung-won

1. 略歴

1992 年 3 月	延世大学校社会科学大学社会福祉学科入学(韓国ソウル特別市)
1999 年 8 月	延世大学校社会科学大学社会福祉学科卒業
2000 年 4 月	東京大学大学院人文社会系研究科修士課程(社会学専門分野) 入学
2002 年 3 月	東京大学大学院人文社会系研究科修士課程(社会学専門分野) 修了
2002 年 4 月	東京大学大学院人文社会系研究科博士課程(社会学専門分野) 進学
2003 年 5 月	日本福祉大学 21 世紀 COE プログラム奨励研究員(～2005 年 3 月)
2004 年 4 月	日本学術振興会特別研究員(DC2)(～2005 年 3 月)
2005 年 3 月	東京大学大学院人文社会系研究科博士課程(社会学専門分野) 単位取得満期退学
2005 年 4 月	日本学術振興会特別研究員(PD)(～2006 年 3 月)
2006 年 4 月	東京大学社会科学研究所客員研究員(～2007 年 3 月)
2007 年 3 月	博士(社会学) 学位取得
2007 年 4 月	東京大学社会科学研究所助教(～2010 年 3 月)
2007 年 12 月	同志社大学社会福祉教育・研究支援センター委託研究員(現在に至る)

2008 年 10 月 北京大学社会学系客員研究員（～2009 年 1 月）
 2010 年 4 月 東京経済大学経済学部専任講師（～2012 年 3 月）
 2012 年 4 月 東京経済大学経済学部准教授（～2016 年 3 月）
 2016 年 4 月 明治学院大学社会学部准教授（～2018 年 3 月）
 2018 年 4 月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

福祉社会学, 比較福祉国家論, アジア社会論

b 研究課題

社会学を専門とし、失業・貧困問題や少子高齢化問題などの社会問題、そしてそれに対応するための雇用・社会保障政策および家族政策などの社会政策＝福祉国家政策について研究している。韓国およびアジア諸国・地域を主な対象とし、歴史比較分析を通じて今日の状況を明らかにし、国際比較分析を通じて各国の特徴とその位置づけについて分析を行っている。近年の研究課題は大きく分けて次の2つである。(1) 理論研究として、福祉国家とフォーディズムの歴史的関係性に着目して、従来の福祉国家研究を批判的に検討し、福祉国家を捉える新しい視点を構築すること、(2) 歴史・現状分析として、理論研究を通してえられた新しい視点にもとづいて、韓国およびアジア社会の歴史と現状を分析すること、である。

c 概要と自己評価

理論研究の課題 (1) は、15 年ほどから取り組んできた（金成垣、『後発福祉国家論——比較のなかの韓国と東アジア』、東京大学出版会、2008 年、金成垣編、『現代の比較福祉国家論——東アジア発の新しい理論構築に向けて』、ミネルヴァ書房、2010 年、金成垣、『福祉国家の日韓比較——「後発国」における雇用保障・社会保障』、明石書店、2016 年）。最近では、韓国だけではなく、他のアジア諸国・地域を視野に入れて分析を行い、「韓国の社会保障にみるアジアの共通課題——21 世紀の新しい道を探る」（『社会学評論』No.70 (3), 2019 年）、「格差問題と福祉国家——アジアにみるポスト福祉国家の可能性」（『韓国朝鮮文化研究』No.18, 2019 年）、「アジアは『福祉後進国』なのか——『福祉国家的でないもの』が示す未来」（埋橋孝文編、『どうする日本の福祉政策』、ミネルヴァ書房、2020 年）、「後発福祉国家論の再検討——これまでのアジア研究と今後の課題」（上村泰裕・金成垣・米澤旦編、『福祉社会学のフロンティア』、ミネルヴァ書房、2021 年）、「『福祉から就労へ』と比較福祉国家研究に向けての新たな課題」（阿部誠編、『就労支援政策にみる福祉国家の変容——7 カ国の分析による国際的動向の把握』ミネルヴァ書房、2024 年）、「韓国福祉国家はどこへむかっていくのか」（『社会政策』16 (1), 2024 年）などの論文を通して理論的な洗練化を図ってきている。従来の福祉国家研究は、主に資本主義との関連、とくに資本主義の本質的な矛盾がもたらす失業・貧困問題や資本主義の成熟がもたらす少子高齢化問題への対応として、福祉国家の歴史過程を捉える傾向が強い。しかし、その視点からすると、韓国を含むアジア諸国・地域における「福祉国家の未発達」しか説明できない。それに対して、資本主義に発展をもたらした「フォーディズム」に着目することで、福祉国家の歴史過程についての新しい視点を確保することができ、それによって、アジア諸国・地域に関して、「福祉国家の未発達」ではなく、「フォーディズムなき福祉国家」という新しいあり方の福祉国家を浮き彫りにすることができる。その新しい福祉国家は単にアジア諸国・地域に限らず、他の先進諸国に対しても、ポスト・フォーディズムという新しい時代への展望を探るうえで重要な示唆を与えるものであると考えられる。このような問題関心から、歴史・現状分析の課題 (2) にも取り組み、「足踏みする韓国の社会保障」（『週刊社会保障』No.3014, 2019 年）、「Weak social security but strong employment security in the Japanese welfare state」（Jea-jin Yang ed. *The Small Welfare State; Rethinking Welfare in the US, Japan and South Korea*. Edgar Elgar Publishing, 2020 年）、「文在寅政権下の社会保障制度改革」（『週刊社会保障』, No. 3134, 2021 年）、「20 世紀の韓国——なぜ福祉国家の発展がなかったのか」（『韓国朝鮮文化研究』, 第 21 号, 2022 年）などの研究成果を発表している。2022 年には、韓国の事例を中心に単著『韓国福祉国家の挑戦』（明石書店、2022 年）を刊行し、韓国の福祉国家が、日本や西欧へのキャッチアップではなく、韓国独自の福祉の制度化や新しい仕組みの構築を試みている状況とその福祉国家論的な意味また他のアジア諸国・地域への示唆を明らかにした。その後、「韓国における『社会保険でないもの』の広がり」（『週刊社会保障』No.3191, 2022 年）、「コロナ禍で見えてきた韓国社会の脆弱性と新たな可能性——雇用と社会保障を中心に」（『現代韓国朝鮮研究』22, 2023 年）、「韓国の深刻な少子化をいかに捉えるか」（『週刊社会保障』No.3258, 2024 年）、「韓国福祉国家とアジア（上、下）」（『アジア時報』55 (1・2, 3), 2024 年）などの関連論文を発表している。

以上の研究は、2018 年度から 2020 年度にかけての科学研究費補助金（「後発福祉国家・韓国のベーシックインカムに関する政策論的研究」（基盤研究 (C) : 課題番号 18K02123, 研究代表者））をふまえて、2021 年度から 2023 年度にかけての科学研究費補助金（「韓国におけるベーシックインカム構想と後発福祉国家のゆくえ」（基盤研究 (C) : 課題

番号 21K01992, 研究代表者), 「インフォーマル化するアジア——グローバル化時代のメガ都市のダイナミクスとジェンマ」(基盤研究 (A): 課題番号 19H00553, 研究分担者, 2019 年度～2023 年度), 「アジアにおけるデジタル化の国際比較——利活用水準、政策体系、電子認証制度に注目して」(基盤研究 (C): 課題番号 20K12367, 研究分担者, 2020 年度～2023 年度), 「経済発展のタイミングと福祉国家の多様性」(基盤研究 (C): 課題番号 21K0187, 研究分担者, 2021 年度～2023 年度) を受けて進めてきている。それをより発展させるための現地調査を主な目的とした研究課題が科学研究費補助金の交付対象が新しく採択され(「福祉サービスの質と政策評価——東アジア 3 カ国(日本・韓国・中国)を中心に」(国際共同研究教科 (C): 22KK0024, 研究分担者, 2022 年 10 月～2026 年度), 現在, 韓国およびアジア各国・地域の現地調査をより活発に進めている。

d 研究業績

(1) 書籍出版物

- [単著]『韓国福祉国家の挑戦』, 明石書店, 2022.7, 240 頁
- [共著]『福祉政策研究入門 政策評価と指標 第2巻——格差と不利／困難のなかの社会政策』, 明石書店, 2022.3, 224 頁(埋橋孝文編, 分担執筆「社会保障制度改革の政策的文脈——ベーシックインカムをめぐる韓国の経験と政策論への示唆」)
- [共著]『福祉社会学文献ガイド』, 学文社, 2023.11, 388 頁(福祉社会学会編、分担執筆「イエスタ・エスピノ・アンデルセン『福祉資本主義の三つの世界——比較福祉国家の理論と動体』」)
- [共著]『社会的企業の日韓比較——政策・ネットワーク・キャリア形成』, 明石書店, 2024.1, 295 頁(米澤旦・福井康貴編、分担執筆「社会的企業政策の日韓比較——制度化の展開とその文脈」(米澤旦との共同執筆)／分担執筆「韓国の社会的企業政治——政治化された社会的企業の光と影」(李彩雲との共同執筆))

(2) 論文

- [学術雑誌]「韓国の社会保障制度の動向」, 『社会福祉研究』 No. 144, 2022.8, 104-110 頁
- [学術雑誌]「韓国の国民健康健診——歴史、仕組みと現状, 課題」, 『健保連海外医療保障』 No. 130, 2022.9, 55-74 頁
- [学術雑誌]「韓国における『社会保健ではいもの』の広がり」, 『週刊社会保障』 No.3191, 2022.10, 42-47 頁
- [学術雑誌]「コロナ禍で見えてきた韓国社会の脆弱性と新たな可能性——雇用と社会保障を中心に」, 『現代韓国朝鮮研究』 第22号, 2023.1, 1-13 頁
- [学術雑誌]「韓国の予防接種——歴史、仕組みと現状, 課題」, 『健保連海外医療保障』 No. 132, 2023.9, 53-73 頁
- [学術雑誌]「韓国福祉国家とアジア(上)」, 『アジア時報』 55 (1・2), 2024.1, 29-46 頁
- [学術雑誌]「韓国福祉国家とアジア(下)」, 『アジア時報』 55 (3), 2024.3, 33-44 頁
- [学術雑誌]「韓国の深刻な少子化をいかに捉えるか」, 『週刊社会保障』 No. 3258, 2024.3, 42-47 頁

(3) その他各種論著

- [書評]「宮本太郎著『貧困・介護・育児の政治——ベーシックアセットの福祉国家へ』」第14巻第2号, 2022.11, 139-142 頁
- [書評]「五石敬路／ノ・デミョン／王春光編著『日中韓の貧困政策——理論・歴史・制度分析』」, 『貧困研究』 No. 29, 2022.12, 114-117 頁
- [書評]「西下彰俊著『東アジアの高齢者ケア——韓国・台湾のチャレンジ』」, 『福祉社会学』 64 (1), 2023.5, 108-110 頁
- [書評]「落合恵美子著『親密圏と公共圏の社会学——ケアの二〇世紀体制を超えて』」, 『書齋の窓』 691, 2024.1, 81-87 頁

(4) 講演・口頭発表等

- [学会発表]「社会的企業政策の日韓比較」(米澤旦との共同発表), 第95回日本社会学会大会, 追手門学院大学, 2022.11.12
- [招聘発表]「社会保障制度改革の政策的文脈——ベーシックインカムをめぐる韓国の経験と政策論への示唆／ソウル市青年ベーシックインカムの政策実験」, 第87回(2022年度)社会政策学会関西部会「共通論題」, 大阪経済大学, 2022.11.26
- [国際シンポジウム発表]「한국 복지국가 어디로 가고 있는가?: 일본과의 비교를 통해 [韓国福祉国家はどこに向かっていくのか——日本との比較を通じて]」 동아시아사회정책연구소 개소기념 국제학술세미나「복지 인식 변화와 동아시아 복지국가의 전망」 [東アジア社会政策研究所開所記念国際学術セミナー「福祉認識の変化と東アジア福祉国家の展望」], 中央大学校(韓国), 2023.3.32
- [学会発表]「韓国福祉国家はどこへ向かっていくのか」, 社会政策学会第146回(2023年春季)大会, 立教大学, 2023.6.4

[学会発表]「韓国の社会保障制度改革にみる『脱キャッチアップ的挑戦』」, アジア政経学会 2023 年度秋季大会, 京都大学, 2023.11.25

(5) 共同研究・競争的資金等の研究課題

[科学研究費助成事業]「インフォーマル化するアジア——グローバル化時代のメガ都市のダイナミクスとジレンマ」
(基盤研究 (A) : 課題番号 19H00553, 2019～2023 年度)

[科学研究費助成事業]「アジアにおけるデジタル化の国際比較——利活用水準、政策体系、電子認証制度に注目して」
(基盤研究 (C) : 課題番号 20K12367, 2020～2023 年度)

[科学研究費助成事業]「経済発展のタイミングと福祉国家の多様性」(基盤研究 (C) : 課題番号 21K0187, 2021～2023 年度)

[科学研究費助成事業]「福祉サービスの質と政策評価——東アジア 3 カ国 (日本・韓国・中国) を中心に」(国際共同研究教科 (C) : 22KK0024, 研究分担者, 2022.10～2026 年度)

e その他

(1) 学会・委員活動

[所属学会] 日本社会学会

[所属学会] 社会政策学会 : 「アジア部会」事務局 (2010.5～現在, 「国際交流委員会」委員長 (2022.5～現在))

[所属学会] 日本社会福祉学会

[所属学会] 福祉社会学会 : 庶務理事 (2020.5～2022.5)

[所属学会] 韓国社会政策学会 : 「国際協力委員会」委員 (2012.6～現在)

准教授 伊藤 智ゆき ITO, Chiyuki

1. 略歴

1997 年 3 月	東京大学文学部言語文化学科 (言語学専修課程) 卒業
1997 年 4 月	東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻修士課程 (言語学専門分野) 進学
1999 年 3 月	同上 修了
1999 年 4 月	東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻博士課程 (言語学専門分野) 進学
2001 年 4 月	日本学術振興会特別研究員 (DC2) (～2002 年 3 月)
2002 年 3 月	東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻博士課程 (言語学専門分野) 単位取得満期退学
2002 年 4 月	日本学術振興会特別研究員 (PD) (～2002 年 11 月)
2002 年 12 月	博士 (文学) 学位取得 (東京大学)
2002 年 12 月	東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 助手 (2007 年 4 月から助教)
2005 年 9 月	Visiting Scholar, Department of Linguistics and Philosophy, Massachusetts Institute of Technology (マサチューセッツ工科大学言語・哲学学科客員研究員) (～2006 年 1 月・2007 年 11 月～2008 年 8 月・2016 年 6 月～2018 年 6 月)
2010 年 4 月	東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 准教授 (～2023 年 3 月)
2023 年 4 月	東京大学大学院人文社会系研究科 准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

言語学 (音韻論・音声学・歴史言語学)

b 研究課題

韓国朝鮮語の音韻論・音声学・歴史言語学を専門とし、特に韓国朝鮮語の歴史的発展と類推変化、音素配列、借用語適応、音響音声学的分析に関心を持っている。現在従事している研究課題は、(1) 標準韓国語における長母音の分布と消失過程に関する研究、(2) 1970 年代韓国朝鮮語咸鏡道方言についての音響音声学的研究である。

c 概要と自己評価

まず (1) に関しては、科研費基盤 (C)「標準韓国語長母音の消失に関する音韻論的研究」(2020～24 年度)により、標準韓国語の長母音分布に見られる特徴について明らかにすることを目的に、特に中期朝鮮語データの拡充している朝鮮漢字音のアクセントが現代朝鮮語諸方言においてどのような対応を示すか、5 方言(ソウル方言(韓国語標準語)・全羅道方言・慶尚南道方言・慶尚北道方言・延辺朝鮮語)を対象に考察を行った。諸方言における朝鮮漢字音アクセントの実態を統一的に観察するため、ソウル方言における母音の長短に対応する「中期朝鮮語の R(上昇調) - L(低調)・H(高調)」という対立に注目し、各漢字音が長母音(=中期朝鮮語 R)相当であるか否かについて分類した。この分類に基づき、各方言における朝鮮漢字音アクセント(R 対 L・H)の比率と保存率、方言間の一致率について検討した上で、対応パターンの詳細について検討した。それにより、①延辺朝鮮語を除く 4 方言において、短母音で現れる漢字音の方が長母音で現れるものより多いこと、②原則として中期朝鮮語 H・L>短母音、中期朝鮮語 R>長母音の対応が確認されること、③方言間の一致率においては、中期朝鮮語において語頭に R をもつものに対応するアクセント系列が、現代方言においても明確に独立した系列として維持されているかどうかが大きく関与していること、④現代語 5 方言すべてが中期朝鮮語の「単漢字」アクセントと一致するパターンを示す場合が多いものの、中期朝鮮語の単漢字とは異なるパターンが、諸方言に一貫して現れるケースも相当数見られること、⑤ソウル方言において例外的に長母音が見られる場合、他のいずれかの方言にも同様の例外パターンが観察されること、について明らかにした。また、現代語方言における朝鮮漢字音の母音長に関し、モデル化を行った。以上の分析結果は伊藤智ゆき(2023a)として公開済みである。

(2) については科研費基盤 (C)「1970 年代韓国朝鮮語咸鏡道方言の音響音声学的研究」(2023～25 年度)により、Ramsey,S. Robert 著“Accent and Morphology in Korean Dialects: A Descriptive and Historical Study”(1978,Seoul: Tower Press)において使用された、韓国朝鮮語咸鏡道方言(朝鮮民主主義人民共和国)の録音テープ 20 本(両面各 30 分、2017 年に電子化済)のうち、比較的録音状態のよいものを対象にテープ起こしを進めた。咸鏡道方言は弁別的ピッチアクセントをもつ言語であり、音調の違いが意味の違いに関与すること、また録音内容に方言独自の表現が多く含まれることから、テープ起こし作業はまず、咸鏡道方言と言語学的に近い特徴を持つ延辺朝鮮語(中国吉林省)の話者に依頼した。その上で、テープ起こしの全内容について、韓国朝鮮語の各種辞典・方言資料・アクセント資料(中期朝鮮語、延辺朝鮮語)を用いて確認を行い、語幹・アクセント等から出現箇所を検索可能な形にリスト化した。一方、録音データの音響音声学的分析のため、音韻句の最初に現れる音節を中心に、Praat (Boersma & Weenink.1992-2023 年)を用いてセグメンテーションを行い、特に破裂音の VOT と単母音の性質について基礎的分析を行った。

d 研究業績

(1) 論文

[学術雑誌] Ito,Chiyuki and Feldman,Naomi H. (2022). Iterated Learning Models of Language Change: A Case Study of Sino-Korean Accent. Cognitive Science 46 (4). 査読有. 10.1111/cogs.13115

[大学,研究機関紀要] 伊藤智ゆき (2023a)「朝鮮漢字音の母音長とアクセントにおける方言差について」、『韓国朝鮮文化研究』22、13-39

(2) その他各種論著

[その他記事] 伊藤智ゆき (2023b)「《特集》 韓国朝鮮語歴史研究・音韻論研究(福井玲先生退職記念特集)」、『韓国朝鮮文化研究』22、1-2

(3) 講演・口頭発表等

[口頭発表(一般)] An acoustic analysis of the Hamkyeng dialect from 1970s. The 8th International Conference on Phonology and Morphology [ICPM8]. The Phonology-Morphology Circle of Korea (online), 2022.6.11

(4) 共同研究・競争的資金等の研究課題

with Feldman,Naomi H. (University of Maryland). Iterated Learning Models of Language Change: A Case Study of Sino-Korean Accent

e その他

(1) 学会・委員活動

[所属学協会] 日本言語学会

[所属学協会] 日本音韻論学会

[所属学協会] 日本音声学会

[所属学協会] 朝鮮学会

[委員歴] 日本音声学会、評議員 (2022.4～2025.3)

[委員歴] Journal of East Asian Linguistics、編集委員 (2020.1～現在)

30 次世代人文学開発センター

《文化交流学部》

教授 小島 毅 KOJIMA, Tsuyoshi

1. 略歴

1985年3月	東京大学文学部中国哲学専修課程卒業（文学士）
1987年3月	同 大学院人文科学研究科修士課程修了（中国哲学）
1987年4月	東京大学東洋文化研究所助手（東アジア第一部門）
1992年4月	徳島大学総合科学部講師（総合科学科）
1994年4月	同 助教授（人間社会学科）
1996年4月	東京大学大学院人文社会系研究科助教授（中国思想文化学）
2007年4月	同 准教授（中国思想文化学）
2013年4月	同 教授（中国思想文化学）
2015年6月	同 教授（次世代人文学開発センター）に配置換

2. 主な研究活動

a 専門分野

中国思想文化史、王権理論の展開および儒教の教化論、東アジア海域交流史

b 研究課題

- (1) 中国における朱子学・陽明学の思想的形成と社会的展開。
- (2) 中国皇帝制秩序を支える王権儀礼とその理論。
- (3) 日本における儒教思想の流入とその社会的効果。
- (4) 東アジアの伝統思想における尊厳概念。

c 概要と自己評価

概要：中国思想文化史研究として、宋代の儒教において生じた新たな思想潮流と、それが朱子学に集約していく様相を中心に研究してきた。また、その延長線上にいわゆる中世以降の日本における朱子学の受容と独自の展開についても扱い、特に王権論の観点から天皇制に関わる思想的・儀礼的事象を探究している。また、尊厳概念の比較思想的研究を課題とする科研の共同研究プロジェクトに加入して東アジアの伝統思想について考察を進めている。

自己評価：2022～2023 年度は上記の 4 つの研究課題のうち、(3)と(4)についての研究を進めた。特に(4)については2022 年度は JSPS 科研基盤 (S)「尊厳概念のグローバルスタンダードの構築に向けた理論的・概念史的・比較文化論的研究」の研究分担者として、2023 年度は新規に開始した JSPS 科研学術変革領域 (A)「尊厳学の確立」の総括班研究分担者および A03 班研究代表者として共同研究の運営と遂行にあたった。それにより自身の個人研究はいささか疎かになったことは否めないが、異分野の共同研究者たちと交流して知見を深める機会を得て、これまで見えていなかった点に気づいたり、新たに問題の所在を発見したりすることができた。

d 研究業績

(1) 書籍出版物

[単著]『近代日本の陽明学』、小島毅、講談社（講談社学術文庫、原書は2006年）、単行本（学術書）、2024.3、総300頁

(2) 論文

[論文集内論文]「『文化中国』の再検討」、小島毅、渡邊義浩（編）『中国文化の統一性と多様性』、pp.55-72、2022.5
[学術論文]「儒家传统文化对近代日本“自由”概念的影响——以中江兆民与江原素六的阐述为例」、小島毅、『日語 学習と研究』220号、pp.1-11、2022.7
[大学紀要]「大逆事件と陽明学」、小島毅、『文化交流研究』37号、pp.39-50、2024.3

(3) その他各種論著

[解説]「『中国の夢』はどこに向かうのか?：『中華民族』の歴史認識の視点から」、小島毅、『世界平和研究 = The journal on peace studies and peace policies』48巻4号、pp.32-40、2022
[文献紹介]「解説」、小島毅、梅原郁『文天祥』、ちくま学芸文庫、2022.4

- [解説]「難者問邪 (15) 北京で処刑された民族英雄」、小島毅、『UP』51 巻 5 号、pp.32-38、2022.5
- [解説]「難者問邪 (16) 熊野に御幸した上皇たち」、小島毅、『UP』51 巻 8 号、pp.1-7、2022.8
- [解説]「難者問邪 (17) 医王山に渡航しようとした右大臣」、小島毅、『UP』51 巻 11 号、pp.34-39、2022.11
- [総説]「シンポジウム 「いま儒教について語ること：孔子没後二千五百周年を記念して」 報告記」、小島毅、『日本儒教学会報』7 号、pp.45-50、2023.1
- [解説]「難者問邪 (18) 長江河口で散骨された国家主席」、小島毅、『UP』52 巻 2 号、pp.51-56、2023.2
- [解説]「難者問邪 (19) 東京で暦を改めさせた参議」、小島毅、『UP』52 巻 5 号、pp.32-38、2023.5
- [解説]「難者問邪 (20) 甲府で浮気を否認した戦国大名」、小島毅、『UP』52 巻 8 号、pp.49-54、2023.8
- [解説]「難者問邪 (21) 洛陽で清流派を排除した宦官たち」、小島毅、『UP』52 巻 11 号、pp.26-32、2023.11
- [解説]「難者問邪 (22) 長安で国を傾けた貴妃」、小島毅、『UP』53 巻 2 号、pp.40-44、2024.2

(4) 共同研究・競争的資金等の研究課題

- [科学研究費助成事業]「尊厳概念のグローバルスタンダードの構築に向けた理論的・概念的・比較文化論的研究」、加藤泰史、基盤研究 (S) : 18H05218、一橋大学、2018.4.1～2023.3.31
- [科学研究費助成事業]「尊厳学の確立：尊厳概念に基づく社会統合の学際的パラダイムの構築に向けて」、加藤泰史、学術変革領域研究 (A) : 23H04848、梶山女学園大学、2023.4.1～
- [科学研究費助成事業]「アジア・イスラムなどの非欧米圏の尊厳概念史の構築」、小島毅、学術変革領域研究 (A) : 23H04851、東京大学、2023.4.1～

e その他

(1) 非常勤講師

- 二松学舎大学、2022.4.1～2023.3.31
- 大阪大学、2023.10.1～2024.3.31

(2) 学会・委員活動

- [所属学協会] 東方学会、日本中国学会、東アジア文化交渉学会、日本儒教学会、中国社会文化学会、三国志学会
- [委員歴] 東方学会、理事、2021.6～
- [委員歴] 日本中国学会、理事、2021.4～2023.3
- [委員歴] 日本儒教学会、会長、2020.4～2024.3
- [委員歴] 中国社会文化学会、理事、2017.6～

教授 **芳賀 京子** SENGOKU-HAGA, Kyoko

1. 略歴

- | | |
|-------------|---|
| 1991 年 3 月 | 東京大学文学部第二類 (史学) 美術史学専修課程卒業 |
| 1991 年 4 月 | 東京大学大学院人文科学研究科美術史学専攻修士課程入学 |
| 1994 年 3 月 | 同 修了 |
| 1994 年 4 月 | 東京大学大学院人文社会系研究科美術史学専攻博士課程進学 |
| 1994 年 10 月 | ローマ第 2 大学トール・ヴェルガータ文学部単科生 (イタリア政府給費留学生、～1995 年 3 月) |
| 1995 年 4 月 | 在アテネ イタリア国立考古学研究所大学院専門課程入学 (イタリア政府給費生、～1998 年 3 月) |
| 1998 年 12 月 | 同 修了、ディプロマ取得 |
| 2000 年 3 月 | 東京大学大学院人文社会系研究科美術史学専攻博士課程単位取得満期退学 |
| 2001 年 4 月 | 日本学術振興会特別研究員 (PD) (～2004 年 3 月) |
| 2002 年 5 月 | 博士 (文学) 取得 (東京大学) |
| 2005 年 9 月 | 国立西洋美術館学芸課リサーチフェロー |
| 2006 年 8 月 | 東北大学大学院文学研究科助教授 |
| 2007 年 4 月 | 同 准教授 |
| 2017 年 4 月 | 同 教授 |
| 2018 年 4 月 | 東京大学大学院人文社会系研究科准教授 |
| 2021 年 4 月 | 東京大学大学院人文社会系研究科教授 |

2. 主な研究活動

a 専門分野

古代ギリシア・ローマ美術史

b 研究課題

- (1) 古代ローマの公共浴場と美術
- (2) 帝政前期のローマ美術の中央から周縁への伝播と地域性
- (3) 3D 形状比較を用いた古代彫刻工房の実態の解明
- (4) 美術展覧会の VR アーカイブと VR 美術鑑賞
- (5) 古代ギリシア・ローマ美術における神像や肖像

c 概要と自己評価

概要：2022～23 年度は、22 年 12 月まで「ポンペイ展」が、そして 23 年 9 月からは「テルマエ展」が開催されたため、それらに関するイベントや、前者に関するテレビ番組、後者の企画、作品選定、準備、図録作成など、一般にむけた古代ローマ文化や美術の啓蒙活動に多くかかわった。また 2023 年度は総長補佐として、大学業務にも多くの時間を割いた。(1)の調査研究は「テルマエ展」に関連するものだが、そこから古代ローマの公共浴場の彫像について考察を深めることができた。(2)に関しては、ローマ帝政前期における皇帝肖像の伝播や地方工房の形成について、すでに英語で執筆した論文に加筆・修正をほどこした日本語版を出版した。また 2023 年 8 月にはイタリア、ソンマ・ヴェスヴィアーナ遺跡で出土彫刻の調査を、2022 年 9 月と 2023 年 9 月にはそれぞれイタリアとギリシアの各地の博物館でヘレニズム後期からローマ帝政初期の彫刻の調査を行い、その地域的特色に関する考察を進めた。(3)に関しては、ブロンズ像の古代における複製と近代における修復について、さらなる解析を東京大学生産技術研究所の大石研究室とともに進めている。(4)に関しては、2022 年 3 月に東京博物館で記録したポンペイ展の VR アーカイブ作業を、情報理工学系研究科谷川智洋特任教授と本センター人文情報学部門の大向一輝准教授の協力のもとに進めている。(5)に関しては、古代のイタリア半島の温泉における信仰と奉納像について、東大人文・熊野フォーラム in 島原で口頭発表を行なった。その他、2022 年には 2 つの学会の全国大会のシンポジウム司会を務め、また 2024 年の西洋古典学会全国大会シンポジウムの司会として企画を進めるなど、諸学会の大会にも多く関わった。

自己評価：2 つの展覧会とそれに伴う社会一般向けの啓蒙活動、そして 2023 年には総長補佐の業務に時間を取られたが、ようやく海外調査を再開することができ、研究が進み出した感がある。来年度は自身の科研費研究の総括と、書籍の執筆に注力したい。

d 研究業績

(1) 書籍出版物

【共著】『テルマエ：お風呂でつながる古代ローマと日本』、青柳正規 芳賀京子、青幻舎、2023.9、191p

(2) 論文

【論文集（書籍）内論文】「ローマ帝国における皇帝イメージの検閲・伝達・記憶」、芳賀京子、周藤芳幸編『古代地中海世界と文化的記憶』、pp.366-392、2022.5

【論文集（書籍）内論文】「神々と人の姿 古代ギリシア・ローマ美術」、公益財団法人日独文化研究所編『二十一世紀「文明論」の新機略——縦横に——』 pp. 143-167、2024.3

(3) 講演・口頭発表等

【公開講演】「ポンペイの美術と住人たち」、宮城県美術館 特別展「ポンペイ」講演会、2022.7.16

【公開講演】「古代ローマとギリシア美術」、アーティゾン美術館土曜講座 地中海学会連続講演会「蘇生する古代」、2022.10.1

【口頭発表】「2021 年ソンマ・ヴェスヴィアーナ遺跡出土の大理石製少年像（トルソ）」、研究発表会「火山噴火罹災地の文化・自然環境復元 —2019～2022—」、2023.2.11

【公開講演】「テルマエと美術」、山梨県立美術館「テルマエ展」講演会、2023.9.23

【公開講演】「テルマエと美術」、大分県立美術館「テルマエ展」講演会、2023.12.2

【シンポジウムパネル】「古代ローマの温泉と信仰とテルマエ美術」、東大人文・熊野フォーラム in 島原、2023.12.9

【口頭発表】「古代彫刻の「人生」の記憶—古代における修復と改変—」、シンポジウム「古代」の記憶の回復をめぐって、2024.3.24

(4) 共同研究・競争的資金等の研究課題

【科学研究費助成事業】「古代地中海世界における知の動態と文化的記憶」、研究代表者 周藤芳幸、基盤研究（A）：18H03587、名古屋大学、2018.4～2023.3

[科学研究費助成事業]「ソンマ・ヴェスヴィアーナ遺跡発掘の成果と文化史的展望—古代の記憶の回復をめぐる」、
研究代表者 村松真理子、基盤研究 (B) : 20H01299、東京大学、2020.4～2023.3
[科学研究費助成事業]「ヘレニズム後期からローマ帝政初期への転換期における彫刻工房の地域流派の研究」、研究
代表者 芳賀京子、基盤研究 (C) : 20K00168、東京大学、2020.4～2025.3
[科学研究費助成事業]「形象の記述・記録についての比較美術史学的研究」、研究代表者 秋山聰、基盤研究 (B) :
21H00487、東京大学、2021.4～2024.3

e 社会活動

(1) 社会貢献活動

[取材協力] インターネット「【予習にも】ポンペイ展の魅力と考古学の基本を解説!!【初学にも】」、ミライのアイデア、白夜書房、2022.5.26
[取材協力] 新聞「特別展 ポンペイ」、河北新報、2022.7.6
[取材協力] 新聞「もつと九州 「ポンペイ」展九州国博」、西日本新聞、2022.11.10
[助言・指導] テレビ番組「ポンペイの起源～もうひとつの埋もれた歴史～」、NHK 教育 地球ドラマチック、2022.11.19
[出演] テレビ番組「皇帝ネロの黄金宮殿」、NHK 総合 歴史探偵、2023.2.15
[取材協力] テレビ番組「皇帝ネロの黄金宮殿」、NHK BS プレミアム 古代ローマスペシャル、2023.3.4
[寄稿] 新聞「時空超え、沸きたつ、お風呂愛「テルマエ展 お風呂でつながる古代ローマと日本」、朝日新聞、2023.9.8

(2) 学術貢献活動

[監修] 展覧会「特別展 ポンペイ」、東京国立博物館、2022.1～2022.4.3
[司会] 美術史学会全国大会シンポジウム「シンポジウム「移住者たちの美術」、2022.5.21
[司会] 地中海学会全国大会シンポジウム「シンポジウム「模倣し複製する地中海」、2022.6.12
[監修] 展覧会「テルマエ展 お風呂でつながる古代ローマと日本」、山梨県立美術館・大分県立美術館・パナソニック汐留美術館・神戸市立博物館、2023.9.9～2024.8.25

f その他

(1) 非常勤講師

東北大学、2023.4.1～2023.9.30

(2) 学会・委員活動

[委員歴] 美学会、幹事、2007～
[委員歴] 西洋古典学会、委員、2019.5～、常任委員、2022.5～
[委員歴] 美術史学会、常任委員、2020.5～2024.5

《 国際人文学部門 》

教 授 唐 沢 かつり KARASAWA, Kaori

27 社会心理学 参照

教 授 鈴 木 淳 SUZUKI, Jun

11 日本史学 参照

准教授 鎌 田 美千子 KAMADA, Michiko

1. 略歴

- 1991 年 3 月 宮城教育大学教育学部小学校教員養成課程卒業
- 1994 年 4 月 東北大学大学院国際文化研究科国際交流論専攻博士課程前期入学
- 1996 年 3 月 同 修了、修士（国際文化）
- 2002 年 9 月 宇都宮大学留学生センター講師（～2007 年 10 月）
- 2006 年 10 月 東京工業大学大学院社会理工学研究科人間行動システム専攻博士後期課程入学
- 2007 年 11 月 宇都宮大学留学生センター准教授（～2012 年 3 月）
- 2008 年 4 月 同 宇都宮大学大学院国際学研究科准教授（～2019 年 3 月）
- 2010 年 3 月 東京工業大学大学院社会理工学研究科人間行動システム専攻博士後期課程修了、博士（学術）
- 2012 年 4 月 宇都宮大学留学生・国際交流センター准教授（組織名変更）（～2017 年 3 月）
- 2017 年 4 月 同 学術院准教授（国際学部・国際学研究科責任教員、改組）（～2020 年 8 月）
- 2019 年 4 月 同 大学院地域創成科学研究科准教授（改組）（～2020 年 8 月）
- 2020 年 9 月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

日本語教育学

b 研究課題

- (1) 日本語教員の養成・研修のための教授法開発とその基礎研究
- (2) 日本語ライティング教育のための教授法開発とその基礎研究
- (3) 外国人児童生徒等教育を担う教員の養成・研修のための教授法開発とその基礎研究

c 概要と自己評価

研究課題 (1) 及び (2) に関しては、主に以下の二つに取り組んだ。第一に、2020 年度より継続している科学研究費助成事業基盤研究 (B)「日本語教師の養成・研修におけるライティング教育実践能力の育成——批判的思考を中心に——」（研究代表者 鎌田美千子）の 4 年間の研究の集大成に向けて教師教育に関する調査研究と実践研究を遂行した。2022 年度は、ライティング指導に感じる難しさに関して、前年度までの①日本語教員養成課程の大学生を対象にした調査研究、②大学の日本語教員を対象にした調査研究に続き、③日本語教員養成課程の担当教員を対象にした調査研究を行った。2023 度は、上記①～③で明らかになった各々の難しさを踏まえて養成プログラムと研修プログラムの授業開発に取り組み、実践研究を通して教育内容と教育方法の有効性を検証した。各授業における受講者の理解度及び満足度は全般的に高く、日本語教員養成課程の大学生、大学の日本語教員がそれぞれ感じる指導の難しさを軽減することができた。第二に、日本の大学・大学院における日本語教員養成の変遷と諸相を綴った専門書を 2022 年 12 月に刊行した。この専門書の刊行は、これまで日本語教員養成の教育研究全体を俯瞰できる専門書がなかった中で、大学日本語教員養成課程研究協議会代表理事（当時）として企画し、全体統括、編集、執筆を行ったものである。日本語教育学を専門とするココ出版のシリーズ「日本語教育学研究」の第 10 巻として出版され、今後の日本語教員養成の在り方と方向性を議論する上での視座を提示することができた。

研究課題 (3) に関しては、研究成果の発表までには至らなかった。今後、着実に遂行するよう鋭意取り組んでいきたい。

d 研究業績

(1) 書籍出版物

[共編者]『社会を築くことばの教育——日本語教員養成のこれまでの30年、これからの30年——』、大学日本語教員養成課程研究協議会（編）、「全体統括、編集、執筆（はじめに、第II部第2章）」、ココ出版、単行本（学術書）、2022.12.20、297p

[編著者]『令和2年度—令和5年度科学研究費補助金基盤研究（B）研究成果報告書 日本語教師養成・研修におけるライティング教育実践能力の育成——批判的思考を中心に——』、鎌田美千子（編）、「全体統括、編集、執筆（I. 基本情報、II. 研究の背景と目的、III. 研究方法、IV. 研究要旨、V. 各年度の実施内容及び研究成果）」、調査報告書、2024.2.19、140p

(2) 論文

[学術雑誌]「日本語教員養成課程の大学生が感じるライティング指導の難しさ——ライティング指導5年未満の日本語教師との比較を通して——」、鎌田美千子・坪根由香里・副田恵理子・脇田里子、『アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル』14号、pp.9-16、2022.8

[学術雑誌]「ドイツのアビトゥア試験ドイツ語科目の問題分析——日本語のアカデミック・ライティングへの示唆——」、脇田里子・鎌田美千子、『アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル』14号、pp.26-34、2022.8

[論文集（書籍）内論文]「日本語教員養成課程の教育と学部学生の現状」、鎌田美千子、大学日本語教員養成課程研究協議会（編）『社会を築くことばの教育——日本語教員養成のこれまでの30年、これからの30年——』、ココ出版、pp.47-58、2022.12.20

[学術雑誌]「日本語教員がライティング指導に感じる難しさ——指導経験年数に着目して——」、鎌田美千子・坪根由香里・副田恵理子・脇田里子・村岡貴子、『専門日本語教育研究』24号、pp.75-82、2022.12.31

[研究会、シンポジウム資料等]「日本語教員養成課程で学ぶ「書きことばの指導」に関する授業開発」、鎌田美千子、『日本語教育方法研究会誌』30巻1号、pp.34-35、2023.9.9

[学術雑誌]「日本語教員養成課程で扱われる書くことの指導の現状と課題——担当教員が感じる難しさに焦点を当てて——」、鎌田美千子・副田恵理子、『大学日本語教員養成課程研究協議会論集』21号、pp.17-36、2024.3.31

(3) その他各種論著

[研究発表要旨]「第二言語としての日本語の書き言葉に関する指導の現状と課題——日本語教員対象のインタビュー調査をもとに——」、鎌田美千子、『第29回大学教育研究フォーラム発表論文集』p.104、2023.3.

[研究発表要旨]「日本語教員養成課程で学ぶ「ライティング指導」の可能性と課題」、鎌田美千子・副田恵理子、『第30回大学教育研究フォーラム発表論文集』、p.50、2024.3

[研究発表要旨]「日本語教員養成課程でライティング指導を扱うことの難しさと課題——教員を対象としたインタビューをもとに——」、副田恵理子・鎌田美千子、『小出記念日本語教育学会論文集』32号、p.210、2024.3

(4) 講演・口頭発表等

[公開講演、セミナー、チュートリアル、講習、講義等]「日本語教員養成における「書くこと」の指導を考える」、鎌田美千子、第20回日本語教師教育者ネットワーク、2023.2.9

[口頭発表（一般）]「第二言語としての日本語の書き言葉に関する指導の現状と課題——日本語教員対象のインタビュー調査をもとに——」、鎌田美千子、第29回大学教育研究フォーラム、2023.3.16、2023.3.15～2023.3.16

[口頭発表（一般）]「日本語教員養成課程でライティング指導を扱うことの難しさと課題——教員を対象としたインタビューをもとに——」、副田恵理子・鎌田美千子、第32回小出記念日本語教育学会、2023.6.24

[ポスター発表]「日本語教員養成課程で学ぶ「書きことばの指導」に関する授業開発」、鎌田美千子、第61回日本語教育方法研究会、2023.9.9

[口頭発表（一般）]「日本語教員養成課程で学ぶ「ライティング指導」の可能性と課題」、鎌田美千子・副田恵理子、第30回大学教育研究フォーラム、2024.3.13、2024.3.13～2024.3.14

(5) 共同研究・競争的資金等の研究課題

[科学研究費助成事業]「日本語読解・ライティングの方法に影響する母語・母文化の教育的背景要因に関する研究」、村岡貴子 阿部新 中島祥子 池田隆介 山路奈保子 太田達也 太田亨 脇田里子 石黒圭 鎌田美千子 大島弥生 堀一成、基盤研究（B）：19H01269、日本学術振興会、大阪大学、2019.4～2023.

[科学研究費助成事業]「日本語教師養成・研修におけるライティング教育実践能力の育成——批判的思考を中心に——」、鎌田美千子 坪根由香里 副田恵理子 脇田里子 村岡貴子 松岡洋子 菅谷奈津恵、基盤研究（B）：20H01270、日本学術振興会、東京大学、2020.4～2024.3

e 社会活動

(1) 社会貢献活動

[運営参加・支援] 日本語教師養成・研修推進拠点整備事業関東・甲信越ブロック（筑波大学）連絡協議会、「文化庁委託業務 関東・甲信越ブロック日本語教師養成・研修推進拠点整備事業」連絡協議会委員、2024.1～

(2) 学術貢献活動

[審査・評価・査読] 公益社団法人日本語教育学会 審査・運営協力員、2016.7～

[査読] 専門日本語教育学会 編集幹事、2020.4～2023.3

[企画立案・運営等,その他] 大学日本語教員養成課程研究協議会 代表理事、2020.11～2023.6

[企画立案・運営等,その他] 大学日本語教育研究協議会 幹事選考委員、2023.4～2023.7

[企画立案・運営等,その他] 大学日本語教員養成課程研究協議会 監事、2023.6～

f その他

(1) 非常勤講師

宇都宮大学、2020.9.1～2022.9.30

宇都宮大学大学院、2020.9.1～2024.3.24

(2) 学会・委員活動

[所属学協会] 公益社団法人日本語教育学会、1997.4～

[所属学協会] 異文化間教育学会、2004.5～

[所属学協会] 専門日本語教育学会、2005.4～

[所属学協会] 大学日本語教員養成課程研究協議会、2010.5～

[所属学協会] 社会言語科学会、2013.5～

[所属学協会] 大学日本語教育研究協議会（旧 国立大学大学日本語教育研究協議会）、2016.5～

[所属学協会] 小出記念日本語教育学会、2021.4～

[所属学協会] 日本語教育方法研究会、2001.4～

[委員歴] 公益社団法人日本語教育学会、審査・運営協力員、2016.7～

[委員歴] 専門日本語教育学会、編集幹事、2020.4～2023.3

[委員歴] 大学日本語教員養成課程研究協議会、代表理事、2020.11～2023.6、監事、2023.6～

[委員歴] 大学日本語教育研究協議会、幹事選考委員、2023.4～2023.7

[委員歴] 日本語教師養成・研修推進拠点整備事業関東・甲信越ブロック（筑波大学）連絡協議会、日本語教師養成・研修推進拠点整備事業関東・甲信越ブロック（筑波大学）連絡協議会委員、2024.1～

《 人文情報学部門 》

教 授 **下田 正弘** SHIMODA, Masahiro

1 4 インド哲学仏教学 参照

教 授 **鉄野 昌弘** TETSUNO, Masahiro

1 0 b 日本語日本文学（国文学） 参照

教 授 **中村 雄祐** NAKAMURA, Yusuke

2 8 文化資源学 《 文化資源学専門分野 》 参照

教 授 **小林 正人** KOBAYASHI, Masato

0 1 言語学 参照

教 授 **高橋 典幸** TAKAHASHI, Noriyuki

1 1 日本史学 参照

教 授 **高岸 輝** TAKAGISHI, Akira

0 3 美術史学 参照

准教授 **大向 一輝** OHMUKAI, Ikki

1. 略歴

1996 年 4 月	同志社大学工学部知識工学科入学
2000 年 3 月	同 卒業
2000 年 4 月	同志社大学大学院工学研究科知識工学専攻博士前期課程入学
2002 年 3 月	同 修了
2002 年 4 月	総合研究大学院大学複合科学研究科情報学専攻博士後期課程入学
2005 年 3 月	同 修了
2005 年 3 月	博士（情報学）（総合研究大学院大学）
2005 年 4 月	国立情報学研究所 助手（～2007 年 3 月）
2006 年 4 月	総合研究大学院大学 助手（併任）（～2007 年 3 月）
2007 年 4 月	国立情報学研究所 助教（～2009 年 10 月）
2007 年 4 月	総合研究大学院大学 助教（併任）（～2010 年 3 月）
2009 年 11 月	国立情報学研究所 准教授（～2019 年 8 月）
2010 年 4 月	総合研究大学院大学 准教授（併任）（～2019 年 8 月）
2019 年 9 月	東京大学大学院人文社会系研究科 准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

人文情報学、ウェブ情報学、学術情報流通

b 研究課題

- (1) 人文学における知識表現ならびにデータ構造化の検討
- (2) 人文学資料を対象とした情報流通システムの設計
- (3) 日本のインターネットにおける技術的・社会的展開を把握するための資料集成

c 概要と自己評価

2022～2023 年度は情報技術と人文学の関わりを主題として、主に人文情報学（デジタル人文学）やデジタルアーカイブに関する研究教育と社会貢献活動を行った。(1)では、歴史資料や文化資料に内在する概念や人物の時系列的変遷を明示し、相互に関係づけるためのデータ構造化手法を検討し、国立美術館が運営するメディア芸術データベースに適用した。また、提案手法に基づいてデータを簡易に入力、表示することができるアプリケーションの開発を行った。(2)については、中小規模のデジタルアーカイブの構築・運用を支援するために、高機能なサーバを要しない情報流通システムを開発し、機微な資料を扱う研究プロジェクトや、小学校における教員・生徒間の情報共有に適用した。また、提案システムに基づき、文学部が提供している大江健三郎文自筆原稿デジタルアーカイブ・書誌情報データベースの構築を行った。(3)については、日本のインターネットの展開を把握するための基礎資料の整備を行った。この他にも、デジタル人文学分野の普及を目的とした講演やコミュニティ形成を行っている。

d 主要業績

(1) 書籍出版物

[分担執筆]『共振するデジタル人文学とデジタルアーカイブ』、「大学がつなぐ DA と DH、大学をつなぐ DA と DH」、勉誠社、単行本（学術書）、2023.7、248p

(2) 論文

[研究会,シンポジウム資料等]「Music Encoding Initiative を用いた雅楽譜翻訳の実践：分業可能な邦楽譜のデジタル翻訳を目指して」、関慎太郎,大向一輝、『情報処理学会研究報告人文学とコンピュータ』、2023-CH-132 巻 9 号、pp.1-6、2023.5

[国際会議プロシーディングス]「Collecting Pieces of Historical Knowledge from Documents: Introduction of HIMIKO (Historical Micro Knowledge and Ontology)」, Jun Ogawa,Ikki Ohmukai,Satoru Nakamura.Asanobu Kitamoto、Digital Humanities 2023: Book of Abstracts、pp.96-98、2023.7

[国際会議プロシーディングス]「Developing a New Research Data Infrastructure for Japanese Historical Materials」、Ayako Shibutani,Satoru Nakamura.Kanako Hirasawa.Honami Inukai.Toshiyuki Yamada.Airu Adachi.Ikki Ohmukai.Taizo Yamada、Digital Humanities 2023: Book of Abstracts、pp.504-505、2023.7

[学術雑誌]「複数の解説情報を並存させた中国出土資料のテキストデータ化とその展望」、片倉峻平,大向一輝,永崎研宣,大西克也、『中国出土資料研究』27 号、pp.41-64、2023.7

[国際会議プロシーディングス]「Data Modeling and Visualization toward the Construction of 3D Platform for the Humanities」、Jun Ogawa,Ikki Ohmukai,Kiyonori Nagasaki.Asanobu Kitamoto、Proceedings of the 12th Conference of Japanese Association for Digital Humanities、2023 巻、pp.39-42、2023.9

[研究会,シンポジウム資料等]「静的デジタルアーカイブジェネレータ DAKit を用いたメタデータ流通のワークフローに関する検討」、阿達藍留,大向一輝、『デジタルアーカイブ学会誌』7 巻 s2 号、pp.s79-s82、2023.10

[学術雑誌]「モチーフ語の共起ネットワークを用いた展覧会キュレーションの比較分析」、原翔子,永崎研宣,高木聡一郎,大向一輝、『デジタルアーカイブ学会誌』7 巻 4 号、pp.e45-e51、2023.11

[研究会,シンポジウム資料等]「OCR の高精度化を踏まえたデジタル学術編集版の新展開」、永崎研宣,大向一輝,下田正弘、『情報処理学会人文学とコンピュータシンポジウム論文集』2023 巻、pp.177-182、2023.12

[研究会,シンポジウム資料等]「S×UKILAM 教材アーカイブの LOD 化：RDF と SPARQL によるデジタルアーカイブを活用した教材と多様な教育情報の接続・構造化」、大井将生,中村覚,大向一輝,渡邊英徳、『情報処理学会人文学とコンピュータシンポジウム論文集』2023 巻、pp.73-80、2023.12

[研究会,シンポジウム資料等]「歴史マイクロナレッジの提唱と HIMIKO (Historical Micro Knowledge and Ontology) システムの実装」、小川潤,北本朝展,大向一輝、『情報処理学会人文学とコンピュータシンポジウム論文集』2023 巻、pp.105-112、2023.12

[研究会,シンポジウム資料等]「サンスクリット文献『リグ・ヴェーダ』の韻律構造にもとづくクラスタ分析」、塚越柚季,大向一輝、『言語処理学会第 30 回年次大会発表論文集』、pp.88-93、2024.3

(3) その他各種論著

[総説・解説（学術雑誌）]「座談会：AI マップのこれまでとこれから」、堤富士雄,森川幸治,植野研,大向一輝、『人工知能』38 巻 4 号、pp.539-545、2023.7

[総説・解説（学術雑誌）]「特集「AI マップ」にあたって」、大向一輝、『人工知能』38 巻 4 号、p.502、2023.7

[書評,文献紹介等]「AI から読み解く社会一権力化する最新技術」、大向一輝、『人工知能』38 巻 5 号、p.770、2023.9

[総説・解説（学術雑誌）]「他者の他者性と人工他者」、大向一輝、『人工知能』39 巻 1 号、p.12、2024.1

e その他

(1) 学会・委員活動

[委員歴] 日本学術会議、特任連携会員、2020.10～2023.9

[委員歴] デジタルアーカイブ学会、理事、2021.4～

[委員歴] 人工知能学会、理事、2021.6～2023.6

准教授 **高橋 晃一** TAKAHASHI, Kouichi

14 インド哲学仏教学 参照

3 1 死生学・応用倫理センター

教 授 **池澤 優** IKEZAWA, Masaru **(2022 年度センター長)**

0 6 宗教学宗教史学 参照

教 授 **鈴木 晃仁** SUZUKI, Akihito

0 8 死生学応用倫理 参照

教 授 **堀江 宗正** HORIE, Norichika **(2023 年度センター長)**

0 8 死生学応用倫理 参照

3 2 北海文化研究常呂実習施設

教 授 熊木 俊朗 KUMAKI, Toshiaki

1. 略歴

1990 年 3 月	北海道大学文学部文学科言語学専攻課程卒業
1990 年 4 月	旭化成工業株式会社入社
1994 年 3 月	明治大学文学部史学地理学科考古学専攻卒業
1996 年 3 月	東京大学大学院人文社会系研究科考古学専門分野修士課程修了
1996 年 4 月	東京大学文学部助手（附属常呂実習施設勤務）
2004 年 4 月	北海道常呂町教育委員会社会教育課とところ遺跡の森主幹
2005 年 2 月	博士（文学）学位取得 東京大学大学院人文社会系研究科
2006 年 4 月	東京大学大学院人文社会系研究科 准教授
2018 年 11 月	東京大学大学院人文社会系研究科 教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

東北アジア考古学

b 研究課題

東北アジア地域の考古学的研究を専門としており、特に近年は以下の 3 点を主要な課題として、北海道でのフィールドワークを中心とした調査研究を行っている。

- (1)考古学からみた北海道島の歴史の研究
- (2)日本列島と東北アジア大陸の交流に関する研究
- (3)東北アジアにおける「窪みで残る堅穴群遺跡」に関する研究

c 概要と自己評価

上記研究課題について、2022 年度～2023 年度には以下の研究活動をおこなった。

1) 北見市大島遺跡群の発掘調査

北見市大島遺跡群は、擦文文化の堅穴住居等からなる集落遺跡である。アイヌ文化の直接の母体になったと考えられる擦文文化の終末過程や、擦文文化とオホーツク文化の関係について解明するため、北見市大島遺跡群の発掘調査を実施した。この調査は 2010 年度から継続して実施しており、2022 年度の調査では、2016 年度より調査を継続中の大嶋 2 遺跡 5 号堅穴について発掘作業を完了し、堅穴住居跡の内部の構造、出土遺物、住居の廃絶儀礼等について知見を得た。2023 年度の調査では、2017 年度の発掘以来調査を中断していた大島 1 遺跡の 1 号堅穴の発掘を再開して住居内部の構造や出土遺物について知見を得た。発掘作業が完了した大島 2 遺跡については 2025 年度に総括報告書を公開する予定であり、大島 1 遺跡については 2024 年度以降も調査を継続する計画である。

2) 特集展示や一般向け書籍等による成果の公開

常呂実習施設の調査研究成果を一般向けに紹介する本研究科の事業として、2022 年度～2023 年度には下記の 3 つが実施された。①常呂川下流域の古代文化を紹介する 2 本の動画（「3000 軒の堅穴を残した人々—ところの古代文化—」「常呂川下流域の古代文化を解く」）の公開（常呂実習施設公式 YouTube チャンネル、2023.4.17～公開）。②特集展示『北の大地が育んだ古代—オホーツク文化と擦文文化—』（国立歴史民俗博物館との共催事業、同館第 1 展示室、2023.11.14～2024.2.12）。③『オホーツクの古代文化—東北アジア世界と北海道・史跡常呂遺跡』（東京大学文学部常呂実習施設・考古学研究室編、新泉社、2024.3）の刊行。これらの事業を主導するなかで、常呂実習施設や考古学研究室が所蔵するオホーツク文化や擦文文化等の資料について再調査をおこない、過去に発掘された考古資料や当時の調査記録等について新たな知見を得た。それらの成果は、上記の展示、動画、書籍等に組み込む形で公開した。

d 研究業績

(1) 書籍出版物

[分担執筆]『アイヌ文化史辞典』、関根達人 菊池勇夫 手塚薫 北原モコットウナシ（編）、「オホーツク土器 オホーツク文化 標津遺跡群 鈴谷式土器 常呂遺跡 弁天島遺跡 目梨泊遺跡 モヨロ貝塚」、吉川弘文館、事典・辞書、2022.7

[共編者]『国立歴史民俗博物館 総合展示第 1 展示室特集展示 北の大地が育んだ古代—オホーツク文化と擦文文化—』、東京大学大学院人文社会系研究科 同附属北海文化研究常呂実習施設 国立歴史民俗博物館、「オホーツク文化とは何か トビニタイ文化 それは地元の熱意から始まった おわりに」、東京大学大学院人文社会系研究科・同附属北海文化研究常呂実習施設・国立歴史民俗博物館、単行本（一般書）、2023.11

[共編者]『オホーツクの古代文化 東北アジア世界と北海道・史跡常呂遺跡』、東京大学文学部常呂実習施設・考古学研究室（編）、「本書のねらい」「縄文・続縄文文化」（福田正宏と共著）「道東部のオホーツク文化」「（コラム）骨製クマ像」「擦文文化からアイヌ文化へ」「東京大学と常呂の出会いとあゆみ」「常呂実習施設の発掘調査の歴史と研究成果」「大学と地域連携」、新泉社、単行本（一般書）、2024.3

(2) 論文

[学術雑誌]「オホーツク文化の集落と社会」、熊木俊朗、『季刊考古学・別冊 42 北海道考古学の最前線—今世紀における進展—』、pp.90-93、2023.6

[大学研究機関紀要]「稚内市豊岩地区における縄文遺跡群について」、萩野はな 福田正宏 夏木大吾 国木田大 斉藤譲一 熊木俊朗 太田圭 張恩恵 米田穰、東京大学考古学研究室研究紀要、37 号、pp.91-102、2024.3

(3) その他各種論著

[総説・解説（商業誌）]「オホーツク文化 日ロで研究」、熊木俊朗、『京都新聞』9 面、2022.5.20

[総説・解説（その他）]「佐藤宏之先生と常呂実習施設」、熊木俊朗、『弥生』45 号、pp.13-17、2022.12

[書評]高瀬克範著『続縄文文化の資源利用』、熊木俊朗、『物質文化』103 号、pp.63-65、2023.5

(4) 講演・口頭発表等

[公開講演、セミナー、チュートリアル、講習、講義等]「オホーツク文化における集落間の「格差」とその背景—目梨泊遺跡の性格を考えるために—」、熊木俊朗、目梨泊遺跡出土 金銅装直刀研究会、オンライン開催、2022.4.16

[公開講演、セミナー、チュートリアル、講習、講義等]「なぜ常呂に東大が？ 常呂実習施設のあゆみと地域連携」、熊木俊朗、東大人文・熊野フォーラム in 新宮、新宮市 文化複合施設（丹鶴ホール）1F+オンライン、2022.5.14

[その他]「オホーツク文化の遺跡動態に関する整理と課題」、熊木俊朗、歴博共同研究「交流・環境からみたオホーツク文化・擦文文化、アイヌ文化—その成立・展開過程—」第 2 回研究会、オホーツクミュージアムえさし（北海道枝幸町）、2022.10.30

[公開講演、セミナー、チュートリアル、講習、講義等]「発掘調査でわかったトコロチャシ跡」、熊木俊朗、ところ遺跡の森考古学公開講座「よみがえる古代遺跡 トコロチャシ跡遺跡群」、端野町公民館、2022.11.19

[公開講演、セミナー、チュートリアル、講習、講義等]「焼失住居と廃絶儀礼—道東部擦文集落の発掘調査事例から—」、熊木俊朗、2022 年度 地域の文化財普及啓発フォーラム 北海道の古代集落遺跡Ⅲ（釧路会場）、釧路市生涯学習センター 多目的ホール、2022.12.17

[公開講演、セミナー、チュートリアル、講習、講義等]「焼失住居と廃絶儀礼—道東部擦文集落の発掘調査事例から—」、熊木俊朗、2022 年度 地域の文化財普及啓発フォーラム 北海道の古代集落Ⅲ（札幌会場）、北海道大学学術交流センター 講堂、2023.1.29

[口頭発表（一般）]「2022 年度北見市大島 2 遺跡発掘調査報告」、熊木俊朗 太田圭 中村雄紀、第 22 回北アジア調査研究報告会、2023.2.11

[口頭発表（一般）]「北海道稚内における新石器／縄文時代遺跡の実態調査（2021-2022 年度）」、萩野はな 福田正宏 夏木大吾 出穂雅実 国木田大 斉藤譲一 太田圭 張恩恵 西村広経 崔桐赫、第 22 回北アジア調査研究報告会、2023.2.11

[その他]「オホーツク土器の年代と編年対比」、熊木俊朗、歴博共同研究「交流・環境からみたオホーツク文化・擦文文化、アイヌ文化—その成立・展開過程—」第 4 回研究会、国立歴史民俗博物館、2023.3.11

[口頭発表（一般）]「北海道東部続縄文文化の集落と墓—北見市常呂川河口遺跡の分析から—」、熊木俊朗、北海道考古学会 2023 年度研究大会「続縄文文化研究の今」、北海道大学 人文・社会科学総合研究教育棟 文系 6 番教室、2023.5.20

[公開講演、セミナー、チュートリアル、講習、講義等]「オホーツク文化とは何か—東京大学文学部と北海文化研究—」、熊木俊朗、第 448 回歴博講演会、国立歴史民俗博物館 講堂、2023.12.9

[公開講演、セミナー、チュートリアル、講習、講義等]「オホーツク文化の変容と終末」、熊木俊朗、2023 年度 地域の文化財普及啓発フォーラム 北海道の古代集落遺跡Ⅳ（札幌会場）、北海道大学学術交流会館 講堂、2023.12.23

[公開講演、セミナー、チュートリアル、講習、講義等]「オホーツク文化の変容と終末」、熊木俊朗、2023 年度 地域の文化財普及啓発フォーラム 北海道の古代集落遺跡Ⅳ（網走会場）、網走市オホーツク・文化交流センター 大会議室、2024.1.13

[公開講演、セミナー、チュートリアル、講習、講義等]「道東北の遺跡からみる縄文晩期から続縄文前半期」、熊木俊朗、令和5年度北海道立埋蔵文化財センター連続講座・講演会「縄文から弥生・続縄文へ4」、北海道立埋蔵文化財センター2F研修室、2024.1.20

[シンポジウム・ワークショップ パネル(指名)]「それは地元の熱意から始まった 常呂実習施設の歴史と現在」、熊木俊朗、第2回東京大学 地域連携シンポジウム「遠隔地施設における所在地自治体との地域連携」、東京大学山上会館大会議室+オンライン、2024.2.7

[口頭発表(一般)]「2023年度北海道北見市大島1遺跡発掘調査報告」、熊木俊朗 太田圭 中村雄紀、第23回北アジア調査研究報告会、東京大学本郷キャンパス法文1号館1F113教室、2024.3.3

(5) その他(データベース・作品等)

[その他]「第12回企画展 縄文晩期の東北海道一帯舞式土器から続縄文初頭へ」、東京大学大学院人文社会系研究科附属常呂資料陳列館(担当:太田圭・熊木俊朗)、東京大学大学院人文社会系研究科附属常呂資料陳列館3F企画展示室、2022.11~12

[その他]「第13階企画展 岐阜IIA群土器とは何か—縄文前期平底押型文土器の成立—」、東京大学大学院人文社会系研究科附属常呂資料陳列館(担当:熊木俊朗・太田圭)、東京大学大学院人文社会系研究科附属常呂資料陳列館3F企画展示室、2023.8~10

[その他]「特集展示 北の大地が育んだ古代—オホーツク文化と擦文文化—」、人間文化研究機構国立歴史民俗博物館 東京大学大学院人文社会系研究科・同附属北海文化研究常呂実習施設(担当:林部均・村木二郎・熊木俊朗・太田圭)、国立歴史民俗博物館第1展示室、2023.11~2024.2

(6) 共同研究・競争的資金等の研究課題

[科学研究費助成事業]「元素・DNA分析による土坑用途の研究—考古学・人類学・民俗学と自然科学の融合—」、渡邊正巳 熊木俊朗 澤藤りかい 瀬戸浩二、基盤研究(C):21K00989、日本学術振興会、島根大学、2021.4~2024.3

[歴博共同研究]「交流・環境からみたオホーツク文化・擦文文化、アイヌ文化—その成立・展開過程—」、鈴木琢也 榊田朋広 笹田朋孝 高島孝宗 熊木俊朗 臼杵勲 伊藤武士 小谷地肇 亀丸由紀子 養島栄紀 手塚薫 林部均 内田順子 三上喜孝 箱崎真隆、国立歴史民俗博物館、2022~2024

[科学研究費助成事業]「堅穴住居の利用形態からみた擦文文化の研究—住居跡の内部構造と廃絶儀礼の分析—」、熊木俊朗、基盤研究(C):23K00929、日本学術振興会、東京大学、2023.4~2026.3

[科学研究費助成事業]「生業動態からみた擦文文化の分布拡大要因」、國木田大 高瀬克範 熊木俊朗 太田圭 江田真毅、基盤研究(B):23H00689、日本学術振興会、北海道大学、2023.4~2028.3

e 社会活動

(1) 社会貢献活動

[取材協力,編集,助言・指導,情報提供,企画]インターネット「3000軒の堅穴を残した人々—ところの古代文化—」、東京大学大学院人文社会系研究科・同附属北海文化研究常呂実習施設、2023.4.17

[取材協力,編集,助言・指導,情報提供,企画]インターネット「Elucidating the Ancient Cultures in the Lower Reaches of Tokoro River」、Tokoro Research Laboratory,the Faculty of Letters of the University of Tokyo、2023.4.17

[取材協力,編集,助言・指導,情報提供,企画]インターネット「People Who Left Behind 3,000 Pit Dwelling Depressions: Ancient Cultures in Tokoro」、Tokoro Research Laboratory,the Faculty of Letters of the University of Tokyo、2023.4.17

[取材協力,編集,助言・指導,情報提供,企画]インターネット「常呂川下流域の古代文化を解く」、東京大学大学院人文社会系研究科・同附属北海文化研究常呂実習施設、2023.4.17

[出演,コメンテーター,取材協力,助言・指導]セミナー・ワークショップ「吉田夕梨花選手のサイクリングムービーを見ながらトーク」、常呂遺跡って、スゴい!、HEROES PARK、北見市芸術文化ホール 中ホール、2023.10.8

[出演,コメンテーター,情報提供]インターネット「展示解説 Part2:第1展示室 特集展示「北の大地が育んだ古代—オホーツク文化と擦文文化—」」、東京大学大学院人文社会系研究科・同附属北海文化研究常呂実習施設 人間文化研究機構国立歴史民俗博物館、2024.3.5

f その他

(1) 非常勤講師

東北芸術工科大学、2009.6~

北見工業大学 工学部、2017.6~

(2) 学会・委員活動

[所属学協会] 駿台史学会、1994~

[所属学協会] 北海道考古学会、1995~

[所属学協会] 日本考古学協会、1999～

[所属学協会] 物質文化研究会、2000～

[委員歴] 北見市教育委員会、常呂地区公民館運営委員会委員、2006～、常呂自治区社会教育推進会議 副委員長、2006～、史跡常呂遺跡整備専門委員、2007～、文化財審議委員会委員、2008～

[委員歴] 日本考古学協会、埋蔵文化財保護対策委員、2008～、機関誌『日本考古学』査読委員、2019.4～2024.3

[委員歴] 北海道立北方民族博物館、研究協力員、2010～

[委員歴] 北海道立青少年体験活動支援施設ネイパル北見、施設運営協力委員会委員、2014～

[委員歴] 北海道教育委員会、北海道東部の竪穴住居群調査懇談会構成員、2016～、北海道常呂高等学校 学校運営協議会委員、2020～、文化財保護審議会委員、2020～

[委員歴] 一般財団法人北方文化振興協会 理事、2019～

[委員歴] 北海道考古学会、会誌編集委員長、2021～

[委員歴] 湧別町教育委員会、湧別町シブノツナイ 竪穴住居群調査検討委員会、2021～

[委員歴] 人間文化研究機構国立歴史民俗博物館、共同研究員、2022.4～2025.3

[委員歴] 北海道古代集落遺跡群保存活用協議会、北海道古代集落遺跡群専門家委員会委員、2022.12～2023.12

3 3 上廣倫理財団死生学・応用倫理寄付講座

特任教授 **会田 薫子** AITA, Kaoruko

1. 略歴

1984 年 3 月	成蹊大学文学部英米文学科 卒業
1986 年 9 月	Contemporary British Society Course.School of Oriental and African Studies.University of London 入学
1987 年 6 月	同修了
1988 年 4 月	Medical Tribune 翻訳者・報道部記者
1992 年 9 月	The Japan Times 報道部記者
1999 年 9 月	Medical Ethics Fellowship Program.Harvard Medical School.Harvard University 入学(フルブライト留学)
2000 年 6 月	同修了
2003 年 4 月	東京大学大学院医学系研究科健康科学・看護学専攻修士課程入学
2005 年 3 月	同修了、修士号(保健学)取得 東京大学大学院医学系研究科
2005 年 4 月	東京大学大学院医学系研究科健康科学・看護学専攻博士課程進学
2008 年 3 月	同修了、博士号(保健学)取得 (東京大学大学院医学系研究科)
2008 年 4 月	東京大学大学院人文社会系研究科グローバル COE「死生学の展開と組織化」特任研究員
2012 年 4 月	東京大学大学院人文社会系研究科死生学・応用倫理センター上廣死生学・応用倫理講座 特任准教授
2017 年 4 月	同 特任教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

臨床倫理学、臨床死生学、医療社会学

b 研究課題

エンドオブライフ・ケアの研究・実践活動

医療技術が進展するなか、世界屈指の長寿社会となった日本におけるエンドオブライフ・ケア（人生の最終段階における医療とケア）のあるべき姿を模索し、研究知見をうみだし、社会還元し、状況の改善・充実を目指す。

臨床倫理の研究・実践活動

臨床倫理・医療倫理・生命倫理など生命・医療に関わる応用倫理について、従来、日本は先行の西洋型をモデルとしてきたが、そもそもそれら応用倫理の土台となる精神の基層を形成する社会的文化的特徴および法・制度には、彼我における相違が小さくなく、翻訳学習は限界を迎えていると認識している。そこで、日本における家族関係や意思決定に関わる社会的文化的特徴と背景の思想および法・制度を踏まえ、新たな日本型の臨床倫理と医療倫理について研究し、社会還元することを志向し取り組みを進めている。臨床現場において、ひとりひとりの患者／サービス利用者に関わる倫理的諸問題に対し、より適切に応答することが可能な方法論を探り、臨床現場の医療・介護専門職との協働・対話によって、現実の症例の倫理的問題について幅広く検討を深め、現場における実践の知へつないでいる。併せて、上記のエンドオブライフ・ケアの研究知見とともに、研究成果を国および各医学会の政策・ガイドライン等に活かすことを見据え、医療現場との共同研究に取り組んでいる。

臨床死生学の研究・実践活動

死生学の重要な領域である臨床死生学を、ひとりひとりが最期までよりよく生きることを臨床現場で考える学問と捉え、現場における死生をめぐる諸課題の理解・考察を深め、一般への浸透を図っている。

c 概要と自己評価

エンドオブライフ・ケアと臨床倫理および臨床死生学の研究・実践活動について

1) AMED（国立研究開発法人日本医療研究開発機構）研究班『高齢腎不全患者のための保存的腎臓療法—conservative kidney management (CKM) の考え方と実践』の作成

臨床倫理と臨床死生学に関する複数の研究課題について推進し、研究知見の社会還元に努めた。会田の研究課題はすべて連動しており、それらの研究知見は複数の医学会のガイドライン・提言や厚生労働省の政策に活かされている。

本研究では日本腎臓学会と日本透析医学会のガイドライン策定について、日本腎臓学会理事長であった柏原直樹氏（川崎医科大学副学長/腎臓・高血圧内科学教授）が研究代表者を務めたAMED研究「長寿・障害総合研究事業 高齢腎不全患者に対する腎代替療法の開始/見合わせの意思決定プロセスと最適な緩和医療・ケアの構築」において研究開発分担者を務めた。AMED 柏原班の研究成果物である『高齢腎不全患者のための保存的腎臓療法—conservative kidney management (CKM) の考え方と実践』（以下、『CKM ガイド』）は2022年度にまとめられた。2023年度は同ガイドの普及啓発と、一層の対応を要した諸課題に関する共同研究を継続して進め、複数の学会報告と論文発表・講演で研究知見の還元に努めた。

『CKM ガイド』（東京医学社）は日本腎臓学会と日本透析医学会の協働によって作成した日本で最初の指針であり、長寿の時代に増加を続ける高齢腎不全患者を主体とする診療のあり方に道を拓く新時代の指針である。会田は同ガイドにおいて、臨床倫理および医療倫理に関する課題の編集責任を担った。国内には高齢末期腎不全患者へのCKMに関する21世紀の研究知見が届いていない層がまだ少なく、不要な透析療法によってかえって患者に害をもたらしているため、適切な理解を促進するための研究と発信が急務と認識し、継続的に取り組んだ。CKMに関する国内での取り組みは依然として緒に就いたばかりであり、今後の啓発による全国的な意識改革が極めて重要である。これは長寿化が進展し超高齢腎不全患者の大幅な増加が見込まれる近未来において、日本社会の医療に関する最重要課題の1つと認識されている。なお、この課題は会田が2007年以来取り組んでいる老化の科学である frailty 研究とも密接に関連している。

2) 厚生労働科学研究班『認知症支援ガイド』の作成

会田は2021～2023年度の3年間にわたり、厚生労働科学研究費研究事業「療養場所の違いに応じた認知症者のエンドオブライフ・ケア充実に向けての調査研究—COVID-19 流行の影響も踏まえて」（課題番号21GB0101、研究代表者：国立長寿医療研究センター三浦久幸氏）において、医療・ケア専門職のための意思決定支援ガイド作成のリーダーとして携わった。本研究では、従来から一般的な問題とされていた、家族の意向を尊重する意思決定に関する諸問題を実証研究を踏まえて明らかにし、あくまで本人の意向を尊重する意思決定支援を進めるべく、幅広い医療・介護専門職に理解しやすいガイド作成を目指した。研究成果は2024年3月に開催したオンライン・シンポジウム「認知症を有する人のための緩和ケアと意思決定支援—エンドオブライフ・ケアのあり方」にて発信した。会田が企画し日本老年医学会と当講座の共同主催にて開催した。本シンポは2024年1月1日に施行された「共生社会の実現を推進するための認知症基本法」のもと、時宜を得た開催となった。参加者アンケートでは、参加者満足度は96%（6件法の6「大変満足」と5「満足」の合計）だった。同研究成果は『認知症支援ガイド』（二部構成の第一部は会田薫子編、日経BP）として、2024年4月に刊行された。

3) 『ACP の考え方と実践—エンドオブライフ・ケアの臨床倫理』（東京大学出版会）の刊行

会田の主要研究課題の1つである Advance Care Planning（ACP）について述べる。2023年3月にオンライン・シンポジウム「ACP の考え方と実践—本人を人として尊重する意思決定支援」を開催した際、事前の参加登録者1,221名、当日参加者1,018名（重複カウントなし）と大きな関心を集め、参加者アンケートでも参加者満足度が97%（6件法で「大変満足」と「満足」）と非常に高かった。参加者からの反響が大きく、参加者アンケートの結果から適切なテキストのニーズの高さが示されたため、同シンポの内容を軸として、2024年3月に『ACP の考え方と実践—エンドオブライフ・ケアの臨床倫理』（会田薫子編著、東京大学出版会）として刊行した。ACP とはエンドオブライフの意思決定支援の一環として取り組むものであり、学問分野としては臨床倫理に属する。これは応用倫理研究のなかで特に当講座が力を入れてきた臨床倫理の研究成果である。なお、『ACP の考え方と実践』には当講座のスタッフ全員が各人の専門の視点から寄稿した。また、かつて当講座に特任研究員等として所属した若手研究者にも寄稿を呼びかけた。講座員の総力で書籍を刊行したのは、2007年度の当講座発足以来、初めてとなり、当講座の設置意義の点からも重要な研究成果物となったと考えている。

一般社団法人 日本専門医機構への貢献

日本の専門医制度の設計を時代に合わせて更新する役目をもつ日本専門医機構の活動に関し会田は編集会議の議員を委嘱され、専門医を対象とする e-learning コンテンツ科目「医療倫理」全12本の企画を主幹している。これは全国約40万人の医師のほとんどを占める、何らかの科の専門医を対象とするものである。基本方針を「内科・外科のすべてを対象とし、医師の職業倫理である医療倫理を認識しつつ、各現場において一人一人の患者に関わる倫理的な問題を扱う臨床倫理を中核とする」とし、「専門医機構」編集委員会からの了承を得て、e-learning コンテンツの制作を開始した。コロナ禍のため一時制作を中断せざるを得ない状況となったが、ポスト・コロナの2023年度にコンテンツ制作を再開し、同年度末までに「医療倫理と臨床倫理」、「医療倫理と法」、「研究倫理上・下」、「医療資源の配分をめぐる諸課題」、「生命のはじめをめぐる諸課題」の配信を開始した。また、2023年度は「ケアの倫理」の制作準備を進めた。

d 研究業績

(1) 書籍出版物

- [編著]『ACP の考え方と実践—エンドオブライフ・ケアの臨床倫理』、東京大学出版会、2024.3.25、全 195 頁
- [分担執筆]「カンファレンスの方法—CKM の選択を検討する事例を題材に」、第 2 章「高齢腎不全患者に対する共同意思決定 (SDM) のあり方」、「エンドオブライフ・ケアの倫理」、第 5 章「長寿時代の腎不全診療の倫理と法的諸課題」、『高齢腎不全患者のための保存的腎臓療法—conservative kidney management(CKM)の考え方と実践』(編集: 日本医療研究開発機構 (AMED) 長寿科学研究開発事業「高齢腎不全患者に対する腎代替療法の開始/見合わせの意思決定プロセスと最適な緩和医療・ケアの構築」研究班)、東京医学社、2022.6.20、担当 pp.37-45,161-172、全 241 頁
- [分担執筆]「意思決定支援」、『超高齢者の緩和ケア』(桑田美代子、吉岡佐知子、西山みどり共編)、南山堂、2022.10.15、担当 pp.75-81、全 237 頁
- [教科書]「意思決定」、看護学テキスト Nice シリーズ『エンドオブライフケア—その人にとっての最善をめざして』(谷本真理子、増島麻里子共編)、南江堂、2022.12、pp.59-65
- [分担執筆]「Quality of Death—advance care planning」、『よくわかる老年腫瘍学』(日本がんサポーターズケア学会編)、金原出版株式会社、2023.3.20、担当 pp.258-266、全 322 頁
- [分担執筆]「入院時重症患者対応メディエーターが知っておくべき臨床倫理」、「意思決定支援」、『入院時重症患者対応メディエーター養成テキスト』、へるす出版、2023.5.17、担当 pp.22-28
- [分担執筆]「人生の最終段階における医療とケア—人工的水分・栄養補給法の問題を題材に」、『講座: 精神疾患の臨床 5 神経認知障害群』(池田学編)、中山書店、2023.5.25、担当 pp.425-429、全 562 頁

(2) 論文

- [学術雑誌] Tips for managing ethical challenges in advance care planning: A qualitative analysis of Japanese practical textbooks for clinicians. Hirakawa Y.Aita K.Nishikawa M.Arai H.Miura H. *International Journal of Environmental Research and Public Health* 2022 ;19(8):4550. doi: 10.3390/ijerph19084550、査読付
- [学術雑誌]「保存的腎臓療法—臨床倫理の視点から」、会田薫子、『腎臓内科』、2022;15(4):365-372
- [学術雑誌]「高齢腎不全患者のための保存的腎臓療法—SDM と ACP の役割」、会田薫子、『日本老年医学会雑誌』、2022;59(4):446-455. doi:10.3143/geriatrics.59.446
- [学術雑誌]「腎臓病における緩和ケアの必要性」、会田薫子、『腎代替療法のすべて』、『腎と透析』2022 年 92 巻増刊号、2022;92 増刊号:128-132
- [学術雑誌]「脳死の概念をめぐる半世紀—現代における意義とは」、『臨床麻酔』、2023 ; 47(3):477-483、査読付
- [学術雑誌]「高齢慢性腎臓病患者に対する ACP 開始時期と療養支援—糖尿病性腎症第 3 期の創作事例を用いた考察」、大賀由花、会田薫子、『山陽看護学研究会誌』、山陽看護学研究会、2023.5、vol.13,No.1.pp.10-19、査読付
- [学術雑誌]「脳死患者の家族のための意思決定支援—臨床倫理カンファレンスの方法」、会田薫子、荒木尚、『脳死・脳蘇生』、2023;35(2):48-57、査読付
- [学術雑誌]「認知症の人への advance care planning の現状と課題—ナラティブ・レビュー」、葛谷雅文、平川仁尚、会田薫子、三浦久幸、『日本老年医学会雑誌』、2023;60(3):201-213、査読付
- [学術雑誌]「老年期の精神医療と死生学 超高齢社会の意思決定支援」、会田薫子、『老年精神医学雑誌』、2023;34:850-858
- [学術雑誌]「保存的腎臓療法—医療倫理と臨床倫理の視点から」、会田薫子、『日本腎臓学会誌』、2023;65:891-895

(3) その他各種論著

- [その他:総合文芸誌 随筆]「延命医療をめぐる 20 年」、『群像』2023 年 3 月号、pp.258-259
- [その他:総合文芸誌 論壇]「長寿と医療—frailty から考える医の倫理」、会田薫子、『群像』2023 年 7 月号、pp.304-314
- [解説]「人生 100 年を生きる支度—人生の最終段階における医療・ケアへの備え」、『2023 年版 くらしの豆知識』、独立行政法人 国民生活センター、2022.9、pp.130-131
- [文献紹介]“Theory and Practice of Clinical Ethics: Conference methods for medical treatment and care team,” UTokyo BiblioPlaza.2022. https://www.u-tokyo.ac.jp/biblioplaza/en/H_00091.html
- [書評]『新訂版 緊急 ACP—悪い知らせの伝え方、大切なことの決め方』(伊藤香・大内啓共編著)、『週刊 医学界新聞』2023 年 4 月 17 日号、7 面
- [書評]『わたしの死 あなたの死』(柳田邦男編著)、『看護管理』2023 年 11 月号、Vol.33.No.11、p1006
- [会議報告]「意思決定支援」、「HeW CO-OP Review and Research」医療福祉生協連 理論誌、2024.3、Vol.38、pp4-15

(4) 講演・口頭発表等

- [口頭発表 (招待)] 「ACPについて考えよう—最期まで望ましい医療を受けるために」、第38回日本救急医学会中国四国地方会学術集会、岡山国際交流センター (岡山)、2022.5.21
- [口頭発表 (招待)] 「高齢者の意思決定を支える入院医療」、シンポジウム7「Senior Friendly Hospital を目指して」、第64回日本老年医学会学術集会、大阪国際会議場/WEB、WEB 登壇、2022.6.2
- [口頭発表 (指定)] 「高齢 CKD 患者の意思決定支援」、シンポジウム21「高齢者の腎臓病治療の最前線」、第64回日本老年医学会学術集会、大阪国際会議場/WEB、WEB 登壇、2022.6.3
- [口頭発表 (招待)] 教育講演1「アドバンス・ケア・プランニング—人生の最終段階における意思決定支援」、第23回日本認知症ケア学会大会、WEB 講演 (オンデマンド)、2022.6.18~9.30
- [口頭発表 (指定)] 「脳死患者のエンドオブライフ・ケア—カンファレンスの方法」、パネルディスカッション「脳死・臓器移植の現状と課題」、第34回日本脳死・脳蘇生学会学術集会、WEB 講演 (リアルタイム)、2022.6.19
- [口頭発表 (招待)] 「人生の最終段階を支える EOL ケアのデザイナーガイドラインにみる基本的な考え方」、Good Practice Seminar1「人生の最終段階を支える EOL ケアのデザイン」、第27回日本老年看護学会学術集会、WEB 講演 (リアルタイム・オンデマンド)、2022.6.25~7.25
- [口頭発表 (招待)] 「カンファレンスの方法—透析導入の見合わせを検討する症例を題材に」、シンポジウム25「エンドオブライフ・ケア」、第67回日本透析医学会学術集会、パシフィコ横浜、2022.7.3
- [口頭発表 (招待)] 教育講演兼専門医共通講習「医療倫理と臨床倫理」、第67回日本透析医学会学術集会、パシフィコ横浜、2022.7.3、オンデマンド (2022.7.4~9.30)
- [口頭発表 (招待・特別)] 「サイコネフロジーに関わる臨床倫理」、第33回日本サイコネフロジー学会学術集会、WEB 講演 (リアルタイム)、2022.7.23、オンデマンド (2022.8.1~15)
- [口頭発表 (指定)] 「advance care planning とは」、シンポジウム2「在宅救急における advance care planning と診療トリアージ」、第6回日本在宅救急医学会学術集会、常陽藝文センター (茨城県水戸市)、2022.9.10
- [口頭発表 (招待・特別)] 「循環器看護における臨床倫理」、第19回日本循環器看護学会学術集会、枚方市総合文化芸術センター (大阪府枚方市)、2022.10.2
- [口頭発表 (招待)] ランチョンセミナー8「SDMによる意思決定支援」、第58回日本移植学会学術集会、第58回日本移植学会総会・中外製薬株式会社共催、名古屋観光ホテル、2022.10.15
- [口頭発表 (招待)] 「困難なことを話し合う医療・ケアチームのための事例検討法」、日本死の臨床研究会北海道支部「秋の研究会 in 小樽」、日本死の臨床研究会北海道支部主催、小樽市立病院講堂・オンライン、ハイブリッド開催、2022.10.29
- [口頭発表 (招待・特別)] 「2040年問題を見据えた医療・ケア—臨床倫理を現場で活かす」、第60回全国自治体病院学会 in 沖縄、那覇文化芸術劇場なはもと、2022.11.10
- [口頭発表 (招待)] 「高齢腎不全患者に対応する医療・ケア従事者のための意思決定支援ツール」の意義、シンポジウム4「高齢化社会の療法選択 SDM、ACP、CKM」、第28回日本腹膜透析医学会学術集会、岡山コンベンションセンター、2022.11.26
- [口頭発表 (招待)] 「人生の最終段階における医療・ケアの意思決定支援のあり方」、シンポジウム44「実臨床で直ぐ役立つ、認知症者の誤嚥性肺炎・嚥下障害・QOL」、第41回日本認知症学会/第37回日本老年精神医学会合同学術集会、東京国際フォーラム、2022.11.27
- [口頭発表 (招待)] 教育講演「多職種チームで取り組む臨床倫理」、回復期リハビリテーション病棟協会第41回研究大会 in 岡山、川崎医療福祉大学、2023.2.24
- [口頭発表 (招待)] 「意思決定支援のアウトカム—臨床倫理の視点から」、パネルディスカッション3「がん患者の持つ力に沿った意思決定支援のアウトカム」、第37回日本がん看護学会学術集会、パシフィコ横浜ノース、2023.2.26
- [口頭発表 (招待)] 「高齢者のエンドオブライフ・ケア」、老年医学スプリング・セミナー2023、日本老年医学会主催、リモート講演、2023.4.22
- [口頭発表 (一般)] N. Wakahama.K. Funahashi.S. Uchigasima.R. Yamada.H. Aita.T. Iida.T. Iizumi.A. Hatsumi.Y. Tsuji.K. Aita.M. Ikeda.H. Hirano.A. Edahiro.N. Matsumoto.Y. Chiba.K. Takebe: Current Status and Future Prospects of the End-of-Life Care System in Facilities Covered by Public Aid for Long-Term Care to Older Adults in Japan. IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023. Poster presentation. Pacifico Yokohama North. 2023.6.13
- [口頭発表 (招待)] 「保存的腎臓療法 (CKM) の意義—臨床倫理の視点から」、第17回トピックス研修、一般社団法人日本腎不全看護学会主催、リモート講演、2023.6.4

- [口頭発表(招待)] 教育講演 11「高齢透析患者の意思決定支援」、第 68 回日本透析医学会学術集会、神戸ポートピアホテル南館大輪田、2023.6.16
- [口頭発表(招待)] 「臓器提供と臓器移植—医療倫理と臨床倫理の視点から」、第 33 回日本医学会公開フォーラム「移植医療の現状と課題」、日本医師会館大講堂（無観客収録）・オンライン公開、2023.6.17 収録
- [口頭発表(招待)] 「ACP の基礎—最期まで患者さんの尊厳を守るために」、シンポジウム 12「ACP に関わる歯科衛生士になるには—エンドオブライフ・ケアを理解した実践へ」、日本老年歯科医学会第 34 回学術大会、横浜パシフィコ・ノース、2023.6.18
- [口頭発表(招待)] 「サイコネフロジーにおける倫理：コメント」、倫理委員会企画シンポジウム「サイコネフロジーにおける倫理」、第 34 回日本サイコネフロジー学会学術集会、大垣フォーラムホテル、2023.7.22
- [口頭発表(招待)] 教育講演「エンドオブライフにおける家族への対応—臨床倫理の視点から」、第 13 回脳死問題検討委員会セミナー、第 36 回日本小児救急医学会学術集会、幕張メッセ、2023.7.23.
- [口頭発表(招待)] 教育講演 21「ACP と CKM—臨床倫理の視点から」、第 29 回日本腹膜透析医学会学術集会、TOC 有明コンベンションホール、2023.10.1
- [口頭発表(招待・基調)] 記念講演「高齢腎不全患者のための CKM と ACP」、第 46 回全国腎疾患管理懇話会学術大会 in 京都、京都リサーチパーク、2023.11.18
- [口頭発表(招待)] 専門医共通講習「医療倫理」、「集中治療におけるエンドオブライフ・ケア—治療の withholding/withdrawal をめぐる倫理的課題」、第 51 回日本集中治療医学会学術集会、ニューオータニイン札幌、2024.3.14
- [口頭発表(招待)] 「高齢者のエンドオブライフ・ケア」、2022 老年医学スプリング・セミナー、一般社団法人日本老年医学会主催、WEB 開催（リアルタイム）、2022.4.23
- [口頭発表(招待)] 「神経難病の意思決定支援—人工呼吸器と胃ろうの臨床倫理」、神経難病者の支え方を考える会主催、ホテル・アゴーラ大阪守口、2022.5.13
- [口頭発表(招待)] 「ACP とは何か—人生の最終段階における医療とケアの意思決定支援」、2022 年度大阪府補助事業研修「ACP 支援専門人材育成事業 専門人材育成研修」、公益社団法人大阪府看護協会主催、WEB 開催（リアルタイム・オンデマンド）、2022.5.26
- [口頭発表(招待)] 「ACP とは—人生の最終段階における医療とケアを考える」、第 15 回川口市医学会総会特別講演、川口市医師会主催、川口市民ホールフレンジア、2022.5.28
- [口頭発表(招待)] 「臨床倫理の考え方とケーススタディー—透析療法の見合わせを検討する症例を題材に」、令和 4 年度国公私立大学附属病院医療安全セミナー、大阪大学医学部附属病院主幹、WEB 講演、2022.6.1
- [公開講演] 「意思決定支援のあり方—臨床倫理の視点から」、市民公開講座「高齢腎不全患者のための保存的腎臓療法」、NPO 法人日本腎臓病協会主催、WEB 開催（リアルタイム）、2022.6.5
- [口頭発表(招待)] 「高齢者のエンドオブライフ・ケア」、2022 年度 第 16 回老年医学サマーセミナー、日本老年医学会主催、WEB 開催、2022.8.6
- [公開講演] 「人生の最終段階における医療を考える」、開院 16 周年記念事業市民講座、一般社団法人郡山医師会 郡山市医療介護病院主催、郡山市医療介護病院ホール・ハイブリッド開催、2022.11.5
- [口頭発表] 「ACP の文化的な多様性—自らと自ずから」、2022 年度エンドオブライフ・ケア・シンポジウム、一般社団法人日本老年医学会・東京大学大学院人文社会系研究科死生学・応用倫理センター上廣講座共同主催、オンライン開催、2023.3.5
- [公開講演] 「もしものときの医療のための話し合い—ACP（人生会議）とは」、令和 4 年度大宮包括ケアネット「多職種講演会・市民公開講座」、一般社団法人大宮医師会主催、ハイブリッド開催（Zoom/清水園）、2023.3.9
- [口頭発表(招待)] 高齢者のエンドオブライフ・ケア—倫理の視点から」、2023 年度第 16 回老年医学サマーセミナー、日本老年医学会主催、国立長寿医療研究センター教育研修棟、2023.8.5
- [公開講演] 「一人ひとりを人として尊重するための意思決定支援」、第 19 回東近江医療圏がん診療公開講座、東近江総合医療センター・近江八幡市立総合医療センター・滋賀医科大学医学部附属病院共同主催、国立病院機構東近江総合医療センターきらめきホール・オンデマンド配信、2023.11.3
- [口頭発表(招待)] 「エンドオブライフにおける家族への対応—臨床倫理の視点から」、日本移植学会メディアワークショップ「小児臓器提供について—小児臓器提供 100 例を迎えるにあたって」、一般社団法人日本移植学会主催、ステーションコンファレンス東京会議室、2024.2.1
- [口頭発表(招待)] 「高齢腎不全患者のための意思決定支援—人生の物語りを大切に」、第 62 回東日本腎不全研究会、東日本腎不全研究会/扶桑薬品工業株式会社共催、WEB 開催、2024.3.11

[公開講演]「人生の最終段階における医療・ケアを考える」、千葉県生涯大学校卒業生学習会、千葉市市民会館、2024.3.26.

(5) その他（データベース・作品等）

[Web 教材] 国立研究開発法人日本医療研究開発機構（AMED）長寿・障害総合研究事業長寿科学研究開発事業「呼吸不全に対する在宅緩和医療の指針に関する研究」、研究成果物「アドバンス・ケア・プランニング支援ガイド—在宅療養の場で呼吸不全を有する患者さんに対応するために」、2022 年 3 月 31 日ウェブサイト公開、
<https://www.l.u-tokyo.ac.jp/dls/cleth/acp.html>

[Web 教材] 国立研究開発法人日本医療研究開発機構（AMED）長寿・障害総合研究事業長寿科学研究開発事業「高齢腎不全患者に対する腎代替療法の開始/見合わせの意思決定プロセスと最適な緩和医療・ケアの構築」、研究成果物「高齢腎不全患者に対応する医療・ケア従事者のための意思決定支援ツール」、2022 年 3 月 31 日ウェブサイト公開、<https://www.l.u-tokyo.ac.jp/dls/cleth/tool.html>

[動画教材] 日本眼科医会・日本眼科学会専門医共通講習 e-learning 教材、「医療倫理と臨床倫理」、2023.1

[動画教材] 学研メディカルサポート e-learning コンテンツ「臨床倫理入門」、「臨床倫理:事例検討法」、2023 年 3 月～2024 年 3 月配信

[動画教材] ヴェクソンインターナショナル e-learning コンテンツ「医療倫理と生命倫理の原則」、2023 年 4 月配信開始

(6) 共同研究・競争的資金等の研究課題

厚生労働科学研究費補助金 認知症政策研究事業「療養場所の違いに応じた認知症者のエンドオブライフケア充実に向けての調査研究—COVID-19 流行の影響も踏まえて—」（21GB1001）、2021.4～2024.3、三浦久幸、葛谷雅文、会田薫子、大河内二郎、平原佐斗司、山中崇、平川仁尚、石山麗子、斎藤民、高梨早苗、島田千穂、篠崎未生、鈴木みずえ、高井ゆかり、水島俊彦、尾之内直美、小松亜弥音

日本学術振興会科学研究費助成事業基盤研究（C）「看護師を対象とした子どもの権利擁護実践を高める教育プログラム（中級編）の開発」（21K02335）、2021.4～2024.3、研究代表者：高橋衣、遠藤里子、三浦靖彦、日沼千尋、会田薫子、平野大志、瀧田浩平

日本学術振興会科学研究費助成事業基盤研究（B）「臨床倫理システムの理論的総仕上げと超高齢社会における高齢者のよい人生への貢献」（22H00602）、2022.4～2026.3、研究代表者：清水哲郎、研究分担者：会田薫子、田代志門、相澤出、鈴木晴香、秋葉峻介

日本学術振興会科学研究費助成事業基盤研究（B）「認知症高齢者の「食べる喜び」を重視したエンドオブライフ・ケアガイドの開発」（22H03424）、2022.4～2026.3、研究代表者：山田律子、研究分担者：池田学、会田薫子、平野浩彦、枝広あや子、武部久美子、千葉由美、辻幸美、松本望、會田英紀、飯田貴俊、飯泉智子、内ヶ島伸也、船橋久美子

e 社会活動

(1) 社会貢献活動

[講師]「ACP とは何か—人生の最終段階における医療とケアの意思決定支援」、2022 年度大阪府補助事業研修「ACP 支援専門人材育成事業 看護管理者研修」、公益社団法人大阪府看護協会主催、WEB 開催（リアルタイム）、2022.6.11

[講師]「看護倫理」、「臨床倫理」、「事例検討法」、「エンドオブライフ・ケア」、2022 年度第 1 回大阪府看護協会認定看護管理者教育課程ファーストレベル研修、公益社団法人大阪府看護協会主催、大阪府看護協会研修室、2022.6.20
「ACP—人生の最終段階における医療とケアの意思決定支援」、「臨床倫理:事例検討法」、「エンドオブライフ・ケア」、令和 4 年度「アドバンス・ケア・プランニングとエンドオブライフ・ケア」研修会、公益社団法人福島県看護協会主催、WEB 開催、2022.7.22

[講師]「老人保健施設におけるエンドオブライフ・ケア」、2022 年度老人保健施設管理医師総合診療研修会、一般社団法人日本老年医学会・公益社団法人全国老人保健施設協会共催、WEB 開催（オンデマンド）、2022.8.1～9.30

[講師]「ACP—人生の最終段階における医療とケアの意思決定支援」、令和 4 年度看護管理者研修会、公益社団法人日本精神科病院協会主催、WEB 開催（オンデマンド）、2022.9.1～11.30

[講師]「Advance care planning—人生の最終段階における医療とケアの意思決定支援」、「臨床倫理 事例検討法」、「エンドオブライフ・ケアを考える」、2022 年度「ACP 研修」、広島県看護協会主催、WEB 開催（リアルタイム）、2022.7.29

[講師]「臨床倫理の基礎と事例検討法」、2022 年度「臨床倫理研修」、長野県立こころの医療センター駒ヶ根主催、WEB 開催（リアルタイム・オンデマンド）、2022.8.4

[講師]「看護倫理」、「臨床倫理」、「事例検討法」、「エンドオブライフ・ケア」、2022 年度第 2 回大阪府看護協会認定看護管理者教育課程ファーストレベル研修、公益社団法人大阪府看護協会主催、WEB 開催、2022.8.22

[講師]「脳死の二重基準の意味と意義」、2022 年度第 1 回院内移植医療講演会、東京歯科大学市川総合病院主催、WEB 開催、2022.8.25

[講師]「リビングウィルと ACP—その違いと目的」、第 10 回北陸地区臨床倫理事例研究会、北陸地区臨床倫理事例研究会主催・臨床倫理プロジェクト・東京大学死生学・応用倫理センター上廣講座後援、金沢（金沢大学医学部附属病院他）/WEB 開催（リアルタイム）の一部ハイブリッド開催、2022.9.3

[講師]「臨床死生学と臨床倫理学」、「カンファレンスの方法」、2022 年度医療・介護従事者のための死生学夏季セミナー、東京大学大学院人文社会系研究科死生学・応用倫理センター主催、WEB 開催、2022.9.18

[講師]「高齢腎不全患者のための新たな選択肢—保存的腎臓療法の時代へ」、「臨床倫理 事例検討の進め方」、第 7 回諏訪地域臨床倫理セミナー、諏訪中央病院主催・諏訪赤十字病院共催、WEB 開催、2022.10.1

[講師]「本人と家族の意思を尊重する意思決定支援とは」、「臨床倫理の事例検討法」、「エンドオブライフ・ケアの意思決定支援」、2022 年度公益社団法人愛媛県看護協会会員教育「本人と家族の意思を尊重する意思決定支援」研修会、公益社団法人愛媛県看護協会主催、WEB 開催、2022.10.4

[講師]「看護職の倫理綱領」、「臨床倫理の基礎—看護倫理を現場で活かすために」、「事例検討の進め方」、独立行政法人 国立病院機構中国四国グループ実習指導者講習会 <看護倫理>、WEB セミナー（リアルタイム）、2022.10.7

[講師]「人生の最終段階 食べられなくなったらどうしますか？ 医療・介護・家族の連携、人生会議」、わライフ ネット終活講座、香川県高松市市民公開 WEB 講座、WEB 開催、2022.10.14

[講師]「ACP—エンドオブライフ・ケアの意思決定支援」、令和 4 年度在宅医療講演会、一般社団法人箕面市医師会主催、箕面市医師会館・ハイブリッド開催、2022.10.22

[講師]「意思決定支援の大切さを考える—共同意思決定と ACP」、医療福祉多職種連携勉強会主催、済生会川口総合病院・ハイブリッド開催、2022.11.4

[講師]「食べられなくなったらどうしますか？ 人工栄養で生きるということを考える」、高知県口のリハビリテーション研究会、高知県口のリハビリテーション研究会・高知県健康政策部共催、WEB 開催、2022.11.6

[講師]「アドバンス・ケア・プランニング—エンドオブライフ・ケアの意思決定支援」、「2022 年度看取り研修会」、公益社団法人 全国老人保健施設協会主催、WEB（オンデマンド）開催、2022.11.11～30

[講師]「看護倫理と ACP」、令和 4 年度「訪問看護ステーションの看護師研修」、静岡県訪問看護ステーション協議会主催、もくせい会館（静岡市）、2022.11.12

[講師]「意思決定を支援する—臨床倫理の基礎と事例検討法～身体拘束をめぐって」、看護倫理研修会、広島市立広島市民病院看護部主催、WEB 開催、2022.11.18

[講師]「エンドオブライフ・ケアについて考える」、令和 4 年度第 6 回安全管理研修 Special Program、近畿大学病院主催、WEB 開催、2022.11.21

[講師]「アドバンス・ケア・プランニング—意思決定の支援」、「2022 年度人生の最終段階における意思決定支援研修」、公益社団法人日本医療ソーシャルワーカー協会主催、WEB 開催（オンデマンド）、2022.12.1～2023.1.31

[講師]「現場で生きる医療倫理と臨床倫理」、市立東大阪医療センター院内研修会、地方独立行政法人市立東大阪医療センター主催、WEB 開催、2022.12.12

[講師]「アドバンス・ケア・プランニング—意思決定を共に支援しよう」、令和 4 年度看護研修会、公益社団法人岩手県看護協会主催、いわて県民情報交流センター・アイーナ、2022.12.16

[講師]「脳死の二重基準の意味と意義」、2022 年度第 1 回千葉県移植医療講演会、東京歯科大学市川総合病院主催、WEB 開催、2022.12.19

[講師]「延命医療について考える—人工的水分・栄養補給法によって生きるということ」、「臨床倫理 事例検討の進め方」、2022 年度プロフェッショナルリズム研修・第 6 回例会、公益社団法人日本アクチュアリー会主催、WEB 開催、2022.12.23

[講師]「高齢患者のエンドオブライフ・ケア—人工的水分・栄養補給法をめぐらる問題を中心に」、医療倫理講演会、静岡市立静岡病院主催、WEB 開催、2023.1.13

[講師]「高齢者ケアと意思決定支援—人生の最終段階を支える文化の創成」、2022 年度小松市認知症ケアコミュニティマイスター養成講座、石川県小松市主催、WEB 開催、2023.1.22

[講師]「看護倫理」、「臨床倫理」、「事例検討法」、「エンドオブライフ・ケア」、2022 年度第 3 回大阪府看護協会認定看護管理者教育課程ファーストレベル研修、公益社団法人大阪府看護協会主催、WEB 開催、2023.1.23

[講師]「臨床倫理の基礎と事例検討法」、オンライン臨床倫理セミナー@東大、東京大学大学院人文社会系研究科死生学・応用倫理センター上廣講座主催、WEB 開催、2023.2.5

[講師]「意思決定支援の考え方」、2022 年度意思決定支援研修会、諏訪中央病院看護部主催、WEB 開催、2023.2.6

[講師]「アドバンス・ケア・プランニングの考え方と実践」、岩槻医師会アドバンス・ケア・プランニング研修、岩槻医師会主催、2023.2.7

[講師]「ACP—人生の最終段階における医療とケアの意思決定支援」、令和 4 年度医療・介護連携会議（地域包括ケア会議）、東邦大学医療センター大橋病院・世田谷区地域包括支援センター共催、WEB 開催、2023.2.10

[講師]「臨床倫理の考え方と実践」、JR 東京総合病院臨床倫理研修会、JR 東京総合病院会議室、2023.2.21

[講師]「脳死の二重基準の意味と意義」、第 67 回香川県臓器移植ワーキンググループ会議講演、公益財団法人香川のちのり財団主催、ハイブリッド開催（Zoom/香川県社会福祉総合センター 大会議室）、2023.3.10

[講師]「臨床倫理の考え方とケーススタディー—透析の見合わせを検討する症例を題材に」、北海道大学病院医療安全講演会、北海道大学病院主催、北海道大学医学部学友会館フラテホール/on demand、2023.3.1

[講師]「長寿時代の医療とケア」、「医療介護の現場で働く女性応援セミナー」、一般社団法人川越市医師会主催、川越市医師会館講堂、ハイブリッド、2023.5.20

[講師]「看護倫理」、「臨床倫理」、「事例検討法」、「エンドオブライフ・ケア」、2023 年度第 1 回大阪府看護協会認定看護管理者教育課程ファーストレベル研修、公益社団法人大阪府看護協会主催、大阪府看護協会研修室、2023.6.26

[講師]「Advance care planning—人生の最終段階における医療とケアの意思決定支援」、「臨床倫理 事例検討法」、「エンドオブライフ・ケアを考える」、2023 年度「ACP 研修」、広島県看護協会主催、WEB 開催（リアルタイム）、2023.7.28

[講師]「老人保健施設におけるエンドオブライフ・ケア」、2023 年度老人保健施設管理医師総合診療研修会、一般社団法人日本老年医学会・公益社団法人全国老人保健施設協会共催、WEB 開催（オンデマンド）、2023.8.1～9.30

[講師]「看護倫理」、「臨床倫理」、「事例検討法」、「エンドオブライフ・ケア」、2023 年度第 2 回大阪府看護協会認定看護管理者教育課程ファーストレベル研修、公益社団法人大阪府看護協会主催、大阪府看護協会研修室、2023.8.21

[講師]「エンドオブライフ・ケアについて考える」、医療従事者向け医療倫理研修会、社会医療法人岡本病院（財団）京都岡本記念病院主催、京都岡本記念病院・Zoom（ハイブリッド開催）、2023.8.26

[講師]「多病の高齢がん患者のための意思決定支援—振り返っての事例検討」、第 11 回北陸地区臨床倫理事例研究会、北陸地区臨床倫理事例研究会主催・臨床倫理プロジェクト・東京大学大学院人文社会系研究科死生学・応用倫理センター上廣講座共催、金沢大学医学部附属病院 CPD センター&宝ホール/WEB 開催（リアルタイム）の一部ハイブリッド開催、2023.9.2

[講師]「臨床倫理 入門」、「多病の高齢がん患者のための意思決定支援—振り返っての事例検討」、第 18 回北海道臨床倫理検討会、北海道臨床倫理研究会主催、東京大学大学院人文社会系研究科死生学・応用倫理センター上廣講座共催、北海道医療大学サテライトキャンパス（札幌）/WEB 開催（リアルタイム）の一部ハイブリッド開催、2023.9.16

[講師]「臨床死生学と臨床倫理：概論」、「カンファレンスの方法—積極的安楽死を望む患者さんのケースを例として」、2023 年度「医療・介護従事者のための死生学セミナー」、東京大学大学院人文社会系研究科死生学・応用倫理センター主催、オンライン開催（Zoom ウェビナー）、2023.9.17

[講師]「生命に関わる倫理」、「教えて！ まさかね先生」シーズン 3 第 2 回、キッセイ薬品工業主催、オンライン開催（Zoom ウェビナー）、2023.9.29

[講師]「在宅ケアにおける倫理—共同意思決定のプロセスを進めよう」、2023 年度日本訪問看護認定看護師協議会東海北陸ブロック研修会、一般社団法人日本訪問看護認定看護師協議会主催、オンライン開催（Zoom ミーティング）、2023.9.30

[講師]「看護職の倫理綱領」、「臨床倫理の基礎—看護倫理を現場で活かすために」、「事例検討の進め方」、独立行政法人 国立病院機構中国四国グループ実習指導者講習会<看護倫理>、WEB セミナー（リアルタイム）、2023.10.2

[講師]「本人と家族の意思を尊重する意思決定支援とは」、「臨床倫理の事例検討法」、「エンドオブライフ・ケアの意思決定支援」、2022 年度公益社団法人愛媛県看護協会会員教育「本人と家族の意思を尊重する意思決定支援」研修会、公益社団法人愛媛県看護協会主催、WEB 開催、2023.10.3

[講師]「臨床倫理 入門編」、「多病の高齢がん患者のための意思決定支援—振り返っての事例検討」、第 8 回諏訪地域臨床倫理セミナー、諏訪赤十字病院主催・諏訪中央病院共催、諏訪赤十字病院研修センター、2023.10.7

[講師]「意思決定支援とは」、2023 年度医療福祉生協連「診療所看護責任者会議」、日本医療福祉生活協同組合連合会主催、2023.10.21

[講師]「アドバンス・ケア・プランニング—エンドオブライフ・ケアの意思決定支援」、「2023 年度看取り研修会」、公益社団法人 全国老人保健施設協会主催、WEB（オンデマンド）開催、2023.10.23～11.13

- [講師]「高齢腎不全患者のための意思決定支援—人生の物語りを大切に」、第24回埼玉南西部透析研究会、埼玉南西部透析研究会・協和キリン株式会社共催、リアルタイム・ハイブリッド開催（志木ベルセゾン）、2023.10.28
- [講師]「看護倫理とACP」、令和5年度「訪問看護ステーションの看護師研修」、静岡県訪問看護ステーション協議会主催、静岡県総合社会福祉会館（静岡市）、2023.11.11
- [講師]「高齢患者のための意思決定支援—保存的腎臓療法を題材に」、医療倫理研修会、JA 秋田厚生連大曲厚生医療センター主催、大曲厚生医療センター大会議室、2023.11.24
- [講師]「高齢者のエンドオブライフ・ケア—ACP と看取りについて考える」、医療倫理研修会、長崎リハビリテーション病院主催、WEB 開催、2023.11.30
- [講師]「長寿時代の医療・ケア—意思決定支援のあり方」、臨床倫理研修会、医療法人成和会ほうせんか病院主催、ハイブリッド開催（ほうせんか病院ローズホール）、2023.12.2
- [講師]「アドバンス・ケア・プランニング（ACP）と意思決定支援」、令和5年度看護研修会、公益社団法人岩手県看護協会主催、WEB 開催、2023.12.15
- [講師]「長寿時代の医療とケア—人生の最終段階を支える文化の創成」、2023年度小松市認知症ケアコミュニティマイスター養成講座、石川県小松市主催 NPO 法人いのちにやさしいまちづくりぼぼねっと受託、コミュニティスペースとんとんひろば、2023.12.16
- [講師]「アドバンス・ケア・プランニング—意思決定の支援」、「2023年度人生の最終段階における意思決定支援研修」、公益社団法人日本医療ソーシャルワーカー協会主催、WEB 開催（オンデマンド）、2023.12.1～2024.1.31
- [講師]「看護倫理と臨床倫理—プロフェッショナルとしての基礎」、「臨床倫理と ACP—意思決定支援を実践する」、2023年度関西臨床倫理研究会、関西臨床倫理研究会主催、大阪府看護協会ナースिंगアート大阪レモンホール、2023.12.23
- [講師]「人生の最終段階における医療・ケアを考える—食べられなくなったらどうしますか？」、第4回医療のmanabiya.NPO ささえあい医療人権センターCOML 主催、WEB 開催、2024.1.14
- [講師]「臨床倫理の基礎」、「臨床倫理 事例検討法」、「アドバンス・ケア・プランニング—意思決定の支援」、2023年度ソーシャルワークスキルアップ研修「ソーシャルワークにおける臨床倫理」、公益社団法人日本医療ソーシャルワーカー協会主催、WEB 開催、2024.1.21
- [講師]「看護倫理」、「臨床倫理」、「事例検討法」、「エンドオブライフ・ケア」、2023年度第3回大阪府看護協会認定看護管理者教育課程ファーストレベル研修、公益社団法人大阪府看護協会主催、大阪府看護協会研修室、2024.1.22
- [講師]「共同意思決定と ACP—意思決定支援とは」、医療倫理講演会、静岡市立静岡病院主催、WEB 開催、2024.1.29
- 「共同意思決定と ACP—意思決定支援とは」、2023年度意思決定支援研修会、諏訪中央病院看護部主催、WEB 開催、2024.2.6
- [講師]「ACP—将来の医療とケアの意思決定支援：対話の始め方・進め方と支援」、令和5年度医療・介護連携会議（地域包括ケア会議）、東邦大学医療センター大橋病院・世田谷区地域包括支援センター共催、WEB 開催、2024.2.16
- [講師]「意思決定支援とは—共同意思決定と ACP」、特別講演、第15回千葉県脳卒中等連携の会、千葉県医師会主催、TKP 東京ベイ幕張ホール、2024.2.18
- [講師]「高齢患者のための意思決定支援—共同意思決定と ACP」、看護倫理講演会、地方独立行政法人大阪府立病院機構大阪急性期・総合医療センター主催、大阪急性期・総合医療センター本館講堂、2024.2.22
- [講師]「意思決定支援とは—SDM と ACP」、令和5年度臨床倫理特別講演、横浜市立大学附属市民総合医療センター主催、横浜市立大学附属市民総合医療センター大会議室、2024.3.5
- [講師]「臨床倫理の基礎と事例検討の進め方」、令和5年度臨床倫理事例検討研究会、長野厚生連佐久総合病院主催、佐久総合病院佐久医療センターホール、2024.3.9
- [講師]「ACP の考え方と実践—ジレンマへの対応」、第3回アドバンス・ケア・プランニング医療者向け研修会、近畿大学病院アドバンス・ケア・プランニング委員会主催、近畿大学病院がんセンター共催、WEB 開催、2024.3.25
- (2) 学術貢献活動
- [監修]「終活と終末期の備え」、『高齢社会の基礎知識 すぐわかる！ジェロントロジー改訂版 ジェロントロジー検定試験 新公式テキスト』（一般社団法人日本応用老年学会編）、社会保険出版社、2023.7.10、pp.86-87
- [企画立案・運営等]「医療・介護従事者のための死生学セミナー」、東京大学大学院人文社会系研究科死生学・応用倫理センター主催、2022.9.17、オンライン
- [企画立案・運営等]「オンライン臨床倫理セミナー@東大」、東京大学大学院人文社会系研究会死生学・応用倫理センター上廣講座主催、2023.2.5

[企画立案・運営等] シンポジウム「ACP の考え方と実践—本人を人として尊重する意思決定支援」、東京大学大学院人文社会系研究科死生学・応用倫理センター上廣講座・日本老年医学会共催、オンライン開催、2023.3.5

[企画立案・運営等]「オンライン臨床倫理セミナー@東大」、東京大学大学院人文社会系研究会死生学・応用倫理センター上廣講座主催、2023.7.30

[企画立案・運営等]「医療・介護従事者のための死生学セミナー」、東京大学大学院人文社会系研究科死生学・応用倫理センター主催、2023.9.16、オンライン

[企画立案・運営等] シンポジウム「認知症を有する人のための緩和ケアと意思決定支援—エンドオブライフ・ケアのあり方」、東京大学大学院人文 社会系研究科死生学・応用倫理センター上廣講座・日本老年医学会共催、オンライン開催、2024.3.17

[査読] Japan Geriatrics Society *Geriatrics & Gerontology International*

(3) メディア報道

「透析しない—高齢患者の希望に沿って 見合わせるための手順や緩和ケア示したガイド作成」、『朝日新聞』朝刊 23 面（生活面）、2022.6.15

「人生の最終段階を考える—食べられなくなったらどうしますか?」、住民公開講座用 CATV 収録、一般社団法人唐津東松浦医師会主催、CATV 収録、2023.5.14

「延命医療やめる」制度 韓国の実態「意向書」など作成 法施行 5 年で 29 万人」、『朝日新聞』朝刊 23 面（くらし面）、2023.10.9

「脳死移植 支える体制途上「臓器提供したい」4 割 意思表示は 1 割」、『朝日新聞』朝刊 2 面「時々刻々」、2023.10.17

「脳死臓器提供 1000 件 ドナー意思表示進まず」、『読売新聞』朝刊 3 面「スキャナー」、2023.10.29

「高齢腎不全患者に対する SDM の進め方 『透析ヤダ!』では本人の真意を探るべし」、日経メディカル電子版、2022.5.18、<https://medical.nikkeibp.co.jp/nc/mem/pub/report/t340/202205/574969.html>

『「高齢腎不全に透析導入せず緩和ケア」の選択肢—保存的腎臓療法とは』、『日経メディカル』2022 年 5 月 20 日号

「一人一人の人生の充実に貢献するために医療・介護従事者ができること」、「埼玉県ろうしきょう」一般社団法人埼玉県老人福祉施設協議会会報、2024 年 1 月 1 日号、vo.21、pp4-7

「人生の最終段階の医療・ケアを考える—食べられなくなったらどうしますか?」、第 4 回医療の manabiya、認定 NPO 法人ささえあい医療人権センターCOML 会報誌、No.403、2024 年 3 月 15 日号

f その他

(1) 非常勤講師

長崎大学大学院医歯薬学総合研究科、科目名「高齢者歯科学」、「長寿時代の臨床死生学」、長崎大学、2022.5.20、オンライン

東京大学農学部、科目名「生命倫理」(部局横断型「死生学・応用倫理教育プログラム」)、「脳死と臓器移植」、2022.5.23、オンライン

岩手県立大学看護学部、科目名「看護倫理—人生の最終段階におけるケア」、2022.6.21、オンライン

徳島大学看護リカレントセンター、令和 4 年度徳島発・在宅ケア学第 1 回「在宅療養者が最期まで本人らしく生きるために—臨床倫理の視点から」、2022.7.30、オンライン

岡山大学歯学部 課題解決型高度医療人材養成プログラム継続事業「終末期の歯科医療—フレイル、がん、認知症患者に対するアプローチ」、特別講義「アドバンス・ケア・プランニング—よりよいエンドオブライフ・ケアのために」、「長寿時代の臨床死生学—人工的水分・栄養補給法の問題を中心に」、岡山大学臨床講義棟臨床第 2 講義室、2022.8.30、ハイブリッド

岩手医科大学 4 学部 (医学・歯学・薬学・看護学) 第一学年合同「全人的医療基礎講義」特別講義「長寿時代のエンドオブライフ・ケア—人工的水分・栄養補給法をめぐる課題」、2022.9.9、オンライン

自治医科大学大学院「地域がん医学総合講義」、「エンドオブライフ・ケア—意思決定支援をめぐる倫理的法的諸課題」、2022.9.27、オンライン

東京大学農学部、科目名「生命倫理」(部局横断型「死生学・応用倫理教育プログラム」)、「脳死と臓器移植」、2023.4.17、対面授業とオンデマンド

岩手県立大学看護学部、科目名「看護倫理—人生の最終段階におけるケア」、2023.6.27、オンライン

徳島大学看護リカレントセンター、令和 5 年度徳島発・在宅ケア学第 4 回「在宅療養者が最期まで本人らしく生きるために—臨床倫理の視点から」、2023.8.4、オンライン

岡山大学歯学部 課題解決型高度医療人材養成プログラム継続事業「終末期の歯科医療—フレイル、がん、認知症患者に対するアプローチ」、特別講義「長寿時代の臨床死生学—人工的水分・栄養補給法の問題を中心に」、「アドバンス・ケア・プランニング—よりよいエンドオブライフ・ケアのために」、岡山大学臨床講義棟臨床第2講義室、2023.8.29、ハイブリッド

岩手医科大学 4 学部 (医学・歯学・薬学・看護学) 第一学年合同「全人的医療基礎講義」特別講義「長寿時代のエンドオブライフ・ケア—人工的水分・栄養補給法をめぐる課題」、2023.9.8、オンライン

長崎大学歯学部、科目名「高齢者歯科学」、「臨床死生学特論—長寿時代のエンドオブライフ・ケア」、長崎 (長崎大学)、2023.11.8、オンライン

放送大学「死生学のフィールド」(ラジオ番組: 責任教員 石丸昌彦氏、山崎浩司氏) の第 7 章「老いと病と死—フレイルの知見を臨床に活かす」、第 8 章「いのちの臨床倫理—高齢者における人工的水分・栄養補給法の問題を題材に」、第 9 章「エンドオブライフ・ケア—尊厳ある最期とは」、2018.4～2023.3

(2) 学会・委員活動

日本生命倫理学会 (2001～)、理事 (2014～2020)、評議員 (2014～2023)

日本医学哲学・倫理学会 (2011～)、評議員 (2013～2023)、理事 (2016～2023)

日本老年医学会 (2005～)、代議員 (2013～)、監事 (2017～)、EOL 小委員長 (2023～)

Japan Geriatrics Society *Geriatrics & Gerontology International* Associate Editor (2020～)

日本救急医学会 (2006 年～)、倫理委員会委員 (2011～2016)、臨床研究倫理審査委員会委員 (2016～)

高齢者救急委員会委員委員 (2017～)

日本脳死・脳蘇生学会 (2017～)、理事 (2017～)

日本在宅救急医学会 理事 (2018～)

PEG・在宅医療学会 (2017～)、学術評議員 (2017～)

日本透析医学会 倫理委員会外部委員 (2014 年～)、倫理委員会 拡大倫理委員会 委員 (2018～)

特任准教授 **早川 正祐** HAYAKAWA, Seisuke

1. 略歴

1997 年 4 月	上智大学文学部英文学科 入学
2001 年 3 月	同 卒業
2001 年 4 月	上智大学文学部哲学科 入学 (3 年次学士入学)
2003 年 3 月	同 卒業
2003 年 4 月	東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻哲学専門分野修士課程 入学
2005 年 3 月	同 修了 (修士 (文学) 取得)
2005 年 4 月	東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻哲学専門分野博士課程 進学
2006 年 6 月	東京大学大学院人文社会系研究科 21 世紀 COE「死生学の構築」リサーチアシスタント (～2007 年 3 月)
2007 年 10 月	東京大学大学院人文社会系研究科 グローバル COE「死生学の展開と組織化」リサーチアシスタント (～2008 年 3 月)
2010 年 3 月	東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻哲学専門分野博士課程 単位取得退学
2010 年 4 月	上智大学大学院哲学研究科 特別研究員 (～2013 年 3 月)
2013 年 5 月	東京大学大学院人文社会系研究科死生学・応用倫理センター (上廣死生学・応用倫理講座) 特任研究員
2013 年 9 月	博士 (文学) 取得 (東京大学大学院人文社会系研究科)
2014 年 4 月	三重県立看護大学看護学部看護学科 准教授
2017 年 4 月	東京大学大学院人文社会系研究科 特任准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

現代哲学・倫理学および臨床倫理・臨床死生学

b 研究課題

(1) 「聞く」という営みからの哲学・倫理学

従来の英語圏の倫理学においては、人間ないし人格は、自らのあり方を合理的に統御する存在であるとされてきた。例えば行為論においては、計画や方針等の事前のコミットメントに基づく合理的コントロールという観点から、「自由」や「責任」の問題が論じられてきた。このような方向性に対して、合理的なコントロールを手放すことで開かれる、自他の相互的交流においても、「自由」はもたらされるし「責任」は果たされるという点に着目する。とりわけ、その相互的交流において「聞く」ということや「共感」が果たす役割から、合理的コントロールを偏重しがちな従来の行為論／倫理学／認識論にまたがる哲学的議論を更新することを試みる。

(2) 臨床倫理から倫理的諸概念を再考する

上記で得られた知見を、臨床倫理等に活かしながら洗練化していくことを課題とする。とりわけ臨床現場における倫理的な実践に対する理解を深めることで、倫理学における重要概念（例えばケア・尊重・自由・自律・責任・徳／悪徳・正義／不正義）を豊かに捉え直すことを試みる。

c 概要と自己評価

(1) 共感の相互作用説の展開

これまでの共感の哲学においては、特定の時点での他者の心的状態が目標物 (target) として設定され、共感する側が、その心的状態をいかに正確に把握し再現できるかが問題になってきた。そして、その再現の過程において、共感する側と共感される側は (ほぼ) 没交渉であることが前提にされてきた。例えば共感の心的シミュレーション説においては、このような見方が暗黙のうちに前提にされている。

こういった見方に対して、共感を自他の「相互作用」から考察する機運が高まりつつある。こうした方向性の一つの展開として、「聞く」という人間的コミュニケーションの核となる実践から相互作用説のさらなる展開を試みた (北海道大学の宮原克典氏との共同研究)。具体的には以下の点を明らかにした。(1) 共感とは、時間的な推移とともにダイナミックに展開するプロセスであり、(2) 自他の協働を必須とし(3) 自他のパースペクティブの相互的な再形成をもたらす。(4) この動的な協働性が成立するには、共感者の受容的態度によって、被共感者の受容的態度も引き出され、受容性が両者間で相互に循環していく必要がある。

(2) タイミングの観点から共感と証言的不正義を再考する

他者の時間感覚やタイミングを尊重するものとして、共感の機能を捉え直した上で、共感に基づく「有徳な聞き方」に関して新たな見方を提示した。被害体験がトラウマ化している場合は体験を言語化するのに時間を要する。それゆえ有徳な聞き手は、共感的な関わりを通して、「証言の内容」のみならず、証言を求めたり聞いたりする「証言のタイミング」にも十分に配慮する必要がある。この点を示すと同時に、証言的不正義を「証言のタイミングをめぐる不正」としても特徴づけた。

d 研究業績

(1) 論文

[学術雑誌] Seisuke Hayakawa.“Empathy.Timeliness.and Virtuous Hearing.” *Journal of Philosophical Research* 49、2024.2、(Online First Publication)

[大学研究機関紀要] 早川正祐「人間尊重とタイミングの倫理——ケアの倫理からの新展開」、『死生学・応用倫理研究』第28号 (東京大学大学院人文社会系研究科死生学・応用倫理センター)、33-59、2023.3

[論文集 (書籍) 内論文] 早川正祐「タイミングと共同意思決定プロセス」、『ACPの考え方と実践——エンドオブライフ・ケアの臨床倫理』(会田薫子編著、東京大学出版会)、75-83、2024.3

(2) 講演・口頭発表等

[口頭発表 (一般)] Seisuke Hayakawa.“Time.Receptivity.and Empathic Knowing: The Significance of Epistemic Timeliness,” American Philosophical Association Pacific Division Meeting (Vancouver)、2022.4.13

[口頭発表 (一般)] Seisuke Hayakawa.“Respect.Timeliness.and Empathic Caring,” *Exploring New Dimensions of Empathy and Care Ethics: Cross-cultural and Cross-field Dialogues*、2023.10.18

[口頭発表 (一般)] Seisuke Hayakawa.“Timeliness and Relational Autonomy.” *First Workshop of Medical Humanities*.Kyung Hee University and the University of Tokyo、2023.10.6

[口頭発表 (招待・特別)] Seisuke Hayakawa.“Empathy.Timeliness.and Virtuous Hearing: Against Timing-Related Injustice,” *International Lecture Session and Workshop on Philosophical Practice*.Sophia University、2023.3.19

[公開講演、セミナー、チュートリアル、講習、講義等] 早川正祐 「タイミングと対話の哲学——共同意思決定に向けて」、2022 年度「医療・介護従事者のための死生学セミナー」（東京大学死生学・応用倫理センター上廣講座）、2022.9.18

[公開講演、セミナー、チュートリアル、講習、講義等] 早川正祐 「タイミングの倫理と共同意思決定プロセス——時間感覚のケアから考える」、2023 年度「医療・介護従事者のための死生学セミナー」（東京大学死生学・応用倫理センター上廣講座）、2023.9.17

e 社会活動

(1) 社会貢献活動

[講師] 早川正祐 倫理コーディネーター養成プログラム研修、三重大学附属病院看護部、2023.10.27

[講師] 早川正祐 日本看護学校協議会北海道ブロック研修、日本看護学校協議会北海道ブロック、2023.3.21

[講師] 早川正祐 東京都高等学校公民科「倫理」「現代社会」研究会、2022.3.19

[コメンテーター] 早川正祐 2022 年度シンポジウム「ACP の考え方と実践—本人を人として尊重する意思決定支援」、東京大学大学院人文社会系研究科死生学・応用倫理センター上廣講座主催、2022.3.5

(2) 学術貢献活動

[企画立案・運営等] 早川正祐 国際学会 *Exploring New Dimensions of Empathy and Care Ethics: Cross-cultural and Cross-field Dialogues*（オーガナイザー）、2023.10.16～18

f その他

(1) 非常勤講師

慶應義塾大学文学部倫理学専攻、担当科目「倫理学の課題」（2020.10.1～2023.3）

東京保健医療大学大学院看護学研究科、担当科目「医療倫理特論」（4 回分、2022.4.1～2023.7）

富山県立大学大学院看護学研究科、担当科目「看護倫理学特論」（4 回分、2023.4.1～現在に至る）

(2) 学会・委員活動

[所属学協会] 上智大学哲学会

[所属学協会] 哲学会

[所属学協会] 日本倫理学会

[所属学協会] 日本哲学会

[所属学協会] 日本看護倫理学会

[所属学協会] American Philosophical Association